熊本県文化財調査報告　第112集

山田城跡Ⅱ・Ⅲ

九州縦貫自動車道（八代～人吉間）建設に伴う埋蔵文化財調査

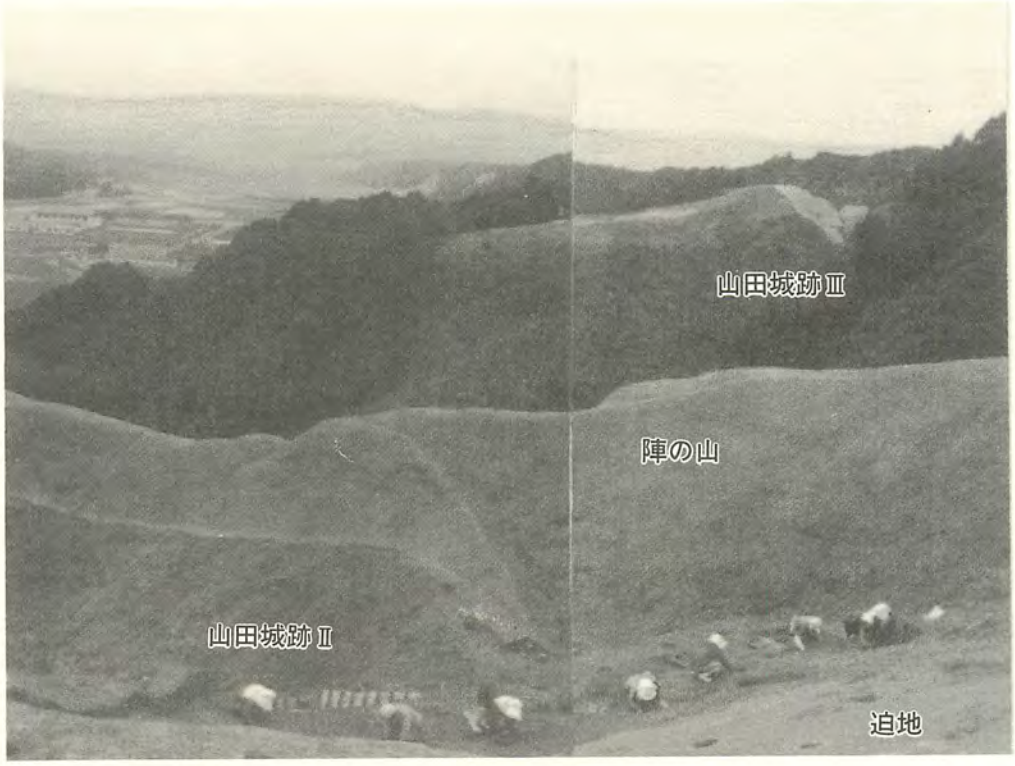
1990年

熊本県教育委員会

熊本県文化財調査報告　第112集

山田城跡Ⅱ・Ⅲ

熊本県球磨郡山江村大字山田字城山・字下城子所在の中世城跡



1990年

熊本県教育委員会

序　　文

熊本県教育委員会では、日本道路公団の九州縦貫自動車道（八代～人吉間）建設に伴い、昭和57年11月から路線予定敷地内の埋蔵文化財の発掘調査と整理を進めて参りました。

ここに報告する熊本県球磨郡山江村大字山田字城山・字下城子所在の中世城跡『山田城跡Ⅱ・Ⅲ』は、昭和60年度から昭和61年度にかけて発掘調査を実施し、平成元年度に報告書作成を行ったものであります。

これらの城跡は、昭和59年度の「高城跡」発掘調査（日本道路公団受託事業）の際に、山田城跡の周辺地域で新たに確認された中世城跡であります。いずれも、一部区域が路線内に含まれているため、緊急に日本道路公団と協議し、発掘調査を実施しました。

調査の結果、『山田城跡Ⅱ』からは、尾根筋の全面から多数の建築址や杭列の他、鉄砲玉がまとまって出土しました。また、『山田城跡Ⅲ』では、小山状になった山稜末端部の頂きから小規模な建築址とのろし穴等が検出されるなど、両城跡とも大きな成果をあげることができました。

この報告書が、埋蔵文化財の保護に対する認識を深め、学術・研究上の一助になれば幸いです。

発掘調査に際しましては、多方面で日本道路公団福岡建設局人吉工事事務所から御配慮を賜り、感謝致しております。さらに、城跡所在地の球磨郡山江村では、村長・教育委員会・地元の方々からの多大な御協力があり、専門調査員の先生方からは適切な御指導がありました。

ここに心から厚く御礼申し上げます。

平成２年３月20日

熊本県教育長　松　村　敏　人

九州自動車道（八代～人吉間）建設と埋蔵文化財の発掘調査地について

九州縦貫自動車道において、八代方面から人吉方面へ車を進めた場合、山江サービスエリアを通過して人吉インターチェンジまでの約３～3.5kmという区間が、今回、調査の対象地となった、中世山城の跡地である。

道路建設前には北東側から南西側へ順に、山田城跡Ⅱ（城山箇所）・山田城跡Ⅲ（下城子箇所）・山田城跡Ⅰ（大王谷箇所）の３城跡が相並んでいた所で、工事に際し、各城跡の尾根筋が、大きくオープンカットされている。

文中に掲げた平面図は路線図中の発掘調査区域を示し、断面図は尾根筋のオープンカットの状況をあらわしたものである。

断面図の番号は、①が山田城跡Ⅱの本体尾根筋で、②が派生尾根の陣の山部分、③が山田城跡Ⅲのカットラインを示す。

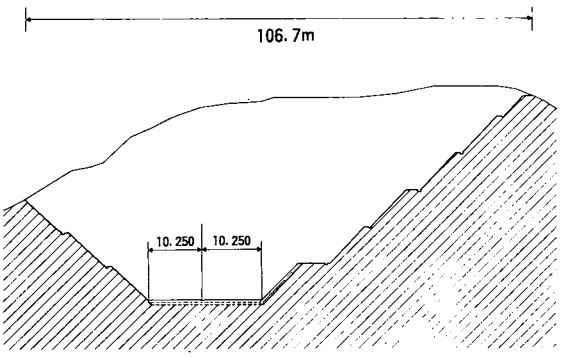
城跡の上場尾根筋におけるカット幅は、①が106.7ｍ、②が81.4ｍ、③が73.9ｍである。

八代～人吉区間の自動車道は、埋蔵文化財の発掘調査後、急ピッチで工事が進められ、平成元年12月７日に開通した。

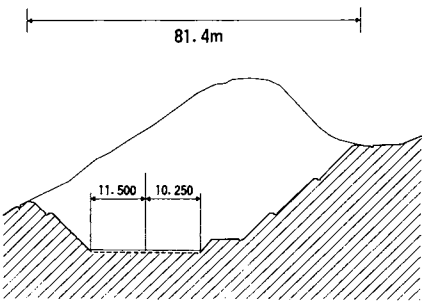
平成２年３月31日

日本道路公団福岡建設局
人吉工事事務所　人吉工事長　安　岡　東　一

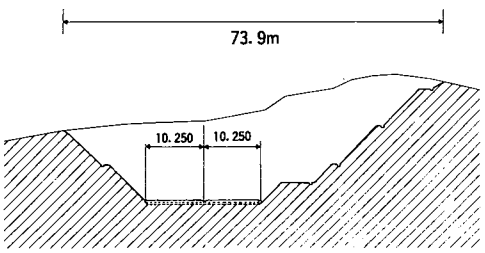
山田城跡Ⅱ（城山箇所）本体主軸尾根筋断面



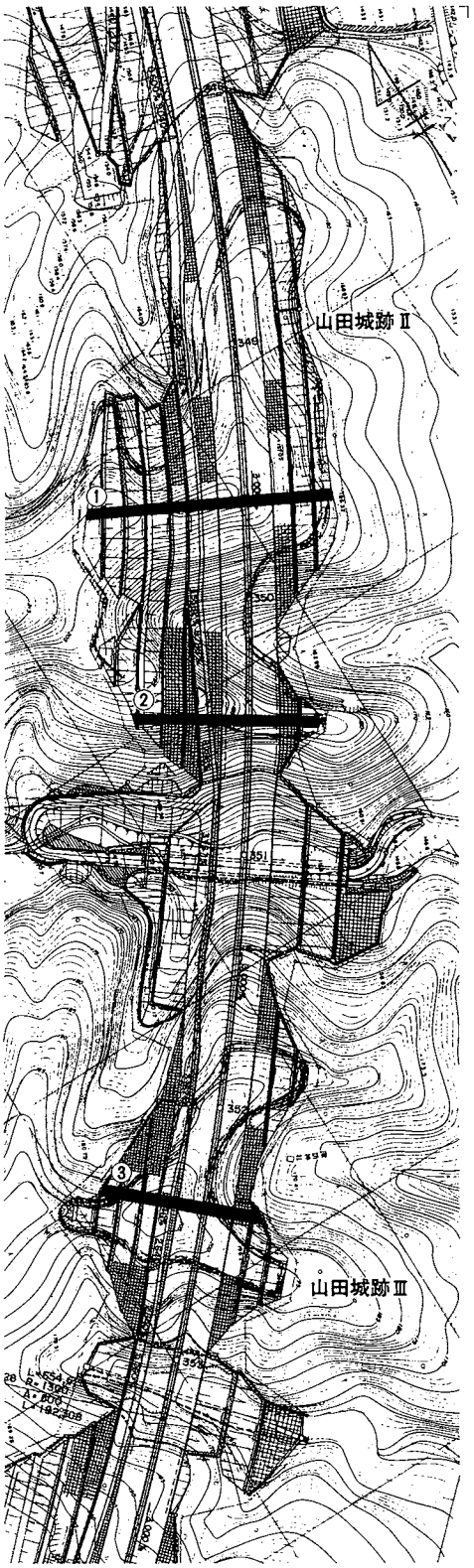
①STA 349+60 地点 断面



②SAT 350+45 地点 断面



③STA 352+40 地点 断面



縦貫自動車道路線と城域

例　　言

1．本書は、日本道路公団の九州縦貫自動車道（八代～人吉間）建設工事に伴い、事前に実施した埋蔵文化財調査の報告書である。

2．発掘調査を実施した遺跡は、熊本県球磨郡山江村大字山田字城山に所在する中世城跡『山田城跡Ⅱ』と山江村大字山田字下城子に所在する『山田城跡Ⅲ』で、日本道路公団の委託を受けて、熊本県教育庁文化課が行った。

3．発掘調査は昭和60年度から昭和61年度に実施し、整理・報告書作成は平成元年度に行った。出土遺物・資料は熊本県教育庁文化課で保管している。

4．発掘調査は大田幸博（文化課文化財保護主事）、黒田裕司（文化課嘱託）、菖蒲和弘・松舟博満・永田　満（文化課臨時）がその任にあたった。

5．発掘調査過程の写真撮影は大田・黒田が行い、整理後の出土遺物の写真撮影は大田が行った。

6．出土遺物の実測は山下志保氏（熊本大学文学部考古学研究室・院生）の協力を得た。遺構及び遺物の製図は石工みゆき・溝口真由美・宮崎敬子（文化課臨時）が行った。

7．本書の執筆は、主に大田が行った。

8．本書の冒頭に掲載した「九州縦貫自動車道　人吉工事について」は、安岡東一氏（日本道路公団人吉工事事務所人吉工事長）の執筆によるものである。

9．付論〔1〕の「永富（留）相良氏をめぐって」は、柳田快明氏（熊本市立高等学校教諭）の執筆によるものである。付論〔2〕の「山江村大字山田字下城子地区調査結果」は、國本信夫（文化課学芸員）の執筆による。

10．山田城跡Ⅱの路線外の遺構地形測量は、日本道路公団から御理解をいただき、主として菖蒲が昭和63年度に尾方信子・迫田洋子を測量補助員として実施した。なお、一部については大田と永田が補測を行った。

11．本書に使用した地形図・字図は、日本道路公団人吉工事事務所と山江村教育委員会・山江村役場経済課・総務課からの提供による。

12．出土遺物の整理及び報告書の作成は、熊本県衛生部と人吉保健所の協力を得て、人吉保健所敷地内の熊本県文化課人吉調査事務所で行った。

13．本書の編集は大田が行い、溝口・石工の協力を得た。

本 文 目 次

山田城跡Ⅱ（城山箇所）

第Ⅰ章　調査の概要……1

第1節　調査の組織……1　第3節　調査の方法と経過……2

第2節　調査に至る経緯……2　第4節　遺跡の位置と地理的環境……4

第Ⅱ章　遺跡の概要……9

第1節　歴史的環境……9　第2節　山田城跡Ⅱの概要……13

第Ⅲ章　調査の成果……15

第1節　遺構の概要……15

第2節　主軸尾根平坦部……25

〔1〕主軸尾根平坦部(1)……25　〔2〕主軸尾根平坦部(2)……35

第3節　主軸尾根北側斜面……46

第4節　主軸尾根南側斜面……49

〔1〕主軸尾根の南東下帯曲輪……49　〔3〕主軸尾根の南西下帯曲輪②……54

〔2〕主軸尾根の南西下帯曲輪①…53　〔4〕主軸尾根の南西下整地層……58

第5節　北側張り出し尾根……59

〔1〕北側張り出し尾根(1)……59　〔2〕北側張り出し尾根(2)……59

第6節　主軸尾根東側下を巡る帯曲輪……68

第7節　東北尾根筋……73

〔1〕東北尾根筋(1)……73　〔3〕東北尾根突端部……85

〔2〕東北尾根筋(2)……82

第8節　陣の山……88

第9節　迫地……100

第Ⅳ章　出土遺物……111

第Ⅴ章　路線外城域について……148

第Ⅵ章　まとめ……152

山田城跡Ⅲ（下城子箇所）

第Ⅰ章　調査の概要……165

第Ⅱ章　調査の成果……168

第1節　遺構の概要……168　第3節　山頂部及び北西鞍部……177

第2節　東側尾根筋……173　第4節　南側尾根筋……184

第Ⅲ章　出土遺物……189

第Ⅳ章　まとめ……193

付記〔1〕郡村誌と郡村図　球磨古城絵図…… 196
付記〔2〕山田城跡周辺の社寺堂宇について…… 213
付記〔3〕4城跡より出土の土師器について…… 217
付記〔4〕中世城跡の見方について…… 219

付論〔1〕　永富（留）相良氏をめぐって　柳田快明 …… 221
付論〔2〕　山江村大字山田字下城子地区調査結果　國本信夫 …… 231

図版目次

第1図　山田城跡位置図…… 5
第2図　人吉盆地地形図…… 6
第3図　山田城跡周辺字図…… 6
第4図　山田城跡周辺地形図…… 7
第5図　山田城跡周辺遺跡分布図……10
第6図　山田城跡Ⅱ縄張り図……14
第7図　山田城跡Ⅱ調査区域図……16
第8図　山田城跡Ⅱ遺構全体図……17
第9図　主軸尾根実測図……19
第10図　主軸尾根平坦部(1) 実測図……21
第11図　土層断面図　1 ……22
第12図　土層断面図　2 ……22
第13図　ＳＤ０１…土塁①実測図……25
第14図　ＳＢ０１実測図……26
第15図　ＳＢ０２実測図……27
第16図　ＳＢ０３実測図……28
第17図　ＳＢ０４実測図……29
第18図　ＳＢ０５実測図……30
第19図　ＳＢ０６実測図……31
第20図　ＳＢ０７実測図……32
第21図　ＳＢ０８実測図……33
第22図　土層断面図３ ……36
第23図　土層断面図４ ……37
第24図　主軸尾根平坦部(2) 実測図……39
第25図　ＳＢ０９実測図……40
第26図　ＳＢ１０実測図……41
第27図　ＳＢ１１実測図……42
第28図　ＳＢ１２実測図……43
第29図　ＳＢ１３実測図……45
第30図　ＳＢ１４実測図……45
第31図　主軸尾根北側斜面部実測図……47
第32図　ＳＢ１５実測図……48
第33図　南東下帯曲輪実測図……50
第34図　ＳＢ１６実測図……51
第35図　ＳＢ１７実測図……52
第36図　南西下帯曲輪①実測図……55
第37図　南西下帯曲輪②実測図……55
第38図　ＳＢ１８実測図……57
第39図　柱穴実測図……58
第40図　南西下整地層実測図……58
第41図　杭列１８実測図……59
第42図　北側張り出し尾根実測図……60
第43図　北側張り出し尾根(2) 実測図……61
第44図　ＳＢ１９実測図……62
第45図　ＳＢ２０実測図……63
第46図　ＳＢ２１実測図……64
第47図　ＳＢ２２実測図……65
第48図　ＳＢ２３実測図……66
第49図　ＳＢ２４実測図……67
第50図　東下帯曲輪実測図……68

第51図　土層断面図　5 ……69
第52図　杭列20～24実測図……71
第53図　杭列25～28実測図……72
第54図　杭群①～⑤実測図……74
第55図　東北尾根筋(1) 実測図－1 ……75
第56図　堀切1土層断面図……77
第57図　東北尾根筋(1) 実測図－2 ……79
第58図　東北尾根筋(1) 実測図－3 ……81
第59図　土坑実測図……82
第60図　東北尾根筋(2) 突端部実測図……83
第61図　東北尾根突端部実測図－1 ……85
第62図　東北尾根突端部実測図－2 ……87
第63図　陣の山実測図－1 ……89
第64図　陣の山実測図－2 ……91
第65図　ＳＢ２５実測図……93
第66図　陣の山実測図－3 ……94
第67図　ＳＢ２６実測図……95
第68図　堀切4土層断面図……96
第69図　陣の山実測図－4 ……97
第70図　ＳＸ０１実測図……99
第71図　迫地実測図－1 （上段） …… 100
第72図　迫地実測図－2 （全体） …… 101
第73図　迫地実測図－3 （中段） …… 104
第74図　迫地実測図－4 （下段） …… 105
第75図　ＳＢ２７実測図…… 106
第76図　ＳＢ２８実測図…… 107
第77図　ＳＢ２９実測図…… 108
第78図　杭列72（古道）実測図…… 109
第79図　古道断面図1 …… 110
第80図　古道断面図2 …… 110
第81図　遺物実測図①（主軸尾根平坦部)113
第82図　遺物実測図②（主軸尾根平坦部)116
第83図　遺物実測図③（主軸尾根平坦部)118
第84図　遺物実測図④（主軸尾根平坦部)121
第85図　遺物実測図⑤（南東下帯曲輪） 125
第86図　遺物実測図⑥（南東下帯曲輪） 126
第87図　遺物実測図⑦（北側張出尾根） 129
第88図　遺物実測図⑧（南西下帯曲輪①)131
第89図　遺物実測図⑨（東下帯曲輪） … 132
第90図　遺物実測図⑩（南側斜面一帯） 135
第91図　遺物実測図⑪（東北尾根） …… 138
第92図　遺物実測図⑫（東北尾根） …… 140
第93図　遺物実測図⑬（陣の山） …… 142
第94図　遺物実測図⑭（迫地） …… 145
第95図　遺物実測図⑮（砥石） …… 147
第96図　路線外城域実測図…… 149
第97図　4城跡位置図…… 162
第98図　山田城跡Ⅲ調査区域図…… 168
第99図　山田城跡Ⅲ遺構全体図…… 169
第100図　土層断面図　1 …… 171
第101図　土層断面図　2 …… 171
第102図　土層断面図　3 …… 171
第103図　土層断面図　4 …… 171
第104図　東側尾根遺構実測図…… 174
第105図　集石1実測図…… 178
第106図　焼土箇所実測図…… 178
第107図　集石2実測図…… 179
第108図　ＳＢ０１実測図…… 180
第109図　山頂部・北西鞍部遺構実測図 181
第110図　集石3実測図…… 183
第111図　ＳＢ０２実測図…… 186
第112図　南側尾根遺構実測図…… 187
第113図　出土遺物実測図…… 191
第114図　人吉城下絵図…… 198
第115図　渡利村古城址図…… 199
第116図　原田村古城址図…… 199
第117図　大村平家城址図…… 200
第118図　七地村赤池城址図…… 200

第119図　大畑村古城址図…… 201
第120図　柳瀬村古城址図…… 201
第121図　四浦村平家城址図…… 202
第122図　四浦村古城址図…… 202
第123図　西村古城址図（高城）…… 203
第124図　西村古城址図（東方城）…… 203
第125図　一武村小槇城址図…… 204
第126図　木上村平家城址図…… 204
第127図　木上村岩城址図…… 205
第128図　深田村古城址図…… 205
第129図　深田村平城址図…… 206
第130図　深田村高山城址図…… 206
第131図　免田村平城址図…… 207
第132図　上村古城址図…… 207
第133図　須恵村古城址図…… 208
第134図　岡本村古城址図…… 208
第135図　宮原村古城址図…… 209
第136図　多良木村里城址図…… 209
第137図　黒肥地村鍋城址図…… 210
第138図　黒肥地村内城址図…… 210
第139図　奥野村古城址図…… 211
第140図　久米村古城址図…… 211
第141図　湯前村古城址図…… 212
第142図　岩野村小多田城址図…… 212
第143図　湯山村古城址図…… 213
第144図　山田城跡周辺の社寺堂宇分布図 215

表　目　次

第1表　山田城跡周辺遺跡一覧表……10
第2表　土層観察表　1……22
第3表　土層観察表　2……24
第4表　ＳＢ０１計測表……26
第5表　ＳＢ０２計測表……27
第6表　ＳＢ０３計測表……28
第7表　ＳＢ０４計測表……29
第8表　ＳＢ０５計測表……30
第9表　ＳＢ０６計測表……31
第10表　ＳＢ０７計測表……32
第11表　ＳＢ０８計測表……33
第12表　杭列１計測表……34
第13表　杭列２計測表……34
第14表　杭列３計測表……35
第15表　土層観察表　3……36
第16表　土層観察表　4……38
第17表　ＳＢ０９計測表……40
第18表　ＳＢ１０計測表……41
第19表　ＳＢ１１計測表……42
第20表　ＳＢ１２計測表……43
第21表　ＳＢ１３計測表……44
第22表　ＳＢ１４計測表……46
第23表　杭列４計測表……46
第24表　杭列５計測表……46
第25表　ＳＢ１５計測表……48
第26表　杭列６計測表……49
第27表　杭列７～９計測表……49
第28表　杭列10…11計測表……50
第29表　ＳＢ１６計測表……53
第30表　ＳＢ１７計測表……53
第31表　杭列12・13計測表……53
第32表　杭列14計測表……54
第33表　杭列15計測表……54
第34表　杭列16・17計測表……54
第35表　ＳＢ１８計測表……57
第36表　杭列18計測表……59
第37表　杭列19計測表……59
第38表　ＳＢ１９計測表……62

第39表　ＳＢ２０計測表……63
第40表　ＳＢ２１計測表……64
第41表　ＳＢ２２計測表……65
第42表　ＳＢ２３計測表……66
第43表　ＳＢ２４計測表……67
第44表　土層観察表　５……70
第45表　杭列20～24計測表……71
第46表　杭列25～28計測表……73
第47表　杭群①～⑤計測表……74
第48表　堀切１土層観察表……77
第49表　杭列29計測表……78
第50表　杭列30計測表……78
第51表　杭列31計測表……78
第52表　杭列32～36計測表……80
第53表　杭列37計測表……81
第54表　杭列38計測表……81
第55表　杭列39計測表……86
第56表　杭列40計測表……86
第57表　杭列41～44計測表……87
第58表　杭列46計測表……88
第59表　杭列47計測表……88
第60表　杭列49～51計測表……92
第61表　杭列45…48計測表……92
第62表　ＳＢ２５計測表……93
第63表　杭列52計測表……94
第64表　杭列53～55計測表……94
第65表　ＳＢ２６計測表……96
第66表　堀切４土層観察表……96
第67表　杭列56～58計測表……98
第68表　杭列59計測表……98
第69表　杭列60…61計測表……98
第70表　杭列62～65計測表…… 103
第71表　杭列66～69計測表…… 105
第72表　杭列70計測表…… 105
第73表　ＳＢ２７計測表…… 106
第74表　ＳＢ２８計測表…… 107
第75表　ＳＢ２９計測表…… 108
第76表　杭列71・72計測表…… 109
第77表　古道土層観察表１…… 110
第78表　古道土層観察表２…… 110
第79表　遺物観察表①(主軸尾根平坦部) 114
第80表　遺物観察表②(主軸尾根平坦部) 115
第81表　遺物観察表③(主軸尾根平坦部) 117
第82表　遺物観察表④(主軸尾根平坦部) 119
第83表　遺物観察表⑤(主軸尾根平坦部) 120
第84表　遺物観察表⑥(主軸尾根平坦部) 122
第85表　遺物観察表⑦(主軸尾根平坦部) 123
第86表　遺物観察表⑧(南東下帯曲輪)… 124
第87表　遺物観察表⑨(南東下帯曲輪)… 127
第88表　遺物観察表⑩(北側張出尾根)… 128
第89表　遺物観察表⑪(北側張出尾根)… 130
第90表　遺物観察表⑫(南西下帯曲輪①) 131
第91表　遺物観察表⑬(東側下帯曲輪)… 133
第92表　遺物観察表⑭(東側下帯曲輪)… 134
第93表　遺物観察表⑮(南側斜面一帯)… 135
第94表　遺物観察表⑯(南側斜面一帯)… 136
第95表　遺物観察表⑰(東北尾根)…… 137
第96表　遺物観察表⑱(東北尾根)…… 139
第97表　遺物観察表⑲(東北尾根)…… 141
第98表　遺物観察表⑳(陣の山)…… 143
第99表　遺物観察表㉑(迫地)…… 144
第 100 表　遺物観察表㉒(迫地)…… 145
第 101 表　遺物観察表㉓(砥石)…… 146
第 102 表　出土遺物年代別一覧表…… 152
第 103 表　建築址平面プラン一覧表(Ⅱ) 154
第 104 表　建築址平面プラン一覧表(Ⅰ) 154
第 105 表　建築址平面プラン一覧表(高) 154
第 106表　３城跡　建築址の規格一覧表 154

第107表　山田城跡Ⅱより検出の建築址一覧表…… 155
第108表　発掘調査の所見から見た4城跡の特色について…… 160
第109表　土層観察表　1 …… 172
第110表　土層観察表　2 …… 172
第111表　土層観察表　3 …… 172
第112表　土層観察表　4 …… 172
第113表　杭列1計測表…… 173
第114表　杭列2計測表…… 173
第115表　杭列3計測表…… 173
第116表　杭列4計測表…… 173
第117表　杭列5計測表…… 177
第118表　ＳＢ０１計測表…… 180
第119表　杭列6～9計測表…… 184
第120表　杭列10～12計測表…… 185
第121表　杭列13～15計測表…… 185
第122表　ＳＢ０２計測表…… 186
第123表　遺物観察表…… 192
第124表　球磨古城絵図一覧表…… 197
第125表　4城跡より出土の土師器一覧表…… 218

写　真　図　版

図版1　発掘調査現場の空中写真（1）
図版2　発掘調査現場の空中写真（2）
図版3　発掘調査現場の空中写真（3）
図版4　発掘調査現場の空中写真（4）
図版5　山田城跡Ⅱの遠景
図版6　山田城跡Ⅱでの説明会
図版7　山田城跡Ⅱ　遺構検出写真（1）
図版8　山田城跡Ⅱ　遺構検出写真（2）
図版9　山田城跡Ⅱ　遺構検出写真（3）
図版10　山田城跡Ⅱ　遺構検出写真（4）
図版11　山田城跡Ⅱ　遺構検出写真（5）
図版12　山田城跡Ⅱ　遺構検出写真（6）
図版13　山田城跡Ⅱ　遺構検出写真（7）
図版14　山田城跡Ⅱ　遺構検出写真（8）
図版15　山田城跡Ⅱ　遺構検出写真（9）
図版16　山田城跡Ⅱ　遺構検出写真（10）
図版17　山田城跡Ⅱ　遺構検出写真（11）
図版18　山田城跡Ⅱ　遺構検出写真（12）
図版19　山田城跡Ⅱ　遺構検出写真（13）
図版20　山田城跡Ⅱ　遺構検出写真（14）
図版21　山田城跡Ⅱ　遺構検出写真（15）
図版22　山田城跡Ⅱ　遺構検出写真（16）
図版23　山田城跡Ⅱ　遺構検出写真（17）
図版24　山田城跡Ⅱ　遺構検出写真（18）
図版25　山田城跡Ⅱ　出土遺物写真（1）
図版26　山田城跡Ⅱ　出土遺物写真（2）
図版27　山田城跡Ⅲ　遺構検出写真（1）
図版28　山田城跡Ⅲ　遺構検出写真（2）
図版29　山田城跡Ⅲ　遺構検出写真（3）
図版30　山田城跡Ⅲ　遺構検出写真（4）
図版31　山田城跡Ⅲ　遺構検出写真（5）
図版32　山田城跡Ⅲ　遺構検出写真（6）
図版33　山田城跡Ⅲ　遺構検出写真（7）
図版34　山田城跡Ⅲ　遺構検出写真（8）
図版35　山田城跡Ⅲ　遺構検出写真（9）
図版36　山田城跡Ⅲ　遺構検出写真（10）
図版37　山田城跡Ⅱ　出土遺物①
図版38　山田城跡Ⅱ　出土遺物②
図版39　山田城跡Ⅱ　出土遺物③
図版40　山田城跡Ⅱ　出土遺物④
図版41　山田城跡Ⅱ　出土遺物⑤
図版42　山田城跡Ⅲ　出土遺物

山　田　城　跡　Ⅱ

第Ⅰ章　調査の概要

第1節　調査の組織

昭和61年度、平成元年度の調査組織は、次のとおりである。

昭和61年度〔発掘調査〕

調査責任者　丸木保賢（文化課長）　林田敏嗣（文化課課長補佐）　隈　昭志（文化課文化財調査係長・課長補佐）

調査担当者　大田幸博（文化課文化財保護主事）　黒田裕司（文化課嘱託）
菖蒲和弘・松舟博満・永田　満（文化課臨時）

専門調査員　賀川光夫（別府大学教授）　白木原和美（熊本大学教授）　石井　進（東京大学教授）　工藤敬一（熊本大学教授）　橘　昌信（別府大学教授）
大三輪龍彦（鶴見女子大学教授）　甲元眞之（熊本大学教授）　三島　格（肥後考古学会長）　田辺哲夫（日本考古学協会員）　服部英雄（文化庁天然記念物課調査官）　阿蘇品保夫（熊本県立美術館主幹）

協　力　者　山江村役場：田村俊明（山江村長）
山江村教育委員会：前村源治（教育長）　内山賢治（社会教育主事）

調査事務局　柴田和馬（文化課主幹経理係長）　森　貴史（文化課参事）　谷　喜美子（文化課主任主事）

日本道路公団人吉工事事務所
山田益三（所長）　松本茂久・小原　明（副所長）　辻　正徳（工務課長）
古賀文雄・岩永一男（庶務課長）　藤田重幸（工務課）

平成元年度〔報告書作成〕

責　任　者　江崎　正（文化課長）　隈　昭志（教育審議員・文化課課長補佐）
中川義孝（文化課課長補佐）　桑原憲彰（文化課文化財調査第２係長）

報告書担当者　大田幸博（文化課文化財保護主事）　松舟博満（文化課嘱託）
石工みゆき・溝口真由美・宮崎敬子（文化課臨時）

調査事務局　上村忠道（文化課経理係長）　上村祐司・泉野順子（文化課主事）

日本道路公団人吉工事事務所
近藤俊一（前所長）　村田迪夫（現所長）　松本茂久（前副所長）
友納　崇（現副所長）　岩永一男（前庶務課長）　喜多　徹（現庶務課長）
財津　勝（工務課長）　安岡東一（人吉工事長）　石丸　裕（庶務課）

発掘作業員　中村正好（第１班長）・田頭一義（第２班長）・岡本　実・田口力松・井川静香
石工タツト・上村伸子・岡田ヒトム・尾方信子・尾園スソエ・勝原カノエ
勝山タツ・勝山ミサ子・勝山良子・加村キミ子・久保田ミヤ子・久保山トミ子
迫田初子・迫田チフ・迫田洋子・田口アサ子・田口サツキ・西　和子・西　徳子
西川久美子・福川シマエ・宮原立代・村坂利子・米良和子・山田剛士

樹木伐採作業員　森田洋介（森田林業代表）

整理作業員　〔人吉調査事務所〕　迫田洋子・尾方信子・林　枝三・緒方千代・村山清子
〔熊本県文化財収蔵庫〕　笠間いつ子・吉長都美子・渕上慶子・永広絹代
塩田喜美子・重永照代・水本寿美子

第２節　調査に至る経緯

昭和52年３月29日付けで、日本道路公団福岡建設局（局長：大城金夫）から熊本県教育委員会（教育長：林田正恒）に対して、九州縦貫自動車道（八代～えびの間）の遺跡分布調査依頼があり、熊本県教育委員会では同年８月４～６日、８月10～12日の２回に渡り調査を実施した。その結果、路線予定地内に18遺跡の存在が予想された。これを昭和52年９月９日付けで日本道路公団福岡建設局に回答したところ、昭和53年４月８日付けで日本道路公団から文化庁あての協議書が提出された。文化庁からは昭和53年６月12日付けで「熊本県教育委員会と協議の上、事前に発掘調査を実施すること。なお調査の結果、重要な遺構等が発見されたときは、設計変更等によるその保存に配慮すること。」と言う通知があり、昭和53年６月20日付けで日本道路公団あて通知した。

昭和57年度から熊本県教育委員会は日本道路公団の調査依頼を受け、昭和61年度まで各遺跡の発掘調査を行った。

昭和61年度調査の山田城跡Ⅱ（城山箇所）と山田城跡Ⅲ（下城子箇所）については、昭和60年度調査の山田城跡Ⅰ（大王谷箇所）と同様に途中で遺跡の存在が明らかになり、道路公団と協議の上、調査を追加したものである。

数度の現地踏査を行った結果、いずれも中世城跡と認定した。調査は、文化財保護主事：大田幸博と嘱託：黒田裕司が担当し、昭和61年７月１日から昭和62年３月31日まで行った。

第３節　調査の方法と経過

「九州縦貫自動車道（八代～人吉間）」は、山田城跡Ⅱ（城山箇所）の南東部分を北東方向から南西方向へ縦断した。最終的に発掘調査の対象となったのは、城山の主軸尾根筋と、これより派生した「陣の山」尾根筋及び、間の迫地部分である。

〔調査の方法と手順〕

昭和61年１月～２月にかけて雑木の伐採を行って、山田城跡Ⅱの遺構を把握し、昭和61年７月20日から昭和62年３月31日まで発掘調査を実施した。

まず、調査予定地の樹根を一本一本撤去した後に、城山主軸尾根筋～「陣の山」尾根筋～迫地の順に調査を進めた。

この間、森田林業の協力で麓から尾根にケーブルを張り、プレハブの作業小屋をつり上げた。さらに路線外への土砂流出を防ぐため、総延長200ｍを越える矢板を張り巡らす等の防災工事を行った。

調査の結果、尾根筋と迫地からは臨時的な建築址や土塁・堀切・杭列跡が検出され、青磁・白磁・土師器・鉄砲玉などの出土を見た。

なお、発掘調査終了後、整理作業の一環として平成元年４月から路線外を測量調査し、詳細な城跡遺構の実測図面を作成した。

〔発掘調査日誌抄〕

昭和61年１月～２月（試　掘）　山田城跡（城山箇所）の雑木を伐採し、遺構の把握を行う。足の踏み場もないようなヤブで、とうてい我々には手に負えず、伐採作業は森田林業に全面依頼した。

尾根筋に吹きつける風は肌を刺し、作業図面を作成する手が震える。

昭和61年７月下旬　山田城跡Ⅰ（大王谷箇所）の調査班の内半数が先発隊として現場に入る。梅雨時に伸びたヤブを切り払い、樹根を一本一本、チェーン・ブロックやチル・ホールで除去する作業をはじめる。

８月上旬　森田林業の協力で麓から尾根へケーブルを張り、プレハブの作業小屋や必要機材をつり上げた。発掘現場というより工事現場に近い。

８月中旬～下旬　ケーブルを使って掘り起こした大きな樹根を麓までおろす。これ又、大変な難作業である。同時に主軸尾根の南東端に防災の為の矢板を打つ。

９月上旬～中旬　主軸尾根の発掘調査に入る。地山は洪積世の川床で、礫（円礫）層の上位にアカホヤ状の土壌（フカフカ）が堆積している。

山グワが主たる作業用道具で、作業は容易でない。調査は、北西側から先端部の南東側へと進める。

下旬　主軸尾根筋の南東端に残る「コ」の字形の土塁は、地山の削り残しによるものである事が判明した。土塁内より鉄砲玉が出土した。

10月上旬　主軸尾根の南東側裾部にある帯曲輪状の削平地の調査を行う。路線外と接する所で排土に際し、矢板が効力を発揮する。

中旬～下旬　主軸尾根の東北端より派生した東北尾根と、つけ根部分の堀切の調査

を行う。堀切は礫層を深く掘り込んでおり、築城時の難工事が忍ばれる。

11月中旬～下旬　主軸尾根の中央部より派生した北側小尾根の調査を行う。路線外と接し、排土場にした西側の小迫地に流土が発生したため、急遽、矢板を巡らす。

12月　主軸尾根の南側斜面の調査を行う。懸仏や鉄砲玉が出土した。

昭和62年１月　陣の山尾根筋の調査を行う。馬の背の様な尾根筋を斜面を含めて丹念に調査する。

下旬に大雪。昼より雪があがり快晴となる。

昼より作業開始、総勢で麓より膝まで積もった雪に埋まりながら尾根を登る。休憩時に高さ２ｍの雪ダルマを作り、記念撮影を行う。

２月　迫地の調査を行う。いよいよ調査も大詰めで、調査員と作業員の顔から笑いが消える。作業の進み具合と工程表が気になる毎日である。

３月　実測に追われる。朝は早朝出勤で夜は日没近くまでの作業で、期限内の終了をめざす。

３月29日　ともかく調査終了。作業小屋の撤去、機材撤去、頭の中がまっ白になる。感傷にひたる暇なし。

３月30日　恒例による調査終了時の爆竹を打ち上げる。爆音が山々の谷間にこだまする。足かけ５年の長い調査が終了した。

しかし、頭の中は次の報告書作成の事で混戦状態である。機材撤去も終了し、皆、無言で下山した。明日から報告書の闘いがはじまる。

第４節　遺跡の位置と地理的環境

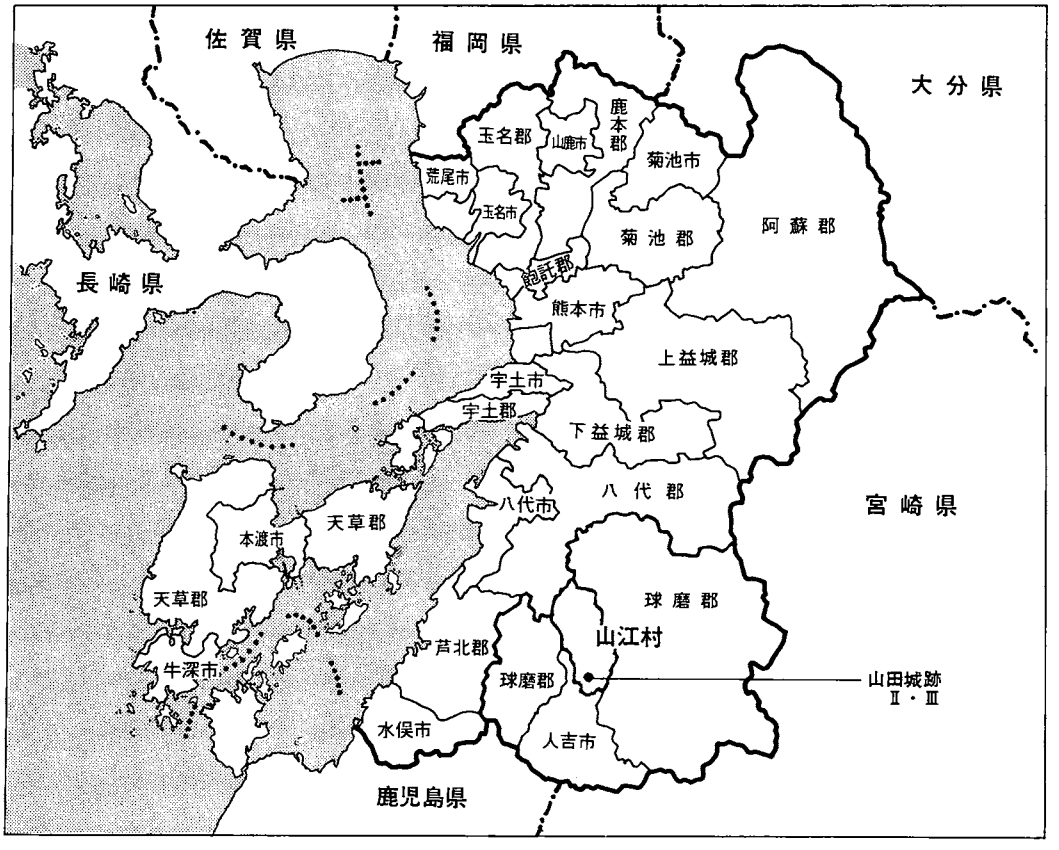
（１）位　置

山田城跡城山箇所は、熊本県球磨郡山江村大字山田字城山地内に所在する。標高251ｍ前後の山稜の端部にあたり、麓集落との比高差は約110ｍである。

国土地理院発行の５万分の１地形図「人吉」に位置を求むれば、図幅南から19.4㎝、西から3.5㎝の所にある。

山田地区には、山付きの北方向から盆地側の南方向へ帯状に開口する長さ約４㎞、幅約0.5㎞の開析谷があり、これが谷底平野を形成している。この地を山田川が蛇行しながら南下しており、中流域は今日、開田されて肥沃な水田地帯となっている。下流域は人吉盆地の平野部と接する。すなわち、谷底平野の西岸域を構成する標高200～260ｍクラスの低山稜地帯（麓との比高は約100ｍ程）の一隅に城跡が所在する事になる。

山田城跡の同一山稜地帯には、隣接の尾根に「大王谷（昭和60～61年調査）」「下城子（昭



第１図　山田城跡位置図

和60年調査)」の字名を残す中世城跡があり、さらに谷底平野を挟んだ南側対岸の丘陵地にはこれ又、中世城跡の高城跡（昭和59～60年調査）が位置している。山田城跡より遠望すれば、ほぼ真南の方位に高城跡があり、両城跡の直線距離は２㎞足らずである。結果として、山田地内に４城跡が相い隣接する事となる。

（２）人吉盆地

熊本県の南東部に位置しており、九州山地内に大きく開口した標高100～200ｍの断層盆地である。盆地の中央部を球磨川（日本三急流の１つ）が東方向から西方向へ流れている。球磨川の北岸には北方山地に源を発し、球磨川にほぼ直角に注ぐ川辺（かわべ）川によって形成された広大な扇状地と、阿蘇溶結凝灰岩や入戸火砕流を基盤とする丘陵地域の広がりがある。この他、盆地には免田川・仁原川・山田川・胸川などの大小の川が流れ込み、各河川沿岸に小規模な耕地を形成している。

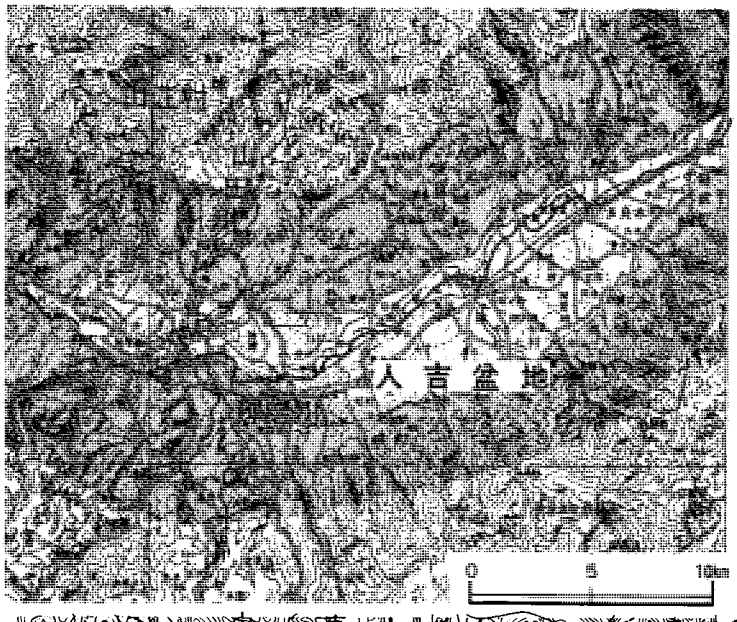
盆地の標高は川上の湯前町で190ｍ、川下の錦町で114ｍを測る。

交通路は、寛文５年(1665)に球磨川水路が開削されるまでは、尾根道か川沿いの道に限られていた。その中で、佐敷～人吉～加久藤の道は参勤交代路で「人吉街道」と呼ばれた。

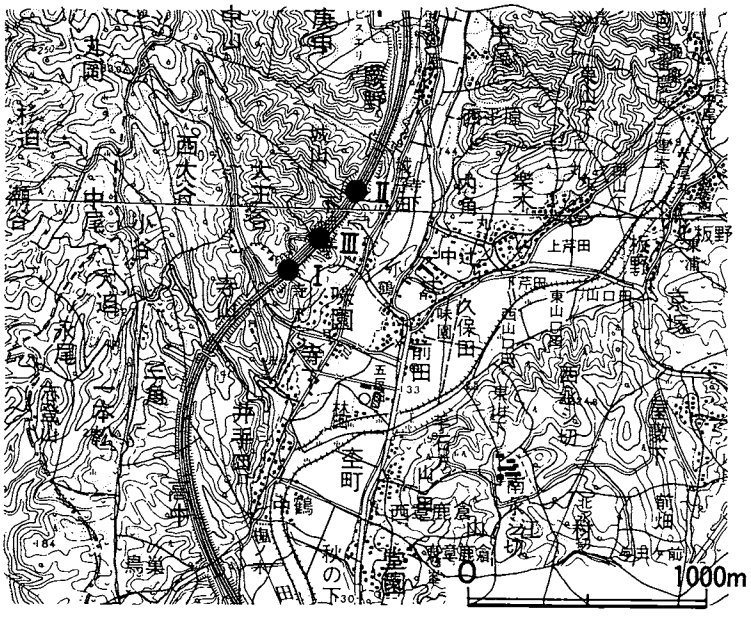
（3）球磨郡山江村

人吉盆地の西寄りにあり、南を人吉市に接する。地形的には、村内を東西に大きく二分する二つの開析谷が北から南下しており、谷底平野には東側に山田地区、西側に万江地区が開けている。現在の山江村は、明治22年４月に山田村と万江村が合併したもので、面積121.08㎢、人口4,429人（平成元年12月31日現在）の山村である。

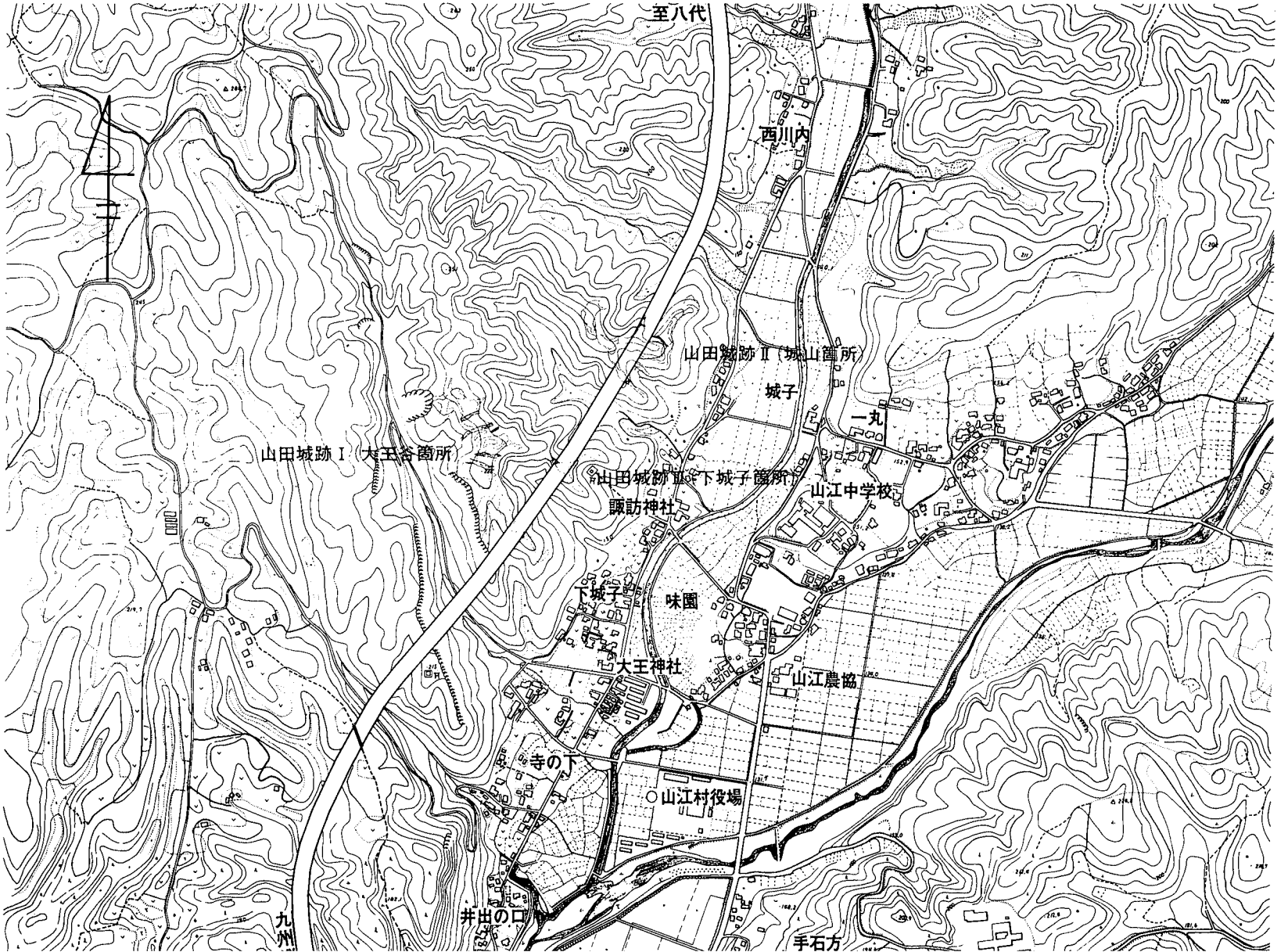
昭和57年11月から昭和62年３月まで県文化課によって行われた、九州縦貫自動車道（八代～人吉間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査で、村内からは旧石器～中世にかけての大規模な遺跡が発見された。

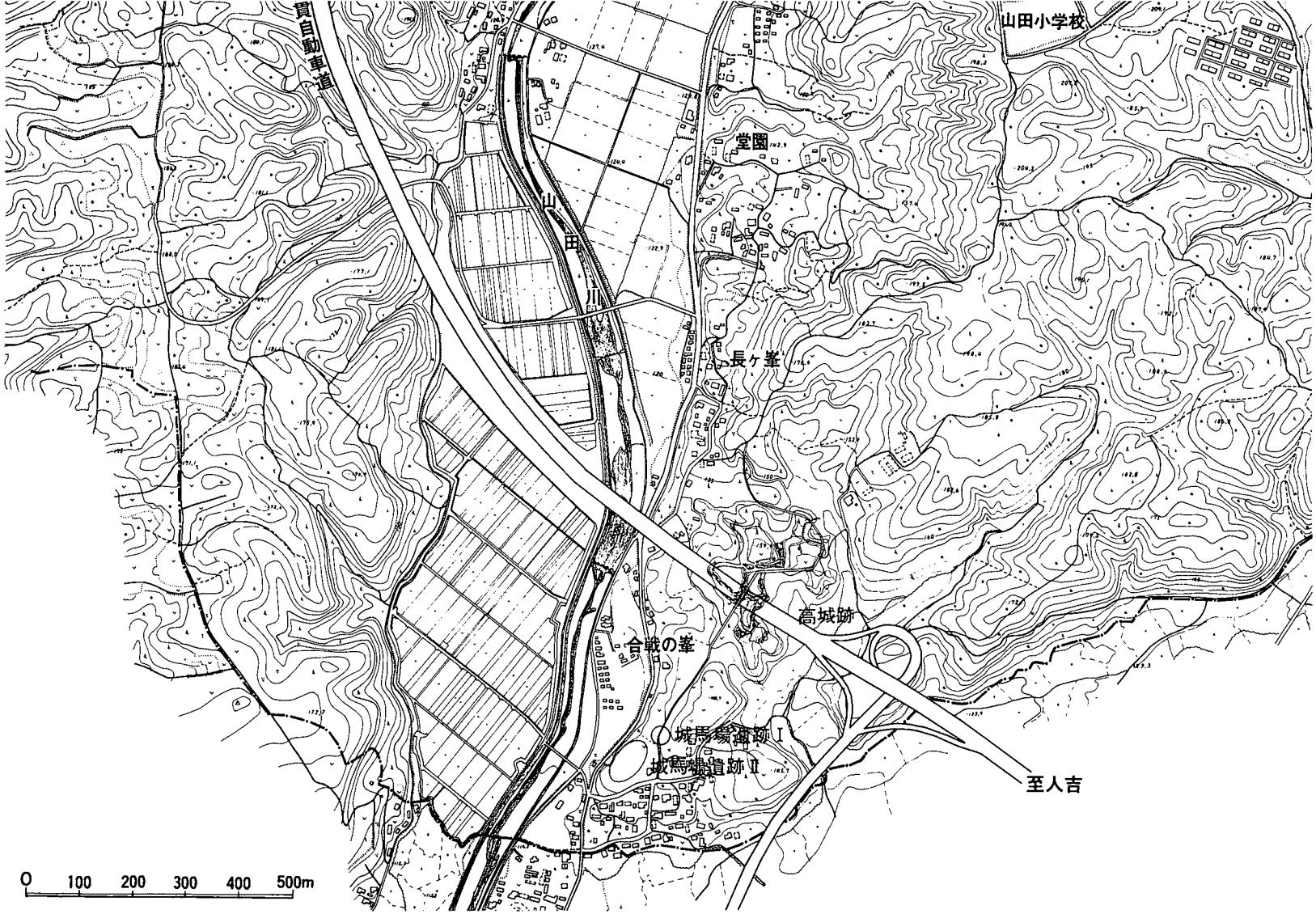


第２図　人吉盆地地形図



第３図　山田城跡周辺字図


至八代
西川内
山田城跡Ⅱ（城山箇所）
城子
一丸
山田城跡Ⅰ（大王谷箇所）
山田城跡Ⅲ（下城子箇所）
山江中学校
諏訪神社
下城子
味園
大王神社
山江農協
寺の下
山江村役場
井出の口
九州
手石方



第4図　山田城跡周辺地形図

第Ⅱ章　遺跡の概要

第1節　歴史的環境

（1）先土器時代

球磨・人吉地方では、現在、山江村や人吉市を中心とした河川に近い丘陵地域から33箇所の遺跡が確認されている。昭和54年の県道改良工事に伴う多良木町里城遺跡発掘調査では、球磨川右岸段丘から、先土器時代の石器が出土した。さらに、昭和57年11月から昭和62年３月にかけて県文化課が実施した九州縦貫自動車道（八代～人吉間）建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査では、狸谷遺跡、高城跡、大丸・藤ノ迫遺跡、鼓ケ峰遺跡、天道ケ尾遺跡から数多くの先土器時代の石器が出土している。最も新しい所では平成元年度の県営圃場整備事業に伴う発掘調査で、人吉盆地の中央部にあたる夏女遺跡（球磨郡錦町）からの出土例がある。

（2）縄文時代

早期の遺跡に、狸谷遺跡、高城跡、大丸・藤ノ迫遺跡、城・馬場遺跡、村山遺跡、岩清水遺跡、射場ノ本遺跡などがある。各遺跡からは、押型文系の楕円文・山形文土器、塞ノ神式土器、手向山式土器、曽畑式土器などが出土している。その中でも岩清水遺跡は、岩清水式土器の出土地として広く知られている。昭和62年には県の農地防災事業に伴う城・馬場遺跡発掘調査で、手向山式の壺形土器が出土した。

前期の遺跡は、鼓ケ峰遺跡が代表例としてあげられる。昭和60～61年の九州縦貫自動車道建設による発掘調査で、曽畑式土器・船元式土器・並木式土器が出土した。

後期の遺跡は、矢黒神社前遺跡で、国道219号矢黒バイパス工事の際に、後期後半の土器片や石刀の柄部が採集されている。

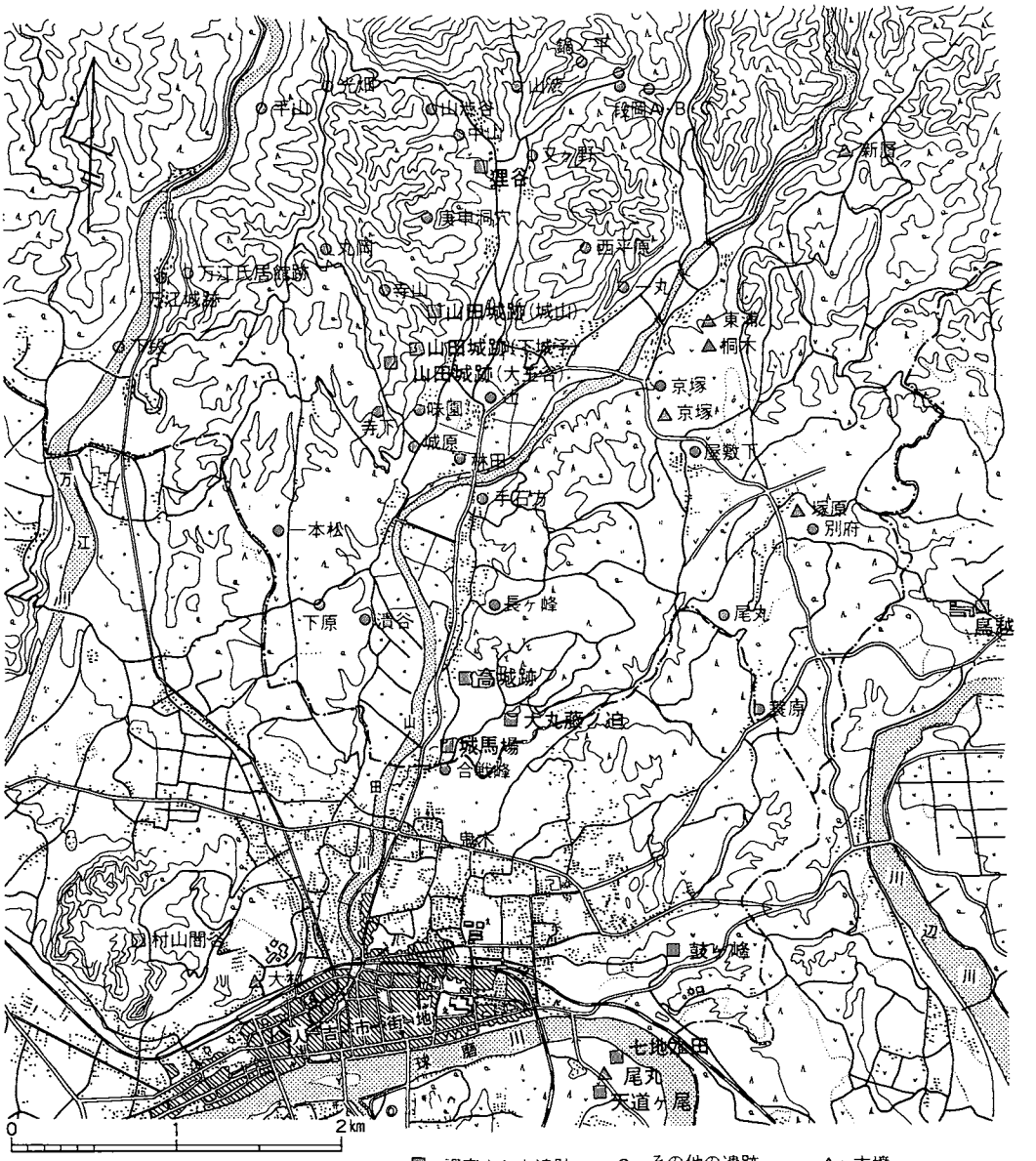
晩期の遺跡は、球磨川沿岸の七地水田遺跡があげられる。昭和58～59年の九州縦貫自動車道建設による発掘調査の際に、晩期の粗製土器とともに大量の打製石斧が出土している。対して丘陵地域の遺跡では、村山闇谷遺跡やアンモン山遺跡があげられる。

（3）弥生時代

球磨・人吉地方の弥生時代は後期に特徴があり、重弧文帯を持つ特色ある免田式土器が数多く出土している。遺跡は30ケ所に及び、主たるものは球磨郡免田町を中心とした人吉盆地の中央部に集中する。前述の夏女遺跡からは、終末期の住居址が多数検出された。さらに、分布域の周辺部にあたる山江村の大丸・藤ノ迫遺跡からも住居址が検出されている。

（4）古墳時代

初期の古墳は横口式石室墳と呼ばれ、吉ノ尾・石坂鍋野（相良村）、別府（山江村）などが知られている。湯山千人塚古墳群（水上村）は小規模ながら、約70基の古墳が群集する。



第５図　山田城跡周辺遺跡分布図

■ 調査された遺跡　● その他の遺跡　△ 古墳

遺　跡　名	時　代	遺　跡　名	時　代	遺　跡　名	時　代
狸谷遺跡	先土器～縄文時代	寺下遺跡	縄文時代	七地水田遺跡	縄文・歴史時代
大丸・藤ノ迫遺跡	先土器～縄文時代	城原遺跡	縄文時代	天道ケ尾遺跡	先土器～歴史時代
高城跡	先土器～歴史時代	林田遺跡	縄文時代	村山間谷遺跡	縄文・歴史時代
中山遺跡	先土器～歴史時代	手石方遺跡	縄文時代	新層古墳群	縄文～古墳時代
山渋谷遺跡	先土器～歴史時代	一本松遺跡	縄文時代	東浦古墳群	縄文～古墳時代
平山遺跡	縄文時代	下原遺跡	縄文時代	桐木古墳群	縄文～古墳時代
光畑遺跡	縄文時代	賀谷遺跡	縄文時代	塚原古墳群	縄文～古墳時代
下段遺跡	縄文時代	城馬場遺跡	縄文～歴史時代	城下古墳	縄文～古墳時代
庚申・洞穴遺跡	縄文時代（洞穴）	長ケ峰遺跡	縄文～歴史時代	京塚古墳	縄文～古墳時代
山渋遺跡	縄文時代	蓑原遺跡	縄文時代	鬼木古墳	古墳時代
鍋ノ平遺跡	縄文時代	尾丸遺跡	縄文時代	大村横穴群	古墳時代
段岡ＡＢＣ遺跡	縄文時代	別府遺跡	縄文時代	尾丸横穴群	古墳時代
又ケ野遺跡	縄文時代	屋敷下遺跡	縄文時代	山田城跡Ⅰ（大王谷）	縄文～歴史時代
丸岡遺跡	縄文時代	一丸遺跡	縄文時代	山田城跡Ⅱ（城山）	歴史時代
寺山遺跡	縄文～歴史時代	西平原遺跡	縄文時代	山田城跡Ⅲ（下城子）	歴史時代
内角遺跡	縄文時代	合戦峰遺跡	縄文～歴史時代	万江城跡	歴史時代
辻遺跡	縄文～歴史時代	鳥越遺跡	縄文時代	万江氏居館跡	歴史時代
味園遺跡	縄文～歴史時代	鼓ケ峰遺跡	先土器～歴史時代		

第１表　山田城跡周辺遺跡一覧表

前方後円墳では、分布域の南限とされる錦町の亀塚古墳群がある。大型円墳は、才園古墳群（免田町）、鬼ノ釜古墳（須恵村）、夫婦塚古墳（多良木町）などがあげられる。才園古墳群からは、獣帯鏡・玉類・金環・刀・剣などが出土している。

古墳期終末の横穴も各地に造られている。京ケ峰・岩下・岩城（錦町）、三石・陣の内（相良村）、荒茂・若宮（深田村）、岩野（水上村）、里坊（湯前町）、大村（人吉市）など阿蘇溶結凝灰岩の懸崖に横穴が群をなしている。この中で、京ケ峰、陣の内、大村の遺跡は装飾横穴古墳である。

天道ケ尾遺跡（人吉市）からは九州縦貫自動車道建設による発掘調査の際に、地下式横穴が検出され、鉄鏃が9本が出土した。新深田・荒尾・尾園遺跡（深田村）からは、薩摩地方に発達した地下式板石積石室墓が検出されている。昭和63年の県営圃場整備事業に伴う発掘調査では、相良村の小園遺跡から、成川式土器を伴う古墳時代の住居址が16基検出されている。

（5）歴史時代

『古事記』『日本書紀』の中で、古代の球磨郡は熊襲征伐の「熊縣」に比定されているが、この時代の遺跡に下り山の須恵窯跡や梼木瓦窯跡などがある。

免田町の黒田平城跡の周辺からは、銅板墓誌が出土している。

一方、『和名類聚抄』は古代の球磨郡に「人吉・西村・東村・久米・球玖・千脱」の6郷があった事を伝えている。しかし、郷と郡衙の比定地は以前から諸説があり、今日に至るまで確定に至っていない。

鎌倉時代に入ると、球磨郡の田数と領主を書き上げた建久八年(1197)の『肥後国球磨郡図田帳写』がある。これによれば、球磨郡は人吉・須恵・永吉庄に分かれ、領主は在地の豊富・豊永郷の久米・須恵・人吉・平川氏などであった事がわかる。

発掘調査地点の山田村が歴史上に登場するのは鎌倉時代からで、『平河文書』『相良家文書』によると球磨郡永吉庄に含まれ、開発領主の平河氏が地頭であったことがわかる。

南北朝時代は、多良木の上相良氏（経頼）と人吉の下相良氏（定頼・前頼）が敵対し、これに球磨郡国人の平河・須恵・岡本・永里・宮原・橘氏などが加わって、激しい内乱となる。

北朝方の山田城は、大宰小弐氏から幾度か攻められ、暦応三年(1340)には大宰弐頼尚の命で相良孫二郎定長が「山田巳下所領域部警固」をしている。この時期に山田城が「相良家文書」に頻繁に所見する。

この様な状況の中で、人吉の下相良前頼・氏頼兄弟が「ながとみとの」宛へ契状を出すなど、庶子の勢力も大きいものであったことが窺える。

そして、ここに登場した「ながとみとの」が、後世、山田城主と伝えられる永留氏に外ならない。

しかし、永和三年(1377)10月28日に、日向・薩摩・大隅・肥後四ケ国の国人61人が参加して

作成した一揆契状神水案文には、球磨郡からが最も多く、十人が名前を連ねているが、この中に前述の「ながとみとの（永留殿）」は見えない。一般に知られている山田城主永留氏説は、後世の相良家編纂物によるもので史料的根拠は何もない。

ただ関連文書から、人吉庄永留名の地頭職を得ていた一族と思われ、家臣団の名字は人吉庄永留名付近の地名が多い。

永留氏が相良氏や山田の地と明白な関連を有したのは、永留実重が相良頼廣の娘を室とし、親戚関係を結んでからと思われる。この時期が山田村への進出であり、永留氏は堂園に御位牌所「増大寺」を建立し、大王神社と高寺院毘沙門堂を相次いで再興している。

文安五年(1448)、相良前続の死去後に内部分裂が起こり、郡内の国人は人吉の相良尭頼支持側と、山田の永留長続支持側、多良木の上相良頼観・頼仙支持側に三分されてしまった。

結果として、永留氏は下相良氏を追放し、次いで上相良氏を滅ぼし、加担した久米・平河・須恵・岡本・永里氏などの有力国人を滅ぼして、郡内を統一していった。

新たに人吉城主となった永留氏は、相良姓を名乗り、薩摩と肥後国芦北・八代郡へと勢力を伸ばした。長続の時代には球磨・芦北・八代三郷を支配下に置くなど版図拡大し、戦国大名として活躍する。

西遷御家人の相良氏の球磨郡下向は、元久二年(1205)の相良永頼「人吉庄地頭職」補任後と思われる。しかし、寛元二年(1244)に永頼は「下知違背之咎」として人吉庄地頭職が中分され、北方は北条得宗家に奪われている。

南北朝時代の球磨郡は、多良木の上相良氏（経頼）と人吉の下相良氏（定頼・前頼）が敵対し、これに国人の平川・須恵・岡本・永里・宮原・橘氏などが加わって、激しい内乱となった。この様な状況の中で、下相良氏の前頼・氏頼兄弟が「ながとみとの」宛へ契状を出すなど、庶子の勢力も大きなものがあった。

室町時代に入ると、人吉城主の相良前続が死去し、幼主の尭頼が家督を継いだ。しかし、上相良氏はすぐさま人吉へ押し寄せ、幼主尭頼を追放した。続いて山田城主と伝えられる永留長続が、上相良氏を人吉から追い払い、自ら人吉城に入城し、相良姓を名乗った。さらに、文安五年(1448)八月には多良木の上相良頼仙・頼観を滅亡させ、これに加担した久米・平川・須恵・岡本・永里氏などの有力国人を滅ぼし、郡内を一挙に統一した。永留（相良）長続は、その後、薩摩と肥後の芦北・八代へ勢力を伸ばし、その子為続の時代には、球磨・芦北・八代を支配下に置くなど版図を広げた。

為続から長毎・長祇へと家督が譲られ、長唯の代で初めて庶民の上村氏から晴広を迎え入れたが、晴広の代で本家の上村三兄弟が反乱を起こした。さらに、人吉でも動揺が続き、相良氏による球磨郡支配の弱さを露呈した。結果として、相良氏は本拠を八代の麓から人吉へと移すことになる。義陽の代には、日向の伊東氏と薩摩の島津氏の勢力が徐々に球磨郡へ延びており、

義陽は真幸・大口へ軍勢を差し向けるなど、領内の警戒を強めた。しかし、天正九年(1581)肥後の水俣城の落城を機に、義陽は戦わずして島津義久の軍門に降り、八代・芦北郡を放棄し、球磨郡のみが安堵された。そして、同年十二月に義陽は島津氏の先陣として、阿蘇氏の家臣・甲斐宗運と響野原（ひびきがはら）にて戦い、打ち死にしている。

その後、島津政権下で忠房が家督を継ぎ、やがて豊臣秀吉の九州征伐で、島津・相良氏とも秀吉の支配下に入ることになる。天正十五年(1587)には、秀吉から相良長毎に「旧領球磨郡安堵」がなされ、以後、二万二千石の外様大名として相良氏は明治時代の廃藩置県まで、永きに渡って球磨郡を支配した。

第2節　山田城跡Ⅱの概要

調査対象地の城山は洪積世の川床で、その後の陥没によって形成されたと考えられる比高200m程の山地である。

人吉盆地の南西側外縁部に相当し、尾根筋は馬の背の様な形状となっている。山は複雑な形状を呈しているが基本的には馬蹄型で、調査箇所は西側から東側へ延びる尾根筋の北東域にあたり、尾根筋が二股に分かれる所である。

地元では、この二股の尾根筋について、北側の主軸尾根を「城山（じょうやま)」とし、南側の派生尾根を「陣の山（じんのやま)」と呼び分けている。

【「城山」の字名について】

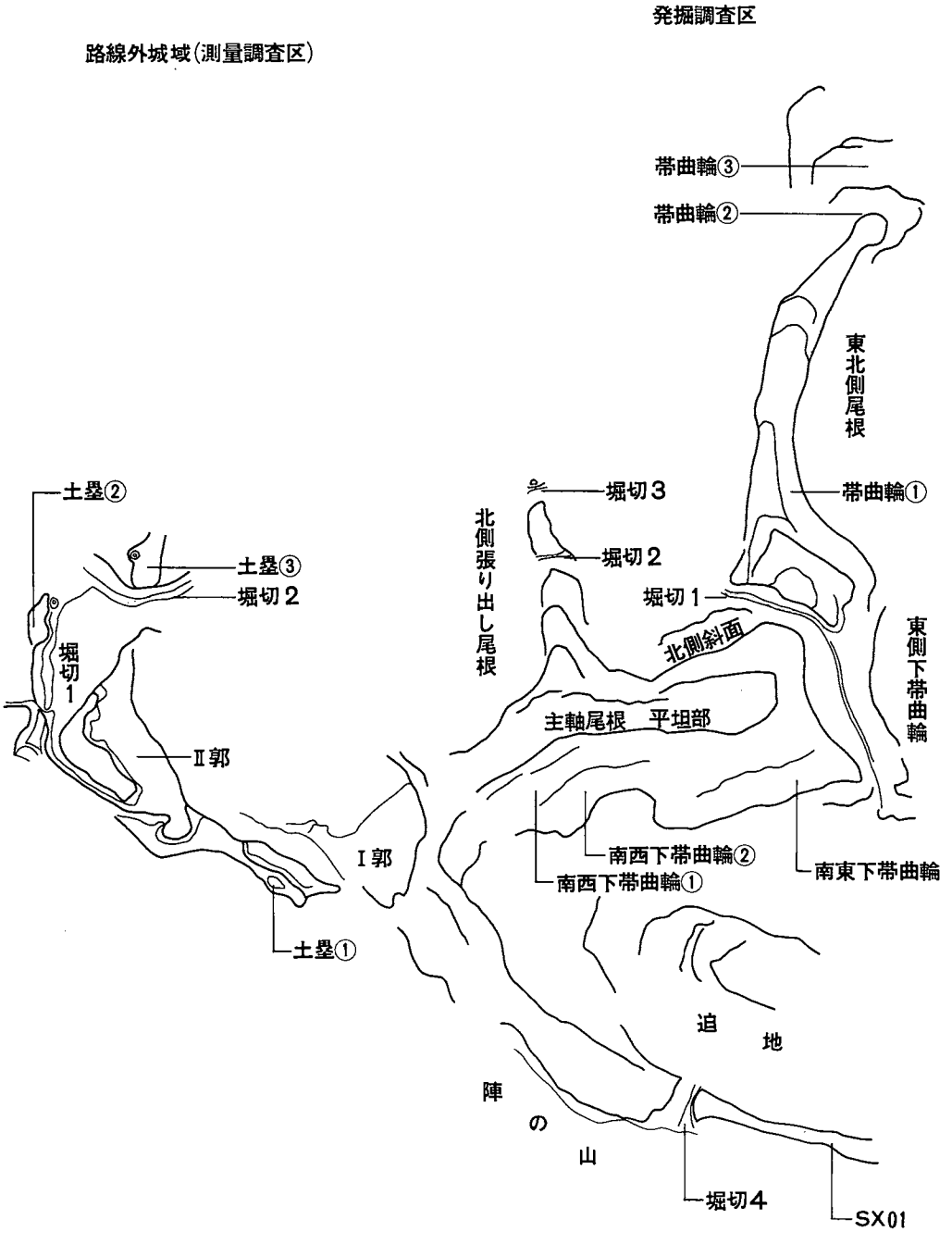
地元では今日に至るまで、字・大王谷と下城子にかかる山を昔の城跡として伝えてきた。この城跡については、昭和60年の発掘調査により南北朝時代の山城である事が判明し、中世文書による城歴との一致を見た事は、熊本県文化財調査報告102集『山田城跡』で報告済みである。

一方、「城山」については、高城跡調査の際に山田城跡の北方に、まったく別の「城山」があるという事を聞き込んだのが、調査の契機である。

今日の中世城跡の研究段階では、「城山」という様な城跡関連地名を残す山は、まずもって中世城跡として考えるべきで、この事については本書の付記〔4〕で述べたい。

すなわち、この事により現地踏査を行ったところ地元では、ただ漠然と「城山」・「陣の山」と称するだけで、大王谷・下城子箇所の山に言う様な「昔の城跡」としての認識は皆無であった。そこで山に登って調査を行った所、雑木の中に堀切や土塁が歴然として残っており、糸切り土師皿の細片も表採出来た。この事により、まずもって中世城跡に間違いないとの結論に達した。

九州縦貫自動車道（八代～人吉）は、この城山と陣の山を北から南へ突き抜ける計画であり、城山については全体の1/2、陣の山は4/5が消滅する事となった。



第6図　山田城跡Ⅱ縄張り図

第Ⅲ章　調査の成果

第1節　遺構の概要

調査区は一面の雑木林で、樹根をすべて撤去し、層厚0.1～0.2ｍの表土を剝ぐと、大方の所で地山にあたる洪積世の川原石が露頭した。

尾根筋の背面は、黄色砂土に川原石が混入する状態で、南側斜面では削平箇所にローム層土の堆積があった。

地山を切り込む柱穴はしっかりしており、埋土は褐色土及び黒褐色土であった。樹根の穴と思われるものは、礫層という地山の状態からみて数が少なかったが、埋土はフカフカの樹木の腐食土であったりして、柱穴のものとは明らかに異なっていた。見分けは容易で、樹根穴と思われるものについては開掘しなかった。

遺構の復元については、可能性の極めて高いものだけを試みた。特に、杭列や柵列と考えられるものについては、確実なものだけを実線で結び図示した。

〔検　出　遺　構〕

（1）調査区域における主軸尾根

幅10ｍ、長さ60ｍの、背面の平坦部から14棟の建築址が検出された。尾根の斜面部からはその建築址を囲むような杭列も検出された。

南東下には帯曲輪が残存しており、版築によるテラス部分の造成工事跡が確認できた。

主軸尾根の東端部より東北方向へ延びる尾根筋との間に、大規模造りの堀切があり、堀底はこれより東側へ巡り、主軸尾根の東下を巡る帯曲輪となる。

山腹は急峻に削り取られており、大土木工事の跡が伺われる。

（2）東北尾根筋

堀切より東北方向に延びる尾根筋の完掘を実施し、ほぼ等高線上に並ぶ杭列が検出された。

（3）陣の山

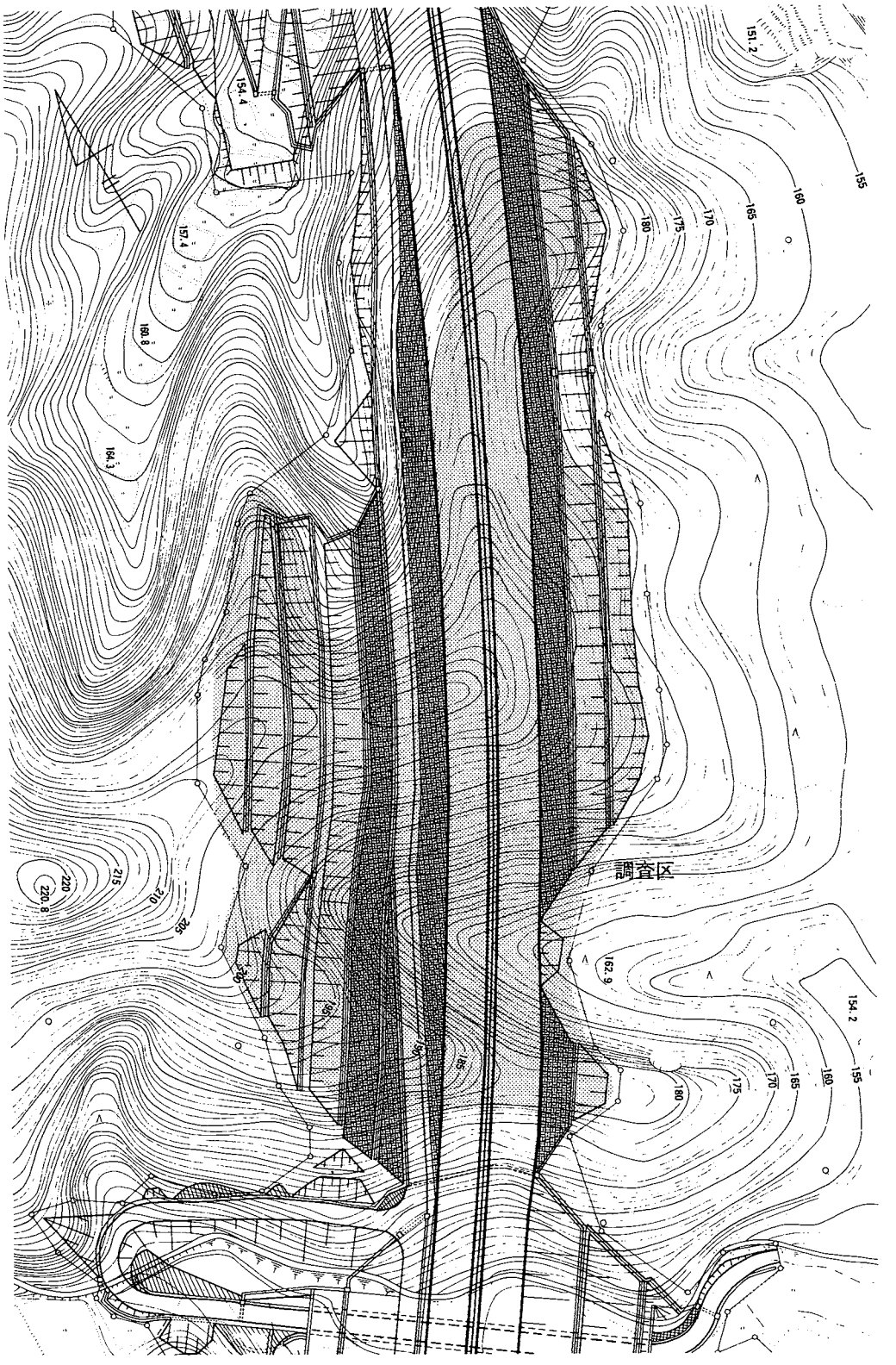
基底部寄りから２棟の建築址が検出された。尾根の中途に１条の堀切が確認でき、端部で礫層を掘り窪めた「コ」の字型の不明遺構が検出された。

（4）迫　地

迫地は大きく３段に分かれ、最下段から３棟の建築址、他の２段からは杭列が検出された。北側の立ち上がり部分から登城道跡と、路肩からガードレール塀の柱穴が検出された。

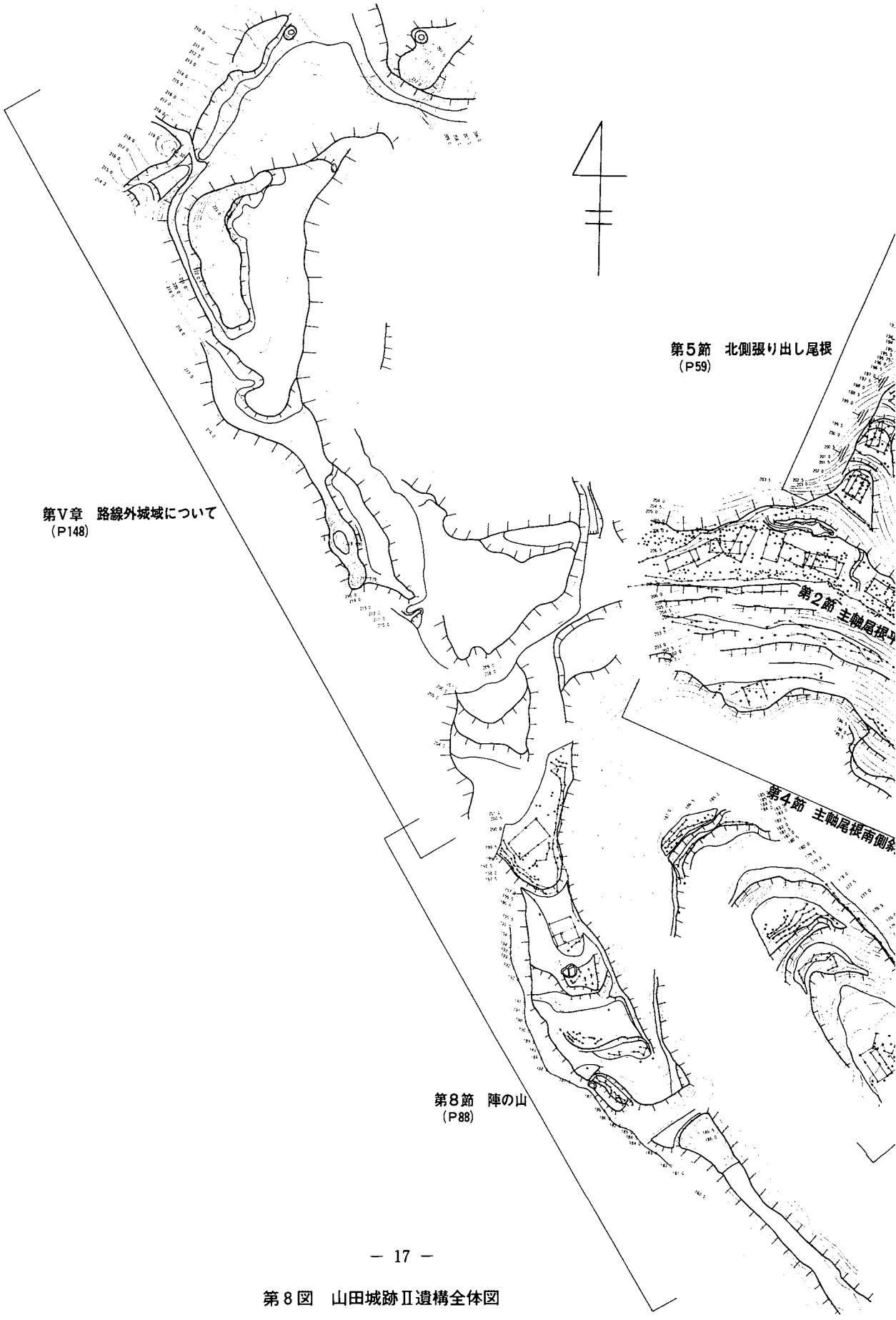
（5）出土遺物

主な出土遺物に、７個の鉄砲の鉛玉や、銅製で身丈４㎝ほどの懸け仏がある。その他、出土数は少なかったが、青磁片・白磁片・天目片・土師皿片・砥石などが出土した。

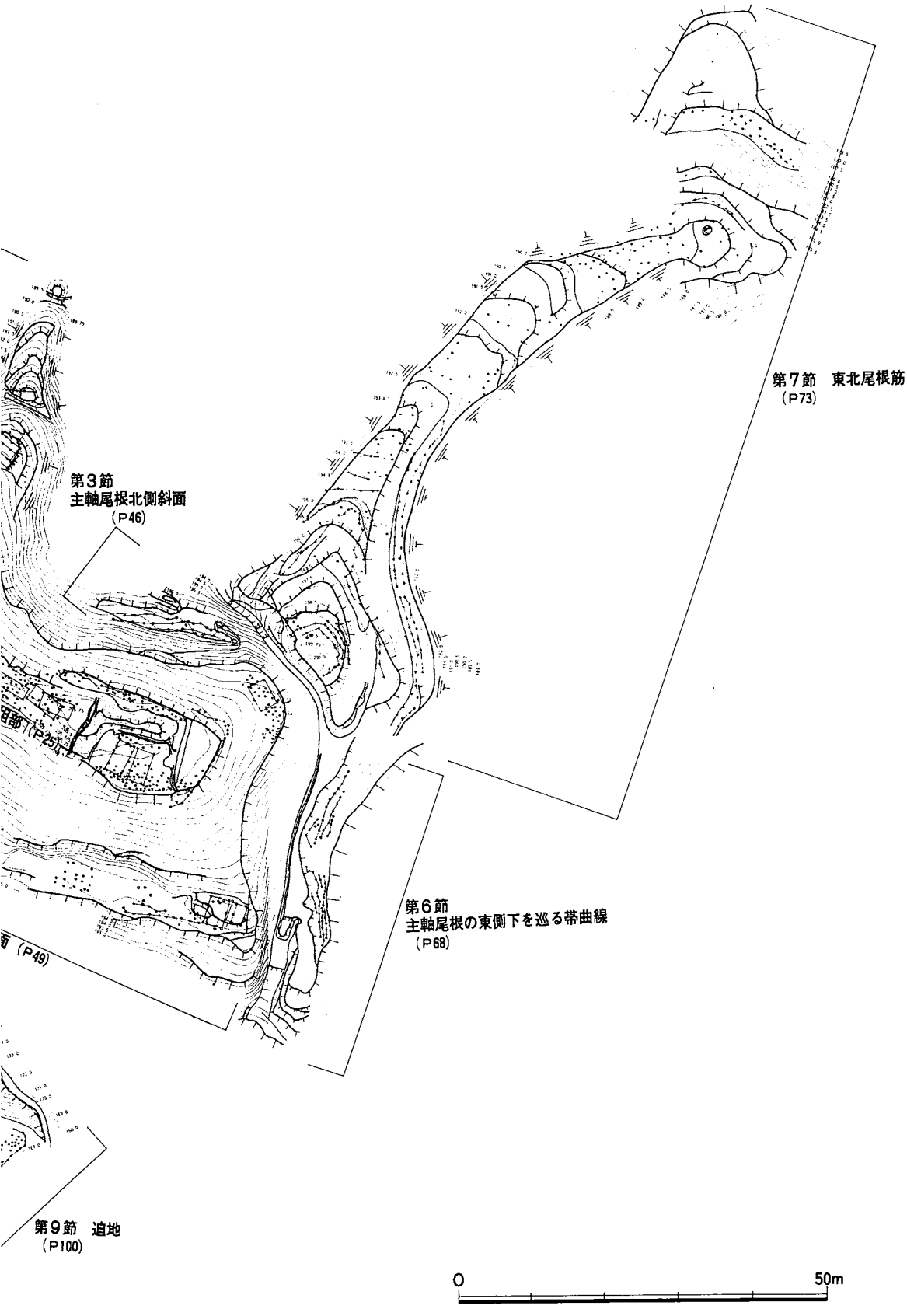


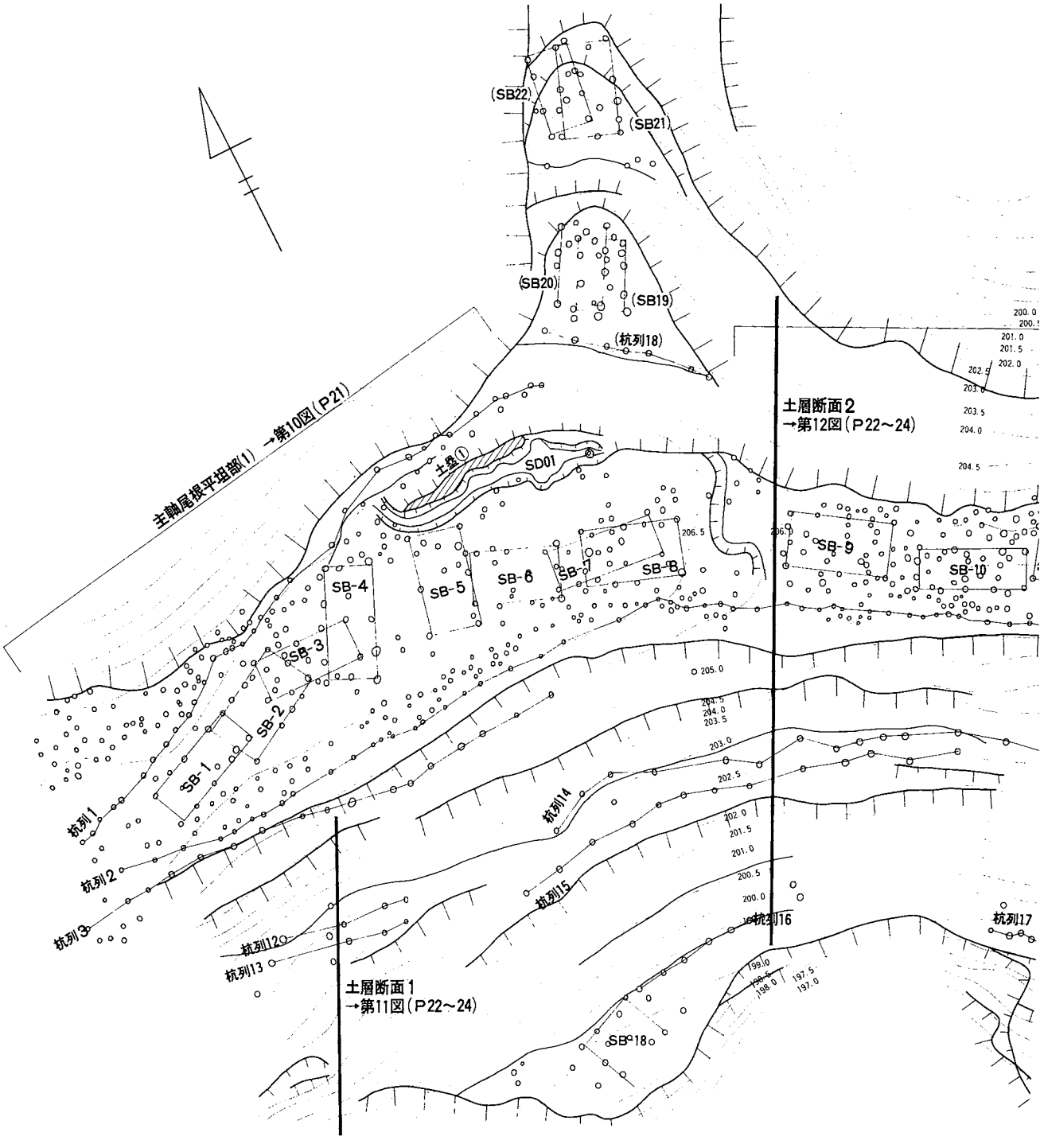
第７図　山田城跡Ⅱ調査区域図

0　50m

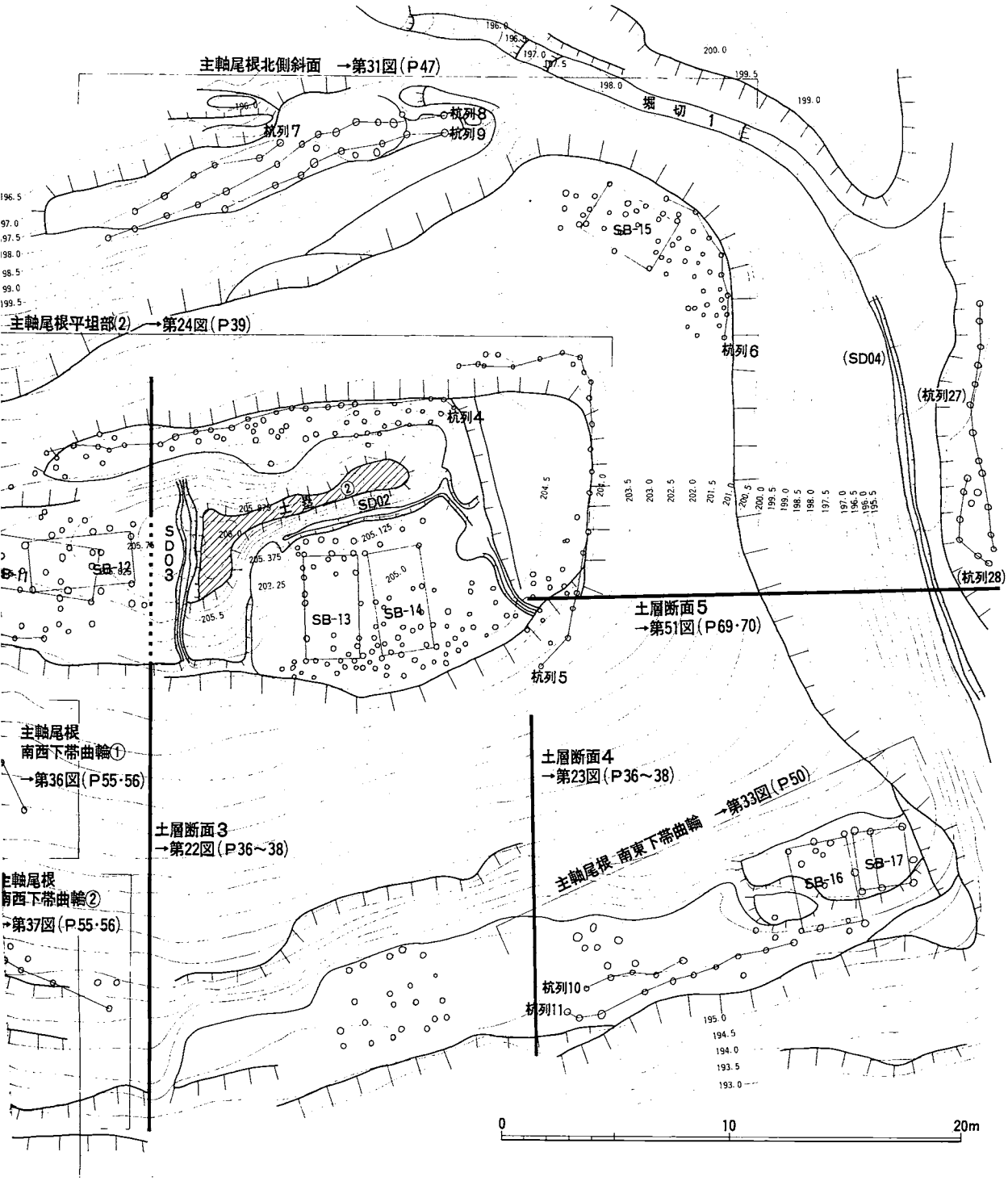


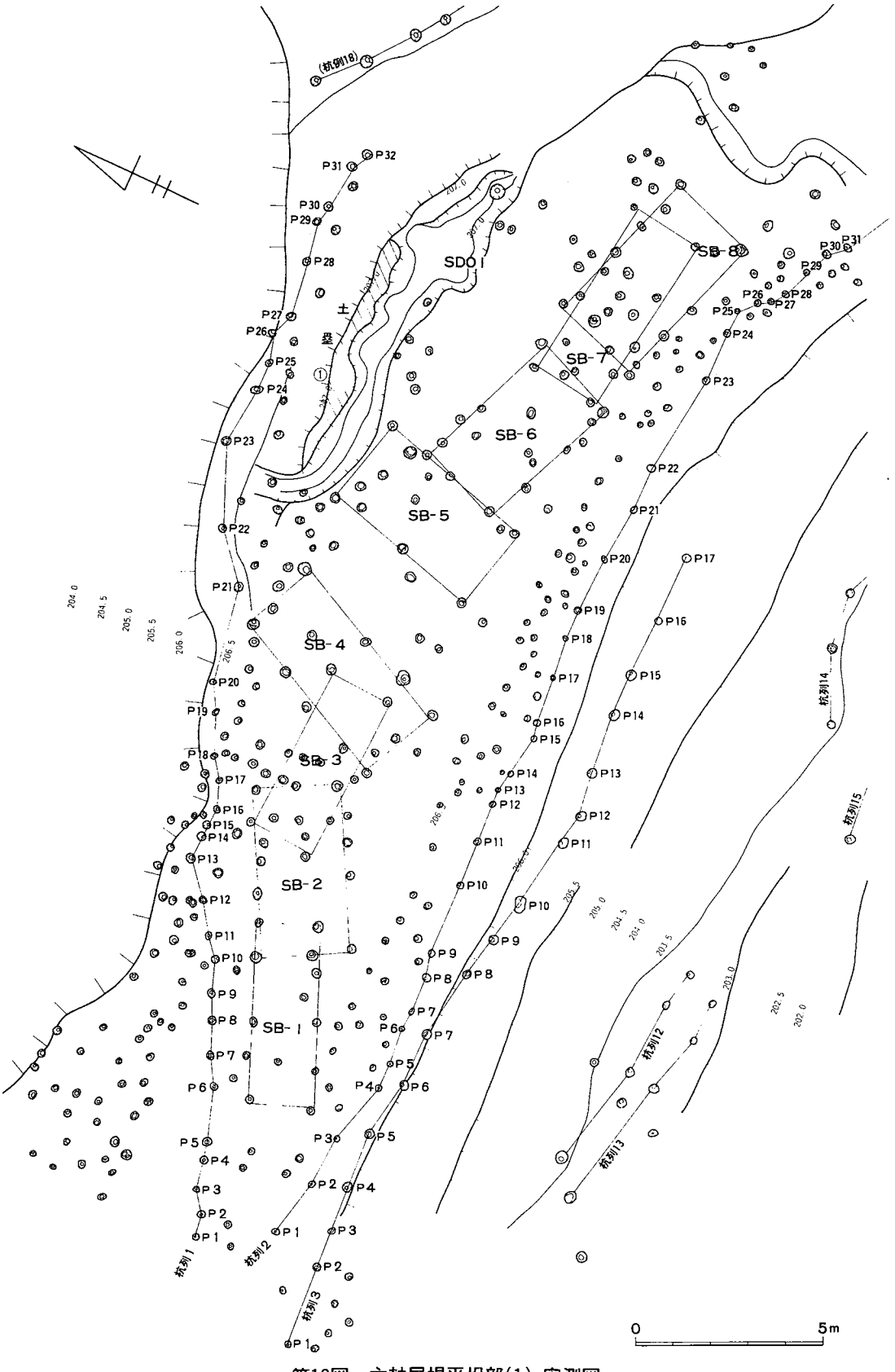
第8図　山田城跡Ⅱ遺構全体図


第7節　東北尾根筋
(P73)
第3節
主軸尾根北側斜面
(P46)
(P25)
(P49)
第6節
主軸尾根の東側下を巡る帯曲線
(P68)
第9節　迫地
(P100)
0
50m


(SB22)
(SB21)
(SB20)
(SB19)
(杭列18)
主軸尾根平坦部(1) →第10図(P21)
土層断面2
→第12図(P22～24)
土盛①
SD01
SB-1
SB-2
SB-3
SB-4
SB-5
SB-6
SB-7
SB-8
SB-9
SB-10
SB-18
杭列1
杭列2
杭列3
杭列12
杭列13
杭列14
杭列15
杭列16
杭列17
土層断面1
→第11図(P22～24)

第9図　主軸尾根実測図


主軸尾根北側斜面 →第31図(P47)
堀切1
杭列7
杭列8
杭列9
SB-15
主軸尾根平坦部(2) →第24図(P39)
杭列6
(SD04)
(杭列27)
杭列4
土塁
SD02
SD03
SB-12
SB-13
SB-14
土層断面5
→第51図(P69・70)
(杭列28)
杭列5
主軸尾根
南西下帯曲輪①
→第36図(P55・56)
土層断面4
→第23図(P36～38)
土層断面3
→第22図(P36～38)
主軸尾根 南東下帯曲輪 →第33図(P50)
SB-16
SB-17
主軸尾根
南西下帯曲輪②
→第37図(P55・56)
杭列10
杭列11
0
10
20m

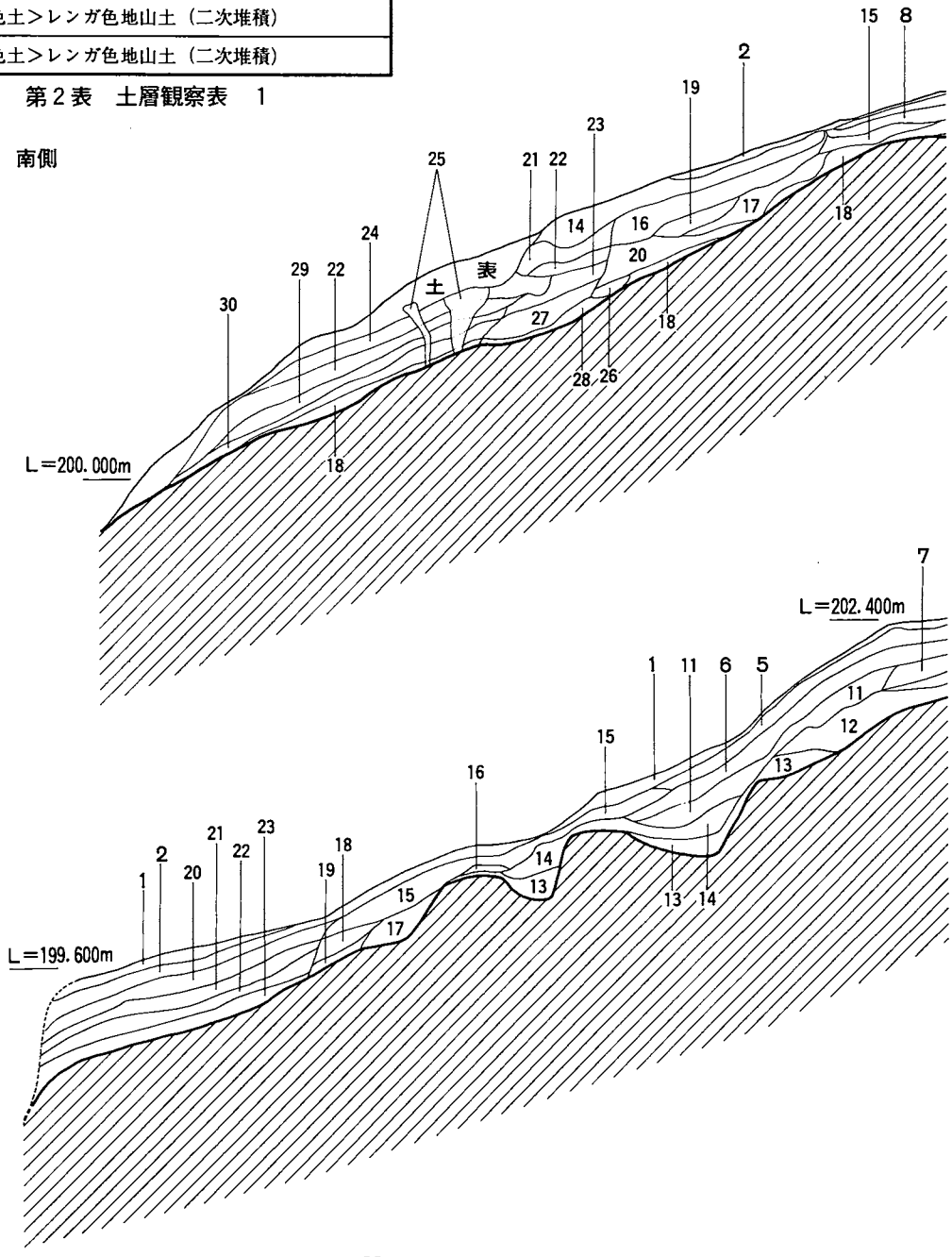


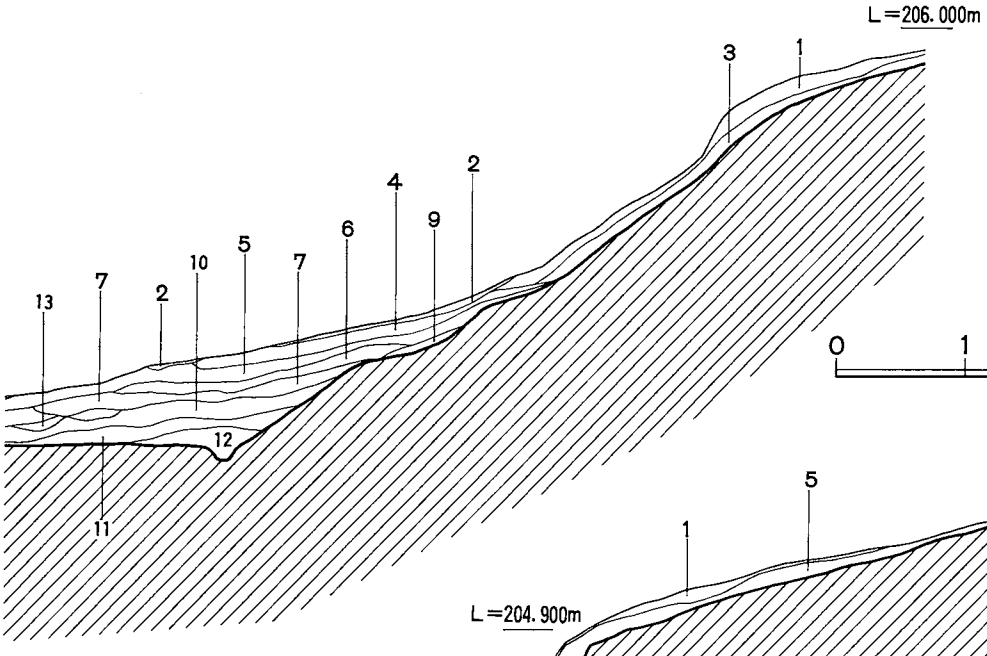
第10図　主軸尾根平坦部(1) 実測図

L＝206.000m

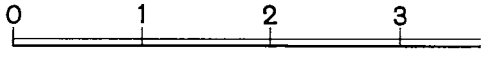
1	褐灰色土（汚れた感じ）
2	表　　土
3	地山（軟層の明褐色土＋小礫）
4	褐灰色土＞レンガ色地山土（二次堆積）
5	レンガ色地山土（二次堆積・ポロポロ）
6	レンガ色地山土（二次堆積・きめが荒い）
7	灰黒色土＞灰褐色土＋レンガ色地山土（二次堆積）
8	褐灰色土＞レンガ色地山土（二次堆積）
9	黄白色土＞レンガ色地山土（二次堆積）
10	灰褐色土＞レンガ色地山土（二次堆積）

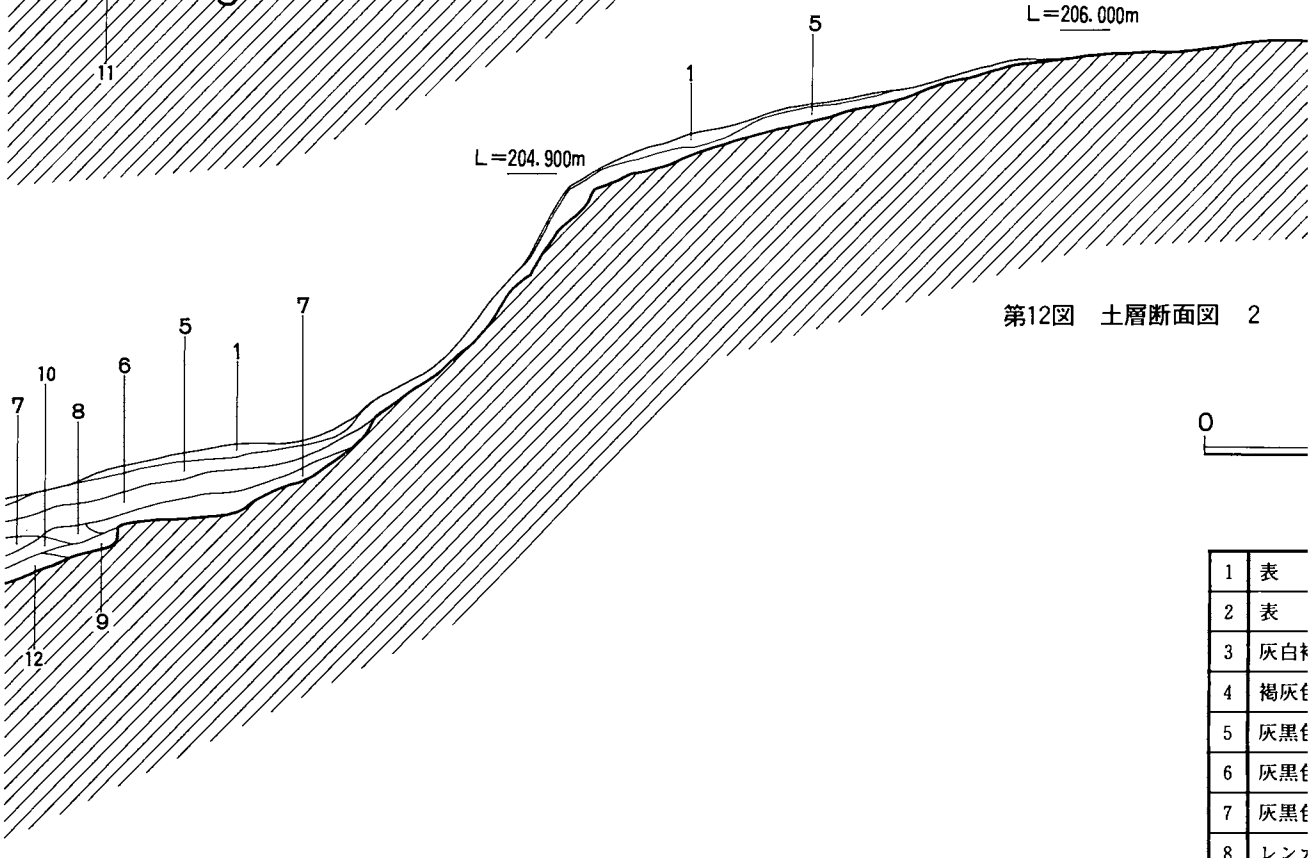
第２表　土層観察表　１





第11図　土層断面図　1



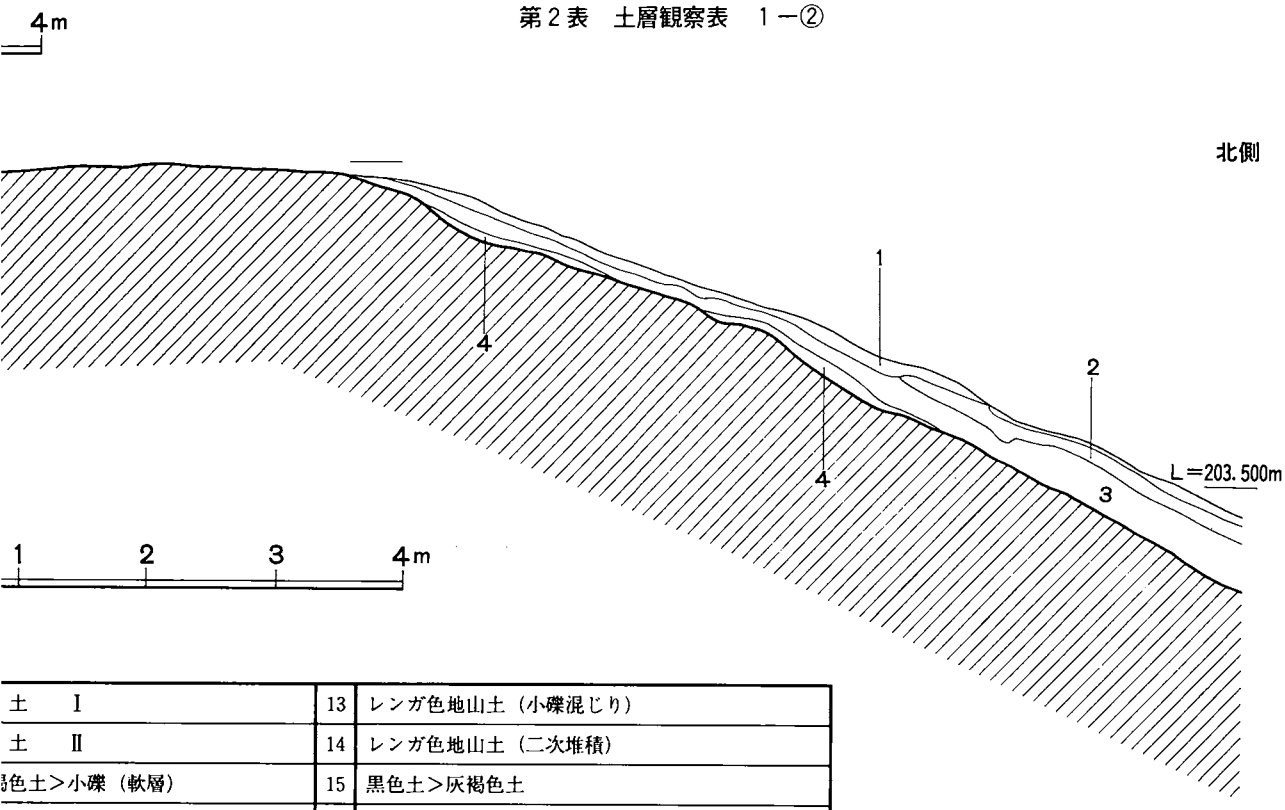


第12図　土層断面図　2

1	表
2	表
3	灰白
4	褐灰
5	灰黒
6	灰黒
7	灰黒
8	レン
9	灰褐
10	黄褐
11	灰黒
12	黄褐

11	褐灰色土＝レンガ色地山土（二次堆積）	21	灰黒色土＞褐灰色土
12	灰褐色土＞灰黒色土＋レンガ色地山土（二次堆積）	22	灰褐色土＝灰黒色土≫レンガ色地山土（二次堆積）
13	レンガ色地山土（二次堆積・ブロック土）	23	レンガ色地山土（二次堆積）＞小礫（硬層）
14	黄灰褐色土（汚れた感じ）	24	灰褐色土＞小礫
15	灰黒色土＞灰褐色土	25	樹　　根
16	黄褐色土	26	黄褐色土
17	黄褐色土＞レンガ色地山土（二次堆積）	27	レンガ色地山土（二次堆積・ブロック状）
18	レンガ色地山土（二次堆積）	28	黄褐色地山土
19	レンガ色地山土（二次堆積・くすんだ感じ）	29	黄褐色土＞灰褐色土
20	黄褐色土≫灰黒色土	30	灰褐色土＞黄褐色土≫レンガ色地山土（二次堆積）

第２表　土層観察表　１－②



土　Ⅰ		13	レンガ色地山土（小礫混じり）
土　Ⅱ		14	レンガ色地山土（二次堆積）
褐色土＞小礫（軟層）		15	黒色土＞灰褐色土
色土		16	黄褐色土（ブロック）
色土＞褐灰色土		17	黄褐色土＞灰褐色土
色土＞黄褐色土		18	黒灰色土＞灰褐色土
色土＞灰褐色土		19	レンガ色地山土（二次堆積）＞灰黒色土
ガ色地山土（二次堆積）		20	灰褐色土＞黄褐色土
色土≫レンガ色地山土（二次堆積）		21	黄褐色土＞灰黒色土
色土＞灰褐色土		22	灰黒色土＞灰褐色土＋レンガ色地山土（二次堆積）
色土＞黄褐色土＋小礫		23	灰黒色土＞レンガ色地山土（二次堆積）
色土（地山）			

第３表　土層観察表　２

第２節　主軸尾根平坦部

平面形状は「く」の字型で、東西方向に延びる尾根筋の長軸の向きは中途で二つに分かれている。ここでは尾根筋の中途より西側部分を平坦部(1)とし、中途より東側部分を平坦部(2)とした。

〔１〕主軸尾根平坦部(1)

主軸尾根の西側半分にあたり、長さ37ｍ、幅８～11.5ｍの範囲から８棟分の建築址をはじめとして、杭列・土塁の遺構が検出された。

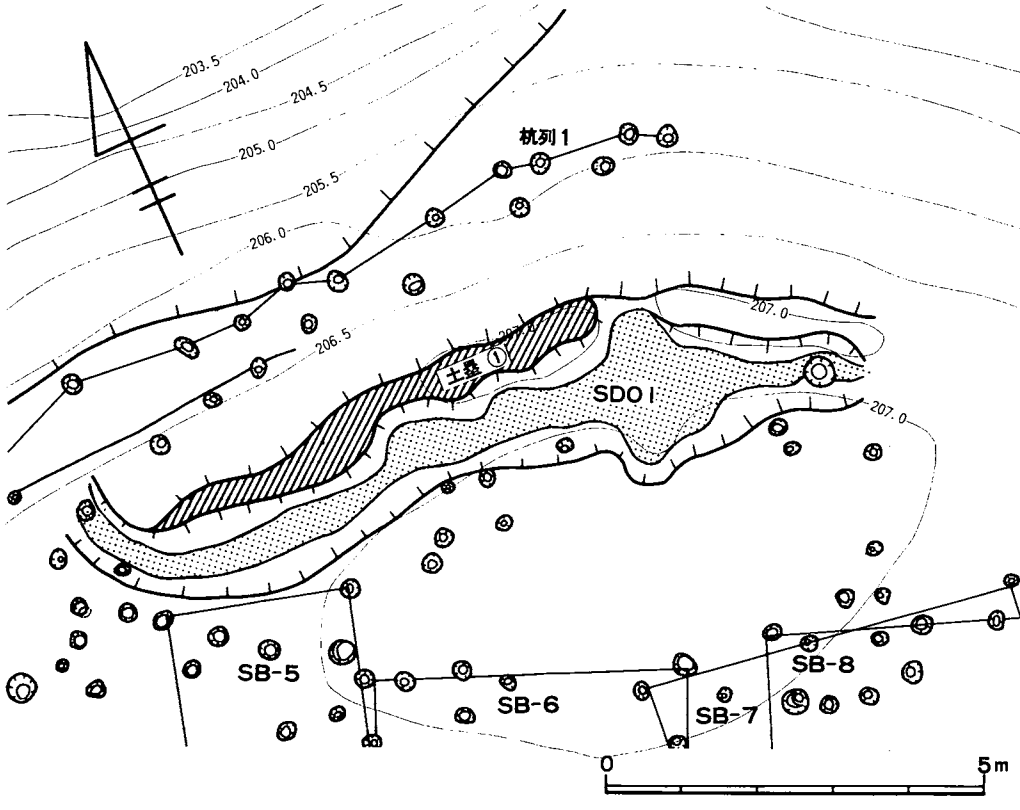
建築址については６棟が尾根の長軸沿いにあり、残り２棟が尾根筋に直交した。

〔ＳＤ０１〕

調査区の東側寄りの北縁から検出された小溝で、主軸方位はＳ82°Ｅを示し、長さ11ｍ、上場幅1.0～1.5ｍ、下場幅0.5ｍ、深さ0.2ｍを測る。断面形状は幅広のＵ字形で北側に土塁①が付随する。埋土は灰黒色で、遺物の出土は無かった。

〔土塁　①〕

崩壊が目立ち、断片的に残る東側寄りの長さ2.9ｍ分と2.4ｍ分について、上場幅0.2～0.5ｍ、下場幅0.6～0.8ｍ、高さ0.15ｍを測る。西側寄りの４ｍ分は、僅かに基底部を残す。



第13図　ＳＤ０１…土塁①実測図

〔ＳＢ０１〕

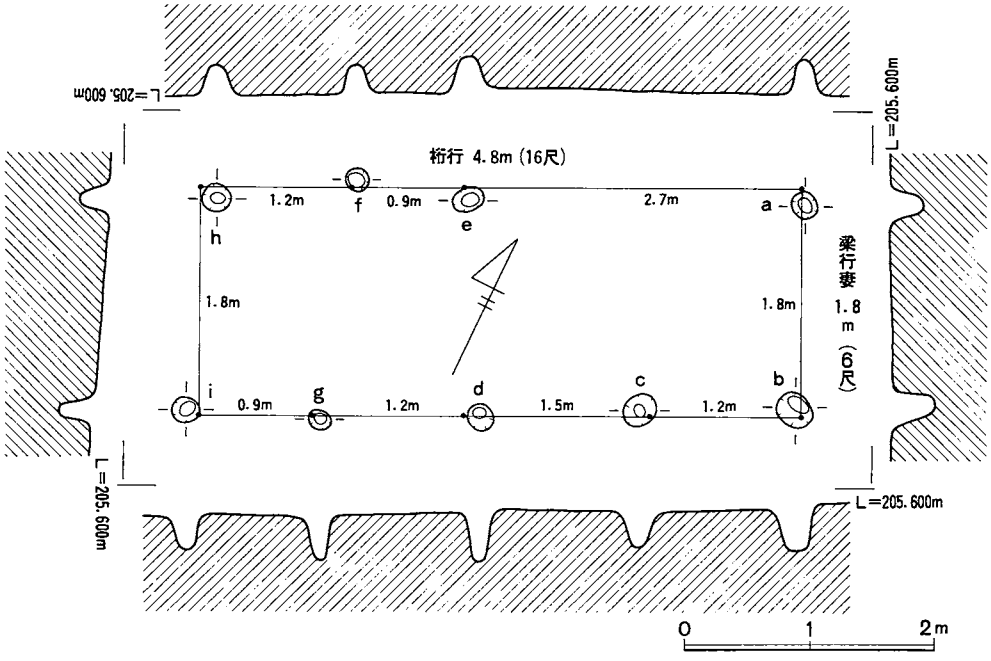
桁行4.8ｍ（16尺）、梁行妻1.8ｍ（６尺）の４間×１間の建物で、桁行方位はＮ64°Ｅである。柱間寸法は、Ｐａ～Ｐｅ～Ｐｆ～Ｐｈで2.7ｍ（９尺）＋0.9ｍ（３尺）＋1.2ｍ（４尺）、Ｐｂ～Ｐｃ～Ｐｄ～Ｐｇ～Ｐｉで1.2ｍ（４尺）＋1.5ｍ（５尺）＋1.2ｍ（４尺）＋0.9ｍ（３尺）、梁行妻Ｐａ～Ｐｂで1.8ｍ（６尺）、Ｐｈ～Ｐｉで1.8ｍ（６尺）を測る。

柱穴の大きさはＰｂで最大（31×27cm）、Ｐｇが最小（18×16cm）で平均値は23.7×21.1cmとなる。深さはＰｄが最深（42cm）、Ｐｆが最浅（23cm）で平均値は30cmである。柱列は梁行妻Ｐａ～Ｐｂを除き千鳥の並びとなる。

桁行の北側と南側の高さを比べた場合、柱穴の検出面は西側のＰｈ～Ｐｉで10.5cm、北側の方が高い。

Pit No	桁行柱間 (m)	桁行間(m)	Pit No	梁間柱間 (m)	梁間間(m)	Pit No	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
a～e	2.7	4.8	a～b	1.8	1.8	a	22	20	26
e～f	0.9					b	31	27	34
f～h	1.2					c	28	26	28
						d	22	21	42
b～c	1.2	4.8	h～i	1.8	1.8	e	26	19	29
c～d	1.5					f	19	18	23
d～g	1.2					g	18	16	35
g～i	0.9					h	24	22	24
						i	23	21	29

第４表　ＳＢ０１計測表



第14図　ＳＢ０１実測図

〔ＳＢ０２〕

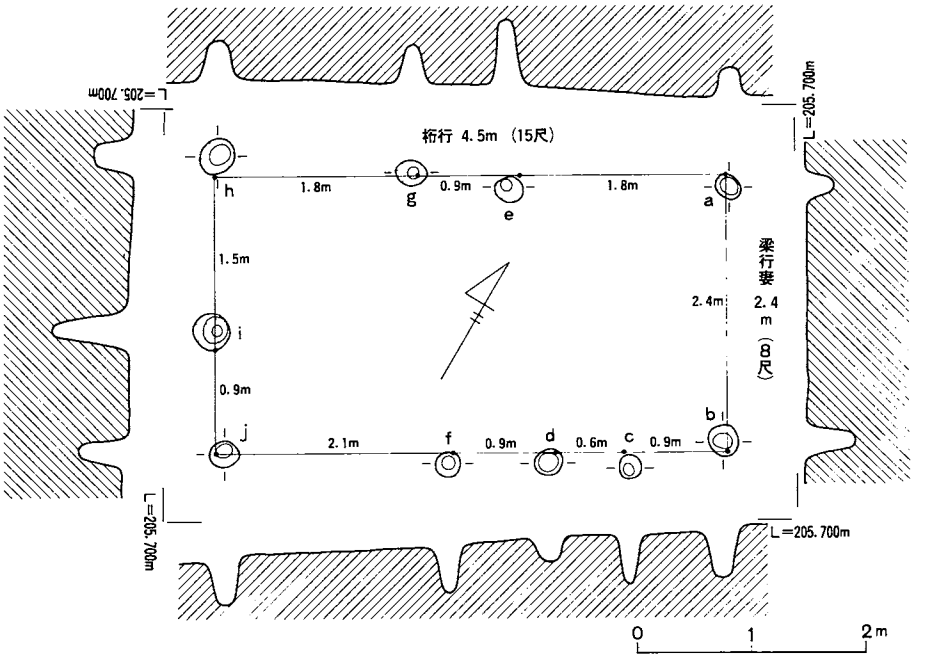
桁行4.5ｍ（15尺）、梁行妻2.4ｍ（８尺）の４間×２間の建物で、桁行方位はＮ56°Ｅある。柱間寸法は、Ｐａ～Ｐｅ～Ｐｇ～Ｐｈで1.8ｍ（６尺）＋0.9ｍ（３尺）＋1.8ｍ（６尺）、Ｐｂ～Ｐｃ～Ｐｄ～Ｐｆ～Ｐｊで0.9ｍ（３尺）＋0.6ｍ（２尺）＋0.9ｍ（３尺）＋2.1ｍ（７尺）、梁行妻Ｐａ～Ｐｂで2.4ｍ（８尺）、Ｐｈ～Ｐｉ～Ｐｊで1.5ｍ（５尺）＋0.9ｍ（３尺）を測る。

柱穴の大きさはＰｉで最大（34×32cm）、Ｐｃで最小（21×20cm）で平均値は26.9×24.0cmとなる。深さはＰｉが最深（66cm）、Ｐｄが最浅（21cm）で平均値は40.1cmである。柱列は梁行妻Ｐａ～Ｐｂを除き千鳥の並びとなる。

梁行妻の東側と西側の高さを比べた場合、柱穴の検出面は北側Ｐａ～Ｐｈで15.0cm、南側Ｐｂ～Ｐｊで29.1cm、東側の方が高い。一方、桁行の場合、北側と南側の高さはほぼ水平に近い。

Pit No	桁行柱間 (m)	桁行間(m)	Pit No	梁間柱間 (m)	梁間間(m)	Pit No	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
a～e	1.8	4.5	a～b	2.4	2.4	a	24	20	24
e～g	0.9					b	29	26	42
g～h	1.8					c	21	20	42
						d	26	23	21
b～c	0.9	4.5	h～i	1.5	2.4	e	25	24	57
c～d	0.6		i～j	0.9		f	23	21	40
d～f	0.9					g	28	22	33
f～j	2.1					h	33	28	34
						i	34	32	66
						j	26	24	42

第５表　ＳＢ０２計測表



第15図　ＳＢ０２実測図

〔ＳＢ０３〕

桁行4.5ｍ（15尺）、梁行妻1.8ｍ（６尺）の３間×１間の建物で、桁行方位はＮ90°Ｗで東西方向にある。

柱間寸法は、桁行Ｐａ～Ｐｃ～Ｐｅ～Ｐｆで1.2ｍ（４尺）＋1.2ｍ（４尺）＋2.1ｍ（７尺）であるが、Ｐｂ～Ｐｄ～Ｐｇの場合Ｐｂ～Ｐｄの補助柱が不明で、2.1ｍ（７尺）＋2.4ｍ（８尺）となる。梁行妻Ｐａ～Ｐｂで1.8ｍ（６尺）、Ｐｆ～Ｐｇで1.8ｍ（６尺）を測る。

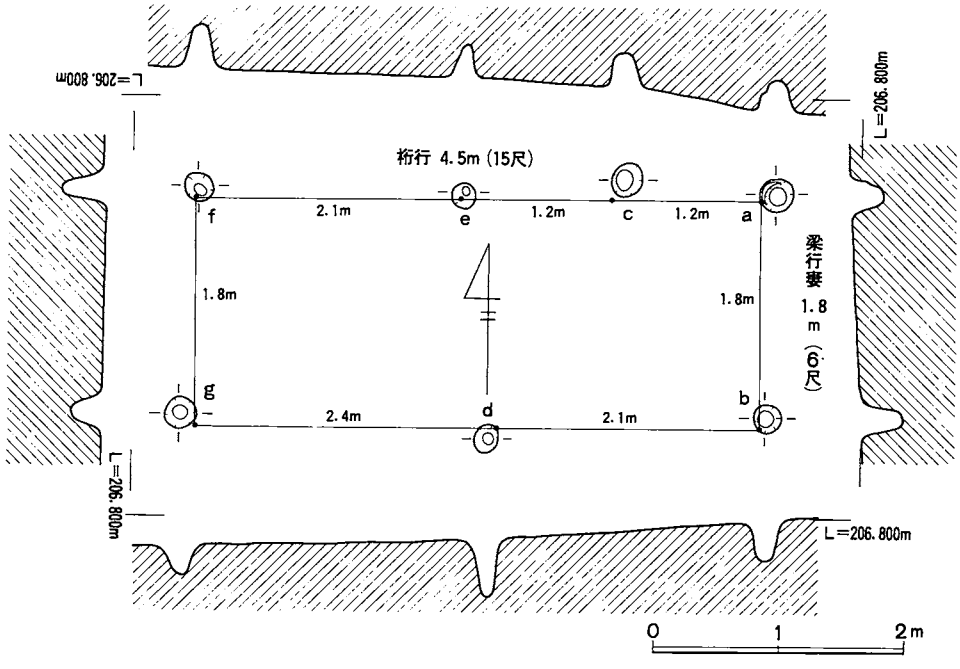
柱穴の大きさはＰｃで最大（27×25cm）、Ｐｅが最小（20×19cm）で平均値は24.3×22.0cmとなる。深さはＰｄが最深（46cm）、ＰａとＰｇが最浅（23cm）で平均値は29.7cmである。柱列はすべて千鳥の並びとなる。

梁行妻の東側と西側を比べた場合、柱穴の検出面は北側のＰａ～Ｐｆで32.1cm、南側Ｐｂ～Ｐｇで23.2cm、東側の方が高い。

さらに桁行の北側と南側では、東側Ｐａ～Ｐｂで11.3cm、北側の方が高い。

Pit No	桁行柱間 (m)	桁行間(m)	Pit No	梁間柱間 (m)	梁間間(m)	Pit No	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
a～c	1.2	4.5	a～b	1.8	1.8	a	27	24	23
c～e	1.2					b	24	22	32
e～f	2.1					c	27	25	25
						d	21	19	46
b～d	2.1	4.5	f～g	1.8	1.8	e	20	19	25
d～g	2.4					f	24	21	34
						g	27	24	23

第６表　ＳＢ０３計測表



第16図　ＳＢ０３実測図

〔ＳＢ０４〕

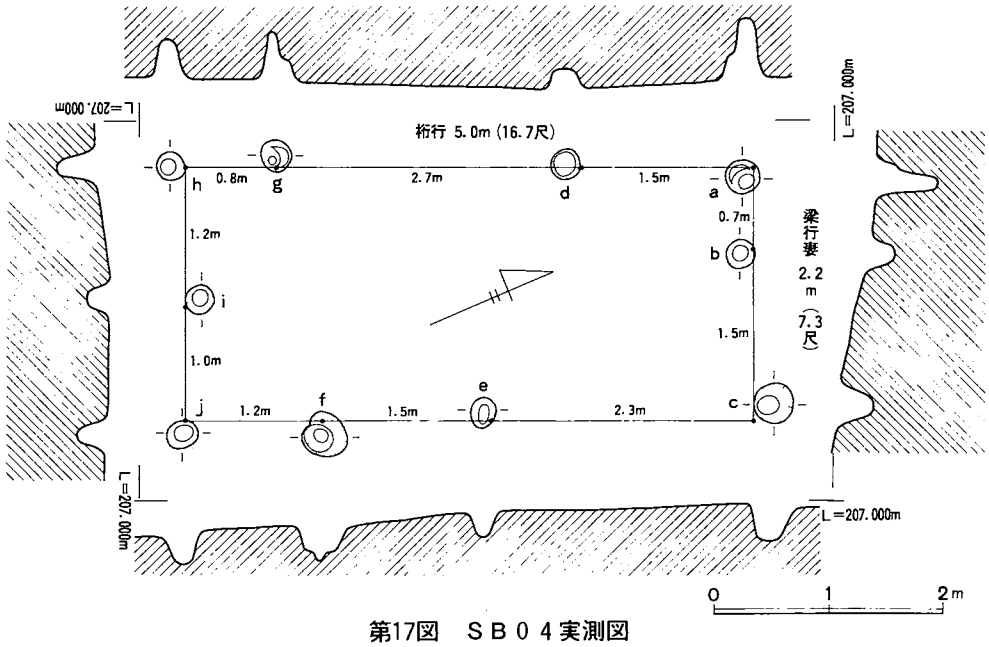
桁行5.0ｍ（16.7尺）、梁行妻2.2ｍ（7.3尺）の３間×２間の建物で、桁行方位はＮ22°Ｅである。柱間寸法は、Ｐａ～Ｐｄ～Ｐｇ～Ｐｈで1.5ｍ（５尺）＋2.7ｍ（９尺）＋0.8ｍ（2.7尺）、Ｐｃ～Ｐｅ～Ｐｆ～Ｐｊで2.3ｍ（7.7尺）＋1.5ｍ（５尺）＋1.2ｍ（４尺）、梁行妻Ｐａ～Ｐｂ～Ｐｃで0.7ｍ（2.3尺）＋1.5ｍ（５尺）、Ｐｈ～Ｐｉ～Ｐｊで1.2ｍ（４尺）＋1.0ｍ（3.3尺）を測る。

柱穴の大きさはＰｆが最大（40×39cm）、Ｐｈが最小（24×23cm）で平均値は29.1×27.1cmとなる。深さはＰａが最深（52cm）、Ｐｄが最浅（18cm）で平均値は30.3cmである。柱列はすべて千鳥の並びとなる。

桁行の東側と西側の高さを比べた場合、北側Ｐａ～Ｐｃで34.5cm、南側Ｐｈ～Ｐｊで6.9cm、東側が高い。一方、梁行妻の北側と南側とでは、西側Ｐａ～ＰｈでＰｄの切り込み面がＰａ・Ｐｇ・Ｐｈよりもやや高い。東側Ｐｃ～Ｐｊについては25.5cm、北側の方が高い。

Pit No	桁行柱間 (m)	桁行間(m)	Pit No	梁間柱間 (m)	梁間間(m)	Pit No	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
a～d	1.5	5.0	a～b	0.7	2.2	a	30	27	52
d～g	2.7		b～c	1.5		b	26	25	23
g～h	0.8					c	35	34	32
						d	27	26	18
c～e	2.3	5.0	h～i	1.2	2.2	e	26	23	23
e～f	1.5		i～j	1.0		f	40	39	30
f～j	1.2					g	28	26	42
						h	24	23	35
						i	26	24	21
						j	29	24	27

第７表　ＳＢ０４計測表



第17図　ＳＢ０４実測図

〔ＳＢ０５〕

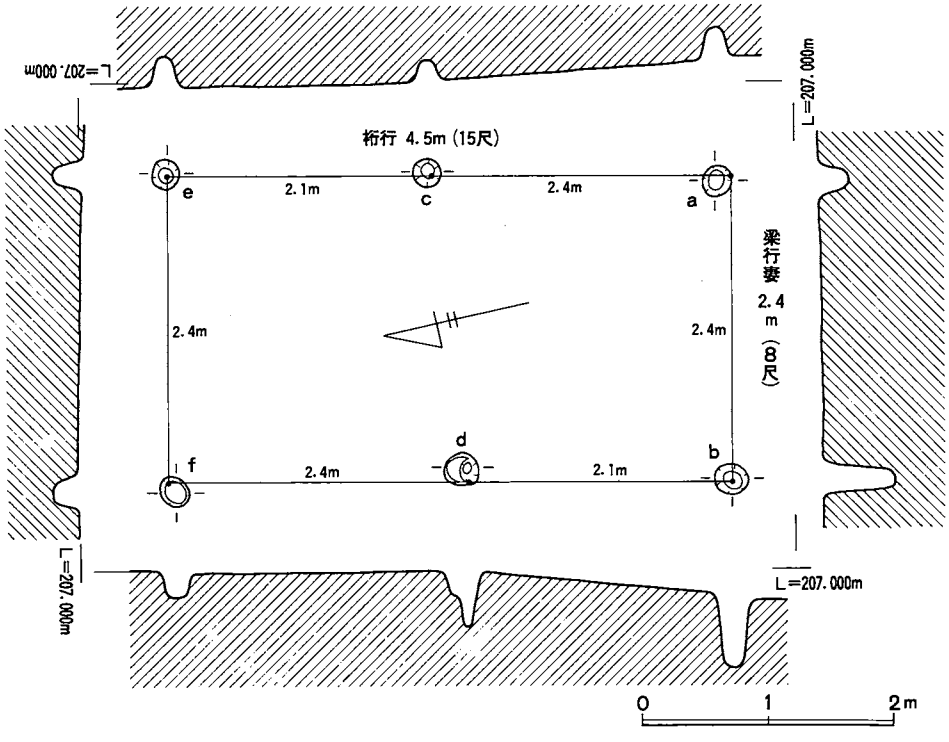
桁行4.5ｍ（15尺）、梁行妻2.4ｍ（８尺）の２間×１間の建物で、桁行方位はＮ12°Ｅである。柱間寸法は、桁行Ｐａ～Ｐｃ～Ｐｅで2.4ｍ（８尺）＋2.1ｍ（７尺）、Ｐｂ～Ｐｄ～Ｐｆで2.1ｍ（７尺）＋2.4ｍ（８尺）、梁行妻Ｐａ～Ｐｂで2.4ｍ（８尺）、Ｐｅ～Ｐｆで2.4ｍ（８尺）を測る。

柱穴の大きさはＰｄで最大（28×25cm）、Ｐｃが最小（23×21cm）で平均値は25.0×22.7cmとなる。深さはＰｂが最深（56cm）、Ｐｃが最浅（17cm）で平均値は30.8cmである。柱列は桁行Ｐａ～Ｐｅを除いて千鳥の並びとなる。

梁行妻の北側と南側の高さを比べた場合、柱穴の検出面は東側Ｐａ～Ｐｅで22.8cm、西側Ｐｂ～Ｐｆで22.8cm、北側の方が高い。一方、桁行の場合、東側と西側の高さはほぼ水平である。

Pit No	桁行柱間 (m)	桁行間(m)	Pit No	梁間柱間 (m)	梁間間(m)	Pit No	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
a～c c～e	2.4 2.1	4.5	a～b	2.4	2.4	a b c d e f	25 26 23 28 23 25	23 23 21 25 22 22	26 56 17 43 24 19
b～d d～f	2.1 2.4	4.5	e～f	2.4	2.4				

第８表　ＳＢ０５計測表



第18図　ＳＢ０５実測図

〔ＳＢ０６〕

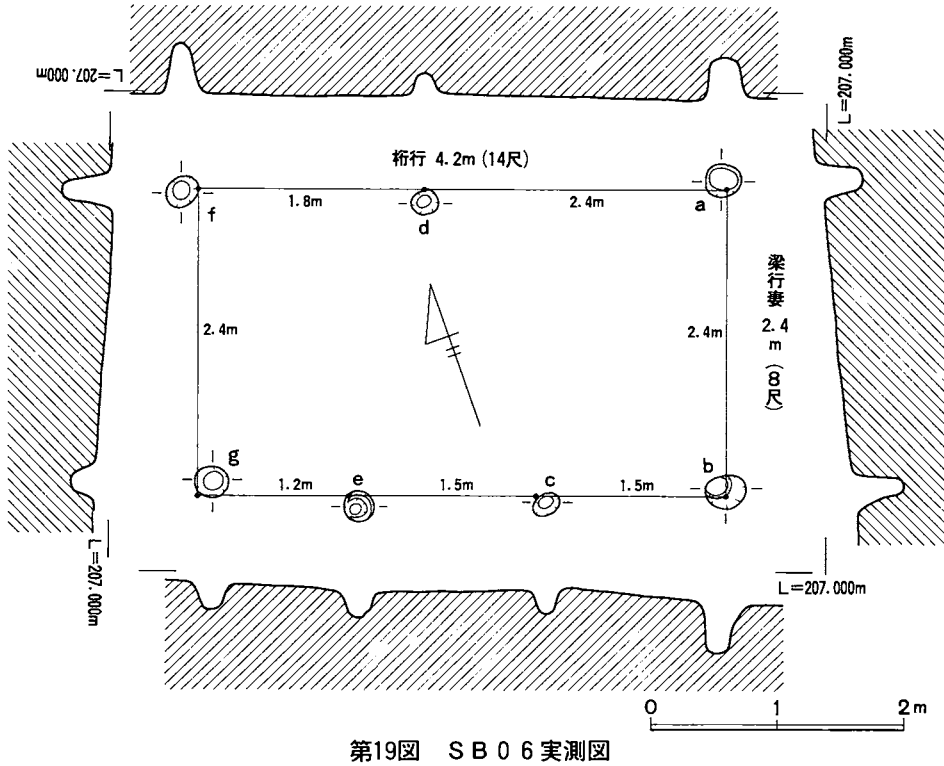
桁行4.2m（14尺）、梁行妻2.4m（８尺）の３間×１間の建物で、方位はN72°Wである。柱間寸法は、桁行Ｐａ～Ｐｄ～Ｐｆで2.4m（８尺）＋1.8m（６尺）であるが、Ｐｂ～Ｐｇは中央柱がＰｃとＰｅの補助柱に分かれており、Ｐｂ～Ｐｃ～Ｐｅ～Ｐｇで1.5m（５尺）＋1.5m（５尺）＋1.2m（４尺）となる。梁行妻については、Ｐａ～Ｐｂで2.4m（８尺）、Ｐｆ～Ｐｇで2.4m（８尺）を測る。柱列は梁行妻Ｐａ～Ｐｂを除いて千鳥の並びとなる。

柱穴の大きさはＰｂが最大（32×27cm）、Ｐｄが最小（21×20cm）で平均値は24.6×22.3cmとなる。深さはＰｆが最深（49cm）、Ｐｄが最浅（17cm）で平均値は29cmである。

桁行の北側と南側の高さを比べた場合、柱穴の検出面は東側Ｐａ～Ｐｂで29.6cm、西側Ｐｆ～Ｐｇで10.6cm、北側の方が高い。さらに梁行妻の東側と西側では、北側Ｐａ～Ｐｆでほぼ水平となるが、南側Ｐｂ～Ｐｇは16.5cm、西側の方が高い。

Pit No	桁行柱間 (m)	桁行間(m)	Pit No	梁間柱間 (m)	梁間間(m)	Pit No	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
a～d	2.4	4.2	a～b	2.4	2.4	a	28	26	35
d～f	1.8					b	32	27	40
						c	27	16	21
						d	21	20	17
b～c	1.5	4.2	f～g	2.4	2.4	e	24	23	20
c～e	1.5					f	27	21	49
e～g	1.2					g	26	23	21

第９表　ＳＢ０６計測表



第19図　ＳＢ０６実測図

〔ＳＢ０７〕

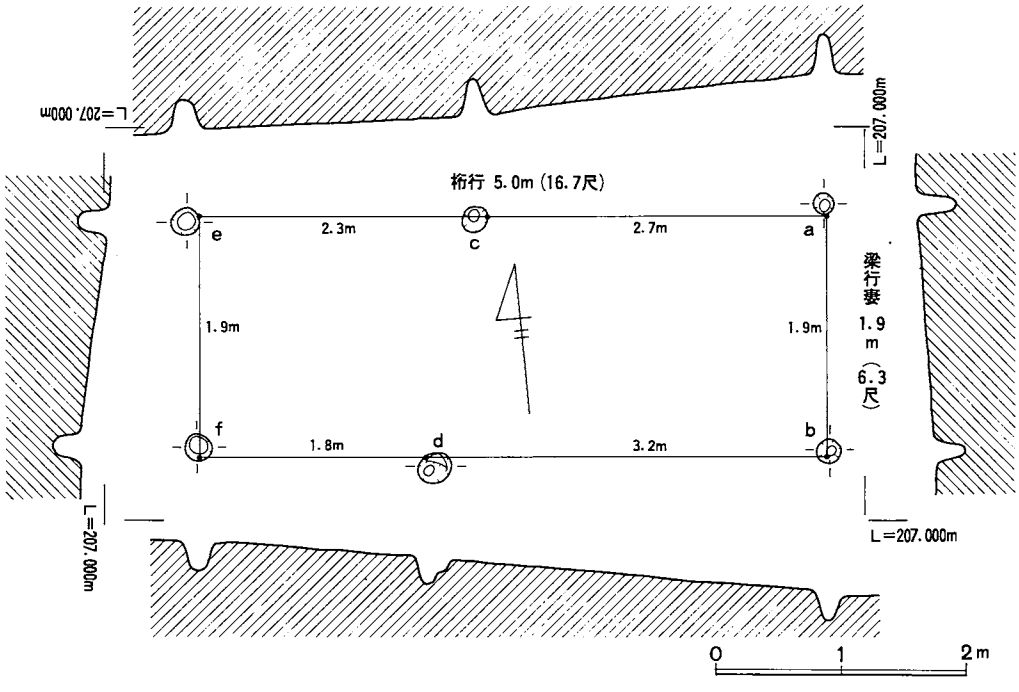
桁行5.0m（16.7尺）、梁行妻1.9m（6.3尺）の２間×１間の建物で、方位はN83°Wである。柱間寸法は、桁行Ｐａ～Ｐｃ～Ｐｅで2.7m（９尺）＋2.3m（7.7尺）、Ｐｂ～Ｐｄ～Ｐｆで3.2m（10.7尺）＋1.8m（６尺）、梁行妻Ｐａ～Ｐｂで1.9m（6.3尺）、Ｐｅ～Ｐｆで1.9m（6.3尺）を測る。

柱穴の大きさはＰｄが最大（28×23cm）、Ｐａが最小（18×16cm）で平均値は22.2×19.7cmとなる。深さはＰａが最深（31cm）、ＰｄとＰｆが最浅（22cm）で平均値は25.3cmである。柱列は両梁行妻がほぼ整列するのに対し、両桁行は千鳥の並びとなる。

桁行の北側と南側の高さを比べた場合、柱穴の検出面は東側Ｐａ～Ｐｂで13.5cm、西側Ｐｅ～Ｐｆで23.4cm、北側の方が高い。さらに梁行妻の東側と西側では、北側Ｐａ～Ｐｅで45.9cm、南側Ｐｂ～Ｐｆで42.9cm、東側の方が高い。

Pit No	桁行柱間 (m)	桁行間(m)	Pit No	梁間柱間 (m)	梁間間(m)	Pit No	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
a～c	2.7	5.0	a～b	1.9	1.9	a	18	16	31
c～e	2.3					b	19	18	24
						c	23	19	28
						d	28	23	22
b～d	3.2	5.0	e～f	1.9	1.9	e	23	21	25
d～f	1.8					f	22	21	22

第10表　ＳＢ０７計測表



第20図　ＳＢ０７実測図

〔ＳＢ０８〕

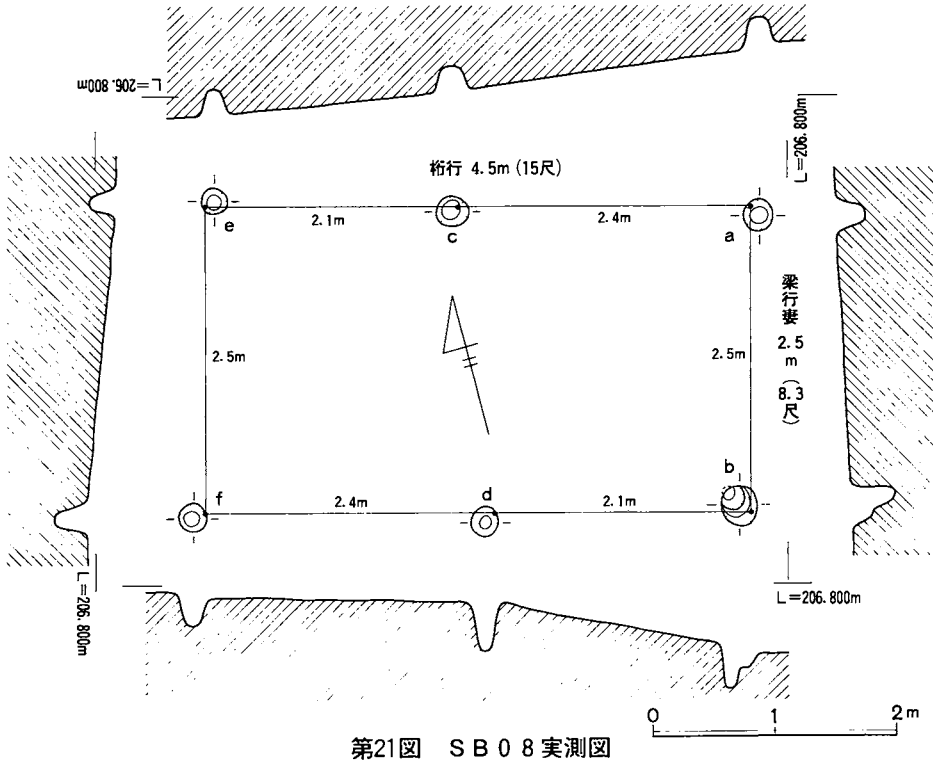
桁行4.5ｍ（15尺）、梁行妻2.5ｍ（8.3尺）の２間×１間の建物で、桁行方位はＮ76°Ｗである。柱間寸法は、桁行Ｐａ～Ｐｃ～Ｐｅで2.4ｍ（８尺）＋2.1ｍ（７尺）、Ｐｂ～Ｐｄ～Ｐｆで2.1ｍ（７尺）＋2.4ｍ（８尺）、梁行妻Ｐａ～Ｐｂで2.5ｍ（8.3尺）、Ｐｅ～Ｐｆで2.5ｍ（8.3尺）を測る。

柱穴の大きさはＰｂで最大（33×28㎝）、Ｐｅが最小（22×20㎝）で平均値は25.8×23.7㎝となる。深さはＰｂが最深（38㎝）、Ｐｅが最浅（20㎝）で平均値は27.2㎝である。柱列は梁行妻Ｐａ～Ｐｂ、Ｐｅ～Ｐｆで千鳥の並びとなる。Ｐｂは二段掘りとなっている。

梁行妻の東側と西側の高さを比べた場合、柱穴の検出面は北側Ｐａ～Ｐｅで60㎝、南側Ｐｂ～Ｐｆで51.4㎝、東側の方が高い。さらに桁行の北側と南側の高さを比べた場合、柱穴の検出面は東側Ｐａ～Ｐｂで14.9㎝、西側Ｐｅ～Ｐｆで27.3㎝、北側の方が高い。

Pit No	桁行柱間 (m)	桁行間(m)	Pit No	梁間柱間 (m)	梁間間(m)	Pit NO	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
a～c c～e	2.4 2.1	4.5	a～b	2.5	2.5	a b c d e f	25 33 27 25 22 23	25 28 24 23 20 22	23 38 21 34 20 27
b～d d～f	2.1 2.4	4.5	e～f	2.5	2.5				

第11表　ＳＢ０８計測表



第21図　ＳＢ０８実測図

〔杭列　1〕

平場の北縁沿いに延びる杭列で、一部、西側寄りは平場を跨ぐ格好となる。32個の杭跡から構成されており、杭間の距離は0.36～2.37ｍで全長29.85ｍを測る。多少、バラつきがある。特に、中途より東側寄りの一部は他と比べて、全体的に杭間の距離が疎の状態となる。

Pit No	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm) 最深	深さ(cm) 最浅	Pit間(cm)	Pit No	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm) 最深	深さ(cm) 最浅	Pit間(cm)	Pit No	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm) 最深	深さ(cm) 最浅	Pit間(cm)
1－1	16	15	33.4	30.5	61	1－12					116	1－23					159
2	20	18	27.5	24.2	69	13	26	21	32.6	27.6	63	24	32	21	46.0	31.0	78
3	17	14	36.3	34.3	81	14	25	20	37.7	35.4	36	25	18	16	24.0	16.0	85
4	21	19	39.0	36.5	51	15	23	18	33.5	31.8	48	26	20	19	27.5	19.5	64
5	29	21	24.6	22.0	145	16	19	16	38.9	34.3	82	27	23	21	20.5	15.5	155
6	20	17	26.9	23.3	80	17	18	15	52.9	51.2	66	28	22	21	23.0	14.0	105
7	21	19	26.8	23.9	93	18	18	17	42.6	40.0	86	29	21	20	32.0	22.5	54
8	21	19	25.3	21.9	75	19	19	15	47.1	44.2	111	30	22	21	31.5	28.0	123
9	22	19	32.1	28.9	92	20	19	15	28.6	26.7	193	31	24	20	24.5	15.5	50
10	21	20	37.8	35.0	68	21	23	21	31.0	27.5	161	32	25	24	28.0	17.0	
11	21	15	27.0	23.9	98	22	20	17	23.6	17.6	237						全長 29.85 m
12	19	16	33.1	30.3		23	23	20	18.5	11.5							

第12表　杭列１計測表

〔杭列　2〕

標高206.5から205.5ｍラインの平場南縁から検出された最大規模の杭列で、54個の杭跡から構成されている。杭間の距離は0.37～2.68ｍで、尾根筋の西端より延びる杭列は、尾根筋の東寄りにあるＳＤ０２付近まで延長されている。主軸尾根の南縁全体に配列された杭列で全長50.52ｍを測る。

Pit No	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm) 最深	深さ(cm) 最浅	Pit間(cm)	Pit No	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm) 最深	深さ(cm) 最浅	Pit間(cm)	Pit No	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm) 最深	深さ(cm) 最浅	Pit間(cm)
2－1	17	16	26.5	21.7	161	2－19					152	2－38					37
2	20	16	39.4	35.2	142	20	18	15	61.0	55.1	156	39	12	10	25.3	20.1	92
3	17	15	33.4	27.9	178	21	18	16	37.4	30.4	131	40	15	14	23.8	18.9	81
4	17	13	21.9	25.2	72	22	27	20	32.0	26.3	268	41	20	18	30.1	23.6	97
5	18	15	33.3	28.6	96	23	22	18	26.8	21.4	138	42	16	13	19.1	14.1	59
6	16	15	28.6	24.1	57	24	20	17	19.3	12.7	68	43	15	14	23.0	19.1	66
7	20	18	31.2	26.6	93	25	14	12	14.7	11.6	57	44	18	16	38.1	33.2	55
8	23	20	40.0	34.0	71	26	19	17	29.1	23.8	38	45	21	19	37.0	34.0	50
9	18	16	27.0	21.7	200	27	18	13	23.1	18.6	44	46	19	18	41.0	39.0	54
10	20	16	27.5	22.0	114	28	21	18	22.4	17.7	80	47	20	19	25.5	20.0	83
11	17	16	38.9	38.2	110	29	15	14	27.0	24.8	73	48	18	16	24.0	19.5	99
12	19	15	35.5	30.7	40	30	24	18	28.5	25.5	60	49	23	18	26.0	22.0	101
13	14	13	26.6	22.3	56	31	24	17	39.3	36.2	117	50	20	16	20.5	17.0	145
14	20	17	40.4	36.2	113	32	20	17	34.6	32.3	146	51	18	16	24.0	18.0	141
15	16	15	39.7	35.2	44	34	17	14	29.2	28.3	72	52	21	18	34.0	29.0	115
16	18	16	43.4	37.8	127	35	18	16	26.3	22.8	82	53	20	16	27.0	25.5	113
17	14	13	32.1	27.2	110	36	15	12	21.6	20.7	70	54	23	21	22.5	18.0	
18	16	14	46.5	42.6	85	37	22	16	34.3	31.5	43						全長 50.52 m
19	18	17	34.1	28.6		38	17	13	34.3	31.5							

第13表　杭列２計測表

〔杭列　3〕

杭列２の南下にあって標高206.0ｍラインを跨ぐ杭列で、17個の杭跡から構成されている。杭列の西端は杭列２とほぼ同じで、中途まで両者は並列の状態にある。

杭間の距離はやや疎で0.89～2.21ｍを測る。

Pit No	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm) 最深	深さ(cm) 最浅	Pit間(cm)
3－1	17	18	36.0	30.4	
					221
2	20	18	43.1	38.9	
					108
3	20	18	54.3	48.8	
					124
4	28	22	57.2	47.1	
					158
5	25	22	33.6	24.5	
					161
6	22	20	50.4	40.9	
					148
7	25	23	36.3	23.4	

Pit No	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm) 最深	深さ(cm) 最浅	Pit間(cm)
3－7					
					197
8	25	21	25.5	17.5	
					118
9	27	18	40.2	33.0	
					118
10	44	22	41.5	29.0	
					196
11	33	30	55.0	44.0	
					89
12	30	23	51.0	32.5	
					118
13	35	26	51.6	44.0	

Pit No	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm) 最深	深さ(cm) 最浅	Pit間(cm)
3－13					
					152
14	31	23	56.7	46.6	
					118
15	28	26	52.3	47.7	
					158
16	22	20	37.8	31.4	
					185
17	25	22	39.6	33.1	
全長 23.69 m					

第14表　杭列３計測表

〔２〕主軸尾根平坦部(2)

主軸尾根の東側半分にあたり、長さ37ｍ、幅８～11.5ｍの範囲から６棟分の建築址と杭列や土塁が検出された。

建築址については４棟が尾根の長軸沿いにあり、残り２棟が尾根筋に直交した。

〔ＳＤ０２〕

調査区の東側寄りから検出された小溝で、一部は後世に切られているが、全体的にＬ字形を呈し、主軸方位はＮ３°ＷとＳ80°Ｅの方位にある。長さは北縁で11ｍ、東縁で７ｍ、上場幅1.0～1.5ｍ、下場幅0.5ｍ、深さ0.28ｍを測る。断面形状は幅広のＵ字形で、北縁部については土塁②が付随する。

〔ＳＤ０３〕

土塁②の西側裾部から検出された小溝で、主軸尾根筋を南北に断切る格好となっている。規模は長さ17ｍ、上場幅0.5～1.8ｍ、下場幅0.3～0.9ｍ、深さ0.43ｍを測る。

小溝ながら掘り方は、山田城跡（大王谷箇所）にみられる大規模堀切のものとほぼ同一で、中央部をやや浅く掘り残し、南北両側を竪堀状に深く掘り窪めている。小溝の断面形状はＵ字形を呈する。

〔土塁　②〕

尾根筋の東端部から検出されたＬ字形の土塁である。地山を削り残したもので土塁の基底部と思われる。土塁の主軸方位はＮ23°ＥとＮ80°Ｅを示した。規模は前者が長さ（上場7.5ｍ、下場19.5ｍ）、幅（上場3.5ｍ、下場5.0ｍ）、高さ（79cm）で、後者が長さ（上場18.5ｍ、下場24.0ｍ）、幅（上場1.0～2.5ｍ、下場6.5ｍ）、高さ（64.5cm）を測った。現況では掻き上げ土塁の様子を呈しないが、かつてはある程度の積み土がなされていたものと思われる。

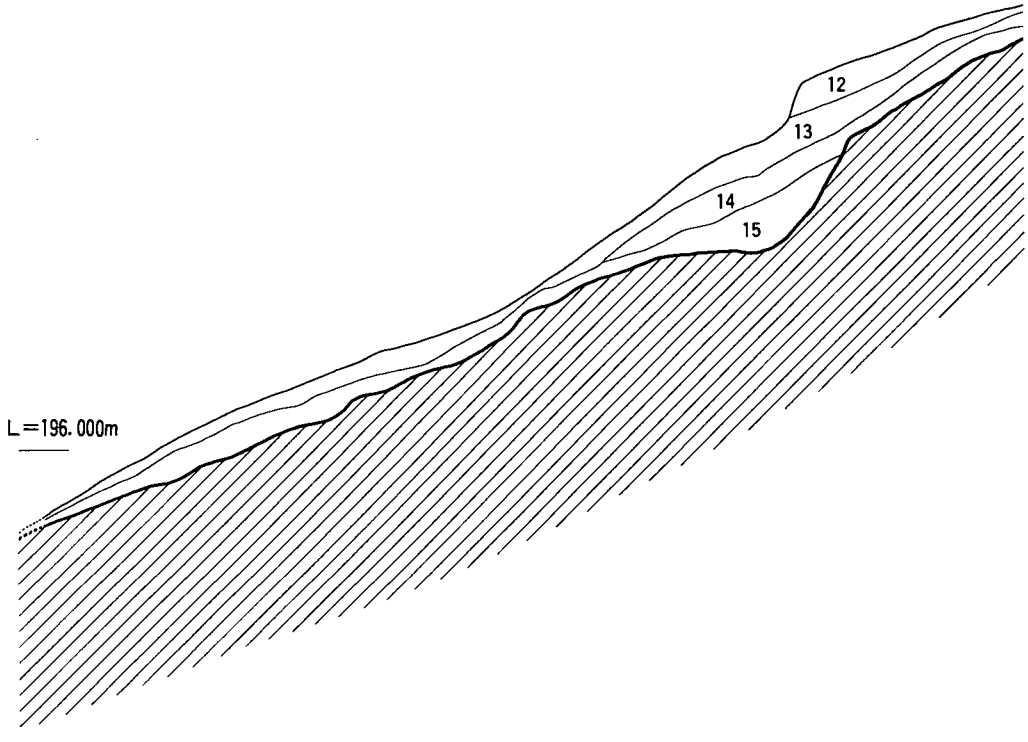
〔平場　１〕

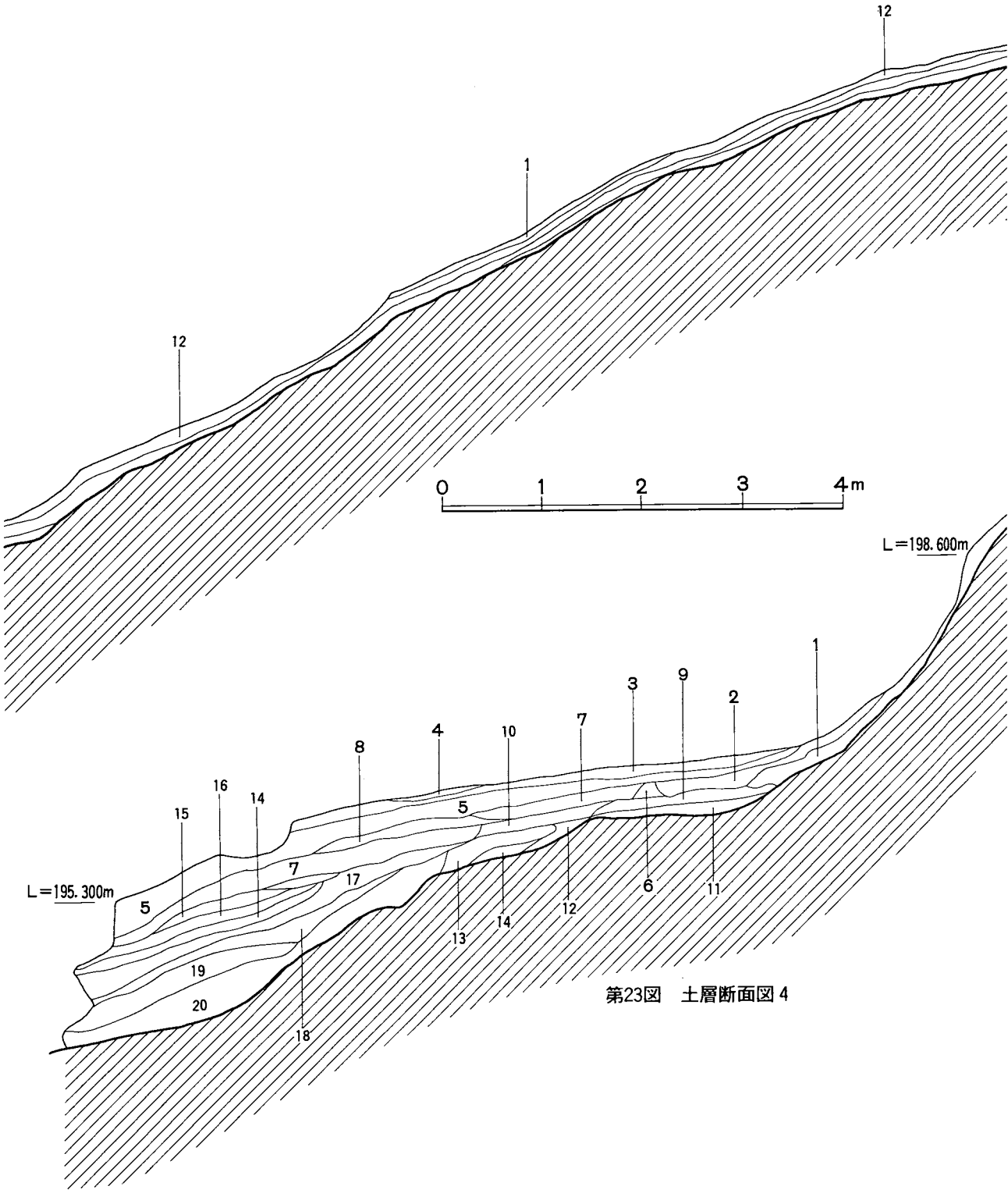
土塁②に付随する小区画で、土塁②が北縁と西縁を取り囲んでおり、長軸21.5ｍ、短軸11～15ｍを測る。長軸の方位はＳ80°Ｅで、この区画から２棟の建築址（ＳＢ１３・ＳＢ１４）が検出された。

1	表　　土	9	灰黒色土＝小礫
2	褐灰色土	10	灰褐色土＞灰黒色土
3	汚れた褐灰色土＞小礫	11	汚れた黄褐色土
4	灰褐色土≫灰黒色土（少量）	12	灰褐色土
5	灰黒色土	13	汚れた灰褐色土
6	濃灰褐色土	14	黄褐色土＞灰黒色土＋小礫
7	褐灰色土＞灰黒色土	15	灰黒色土≫黄褐色土＋小礫
8	灰褐色土＞黄褐色土		

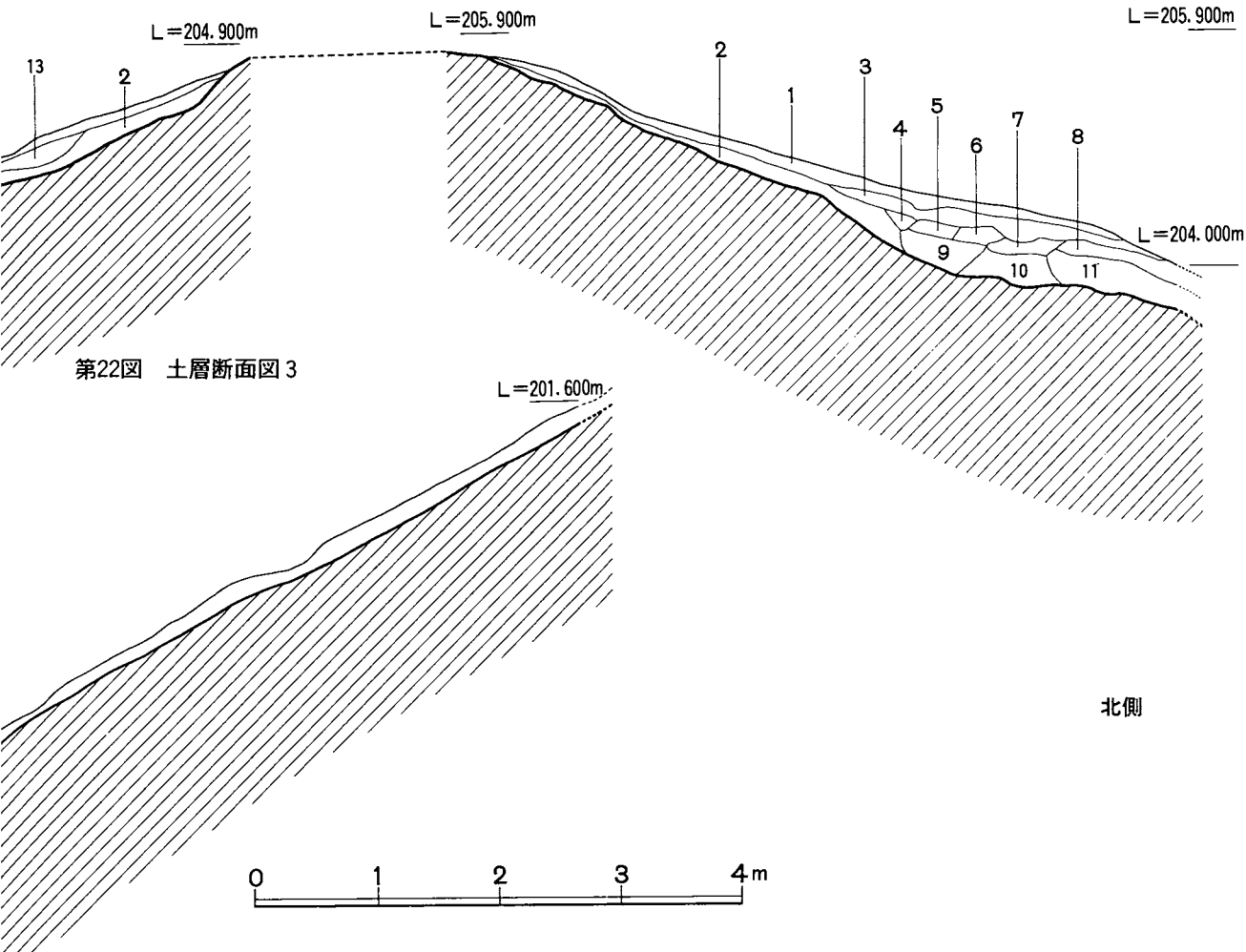
第15表　土層観察表　3

南側




12
1
12
0
1
2
3
4m
L=198.600m
1
2
9
3
7
10
4
8
5
16
14
15
7
17
L=195.300m
5
6
11
12
14
13
19
20
18

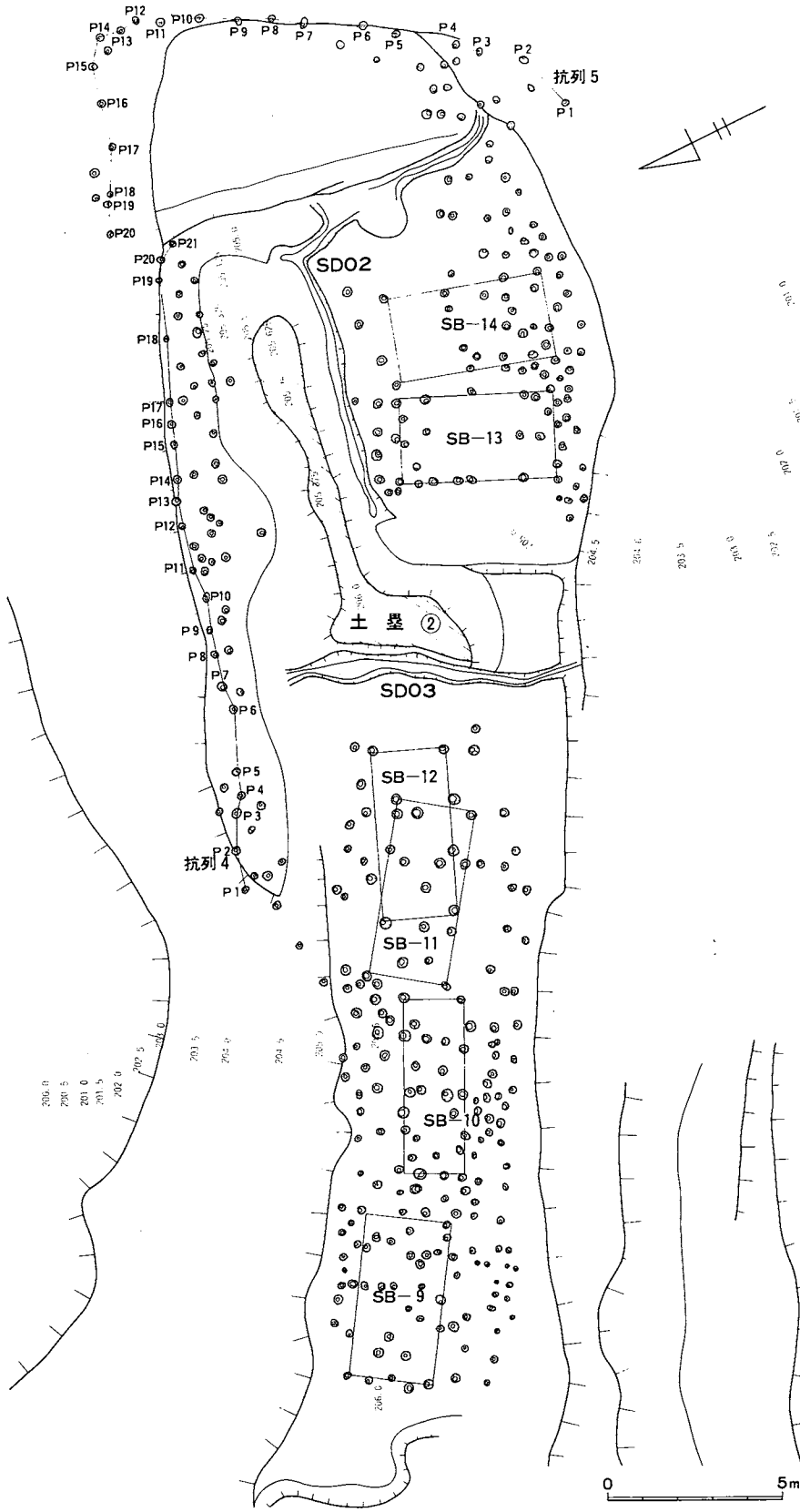
第23図　土層断面図 4



第22図　土層断面図３

1	レンガ色地山土（二次堆積）≫灰褐色土	11	レンガ色地山土（二次堆積）＞汚れた灰褐色土
2	汚れた褐灰色土	12	レンガ色地山土
3	レンガ色地山土（二次堆積）＝灰褐色土	13	褐色土＝レンガ色地山土（二次堆積）
4	表　　土	14	レンガ色地山土（二次堆積）＞褐灰色土
5	灰褐色土＞レンガ色地山土（二次堆積）	15	レンガ色地山土（二次堆積）＞灰白褐色土（少量）
6	黄褐色土（ブロック）	16	汚れた褐灰色土＞レンガ色地山土（二次堆積）
7	レンガ色地山土（二次堆積）	17	汚れた褐灰色土
8	褐色土≫レンガ色地山土（二次堆積）	18	褐灰色土＞灰黒色土（斑点状に混入）
9	非常に汚れた灰褐色土≫レンガ色地山土（二次堆積）	19	灰黒色土＞褐色土
10	褐　色　土	20	乳褐色土＞小礫

第16表　土層観察表　4



第24図　主軸尾根平坦部(2) 実測図

〔ＳＢ０９〕

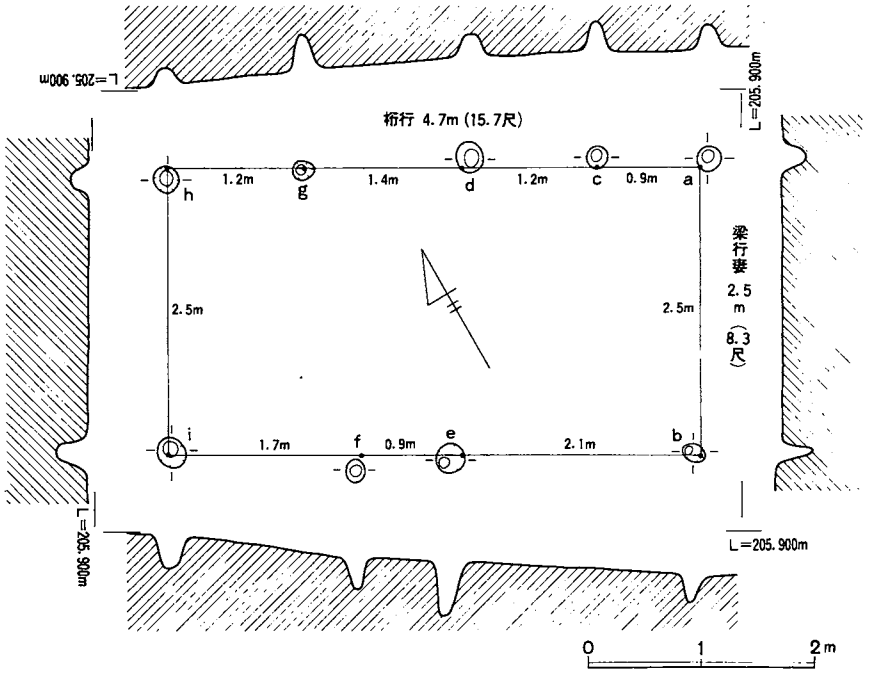
桁行4.7ｍ（15.7尺）、梁行妻2.5ｍ（8.3尺）の４間×２間の建物で、桁行方位はＮ53°Ｗである。桁行寸法は、桁行Ｐａ～Ｐｃ～Ｐｄ～Ｐｇ～Ｐｈで0.9ｍ（３尺）＋1.2ｍ（４尺）＋1.4ｍ（4.7尺）＋1.2ｍ（４尺）であるが、Ｐｂ～Ｐｅ～Ｐｆ～Ｐｉの場合Ｐｂ～Ｐｅの補助柱が不明で、2.1ｍ（７尺）＋0.9ｍ（３尺）＋1.7ｍ（5.7尺）となる。梁行妻Ｐａ～Ｐｂで2.5ｍ（8.3尺）、Ｐｈ～Ｐｉで2.5ｍ（8.3尺）を測る。

柱穴の大きさはＰｉで最大（29×24cm）、Ｐｃが最小（19×18cm）で平均値は23.2×20.4cmとなる。深さはＰｅが最深（48cm）、Ｐｈが最浅（17cm）で平均値は27.3cmである。柱列は梁行妻Ｐｈ～Ｐｉを除いて千鳥の並びとなる。

梁行妻の東側と西側を比べた場合、柱穴の検出面は北側Ｐａ～Ｐｈで34.3cm、南側Ｐｂ～Ｐｉで35.4cm、西側の方が高い。一方、桁行の場合、北側と南側の高さはほぼ水平である。

Pit No	桁行柱間 (m)	桁行間(m)	Pit No	梁間柱間 (m)	梁間間(m)	Pit No	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
a～c	0.9	4.7	a～b	2.5	2.5	a	22	22	21
c～d	1.2					b	21	14	31
d～g	1.4					c	19	18	25
g～h	1.2					d	28	24	20
						e	26	25	48
b～e	2.1	4.7	h～i	2.5	2.5	f	21	18	26
e～f	0.9					g	20	17	32
f～i	1.7					h	23	22	17
						i	29	24	26

第17表　ＳＢ０９計測表



第25図　ＳＢ０９実測図

〔ＳＢ１０〕

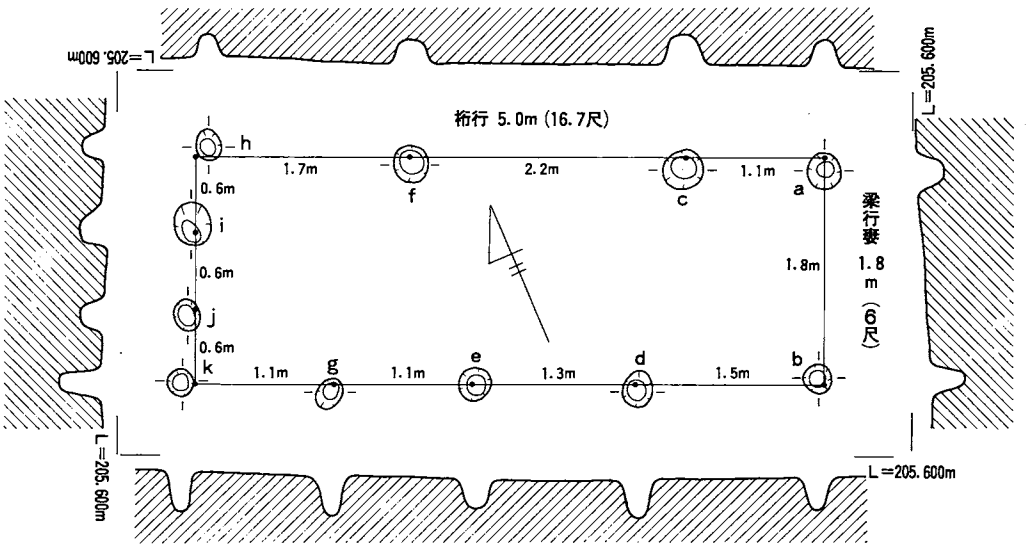
桁行5.0ｍ（16.7尺）、梁行妻1.8ｍ（６尺）の４間×３間の建物で、桁行方位はＮ62°Ｗである。柱間寸法は、桁行Ｐａ～Ｐｃ～Ｐｆ～Ｐｈで1.1ｍ(3.7尺)＋2.2ｍ(7.3尺)＋1.7ｍ(5.7尺)であるが、Ｐｂ～Ｐｋの場合は中央柱Ｐｅに対してＰｄとＰｇの補助柱が付き、Ｐｂ～Ｐｄ～Ｐｅ～Ｐｇ～Ｐｋで1.5ｍ（５尺）＋1.3ｍ(4.3尺)＋1.1ｍ(3.7尺)＋1.1ｍ(3.7尺)を測る。梁行妻Ｐａ～Ｐｂで1.8ｍ（６尺）、Ｐｈ～Ｐｉ～Ｐｊ～Ｐｋで0.6ｍ(2尺)＋0.6ｍ（２尺）＋0.6ｍ(２尺)を測る。

柱穴の大きさはＰｉが最大で（35×29㎝）、Ｐｋが最小（22×21㎝）で平均値は27.2×24.1㎝となる。深さはＰｋが最深（33㎝）、ＰｈとＰｊが最浅（17㎝）で平均値は23.6㎝である。柱列はすべて千鳥の並びとなる。

桁行の北側と南側の高さを比べた場合、柱穴の検出面は東側Ｐａ～Ｐｂで14.5㎝、北側が高いが、西側Ｐｈ～Ｐｋではほぼ水平である。さらに梁行妻の東側と西側の高さを比べた場合、北側Ｐａ～Ｐｈと南側Ｐｂ～Ｐｋでほとんど差異がなく、10㎝未満の比高差に留まっている。

Pit No	桁行柱間 (m)	桁行間(m)	Pit No	梁間柱間 (m)	梁間間(m)	Pit No	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
a～c	1.1	5.0	a～b	1.8	1.8	a	29	26	20
c～f	2.2					b	23	22	26
f～h	1.7					c	32	30	22
						d	28	23	30
b～d	1.5	5.0	h～i	0.6	1.8	e	27	25	24
d～e	1.3		i～j	0.6		f	29	29	18
e～g	1.1		j～k	0.6		g	24	20	31
g～k	1.1					h	24	20	17
						i	35	29	22
						j	26	20	17
						k	22	21	33

第18表　ＳＢ１０計測表



第26図　ＳＢ１０実測図　0　1　2m

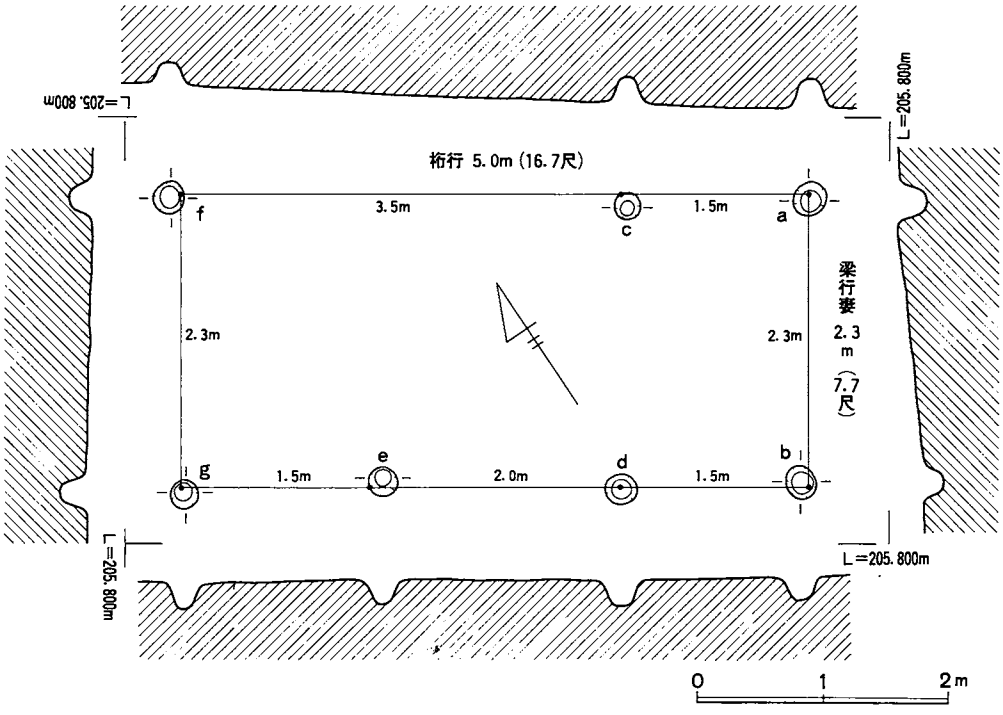
〔ＳＢ１１〕

桁行5.0ｍ（16.7尺）、梁行妻2.3ｍ（7.7尺）の３間×１間の建物で、桁行方位はＮ66°Ｗである。柱間寸法は、桁行Ｐｂ～Ｐｄ～Ｐｅ～Ｐｇで1.5ｍ（５尺）＋２ｍ（6.7尺）＋1.5ｍ（５尺）であるが、Ｐａ～Ｐｃ～Ｐｆは Ｐｃ～Ｐｆの補助柱が不明で1.5ｍ（５尺）＋3.5ｍ（11.7尺）となる。梁行妻Ｐａ～Ｐｂで2.3ｍ（7.7尺）、Ｐｆ～Ｐｇで2.3ｍ（7.7尺）を測る。柱穴の大きさはＰａで最大（27×25cm）、Ｐｃが最小（22×20cm）で平均値は25×23cmとなる。深さはＰａが最深（22cm）、Ｐｂが最浅（15cm）で平均値は19cmである。柱列はすべて千鳥の並びとなる。

梁行妻の東側と西側の高さを比べた場合、柱穴の検出面は北側Ｐａ～Ｐｆで18.6cm、東側の方が高い。さらに桁行の北側と南側の高さを比べた場合、柱穴の検出面は東側Ｐａ～Ｐｂで21cm、北側の方が高い。

Pit No	桁行柱間 (m)	桁行間(m)	Pit No	梁間柱間 (m)	梁間間(m)	Pit No	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
a～c	1.5	5.0	a～b	2.3	2.3	a	27	25	22
c～f	3.5					b	27	23	15
						c	22	20	21
						d	27	23	19
b～d	1.5	5.0	f～g	2.3	2.3	e	24	24	19
d～e	2.0					f	25	23	17
e～g	1.5					g	23	23	20

第19表　ＳＢ１１計測表



第27図　ＳＢ１１実測図

〔ＳＢ１２〕

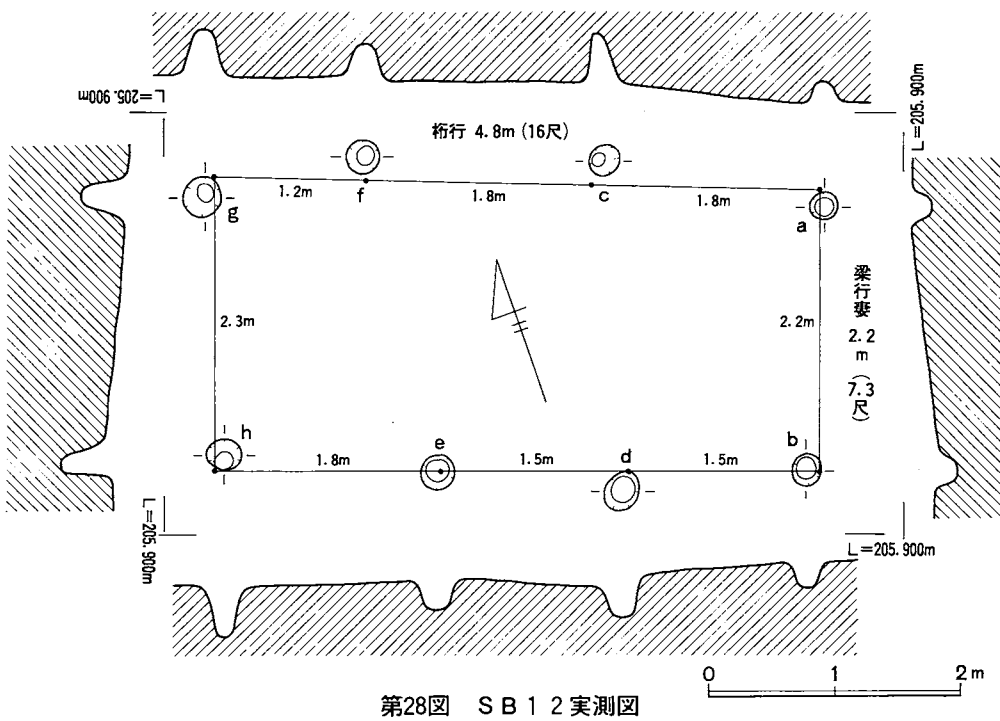
桁行4.8m（16尺）、梁行妻2.2m（7.3尺）と2.3m（7.7尺）の、３間×１間のやや歪な建物で、桁行方位はN73°Wである。柱間寸法は、Ｐａ～Ｐｃ～Ｐｆ～Ｐｇで1.8m（６尺）＋1.8m（６尺）＋1.2m（４尺）、Ｐｂ～Ｐｄ～Ｐｅ～Ｐｈで1.5m（５尺）＋1.5m（5尺）＋1.8m（６尺）、梁行妻Ｐａ～Ｐｂで2.2m（7.3尺）、Ｐｇ～Ｐｈで2.3m（7.7尺）を測る。

柱穴の大きさはＰｇで最大（32×29cm）、Ｐａが最小（23×20cm）で平均値は28×24.6cmとなる。深さはＰｈが最深（40cm）、Ｐａが最浅（17cm）で平均値は28.8cmである。柱列はすべて千鳥の並びとなる。

梁行妻の東側と西側を比べた場合、柱穴の検出面は北側Ｐａ～Ｐｇで20cm、南側Ｐｂ～Ｐｈで19cm、東側の方が高い。さらに桁行の北側と南側の高さを比べた場合、柱穴の検出面は東側Ｐａ～Ｐｂで16cm、西側Ｐｇ～Ｐｈで11.5cm、北側の方が高い。

Pit No	桁行柱間(m)	桁行間(m)	Pit No	梁間柱間 (m)	梁間間(m)	Pit No	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
a～c	1.8	4.8	a～b	2.2	2.2	a	23	20	17
c～f	1.8					b	25	24	19
f～g	1.2					c	25	23	37
						d	32	27	31
b～d	1.5	4.8	g～h	2.3	2.3	e	30	26	23
d～e	1.5					f	27	25	27
e～h	1.8					g	32	29	36
						h	30	23	40

第20表　ＳＢ１２計測表



第28図　ＳＢ１２実測図

〔ＳＢ１３〕

桁行4.5ｍ（15尺）、梁行妻2.5ｍ（8.3尺）の４間×２間の建物で、桁行方位はＮ22°Ｅである。柱間寸法は、桁行Ｐａ～Ｐｄ～Ｐｆ～Ｐｈ～Ｐｊで0.9ｍ（３尺）＋1.5ｍ（５尺）＋1.2ｍ（４尺）＋0.9ｍ（３尺）、Ｐｃ～Ｐｅ～Ｐｇ～Ｐｉ～Ｐｌで0.9ｍ（３尺）＋1.5ｍ（５尺）＋1.2ｍ（４尺）＋0.9ｍ（３尺）、梁行妻Ｐａ～Ｐｂ～Ｐｃで1.0ｍ（3.3尺）＋1.5ｍ（５尺）、Ｐｊ～Ｐｋ～Ｐｌで1.2ｍ（４尺）＋1.3ｍ（4.3尺）を測る。

柱穴の大きさはＰｈが最大（27×23cm）、Ｐｂが最小（18×17cm）で平均値は22.8×20.2cmとなる。深さはＰａが最深（45cm）、ＰｅとＰｉが最浅（16cm）で平均値は28.0cmである。柱列は梁行妻Ｐｊ～Ｐｌを除いて千鳥の並びとなる。

桁行の東側と西側の高さを比べた場合、柱穴の検出面は南側Ｐａ～Ｐｃと北側Ｐｊ～Ｐｌでほとんど差異がなく、10cm未満の比高差に留まっている。さらに梁行妻の北側と南側では、東側Ｐａ～Ｐｊで33.7cm、西側Ｐｃ～Ｐｌで44.3cm、北側の方が高い。

〔ＳＢ１４〕

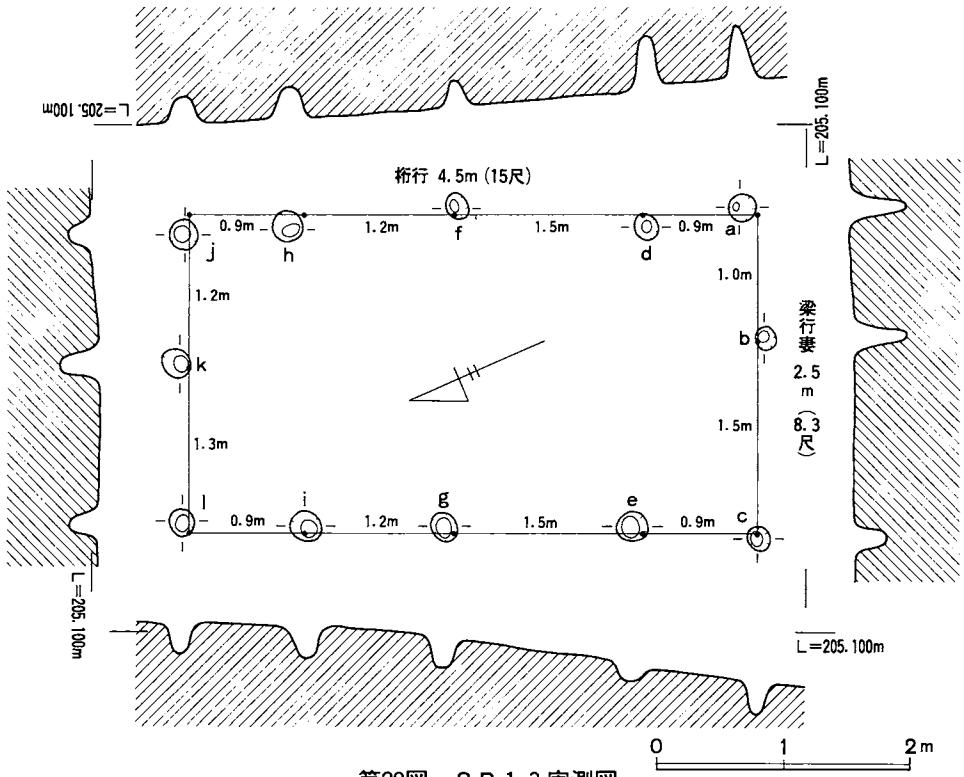
桁行4.5ｍ（15尺）、梁行妻2.4ｍ（８尺）の３間×２間の建物で、桁行方位はＮ22°Ｗである。柱間寸法は、桁行Ｐａ～Ｐｄ～Ｐｇ～Ｐｈで0.9ｍ（３尺）＋1.8ｍ（６尺）＋1.8ｍ（６尺）、Ｐｃ～Ｐｅ～Ｐｆ～Ｐｉで1.4ｍ（4.7尺）＋1.0ｍ（3.3尺）＋2.1ｍ（７尺）、梁行妻Ｐａ～Ｐｂ～Ｐｃが1.5ｍ（５尺）＋0.9ｍ（３尺）であるが、Ｐｈ～Ｐｉは中央柱が不明で、全長2.4ｍ（８尺）を測る。

柱穴の大きさはＰｈが最大（31×28cm）、Ｐｆが最小（19×19cm）で平均値は23.0×21.0cmとなる。深さはＰｃが最深（55cm）、ＰｅとＰｊが最浅（16cm）で平均値は39.6cmである。柱列は梁行妻Ｐｈ～Ｐｉを除いて千鳥の並びとなる。

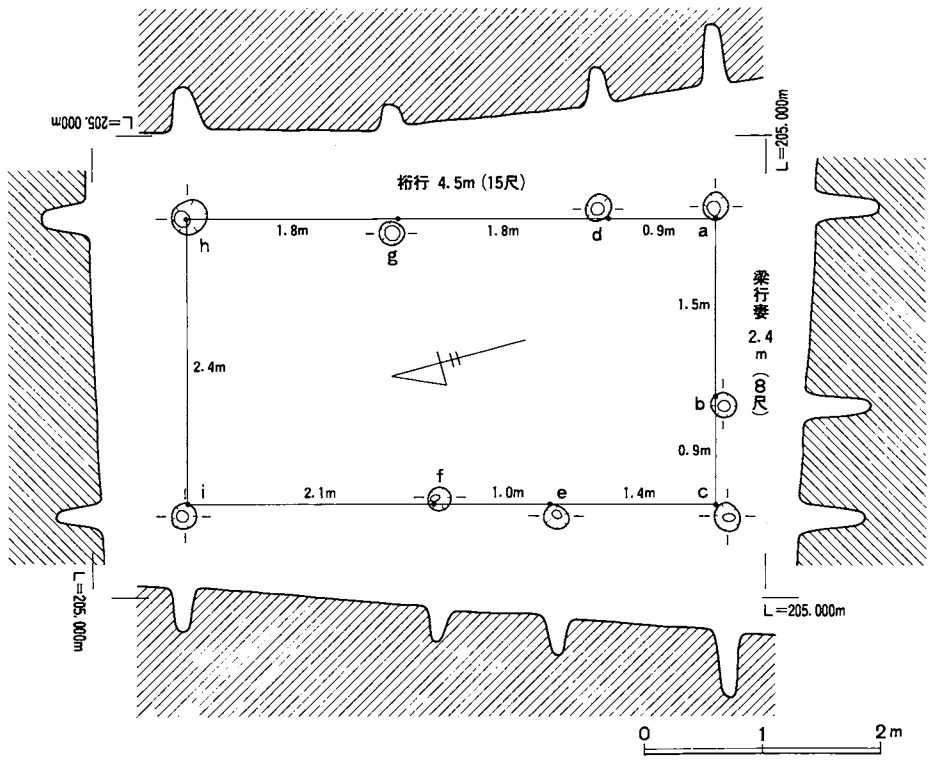
桁行の東側と西側の高さを比べた場合、柱穴の検出面は南側Ｐａ～Ｐｃと北側Ｐｈ～Ｐｉでそれぞれ18cm、西側の方が高い。さらに梁行妻の北側と南側では、東側Ｐａ～Ｐｈで41.8cm、西側Ｐｃ～Ｐｉで38cm、北側の方が高い。

Pit No	桁行柱間 (m)	桁行間(m)	Pit No	梁間柱間 (m)	梁間間(m)	Pit No	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
a～d	0.9	4.5	a～b	1.0	2.5	a	21	20	45
d～f	1.5		b～c	1.5		b	18	17	40
f～h	1.2					c	20	17	33
h～j	0.9					d	22	19	43
						e	26	22	16
c～e	0.9	4.5	j～k	1.2	2.5	f	22	18	21
e～g	1.5		k～l	1.3		g	25	20	23
g～i	1.2					h	27	23	24
i～l	0.9					i	26	22	23
						j	23	23	16
						k	24	22	30
						l	20	19	22

第21表　ＳＢ１３計測表



第29図　ＳＢ１３実測図



第30図　ＳＢ１４実測図

Pit No	桁行柱間 (m)	桁行間(m)	Pit No	梁間柱間 (m)	梁間間(m)	Pit No	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
a～d	0.9	4.5	a～b	1.5	2.4	a	23	22	52
d～g	1.8		b～c	0.9		b	22	20	54
g～h	1.8					c	24	20	55
						d	23	21	33
c～e	1.4	4.5	h～i	2.4	2.4	e	22	18	34
e～f	1.0					f	19	19	31
f～i	2.1					g	21	20	21
						h	31	28	39
						i	22	21	37

第22表　ＳＢ１４計測表

〔杭列　4〕

土塁②の北下にあって、標高205.0ｍラインに沿って並ぶ杭列である。21個の杭跡から構成されており、杭間の距離は0.54～1.85ｍで全長18.16ｍを測る。並びは杭列５と同様に非常に整然としている。

Pit No	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm) 最深	深さ(cm) 最浅	Pit間(cm)	Pit No	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm) 最深	深さ(cm) 最浅	Pit間(cm)	Pit No	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm) 最深	深さ(cm) 最浅	Pit間(cm)
4－1	18	16	25.5	15.5	115	4－8					71	4－15					59
2	20	17	30.0	21.0	105	9	18	17	23.5	20.0	92	16	21	20	32.5	26.0	63
3	26	18	38.0	31.5	54	10	23	18	31.0	27.0	86	17	21	19	28.0	24.2	185
4	20	18	21.0	18.5	71	11	22	19	20.5	14.5	129	18	17	15	23.0	18.5	167
5	23	19	29.5	24.7	92	12	19	18	25.0	19.5	81	19	15	12	18.5	14.0	63
6	20	19	30.5	24.0	70	13	22	18	26.0	22.5	61	20	17	17	19.0	14.0	56
7	22	22	30.5	25.5	94	14	20	18	23.0	22.0	102	21	18	15	21.0	14.5	
8	18	17	26.5	24.0		15	21	17	33.0	27.5						全長	18.16 m

第23表　杭列４計測表

〔杭列　5〕

主軸尾根筋の東端部寄りに並ぶ杭列で、20個の杭跡から構成されている。標高204.0ｍから203.5ｍラインを跨いでおり、全体の配列は逆Ｌ字形を呈する。

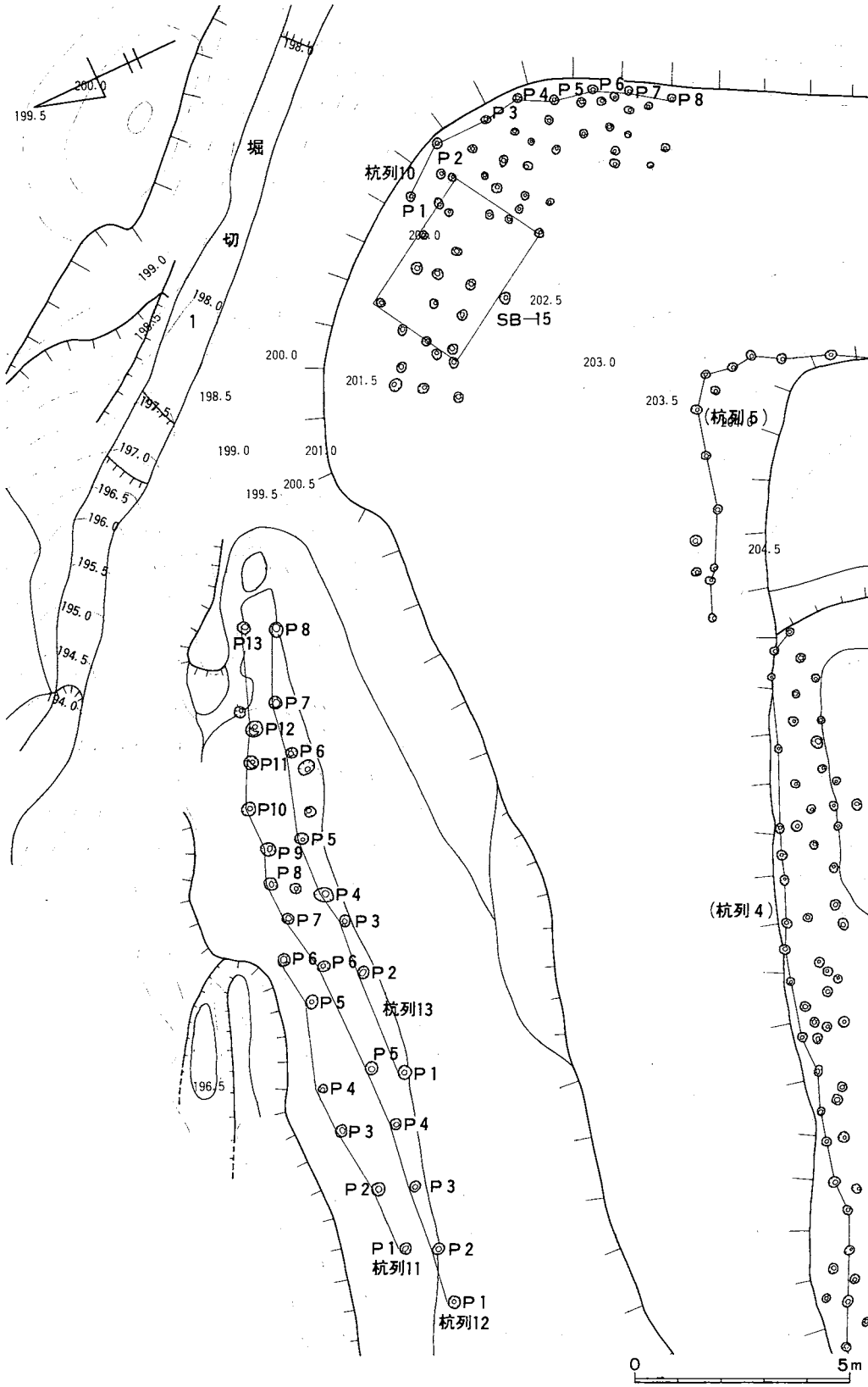
杭間の距離は0.28～1.76ｍで、ややばらつきがあるが、並びは整然としたものがある。従来は杭列４と同列の可能性も考えられる。

Pit No	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm) 最深	深さ(cm) 最浅	Pit間(cm)	Pit No	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm) 最深	深さ(cm) 最浅	Pit間(cm)	Pit No	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm) 最深	深さ(cm) 最浅	Pit間(cm)
5－1	18	18	27.0	14.5	171	5－8					109	5－15					110
2	21	18	18.0	6.0	128	9	20	15	18.5	12.5	105	16	21	19	24.5	22.5	125
3	20	18	20.0	15.5	72	10	24	20	23.2	15.2	109	17	22	19	27.0	18.5	137
4	23	19	46.0	39.0	176	11	22	18	31.0	19.5	82	18	16	14	26.0	20.5	28
5	22	19	24.0	17.0	101	12	22	18	30.8	21.0	53	19	20	15	29.0	23.0	89
6	25	20	40.0	32.5	173	13	19	16	28.0	20.5	65	20	21	15	29.0	20.5	
7	30	15	28.5	18.5	93	14	21	20	27.0	19.0	83					全長	20.09 m
8	21	15	30.5	20.5		15	22	18	30.0	24.5							

第24表　杭列５計測表

第３節　主軸尾根北側斜面

主軸尾根の北東斜面からＳＢ１５と杭列６が検出された。検出箇所は標高202.5ｍから201.0ｍラインで、特に北東斜面部はこの箇所に限り、平場の状態に近い緩傾斜地となっている。



第31図　主軸尾根北側斜面部実測図

〔ＳＢ１５〕

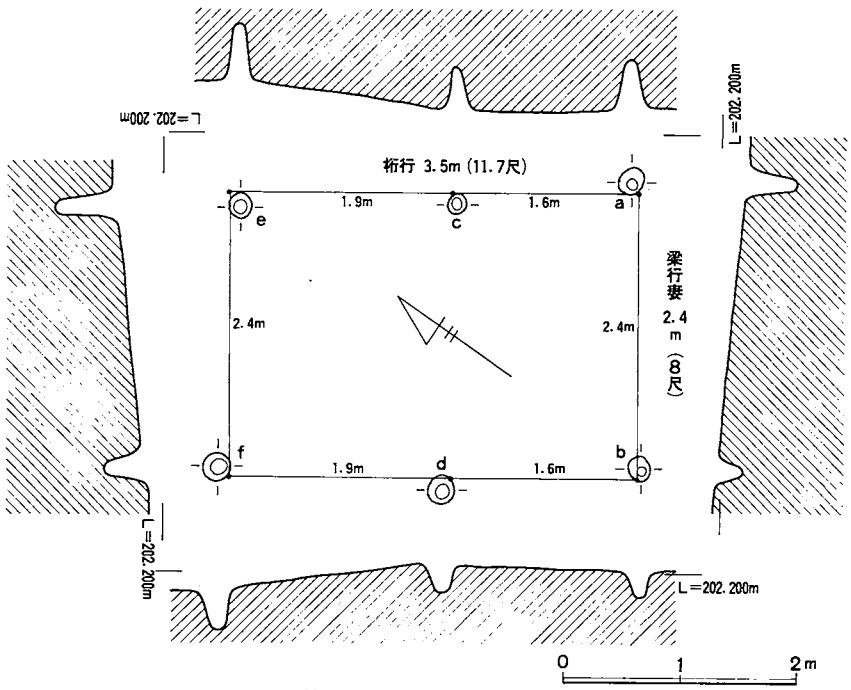
桁行3.5ｍ（11.7尺）、梁行妻2.4ｍ（８尺）の２間×１間の建物で、桁行方位はＮ33°Ｗである。柱間寸法は、桁行Ｐａ～Ｐｃ～Ｐｅで1.6ｍ（5.3尺）＋1.9ｍ（6.3尺）、Ｐｂ～Ｐｄ～Ｐｆで1.6ｍ（5.3尺）＋1.9ｍ（6.3尺）、梁行妻Ｐａ～Ｐｂで2.4ｍ（８尺）、Ｐｅ～Ｐｆで2.4ｍ（８尺）を測る。

柱穴の大きさはＰｆで最大（24×23cm）、Ｐｃが最小（18×16cm）で平均値は22.2×19.8cmとなる。深さはＰｅが最深（52cm）、Ｐｂが最浅（23cm）で平均値は36.2cmである。柱列はすべて千鳥の並びとなる。

梁行妻の東側と西側の高さを比べた場合、北側Ｐａ～Ｐｃ～Ｐｅで20.5cm、東側の方が高い。Ｐｂ～Ｐｄ～Ｐｆについては、中央柱のＰｄが両端の柱穴よりも高い位置で切り込まれており、Ｐｂと17.5cm、Ｐｆと25.8cmの比高差を測る。さらに桁行の北側と南側では、東側Ｐａ～Ｐｂで27.5cm、西側Ｐｅ～Ｐｆで33cm、南側の方が高い。

Pit No	桁行柱間 (m)	桁行間(m)	Pit No	梁間柱間 (m)	梁間間(m)	Pit No	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
a～c	1.6	3.5	a～b	2.4	2.4	a	24	21	44
c～e	1.9					b	21	18	23
						c	18	16	36
						d	24	22	26
b～d	1.6	3.5	e～f	2.4	2.4	e	22	19	52
d～f	1.9					f	24	23	36

第25表　ＳＢ１５計測表



第32図　ＳＢ１５実測図

〔杭列　6〕

標高201.5mから201.0mラインを跨ぐ杭列である。8個の杭跡で構成されており、杭間の距離は0.83～1.36mで全長7.18mを測る。並びは斜面部の東側に対して凸の状態となる。杭列の東縁下は、いずれも削り落しの手が加わって急な斜面となっている。ＳＢ１５と対になった杭列である。

また、主軸尾根の北下を巡る帯曲輪から3条の杭列が検出された。杭列の番号は下部から上部へ順次7～9とした。

検出箇所は標高198.5mから197.0mラインに造成された帯曲輪で、長軸の向きは主軸尾根と同一の方位にある。長径10m、短径1.5～2.0mの規模で、東端部は堀切1に接している。

〔杭列　7〕

6個の杭跡から構成されている。杭間の距離は1.04～2.14mで全長7.47mを測る。並びは直線状を呈するが東端でやや蛇行する。

〔杭列　8〕

13個の杭跡から構成されており、杭間の距離は0.81～2.73mで全長16.79mを測る。並びは西側より東側へ7m分が直線状を呈するが、残り部分についてはやや蛇行し、多少ジグザグの状態となる。

〔杭列　9〕

帯曲輪の山付き側を走行する杭列である。8個の杭列から構成されており、杭間の距離は、0.78～2.6mで全長11.01mを測る。並びは全体的に蛇行の度合が大きく、ジグザグの状態となる。

Pit No	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm) 最深	深さ(cm) 最浅	Pit間
6－1	20	18	31.5	27.0	
					136
2	23	18	39.0	30.0	
					129
3	20	15	47.0	43.5	
					90
4	20	18	44.5	37.5	
					86
5	22	20	46.5	42.5	
					94
6	21	19	36.7	30.2	
					83
7	17	15	28.0	21.0	
					100
8	18	17	39.0	25.0	
				全長	7.18 m

第26表　杭列6計測表

Pit No	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm) 最深	深さ(cm) 最浅	Pit間(cm)
7－1	27	23	23.1	13.6	
					150
2	31	27	27.6	14.5	
					161
3	27	26	39.5	28.8	
					104
4	23	19	21.5	11.5	
					214
5	26	23	28.5	17.4	
					118
6	31	29	43.0	29.5	
				全長	7.47 m

Pit No	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm) 最深	深さ(cm) 最浅	Pit間(cm)
8－1	29	25	34.5	22.8	
					124
2	24	25	22.7	13.1	
					154
3	25	21	20.6	13.7	
					150
4	26	23	22.1	17.6	
					141
5	29	25	23.2	18.3	
					273
6	28	24	32.4	29.0	
					138
7	26	22	21.7	20.3	
					86
8	31	28	22.0	15.5	
					86
9	31	30	53.5	44.1	
					103
10	30	30	38.6	34.5	
					107
11	32	30	40.0	37.0	
					81
12	40	36	27.5	22.5	
					236
13	29	28	21.0	18.0	
				全長	16.79 m

Pit No	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm) 最深	深さ(cm) 最浅	Pit間(cm)
9－1	28	26	18.9	14.9	
					260
2	28	25	23.7	17.5	
					128
3	25	22	18.7	10.4	
					78
4	41	37	38.9	32.9	
					139
5	28	25	31.2	25.7	
					197
6	26	24	19.0	16.0	
					122
7	30	26	21.0	17.0	
					177
8	33	29	18.5	15.5	
				全長	11.01 m

第27表　杭列7～9計測表

第4節　主軸尾根南側斜面

〔1〕主軸尾根の南東下帯曲輪

主軸尾根の南東下を巡る帯曲輪から2棟の建築址と2条の杭列が検出された。検出箇所は標高196.5m～195.5mラインの削平地で、主軸尾根平坦部の南縁とは8mの比高がある。長軸の向きは主軸尾根と同様に東西方向にあり、長径36m、短径3.5～6mを測り、東側寄りの長さ

8ｍ分に限っては周辺地と比べて0.5ｍ程の微高地となっている。

〔杭列　10・11〕

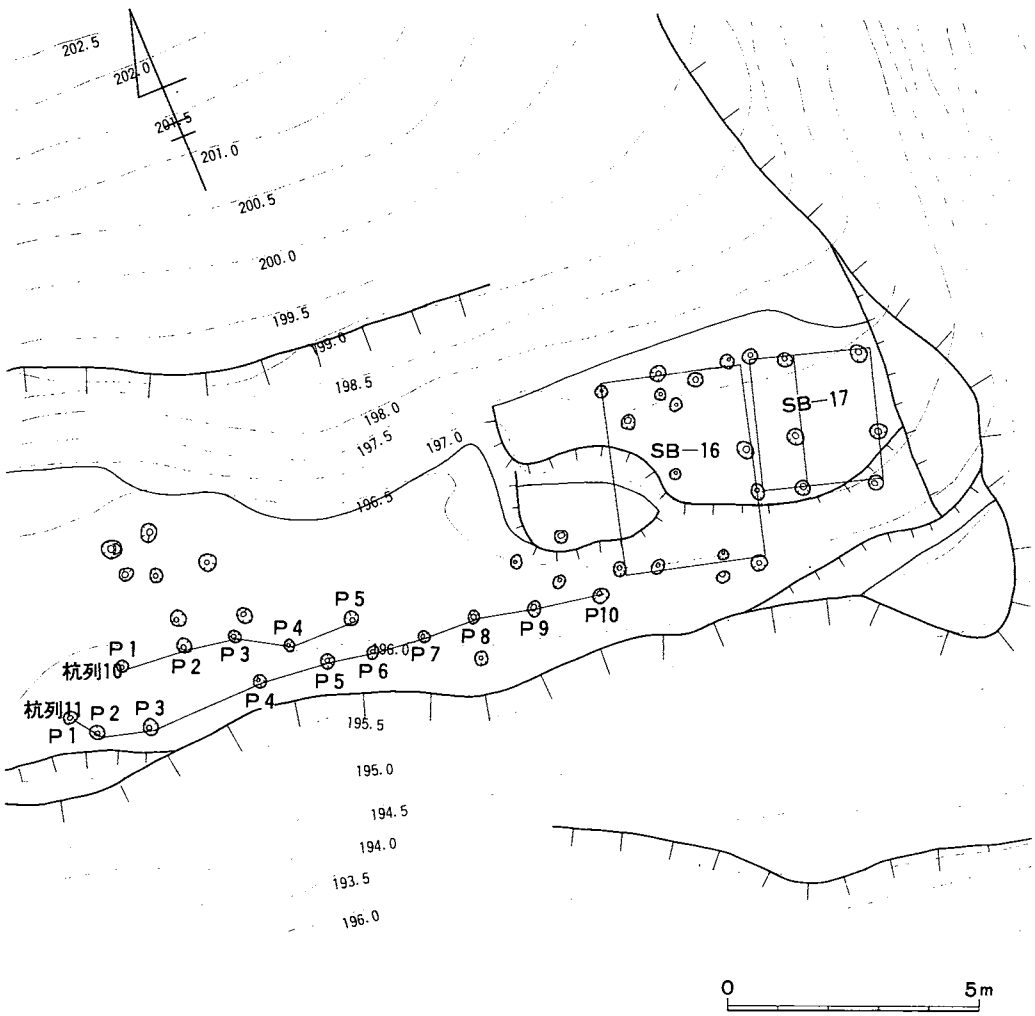
帯曲輪の南縁から東西に延びる２重の杭列が検出された。

杭列10は、５個の杭跡から構成されており、杭間の距離は1.01～1.80ｍで全長5.25ｍを測る。蛇行の度合が大きく並びはジグザグとなる。

杭列11は、10個の杭跡から構成されており、杭間の距離は0.59～2.36ｍで全長11.02ｍを測る。西端部を除いて整然とした直線状の並びとなる。

Pit No	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm) 最深	深さ (cm) 最浅	Pit間 (cm)
10－1	25	21	47.0	45.5	
					180
2	31	29	35.5	30.0	
					101
3	24	23	37.0	33.5	
					109
4	24	20	45.0	39.0	
					135
5	27	24	34.0	29.0	
					全長　5.25 m
11－1	29	22	35.0	30.0	
					59
2	24	21	37.0	33.5	
					103
3	32	28	29.5	24.5	
					236
4	25	23	44.0	36.0	
					142
5	28	23	49.0	38.5	
					92
6	26	22	29.0	21.0	
					102
7	25	21	41.5	32.0	
					110
8	24	22	37.5	28.5	
					123
9	28	23	31.5	26.0	
					135
10	30	26	65.5	50.0	
					全長　11.02 m

第28表　杭列10・11計測表



第33図　南東下帯曲輪実測図

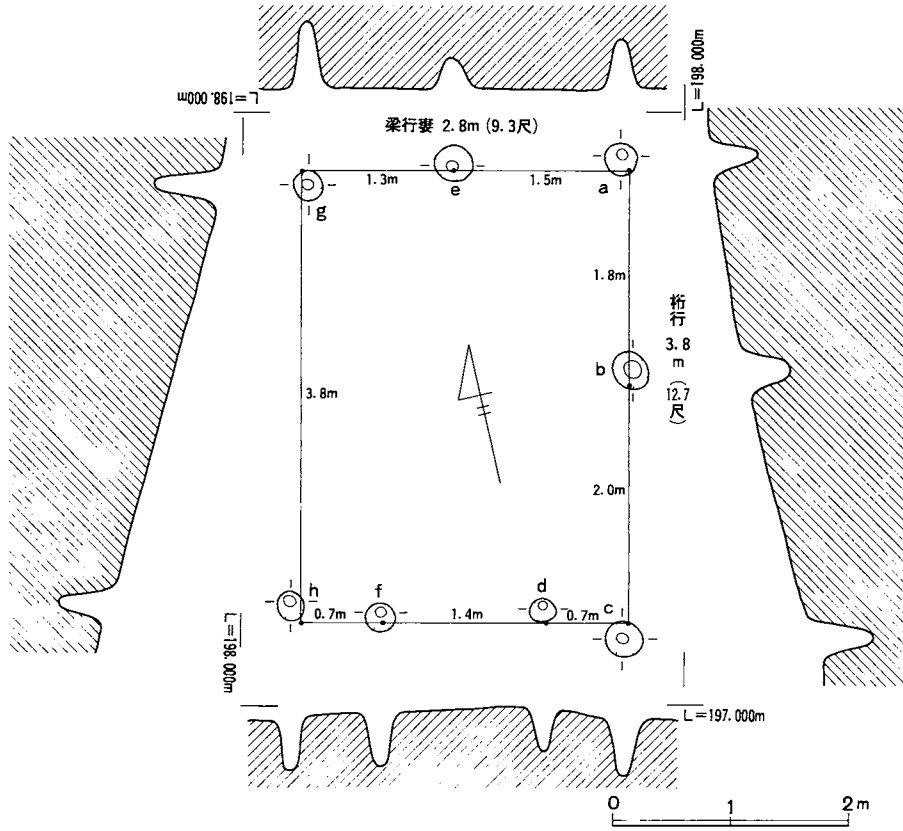
〔ＳＢ１６〕

桁行3.8m（12.7尺）、梁行妻2.8m（9.3尺）の２間×３間の建物で、桁行方位Ｎ65°Ｗである。柱間寸法は、桁行Ｐａ～Ｐｂ～Ｐｃで1.8m（６尺）＋2.0m（6.7尺）であるが、Ｐｇ～Ｐｈは中央柱が不明で全長3.8m（12.7尺）を測る。梁行妻は、Ｐａ～Ｐｅ～Ｐｇで1.5m（５尺）＋1.3m（4.3尺）を測るが、Ｐｃ～Ｐｈでは中央柱に該当するものがなくＰｄとＰｆの補助柱が付いて、Ｐｃ～Ｐｄ～Ｐｆ～Ｐｈが0.7m（2.3尺）＋1.4m（4.7尺）＋0.7m（2.3尺）となる。

柱穴の大きさはＰｅが最大（33×31cm）、Ｐｄが最小（22×19cm）で、平均値は28.3×25.8cmとなる。深さはＰｇが最深（54cm）、Ｐｅが最浅（25cm）で平均値は41.9cmである。柱列はすべて千鳥の並びとなる。

梁行妻の北側と南側の高さを比べた場合、柱穴の検出面は東側Ｐａ～Ｐｂ～Ｐｃで100cm、西側Ｐｇ～Ｐｈで112cm、北側の方が高い。

一方、桁行の場合は、北側Ｐａ～Ｐｅ～Ｐｇがほぼ水平で、南側Ｐｃ～Ｐｄ～Ｐｆ～Ｐｈについては東側寄りのＰｄが周辺の柱穴よりも、やや高い所で切り込まれており、Ｐｃとは10cm、Ｐｈとは８cmの比高差がある。



第34図　ＳＢ１６実測図

〔ＳＢ１７〕

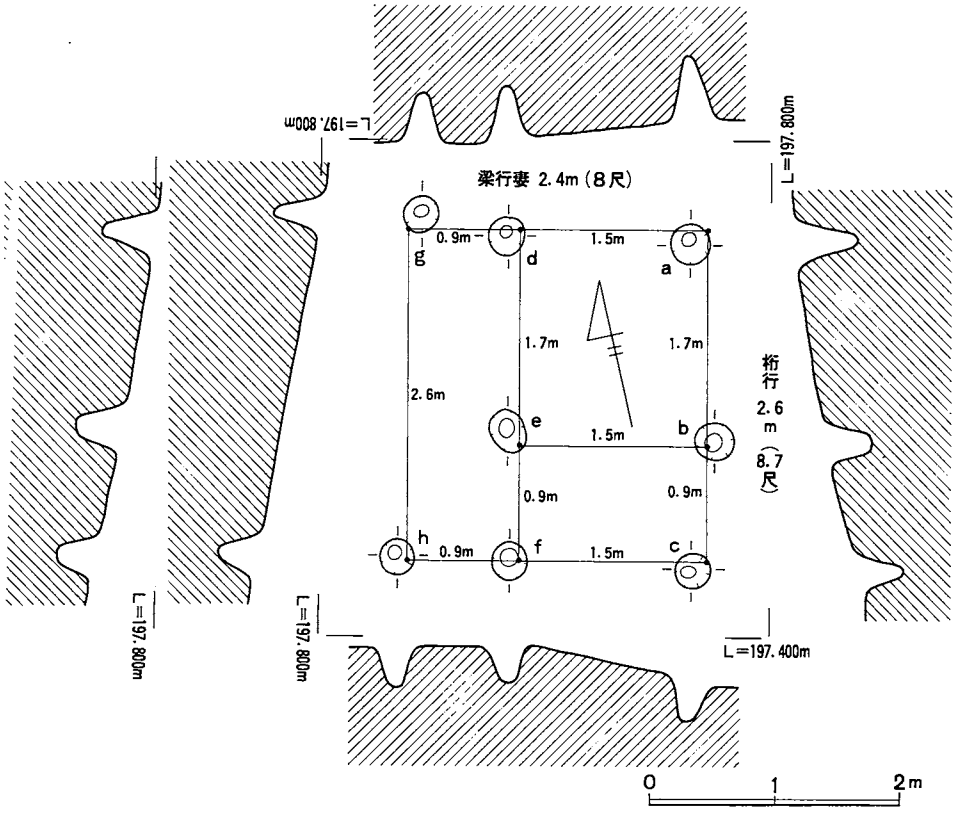
桁行2.6ｍ（8.7尺）、梁行妻2.4ｍ（８尺）の２間×２間の建物で、桁行方位はＮ64°Ｅである。柱間寸法は、桁行Ｐａ～Ｐｂ～Ｐｃで1.7ｍ（5.7尺）＋0.9ｍ（３尺）であるが、Ｐｇ～Ｐｈは中央柱が不明で全長2.6ｍ（8.7尺）を測る。梁行妻は、Ｐａ～Ｐｄ～Ｐｇで1.5ｍ（５尺）＋0.9ｍ（３尺）、Ｐｃ～Ｐｆ～Ｐｈで1.5ｍ（５尺）＋0.9ｍ（３尺）となる。

さらに中央柱のＰｄとＰｆの間にはＰｅの補助柱が付いており、Ｐｄ～Ｐｅ～Ｐｆは1.7ｍ（5.7尺）＋0.9ｍ（３尺）、Ｐｅ～Ｐｂは1.5ｍ（５尺）を測る。

柱穴の大きさはＰｅが最大（34×28cm）、Ｐｃが最小（27×27cm）で平均値は30.5×28.5cmとなる。深さはＰｄが最深（44cm）、ＰｆとＰｈが最浅（31cm）で平均値は36.1cmである。柱列はすべて千鳥の並びとなる。

桁行の東側と西側の高さを比べた場合、柱穴の検出面は北側Ｐａ～Ｐｇで19cm、西側の方が高く、Ｐｃ～Ｐｆ～ＰｈについてはＰｆとＰｈが水平で、Ｐｃのみが25cm、低い所で切り込まれている。

梁行妻の北側と南側とでは、東側Ｐｃ～Ｐａで59cm、西側Ｐｈ～Ｐｇで57cm、北側の方が高い。



第35図　ＳＢ１７実測図

Pit No	桁行柱間 (m)	桁行間(m)	Pit No	梁間柱間 (m)	梁間間(m)	Pit No	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
a～b	1.8	3.8	a～e	1.5	2.8	a	28	27	41
b～c	2.0		e～g	1.3		b	33	28	40
						c	32	30	47
g～h	3.8	3.8	c～d	0.7	2.8	d	22	19	37
			d～f	1.4		e	33	31	25
			f～h	0.7		f	26	25	46
						g	26	24	54
						h	26	22	45

第29表　ＳＢ１６計測表

Pit No	桁行柱間 (m)	桁行間(m)	Pit No	梁間柱間 (m)	梁間間(m)	Pit No	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
a～b	1.7	2.6	a～d	1.5	2.4	a	32	31	38
b～c	0.9		d～g	0.9		b	32	28	37
						c	27	27	39
d～e	1.7	2.6	b～e	1.5	1.5	d	30	29	44
e～f	0.9					e	34	28	37
			c～f	1.5	2.4	f	29	28	31
g～h	2.6	2.6	f～h	0.9		g	30	28	32
						h	30	29	31

第30表　ＳＢ１７計測表

〔2〕主軸尾根の南西下帯曲輪①

主軸尾根の南西下斜面に、やや緩傾斜の部分があり、ここからこの地形を補う意味での杭列12～15が検出された。主軸尾根の東側よりから西側33ｍの範囲をカバーする形で２重の杭列が並列する。杭列の検出状況から、杭列12と14、及び杭列13と15は、元来、同列の杭列であることが確実である。この杭列の存在については、主軸尾根の南下を西から東へ下る迫地と関係があるものと思われる。迫地から主軸尾根への敵の進入に対し、杭列12～15によってそれを防止する手立てが必要であることは、地形からして明白である。

この帯曲輪は調査の結果、整地層である事が判明し、下層からは柱穴が検出された。

〔杭列　12〕

４個の杭跡から構成されており、杭間の距離は1.07～2.98ｍで、全長6.0ｍを測る。標高203.5ｍラインを跨ぐ格好で、直線状の並びを呈している。杭列13との間隔は約１ｍで、杭列14とは7.3ｍの距離がある。

〔杭列　13〕

杭列12と同様に４個の杭跡から構成されている。杭間の距離は1.11～3.78ｍで、全長6.41ｍを測る。標高203.5～203.0ｍラインを跨いでおり、直線状の並びを呈している。

〔杭列　14〕

標高203.0ｍラインを跨ぐ杭列で、14個の杭跡から構成されている。杭間の距離は0.86～3.3ｍで、全長25.96ｍを測る。

Pit No	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm) 最深	深さ (cm) 最浅	Pit間 (cm)
12－1	35	30	36.2	29.8	298
2	26	20	62.8	53.6	195
3	22	18	60.2	56.1	107
4	20	17	49.9	43.6	
				全長	6.00 m

Pit No	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm) 最深	深さ (cm) 最浅	Pit間 (cm)
13－1	38	27	57.9	53.6	378
2	27	23	79.9	73.2	152
3	22	18	57.7	53.9	111
4	20	15	51.8	45.0	
				全長	6.41 m

第31表　杭列12・13計測表

蛇行の度合はかなり大きく、ジクザクの配列となる。杭列15とは0.7～2.2ｍの距離を有する。

〔杭列　15〕

標高202.5ｍラインを跨ぐ杭列で、13個の杭跡から構成されている。杭間の距離は、1.19～2.58ｍで、全長21.14ｍを測る。全体的に整然とした弧状の並びとなる。杭跡の掘り方は深く、かなりしっかりとした状態である。

Pit No	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm) 最深	深さ(cm) 最浅	Pit間(cm)
14－1	21	20	49.2	37.3	203
2	25	21	36.7	31.4	157
3	23	21	37.3	35.0	192
4	27	23	50.2	41.1	330
5	30	24	37.9	36.2	152
6	26	22	53.9	50.5	

Pit No	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm) 最深	深さ(cm) 最浅	Pit間(cm)
14－6					216
7	28	26	34.8	22.9	277
8	31	28	62.5	54.3	107
9	30	29	61.5	54.5	86
10	34	30	54.8	48.3	239
11	31	27	44.1	37.1	

Pit No	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm) 最深	深さ(cm) 最浅	Pit間(cm)
14－11					218
12	29	27	49.5	40.0	185
13	24	22	50.0	39.6	234
14	30	27	41.5	34.0	
					全長 25.96 m

第32表　杭列14計測表

Pit No	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm) 最深	深さ(cm) 最浅	Pit間(cm)
15－1	29	23	51.1	43.5	196
2	26	24	54.6	46.3	186
3	25	22	61.4	54.5	203
4	25	23	73.0	64.7	152
5	23	21	42.1	36.6	119
6	25	23	54.0	49.6	

Pit No	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm) 最深	深さ(cm) 最浅	Pit間(cm)
15－6					137
7	26	25	63.3	58.2	158
8	24	23	74.2	65.0	258
9	28	25	64.5	57.5	193
10	34	31	64.0	55.0	128
11	34	32	57.0	52.5	

Pit No	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm) 最深	深さ(cm) 最浅	Pit間(cm)
15－11					172
12	30	26	50.0	40.5	212
13	25	23	49.0	42.0	
					全長 21.14 m

第33表　杭列15計測表

〔3〕主軸尾根の南西下帯曲輪②

南西下帯曲輪①からさらに下方の斜面から、建築址１棟分と２条の杭列が検出された。標高199.5～198.0ｍラインから検出されたもので、長軸方位は主軸尾根と同一で東西方向にある。

長さ25ｍ分が検出されたが、東側部分は山腹に吸収されて不明確となる。幅は最大４ｍで、平坦面における削平の度合いはやや弱い。検出状況からして南縁部分が一部、崩壊している事が確かである。

〔杭列　16・17〕

両杭列は元来、同一列のものと思われるが、間に10.5ｍ分の空白部分があるため、ここでは二つの杭列に分けて取り扱った。

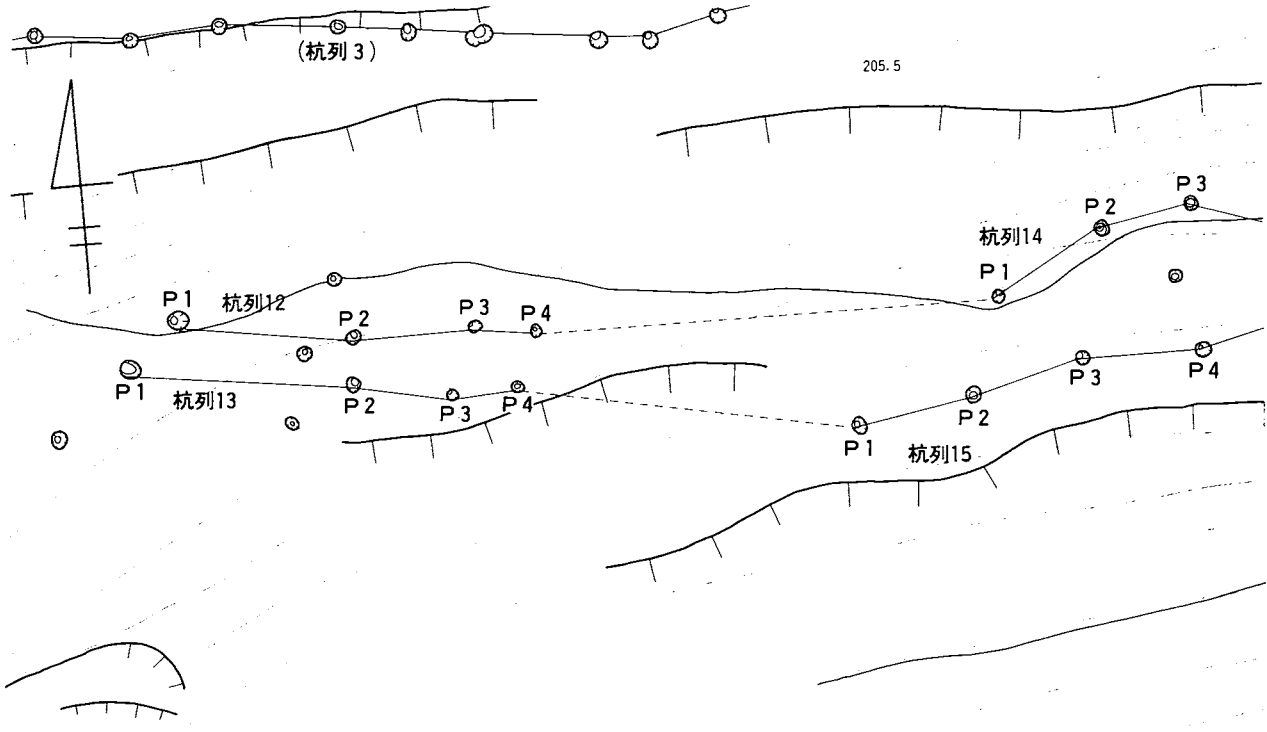
杭列16は、標高199.5ｍラインを跨ぐ杭列で、６個の杭跡から構成されている。ＳＢ１８の東端寄りから東側へ延びており、杭間の距離は0.95～1.43ｍで全長5.91ｍを測る。整然とした直線状の並びとなる。

杭列17は、標高198.5～198.0ｍラインを跨ぐ杭列で、８個の杭跡から構成されている。杭間の距離は0.52～2.92ｍで全長8.34ｍを測る。杭間は東側寄りでやや疎の状態となる。

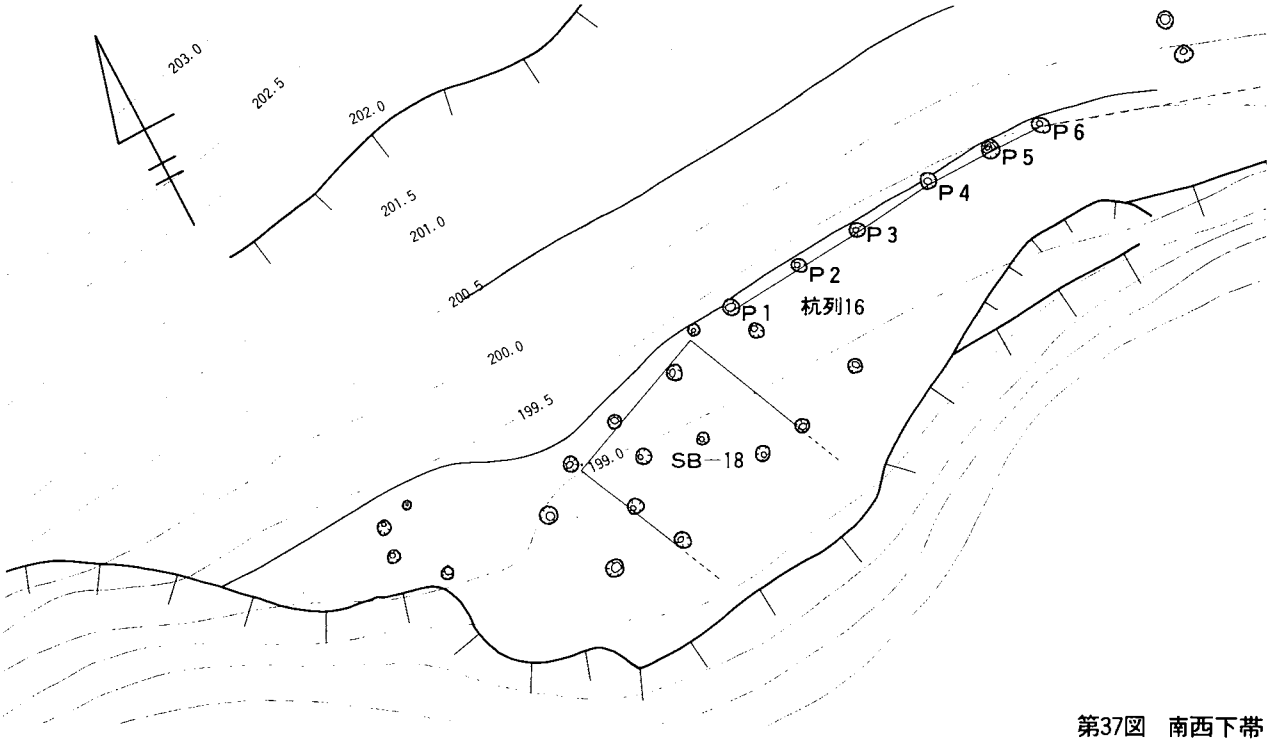
Pit No	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm) 最深	深さ(cm) 最浅	Pit間(cm)
16－1	27	21	55.7	48.5	131
2	25	23	54.3	49.4	111
3	25	20	69.2	62.9	143
4	28	23	76.8	68.6	111
5	30	25	74.0	71.0	95
6	28	24	63.9	56.4	
					全長 5.91 m

Pit No	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm) 最深	深さ(cm) 最浅	Pit間(cm)
17－1	22	18	61.6	54.1	89
2	28	26	57.0	49.5	52
3	28	25	78.1	73.1	55
4	27	25	59.9	54.5	94
5	30	27	72.3	63.3	95
6	26	24	48.7	39.5	157
7	25	24	63.6	52.7	292
8	21	19	40.5	30.5	
					全長 8.34 m

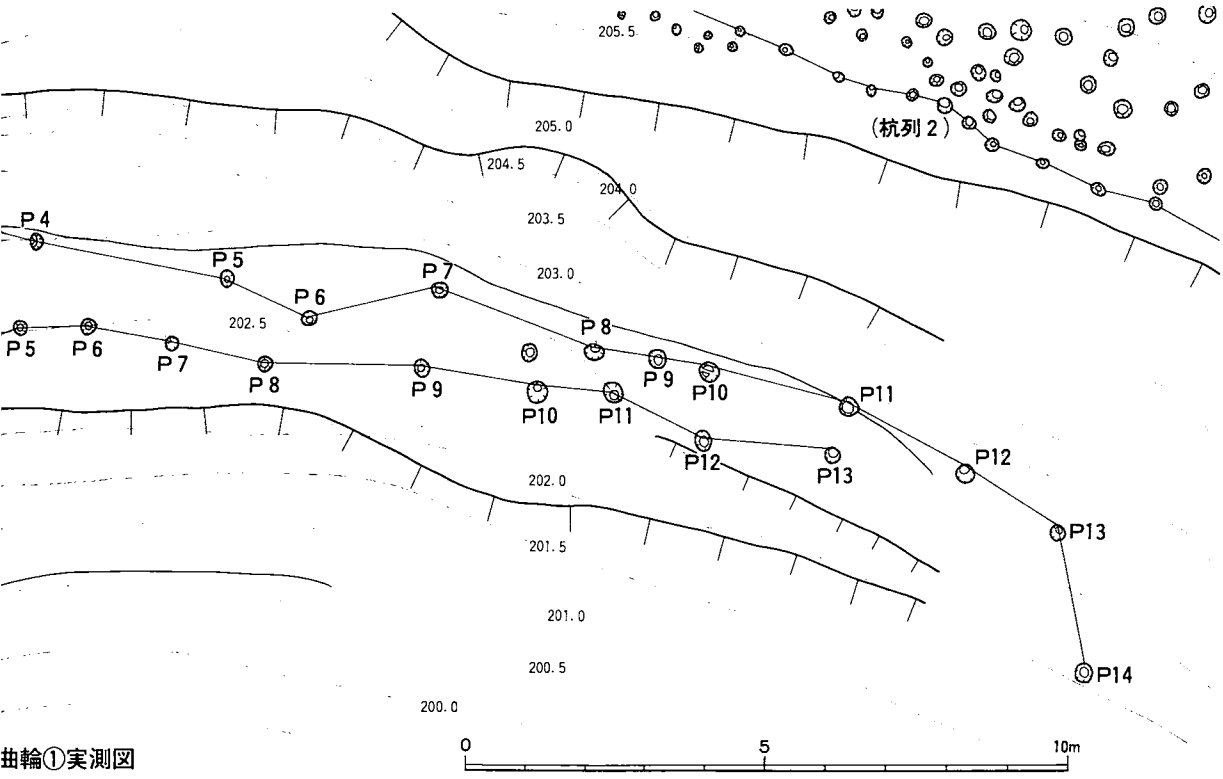
第34表　杭列16・17計測表



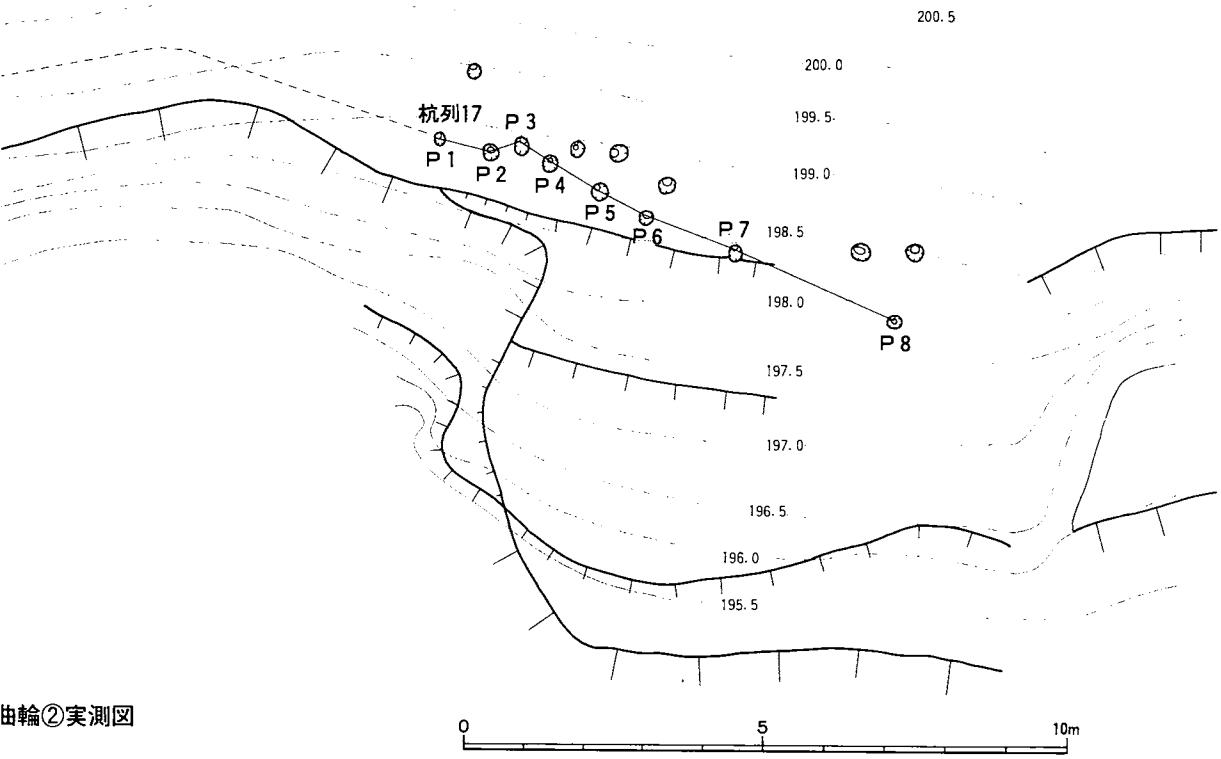
第36図　南西下帯



第37図　南西下帯



曲輪①実測図



曲輪②実測図

〔ＳＢ１８〕

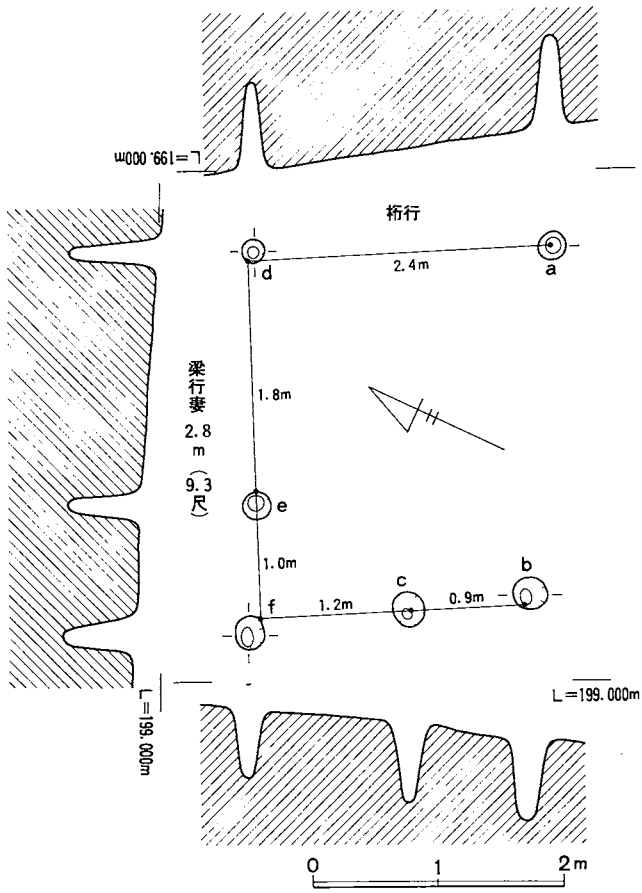
梁行妻2.8m（9.3尺）の建物で、桁行方位はＮ25°Ｗである。柱間寸法は、梁行妻Ｐｄ～Ｐｅ～Ｐｆで1.8m（６尺）＋1.0m（3.3尺）を測る。

桁行は南側部分を欠いており、北側Ｐａ～Ｐｄで2.4m（８尺）、南側Ｐｂ～Ｐｃ～Ｐｆで0.9m（３尺）＋1.2m（４尺）に留まっている。

現在の柱穴の大きさはＰｃが最大（28×26cm）、Ｐｄが最小（19×18cm）で平均値は24.7×22.3cmとなる。深さはＰａが最深（73cm）、Ｐｂ・Ｐｅ・Ｐｆが最浅（54cm）で平均値は61.7cmである。

Pit No	桁行柱間 (m)	桁行間(m)	Pit No	梁間柱間 (m)	梁間間(m)	Pit No	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
a～d	2.4	2.4				a	24	22	73
						b	28	24	54
b～c	0.9	2.1	d～e	1.8	2.8	c	28	26	63
c～f	1.2		e～f	1.0		d	19	18	72
						e	23	20	54
						f	26	24	54

第35表　ＳＢ１８計測表



第38図　ＳＢ１８実測図

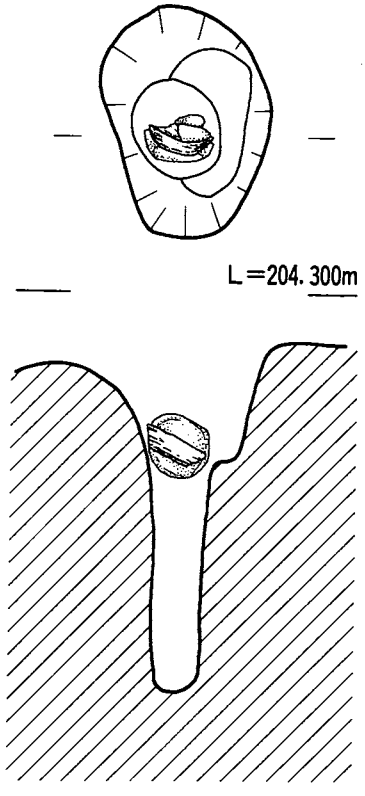
〔4〕主軸尾根の南西下整地層

杭列14・15の検出された南西下帯曲輪①の遺構確認面を精査したところ、第40図に見るように標高203～202ｍラインにおいて、地盤は非常に固く、人為的に叩き締められている事が判明した。整地の範囲は長さ17ｍ、幅2.5～３ｍ、層厚20～50㎝で、整地土は灰黒色土に灰褐色土の混じるものであった（スクリーントーンの部分）。

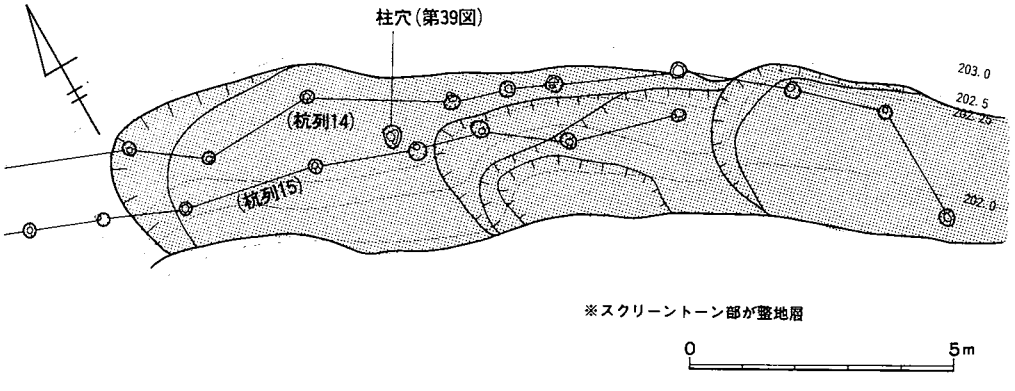
この整地層は、特に帯曲輪の東側域が西側から東側へ17ｍの範囲で、漸次、傾斜しており、東端域で最深50㎝の凹地となっている所から、これを平らに均らすためのものであろう。

整地層区域については検出箇所の状況からして、かつては、さらに東側へ延びていた事が確実視される。今回の調査で長さ17ｍ分のみの検出に留まったのは、後世に発生した土砂崩れにより整地層の東側部分が流出したためであろう。いずれにせよ、帯曲輪から埋納物を伴う整地層が検出された事は注目すべき事である。

整地層の下部は黄褐色土の地山となっていたが、標高202.6ｍラインの地山から柱穴（第39図）が１個検出された。柱穴は長径42㎝、短径30㎝、深さ65㎝を測り、埋土は整地層土で、少量の炭化物が混入していたが、埋土より器面に孔が穿れた土師器坏が出土した。土師器坏は埋納物と思われる。



第39図　柱穴実測図



第40図　南西下整地層実測図

第５節　北側張り出し尾根

〔１〕北側張り出し尾根(1)

北側張り出し尾根の基底部から中途にかけての部分で、長軸の長さは21.5ｍを測る。上場と下場の比高は6.5ｍであるが段差がついており、３段の階段状地形となっている。

各段から２棟ずつ、計６棟の建築址（ＳＢ１９～２４）が検出され、さらに、基底部を走る杭列18の存在が明らかになった。

〔杭列　18〕

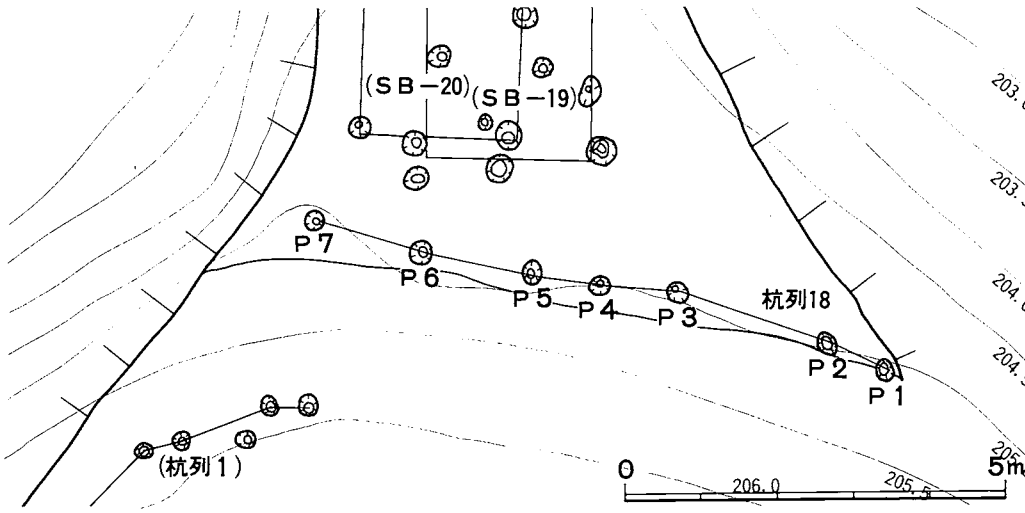
標高205ｍライン沿いに並ぶ杭列で、７個の杭跡から構成されている。

杭間の距離は0.83～2.07ｍで全長7.83ｍを測る。やや歪であるものの並びは直線に近い。

北側張り出し尾根の基底部を仕切る杭列である。

Pit No	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm) 最深	深さ(cm) 最浅	Pit間(cm)
18－1	25	21	37.2	29.7	
					83
2	27	21	18.2	10.4	
					207
3	28	24	45.0	40.2	
					100
4	28	24	24.5	19.5	
					93
5	28	25	19.0	17.0	
					151
6	33	29	29.0	27.0	
					149
7	25	20	23.0	18.0	
全長　7.83 m					

第36表　杭列18計測表



第41図　杭列１８実測図

〔２〕北側張り出し尾根(2)

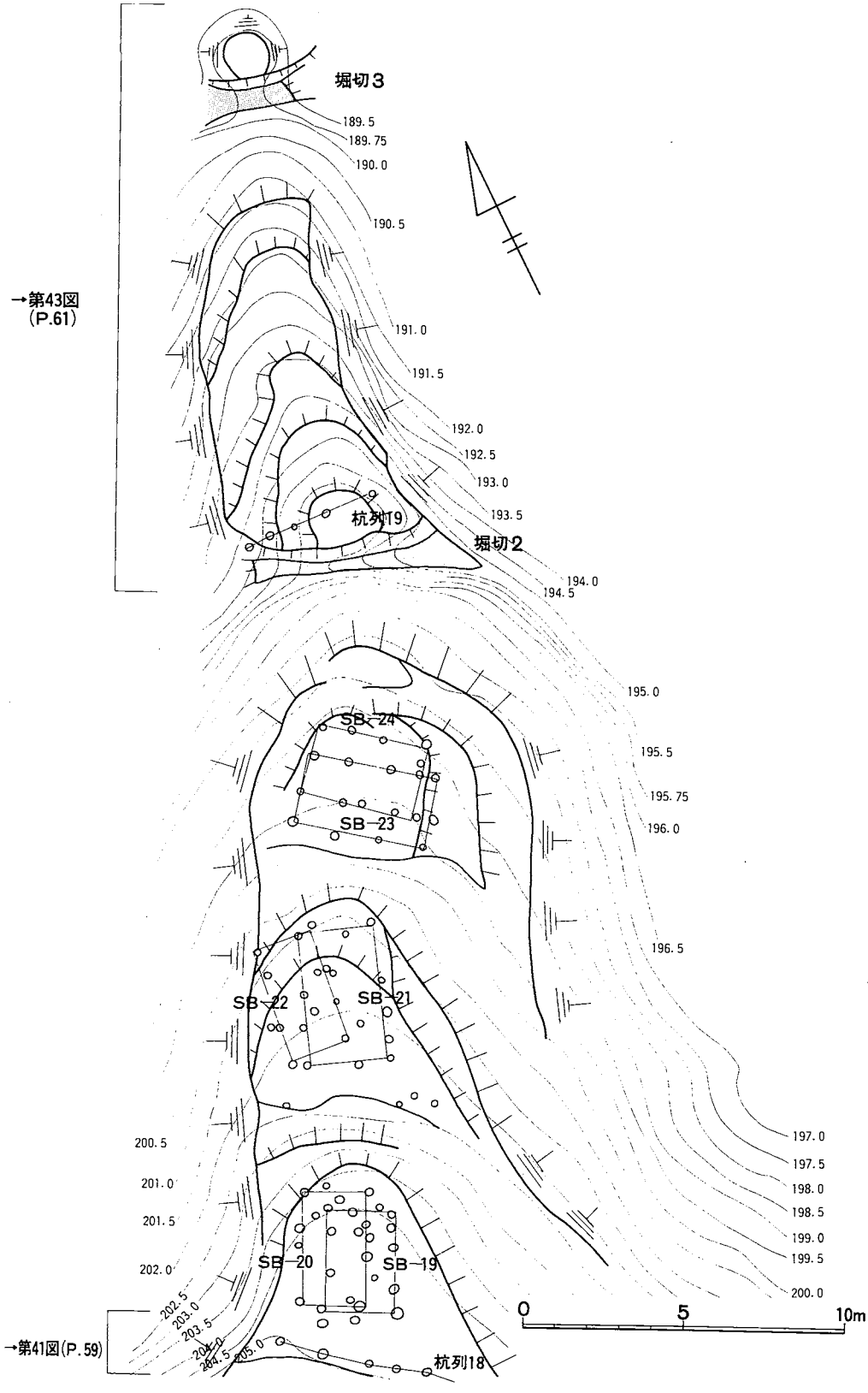
張り出し尾根の中途から北端にかけての部分で、長軸の長さは20ｍを測る。上場と下場の比高は９ｍで、尾根筋から２条の堀切と１条の杭列が検出された。

〔杭列　19〕

堀切２の北側にあたる尾根筋から検出された杭列で、５個の杭跡から構成されている。杭間の距離は0.7～1.52ｍで、全長4.17ｍを測り、直線状の並びとなる。

Pit No	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm) 最深	深さ(cm) 最浅	Pit間(cm)
19－1	22	21	30.8	16.0	
					152
2	35	33	26.3	18.7	
					112
3	19	18	34.5	27.0	
					83
4	30	26	47.3	36.4	
					70
5	27	26	28.6	15.5	
全長　4.17 m					

第37表　杭列19計測表



第42図　北側張り出し尾根実測図

〔堀切　2〕

北側張り出し尾根の中途を断切る堀切で、検出部分の長さは7ｍで、上場幅3ｍ、下場幅0.3～1.3ｍであった。深さは、南側の尾根筋側から2.5ｍで、北側尾根筋から0.5ｍを測った。

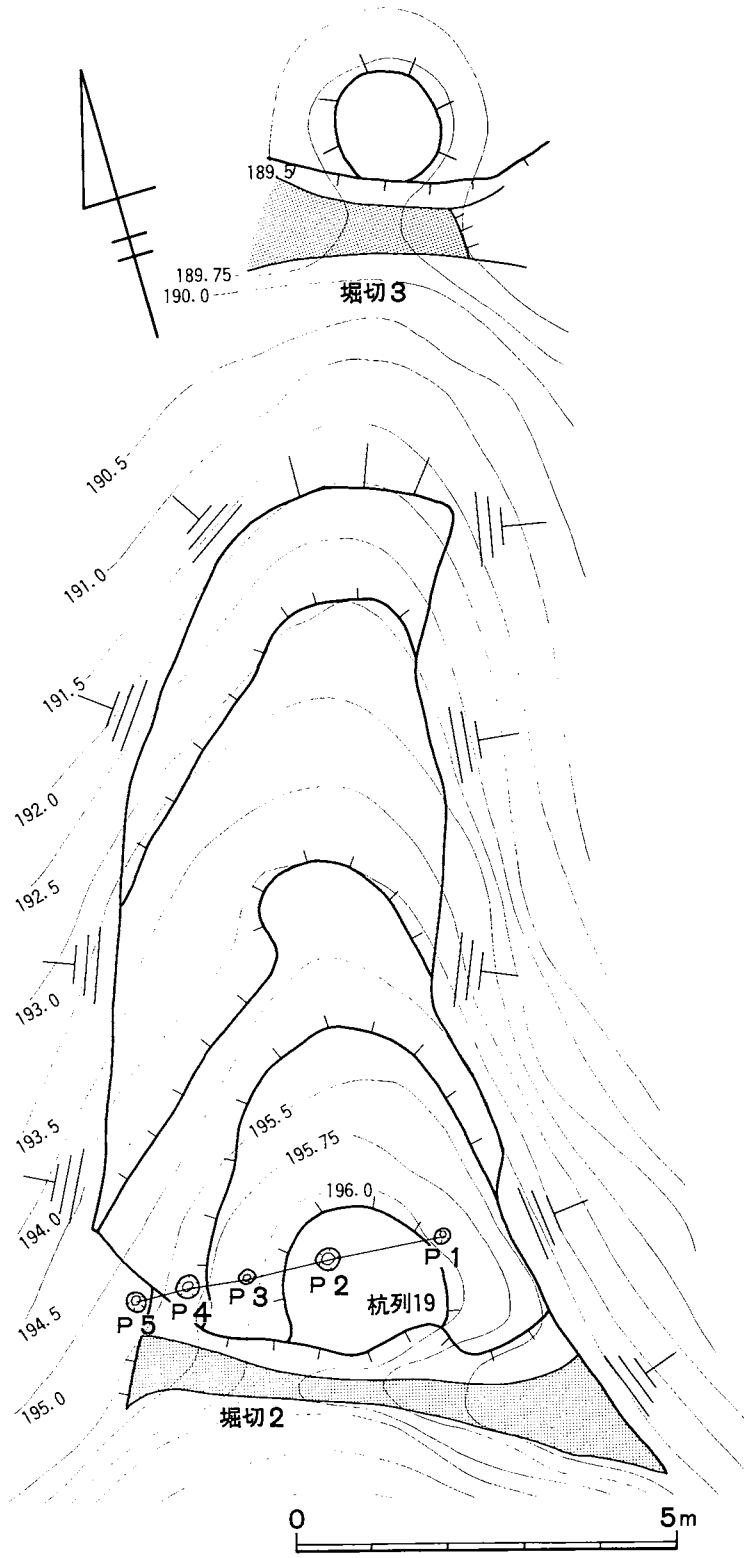
この堀切も中央部をやや高く掘り残し、東西両端を竪堀状に掘り窪めたものである。北側尾根筋に掻き上げ土塁の存在が考えられるが、今回の調査ではその存在を確認できなかった。

〔堀切　3〕

北側張り出し尾根の先端部分を断ち切る堀切で、検出部分の長さは4.5ｍで、上場幅4.8ｍ・下場幅0.7～1.5ｍであった。

深さは南側の尾根筋側から2.3ｍで、北側尾根筋からは0.25ｍを測った。

堀切の造りは堀切2と同一形状である。北側尾根筋に掻き上げ土塁の存在が考えられるが、現状は、直径1.4ｍの円形状の削平地となっている。



第43図　北側張り出し尾根(2) 実測図

〔ＳＢ１９〕

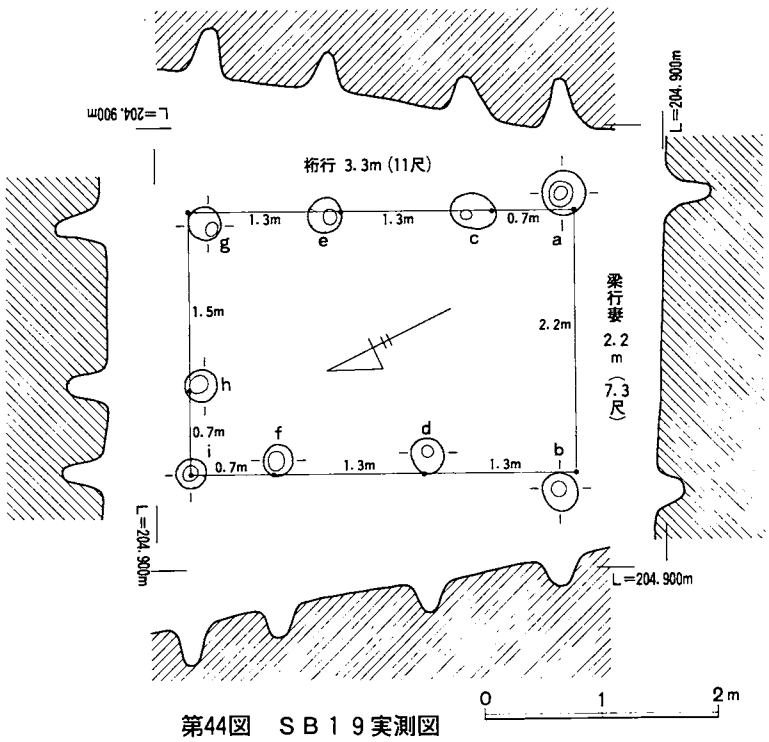
桁行3.3ｍ（11尺）、梁行妻2.2ｍ（7.3尺）の３間×２間の建物で、桁行方位はＮ24°Ｅである。柱間寸法は、桁行Ｐａ～Ｐｃ～Ｐｅ～Ｐｇで0.7ｍ（2.3尺）＋1.3ｍ（4.3尺）＋1.3ｍ（4.3尺）、Ｐｂ～Ｐｄ～Ｐｆ～Ｐｉで1.3ｍ（4.3尺）＋1.3ｍ（4.3尺）＋0.7ｍ（2.3尺）を測る。梁行妻は、Ｐｇ～Ｐｈ～Ｐｉで1.5ｍ（５尺）＋0.7ｍ（2.3尺）であるが、Ｐａ～Ｐｂは中央柱が不明で全長2.2ｍ（7.3尺）を測る。桁行はすべて千鳥の並びとなる。

柱穴の大きさはＰａが最大（47×46cm）、Ｐｉが最小（26×25cm）で平均値は32.1×29.9cmとなる。深さはＰｇが最深（41cm）、Ｐｂが最浅（23cm）で平均値は33.2cmである。

桁行の東側と西側を比べた場合、柱穴の検出面は北側Ｐｉ～Ｐｇと南側Ｐｂ～Ｐａで、ほとんど差異がなく10cm強の比高差に留まっている。一方、梁行妻の北側と南側の高さを比べた場合、柱穴の検出面は西側Ｐｉ～Ｐｂで60.1cm、東側Ｐｇ～Ｐａで49.1cm南側が高い。

Pit No	桁行柱間 (m)	桁行間(m)	Pit No	梁間柱間 (m)	梁間間(m)	Pit No	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
a～c	0.7	3.3	a～b	2.2	2.2	a	47	46	40
c～e	1.3					b	32	30	23
e～g	1.3					c	40	28	36
						d	30	28	27
b～d	1.3	3.3	g～h	1.5	2.2	e	29	31	34
d～f	1.3		h～i	0.7		f	28	27	28
f～i	0.7					g	29	28	41
						h	28	26	36
						i	26	25	34

第38表　ＳＢ１９計測表



第44図　ＳＢ１９実測図

〔ＳＢ２０〕

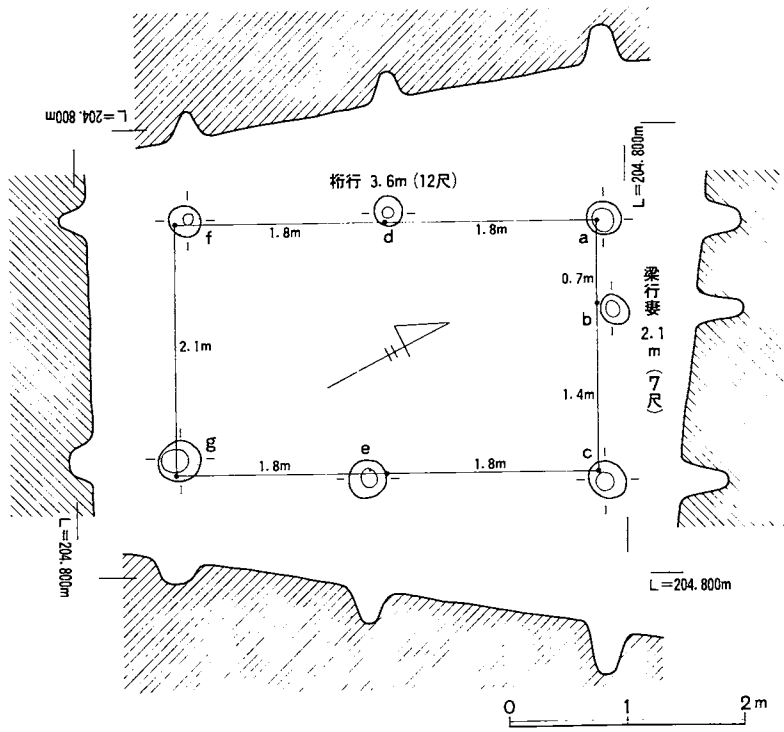
桁行3.6ｍ（12尺）、梁行妻2.1ｍ（７尺）の２間×２間の建物で、桁行方位はＮ29°Ｅである。柱間寸法は、桁行Ｐａ～Ｐｄ～Ｐｆで1.8ｍ（６尺）＋1.8ｍ（６尺）、Ｐｃ～Ｐｅ～Ｐｇで1.8ｍ（６尺）＋1.8ｍ（６尺）を測る。梁行妻は、Ｐａ～Ｐｂ～Ｐｃで0.7ｍ（2.3尺）＋1.4ｍ（4.7尺）であるが、Ｐｂは梁行妻Ｐａ～Ｐｃから４～15cm程、北側へずれている。Ｐｆ～Ｐｇは中央柱が不明で全長2.1ｍ（７尺）を測る。柱列はすべて千鳥の並びとなる。

柱穴の大きさはＰｇが最大（37×34cm）、Ｐｂが最小（26×22cm）で平均値は30.4×27.4cmとなる。深さはＰｂが最深（39cm）、Ｐｇが最浅（22cm）で平均値は30.1cmである。

桁行の東側と西側の高さを比べた場合、柱穴の検出面は北側Ｐａ～Ｐｃで28cm、東側の方が高い。一方、南側Ｐｆ～Ｐｇでも東側が高いが、比高差は６cmに留まっている。さらに梁行妻の北側と南側では、西側Ｐａ～Ｐｆで72cm、東側Ｐｃ～Ｐｇで69.1cm、南側の方が高い。

Pit No	桁行柱間 (m)	桁行間(m)	Pit No	梁間柱間 (m)	梁間間(m)	PitNO.	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
a～d d～f	1.8 1.8	3.6	a～b b～c	0.7 1.4	2.1	a b c d e f g	29 26 34 26 33 28 37	27 22 28 25 31 25 34	32 39 38 26 31 23 22
c～e e～g	1.8 1.8	3.6	f～g	2.1	2.1				

第39表　ＳＢ２０計測表



第45図　ＳＢ２０実測図

〔ＳＢ２１〕

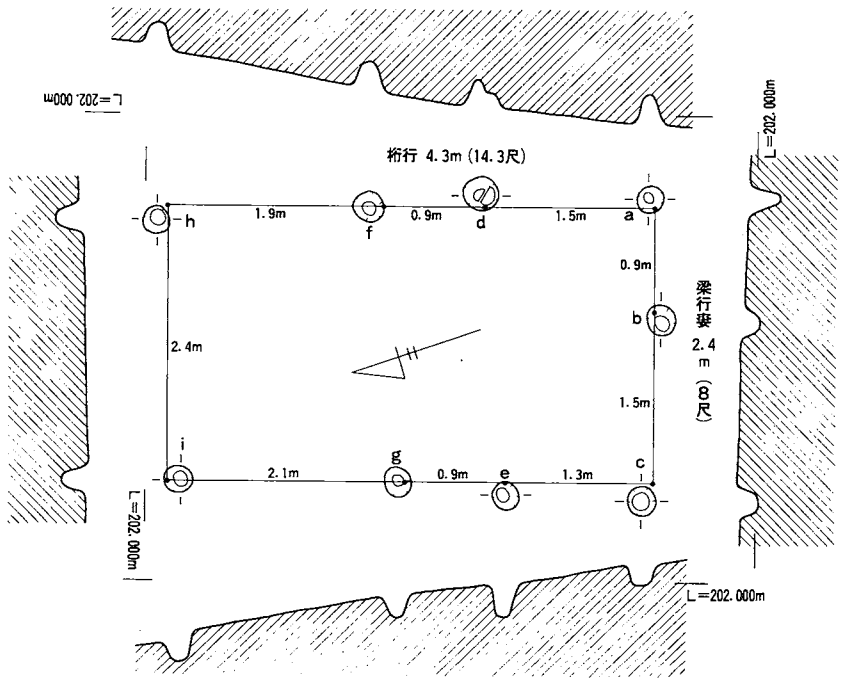
桁行4.3ｍ（14.3尺）、梁行妻2.4ｍ（８尺）の３間×２間の建物で、桁行方位はＮ19°Ｅである。柱間寸法は、桁行Ｐａ～Ｐｄ～Ｐｆ～Ｐｈで1.5ｍ（５尺）＋0.9ｍ（３尺）＋1.9ｍ（6.3尺）、Ｐｃ～Ｐｅ～Ｐｇ～Ｐｉで1.3ｍ（4.3尺）＋0.9ｍ（３尺）＋2.1ｍ（７尺）を測る。梁行妻は、Ｐａ～Ｐｂ～Ｐｃで0.9ｍ（３尺）＋1.5ｍ（５尺）であるが、Ｐｈ～Ｐｉは中央柱が不明で全長2.4ｍ（８尺）を測る。柱列はすべて千鳥の並びとなる。

柱穴の大きさはＰｄが最大（32×29cm）、Ｐｈが最小（24×23cm）で平均値は27.0×24.7cmとなる。深さはＰｅが最深（30cm）、Ｐｂが最浅（16cm）で平均値は23.7cmである。

桁行の東側と西側の高さを比べた場合、柱穴の検出面は南側Ｐａ～Ｐｃと北側Ｐｈ～Ｐｉで、ほとんど差異がなく10cm未満の比高差に留まっている。さらに梁行妻の北側と南側では、東側Ｐａ～Ｐｈで68cm、西側Ｐｃ～Ｐｉで71cm、南側の方が高い。

Pit No	桁行柱間 (m)	桁行間(m)	Pit No	梁間柱間 (m)	梁間間(m)	Pit No	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
a～d	1.5	4.3	a～b	0.9	2.4	a	25	22	26
d～f	0.9		b～c	1.5		b	28	25	16
f～h	1.9					c	27	26	19
c～e	1.3	4.3	h～i	2.4	2.4	d	32	29	24
e～g	0.9					e	25	23	30
g～i	2.1					f	29	26	27
						g	27	24	22
						h	24	23	26
						i	26	24	23

第40表　ＳＢ２１計測表



第46図　ＳＢ２１実測図

〔ＳＢ２２〕

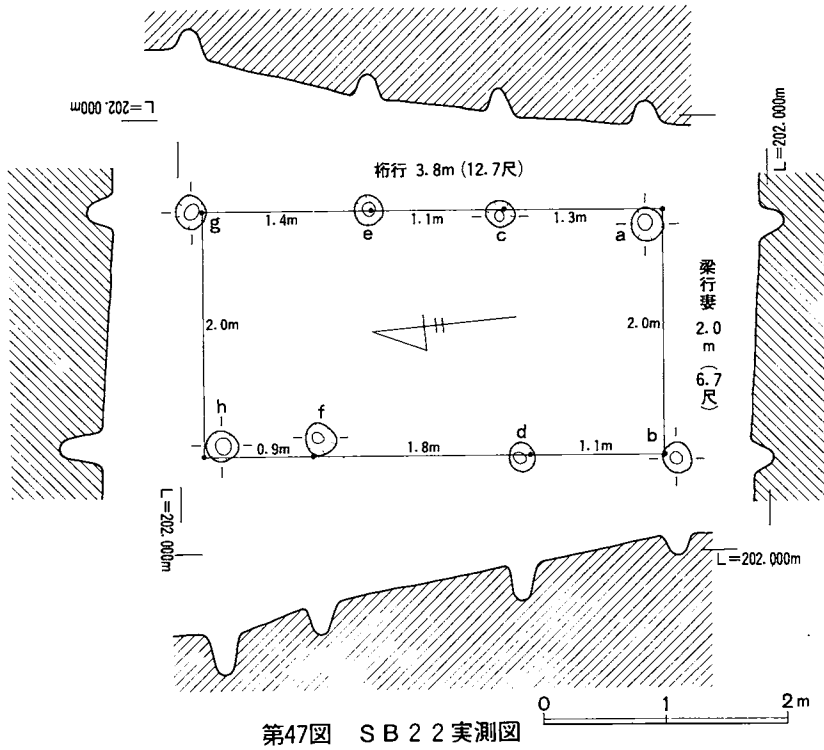
桁行3.8m（12.7尺）、梁行妻2.0m（6.7尺）の３間×１間の建物で、桁行方位はＮ３°Ｅである。柱間寸法は、桁行Ｐａ～Ｐｃ～Ｐｅ～Ｐｇで1.3m（4.3尺）＋1.1m（3.7尺）＋1.4m（4.7尺）、Ｐｂ～Ｐｄ～Ｐｆ～Ｐｈで1.1m（3.7尺）＋1.8m（６尺）＋0.9m（３尺）、梁行妻Ｐａ～Ｐｂで2.0m（6.7尺）、Ｐｇ～Ｐｈで2.0m（6.7尺）を測る。

柱穴の大きさはＰａとＰｇで最大（27×26cm）、Ｐｄが最小（24×22cm）で平均値は25.8×23.8cmとなる。深さはＰｈが最深（33cm）、Ｐｂが最浅（18cm）で平均値は24.9cmである。柱列はすべて千鳥の並びとなる。

桁行の東側と西側での柱穴の検出面の比高差は、南側Ｐａ～Ｐｂと北側Ｐｇ～Ｐｈで10cm未満である。梁行妻の北側と南側の高さを比べた場合、柱穴の検出面は東側Ｐａ～Ｐｇで68cm、西側Ｐｂ～Ｐｈで81cm、南側の方が高い。

Pit No	桁行柱間 (m)	桁行間(m)	Pit No	梁間柱間 (m)	梁間間(m)	Pit No	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
a～c	1.3	3.8	a～b	2.0	2.0	a	27	26	20
c～e	1.1					b	26	23	18
e～g	1.4					c	25	22	23
						d	24	22	31
b～d	1.1	3.8	g～h	2.0	2.0	e	24	24	21
d～f	1.8					f	26	23	27
f～h	0.9					g	27	26	26
						h	27	24	33

第41表　ＳＢ２２計測表



第47図　ＳＢ２２実測図

〔ＳＢ２３〕

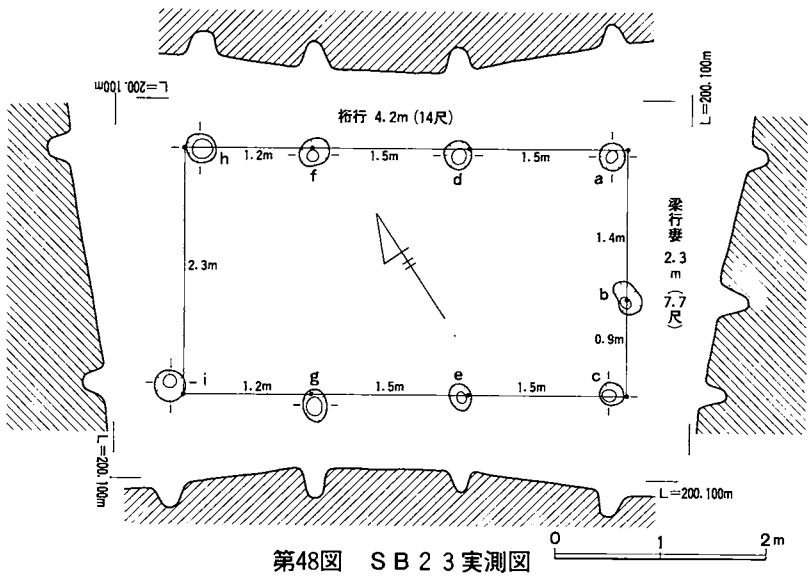
桁行4.2m（14尺）、梁行妻2.3m（7.7尺）の３間×２間の建物で、桁行方位はN56°Wである。柱間寸法は、桁行Ｐａ～Ｐｄ～Ｐｆ～Ｐｈで1.5m（５尺）＋1.5m（５尺）＋1.2m（４尺）、Ｐｃ～Ｐｅ～Ｐｇ～Ｐｉで1.5m（５尺）＋1.5m（５尺）＋1.2m（４尺）、梁行妻Ｐａ～Ｐｂ～Ｐｃで1.4m（4.7尺）＋0.9m（3尺）を測るが、Ｐｈ～Ｐｉは中央柱が不明で全長2.3m（7.7尺）を測る。柱列は桁行Ｐａ～Ｐｈを除き千鳥の並びになる。

柱穴の大きさはＰｉが最大（31×28cm）、Ｐｃが最小（24×21cm）で平均値は28.8×24.0cmとなる。柱穴の形状は全体的に長円形のものが多い。深さはＰｂとＰｇが最深（28cm）、ＰａとＰｈが最浅（20cm）で平均値は24.7cmである。

桁行の北側と南側を比べた場合、柱穴の検出面は東側Ｐａ～Ｐｃで48.5cm、西側Ｐｈ～Ｐｉで40cm、南側の方が高い。また、桁行ではＰｆとＰｇが周辺の柱穴よりも高い位置で切り込まれており、両端の柱穴はいずれも尻下がりの状態となる。桁行Ｐａ～Ｐｈでは、ＰｆがＰａと22cm、Ｐｈと16cmの比高差を測る。さらに桁行Ｐｃ～Ｐｉでは、ＰｇがＰｃと19.0cm、Ｐｉと14cmの比高差を示す。

Pit No	桁行柱間 (m)	桁行間(m)	Pit No	梁間柱間 (m)	梁間間(m)	Pit No	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
a～d	1.5	4.2	a～b	1.4	2.3	a	25	25	20
d～f	1.5		b～c	0.9		b	33	20	28
f～h	1.2					c	24	21	26
c～e	1.5	4.2	h～i	2.3	2.3	d	27	26	24
e～g	1.5					e	26	21	25
g～i	1.2					f	31	24	25
						g	32	24	28
						h	30	27	20
						i	31	28	26

第42表　ＳＢ２３計測表



第48図　ＳＢ２３実測図

〔ＳＢ２４〕

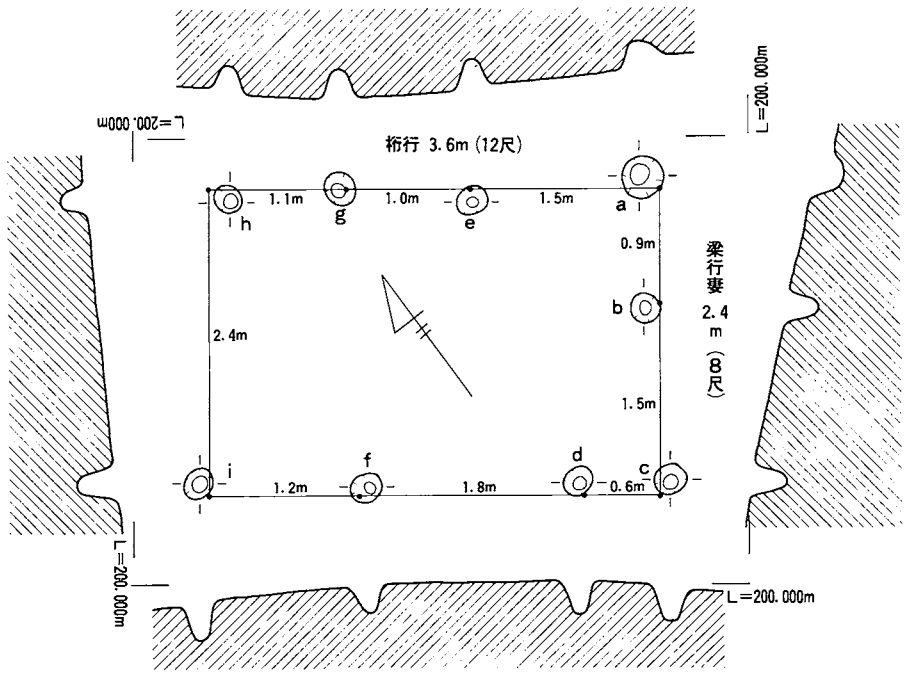
桁行3.6ｍ（12尺）、梁行妻2.4ｍ（８尺）の３間×２間の建物で、桁行方位はＮ53°Ｗである。柱間寸法は、Ｐａ～Ｐｅ～Ｐｇ～Ｐｈで1.5ｍ（５尺）＋1.0ｍ（3.3尺）＋1.1ｍ（3.7尺）、Ｐｃ～Ｐｄ～Ｐｆ～Ｐｉで0.6ｍ（2尺）＋1.8ｍ（６尺）＋1.2ｍ（４尺）、梁行妻Ｐａ～Ｐｂ～Ｐｃで0.9ｍ（３尺）＋1.5ｍ（５尺）であるが、Ｐｈ～Ｐｉの場合、中央柱が不明で全長2.4ｍを測る。柱列はすべて千鳥の並びとなる。

柱穴の大きさはＰａが最大（35×32cm）、Ｐｂが最小（23×22cm）で平均値は27.0×23.1cmとなる。深さはＰｉが最深(31cm)、Ｐａ・Ｐｆ・Ｐｇが最浅（22cm）で平均値は25.0cmである。

桁行の北側と南側を比べた場合、柱穴の検出面は東側のＰａ～Ｐｃで66cm、南側の方が高い。西側のＰｈ～Ｐｉで30cm、南側の方が高い。また、桁行Ｐｃ～ＰｉでＰｄが周囲の柱穴より高い位置に切り込まれており、Ｐｃと7.5cm、Ｐｉと22cmの比高差を測る。

Pit No	桁行柱間 (m)	桁行間(m)	Pit No	梁間柱間 (m)	梁間間(m)	Pit No	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
a～e e～g g～h	1.5 1.0 1.1	3.6	a～b b～c	0.9 1.5	2.4	a	35	32	22
						b	23	22	25
						c	26	23	28
c～d d～f f～i	0.6 1.8 1.2	3.6	h～i	2.4	2.4	d	25	21	27
						e	26	21	25
						f	27	23	22
						g	29	24	22
						h	25	20	23
						i	27	22	31

第43表　ＳＢ２４計測表



第49図　ＳＢ２４実測図

第６節　主軸尾根東側下の帯曲輪

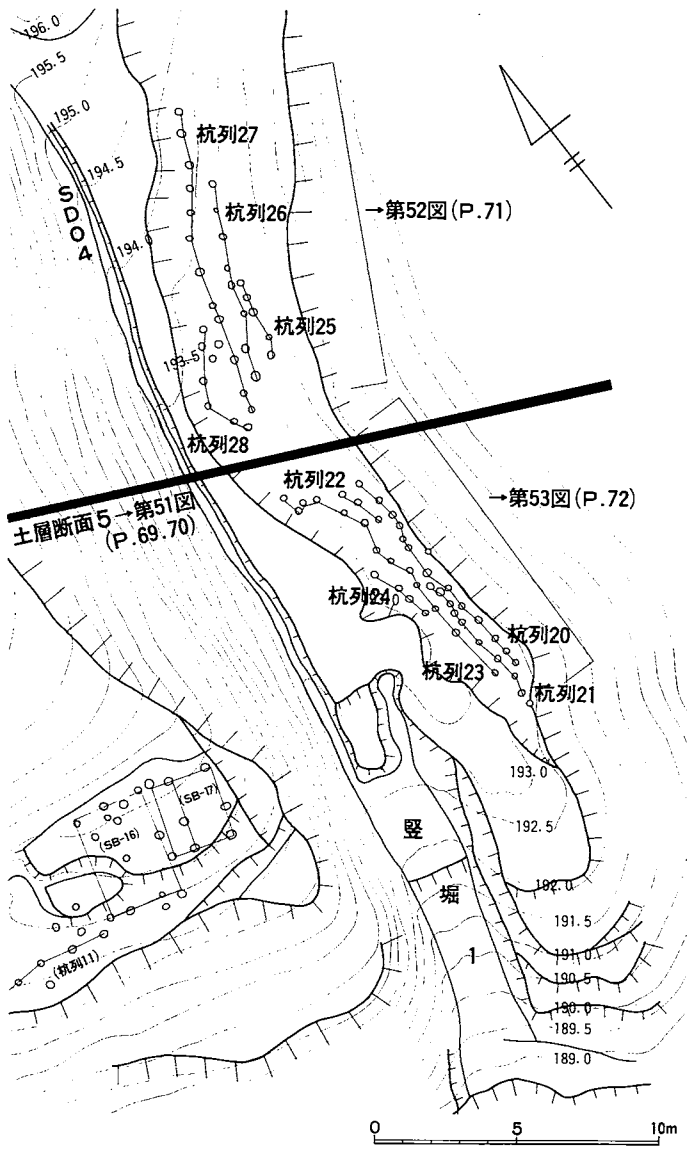
主軸尾根の東側下を巡る帯曲輪から杭列20～28と竪堀１、ＳＤ０４（溝状遺構）が検出された。帯曲輪については、標高193.0ｍから192.5ｍラインを大規模に削平したもので、主軸尾根の東端とは約８ｍの比高差がある。北端部分は東北尾根筋を基底部で断切る堀切１と繋がっており、主軸ラインの走行はＮ12°Ｅを示す。長径35ｍと短径5.5～11.5ｍの規模で、洪積世の礫層をカットしたものである。但し、平坦部分は１～５ｍ幅と狭く、全体的に緩傾斜地となっているが、土層断面図（第51図）に見る様に、築城当時は造成工事をして、平坦部を東側へ拡張している事が判る。

〔ＳＤ０４〕

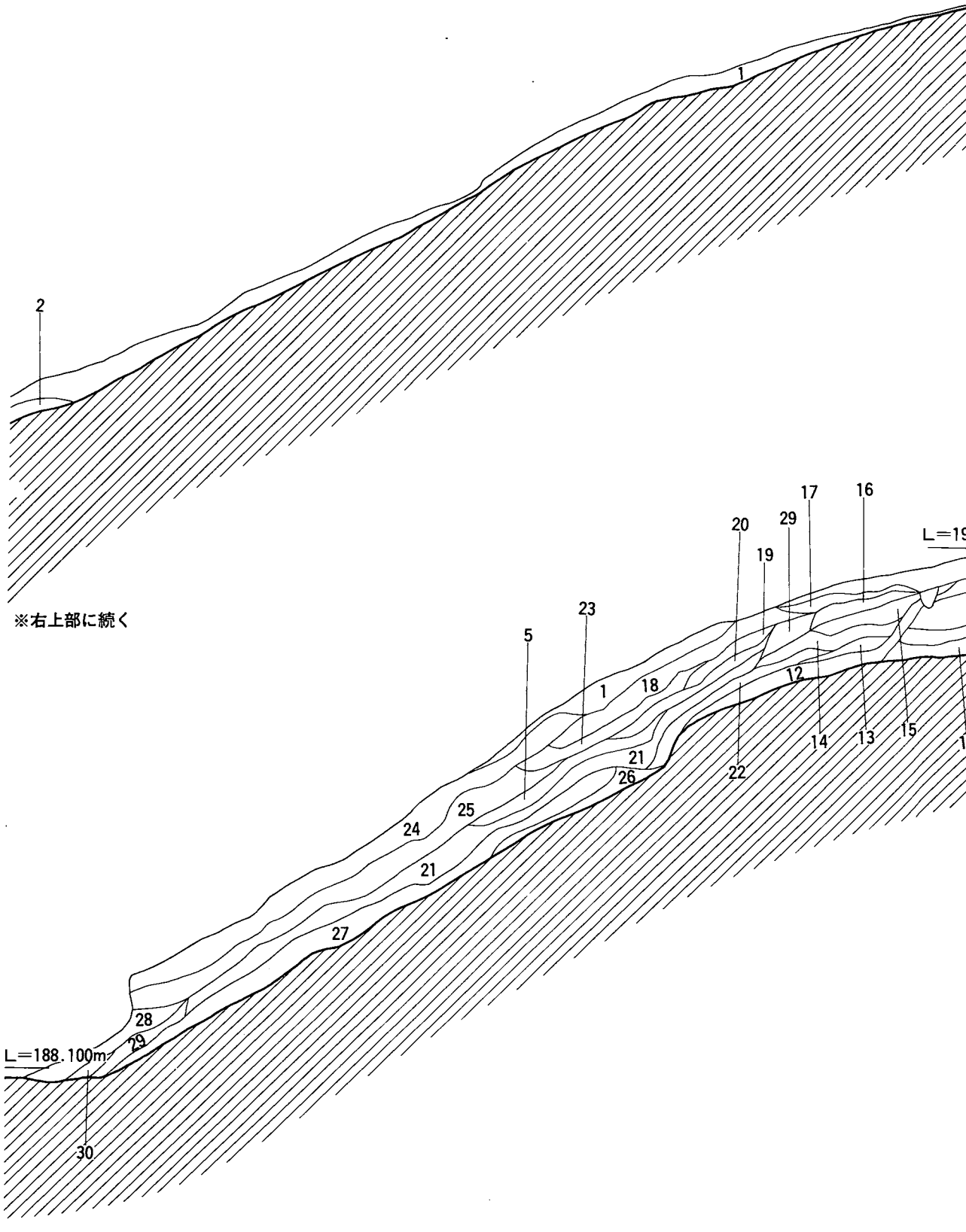
帯曲輪の西側山付部分を長軸方向に沿って走る溝状遺構で、長さ25ｍ分を検出した。上場幅0.6～1.0ｍ、下場幅0.2～0.4ｍ、深さ0.3～0.4ｍで、北端部分は堀切１の南端近くまで延びており、南端部分は竪堀１に吸収されている。検出状況からして堀切１に繋がる遺構と思われるが、比較して小規模すぎるきらいはある。単なる雨水抜きの排水路であろうか。

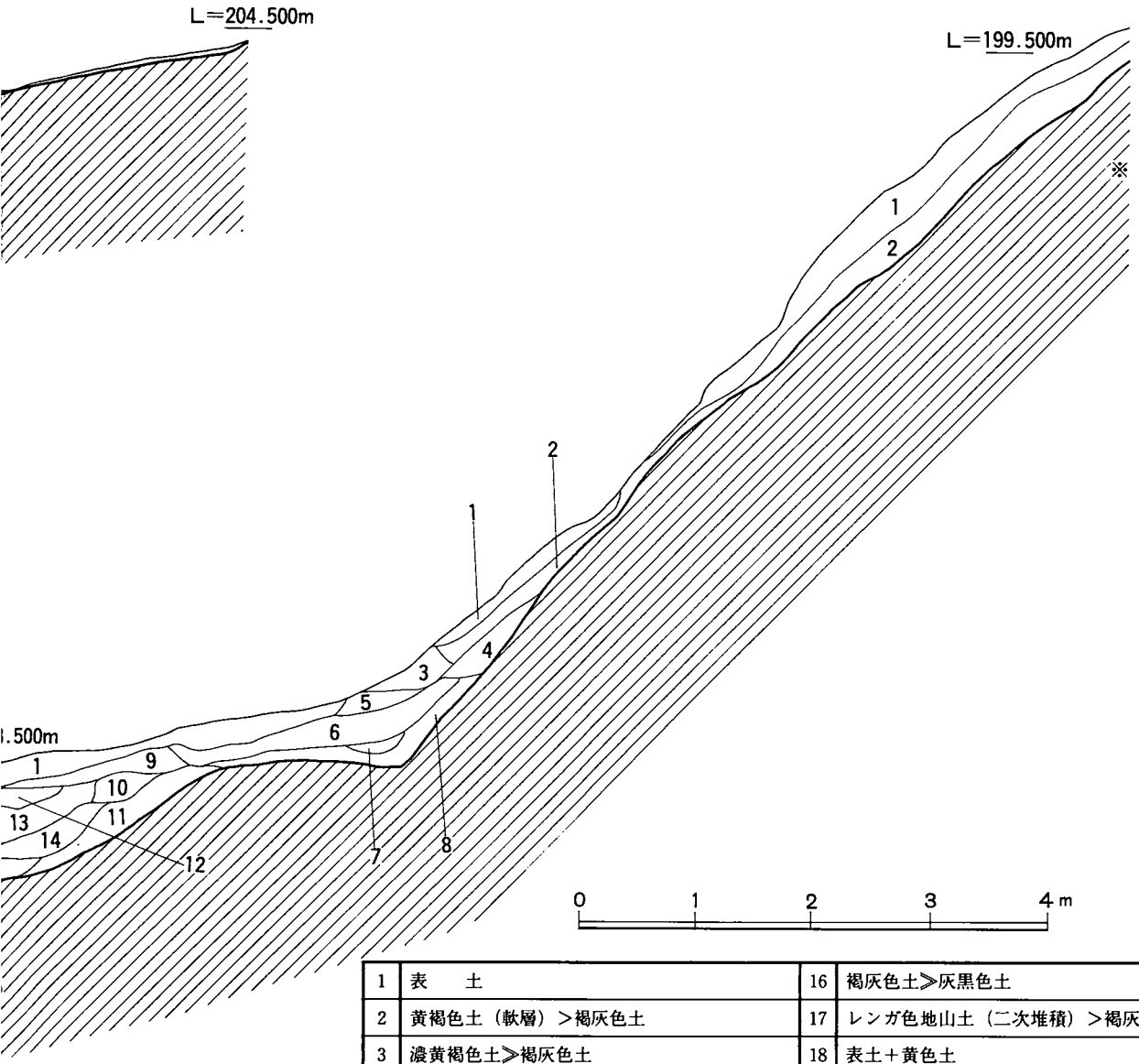
〔竪堀　１〕

帯曲輪の南端部から検出されたもので、遺構切り込み面の標高は193.0ｍである。検出部分の長さは13ｍで、上部と下部の比高は３ｍ程である。上場幅2.8～4.5ｍ、下場幅2.6～3.0ｍ、深さ0.5ｍで、底部における平坦部の長さは７ｍを測る。



第50図　東下帯曲輪実測図


1
2
※右上部に続く
17
16
20
29
L=19
19
23
5
1
18
12
14
13
15
1
21
26
22
25
24
21
27
28
29
L=188.100m
30



第51図　土層断面図　5

1	表　　土	16	褐灰色土≫灰黒色土
2	黄褐色土（軟層）＞褐灰色土	17	レンガ色地山土（二次堆積）＞褐灰色土
3	濃黄褐色土≫褐灰色土	18	表土＋黄色土
4	褐灰色土≫黄褐色土	19	褐灰色土≫灰黒色土
5	黄褐色土＞褐灰色土（少量）＋小礫	20	褐灰色土≫灰黒色土＋小礫
6	褐灰色土（きめが荒い）＞小礫	21	灰黒色土
7	黄褐色土（ブロック）	22	黄褐色土
8	褐灰色土（きめが細かい）	23	黄褐色土＝灰褐色土
9	黄褐色土＞褐灰色土	24	褐灰色土
10	レンガ色地山土（二次堆積・軟層）	25	小礫（鶏卵大）＞褐灰色土
11	小礫（鶏卵大）＞レンガ色地山土（二次堆積）	26	レンガ色地山土（二次堆積・硬層）
12	レンガ色地山土（二次堆積）＞黄褐色土	27	黄褐色土（軟層）
13	黄褐色土＞レンガ色地山土（二次堆積）	28	褐灰色土＞灰黒色土＋小礫
14	黄褐色土	29	灰黒色土＞褐灰色土
15	レンガ色地山土（二次堆積・ガリガリの硬層）	30	灰褐色土（硬層）

第44表　土層観察表　5

〔杭列　20～24〕

帯曲輪の中途より南側にかけて、長さ11ｍの範囲から検出された杭列で、標高193.0ｍから193.5ｍラインに位置している。杭列の番号は下部から上部にかけて順次20～24とした。

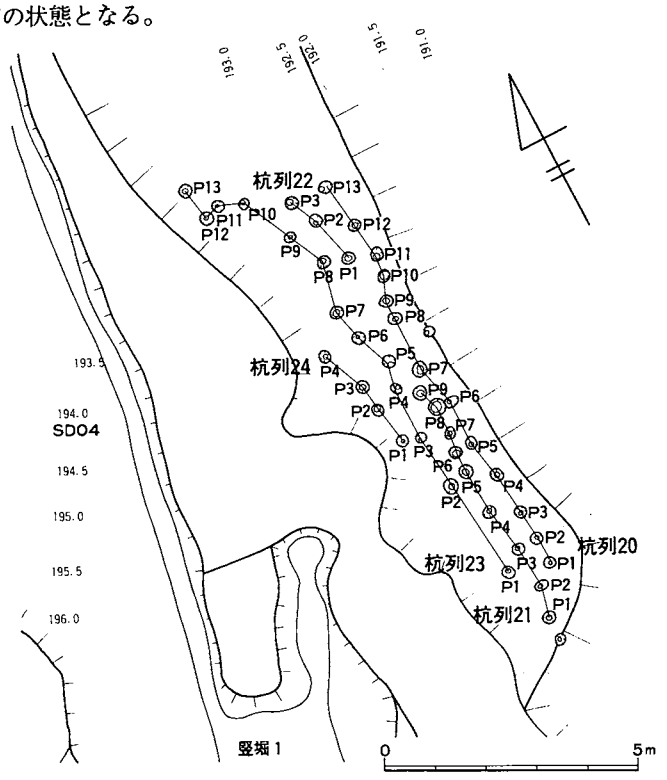
杭列20は13個の杭跡から構成されており、杭間の距離は0.41～1.01ｍで全長8.57ｍを測る。やや蛇行した並びで多少、ジグザグの状態となる。

杭列21と22は同一列のものと思われるが、間に３ｍの空白部分があるので資料整理の段階で２列に細分した。

杭列21は９個の杭跡から構成されており、杭間の距離は0.41～0.91ｍで全長5.12ｍを測る。南北両端を除いて、並びは直線状を呈する。

杭列22は３個の杭跡から構成されており、杭間の距離は0.63～0.92ｍで全長1.55ｍを測る。並びは直線に近い。

杭列23は13個の杭跡から構成されており、杭間の距離は0.34～



第52図　杭列20～24実測図

Pit No	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm) 最深	深さ(cm) 最浅	Pit間(cm)
20－1	23	20	41.0	33.0	52
2	23	21	55.0	49.5	59
3	25	21	49.5	43.5	84
4	25	22	49.0	44.0	80
5	23	20	47.0	42.0	93
6	27	20	66.3	62.3	84
7	30	25	52.0	47.0	101
8	25	23	45.0	42.5	41
9	25	23	38.5	36.0	52
10	26	21	45.0	42.0	41
11	27	20	63.0	53.0	77
12	24	23	33.5	24.0	93
13	30	26	52.0	44.5	
				全長	8.57 m

Pit No	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm) 最深	深さ(cm) 最浅	Pit間(cm)
21－1	24	21	31.0	20.5	64
2	25	22	32.5	22.5	84
3	23	20	47.0	42.0	91
4	31	32	38.0	33.5	88
5	27	24	40.0	35.5	42
6	25	21	34.0	22.5	42
7	25	21	48.5	47.0	60
8	33	30	51.7	45.7	41
9	27	22	39.0	34.0	
				全長	5.12 m
22－1	22	20	60.0	54.0	92
2	25	23	67.5	56.5	63
3	26	21	48.5	44.0	
				全長	1.55 m

Pit No	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm) 最深	深さ(cm) 最浅	Pit間(cm)
23－1	23	20	31.0	27.0	197
2	26	23	29.5	27.0	111
3	19	16	32.5	25.0	112
4	23	19	41.5	35.0	49
5	27	22	50.5	40.2	83
6	25	22	56.0	51.0	66
7	25	23	49.5	42.0	106
8	25	23	52.5	40.5	81
9	21	19	56.5	55.0	113
10	23	21	40.0	38.0	53
11	25	21	45.0	43.5	34
12	28	23	39.0	38.5	71
13	26	23	33.0	31.0	
				全長	10.76 m

Pit No	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm) 最深	深さ(cm) 最浅	Pit間(cm)
24－1	24	21	35.0	31.5	84
2	23	19	38.0	35.0	54
3	28	24	47.0	42.5	91
4	26	24	45.0	43.5	
				全長	2.29 m

第45表　杭列20～24計測表

1.97ｍで全長10.76ｍを測る。南側より北側へ4.2ｍ分の並びは直線状を呈し、残り6.56ｍ分については蛇行の度合が大きい。

杭列24は最も内側に並ぶ杭列で、４個の杭跡から構成されている。杭間の距離は0.54～0.91ｍで全長2.29ｍを測る。直線状の並びとなる。

〔杭列　25～28〕

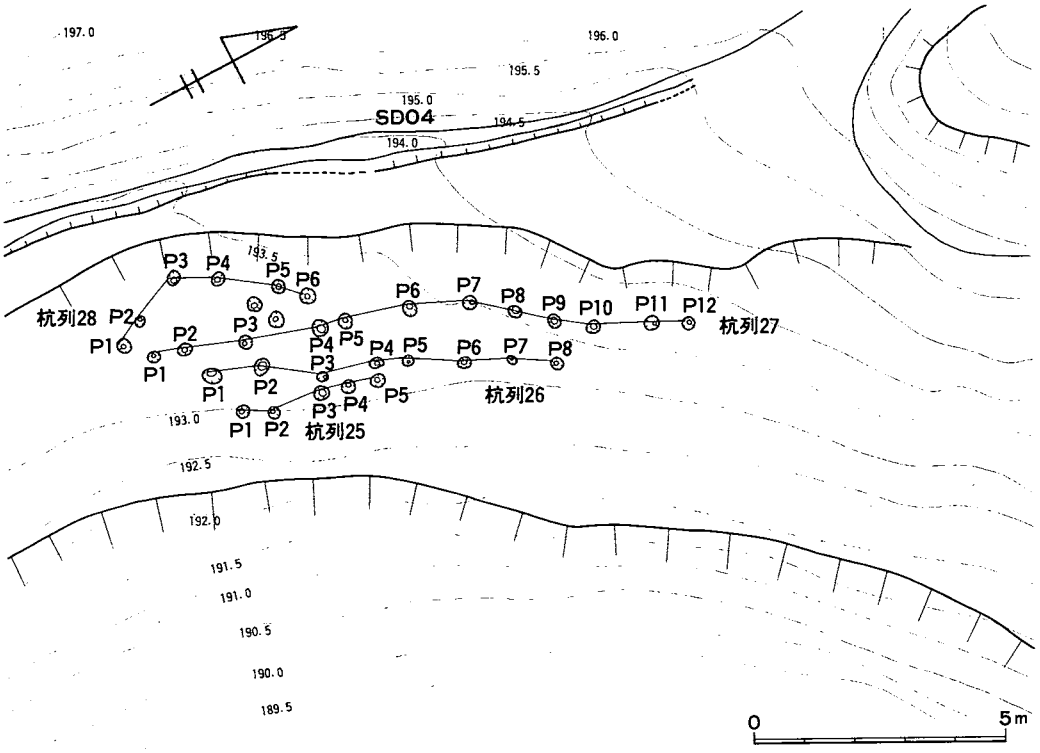
帯曲輪の中途より北側にかけて長さ11.5ｍの範囲から検出された杭列で、標高194.0ｍから193.0ｍラインに位置している。杭列の番号は下部から上部にかけて順次25～28とした。

杭列25は５個の杭跡から構成されており、杭間の距離は0.54～1.08ｍで全長2.79ｍを測る。北側より南側へ1.69ｍ分の並びは直線状を呈し、残り1.1ｍ分はやや蛇行の度合が大きい。

杭列26は８個の杭跡から構成されており、杭間の距離は0.6～1.23ｍで全長6.98ｍを測る。一部に蛇行の箇所があるが、全体的に直線状に近い。

杭列27は12個の杭跡から構成されており、杭間の距離は0.51～1.55ｍで全長10.9ｍを測る。南側より北側へ6.42ｍ分の並びが直線状を呈するものの、残り4.48ｍ分は蛇行の度合が大きい。

杭列28は６個の杭跡から構成されており、杭間の距離は0.62～1.20ｍで全長4.39ｍを測る。くの字の並びとなる。



第53図　杭列25～28実測図

Pit No	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm) 最深	深さ(cm) 最浅	Pit間(cm)
25－1	25	23	51.5	46.0	
					61
2	25	23	49.5	46.0	
					108
3	27	23	66.5	59.5	
					54
4	28	23	62.0	58.0	
					56
5	28	25	61.5	52.0	
全長 2.79 m					
26－1	33	25	73.5	55.5	
					103
2	30	27	49.0	34.0	
					123
3	20	17	54.0	48.5	
					109
4	24	20	52.5	47.7	
					60
5	22	18	61.5	54.0	
					115
6	25	23	57.5	48.0	
					97
7	20	19	50.0	40.5	
					91
8	24	21	47.5	38.0	
全長 6.98 m					

Pit No	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm) 最深	深さ(cm) 最浅	Pit間(cm)
27－1	29	20	63.5	59.0	
					61
2	24	23	60.0	55.0	
					119
3	26	23	49.5	45.0	
					155
4	32	29	59.5	53.5	
					51
5	28	24	49.0	46.5	
					132
6	29	26	59.0	55.5	
					126
7	28	26	45.5	38.0	
					90
8	25	24	47.5	42.5	
					81
9	27	25	43.0	41.0	
					80
10	28	25	59.0	44.5	
					123
11	28	25	45.0	39.0	
					72
12	25	22	38.0	34.0	
全長 10.9 m					

Pit No	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm) 最深	深さ(cm) 最浅	Pit間(cm)
28－1	28	24	50.0	44.5	
					69
2	20	18	38.0	36.5	
					103
3	25	16	41.0	35.5	
					85
4	26	23	48.5	45.0	
					120
5	25	18	49.0	47.5	
					62
6	30	27	39.0	37.0	
全長 4.39 m					

第46表　杭列25～28計測表

第7節　東北尾根筋

〔1〕東北尾根筋(1)

標高200.1mから193.5mラインにかけての長さ36.5mの尾根筋で、N32°Eに主軸方位をとる。比高6.6mの尾根筋から堀切1をはじめとして、土塁の土留め杭跡と見られる遺構（杭群）や杭列が検出された。

〔杭　群〕

堀切1の北岸にあたる東北尾根筋から検出されたもので、扇型をした東西11m、南北7mの範囲に44個の杭跡が存在する。位置的には東北尾根筋の南端にあたる最高所で、標高200.1mから198.5mラインを跨ぐ所にある。杭跡は分布状況から、扇形をした地形の縁を3～4重に取り囲む様に並んでいる事がわかる。

これらの杭跡の性格については隣接の堀切1の存在から、この箇所に当時、堀切に付随した掻き上げの土塁が積まれていた可能性が極めて高い所から、積み土の土留めに用いられた杭の跡とする見方が最も妥当であろう。

調査の際、地表下は地山で積み土らしき土壌は検出できなかったが、これは堀切の廃絶時に土塁が切り崩されて埋め土に利用された可能性がある事や、これに加えて後世の自然作用による土壌流出が考えられる。

杭群①：13個の杭跡から構成されている。杭間の距離は0.34～1.56mで全長10.10mを測る。

杭群②：12個の杭跡から構成されている。杭間の距離は0.41～1.26mで全長7.68mを測る。

杭群③：5個の杭跡から構成されている。杭間の距離は0.32～1.45mで全長3.31mを測る。

杭群④：3個の杭跡から構成されている。従来は、杭群③と同一の可能性がある。杭間の距離は0.83～1.04mで全長1.87mを測る。

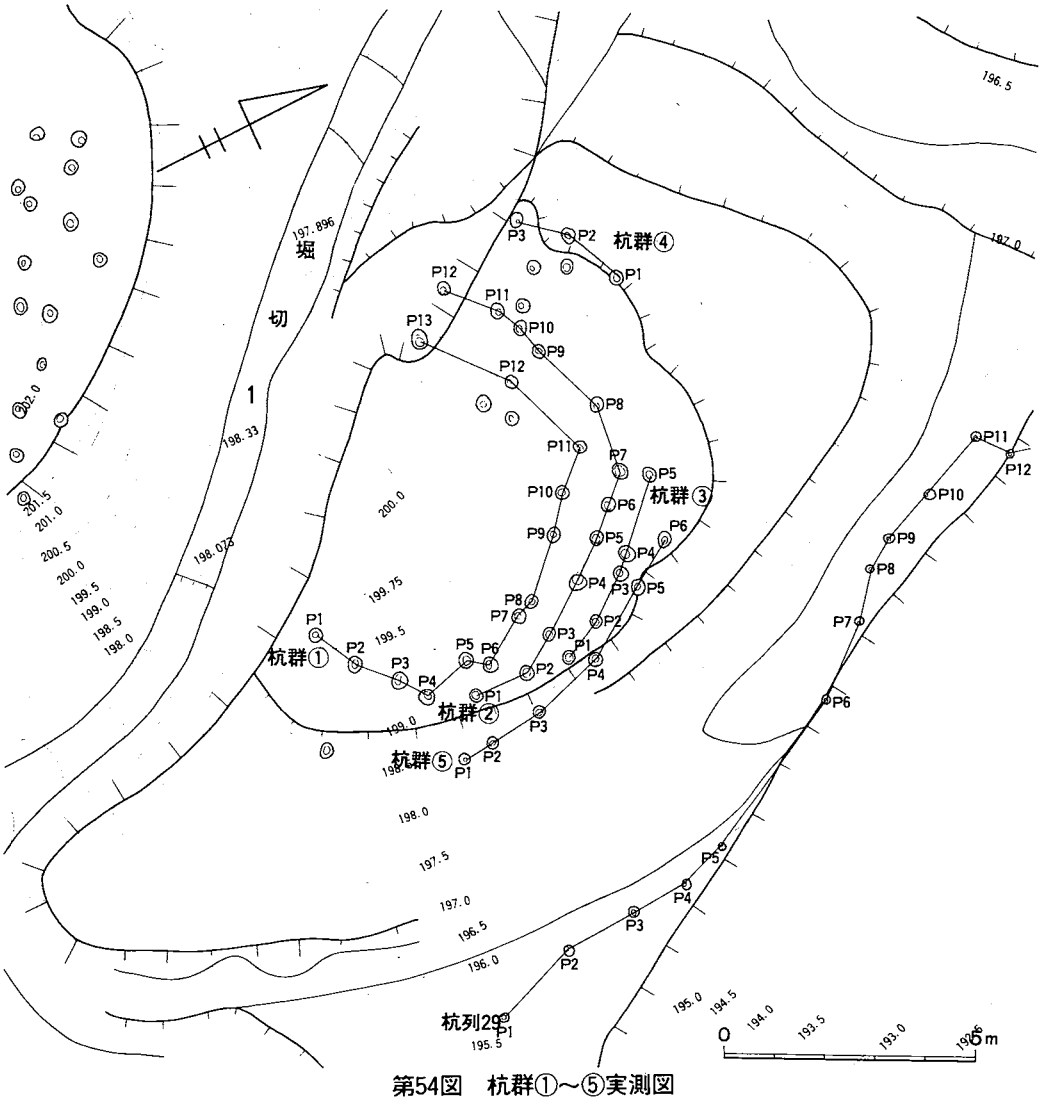
杭群⑤：6個の杭跡から構成されている。杭間の距離は0.67～1.30mで全長4.92mを測る。

Pit No	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm) 最深	深さ (cm) 最浅	Pit間 (cm)
①－1	23	20	76.2	67.4	
					72
2	27	25	36.7	26.1	
					81
3	26	22	43.5	35.5	
					53
4	25	16	40.5	32.3	
					83
5	23	15	26.0	20.5	
					36
6	25	19	31.5	23.2	
					90
7	23	17	27.0	23.0	
					34
8	20	17	24.5	19.5	
					108
9	23	18	26.2	23.0	
					68
10	19	18	32.5	24.5	
					75
11	19	17	18.5	16.5	
					154
12	23	21	29.0	27.0	
					156
13	28	20	26.5	21.5	
全長 10.10 m					
②－1	20	18	22.5	18.5	
					90
2	22	20	24.5	18.0	

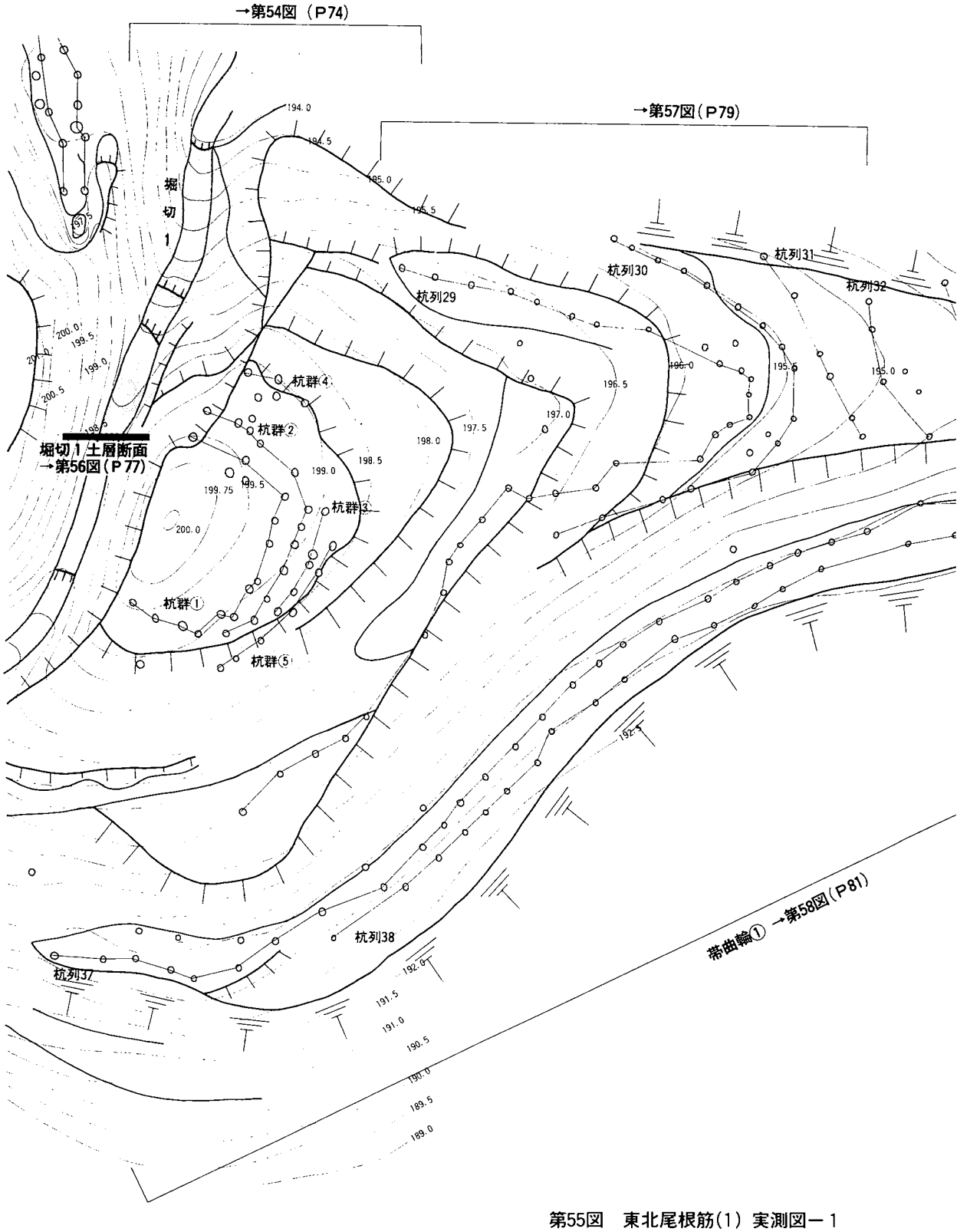
Pit No	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm) 最深	深さ (cm) 最浅	Pit間 (cm)
②－2					
					68
3	19	17	26.0	18.2	
					97
4	26	24	48.0	42.2	
					71
5	19	17	23.5	21.5	
					55
6	21	18	29.9	27.7	
					60
7	23	21	43.0	40.3	
					108
8	21	16	25.5	21.5	
					126
9	21	19	20.5	18.0	
					47
10	21	18	35.0	34.5	
					41
11	22	20	36.0	34.5	
					95
12	22	19	34.0	29.5	
全長 7.68 m					
③－1	21	19	31.5	23.5	
					71
2	19	16	37.0	30.3	
					83
3	24	22	52.7	45.7	
					32
4	25	22	24.8	18.5	

Pit No	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm) 最深	深さ (cm) 最浅	Pit間 (cm)
③－4					
					145
5	33	24	36.5	30.8	
全長 3.31 m					
④－1	23	20	29.5	21.3	
					104
2	23	19	33.0	28.5	
					83
3	21	19	65.0	60.5	
全長 1.87 m					
⑤－1	26	20	27.8	24.3	
					67
2	19	17	23.8	18.0	
					90
3	20	18	23.5	17.8	
					121
4	24	20	43.9	36.7	
					130
5	24	21	36.7	30.0	
					84
6	23	18	34.0	27.5	
全長 4.92 m					

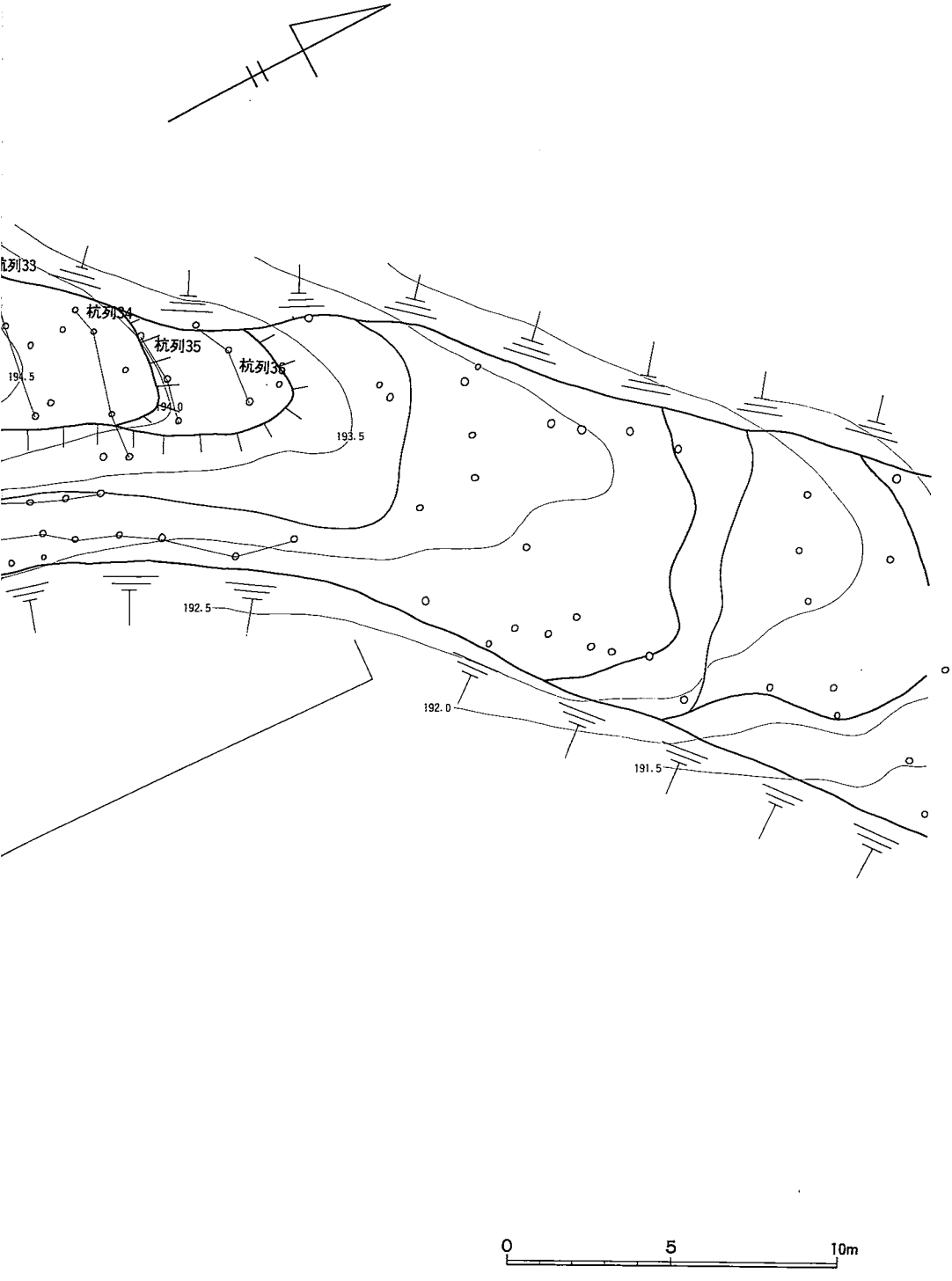
第47表　杭群①～⑤計測表



第54図　杭群①～⑤実測図



第55図　東北尾根筋(1) 実測図－1


杭列33
杭列34
杭列35
杭列36
194.5
194.0
193.5
192.5
192.0
191.5
0
5
10m

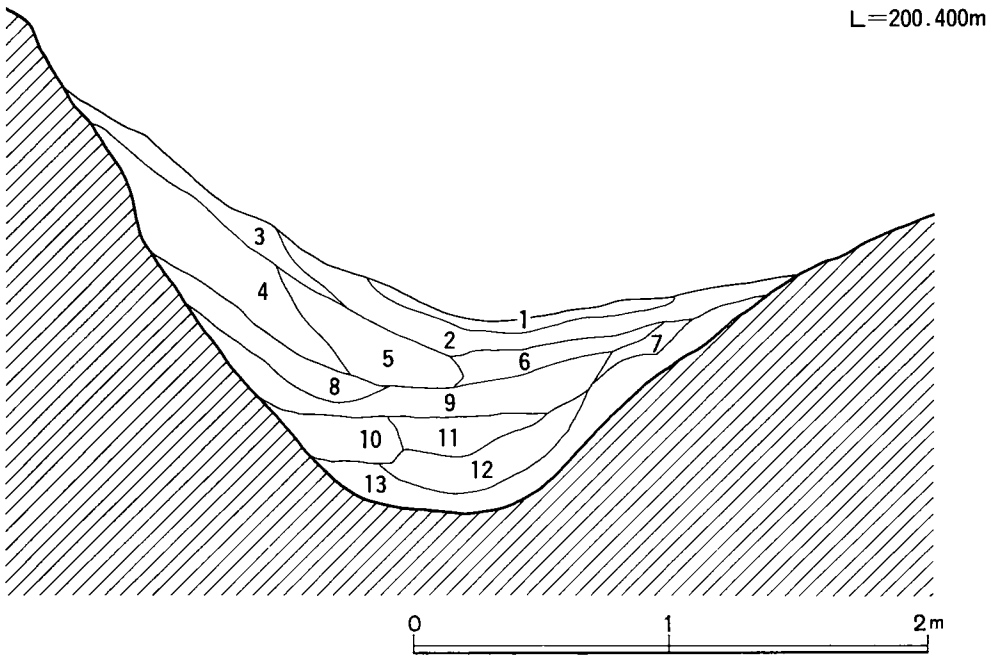
〔堀切　1〕

主軸尾根から派生する東北尾根の分岐点から検出されたもので、洪積世の礫層を掘り込んだ堀切である。検出面の長さは21ｍで、東端は主軸尾根東下の帯曲輪ＳＤ０４に吸収され、西端は山腹に開口する。堀切の上場幅は５ｍで大規模工事の痕が伺われる。走行の方位はＮ42°Ｗで、東西両端はやや南側へカーブを描く。堀底は幅0.7～1.0ｍ、長さ６ｍ分がほぼ水平で、これより東西両側へ竪堀状に下っているが傾斜の度合いは西側に大きく、水平距離にして９ｍ下った所との比高は４ｍを測る。対して、東側は６ｍの距離で1.5ｍの比高である。

深さは堀底の中央部と東北尾根筋との比高が1.76ｍで、主軸尾根における堀切の切り込み面との比高は3.17ｍである。

堀壁はいずれも急峻に削り落とされている。

堀切の廃絶については、埋土の状態から瞬時に埋め戻された可能性が高い。埋土から遺物は出土していない。



第56図　堀切１土層断面図

1	最上面表土（樹根腐食土）	8	黄褐色土（やや汚れた感じ）＞小礫（少量）
2	表土（灰黒色土・樹根混じり）	9	黄褐色土（引き締まった土層）＞小礫（うずら卵大）
3	灰黒色土＋茶褐色土（硬層）	10	黄褐色土＞礫
4	黄褐色土（パサパサ・黄色味が濃い）	11	茶褐色土（汚れた感じ・軟層）＞小礫（うずら卵大）
5	黄色土（樹根混じり・汚れた感じ）	12	小礫（こぶし大）＞茶褐色土（汚れた感じ）
6	汚れた黄色土	13	明褐色地山土の剝離土＞小礫（鶏卵大）
7	黄褐色土（９層土より小礫の混入が少ない）		

第48表　堀切１土層観察表

〔杭列　29〕

尾根筋南東端の標高195.5mのラインに端を発し、中途で196.5mラインを跨ぎながら、等高線沿いに北側の尾根筋をぐるりと取り囲む杭列である。31個の杭跡が検出された。全長38.93mで尾根筋の長軸方向に対する杭列の広がりは、南側から北側へ直線距離にして17.5mを測る。さらに北東端と南西端の杭間は19.5mの距離がある。杭間の距離は0.45～3.44mである。

Pit No	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm) 最深	深さ(cm) 最浅	Pit間(cm)
29－1	20	18	46.3	39.9	
					185
2	22	20	40.6	36.8	
					154
3	21	17	26.9	22.7	
					114
4	18	17	39.8	31.4	
					110
5	16	15	32.2	24.0	
					344
6	20	17	41.8	36.2	
					167
7	17	15	39.2	34.8	
					107
8	16	15	42.0	40.5	
					71
9	22	18	43.7	41.2	
					114
10	26	19	48.5	46.3	
					150
11	22	18	30.3	27.9	
					73
12	17	15	29.7	24.9	

Pit No	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm) 最深	深さ(cm) 最浅	Pit間(cm)
29－12					
					94
13	20	17	46.8	35.5	
					142
14	18	16	37.3	30.7	
					115
15	17	16	32.0	30.0	
					288
16	21	18	40.5	35.1	
					102
17	23	20	31.2	26.7	
					60
18	21	20	31.5	27.9	
					72
19	21	19	66.7	63.8	
					85
20	18	16	64.1	62.1	
					54
21	19	18	30.7	27.1	
					45
22	17	15	49.8	47.5	
					80
23	20	16	52.2	48.7	

Pit No	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm) 最深	深さ(cm) 最浅	Pit間(cm)
29－23					
					270
24	21	18	36.0	32.4	
					180
25	19	17	28.7	25.9	
					90
26	19	17	32.6	29.4	
					134
27	18	16	43.6	40.7	
					95
28	25	21	49.9	44.8	
					146
29	20	18	48.5	36.7	
					125
30	22	18	38.1	33.4	
					127
31	23	20	51.4	46.2	
全長 38.93 m					

第49表　杭列29計測表

〔杭列　30〕

杭列29の北側に並列するもので、平面形状は舌状形を呈する。16個の杭跡が検出された。

杭列29とは1.0～3.0mの距離があり、標高196.0mラインから195.0mラインを跨いで全長19.35mを測る。尾根筋の長軸方向に対する杭列の広がりは7.2mで、北東端と南西端の杭間については10.5mの距離がある。杭間の距離は0.78～2.23mである。

Pit No	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm) 最深	深さ(cm) 最浅	Pit間(cm)
30－1	29	22	69.4	56.9	
					172
2	23	19	49.7	42.0	
					223
3	23	20	44.7	35.5	
					102
4	25	21	55.9	46.5	
					213
5	20	15	60.5	53.4	
					137
6	20	16	65.1	57.7	
					111
7	19	16	53.4	50.1	

Pit No	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm) 最深	深さ(cm) 最浅	Pit間(cm)
30－9					
					174
8	19	16	49.3	44.7	
					93
9	20	16	53.5	51.1	
					101
10	20	18	34.0	29.6	
					105
11	23	18	36.3	28.2	
					136
12	19	16	41.5	36.9	
					91
13	25	19	61.9	55.5	

Pit No	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm) 最深	深さ(cm) 最浅	Pit間(cm)
30－13					
					97
14	20	18	80.8	74.1	
					102
15	20	17	53.7	48.0	
					78
16	21	15	52.6	31.2	
全長 19.35 m					

第50表　杭列30計測表

〔杭列　31〕

杭列30の北側に並列するもので、標高195.0mラインの尾根筋を横断するかの様に直線状の並びとなる。6個の杭跡が検出され、全長7.34mを測る。杭間の距離は、0.75～2.30mである。

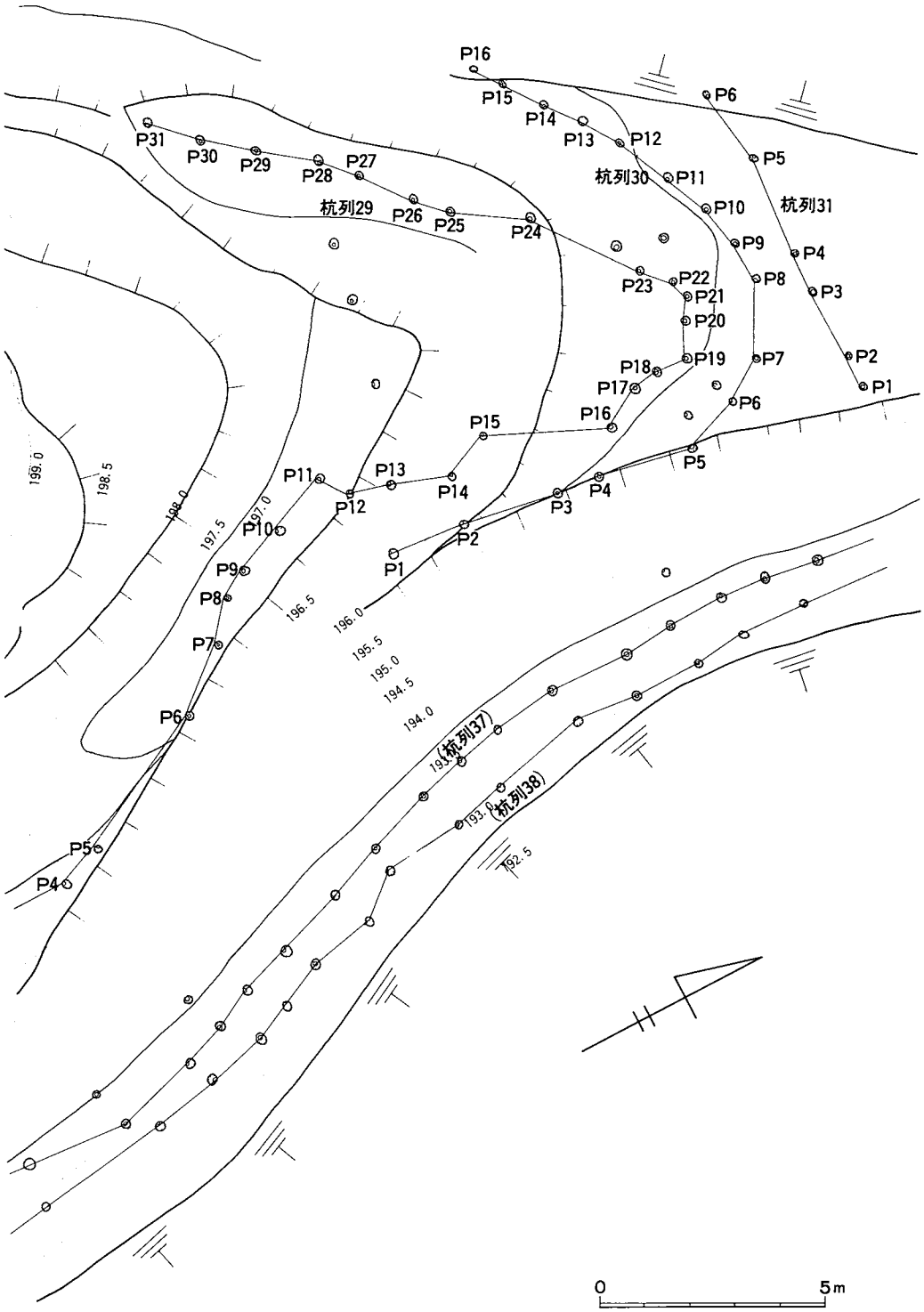
Pit No	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm) 最深	深さ(cm) 最浅	Pit間(cm)
31－1	18	16	30.4	26.2	
					75
2	17	15	36.5	31.8	
					159
3	23	20	24.2	20.6	
					95
4	17	16	27.7	25.7	
					230
5	18	16	31.2	26.7	
					175
6	17	16	45.4	31.7	
全長 7.34 m					

第51表　杭列31計測表

〔杭列　32～36〕

東北尾根筋の北側12m分についても尾根筋から17個の杭跡が検出された。これらは見方によって、尾根筋を横断する様な5列の杭列となるので、参考までに推定線を引いた。

杭列32は、標高195.0mから194.5mラインから検出されたもので、4個の杭跡から構成され



第57図　東北尾根筋(1) 実測図－2

ており、全長5.57ｍを測る。杭間の距離は1.06～2.61ｍで、並びは尾根筋の北側に対してやや凹の状態を呈する。

杭列33は、標高194.5ｍラインに沿って並ぶ杭列で、３個の杭跡から構成されている。全長5.33ｍで直線状の並びとなる。杭間の距離は2.42ｍと2.91ｍでやや距離にひらきがある。

杭列34は、標高194.0ｍラインに沿って並ぶ杭列で、４個の杭跡から構成されている。杭間の距離は　0.98～2.51ｍで全長4.89ｍを測る。ややジグザグの並びとなる。

杭列35は、３個の杭跡から構成されており、杭間の距離は1.33～1.55ｍで、全長2.88ｍを測る。並びは尾根筋の北側に対して、僅かに凸の状態を呈する。

杭列36は、標高193.5ｍから194.0ｍラインから検出されたもので、３個の杭跡から構成されている。杭間の距離は1.28～1.71ｍで全長2.99ｍを測る。杭列37と同一の並びとなる。

Pit No	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm) 最深	深さ(cm) 最浅	Pit間(cm)
32－1	20	18	31.0	23.5	
					261
2	21	17	24.3	19.9	
					190
3	21	19	29.4	22.9	
					106
4	22	21	28.1	23.9	
				全長	5.57 m
33－1	26	21	32.5	30.9	
					291
2	18	15	38.9	33.7	
					242
3	19	17	62.0	54.6	
				全長	5.33 m

Pit No	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm) 最深	深さ(cm) 最浅	Pit間(cm)
34－1	20	18	36.3	27.2	
					140
2	18	13	40.8	36.3	
					251
3	19	18	29.7	24.8	
					98
4	21	17	55.4	47.6	
				全長	4.89 m
35－1	20	15	47.2	43.2	
					133
2	26	22	31.7	28.5	
					155
3	19	17	40.8	35.8	
				全長	2.88 m

Pit No	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm) 最深	深さ(cm) 最浅	Pit間(cm)
36－1	18	16	30.2	29.0	
					171
2	18	15	34.0	31.3	
					128
3	18	17	35.1	29.3	
				全長	2.99 m

第52表　杭列32～36計測表

〔帯曲輪①〕

尾根筋の東側斜面から、犬走りの様な帯曲輪①が検出された。標高193.5ｍラインと192.5ｍラインを削平したもので、検出部分は幅1.5～3.3ｍ、長さ40ｍを測った。

上面はほぼ水平状態に削平されていたが、道路跡にみられるような硬化面はなく、地山面を切り込む杭列37・38の存在が明らかになった。

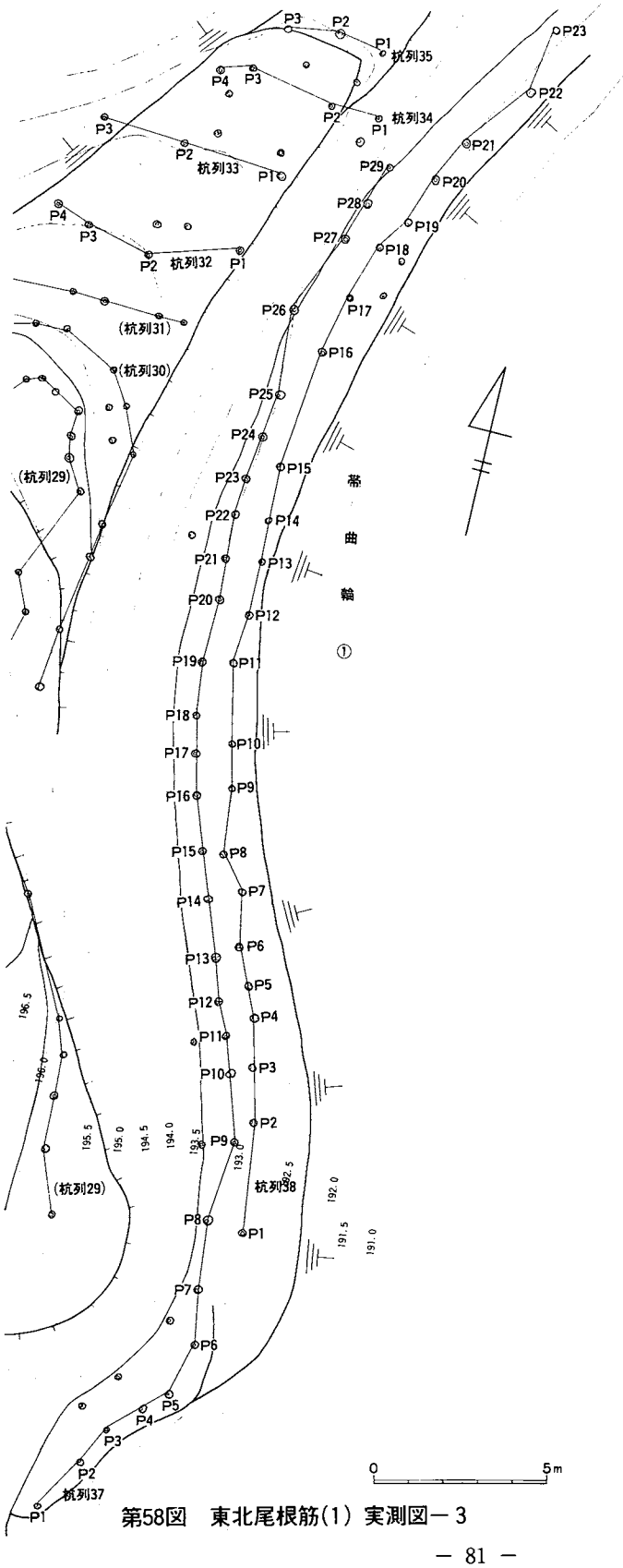
〔杭列　37・38〕

帯曲輪①から検出された２重の杭列で、両杭間は0.7～1.3ｍの距離がある。山付きの内側のものを杭列37とし、外側のものを杭列38とした。

杭列37は全長41.17ｍで、29個の杭跡から構成されている。

杭列38は全長36.87ｍで、杭列37の南側より８番目の杭跡からはじまっており、23個の杭跡から構成されている。

各杭列における杭間の距離は、杭列37が0.85～2.5ｍで、杭列38が0.94～3.14ｍである。両杭列とも極めてしっかりとした造りである。



第58図　東北尾根筋(1) 実測図－3

Pit No	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm) 最深	深さ (cm) 最浅	Pit間 (cm)
37－1	20	18	44.9	35.8	177
2	20	19	39.0	30.5	116
3	17	14	38.1	30.2	118
4	22	19	33.7	27.9	85
5	21	19	33.6	23.5	158
6	20	18	32.8	27.6	147
7	25	20	39.9	30.1	201
8	26	23	38.5	32.4	233
9	20	17	40.7	37.3	196
10	24	22	61.6	50.7	105
11	20	17	56.5	49.9	103
12	21	20	60.9	47.7	125
13	26	22	73.1	73.1	164
14	27	21	62.1	53.2	144
15	21	15	35.1	28.5	160
16	21	16	43.2	38.6	114
17	21	19	45.8	41.1	110
18	21	18	43.5	33.8	147
19	24	19	43.5	36.2	185
20	27	23	36.6	28.0	117
21	23	18	64.1	56.6	127
22	22	18	60.8	53.9	99
23	22	20	38.5	28.6	123
24	23	22	37.7	29.8	127
25	26	23	39.7	35.3	250
26	20	19	35.5	29.3	247
27	23	21	36.3	29.1	116
28	24	21	35.2	28.4	123
29	20	19	38.3	32.3	
				全長	41.17 m

第53表　杭列37計測表

Pit No	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm) 最深	深さ (cm) 最浅	Pit間 (cm)
38－1	20	16	42.1	30.4	314
2	25	20	54.6	45.6	156
3	37	20	72.0	64.5	142
4	26	23	69.3	55.7	94
5	22	19	68.5	58.6	111
6	23	20	73.6	60.8	153
7	21	18	54.6	43.7	122
8	27	19	63.5	54.8	186
9	20	17	74.8	65.7	126
10	23	18	65.1	53.7	229
11	28	19	62.6	47.4	143
12	22	20	53.4	44.8	154
13	20	18	48.0	41.9	119
14	26	16	62.4	55.9	141
15	19	18	43.5	29.5	344
16	23	19	46.7	42.7	176
17	19	18	23.9	16.0	163
18	21	19	45.9	41.8	105
19	23	19	47.7	44.0	151
20	22	24	34.4	31.4	133
21	22	20	33.8	31.6	234
22	25	16	39.4	33.1	191
23	23	18	27.1	20.6	
				全長	36.87 m

第54表　杭列38計測表

〔2〕東北尾根筋(2)

標高192.0mから188.0mにかけての長さ30.5mの尾根筋で、N60°Eに主軸方位をとる。背面の幅は上位で10mを測るが下るにつれて漸次、先細りとなり、上位から長さ26mの所で最小3.5m幅に括れる。但し、先端部の長さ6.5m分についてはコブシの様な形状を呈し、6.5m幅に拡大している。

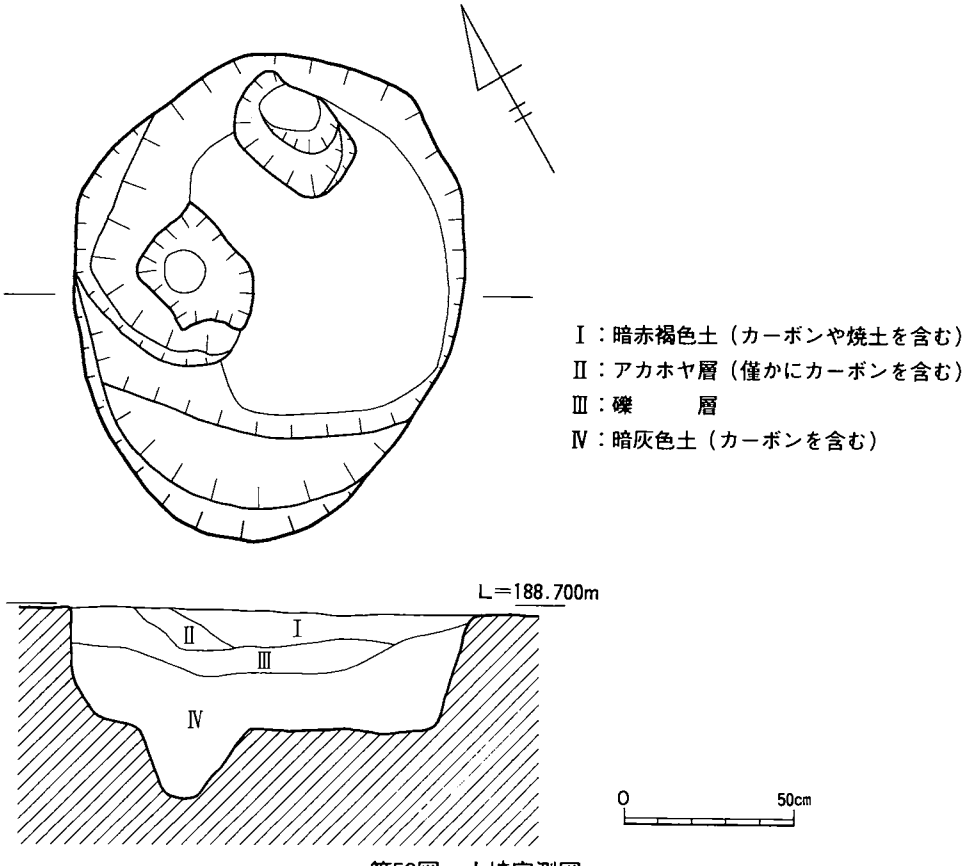
〔柱　穴〕

背面を中心に60個の柱穴が検出された。柱穴は、標高190.5mから189.5mのラインに密集しているが、杭列などに推定される様なまとまりは無かった。

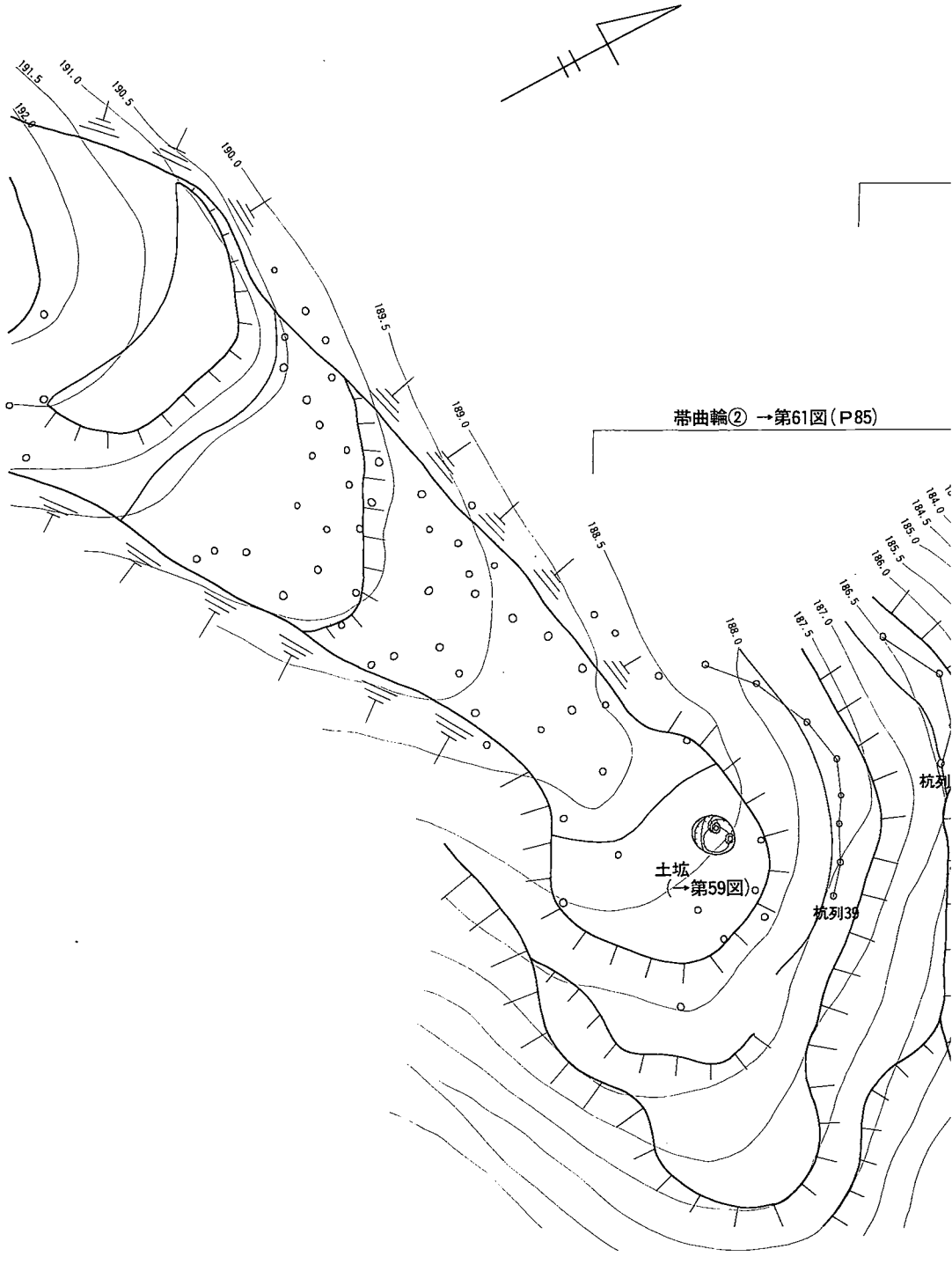
〔土　坑〕

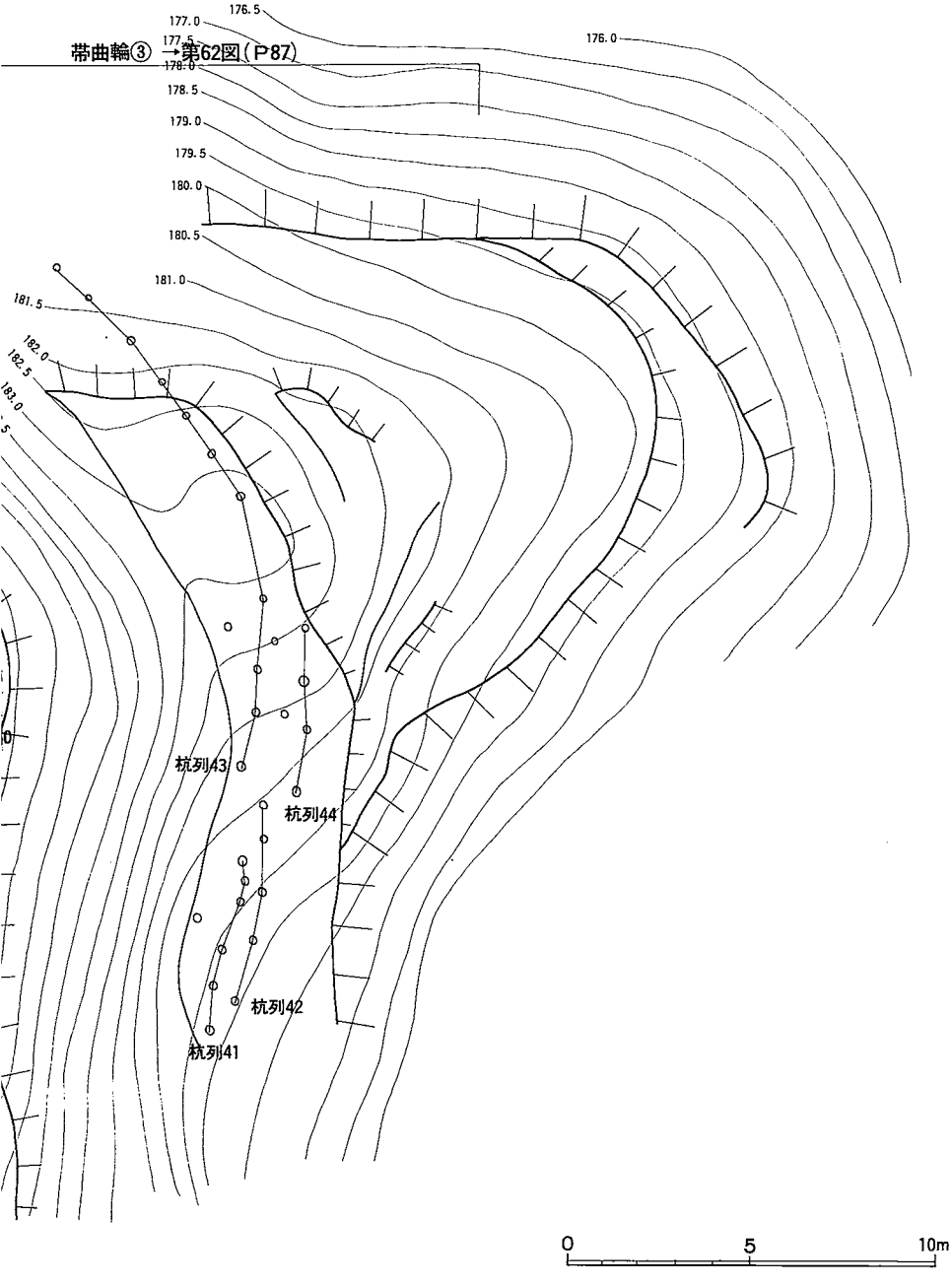
尾根筋の先端部から検出されたもので、標高188.5mラインの地山を切り込むものである。埋土は中位層土が小礫の混じるアカホヤで、下位層土は炭化物混じりの暗灰色土であった。

平面形状は楕円形で、長軸1.4m、短軸1.17m、深さ35cmを測り、主軸方位はN56°Eを示した。床面からは2個の柱穴が検出された。柱穴の形状は隅丸方形に近く、長径37～40cm、短径25～27cm、深さ21～25cmであった。



第59図　土坑実測図


191.5
191.0
190.5
190.0
189.5
189.0
188.5
188.0
187.5
187.0
186.5
186.0
185.5
185.0
184.5
184.0
帯曲輪② →第61図(P85)
土坑
(→第59図)
杭列39
杭列



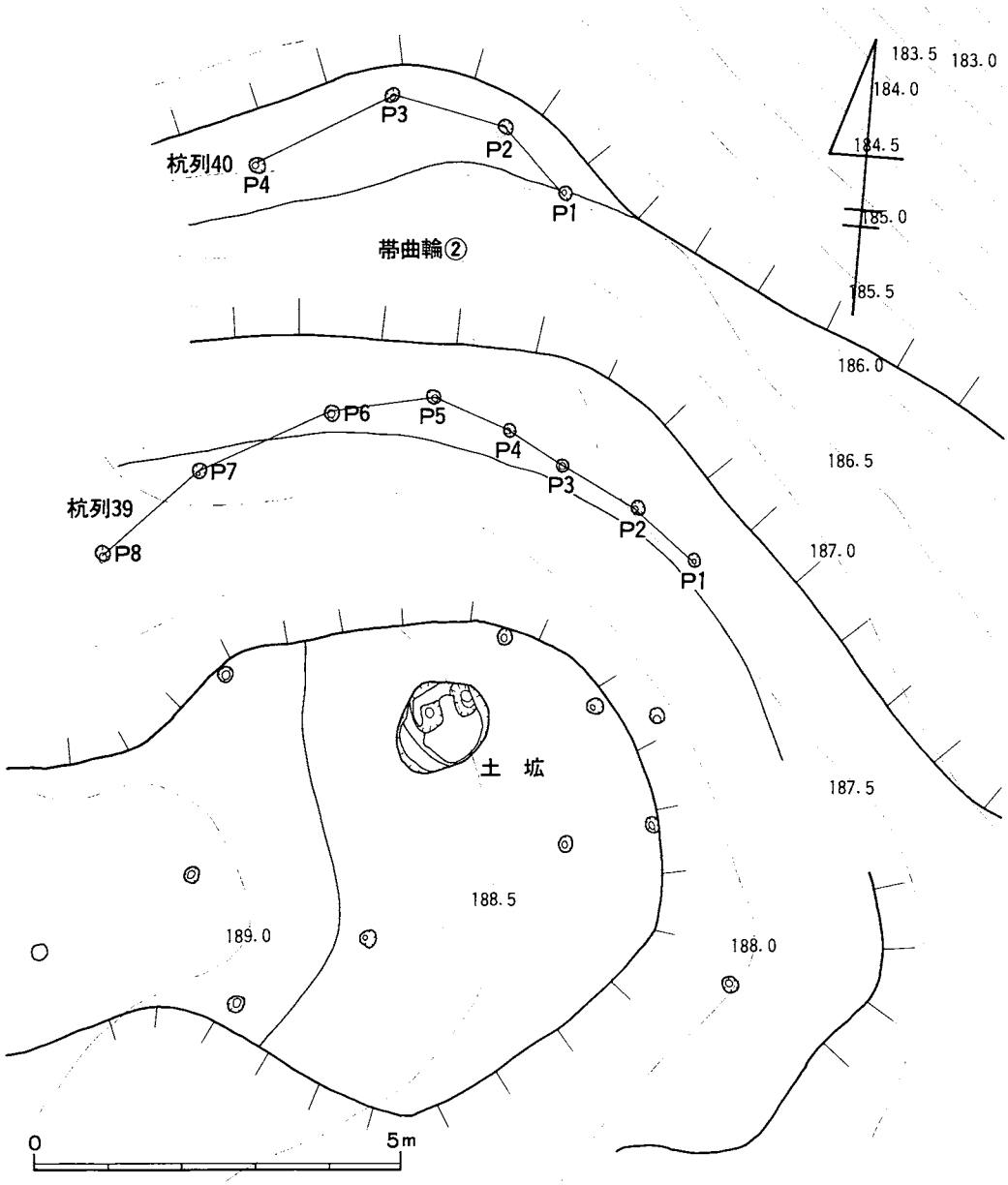
第60図　東北尾根筋(2) 突端部実測図

〔3〕東北尾根突端部

標高187.5ｍから176.0ｍラインにかけての長さ31ｍの尾根筋で、N15°Wに主軸方位を取る。比高11.5ｍの尾根筋から、帯曲輪や杭列が検出された。

〔帯曲輪②〕

標高186.5ｍ～186.0ｍラインから検出された小規模な帯曲輪で、最大幅1.5ｍ、検出部分の長さは6ｍを測る。西側部分が未掘である。地山の上面は、非常に丁寧な削平により平坦地となっている。この曲輪より杭列39が検出された。



第61図　東北尾根突端部実測図－1

〔杭列　39〕

標高188.0mから187.5mのラインに並ぶ杭列で、8個の杭穴が検出された。

杭間の距離は0.89～2.0mで、西端の2個を除き6個の柱穴は標高187.5mラインにほぼ並列し、全長9.31mを測る。

尾根筋の北側に対して並びは凸の状態となる。

Pit No	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm) 最深	深さ(cm) 最浅	Pit間(cm)
39－1	17	15	29.0	26.9	
					106
2	19	16	51.8	50.0	
					115
3	18	15	30.8	27.7	
					89
4	17	15	41.9	39.6	
					109
5	20	18	44.4	41.9	
					143
6	21	19	43.8	40.2	
					200
7	20	15	35.2	30.9	
					169
8	21	18	46.3	42.3	
				全長	9.31 m

第55表　杭列39計測表

〔杭列　40〕

帯曲輪1の縁に並ぶもので、4個の柱穴が検出された。杭間の距離は1.24～2.11mを測る。杭列は未掘の西側へ延びる事が確実で、検出部分は4.91mを測る。杭列39と同様に尾根筋の北側に対して並びは凸の状態となる。

Pit No	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm) 最深	深さ(cm) 最浅	Pit間(cm)
40－1	20	18	47.3	38.4	
					124
2	21	20	59.1	49.2	
					156
3	20	18	44.9	37.9	
					211
4	21	16	35.1	31.2	
				全長	4.91 m

第56表　杭列40計測表

〔帯曲輪③〕

標高183.0mから180.0mの尾根筋を東西方向に大きく削平したもので、幅2.7～4.2m、長さ18m分を検出した。東側部分は路線外で未掘である。上面は西側寄りがやや平坦であるのに対し、東側部分は緩やかな傾斜地となっている。他方、帯曲輪の南壁は強い削り落としにより、かなりの急傾斜地を呈する。この帯曲輪から杭列41～44が検出された。

〔杭列　41〕

帯曲輪③の南東側より検出された杭列で、標高181.0mラインを跨ぐ様に6個の杭穴が検出された。杭間の距離は0.57～1.30mで杭列42と並列し、全長4.76mを測る。並びはやや蛇行の状態となる。

〔杭列　42〕

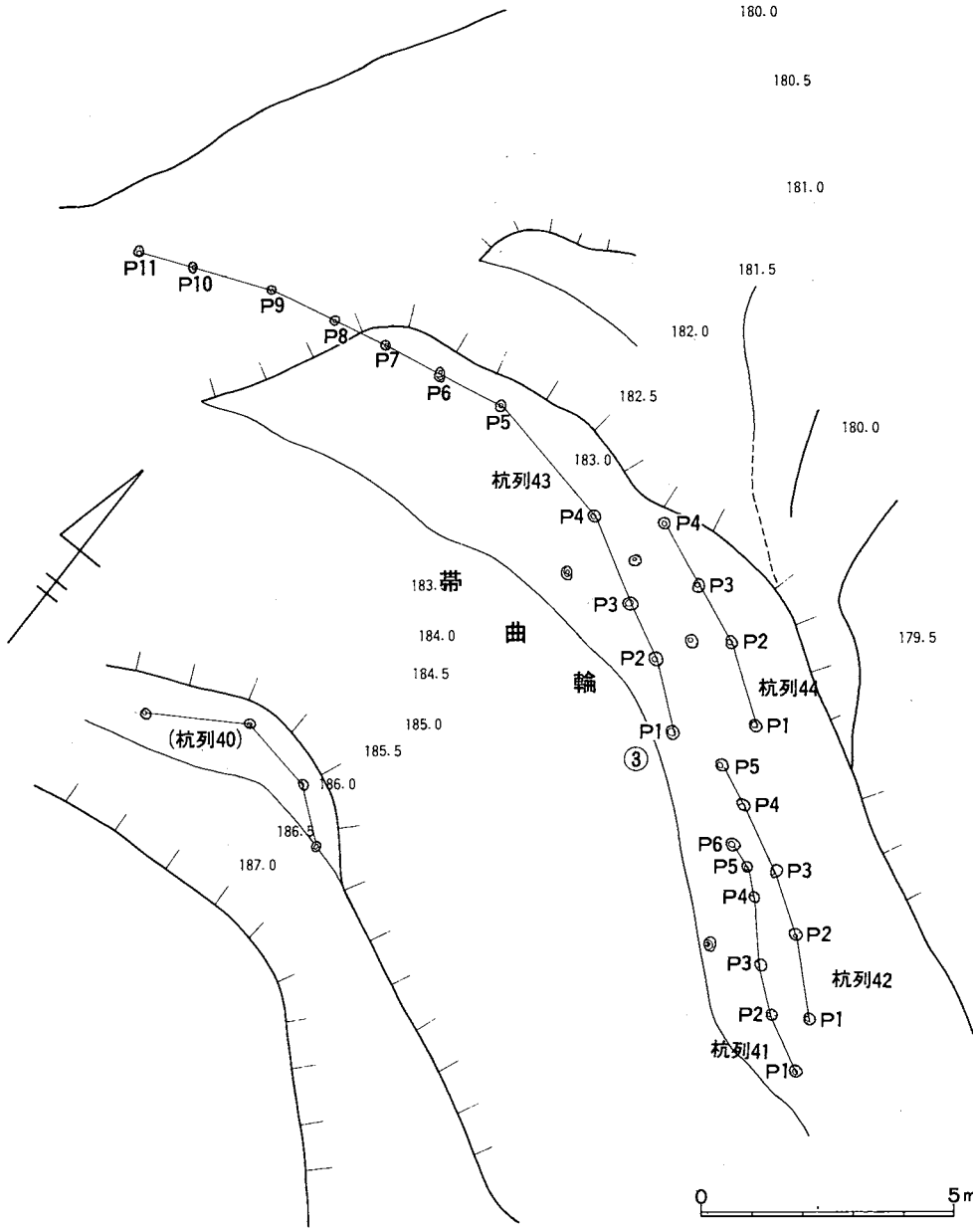
杭列41の北側前面に並ぶ杭列で、両杭間の距離は0.5～0.8mを測る。標高181.5mから180.5mラインを跨いで、5個の柱穴が検出された。杭間の距離は0.93～1.55mで全長5.26mを測る。尾根筋の北側に対して並びはやや凸の状態となる。

〔杭列　43〕

帯曲輪③の中央部より西側へ延びる全長15.32mの杭列である。標高183.0mから181.5mラインを跨いで、11個の杭穴が検出されたが、内4個は帯曲輪からはみだして山腹に延びている。杭間の距離は1.12～2.87mを測る。尾根筋の北側に対して並びは凸の状態となる。

〔杭列　44〕

杭列43の北東側前面に並ぶ杭列で、両杭間の距離は1.1～1.5mを測る。標高182.5mから181.0mを跨いで、4個の杭穴が検出された。杭間の距離は1.30～1.63mで全長4.29mを測る。



第62図　東北尾根突端部実測図－２

Pit No	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm) 最深	深さ(cm) 最浅	Pit間(cm)
41－1	23	21	42.4	34.1	124
2	23	20	44.2	37.4	102
3	25	22	62.7	57.0	130
4	21	18	61.3	55.3	63
5	21	19	41.3	34.2	57
6	27	23	43.8	35.2	
全長 4.76 m					
42－1	21	19	58.8	46.6	155
2	25	20	65.6	54.5	135
3	26	20	66.7	58.1	143
4	24	20	55.4	48.6	

Pit No	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm) 最深	深さ(cm) 最浅	Pit間(cm)
42－4					93
5	25	20	39.4	30.5	
全長 5.26 m					
43－1	24	22	29.5	22.8	146
2	29	22	58.8	51.6	120
3	30	23	36.1	30.3	187
4	23	20	48.7	38.6	287
5	22	18	31.2	28.4	138
6	25	15	35.9	32.1	123
7	18	15	33.3	27.3	117
8	18	15	38.8	28.2	

Pit No	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm) 最深	深さ(cm) 最浅	Pit間(cm)
43－8					139
9	17	15	37.5	31.0	163
10	19	15	49.6	51.1	112
11	20	17	48.4	41.8	
全長 15.32 m					
44－1	26	20	65.0	58.4	163
2	23	20	62.0	53.9	130
3	27	20	65.3	54.5	136
4	23	20	62.1	55.8	
全長 4.29 m					

第57表　杭列41～44計測表

第8節　陣　の　山

長さ95mの尾根筋で、長軸方向は南北方向にある。尾根筋の形状は、南端より北側へ長さ40m分が馬の背の様な形状をしており、背面の幅は2～3mと極端に狭い。この部分の尾根筋からは、柱穴を伴う方形の掘り込み（ＳＸ０１）が検出された。

さらに、尾根筋の中途から北側の基底部にかけての長さ55mの範囲内には、8段から成る削平地があり、堀切4をはじめ2棟分の建築址（ＳＢ２５・ＳＢ２６）や杭列が検出された。

ＳＢ２５は尾根筋の基底部寄りから検出されたもので、標高200.0mから199.5mラインを跨ぐ所にある。

一方、ＳＢ２６はＳＢ２５より南側へ10m離れた尾根筋から検出されたもので、標高197mを跨ぐ所にある。

杭列では、確たる並びのものが5条（杭列46・47・49～51）、他に小規模なものが12条検出された。

〔杭列　46・47〕

尾根筋の東辺沿いにあって、基底部より南側へ延びる2重の杭列である。杭列の間隔は0.5～2.0mで、外側のものを杭列46、内側のものを杭列47とした。

杭列46は、標高210.0mから197.0mラインを跨ぐ全長25.61mの杭列で、22個の杭跡から構成されている。杭間の距離は0.37～2.51mを測る。

杭列47は、標高200.5mから199.0mラインを跨ぐ全長18.45mの杭列で、19個の杭跡から構成されている。杭間の距離は0.56～2.09mを測る。

Pit No	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm) 最深	深さ(cm) 最浅	Pit間(cm)
46－1	26	16	49.6	44.9	102
2	15	13	45.2	39.7	58
3	21	16	42.7	33.7	76
4	22	16	46.4	39.6	209
5	21	19	55.8	47.2	37
6	23	19	55.9	49.4	102
7	20	17	43.8	38.4	120
8	23	19	38.6	35.4	67
9	17	15	43.7	37.0	

Pit No	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm) 最深	深さ(cm) 最浅	Pit間(cm)
46－9					71
10	18	16	36.7	25.5	104
11	17	14	29.5	23.0	129
12	17	14	46.1	39.0	251
13	22	18	42.7	37.9	82
14	18	14	40.1	36.3	159
15	26	18	47.7	40.5	98
16	23	20	34.8	29.9	121
17	20	17	34.4	22.4	

Pit No	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm) 最深	深さ(cm) 最浅	Pit間(cm)
46－17					89
18	17	15	34.6	26.1	158
19	22	17	54.0	49.0	116
20	24	19	38.0	29.5	242
21	23	21	52.5	45.0	170
22	16	14	23.0	20.0	
					全長 25.61 m

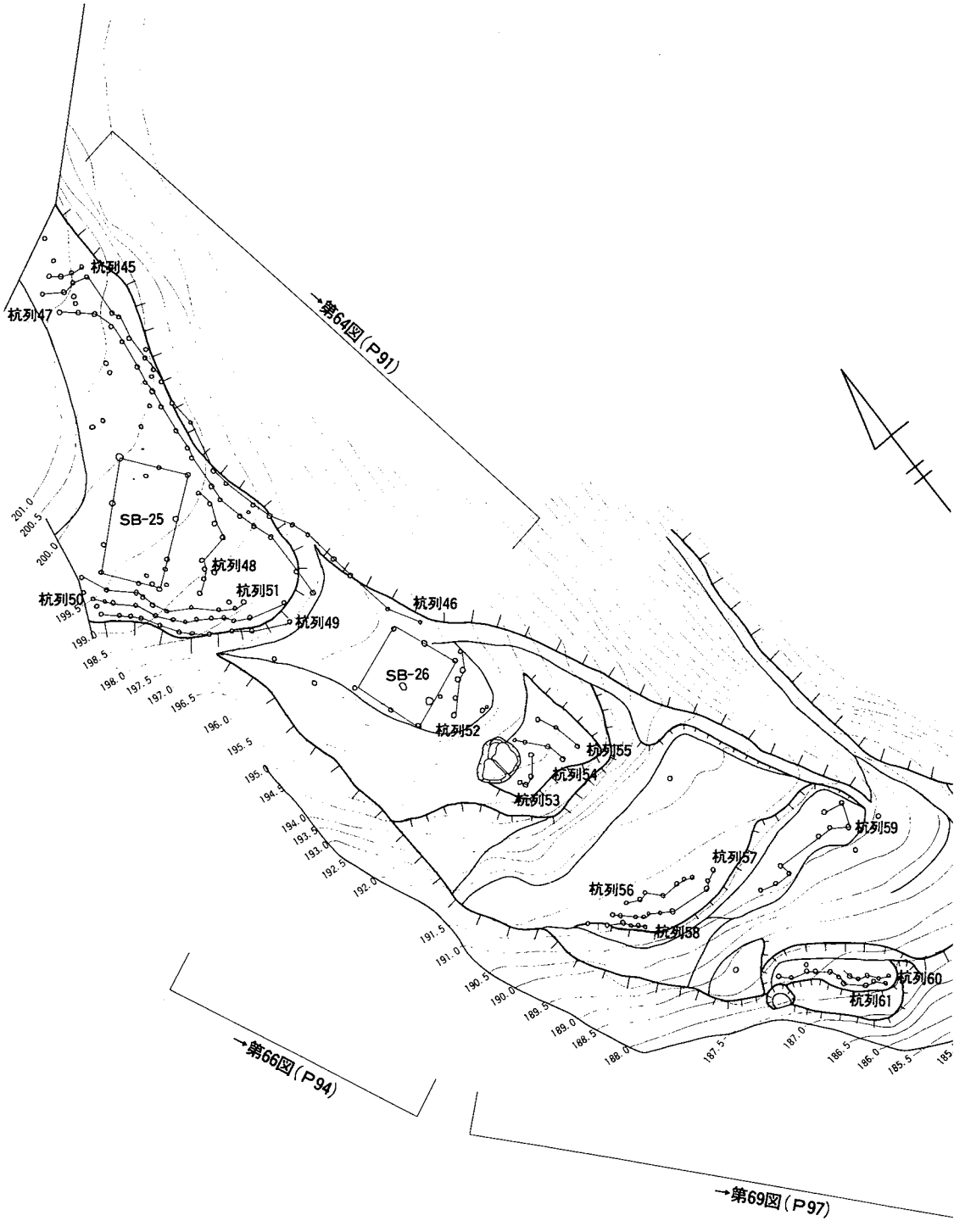
第58表　杭列46計測表

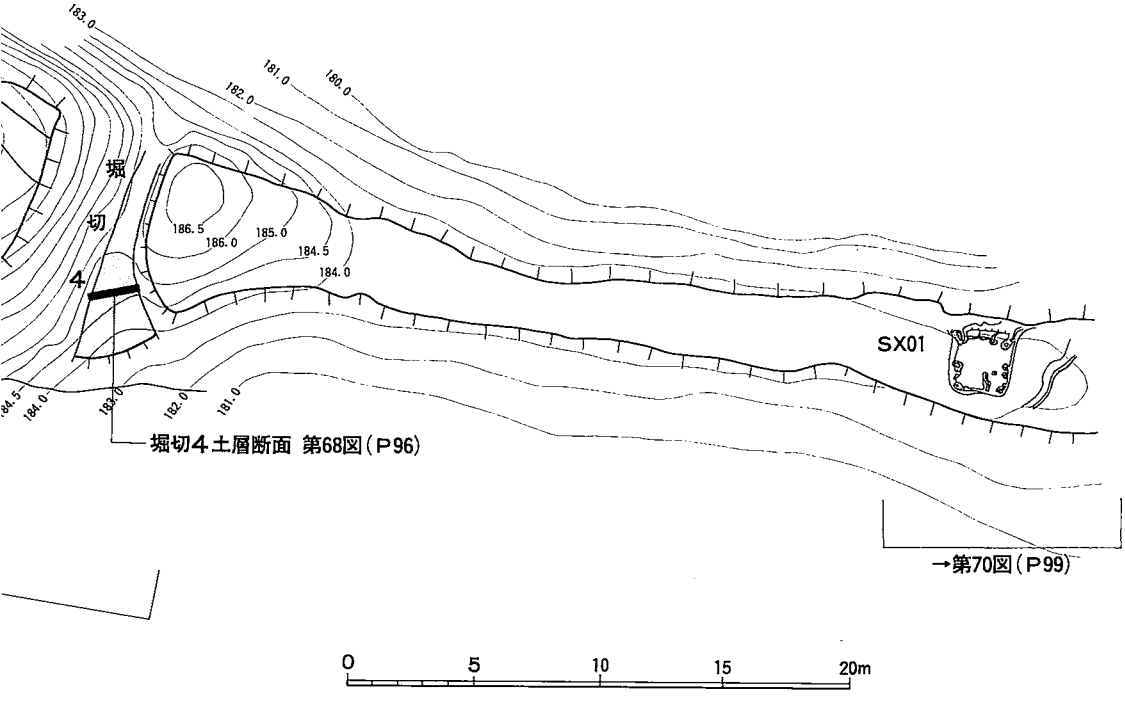
Pit No	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm) 最深	深さ(cm) 最浅	Pit間(cm)
47－1	20	17	29.0	26.2	90
2	20	18	43.9	39.7	80
3	22	19	41.6	33.2	105
4	18	15	39.4	35.3	82
5	19	17	33.3	30.9	140
6	20	17	28.5	26.7	83
7	22	15	33.4	27.8	58
8	21	18	29.2	24.3	

Pit No	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm) 最深	深さ(cm) 最浅	Pit間(cm)
47－8					80
9	21	17	32.0	27.9	132
10	16	15	35.0	31.4	92
11	20	17	65.9	56.1	56
12	20	17	25.9	24.2	157
13	21	17	43.9	39.0	63
14	20	17	39.2	35.9	121
15	20	18	39.3	35.9	

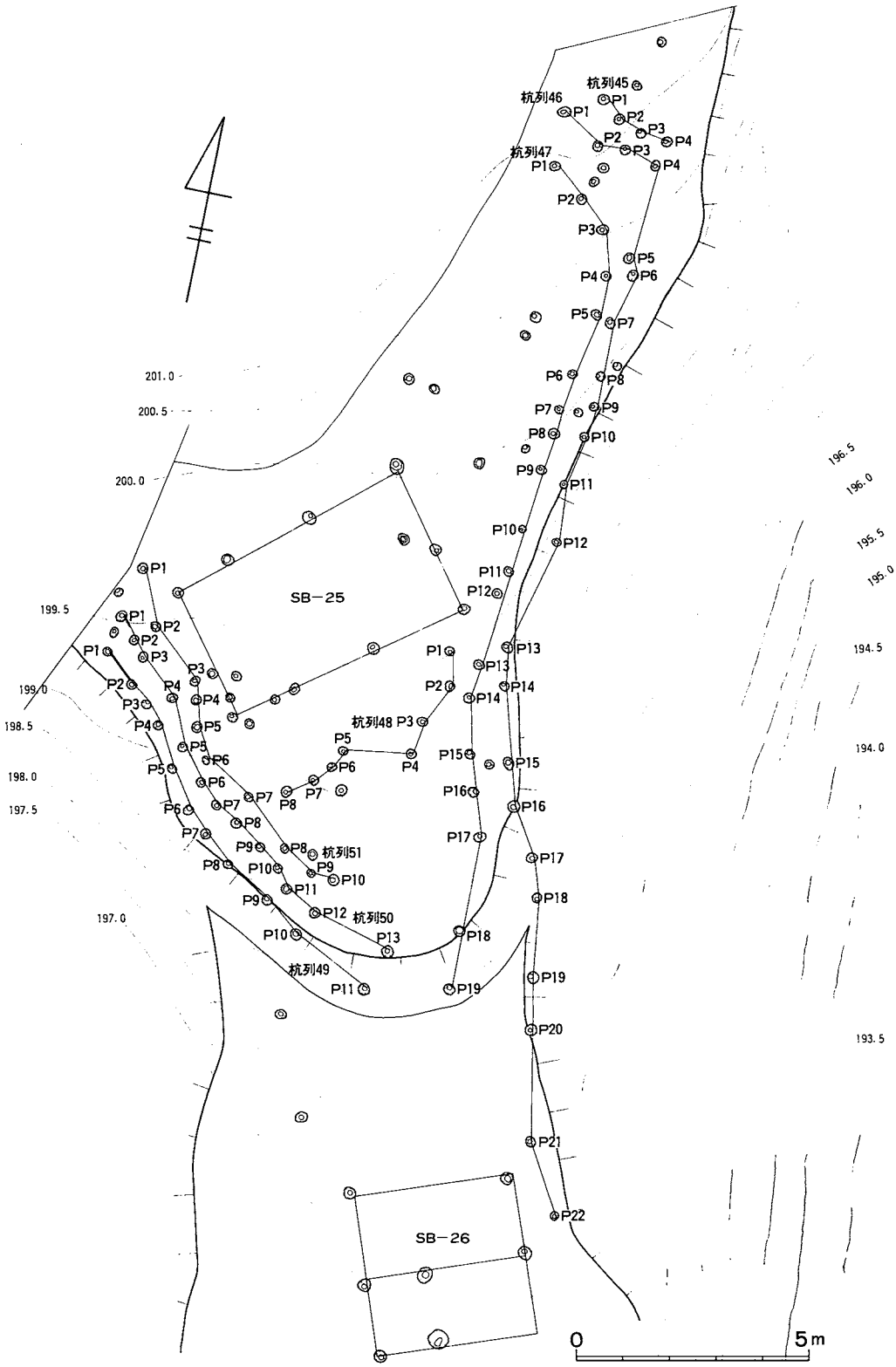
Pit No	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm) 最深	深さ(cm) 最浅	Pit間(cm)
47－15					85
16	21	15	42.6	37.0	97
17	22	19	30.7	25.0	209
18	25	20	41.7	33.9	115
19	20	18	48.0	40.0	
					全長 18.45 m

第59表　杭列47計測表


杭列45
杭列47
→第64図(P91)
SB-25
杭列48
杭列51
杭列50
杭列49
杭列46
SB-26
杭列52
杭列55
杭列54
杭列53
杭列59
杭列57
杭列56
杭列58
杭列60
杭列61
→第66図(P94)
→第69図(P97)



第63図　陣の山実測図－1



第64図　陣の山実測図－2

〔杭列　49・50・51〕

尾根筋の西辺沿いにあって、基底部より南側へ延びる３重の杭列である。杭列の番号については、外側から内側へ順次49～51とした。

杭列の間隔は杭列49と50が0.4～1.0ｍで、杭列50と51が0.4～0.8ｍを測る。

杭列49は、標高199.0ｍから198.0ｍラインを跨ぐ全長9.37ｍの杭列で、11個の杭跡から構成されている。杭間の距離は0.54～1.90ｍを測る。

杭列50は、杭列49にほぼ並列し、標高199.5ｍから198.5ｍラインを跨ぐ全長9.69ｍの杭列である。13個の杭跡から構成されており、杭間の距離は0.45～1.81ｍを測る。

杭列51は、標高199.5ｍから199.0ｍラインを跨ぐ全長8.31ｍの杭列で、10個の杭跡から構成されている。前列の杭列49・50に比べて並びは蛇行の度合が比較的大きく、ややジグザグの状態となる。杭間の距離は0.41～1.46ｍを測る。

〔杭列　45〕

杭列46の北端部に並列し、尾根筋の基底部にあって、標高201.0ｍを跨ぐ全長1.69ｍの杭列である。４個の杭跡から構成されており、杭間の距離は0.52～0.6ｍを測る。

〔杭列　48〕

ＳＢ２５の南側隣接地から検出されたもので、標高199.5ｍから199.0ｍラインを跨ぐ位置にあり、杭列の走行はＳＢ２５の南側桁行と同一方向を示す。８個の杭跡から構成されており、杭間の距離は0.45～1.5ｍで全長5.52ｍを測る。尾根筋の南側に対して並びは凸の状態であるが蛇行の度合が大きく、杭跡はジグザグの配列となる。

Pit No	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm) 最深	深さ(cm) 最浅	Pit間(cm)
49－1	18	15	55.2	52.2	
					89
2	18	15	49.5	42.6	
					54
3	22	17	63.4	57.0	
					54
4	18	17	46.7	43.2	
					93
5	19	16	48.0	43.9	
					100
6	21	17	45.3	38.4	
					66
7	20	17	49.1	41.0	
					80
8	20	17	43.2	38.2	
					111
9	20	17	58.1	51.2	
					100
10	26	21	36.6	28.1	
					190
11	22	20	50.5	41.5	
全長 9.37 m					
50－1	23	19	34.2	30.3	
					58
2	18	15	40.2	37.8	
					45
3	19	17	46.4	43.0	
					112
4	20	18	33.8	33.6	
					101
5	18	15	47.5	38.9	
					91
6	20	18	42.2	35.6	
					61
7	17	16	39.6	33.7	
					56
8	22	18	54.5	49.4	
					70
9	20	18	33.7	27.4	
					62
10	18	16	61.6	56.3	
					50
11	20	18	37.4	31.5	
					82
12	22	20	39.6	35.3	
					181
13	25	25	38.6	30.4	
全長 9.69 m					
51－1	22	19	35.9	32.3	
					129
2	21	19	30.3	27.9	
					146
3	18	16	34.9	32.3	
					41
4	19	16	32.5	28.0	
					57
5	20	18	36.4	28.4	
					70
6	22	15	47.4	35.6	
					123
7	20	18	38.6	32.3	
					136
8	19	17	36.5	29.5	
					77
9	18	16	33.5	28.4	
					52
10	21	18	25.3	19.2	
全長 8.31 m					

第60表　杭列49～51計測表

Pit No	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm) 最深	深さ(cm) 最浅	Pit間(cm)
45－1	22	20	38.6	33.8	
					57
2	22	19	49.9	47.6	
					52
3	20	16	41.7	33.2	
					60
4	22	12	54.1	48.8	
全長 1.69 m					
48－1	20	18	30.2	27.2	
					75
2	21	19	49.3	45.6	
					97
3	23	17	39.7	35.3	
					72
4	20	15	32.8	28.8	
					150
5	16	15	29.5	24.3	
					45
6	20	18	31.7	26.4	
					48
7	21	17	45.5	39.4	
					65
8	22	18	42.6	37.9	
全長 5.52 m					

第61表　杭列45・48計測表

〔ＳＢ２５〕

桁行5.4ｍ（18尺）、梁行妻3.3ｍ（11尺）と3.0ｍ（10尺）の３間×２間のやや歪な建物で、桁行方位はＮ30°Ｅである。柱間寸法はＰａ～Ｐｃ～Ｐｅ～Ｐｈで2.1ｍ（７尺）＋2.1ｍ（７尺）＋1.2ｍ（４尺）を測るが、Ｐｂ～Ｐｊの場合はＰｆとＰｊの間に補助柱が付き、Ｐｂ～

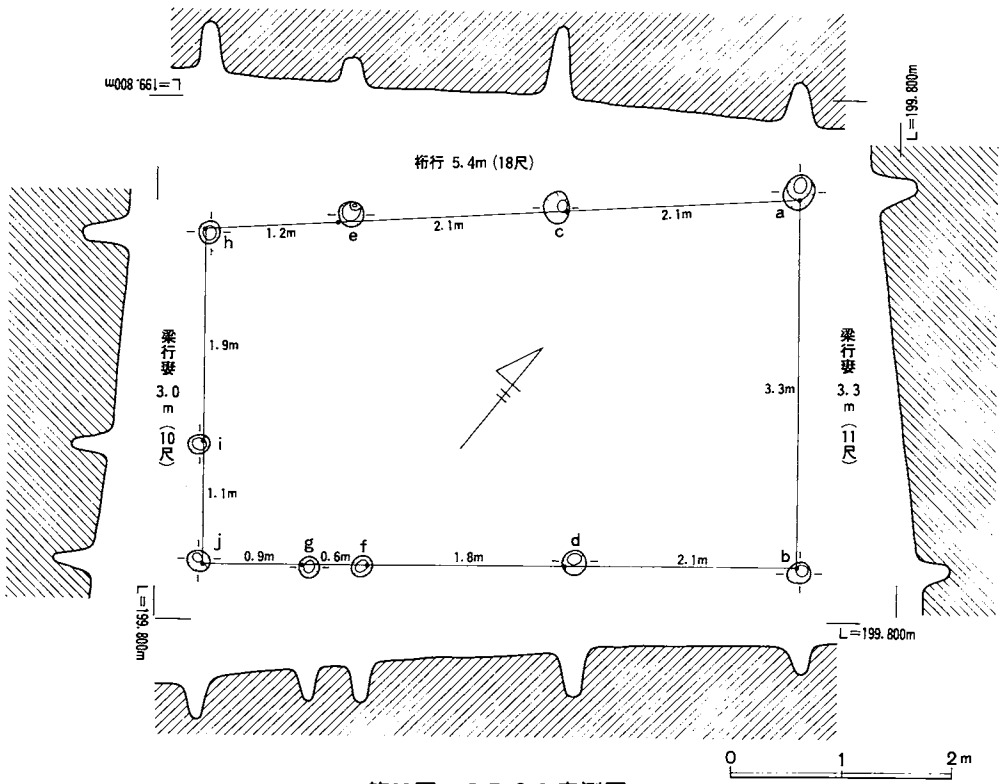
Ｐｄ～Ｐｆ～Ｐｇ～Ｐｊで2.1ｍ（７尺）＋1.8ｍ（６尺）＋0.6ｍ（２尺）＋0.9ｍ（３尺）となる。梁行妻はＰｈ～Ｐｉ～Ｐｊが1.9ｍ（6.3尺）＋1.1ｍ（３尺）であるが、Ｐａ～Ｐｂは中央柱が不明で全長3.3ｍ（11尺）を測る。

柱穴の大きさはＰａで最大（31×27cm）、Ｐｇが最小（19×19cm）で平均値は23×21cmとなる。深さはＰｃが最深（65cm）、Ｐｅが最浅（25cm）で平均値は38.6cmである。柱列は、桁行Ｐａ～Ｐｈと梁行妻Ｐｈ～Ｐｊで千鳥の並びとなる。

梁行妻の東側と西側の高さを比べた場合、柱穴の検出面は北側Ｐａ～Ｐｈで52cm、南側Ｐｂ～Ｐｊで41cm、東側の方が高い。さらに桁行の北側と南側では、東側Ｐａ～Ｐｂで52cm、西側Ｐｈ～Ｐｊで35cm、北側の方が高い。

Pit No	桁行柱間 (m)	桁行間(m)	Pit No	梁間柱間 (m)	梁間間(m)	Pit No	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
a～c	2.1	5.4	a～b	3.3	3.3	a	31	27	39
c～e	2.1					b	22	20	30
e～h	1.2					c	28	24	65
						d	22	23	44
b～d	2.1	5.4	h～i	1.9	3.0	e	24	22	25
d～f	1.8		i～j	1.1		f	21	18	36
f～g	0.6					g	19	19	31
g～j	0.9					h	22	21	41
						i	20	17	37
						j	21	19	38

第62表　ＳＢ２５計測表



第65図　ＳＢ２５実測図

〔杭列　52〕

ＳＢ２６の南側隣接地から検出されたもので、標高197.0ｍラインを跨ぐ位置にある。５個の杭跡から構成されており、杭間の距離は0.51～0.89ｍで全長3.1ｍを測る。並びは、西側より東側へ中途までが直線で、それより東側は蛇行し、ややジグザグの配列となる。

〔杭列　53～55〕

ＳＫ０２の東側から南東側にかけて標高175.5ｍラインを跨ぐ３条の杭列が検出された。

杭列53はＳＫ０２の南縁を巡る杭列で、４個の杭跡から構成されており、杭間の距離は0.28～1.01ｍで全長1.75ｍを測る。杭列の走行はＳＫ０２の長軸方位と同一である。

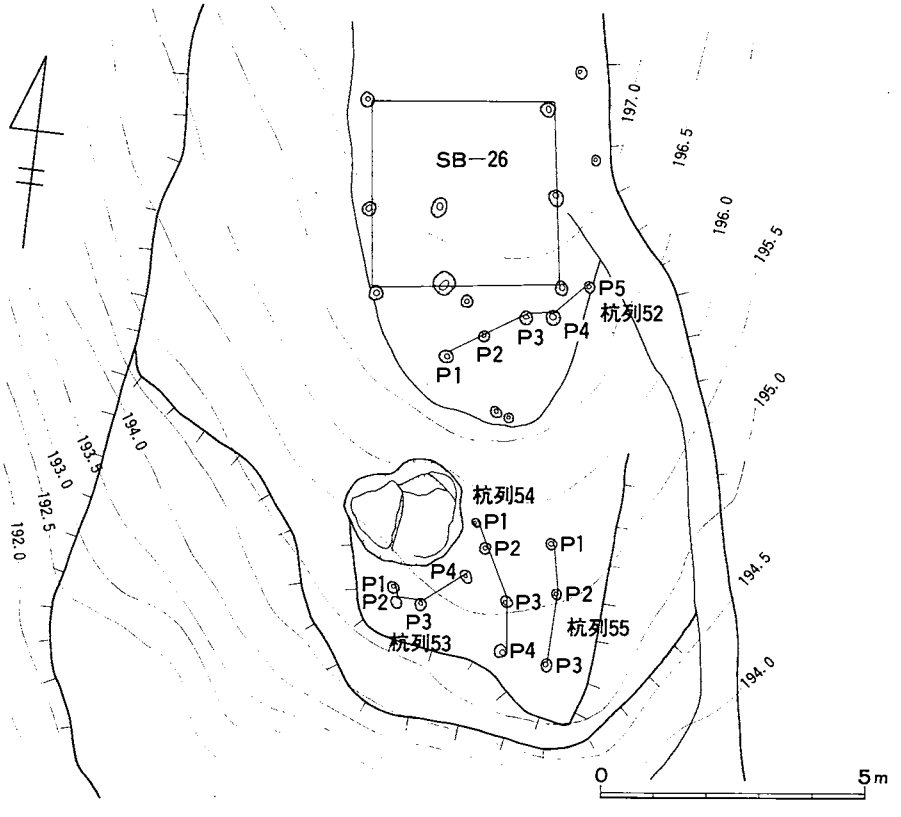
杭列54・55は、ＳＫ０２の南東側に並列する杭列で、両杭列の間隔は 0.9～1.2ｍを測り、走行は尾根筋の長軸方位と同一方位となる。杭列54は４個の杭跡から構成されており、

Pit No	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm) 最深	深さ(cm) 最浅	Pit間(cm)
52－1	24	22	29.0	24.0	82
2	21	17	36.0	30.0	88
3	26	24	32.0	28.0	51
4	29	28	29.5	26.0	89
5	18	16	29.5	21.5	
				全長	3.1 m

第63表　杭列52計測表

Pit No	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm) 最深	深さ(cm) 最浅	Pit間(cm)
53－1	21	17	14.5	8.5	28
2	21	19	35.0	28.0	46
3	22	21	36.0	30.0	101
4	24	18	33.0	27.0	
				全長	1.75 m
54－1	17	12	19.0	13.0	52
2	23	21	27.0	22.5	110
3	21	18	29.5	25.5	95
4	25	21	35.0	27.0	
				全長	2.57 m
55－1	20	19	33.5	21.5	98
2	21	18	27.5	23.5	136
3	24	22	35.0	27.0	
				全長	2.34 m

第64表　杭列53～55計測表



第66図　陣の山実測図－３

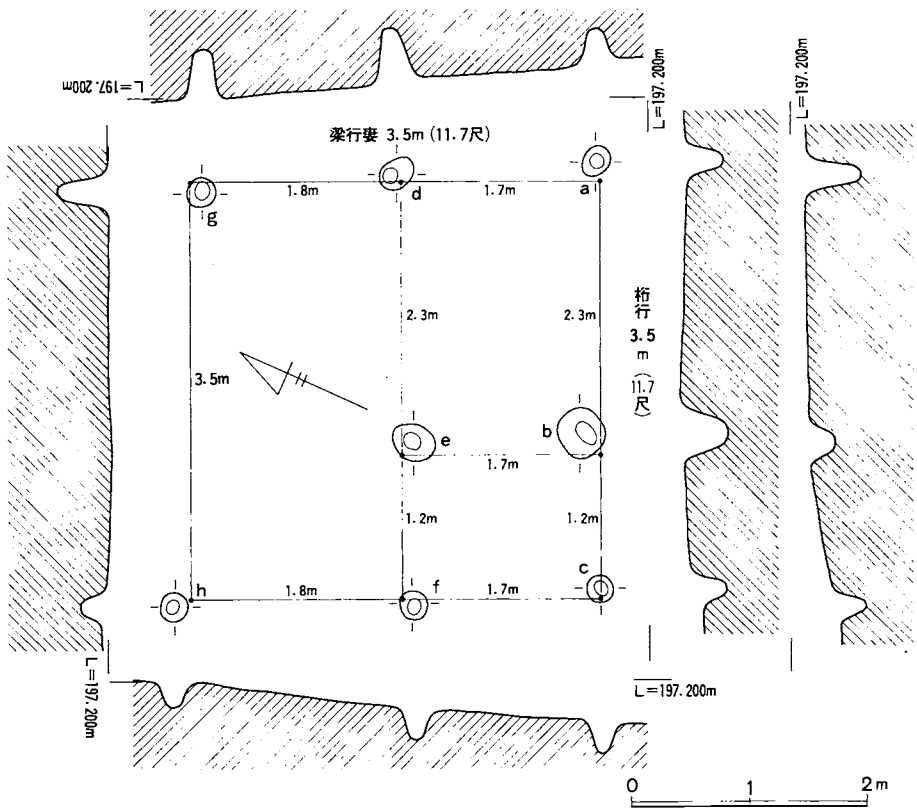
杭間の距離は0.52～1.10ｍで全長2.57ｍを測る。一方、杭列55は杭列54の外側にあり、全長2.34ｍを測る。杭間の距離は0.98～1.36ｍで、杭列54とほぼ同列の並びとなる。

〔ＳＢ２６〕

桁行3.5ｍ（11.7尺）、梁行妻3.5ｍ（11.7尺）の２間×２間の建物で、桁行方位はＮ22°Ｗである。柱間寸法は桁行Ｐａ～Ｐｂ～Ｐｃで2.3ｍ（7.6尺）＋1.2ｍ（４尺）であるが、Ｐｇ～Ｐｈは中央柱が不明で全長3.5ｍ（11.7尺）を測る。梁行妻Ｐａ～Ｐｄ～Ｐｇで、1.7ｍ（5.7尺）＋1.8ｍ（６尺）、Ｐｃ～Ｐｆ～Ｐｈで1.7ｍ（5.7尺）＋1.8ｍ（６尺）となる。さらに中央柱のＰｄとＰｆの間にはＰｅの補助柱が付いており、Ｐｄ～Ｐｅ～Ｐｇは2.3ｍ（7.7尺）＋1.2ｍ（４尺）、Ｐｂ～Ｐｅは1.7ｍ（5.7尺）を測る。

柱穴の大きさはＰｂが最大（43×38cm）、Ｐｃが最小（23×22cm）で、平均値は30.5×26.6cmとなる。深さはＰｄが最深（47cm）、Ｐｅが最浅（21cm）で、平均値は32.0cmである。柱列は、すべて千鳥の並びとなる。

桁行の北側と南側を比べた場合、柱穴の検出面は東側Ｐｇ～Ｐｄ～Ｐａで40cm、西側Ｐｈ～Ｐｆ～Ｐｃで38cm、北側の方が高い。さらに、梁行妻の東側と西側とでは、北側Ｐｇ～Ｐｈで水平となるが、南側Ｐａ～ＰｃではＰｂの切り込み面がＰａとＰｃよりも、やや高い。



第67図　ＳＢ２６実測図

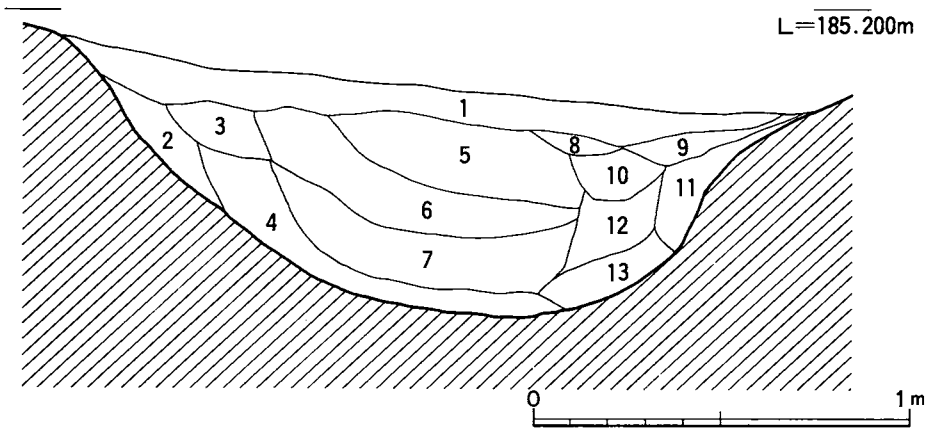
Pit No	桁行柱間 (m)	桁行間(m)	Pit No	梁間柱間 (m)	梁間間(m)	Pit NO	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
a～b b～c	2.3 1.2	3.5	a～d d～g	1.7 1.8	3.5	a b c d e f g h	26 43 23 34 40 27 26 25	22 38 22 31 30 23 23 24	30 37 28 47 21 28 43 22
d～e e～f	2.3 1.2	3.5	b～e	1.7	1.7				
			c～f f～h	1.7 1.8	3.5				
g～h	3.5	3.5							

第65表　ＳＢ２６計測表

〔堀切　4〕

「陣の山」尾根筋の北側基底部より南へ53ｍの所から検出された堀切である。上場については幅が4.8ｍで、深さは北側尾根筋で3.5ｍ、南側尾根筋で１ｍを測る。下場は、長さ10ｍ、幅1.0～3.5ｍで、堀底の走行はＮ60°Ｅである。堀底の形状については、水平箇所の部分が長さ4.5ｍで、幅もほぼ均一の１ｍであるが、西側では末広がりの竪堀となって、緩く尾根筋を下っている。傾斜角度は直線距離４ｍに対し、0.4ｍの比高差となる。東側部分では堀底の端部がすぐさま山腹に吸収され、竪堀に変化する事なく消滅している。

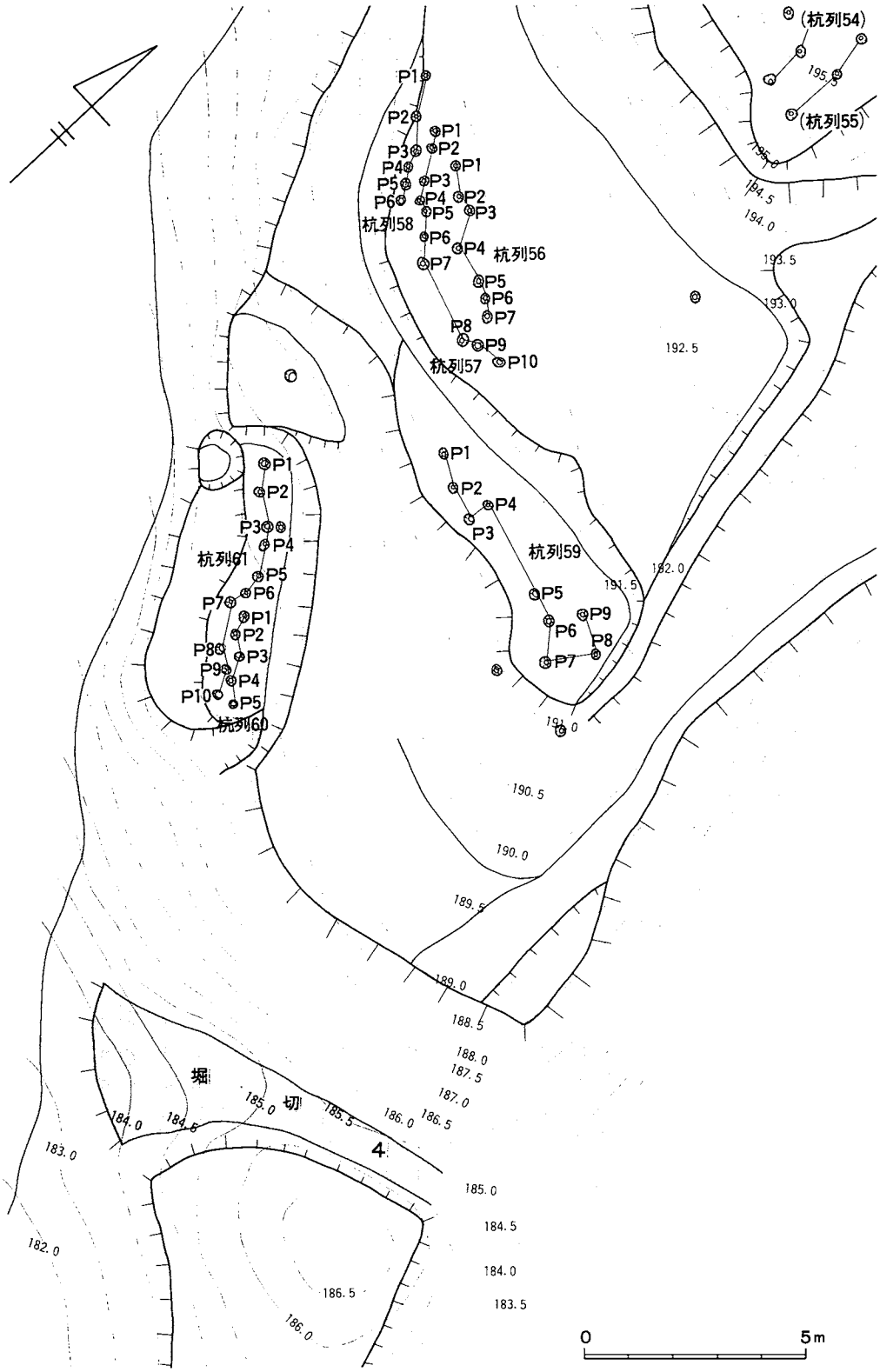
対岸の南側尾根筋に掻き上げ土塁の存在が考えられるが、今回の調査では積み土部分の検出には至らなかった。しかしながら、この堀切は南側尾根筋の中途を断ち切る重要な遺構である所から、かつては、かなりの規模の掻き上げ土塁が積まれていたものと思われる。土塁は堀切を埋める時に切り崩されたのではあるまいか。



第68図　堀切４土層断面図

1	黄褐色地山土（二次堆積・きめ細かい土塊）	8	やや白っぽい黄褐色土
2	1層土よりもやや白っぽい	9	8層土に小礫が混じる
3	1層土＞小礫（砂混じり）	10	灰褐色土＞灰黒色土（小礫混じり）
4	灰褐色土＞灰黒色土＋小礫（うずら卵大）	11	白っぽい黄褐色土（二次堆積・きめ細かい土塊）
5	黄褐色土＞小礫（小豆大から鶏卵大）	12	灰褐色土＝灰黒色土（小礫混じり・ボロボロ）
6	灰褐色土＞灰黒色土＋小礫	13	黄褐色土（二次堆積・小礫混じり・ザラザラ）
7	灰褐色土＝黄褐色土＋礫（こぶし大）		

第66表　堀切４土層観察表



第69図　陣の山実測図－4

〔杭列　56～58〕

標高192.0mから191.5mラインから3重に並列する杭列が検出された。杭列の番号については、上部より下部へ順次56～58とした。杭列の検出箇所は長方形状を呈し、基底部の長さ12.5m、最大幅55mを測る削平地で、杭列は削平地の長軸方位に沿って並ぶものであった。

杭列56は、7個の杭跡から構成されており、杭間の距離は0.41～0.89mで全長3.74mを測る。並びは、蛇行の度合が大きくジグザグの状態となる。

杭列57は、10個の杭跡から構成されており、杭間の距離は0.3～1.96mで全長6.15mを測る。並びは、尾根筋の南側に対して凸の状態となる。

杭列58は、6個の杭跡から構成されており、杭間の距離は0.38～0.94mで全長2.95mを測る。杭列57の西側から検出されたもので、並びはやや蛇行し、多少ジグザグの状態にある。

Pit No	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm) 最深	深さ(cm) 最浅	Pit間(cm)
56－1	23	19	25.5	22.5	
					72
2	22	19	29.8	25.8	
					42
3	20	18	28.8	25.6	
					89
4	23	21	15.1	11.6	
					89
5	22	20	27.7	24.2	
					41
6	19	17	28.7	24.8	
					41
7	22	20	29.0	26.7	
					全長 3.74 m
57－1	22	19	25.8	21.7	
					40
2	20	18	27.3	22.6	
					77
3	20	18	47.2	43.2	
					46
4	18	15	51.9	44.1	
					30
5	22	19	40.8	35.1	
					57
6	17	15	50.8	48.7	
					67
7	27	20	58.6	56.1	
					196
8	26	21	53.1	46.2	
					38
9	23	21	43.9	39.5	
					64
10	24	19	29.5	25.6	
					全長 6.15 m
58－1	18	16	35.3	28.6	
					94
2	21	15	29.3	17.2	
					79
3	24	21	33.9	30.8	
					40
4	21	18	44.7	39.7	
					44
5	23	18	56.1	49.9	
					38
6	22	18	62.6	56.8	
					全長 2.95 m

第67表　杭列56～58計測表

〔杭列　59〕

1.5mから191.0mラインから検出されたもので、9個の杭跡から構成されており、杭間の距離は0.52～2.28mで全長8.11mを測る。並びは不整形で、西側から東側へ蛇行しながら、ややジグザグに延びて東端部は折れ曲がり、コの字の形状を呈している。

杭列の検出箇所は帯曲輪状を呈し、長径8m、最大短径3mを測る削平地となっている。

Pit No	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm) 最深	深さ(cm) 最浅	Pit間(cm)
59－1	22	20	35.8	32.6	
					76
2	21	19	40.4	36.4	
					83
3	24	19	49.7	44.5	
					52
4	22	17	28.5	25.7	
					228
5	21	20	36.5	31.9	
					68
6	21	20	28.6	26.1	
					93
7	23	20	33.9	31.8	
					116
8	20	18	18.2	17.0	
					95
9	21	20	19.5	17.3	
					全長 8.11 m

第68表　杭列59計測表

〔杭列　60・61〕

標高188.5mラインを跨ぐ2重の杭列で、外側のものを杭列61とし、内側を60とした。

杭列60は、5個の杭跡から構成されており、杭間の距離は0.45～0.59mで全長2.04mを測る。並びは、外側の杭列61と同一である。

一方、杭列61は、10個の杭跡から構成されており、杭間の距離は0.41～1.05mで全長5.62mを測る。杭は西側から東側へ延びているが、蛇行の度合が大きいため並びはジグザグの状態となる。

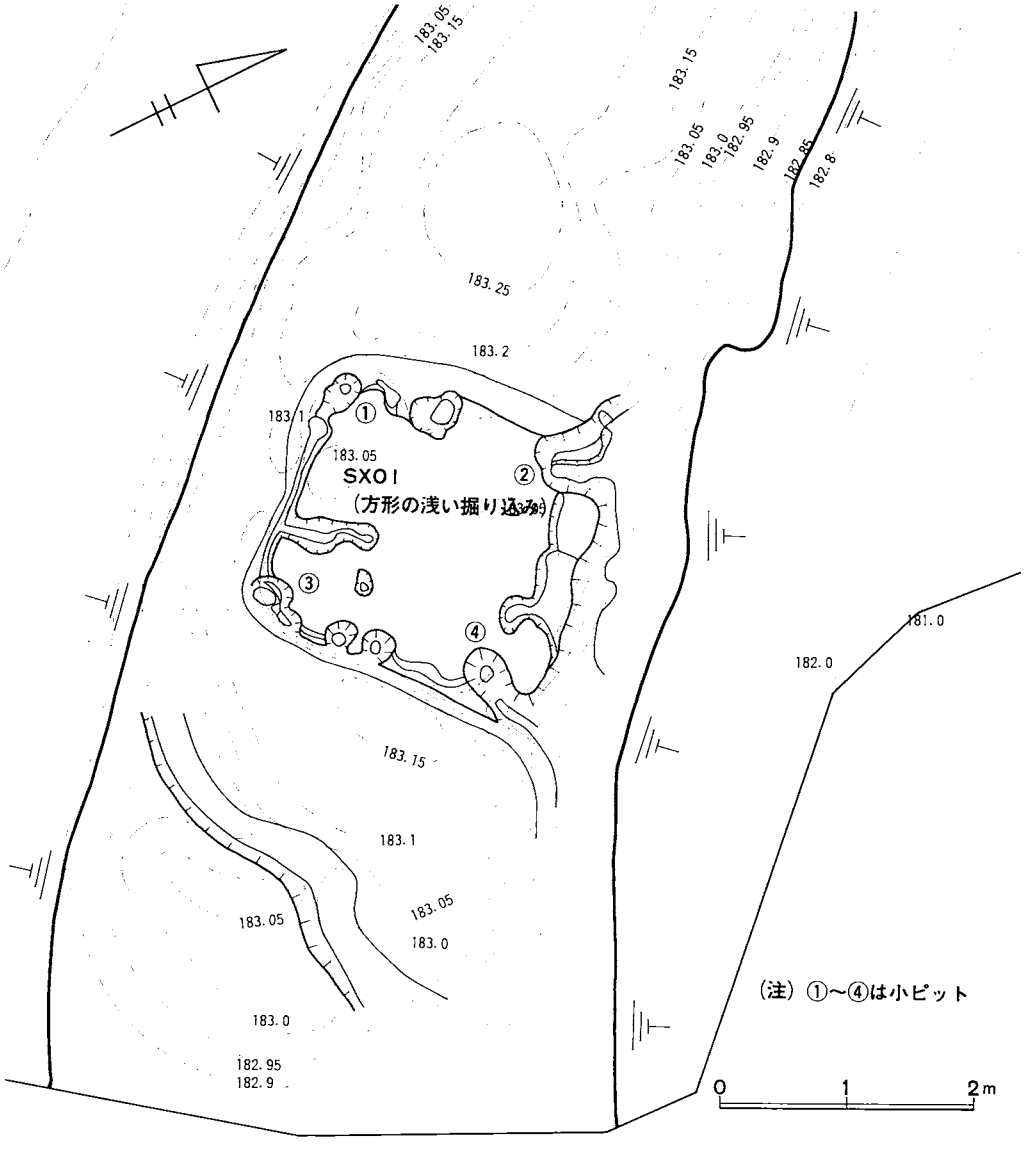
Pit No	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm) 最深	深さ(cm) 最浅	Pit間(cm)
60－1	23	21	35.0	33.0	
					45
2	20	18	39.0	33.0	
					45
3	19	16	36.0	33.0	
					59
4	19	17	38.0	35.0	
					55
5	20	16	40.0	33.0	
					全長 2.04 m
61－1	23	20	43.0	34.0	
					63
2	22	18	34.0	24.0	
					81
3	21	20	32.0	29.0	
					41
4	25	19	36.0	31.0	
					73
5	22	20	25.0	19.0	
					47
6	21	18	31.0	28.0	
					42
7	24	20	46.0	33.0	
					105
8	24	21	55.0	47.0	
					48
9	22	19	47.0	40.0	
					62
10	20	16	57.0	53.0	
					全長 5.62 m

第69表　杭列60・61計測表

〔不明遺構（ＳＸ０１）〕

陣の山の南東端寄りから検出されたもので、地山を方形状に掘り込む遺構である。１辺の長さは2.5ｍで、深さは12～18cmであった。床面はやや起状に富み、四隅に小ピット（最大長径65cm・最大短径40cm、最小長径45cm・最小短径25cm、深さ４～７cm）が掘られている外、東西両縁からも同様な小ピットが検出された。埋土は褐灰色土と黒色土の混入土であったが、遺物の出土はなかった。

検出状況からして、遺構は尾根筋の末端部に建立された小規模な社（やしろ）の類が連想される。



第70図　ＳＸ０１実測図

第9節　迫　　地

主軸尾根と陣の山の尾根に挟まれた迫地で、長軸51ｍ、幅17ｍを測る。上場と下場の比高は20ｍで、３棟の建築址（ＳＢ２７～ＳＢ２９）と10条の杭列が検出された。

３棟の建築址は、標高167.5ｍから167.0ｍラインの平場から検出された。３棟とも重なり合っており、ＳＢ２７とＳＢ２８の桁行方向は迫地の長軸方向と同一方向にある。杭列71が隣接している。

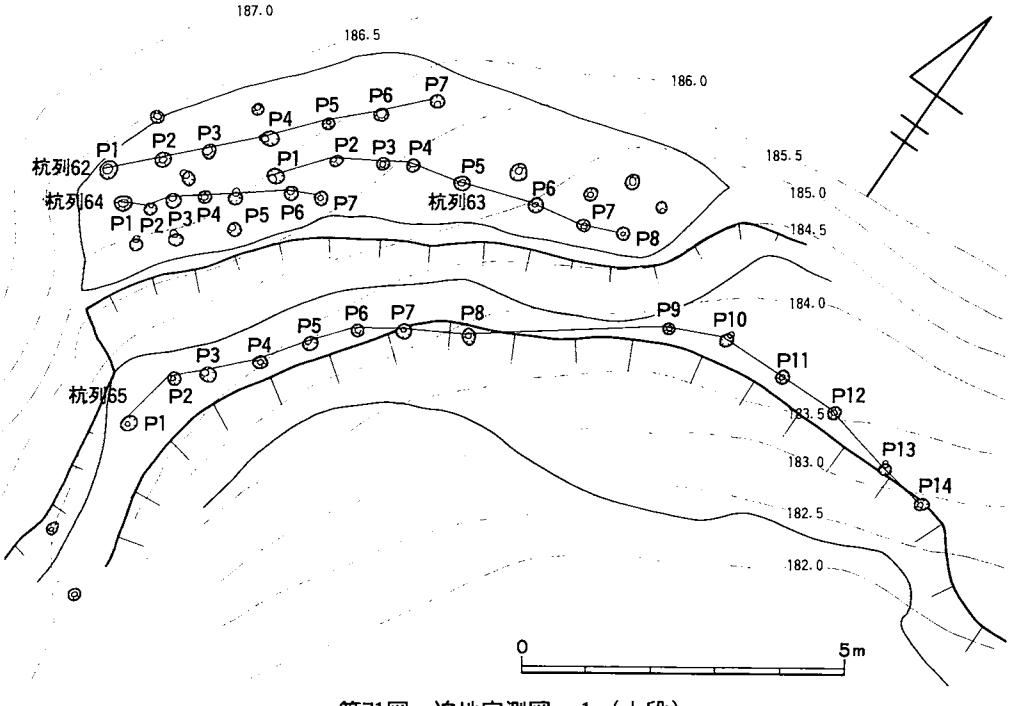
〔杭列　62～65〕

杭列62から65は、迫地の上段から検出されている。

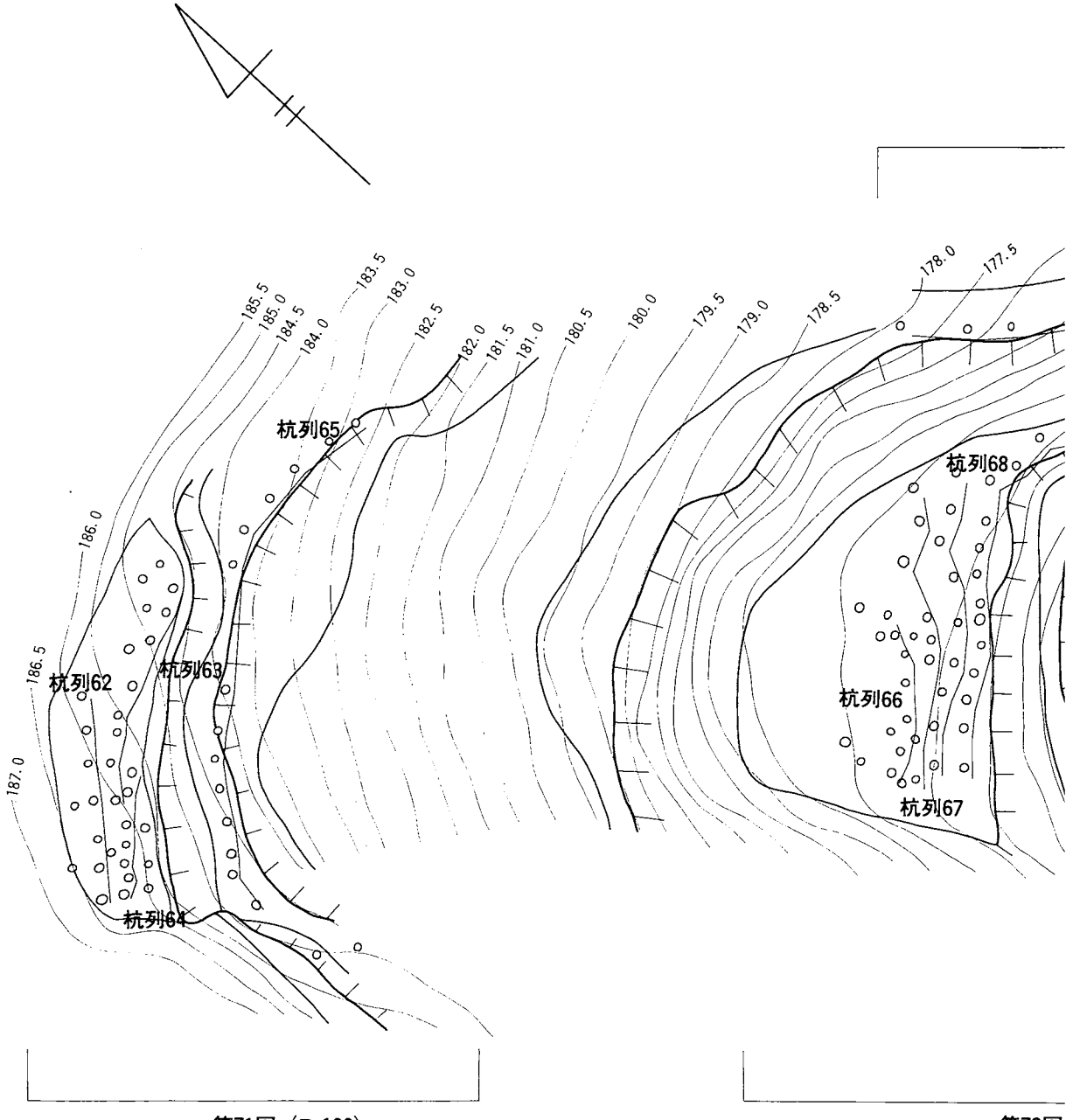
杭列62は、迫地の最上段から検出されたもので、標高186.0ｍラインを跨ぐ全長5.16ｍの杭列である。７個の杭跡で構成されており、杭間の距離は0.72～0.97ｍで、直線状の並びとなる。

杭列63は、杭列62の東側隣接地から検出された。８個の杭跡から構成され、標高186.0ｍから185.0ｍラインを跨いでいる。杭間の距離は、0.47～1.17ｍで、全長5.64ｍを測る。迫地の上場に対して並びは、やや凸の状態となる。

杭列64は、杭列62の東下隣接地から検出された全長3.09ｍの杭列で、直線状の並びとなる。７個の杭跡から構成され、杭列62と同様に標高186.0ｍラインを跨いでいる。この杭列の特色は、杭間の距離が0.41～0.84ｍと著しく狭く、杭が密に打ち込まれている。



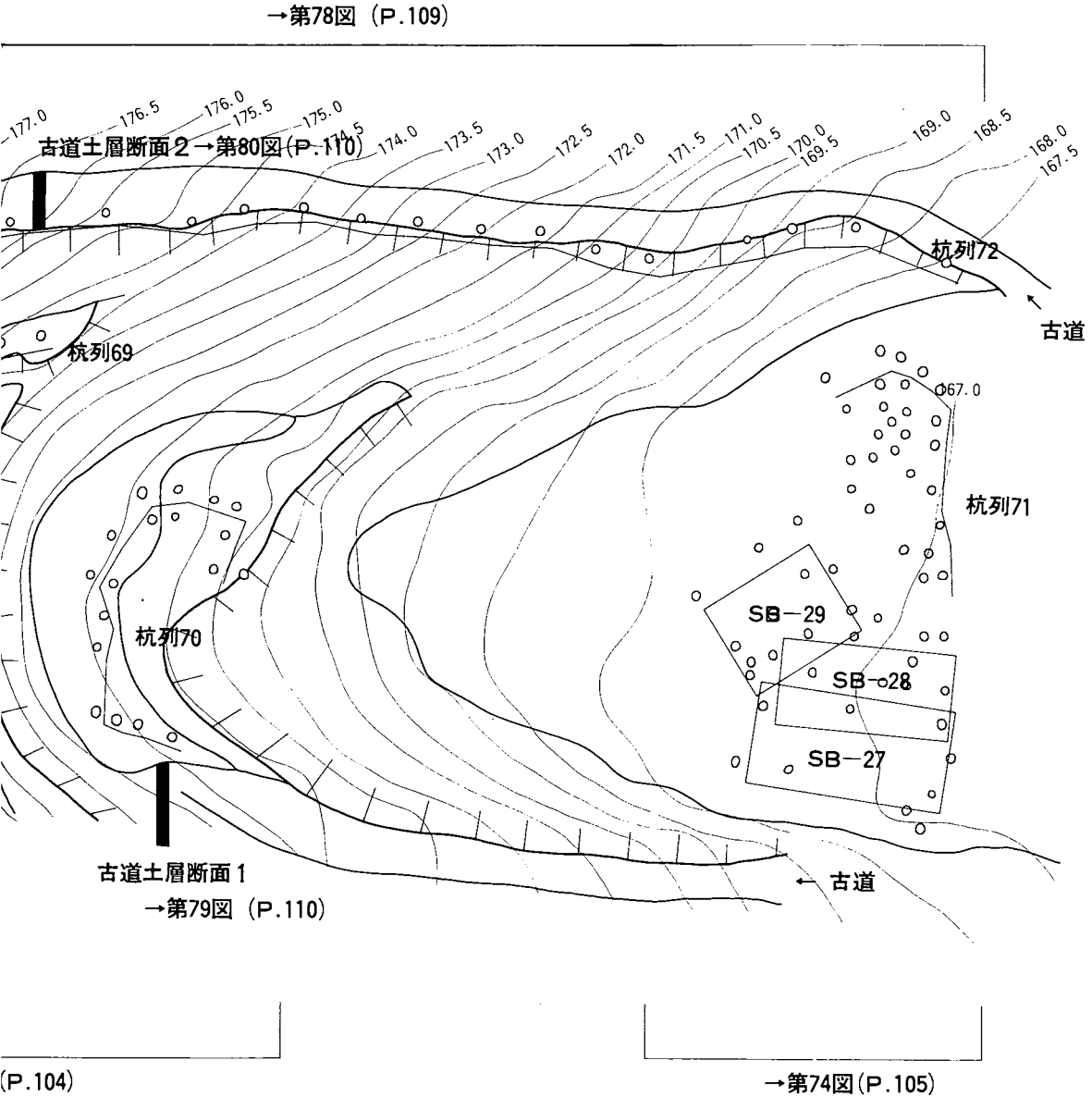
第71図　迫地実測図－１（上段）



→第71図（P.100）

→第73図

第72図　迫地実測


→第78図（P.109）
177.0
176.5
176.0
175.5
175.0
174.5
174.0
173.5
173.0
172.5
172.0
171.5
171.0
170.5
170.0
169.5
169.0
168.5
168.0
167.5
古道土層断面２→第80図（P.110）
杭列72
古道
杭列69
167.0
杭列71
SB－29
SB－28
SB－27
杭列70
古道土層断面１
→第79図（P.110）
古道
(P.104)
→第74図(P.105)
0
5
10m

]－２（全体）

杭列65は、標高184.5mから183.0mラインを跨ぐ全長16.46mの杭列で、14個の杭跡から構成されている。杭間の距離は0.53～3.14mで、並びは迫地の上場に対して凸の状態となる。迫地の上段に並ぶ杭列では最もしっかりとした造りで、迫地の上段を塞ぐ様な杭の並びとなっている。

Pit No	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm) 最深	深さ(cm) 最浅	Pit間(cm)
62－1	26	21	35.4	29.1	
					85
2	21	19	49.2	41.1	
					72
3	18	17	45.2	38.6	
					91
4	24	21	52.1	43.3	
					97
5	17	16	55.4	50.7	
					82
6	18	16	42.3	37.6	
					89
7	17	16	43.8	35.9	
全長 5.16 m					
63－1	23	22	56.8	51.8	
					97
2	18	17	55.8	50.4	
					76
3	17	16	37.8	35.1	
					47
4	19	18	47.1	39.2	
					82
5	23	17	41.9	36.2	
					117
6	20	18	52.0	47.9	

Pit No	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm) 最深	深さ(cm) 最浅	Pit間(cm)
63－6					
					83
7	20	16	39.4	34.5	
					62
8	21	20	47.2	44.4	
全長 5.64 m					
64－1	25	21	57.6	46.9	
					42
2	19	16	50.6	45.0	
					41
3	21	20	66.3	60.3	
					47
4	17	15	52.5	46.3	
					50
5	19	19	71.3	64.3	
					84
6	20	19	65.5	57.4	
					45
7	20	17	64.7	56.2	
全長 3.09 m					
65－1	26	20	30.5	24.4	
					97
2	18	17	41.4	36.7	

Pit No	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm) 最深	深さ(cm) 最浅	Pit間(cm)
65－2					
					53
3	22	21	46.2	41.1	
					83
4	19	18	47.5	39.4	
					82
5	20	18	38.7	23.0	
					80
6	17	16	37.3	31.1	
					73
7	19	17	37.5	24.0	
					100
8	20	18	40.0	32.0	
					314
9	16	15	25.3	17.8	
					95
10	19	16	27.1	21.1	
					103
11	19	18	34.1	27.6	
					96
12	18	16	32.6	28.2	
					119
13	18	17	44.3	32.7	
					76
14	22	16	34.5	23.0	
全長 13.71 m					

第70表　杭列62～65計測表

〔杭列　66～69〕

杭列66から69までは迫地の中段から検出されている。

杭列66は、標高174.5mと174.0mラインの間から検出されたもので、中段に並ぶ杭列の中では最も上部の位置にある。7個の杭跡から構成されており、杭間の距離は0.52～0.88mで全長4.09mを測る。迫地の上場に対して並びは凹の状態となる。

杭列67は、杭列66と同様に標高174.5mと174.0mラインから検出されたもので、杭列66の東下に位置する杭列である。8個の杭跡から構成されており、杭間の距離は0.53～2.02mで、全長7.59mを測る。並びは、南側より北側へ中途まで3.54m分が直線状を呈するものの、残り半分は波状となり、ジグザグな並びとなる。

杭列68は、標高174.5mラインを跨ぐ全長7.59mの杭列で、杭列67の東下に位置する杭列である。9個の杭跡から構成されており、杭間の距離は0.83～1.14mを測る。並びは、直線状を呈するものの、やや歪で全体的に、やや波状の傾向にある。

杭列69は、杭列68の東下にあって、標高174.5mラインを跨ぐ全長10.9mの杭列である。並びは、迫地の地形に沿っており、迫地の上場に対して凸の状態となる。15個の杭跡から構成されており、杭間の距離は0.46～1.03mを測る。迫地の上段に並ぶ杭列65と同様な性格を持ち、中段に並ぶ杭列の中では最もしっかりとした造りである。迫地の中段を塞ぐ様な杭列の並びとなっている。

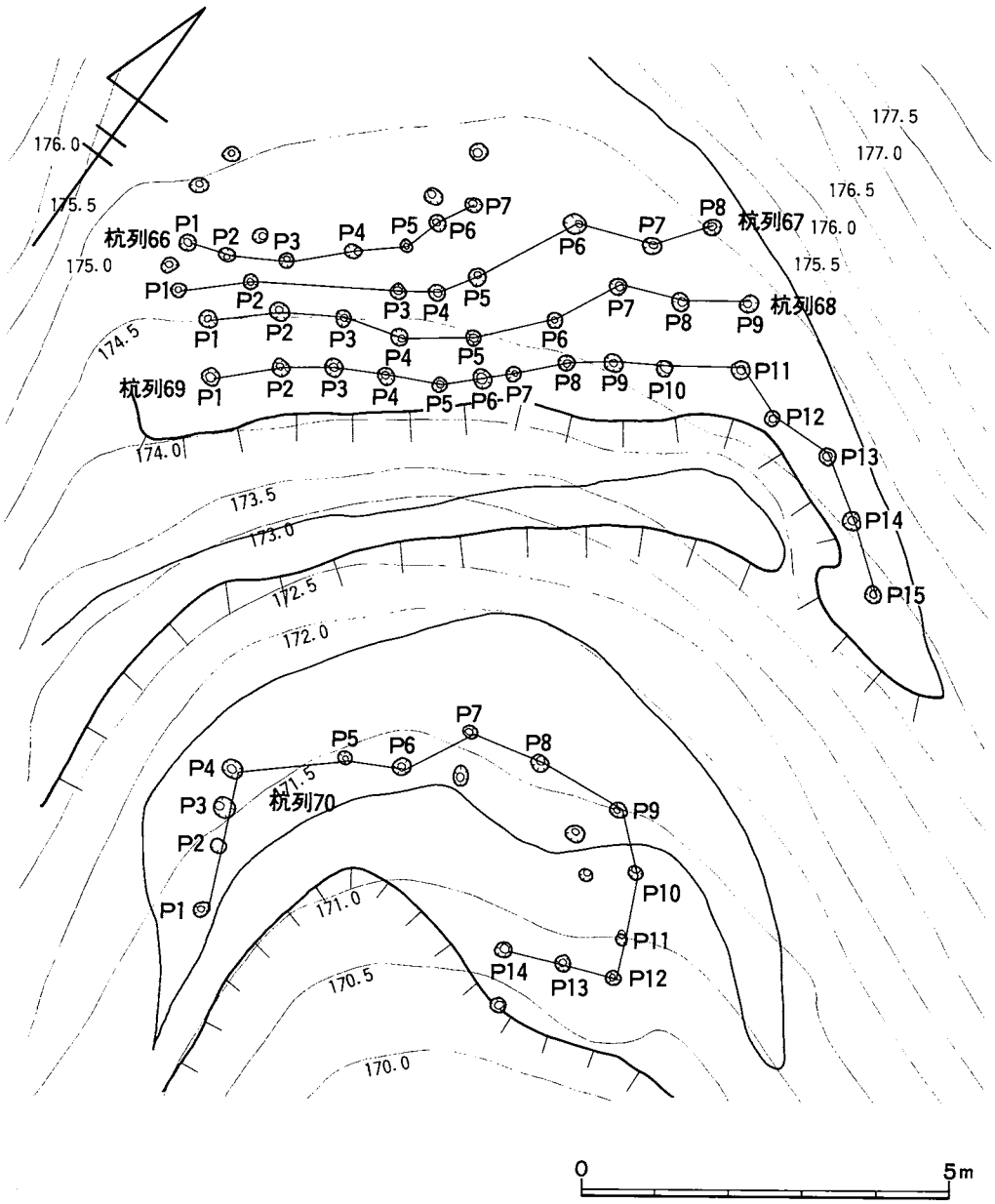
〔杭列　70〕

迫地の中段と下段の間から、標高171.5mから171.0mラインを跨いで検出された杭列で、

全長11.5mを測る。並びは長方形状を呈しており、特異である。迫地の地形に沿って配列されており、長軸の向きは南北方向にある。

杭列により取り囲まれる範囲は南北5～8m、東西3mで、東辺部にあたる南側より北側へ4m分については杭跡がまったく検出されなかった。

全体的には14個の杭跡から構成されており、杭間の距離は0.50～1.52mで全長11.49mを測る。



第73図　迫地実測図－3（中段）

Pit No	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm) 最深	深さ(cm) 最浅	Pit間(cm)
66－1	20	20	50.0	44.0	
					55
2	18	16	58.0	53.0	
					83
3	18	17	48.0	44.0	
					88
4	21	17	61.0	53.0	
					75
5	16	16	54.0	50.0	
					52
6	22	21	49.0	47.0	
					56
7	19	16	55.0	50.0	
全長 4.09 m					
67－1	19	17	45.0	36.0	
					99
2	19	16	56.0	51.0	
					202
3	20	18	53.0	48.0	
					53
4	21	18	6.0	5.0	
					59
5	21	20	55.0	52.0	
					155
6	30	24	42.0	38.0	
					106
7	23	21	41.0	34.0	

Pit No	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm) 最深	深さ(cm) 最浅	Pit間(cm)
67－7					
					85
8	21	19	31.0	25.0	
全長 7.59 m					
68－1	23	18	51.0	45.0	
					97
2	24	20	49.0	42.0	
					90
3	20	20	50.0	45.0	
					83
4	20	19	48.0	43.0	
					98
5	21	19	50.0	47.0	
					114
6	22	19	53.0	50.0	
					98
7	20	19	48.0	45.0	
					91
8	23	22	50.0	45.0	
					88
9	25	21	35.0	30.0	
全長 7.59 m					
69－1	21	21	49.0	42.0	
					96
2	22	20	55.0	45.0	

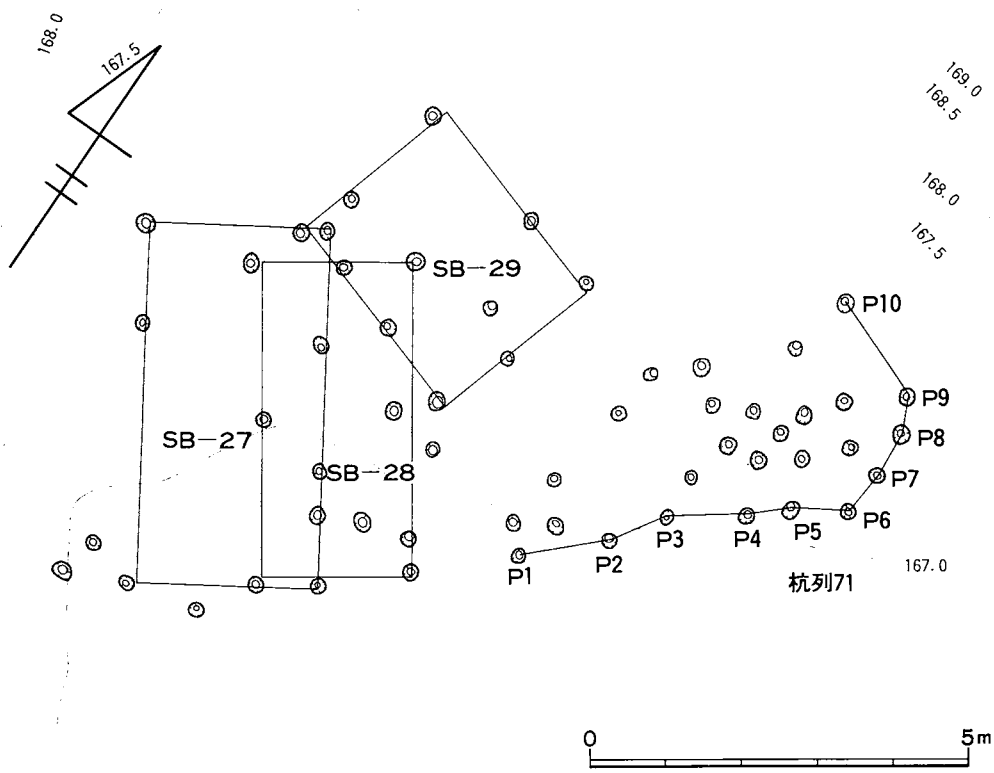
Pit No	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm) 最深	深さ(cm) 最浅	Pit間(cm)
69－2					
					73
3	22	21	44.0	38.0	
					72
4	23	21	51.0	44.0	
					73
5	19	17	46.0	37.0	
					60
6	24	24	53.0	45.0	
					46
7	21	19	57.0	49.0	
					73
8	20	19	55.0	49.0	
					64
9	22	22	51.0	46.0	
					72
10	20	19	50.0	45.0	
					103
11	25	22	43.0	37.0	
					77
12	19	18	37.0	33.0	
					88
13	22	21	42.0	34.0	
					93
14	24	23	50.0	40.0	
					100
15	22	20	39.0	31.0	
全長 10.90 m					

第71表　杭列66～69計測表

Pit No	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm) 最深	深さ(cm) 最浅	Pit間(cm)
70－1	22	17	39.0	35.0	
					89
2	21	17	43.0	39.0	
					50
3	29	27	50.0	41.0	
					55
4	25	22	35.0	32.0	
					152
5	18	16	32.0	29.0	
					81
6	23	21	36.0	33.0	
					105
7	17	17	38.0	34.0	
					105
8	21	20	60.0	53.0	

Pit No	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm) 最深	深さ(cm) 最浅	Pit間(cm)
70－8					
					124
9	23	17	43.0	37.0	
					87
10	20	19	48.0	42.0	
					94
11	18	17	45.0	38.0	
					56
12	21	18	30.0	25.0	
					69
13	20	19	38.0	32.0	
					82
14	22	19	30.0	23.0	
全長 11.49 m					

第72表　杭列70計測表



第74図　迫地実測図－4（下段）

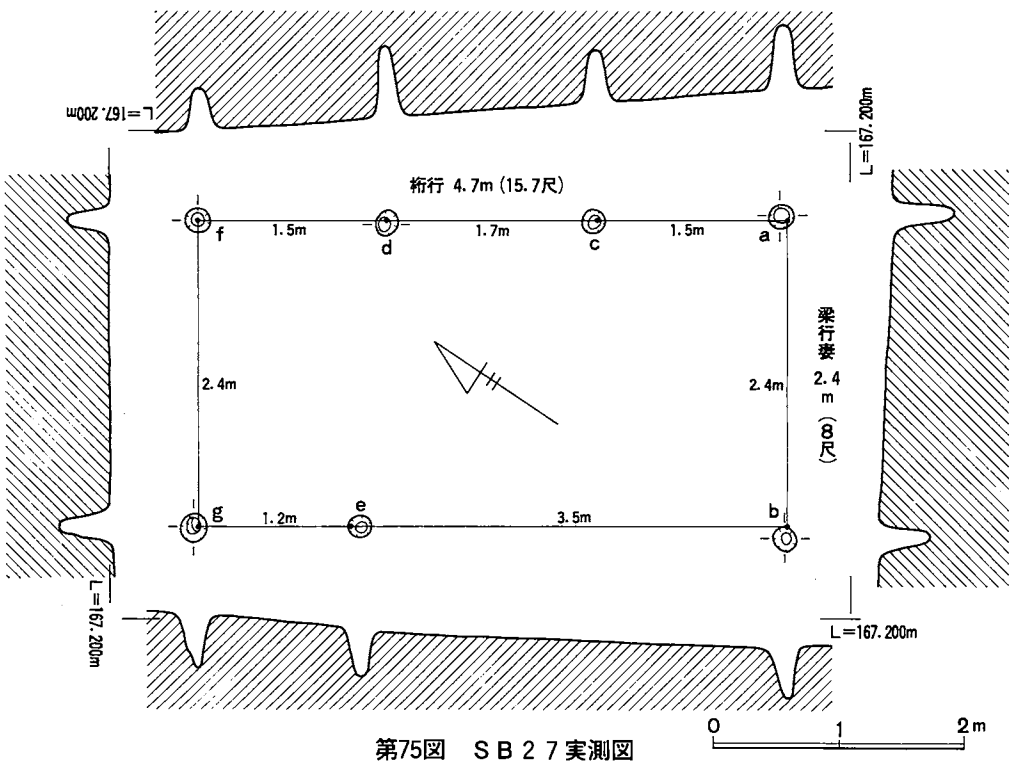
〔ＳＢ２７〕

桁行4.7ｍ（15.7尺）、梁行妻2.4ｍ（８尺）の３間×１間の建物で、桁行方位はＮ32°Ｗで、ほぼ東西方向である。柱間寸法は、桁行Ｐａ～Ｐｃ～Ｐｄ～Ｐｆで1.5ｍ（５尺）＋1.7ｍ（5.7尺）＋1.5ｍ（５尺）、Ｐｂ～Ｐｇは東側寄りの中央柱が不明で、Ｐｂ～Ｐｅ～Ｐｇで3.5ｍ（11.7尺）＋1.2ｍ（４尺）となる。梁行妻は、Ｐａ～Ｐｂで2.4ｍ（８尺）、Ｐｆ～Ｐｇで2.4ｍ（８尺）を測る。

柱穴の大きさはＰｇが最大（23×21cm）、Ｐｂが最小（19×16cm）で、平均値は20.3×17.9cmとなる。深さはＰｄが最深（55cm）、Ｐｆが最浅（34cm）で、平均値は42.1cmである。梁行妻の東側と西側の高さを比べた場合、柱穴の検出面は北側Ｐａ～Ｐｆで38cm、南側Ｐｂ～Ｐｇで22cm、西側の方が高い。さらに、桁行の北側と南側では東側Ｐａ～Ｐｂで16cm、南側のほうが高い。西側Ｐｆ～Ｐｇは、ほぼ水平である。

Pit No	桁行柱間 (m)	桁行間(m)	Pit No	梁間柱間 (m)	梁間間(m)	Pit No	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
a～c c～d d～f	1.5 1.7 1.5	4.7	a～b	2.4	2.4	a b c d e f g	20 19 19 21 20 20 23	18 16 18 18 16 18 21	47 41 37 55 38 34 43
b～e e～g	3.5 1.2	4.7	f～g	2.4	2.4				

第73表　ＳＢ２７計測表



第75図　ＳＢ２７実測図

〔ＳＢ２８〕

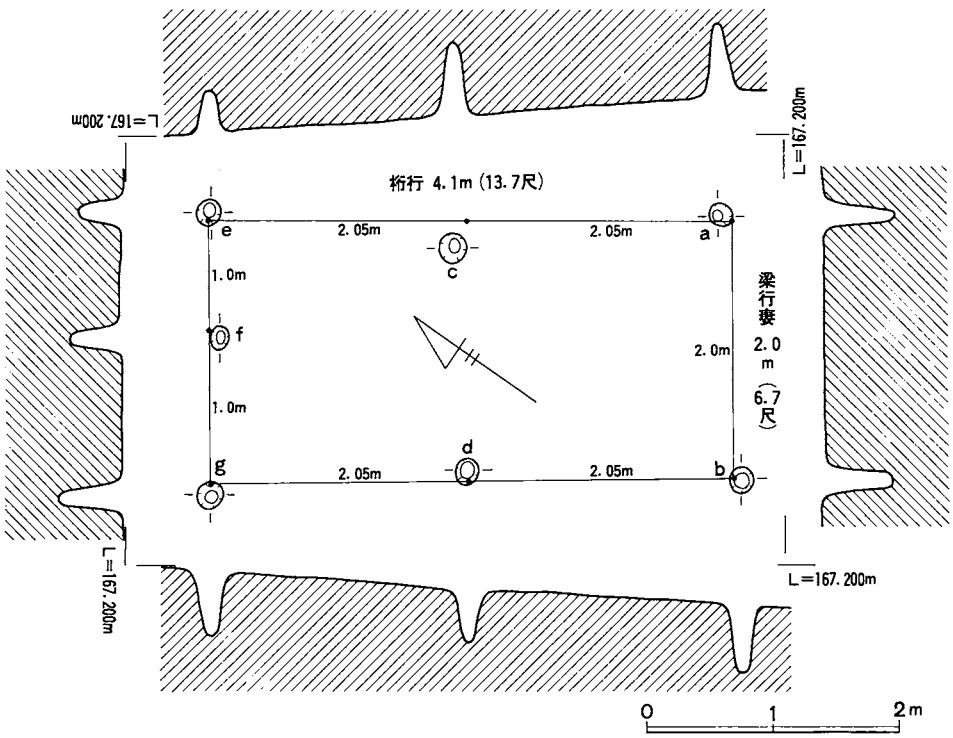
桁行4.1ｍ（13.7尺）、梁行妻2.0ｍ（6.7尺）の２間×２間の建物で、桁行方位はＮ32°Ｗである。柱間寸法は桁行Ｐａ～Ｐｃ～Ｐｅで2.05ｍ（6.8尺）＋2.05ｍ（6.8尺）、Ｐｂ～Ｐｄ～Ｐｇで2.05ｍ（6.8尺）＋2.05ｍ（6.8尺）を測るが、Ｐｅは桁行Ｐａ～Ｐｅ列から10cm～20cm、南側へずれている。梁行妻Ｐｅ～Ｐｆ～Ｐｇは1.0ｍ（3.3尺）＋1.0ｍ（3.3尺）であるが、Ｐａ～Ｐｂは中央柱が不明で全長2.0ｍ（6.7尺）を測る。柱列はすべて千鳥の並びとなる。

柱穴の大きさはＰｃが最大（24×22cm）、Ｐｆが最小（18×15cm）で、平均値は20.3×18.9cmとなる。深さはＰｃが最深（57cm）、Ｐｅが最浅（35cm）で、平均値は47.7cmである。

桁行の北側と南側の高さを比べた場合、柱穴の検出面は東側Ｐａ～Ｐｂと西側Ｐｅ～Ｐｇで、ほとんど水平である。さらに、梁行妻の東側と西側では、北側Ｐａ～Ｐｅで34cm、南側Ｐｂ～Ｐｇで36cm、西側が高い。

Pit No	桁行柱間 (m)	桁行間(m)	Pit No	梁間柱間 (m)	梁間間(m)	Pit No	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
a～c c～e	2.05 2.05	4.1	a～b	2.0	2.0	a b c d	19 19 24 19	17 19 22 19	54 55 57 42
b～d d～g	2.05 2.05	4.1	e～f f～g	1.0 1.0	2.0	e f g	21 18 22	19 15 21	35 40 51

第74表　ＳＢ２８計測表



第76図　ＳＢ２８実測図

〔ＳＢ２９〕

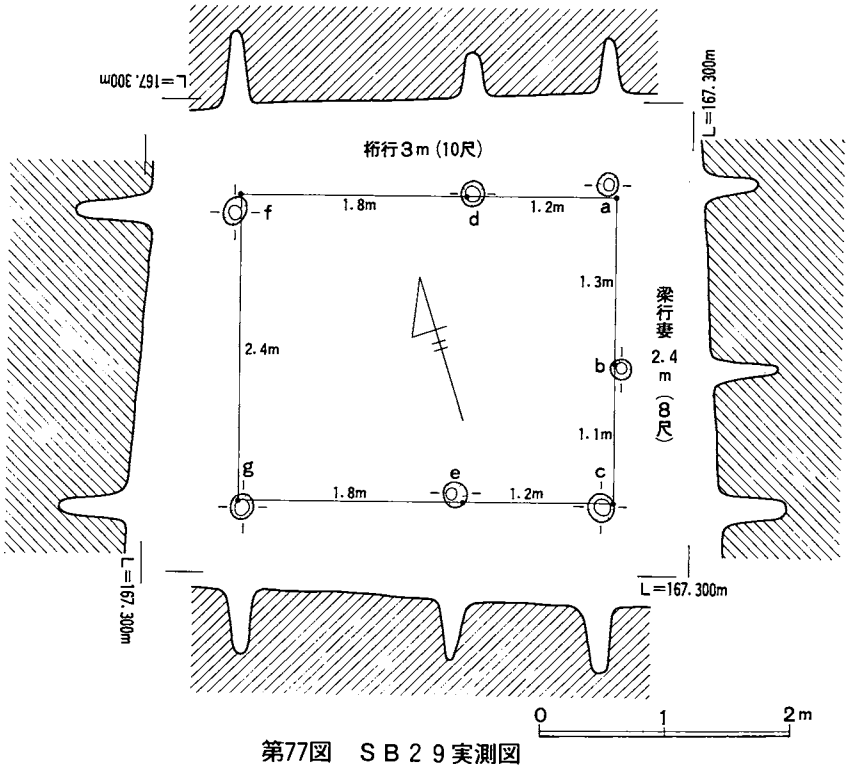
桁行3.0m（10尺）、梁行妻2.4m（８尺）の２間×２間の建物で、桁行方位はN68°Wである。柱間寸法は、Ｐａ～Ｐｄ～Ｐｆで1.2m（４尺）＋1.8m（６尺）、Ｐｃ～Ｐｅ～Ｐｇで1.2m（４尺）＋1.8m（６尺）、梁行妻Ｐａ～Ｐｂ～Ｐｃで1.3m（4.3尺）＋1.1m（3.7尺）であるが、Ｐｆ～Ｐｇは中央柱が不明で全長2.4m（８尺）を測る。

柱穴の大きさはＰｃで最大（23×21cm）、Ｐｂが最小（17×15cm）で、平均値は19.7×17.9cmとなる。深さは、Ｐｆが最深（60cm）、Ｐｄが最浅（34cm）で、平均値は48.9cmである。柱列は、すべて千鳥の並びとなる。

梁行妻の東側と西側の高さを比べた場合、北側Ｐａ～Ｐｆで20cm、南側Ｐｃ～Ｐｇで15cm、西側の方が高い。さらに、桁行の北側と南側では、東側Ｐａ～Ｐｃで21cm、西側Ｐｆ～Ｐｇで22cm、北側の方が高い。

Pit No	桁行柱間 (m)	桁行間(m)	Pit No	梁間柱間 (m)	梁間間(m)	Pit No	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
a～d	1.2	3.0	a～b	1.3	2.4	a	18	17	43
d～f	1.8		b～c	1.1		b	17	15	53
						c	23	21	53
						d	19	18	34
c～e	1.2	3.0	f～g	2.4	2.4	e	20	19	47
e～g	1.8					f	21	17	60
						g	20	18	52

第75表　ＳＢ２９計測表



第77図　ＳＢ２９実測図

〔杭列　71〕

迫地の最下部から検出された杭列で、標高167.0mラインを跨いでいる。10個の杭跡から構成されており、杭間の距離は0.47～1.46mで全長7.68mを測る。

並びは、迫地の上場に対して凹の状態となる。建築址に隣接している。

〔杭列　72（古道）〕

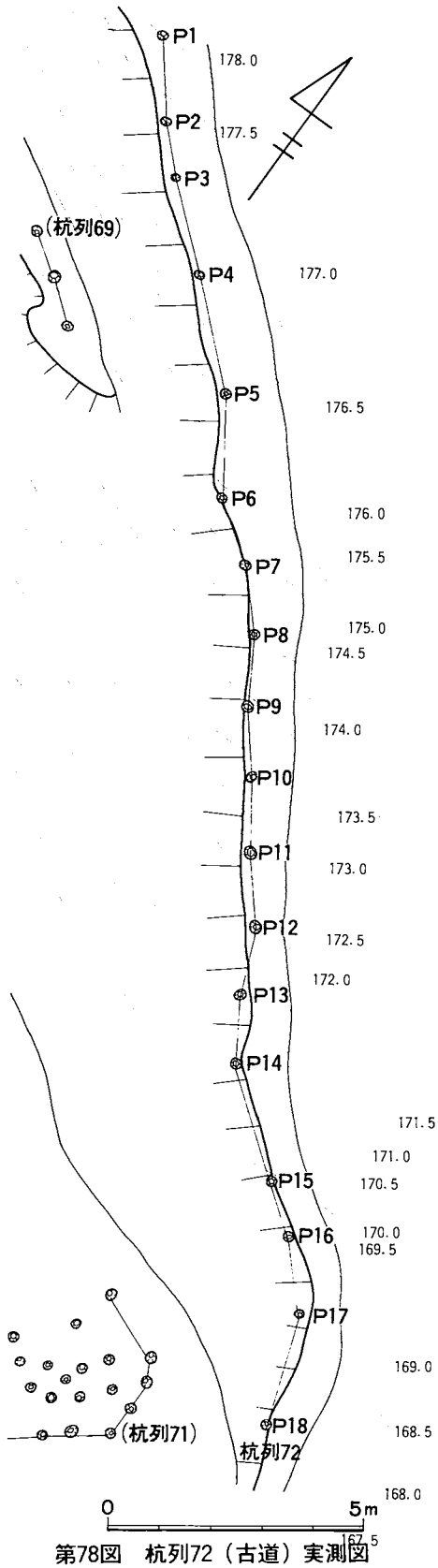
迫地の東縁から1.0～1.1m幅の古道と、これに伴う杭列72が検出された。

杭列72は、古道の西縁に沿ってあたかもガードレールであるかのように整然と並ぶ杭列で、18個の杭跡から構成されている。杭間の距離は1.11～2.37mで、全長27.65mを測る。標高167.5mから178.0mの範囲で確認出来た。上部については古道が崩壊している。

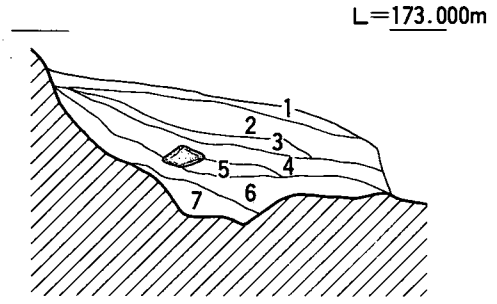
Pit No	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm) 最深	深さ(cm) 最浅	Pit間(cm)
71－1	19	16	60.0	50.0	
					122
2	19	15	58.0	48.0	
					84
3	20	15	49.0	45.0	
					107
4	18	16	46.0	45.0	
					59
5	25	20	57.0	52.0	
					75
6	20	19	45.0	41.0	
					60
7	20	17	48.0	46.0	
					68
8	24	18	56.0	53.0	
					47
9	20	16	44.0	43.0	
					146
10	22	20	42.0	39.0	
					全長　7.68 m

Pit No	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm) 最深	深さ(cm) 最浅	Pit間
72－1	21	15	32.6	25.6	
					166
2	18	18	28.6	22.2	
					111
3	17	13	38.5	29.5	
					195
4	21	17	23.0	16.4	
					235
5	20	19	33.4	23.7	
					204
6	19	16	30.6	21.3	
					139
7	22	19	19.3	18.0	
					135
8	22	20	35.4	25.0	
					140
9	25	24	35.9	24.7	
					134
10	21	18	37.6	25.6	
					144
11	29	22	25.0	14.3	
					145
12	28	22	28.5	17.8	
					149
13	24	21	29.2	20.2	
					138
14	24	20	24.6	11.0	
					237
15	18	17	25.5	18.9	
					116
16	19	17	28.6	21.7	
					152
17	17	16	27.9	19.1	
					225
18	20	18	33.3	23.8	
					全長　27.65 m

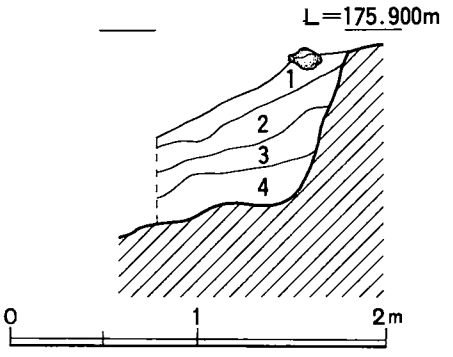
第76表　杭列71・72計測表



第78図　杭列72（古道）実測図



第79図　古道断面図１



第80図　古道断面図２

1	表　　土
2	灰黒色土＞褐灰色土
3	灰黒色土＞小礫
4	灰黒色土
5	小　　礫
6	黄褐色土＋小礫
7	黄褐色土

第77表　古道土層観察表１

1	表　　土
2	灰 褐 色 土
3	灰 黒 色 土
4	黄 褐 色 土

第78表　古道土層観察表２

第Ⅳ章　出　土　遺　物

〔1〕主軸尾根平坦部

1～8・10・11・17は青磁である。器種による分類は、8が深皿で、他はすべて碗と思われる。口径が復元できるのものは1・3・6・8で、1は18.2cm、3は17.0cm、6は16.3cm、8は12.8cmを測る。10は唯一、底部の残存で復元底径3.0cm、高台高6mmの測定値となる。17は体部の残存で、やや内弯し、厚さ4～4.5mmを測る。

口縁部の形状については、肥厚し丸味を帯びるもの（1～3）と、やや直口気味のもの（4・5)、内器面が半月状を呈するもの（6・7）とに分けられる。体部は上位でいずれも、やや外弯する。8の皿は口縁部が扁平で、幅1.1cmを測る。

文様を有するものは10・11で、外器面の下位に蓮弁文様の一部が残るが、文様自体には差異があり、10は簡略化され、11は削り出しによる。他はいずれも無文である。

釉色は淡灰緑色(1)、オリーブ灰色（2・3・17)、灰緑色(4)、緑灰黄色(5)、緑灰色（6・7・10)、緑白色(8)、緑青白色(11)に分かれる。5・11は内外器面に貫入が走る。

9・12～14・16は半磁器で、15・18は青白磁である。いずれも体部の残存で薄壁であるが、9は復元口径10.4cmを測る。体部は全体的に直線な伸びを示すもの（12・13)、外弯するもの(14)、内弯するもの(16)と、上位部分に限り外弯するもの(15)とに分けられる。口縁部は16を除き直口気味で、12・13は特にその傾向が著しい。9・13の口唇部はヘラ削りにより扁平である。釉色は白灰色(9)、灰青色（12・13・16)、青白色(14)、緑灰白色（15・18）に分かれ、14・16には光沢がある。13・15・18は器面に貫入が走っている。14は釉下に白青色の横線が幾重にも走っている。

19は厚手の白磁で、器厚は8～10mmを測る。内器面に界線状の沈線が巡る。

20～23は天目碗である。21を除き口径の復元が可能で、復元口径は、20が13.4cm、22が13.0cm、23が11.5cmを測る。口縁部はいずれも直口で、体部は内弯気味にややラッパ状に開いている。但し、23のみが体部の上位で僅かに外弯し、他と若干異なる。21・23は上質の天目であるが、22についてはやや質が劣る。

24は銅製の懸け仏で、鋳型による成形である。座像で全長3.8cm、背に留め用の孔がついている。仏像の表情は曖昧で不鮮明である。

25～28は擂鉢で、25のみが須恵系土器で他は瓦質土器である。

25は底部で、外底は平底を呈する。内底面については、同心円状の沈線の上から直線の沈線が掻かれ、条線の一単位は7本を数える。焼成は非常に堅緻で、色調は灰青色である。

26・28は体部の一部である。焼成の度合いはいずれも甘い。26の条線の一単位は8本で体部は肥厚する。

27は口唇部で、外側が丸味を帯びている。復元口径15.8cmを測る。焼成は非常に堅緻である。

29・30は須恵器の体部である。いずれも内器面に刷け目が付いている。

31は須恵系の小壺で、頸部のみの残存である。口唇部はやや扁平で復元口径7.6cmを測る。器面には褐色～灰色の釉がかかっている。

32～58・60～68は土師器である。破片のものが多いが、器形によって大・中・小の3種に大別できる。42・47・56は外底面に板目圧痕が付く。

大型のものは32・38・39で、32は復元口径13.4cm、復元底径8.0cm、器高4.1cm、38は復元口径14.0cm、39は口径13.6cm、底径9.4cm、器高4.5cmを測る。体部については32がやや内弯気味に立ち上がり、外側へ大きく開くのに対し、39は内弯の度合が全体的に大きい。口縁部はいずれも直口気味となる。38は体部の上位が僅かに外弯する。

中型のものは33・35・37で、33は口径12.4cm、底径7.4cm、器高3.6cm、35は復元口径10.9cm、37は復元口径11.2cm、復元底径8.2cm、器高3.9cmを測る。体部は33・37が直線的な立ち上がりを見せるが、開口の度合は33の方が大きい。35は内弯気味に立ち上がり、中途でやや外弯する。

小型のものは坏状のもの(58)と皿状のもの（65～67）とがある。58は復元口径8.8cmを測り、体部がラッパ状に開いているが、内器面側については直線的な伸びを示し、外器面側は半月状に丸味を帯びている。65は復元口径5.8cm、復元底径4.8cm、器高1.7cm、66は口径7.2cm、底径6.2cm、器高1.4cmを測る。66の底部は体部と比較して厚手で、器厚9mmを測る。67はロクロ回転による成形とナデであるが、体部はつまみ上げられている。外底面はヘラ切り離しの可能性がある。

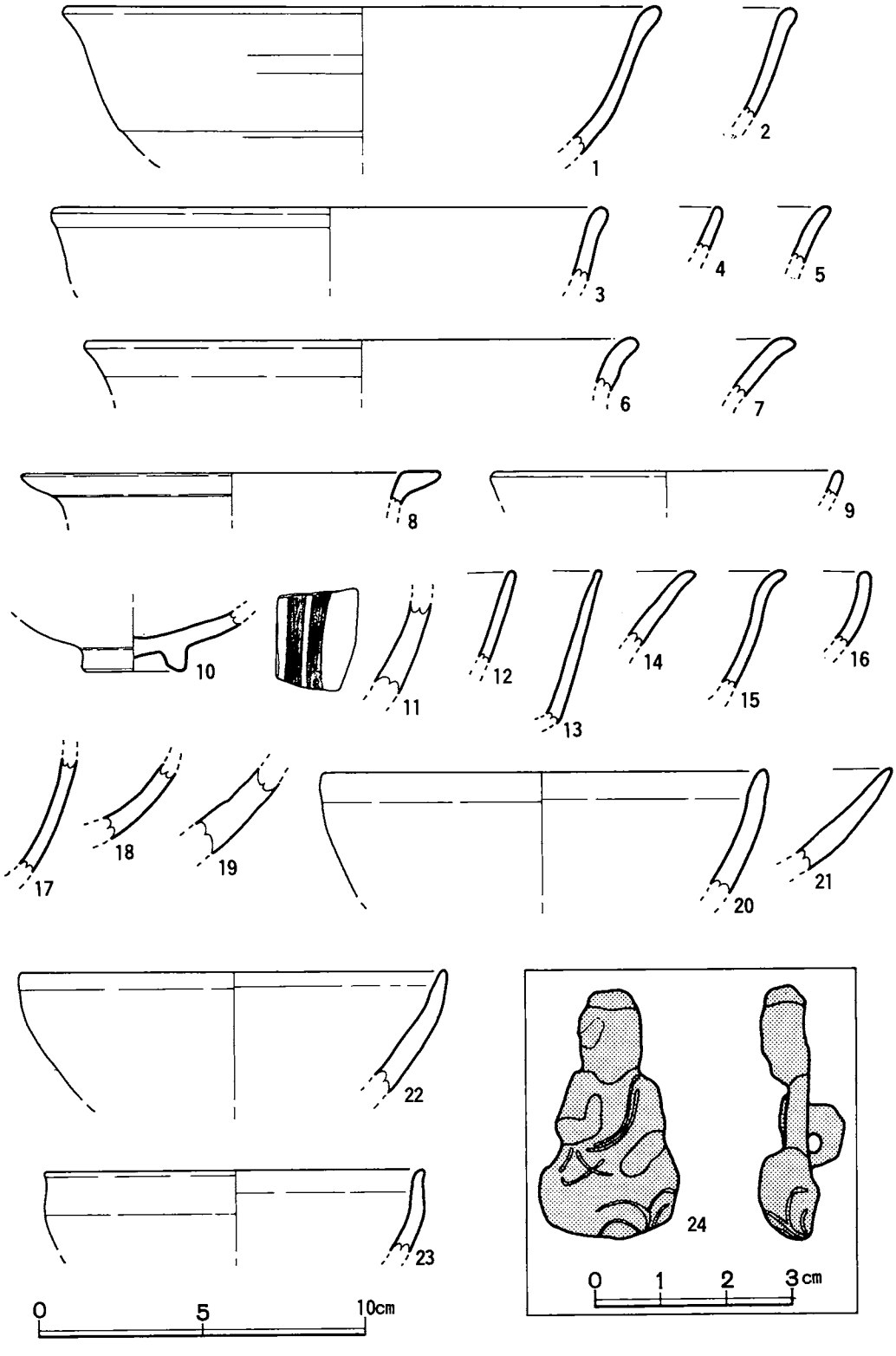
59・69・70は中世雑器である。69は外器面に緑茶色と黄白色の釉がかかる。70は高台付きの底部であるが、高台は貼り付けによる。内器面に黒灰色の釉がかかる。

71～79は鉄器である。この中で72～76は角釘、77は楔の可能性がある。

80は土錘の一部で、81は瓦質系の中世雑器である。

82は砥石で、最大の長さは7.3cm、最大幅・厚さ2.4cm、重さ63.9gを測る。

83～86は鉄砲玉である。83は全体的に多少、押し潰された状態にあり、玉面にわずかの剝離痕が認められる。灰色の被膜の下は白色を呈する。直径9.5～10.5mm、重さ5.26gを測る。84は玉面に剝離痕は認められず、被膜は褐灰色を呈する。直径9～9.5mm、重さ4.85gを測る。85は大型の鉄砲玉である。全体的にはしゃげた状態で、歪な球体を呈する。玉面は剝離が目立つ。灰色の被膜の下は白色を呈する。直径1.1～1.3cm、重さ10.39gを測る。86は非常に均整の取れた球体で、被膜は半分が褐灰色で、半分が白色を呈する。重さ5.60gを測る。



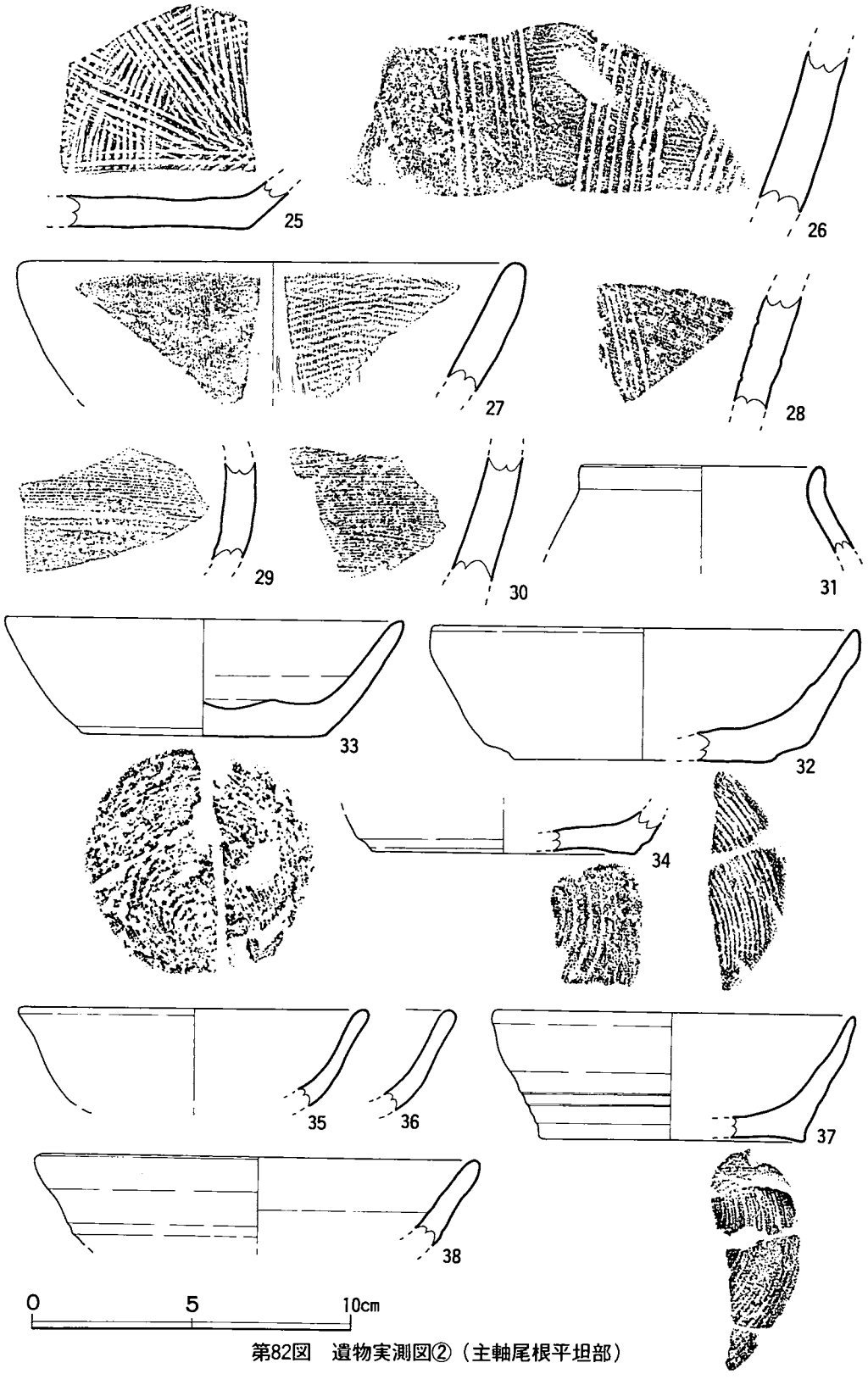
第81図　遺物実測図①（主軸尾根平坦部）

	器種	形態の特徴	手法・調整・文様	備考	出土箇所
1	青磁 (碗)	体部は内弯気味に立ち上がり、口縁部で外弯する。 口縁部は肥厚（体部の厚さは 4.5㎜、口縁部は 5㎜）し、丸味を帯びる。 復元口径　18.2㎝	ロクロ回転によるナデ。 内器面：丁寧なナデ。 外器面：釉下に細かい沈線が巡る。 〔文様〕無文。	〔色調〕 胎土：灰白色 釉色：淡灰緑色	Ⅰ層土
2	青磁 (碗)	体部は直線的に伸び、口縁部でやや外弯し、肥厚する。（体部の厚さは中位で 4㎜、口縁部で 6㎜） 口縁部で丸味を帯びる。	ロクロ回転によるナデ。 〔文様〕無文。	〔色調〕 胎土：灰白色 釉色：オリーブ灰色	Ⅰ層土
3	青磁 (碗)	口縁部で若干、外弯する。 口縁部は肥厚し、丸味を帯びる。 復元口径　17.0㎝	ロクロ回転によるナデ。 〔文様〕無文。	器面は釉の剝離が目立つ。 〔色調〕 胎土：白灰色 釉色：オリーブ灰色	Ⅰ層土
4	青磁	口縁部はやや直口気味。	――――	上質な青磁。 〔色調〕 胎土：灰色 釉色：灰緑色	Ⅰ層土
5	青磁	口縁部は僅かに外弯し、やや直口気味に伸びる。	ロクロ回転によるナデ。 〔文様〕無文。	内外器面に貫入が走る。 〔色調〕 胎土：灰白褐色 釉色：緑灰黄色	Ⅰ層土
6	青磁	口縁部は、やや外弯する。 口縁部の内器面は、半月状を呈する。 復元口径　16.3㎝	ロクロ回転によるナデ。 外器面：ごく薄い稜線が巡る。	器面に使用痕が目立つ。 〔色調〕 胎土：灰色 釉色：緑灰色	Ⅰ層土
7	青磁	口縁部で大きく外弯する。 体部は上位にかけて漸次、肥厚する。（厚さは下位で 4㎜、口縁部は 5㎜） 口唇部の内面は、半月状を呈する。	ロクロ回転によるナデ。 〔文様〕無文。	内器面：釉中に白色斑点と糸状のものが混じる。 外器面：上位は緑灰色。下位は、やや薄い緑灰色で白色斑点が混じる。	東端平坦
8	青磁 (皿)	口縁部は扁平（幅 1.1㎝）。 復元口径　12.8㎝	――――	〔色調〕 胎土：灰白色 釉色：緑白色 口縁部の屈曲部分は緑白色。外端部は茶色	表土
9	半磁器	口唇部はヘラ削りで扁平。 復元口径　10.4㎝	――――	〔色調〕 胎土：灰白色 釉色：白灰色	Ⅰ層土
10	青磁	高台と体部の境に沈線が巡る。 高台の畳付きは、中央部の幅 1.5㎜を残し、外側（幅 1.5㎜）と内側（幅 4㎜）へ削り取られている。 復元底径　3.0㎝ 高台高　6㎜	ロクロ回転によるナデ。 〔文様〕外器面の下位に、簡略化された蓮弁文様の一部が残る。	高台の畳付き部分のみ、露胎する。（肌地は赤褐色） 他は全面に施釉。 〔色調〕 胎土：灰白色 釉色：緑灰色	表土
11	青磁	体部は肥厚する。（上位で 6.5㎜、下位で 7.8㎜）	〔文様〕外器面に削り出しによる、蓮弁文様の下位部分が残る。	内外器面に太目の貫入が走る厚めに施釉。 〔色調〕 胎土：灰白色 釉色：緑青白色	表土
12	半磁器	体部は下位よりそのままの厚さ(3㎜)で直線的に伸びる。	ロクロ回転によるナデ。	内器面：上位に釉溜まり部分がある。 〔色調〕 胎土：灰褐色 釉色：灰青色	Ⅰ層土

第79表　遺物観察表①(主軸尾根平坦部)

	器種	形態の特徴	手法・調整・文様	備考	出土箇所
13	半磁器	体部は直に立ち上がって漸次、薄壁となり、そのままの状態で、口縁部に至る。（厚さは下位で4㎜、上位で2㎜） 口唇部はヘラ削りで扁平。	ロクロ回転による丁寧なナデ。 外器面：稜線と極く浅い沈線が巡る 〔文様〕無文。	内器面：下位部分に横方向の大きな貫入が走る。 〔色調〕 胎土：灰色 釉色：灰青色	Ⅰ層土
14	半磁器	体部は直線的に伸びて、口縁部で僅かに外弯する。	ロクロ回転によるナデ。	外器面：口縁部の周辺を除き釉下に白青色の横線が幾重にも走る。 〔色調〕 胎土：灰色 釉色：青白色、光沢あり。	平坦部
15	青白磁	体部は内弯気味に伸び、口縁部で大きく外弯する。 口縁部（外器面）の屈曲箇所は、6㎜幅の沈線状を呈する。	ロクロ回転によるナデ。 〔文様〕無文。	内外器面：ごく僅かに太めの貫入が走る。器面に使用痕が目立つ。 〔色調〕 胎土：灰色 釉色：緑灰白色	Ⅰ層土
16	半磁器	体部は内弯し、下位部分よりも口縁部が肥厚する。（厚さは下位で4㎜、口縁部で 4.5㎜） 器形は多少、歪。	ロクロ回転によるナデ。 〔文様〕無文。	内外器面：強い光沢あり。 〔色調〕 胎土：白灰色 釉色：灰青色	Ⅰ層土
17	青磁	体部はやや内弯する。 （厚さ4～4.5㎜） （2と同一個体の可能性あり）	〔文様〕無文。	内器面：気泡痕があり、この部分については、釉がはじけている。 〔色調〕 胎土：灰白色 釉色：オリーブ灰色	Ⅰ層土
18	青白磁	体部は下位でやや肥厚する。（厚さは上位で5㎜、下位で 6.3㎜）	――――	内外器面：細かな貫入が走る 〔色調〕 胎土：白褐色 釉色：緑灰白色	Ⅰ層土
19	白磁	体部は肥厚する。（厚さ8～10㎜）	内器面：ごく浅い界線状の沈線（幅0.5㎜）が巡る。	〔色調〕 胎土：灰白色 釉色：鈍い緑白色（薄く施釉）	表土
20	天目碗	体部は内弯する。口縁直口。 体部は口縁部で内器面側が僅かに肥厚し、外器面は括れる。 復元口径　13.4㎝	ロクロ回転によるナデ。	〔色調〕 胎土：灰白色 釉色：黒色 口縁上端は茶色。	Ⅰ層土
21	天目碗	残存体部は直線的に伸びる。 口縁直口。	ロクロ回転によるナデ。	上質の天目。 良く使い込まれている。 〔色調〕 胎土：灰白色 釉色：黒色	平坦部
22	天目碗	体部は内弯し、口縁部で若干、外弯する。 口縁は直口気味。 復元口径　13.0㎝	ロクロ回転によるナデ。	余り上質の天目ではない。 〔色調〕 胎土：灰色 釉色：黒茶色	山頂部分
23	天目碗	体部は内弯し、口縁部で若干、外弯する。 口縁直口。 復元口径　11.5㎝	ロクロ回転による丁寧なナデ。	非常に上質な天目碗。 〔色調〕 胎土：白灰色 釉色：黒色	Ⅰ層土
24	懸け仏	座像で、全長 3.8㎝。 背に留め用の孔がついている。	鋳型による成形。	銅製。 仏の表情は曖昧。	

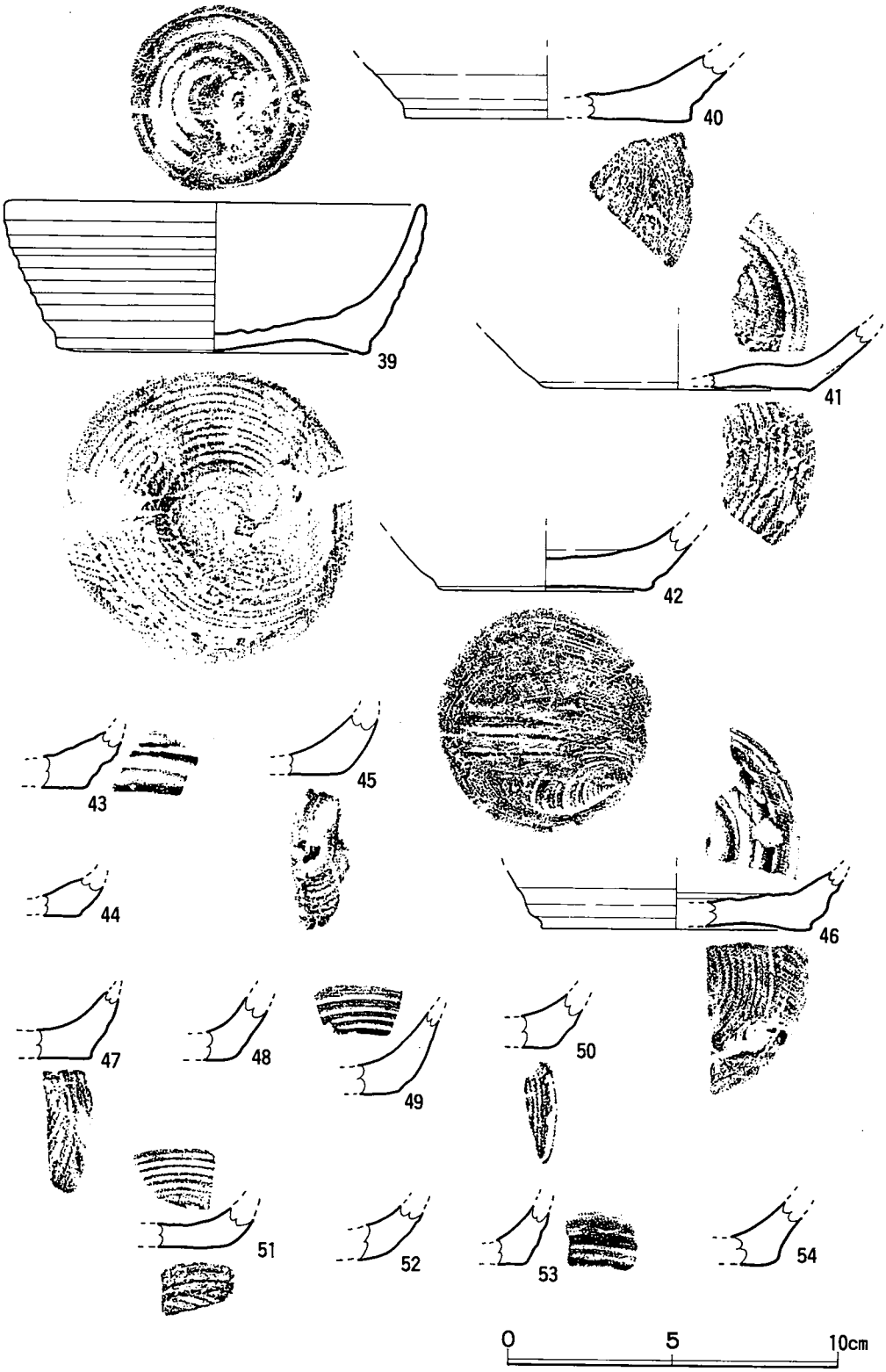
第80表　遺物観察表②（主軸尾根平坦部）



第82図　遺物実測図②（主軸尾根平坦部）

	器種	形態の特徴	手法・調整・文様	備考	出土箇所
25	須恵系 擂鉢	外底は平底。	外器面：横ナデ。 内底面：同心円状の沈線の上から、直線の沈線が掻かれている。 条線の一単位は7本。 外底面：粗いナデ後に指押え。	〔色調〕灰青色 〔焼成〕非常に堅緻。	表土
26	瓦質擂鉢	体部は肥厚する。（厚さ 1.2～1.4cm）	内器面：横と斜め方向の刷け目。 条線の一単位は8本。 外器面：ロクロ回転による横ナデと指押え。	条線の磨耗が目立つ。 〔色調〕 内器面：淡褐色 外器面：淡橙色 〔焼成〕やや、甘い。	Ⅰ層土
27	瓦質擂鉢	口唇部の外側は丸味を帯びる。 復元口径　15.8cm	内器面：左斜めと右斜めの刷け目。 条線は8本まで確認出来る 外器面：ロクロ回転によるナデと指押え。上位部分は丁寧な横ナデ。	〔色調〕灰白色 〔焼成〕非常に堅緻。	Ⅰ層土
28	瓦質擂鉢	体部は肥厚する。（厚さ 1.1cm）	調整はローリングにより不明。 内器面：条線は4本まで認められる 外器面：指押え。	〔色調〕 内器面：灰色 外器面：淡灰褐色 〔焼成〕やや、甘い。	
29	須恵器	体部は肥厚する。（厚さ 1.0cm）	内器面：横及び斜め方向の刷け目。 外器面：ナデ。	〔色調〕灰色	
30	須恵器	体部は肥厚する。（厚さ 1.2cm）	内器面：横方向の刷け目。 外器面：ナデ。	〔色調〕灰茶色	Ⅰ層土
31	須恵系 小壺	頸部は「く」の字を呈する。 外器面の屈曲部は、細沈線を呈する。 口唇部は、やや扁平。 復元口径　7.6cm	――――	〔施釉〕 内器面：ベッタリとした状状態で付着。 外器面：薄くまばらにかかる。 〔色調〕 胎土：濃灰色 釉色：褐色～灰色	Ⅰ層土
32	土師器 (坏)	体部は内弯気味に大きく開く。 口縁の外器面は、半月状を呈する。 体部は肥厚（厚さは中位で8mm）し、外底端と体部の境は、幅 1.0cmで大きく窪む。 （底部の厚さは外底端で 1.2cm、中央部で 9 mm） 復元口径　13.4cm 復元底径　8.0cm 器高　4.1cm	ロクロ回転によるナデ。 内器面：丁寧なナデ。 外器面：軽い指押えが加わる。 外底面：糸切り離し。	〔色調〕淡褐色 〔焼成〕やや、不良。	Ⅰ層土
33	土師器 (坏)	体部は直線的に大きく開く。 内底面は中央部寄りで、やや窪む。 外底は平底。 口径　12.4cm 底径　7.4cm 器高　3.6cm	ロクロ回転による、やや粗いナデ。 外底面：糸切り離し。	〔色調〕淡褐色	
34	土師器	外底は上げ底。 外底端は肥厚する。（厚さ 1.1cm） 体部との境は、幅6mmで大きく窪む。	ロクロ回転によるナデ。 外底面：糸切り離し。	〔色調〕明褐色	Ⅰ層土
35	土師器	体部は内弯気味に大きく開き、中途で僅かに外弯する。 体部は中途で、やや括れる。（体部の厚さは下位で6mm、中位で 3.5mm、口縁部は4mm） 復元口径　10.9cm	ロクロ回転による、やや粗いナデ。	〔色調〕白褐色	Ⅰ層土

第81表　遺物観察表③（主軸尾根平坦部）



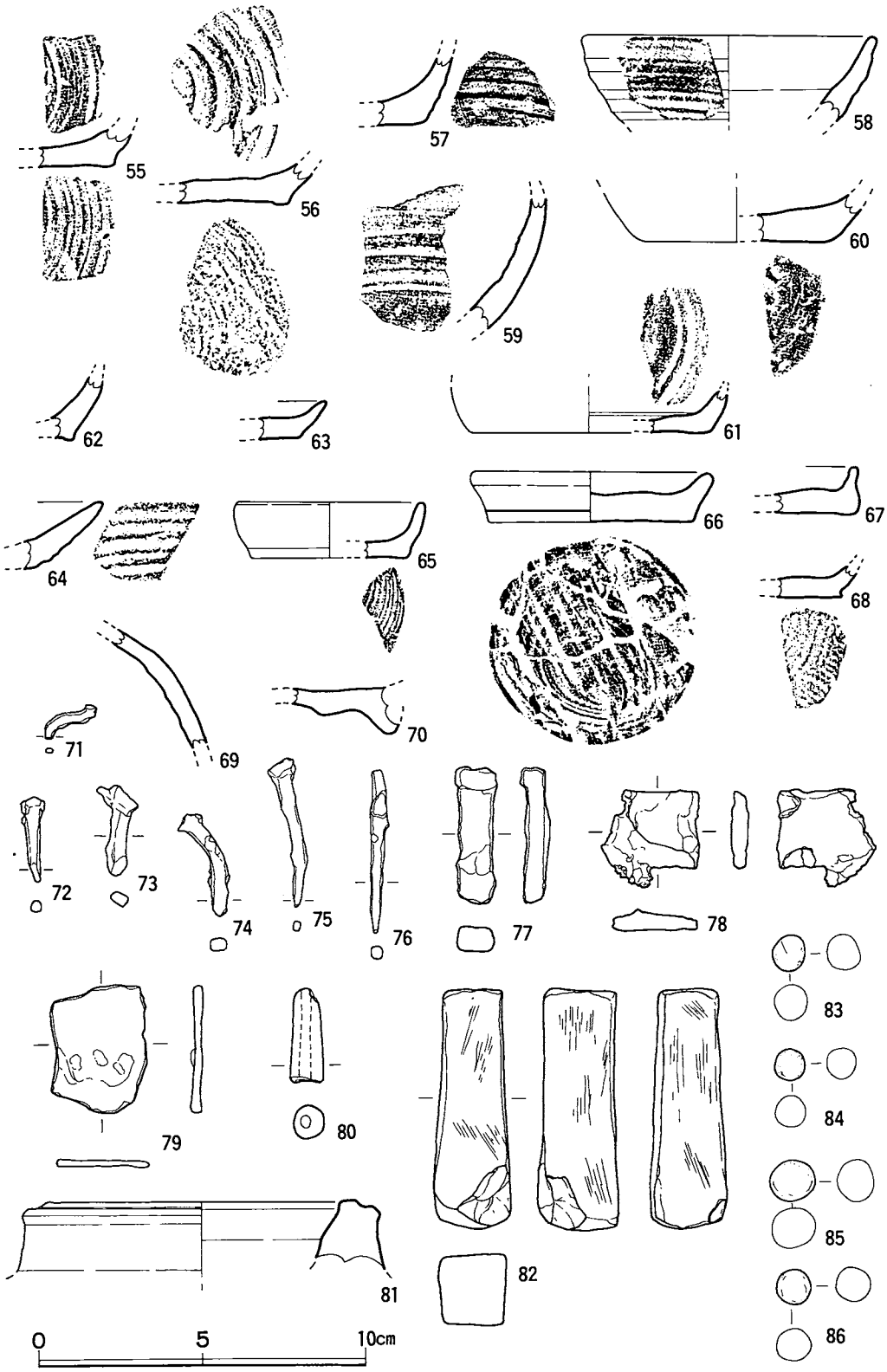
第83図　遺物実測図③（主軸尾根平坦部）

	器種	形態の特徴	手法・調整・文様	備考	出土箇所
36	土師器	口縁部は丸味を帯びる。 体部は中途で一旦括れて、口縁部で肥厚する。（体部の厚さは下位で6㎜、中位で 4.5㎜、口縁部は 5.5㎜）	調整はローリングにより不明。	胎土が手に付着する。 〔色調〕乳白色 〔焼成〕やや、甘い。	表土
37	土師器 (坏)	体部は直立気味に伸びているが、下位から中位にかけて、やや外弯し、中位から上位は内弯傾向にある。 外底は上げ底。 外底端は角張る。 復元口径　11.2㎝ 復元底径　8.2㎝ 器高　3.9㎝	ロクロ回転によるナデ。 内器面：丁寧なナデ。 外器面：鮮明な稜線と、幅5～7㎜の沈線が巡る。 外底面：糸切り離し。	〔色調〕 内器面：鈍い褐色 外器面：灰黒褐色	表土
38	土師器	体部の上位が、僅かに外弯する。 口唇部は扁平（幅2㎜）で、ヘラ削りされている。 体部は、やや肥厚する。（厚さ5～7㎜）。 復元口径　14.0㎝	ロクロ回転によるナデ。	〔色調〕 内器面：淡橙色 外器面：灰黒褐色	Ⅰ層土
39	土師器 (坏)	体部は内弯する。 外底は上げ底で、歪な器形。 底部は、やや薄壁（厚さ6㎜）で、外底端は肥厚する。（厚さ 1.5㎝） 外底端は角張り、体部との境は、1㎝幅で大きく窪む。 口径　13.6㎝ 底径　9.4㎝ 器高　4.5㎝	ロクロ回転による丁寧なナデ。 内器面：横ナデ。 外器面：鮮明な稜線と幅4㎜の沈線が巡る。 内底面：稜線状を呈する渦巻き痕。 外底面：糸切り離し後、ナデが加えられている。	〔色調〕淡橙色 〔焼成〕堅緻	Ⅰ層土
40	土師器	外底端は肥厚（厚さ 1.4㎝）。 底部中央寄りの厚さは7㎜。 外底端は角張り、外側へ張り出す。 外底端と体部の境は、7㎜幅で大きく窪む。 体部は外側へ大きく開く。 外底は平底。 復元底径　8.7㎝	ロクロ回転によるナデ。 内器面：比較的、丁寧なナデ。 外器面：稜線と幅3㎜の沈線が巡る 外底面：糸切り離し後、丁寧なナデが加えられている。	〔色調〕淡褐色 〔焼成〕比較的、堅緻。	Ⅰ層土
41	土師器	外底端はやや角張り、体部との境は窪む。 体部は外側へ大きく開く。 外底は上げ底。 底部の中央部は薄壁。（厚さ3㎜） 復元底径　8.0㎝	ロクロ回転によるナデ。 外器面：横ナデ、一部は斜め方向のナデ。 外底面：糸切り離し後、ナデが加えられている。	色調〕淡褐色 〔焼成〕やや、堅緻。	Ⅰ層土
42	土師器	外底端と体部の境は、5㎜幅で沈線状に窪む。 外底端は肥厚する。（厚さ 1.3㎝） 外底は若干、上げ底。 底径　6.6㎝	外器面：ロクロ回転によるナデ。 内底面：不定ナデ。 外底面：糸切り離し。	外底面に板目圧痕。 〔色調〕茶褐色。 外底面：一部は灰黒色。	Ⅰ層土
43	土師器	外底端は角張り、体部との境は 1.0㎝幅で沈線状を呈する。 外底端は肥厚する。（厚さ 1.3㎝） 外底は平底。	ロクロ回転によるナデ。 内底面：稜線状を呈する渦巻き痕。 外底面：ヘラ切りの可能性あり。	〔色調〕黄褐色	Ⅰ層土
44	土師器	外底端は肥厚（厚さ1.0㎝）し、やや角張る。 外底端と体部の境は、僅かに窪み、体部は丸味を持って立ち上がる。	ロクロ回転による丁寧なナデ。 外器面：稜線と幅3㎜の沈線が巡る	〔色調〕淡橙色	Ⅰ層土

第82表　遺物観察表④（主軸尾根平坦部）

	器種	形態の特徴	手法・調整・文様	備考	出土箇所
45	土師器	体部は底部と比べて肥厚する。（厚さは底部で6㎜、体部で 1.0㎝） 外底端は、やや丸味を帯びる。	ロクロ回転による丁寧なナデ。 外底面：糸切り離し。	〔色調〕淡橙色	Ⅰ層土
46	土師器 （坏）	底部は肥厚する。（厚さは中央部よりで7㎜、底部端で 1.2㎝） 外底端は角張り、体部との境は4㎜幅で大きく窪む。 外底は多少、上げ底。 復元底径　8.1㎝	ロクロ回転によるナデ。 外器面：稜線と幅5㎜の沈線が巡る 内底面：稜線状を呈する渦巻き痕。 外底面：糸切り離し後、ナデが加わる。	〔焼成〕比較的、堅緻。	表土
47	土師器	外底端は肥厚する。（厚さ 1.2㎝） 外底端は角張り、体部との境は9㎜幅で大きく窪む。	ロクロ回転によるナデ。 外器面：稜線と幅4㎜の沈線が巡る 外底面：糸切り離し。	外底面に板目圧痕。 〔色調〕淡橙色	表土
48	土師器	外底端は肥厚する。（厚さ 1.1㎝）	ロクロ回転によるナデ。	〔色調〕淡褐色	
49	土師器	外底端と体部の境は6㎜幅で窪む。 底部端は肥厚する。（厚さ 1.1㎝） 体部は丸味を持って立ち上がる。	ロクロ回転によるナデ。 外器面：稜線と幅3～4㎜の沈線が巡る。 内底面：極めて丁寧なナデで、器面は滑らか。	〔色調〕鈍い橙色	Ⅰ層土
50	土師器	底部端は肥厚する。（厚さ 1.1㎝）	ロクロ回転による、やや粗いナデ。 外底面：糸切り離し。	〔色調〕淡橙色	Ⅰ層土
51	土師器	外底端は肥厚（厚さ9㎜）し、やや丸味を帯びる。	ロクロ回転によるナデ。 内器面：稜線状を呈する渦巻き痕。	〔色調〕淡橙色	Ⅰ層土
52	土師質 土器	体部は下位で肥厚する。（厚さ1.0cm）	ロクロ回転によるナデ。	〔色調〕淡橙色	Ⅰ層土
53	土師器	体部は直線的に立ち上がる。 外底端と体部の境に、1.5㎜幅の2条の沈線が巡る。 外底端は、やや角張る。	ロクロ回転によるナデ。	〔色調〕淡橙色	Ⅰ層土
54	土師器	外底端は肥厚（厚さ 1.2㎝）し、若干張り出す。	ロクロ回転によるナデ。	〔色調〕淡褐色	表土
55	土師器	外底端は肥厚する。（厚さ 1.0㎝） 外底端は角張り、体部との境は6㎜幅で窪む。 外底は平底。	ロクロ回転による丁寧なナデ。 内器面：稜線状を呈する、薄い渦巻き痕。 外底面：糸切り離し後、丁寧なナデが加えられる。	上質な土師器。 〔色調〕淡橙色	Ⅰ層土
56	土師器	外底は、やや上げ底。 外底端は肥厚する。（厚さ 1.0㎝） 外底端と体部の境は窪む。	ロクロ回転によるナデ。 内器面：稜線状を呈する、薄い渦巻き痕。 外底面：糸切り離し。	外底面に薄い板目圧痕。 やや、質量感のある土器。 〔色調〕鈍い淡橙色	Ⅰ層土
57	土師器	体部は直線的に立ち上がる。 外底端は丸味を帯びる。	ロクロ回転によるナデ。 外器面：稜線と幅3㎜の沈線が巡る 外底面：糸切り離し後、ナデ。	〔色調〕淡褐色	表土
58	土師器 （坏）	体部は内器面側が直線的に伸びており外器面側は半月状に丸味を帯びる。 復元口径　8.8㎝	ロクロ回転によるナデ。 内器面：丁寧なナデ。 外器面：稜線と幅4㎜の沈線が巡る 口縁部：周辺は丁寧な横ナデ。	〔色調〕 内器面：淡褐色 外器面：灰褐色	Ⅰ層土
59	中世雑器	体部はやや内弯し、下位で肥厚する。（厚さは上位で5㎜、下位で 7.8㎜）	ロクロ回転によるナデ。 内器面：同心円状の沈線（幅4㎜）が巡る。 外器面：一部に同心円状の細沈線が巡る。	外器面：中位部分まで施釉、以下は露胎。	Ⅰ層土

第83表　遺物観察表⑤（主軸尾根平坦部）



第84図　遺物実測図④（主軸尾根平坦部）

	器種	形態の特徴	手法・調整・文様	備考	出土箇所
60	土師器	外底端は肥厚（厚さ1.1cm）し、やや丸味を帯びる。 復元底径　5.4cm	ロクロ回転によるナデ。 外底面：ローリングで不明。	〔色調〕灰色～鈍い褐色（二次焼成の為）。	Ⅰ層土
61	土師器	外底は平底。 内底面と体部の境に、幅2㎜の2条の沈線が巡る。 復元底径　7.4cm	調整は不明。	〔色調〕鈍い橙色	表土
62	土師器	外底端は若干、張り出す。	ロクロ回転によるナデ。	〔色調〕鈍い橙色	山頂平坦
63	土師器 （皿）	底部は体部と比べて肥厚する。（厚さは底部で6㎜、体部で2～3㎜） 外底端と体部の境は、幅4㎜で窪む。 外底端は角張る。 推定器高　1.1cm	ロクロ回転によるナデ。	〔色調〕灰褐色	Ⅰ層土
64	土師器	体部は直線的に大きく開く。 口縁は直口気味。 推定器高　2.0cm	ロクロ回転によるナデ。 外器面：稜線と幅4㎜の沈線が巡る	〔色調〕鈍い橙色	Ⅰ層土
65	土師器 （皿）	体部は内弯する。 外底端は直立し、体部との境は沈線状を呈する。 復元口径　5.8cm 復元底径　4.8cm 器高　1.7cm	ロクロ回転による丁寧なナデ。 外底面：糸切り離し。	〔色調〕鈍い橙色	Ⅰ層土
66	土師器 （皿）	体部は、やや外弯気味に伸びる。 口縁部は丸味を帯びる。 底部と比較して、体部は薄壁となる。（厚さは底部で9㎜、体部で4㎜） 外底端は角張る。 口径　7.2cm 底径　6.2cm 器高　1.4cm	ロクロ回転によるナデ。 外器面：横ナデ。 外底面：糸切り離し。	外底面に板目圧痕が付く。 〔色調〕淡橙色	表土
67	土師器 （皿）	底部と比較して、体部は極端に薄壁となる。（厚さは底部で6～7㎜、体部で2.5～3㎜） 外底端は外側へ張り出し、丸味を帯びる。 体部は中途で括れ（厚さ2㎜）、口縁部で丸味を帯びる。 平面形は隅丸方形に近い。 外底は平底。 推定器高　1.5 cm	ロクロ回転による成形とナデであるが、体部はつまみ上げられている。 内外器面：粗いナデ。 外底面：ヘラ切り離しの可能性あり	〔色調〕灰褐色 〔焼成〕非常に堅緻。	Ⅰ層土
68	土師器	内底面と体部の境は凹む。 外底端は端的に角張る。 外底端と体部の境は大きく窪む。	調整は不明。 外底面：糸切り離し後、丁寧なナデが加えられている。	〔色調〕淡橙色	Ⅰ層土
69	中世雑器	体部は薄壁である。（厚さ5～5.8㎜）	ロクロ回転によるナデ。 内器面：幅6～8㎜の沈線が巡る。	内器面は露胎。 〔色調〕 胎土：灰色 釉色：外器面に緑茶色と黄白色の釉	Ⅰ層土
70	中世雑器	内底面の中央部寄りは全体的に窪む。 高台は貼り付け。	――――	内器面に施釉。 〔色調〕 胎土：灰色 釉色：黒灰色	Ⅰ層土

第84表　遺物観察表⑥（主軸尾根平坦部）

	器種	形態の特徴	手法・調整・文様	備考	出土箇所
71	釘	残存の長さ 1.8cm 幅・厚さ 0.2×0.15cm 重さ 0.37 g	――	――	
72	角釘	残存の長さ 2.6cm 幅・厚さ 0.3×0.3 cm 重さ 0.75 g	――	――	
73	角釘	残存の長さ 2.7cm 幅・厚さ 0.45 ×0.35cm 重さ 1.09 g	――	――	
74	角釘	残存の長さ 3.2cm 幅・厚さ 0.45 ×0.3 cm 重さ 1.71 g	――	――	
75	角釘	残存の長さ 4.4cm 幅・厚さ 0.41 ×0.36cm 重さ 2.19 g	――	頭頂部は折り曲げられている	
76	角釘	残存の長さ 4.9cm 幅・厚さ 0.35 ×0.35cm 重さ 2.36 g	――	――	
77	鉄器	残存の長さ 4.1cm 幅・厚さ 1.1×0.7 cm 重さ 11.26 g	――	楔か（？）	
78	鉄器	残存の長さ 2.9cm 幅・厚さ 2.3×0.4 cm 重さ 4.8g	――	――	
79	鉄片	残存の長さ 3.9cm 幅・厚さ 2.8×0.2 cm 重さ 9.23 g	――	――	
80	土錘	残存の長さ 2.8cm 直径 1.0cm 重さ 2.43 g	――	――	
81	中世雑器 瓦質系	口唇部の中央部より外側部分にかけて3mm幅の沈線が巡る。	口唇部と内器面は強いナデ。	〔色調〕胎土：黒灰色 釉色：黒茶色	Ⅰ層土
82	砥石	最大長 7.3cm 最大幅 2.4cm 最大厚 2.4cm 重さ 63.9g	――	――	
83	鉄砲玉	全体的に多少、押し潰された状態。 玉面に僅かの剝離痕。 直径 9.5～10.5mm 重さ 5.26 g	――	〔色調〕 灰色の被膜の下は白色。	
84	鉄砲玉	玉面に剝離痕は認められない。 直径 9.0～9.5 mm 重さ 4.85 g	――	〔色調〕 被膜は褐灰色。	
85	鉄砲玉	全体的にしゃげた状態。 歪な球体。 玉面は剝離が目立つ。 直径 1.1～1.3 cm 重さ 10.39 g	――	〔色調〕 灰色の被膜の下は白色。	
86	鉄砲玉	非常に均整の取れた球体。 直径 1.0～1.1 cm 重さ 5.60 g	――	〔色調〕 被膜は半分が褐灰色、残り半分が白色。	

第85表　遺物観察表⑦（主軸尾根平坦部）

〔2〕主軸尾根の南東下帯曲輪

帯曲輪には中世の遺物包含層が残っていた。表土から出土した87・92・100を除く遺物は、すべてこの層からの出土である。

87・88は青磁で、釉下に薄い稜線が巡る。87・88とも釉色は緑灰白色を呈する。

89は薄壁の白磁である。外器面に施釉されており、器面には光沢がある。釉色は灰白色を呈する。内器面は露胎する。

90から101は土師器坏である。器形はほとんど大型で、中型は91・92に限られる。

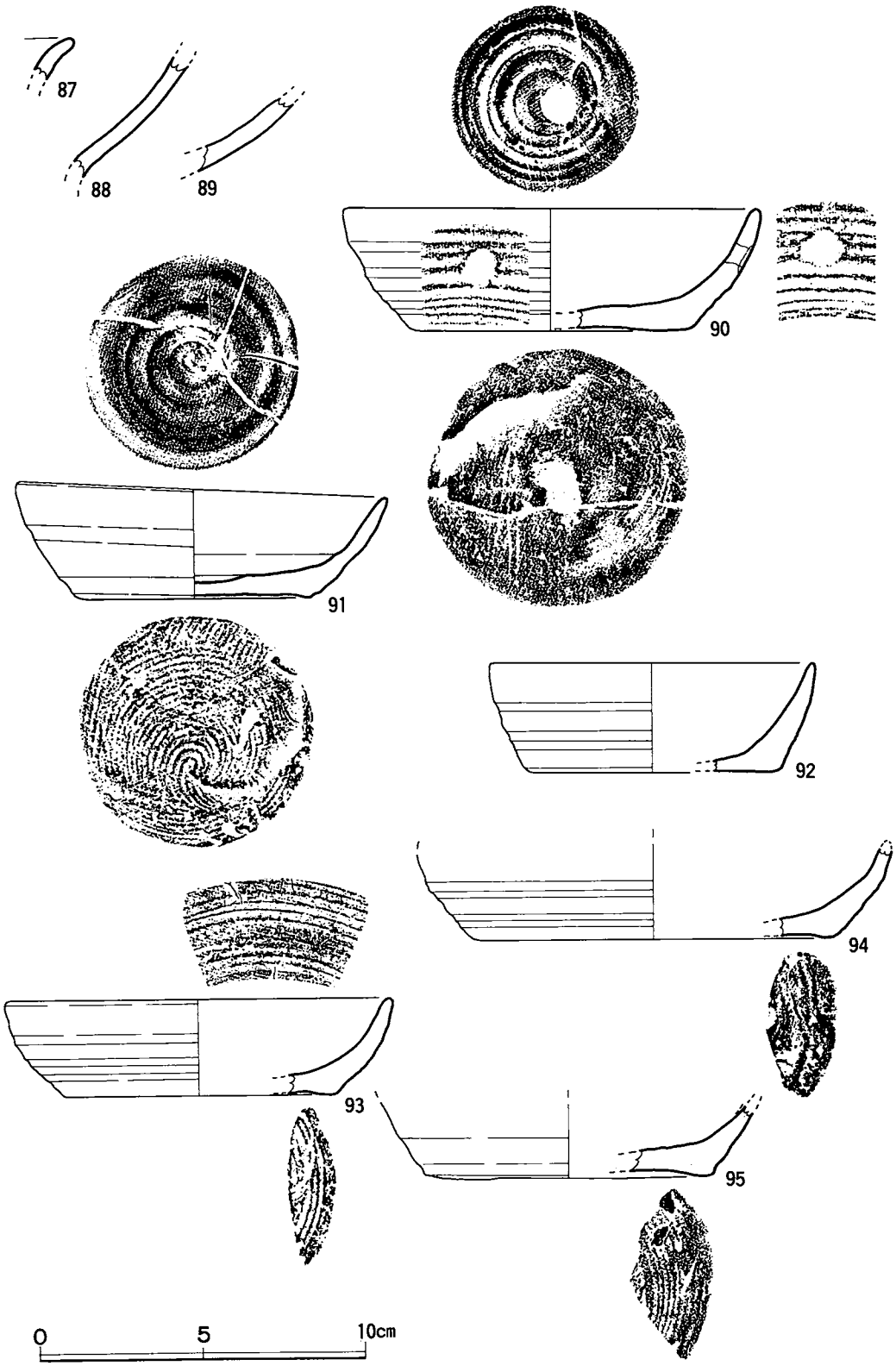
大型坏の中で代表的なものは90・93で、体部は内弯気味に大きく外側へ開く。90は口径12.8cm、底径8.5cm、器高3.6cm、93は復元口径11.8cm、復元底径8.2cm、器高2.9cmを測る。90については柱穴から出土したもので、底部中央と口縁下に相対する2孔が穿ってある。

中型の91は、体部がやや内弯気味に大きく開く。開口の度合は大型のものより強い。復元口径11.5cm、復元底径7.4cm、器高3.2cmを測る。92は体部が直に近い状態で伸びており、器形的に他と著しく異なっている。復元口径9.9cm、復元底径7.8cm、器高3.3cmを測る。

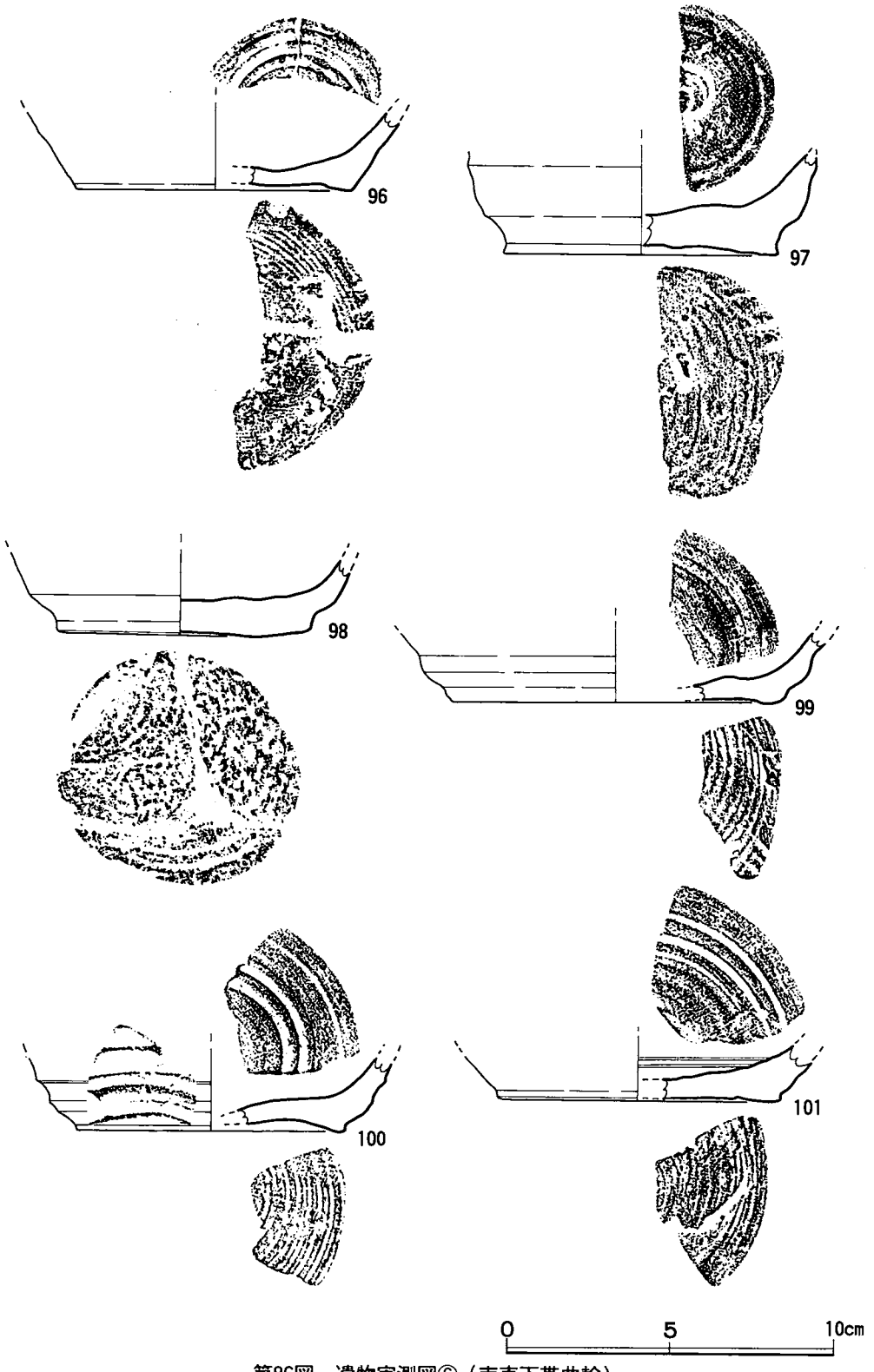
外底面の調整では、90・92・94・95・97・99について糸切り離し後、ナデが加えられている。100は一部に板目圧痕が残る。

	器種	形態の特徴	手法・調整・文様	備考	出土箇所
87	青磁	口縁部は、やや外弯する。	ロクロ回転によるナデ。 外器面：釉下に薄い稜線が巡る。	〔色調〕 胎土：灰白色 釉色：緑灰白色	表土
88	青磁	体部は薄壁である。（厚さ5～6㎜）	ロクロ回転によるナデ。 内器面：丁寧なナデ。 外器面：釉下に薄い稜線が巡る。	〔色調〕 胎土：白灰色 釉色：緑灰白色	整地層
89	白磁	体部はやや薄壁となる。（厚さ5.5mm）	ロクロ回転によるナデ。	内器面は露胎、外器面に施釉 〔色調〕 胎土：白灰色 釉色：灰白色、光沢あり。	整地層
90	土師器	体部は内弯気味に、大きく外側に開く 底部中央に直径 1.2×0.9 cmの孔と、口縁下に相対する2孔（直径 0.8～1 cm）がある。 外底端は、やや角張る。 口径　12.8cm 底径　8.5cm 器高　3.6cm	ロクロの回転によるナデ。 内器面：丁寧なナデ。 外器面：強い指押えにより生じた稜線と、幅3～5㎜の沈線が巡る。 内底面：渦巻き痕が残る。 外底面：糸切り離し後、丁寧なナデが加えられている。一部に指頭痕が付着する。	〔色調〕淡褐色 〔焼成〕比較的、堅緻。	整地層
91	土師器 (坏)	体部は、やや内弯気味に大きく開く。 内底面の中央部は指頭痕により凹む。（底部の厚さは3.5mm） 外底端はやや角張り、体部との境は僅体部との境は僅かに窪み、2㎜幅の沈線となる。 復元口径　11.5cm 復元底径　7.4cm 器高　3.2cm	ロクロ回転によるナデ。 外器面：鮮明な稜線と幅7～9㎜の沈線が巡る。 外底面：糸切り離し。	〔色調〕淡褐色 〔焼成〕やや、堅緻。	整地層

第86表　遺物観察表⑧(南東下帯曲輪)



第85図　遺物実測図⑤（南東下帯曲輪）



第86図　遺物実測図⑥（南東下帯曲輪）

NO	器種	形態の特徴	手法・調整・文様	備考	出土箇所
92	土師器	体部は、直に近い状態で伸びる。 底部は薄壁（厚さ2～3mm)で、外底端は肥厚（厚さ1㎝）し、多少丸味をおびる。 復元口径　9.9cm 復元底径　7.8cm 器高　3.3cm	ロクロ回転によるナデ。 内器面：横ナデ。 外器面：横ナデで生じた稜線と幅3㎜の沈線が巡る。 外底面：糸切り離し後、強いナデが加えられている。	〔色調〕淡橙色	表土
93	土師器 (坏)	体部は、内弯気味に大きく開く。 復元口径　11.8cm 復元底径　8.2cm 器高　2.9cm	ロクロ回転によるナデ。 内器面：丁寧なナデ。薄い細沈線が巡る。 外器面：やや鮮明な稜線が巡る。 外底面：糸切り離し。	〔色調〕淡褐色	整地層
94	土師器	体部は内弯気味に伸びる。 外底は、やや上げ底。 外底端は肥厚（厚さ1.0cm)し、やや丸味を帯びる。 復元底径　11.2cm	ロクロ回転によるナデ。 内器面：丁寧な横ナデ。 外器面：強い横ナデで生じた稜線と幅2～3㎜の沈線が巡る。 外底面：糸切り離し後、ナデ。一部一部に指頭痕が付着。	〔色調〕淡橙色	整地層
95	土師器	外底端は肥厚（厚さ1.1cm)し、やや角張る。 体部との境は、6㎜幅で大きく窪む。 外底は上げ底。 復元底径　8.8cm	ロクロ回転によるナデ。 内器面：稜線状を呈する渦巻き痕。 外器面：横ナデにより幅4㎜の浅い沈線が巡る。 外底面：糸切り離し後、ナデ。	〔色調〕淡橙色 〔焼成〕比較的、堅緻。	整地層
96	土師器	底部は中央部で薄壁（厚さ0.5cm)であるが、端部で肥厚する。（厚さ1.1cm) 内底面に指頭圧痕あり。 外底端と体部の境は、4㎜幅の浅い沈線となる。 外底は上げ底で、歪な器形。 復元底径　8.3cm	ロクロ回転によるナデ。	〔色調〕淡褐色	整地層
97	土師器	底部は外底端で肥厚する。（厚さは中央部で9㎜、外底端で1.8cm) 内底面の中央に指頭圧痕がある。 外底端は角張り、体部との境は1.1cm幅の沈線となる。 復元底径　8.3cm	ロクロ回転によるナデ。 外底面：糸切り離し後、若干のナデが加えられている。	質量感のある土器。 〔色調〕淡褐色	整地層
98	土師器	底部と外底端は肥厚する。（厚さ1.0～1.2㎝） 外底端は角張り、体部との境は極めて大きく窪む。 底径　7.8cm	調整はローリングにより不明。	〔色調〕白橙色	整地層
99	土師器	残存体部の上位は外弯している。 外底端は角張り、体部との境は窪む。 外底は若干、上げ底。 復元底径　10.1cm	ロクロ回転によるナデ。 内器面：非常に丁寧なナデ。 外器面：稜線が巡る。 外底面：糸切り離し後、ナデが加えられている。	〔色調〕黄褐色 〔焼成〕堅緻	整地層
100	土師器	底部は体部と比較して薄壁となる。 （厚さは底部で5㎜、体部で7～9mm) 外底は極端な上げ底。 外底と体部の境は窪み、沈線が巡る。 復元底径　8.1cm	ロクロ回転によるナデ。 外器面：鮮明な稜線と幅3～6㎜の沈線が巡る。 内底面：丁寧なナデ。稜線状を呈する渦巻き痕。 外底面：糸切り離し。	外底面の一部に板目圧痕が付く。 〔色調〕 汚れた感じの淡橙色。	（一括）
101	土師器	外底端は肥厚（厚さ1.3cm)し、角張る 外底と体部の境に沈線が巡る。 外底は若干、上げ底。 復元底径　8.6cm	ロクロ回転によるナデ。 内底面：稜線状を呈する鮮明な渦巻き痕が残る。 外底面：糸切り離し。一部に指頭痕が残る。	〔色調〕鈍い橙色	整地層

第87表　遺物観察表⑨(南東下帯曲輪)

〔3〕北側張り出し尾根出土遺物

102～114は土師器である。この内、坏は底径の値から大型のもの（102･105･111）と、中型のもの（104･112～114）とに細分される。皿については大型のもの（107)がある。

大型坏の102は復元底径8.8cm、105は復元底径10.6cm、111は復元底径9.4cmを測る。中型の坏の底径は7.4～8.2cmである。

皿の107は体部が直線的に大きく開き、復元口径11.6cm、復元底径8.8cm、器高1.7cmを測る。

外底面の調整では、102・107・109・111・112が糸切り離し後、ナデが加えられている。

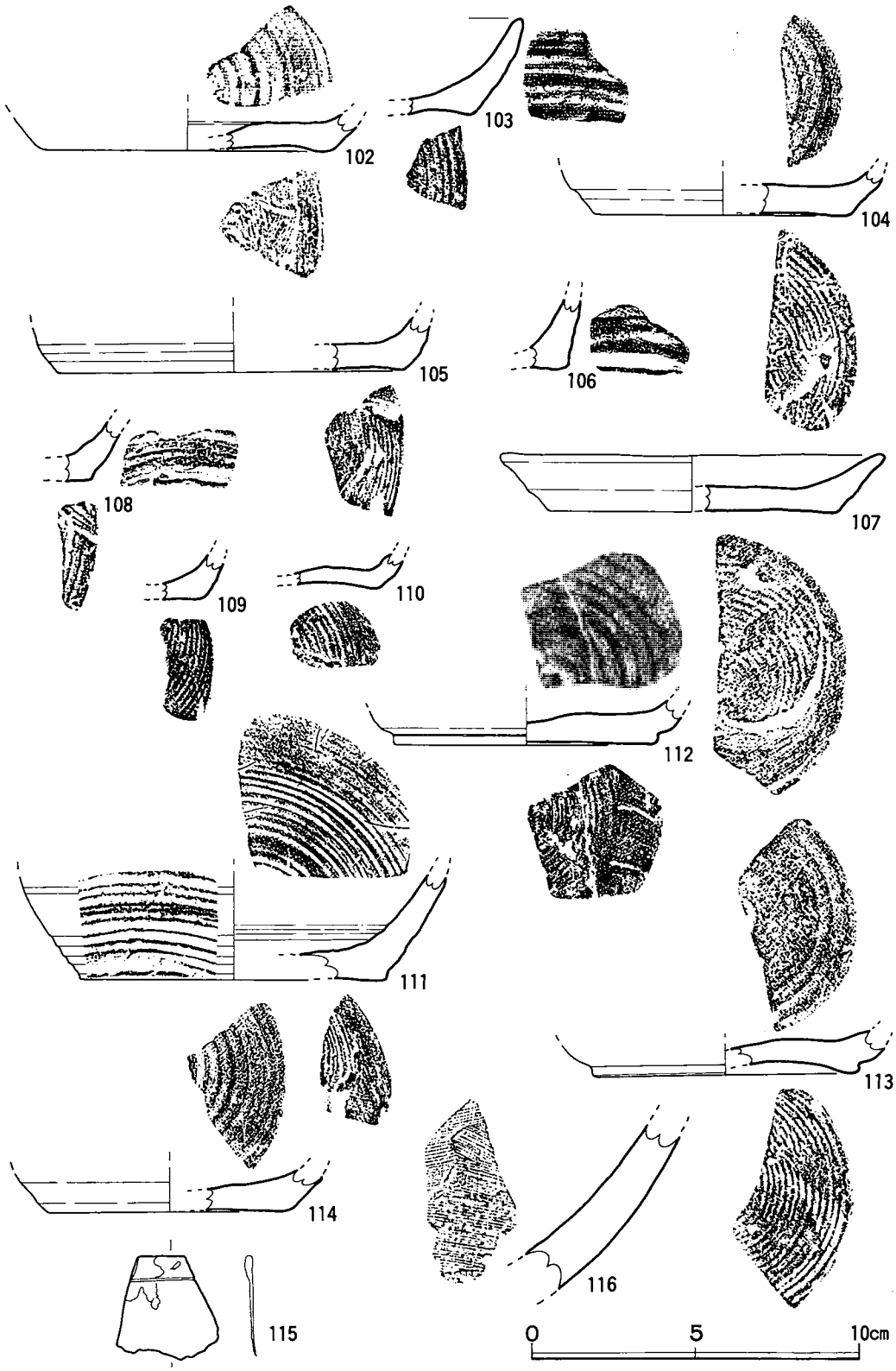
114 は糸切り離し痕が不明で、ヘラ切り離しの可能性もある。

115 は鉄片で、黒色肌に緑青色のサビが付着する。

116 は須恵器で、内器面に横及び斜め方向の刷け目がある。

NO	器種	形態の特徴	手法・調整・文様	備考	出土箇所
102	土師器 (坏)	外底は、やや上げ底。 復元底径　8.8cm	ロクロ回転によるナデ。 内底面：稜線状を呈する渦巻き痕。 外底面：糸切り離し後、ナデが加わる。	〔色調〕淡橙色 〔焼成〕やや、堅緻。	南斜面 二段目
103	土師器	体部は内弯する。 外底は上げ底。 底部は中央部寄りで薄壁となる。（厚さ5㎜） 外底端は肥厚する。（厚さ 1.1cm）	ロクロ回転によるナデ。 内器面：丁寧なナデ。 外器面：稜線と幅3～4㎜の沈線が巡る。 外底面：糸切り離し。	〔色調〕鈍い橙色	
104	土師器	外底は平底。 外底端は角張る。 復元底径　7.8cm	ロクロ回転によるナデ。 内器面：丁寧なナデ。 外底面：ローリングにより不明。	〔色調〕明褐色 〔焼成〕やや、堅緻。	中央部 二段目
105	土師器 (坏)	外底端は肥厚する。（厚さ 1.0cm） 外底は、やや上げ底。 復元底径　10.6cm	ロクロ回転によるナデ。 外器面：やや、鮮明な稜線と幅3㎜の沈線が巡る。	〔色調〕鈍い橙色	中央部 二段目
106	土師器	底部端は肥厚（厚さ1.2cm)し、端的に角張る。 外底端と体部の境は、5㎜幅で大きく窪む。	ロクロ回転によるナデ。	〔色調〕淡褐色	
107	土師器 (皿)	体部は直線的に大きく開く。 外底端は、やや角張る。 底部の中央部寄りで肥厚する。（厚さ8㎜） 復元口径　11.6cm 復元底径　8.8cm 器高　1.7cm	ロクロ回転による丁寧なナデ。 外器面：鮮明な稜線と幅4㎜の沈線が巡る。 内底面：稜線状を呈する薄い渦巻き痕。 外底面：糸切り離し後、ナデが加えられている。	〔色調〕鈍い橙色	中央部 三段目
108	土師器	外底端と体部の境は、5㎜幅でやや窪む。	ロクロ回転によるナデ。 外底面：糸切り離し。	外底端に板目圧痕が付く。 〔色調〕淡褐色	中央部 二段目
109	土師器	――――――	ロクロ回転によるナデ。 外器面：幅1㎜の稜線と幅3㎜の沈線が巡る。 外底面：糸切り離し後、ナデが加わる。	〔色調〕淡褐色	

第88表　遺物観察表⑩(北側張出尾根)



第87図　遺物実測図⑦（北側張出尾根）

NO	器種	形態の特徴	手法・調整・文様	備考	出土箇所
110	土師器	底部は薄壁である。（厚さ4～4.5mm） 外底は上げ底。	ロクロ回転によるナデ。	軽量土器。 〔色調〕淡赤褐色	
111	土師器 (坏)	外底端は肥厚（厚さ1.2cm）し、角張る 体部は内弯気味に伸びる。 復元底径　9.4cm	ロクロ回転によるナデ。 内器面：内底面と体部の境における稜線状の渦巻き痕が、やや目立つ。 外器面：鮮明な稜線と幅3～4mmの沈線が巡る。 外底面：糸切り離し後、ナデが加えられている。	〔色調〕鈍い淡褐色	
112	土師器	内底面の中央部は凹む。 外底は平底。 外底端と体部の境は、7mm幅で大きく窪む。 復元底径　8.2cm	ロクロ回転によるナデ。 外底面：糸切り離し後、ナデが加えられている。	〔色調〕 くすんだ感じの褐色。	
113	土師器	外底は極端な上げ底。 外底端と体部の境は大きく窪む。 復元底径　7.9cm	ロクロ回転によるナデ。 内底面：丁寧なナデ。 外底面：糸切り離し。	外底面の一部に、指頭痕が残る。 〔色調〕淡褐色	中央部 三段目
114	土師器	外底は平底。 外底端は肥厚する。（厚さ 1.1cm） 復元底径　7.4cm	ロクロ回転によるナデ。 外底面：ヘラ切り（？）。	外底面に板目圧痕が付く。 〔色調〕淡橙色	中央部 三段目
115	鉄片	残存の長さ　3.2cm 残存の幅　1.4～3.1 cm 重さ　4.8g	――――	黒色肌に緑青色のサビが付着。	
116	須恵器	体部は肥厚する。（1.1～1.4 cm）	内器面：横及び斜め方向の刷け目。 外器面：ナデ。	〔色調〕灰色。	

第89表　遺物観察表⑪(北側張出尾根)

〔4〕主軸尾根の南西下帯曲輪①

117～121は主軸尾根の南西下帯曲輪①から出土した土師器である。120は皿で、推定器高1.6cmを測る。底部は肥厚し、外底は上げ底となる。外底面の調整では119・121が糸切り離し後、ナデが加えられている。

〔5〕主軸尾根の東下帯曲輪

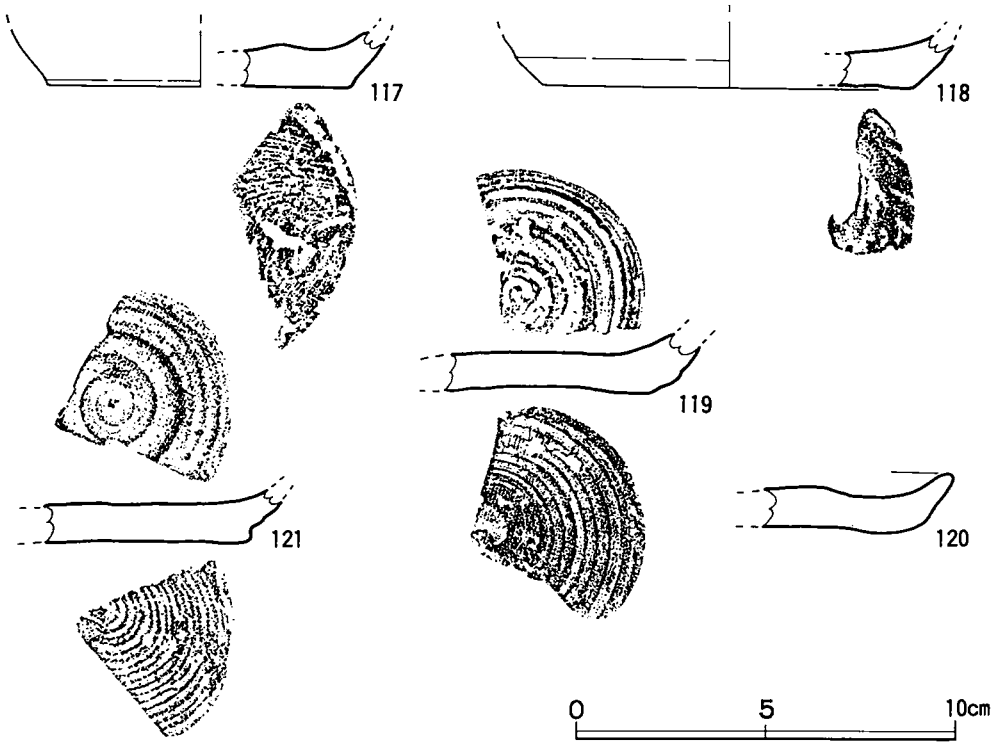
122～142は主軸尾根の東下帯曲輪から出土した遺物で、すべて土師器である。

器形が判断できるものは、124・133・134・138が坏で、122・140～142が皿である。

坏の場合、124の体部は外弯気味に立ち上がって中途より内弯する。外底は極端な上げ底となる。133は体部が内弯するが口縁部で若干、外弯する。134の器壁は外底端より体部の中途にかけて肥厚し、他の部分は薄壁となる。138は体部が丸味を持って、直立気味に立ち上がる。

皿については122の内底面の中央が凸状態で、凸面の中央部より半径1.7cmの範囲が凹となる。140は体部がやや丸味をもって、直線的に大きく開く。141は外底端が角張り、復元底径6.2cmを測る。142は小皿で、推定器高は1.1cmを測る。

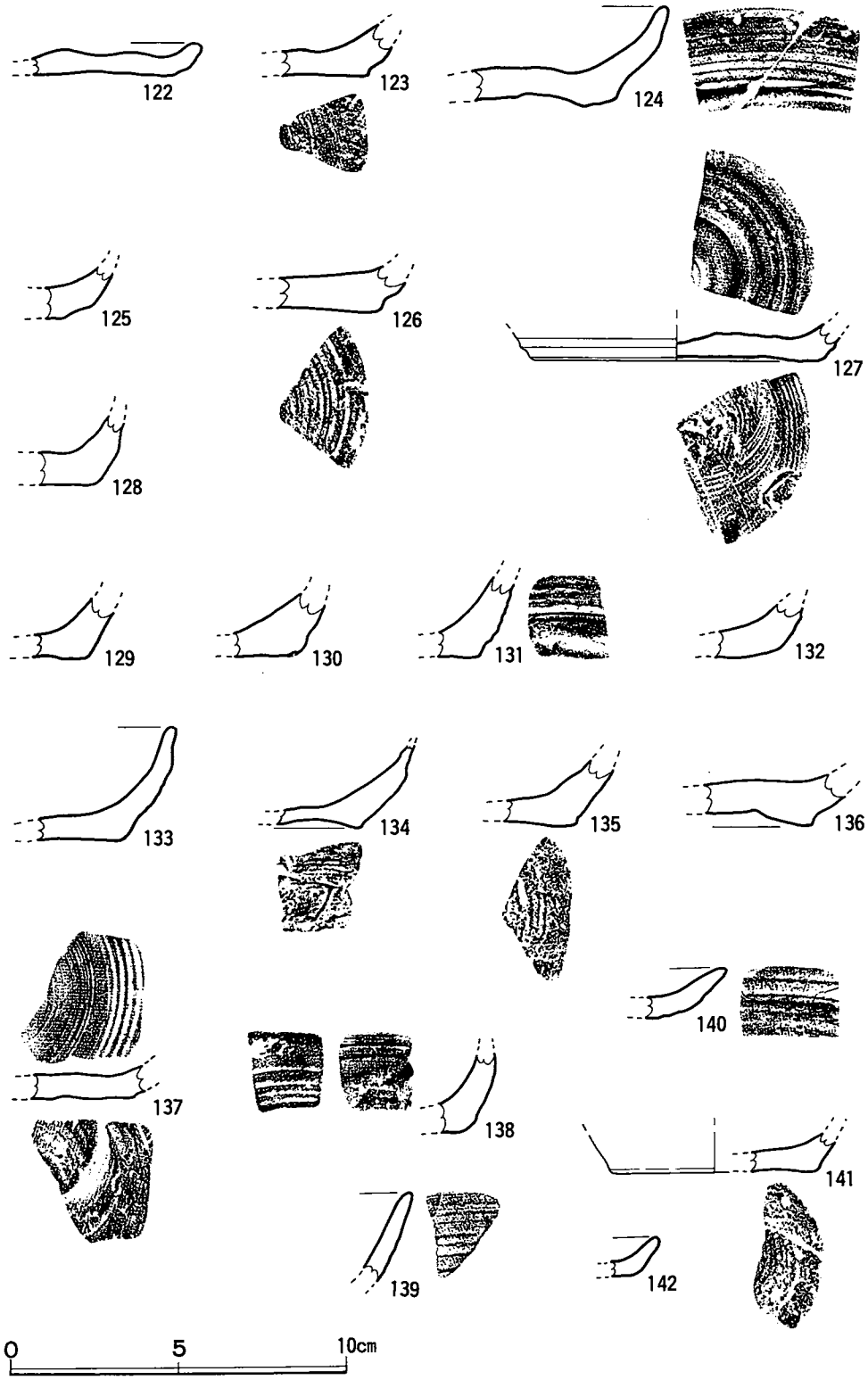
外底面の調整では、122～124・126・133・135・137について糸切り離し後、ナデが加えられている。132はナデが加えられており、糸切り離しかヘラ切り離しかは不明である。



第88図　遺物実測図⑧（南西下帯曲輪①）

NO	器種	形態の特徴	手法・調整・文様	備考	出土箇所
117	土師器	体部は直線的に立ち上がる。 底部は肥厚する。(1.0～1.1 cm) 内底面と体部の境はやや凹む。 外底端は角張り、体部との境は2㎜幅で、やや窪む。 外底は平底。 復元底径　8.0cm	調整はローリングにより不明。 外底面：糸切り離し。	胎土が手に付着。 〔色調〕乳白色 〔焼成〕やや、甘い。	南側斜面一括
118	土師器	外底端は肥厚（厚さ 1.1cm）。 外底は、やや上げ底。 復元底径　9.8cm	ロクロ回転によるナデ。 内器面：丁寧なナデ。 外底面：糸切り離し。	〔色調〕鈍い橙色	
119	土師器	底部（厚さ9㎜）と外底端（厚さ 1.2 cm）は肥厚し、やや丸味を帯びる。 外底は、やや上げ底。	ロクロ回転によるナデ。 内底面：薄い渦巻き痕が残る。 外底面：糸切り離し後、ナデが加えられている。	〔色調〕淡橙色 〔焼成〕やや、堅緻。	
120	土師器 (Ⅲ)	内底面の中央部は凸。 底部は肥厚する。（厚さ 1.0cm） 外底は上げ底。 推定器高　1.6cm	ロクロ回転によるナデ。 外底面：糸切り離し。	〔色調〕白褐色 〔焼成〕やや、甘い。	
121	土師器	底部は一様に肥厚する。（厚さ1.0cm） 外底は平底。 外底端と体部の境は、6㎜幅で大きく窪む。	ロクロ回転によるナデ。 内底面：稜線状を呈する渦巻き痕。 外底面：糸切り離し後、一部にナデが加えられている。	〔色調〕鈍い橙色 〔焼成〕堅緻	

第90表　遺物観察表⑫(南西下帯曲輪①)



第89図　遺物実測図⑨（東下帯曲輪）

NO	器種	形態の特徴	手法・調整・文様	備考	出土箇所
122	土師器 (皿)	内底面の中央に凸。 凸面の中央部より半径 1.7㎝の範囲は指押えにより同心円状に凹となる。 底部と体部の厚さは、ほぼ均一。(厚さ5～7㎜) 外底端と体部の境に幅1㎜の沈線。 口縁部は、やや丸味を帯びる。	ロクロ回転によるナデ。 内底面と体部の境に強い横ナデ。 外底面：糸切り離し後、ナデ。	〔色調〕淡橙色	整地層
123	土師器	底部(厚さ7㎜)と比較して体部は肥厚する。(厚さ 1.0㎝) 外底は平底。 外底端は角張り、体部との境は5～6㎜幅で、大きく窪む。	ロクロ回転によるナデ。 外底面：糸切り離し後、強いナデが加えられている。	〔色調〕鈍い橙色 〔焼成〕比較的、堅緻。	整地層
124	土師器 (坏)	体部は外弯気味に立ち上がり、中途寄り内弯する。 外底は極端な上げ底。	ロクロ調整によるナデ。 内器面：丁寧なナデ。 外器面：鮮明な稜線と幅 2.5～3㎜の沈線が巡る。 内底面：稜線状を呈する渦巻き痕。ナデが加えられている。 外底面：糸切り離し後、一部にナデが加えられている。	外底面の一部に、指頭痕が残る。 〔色調〕鈍い橙色 〔焼成〕比較的、堅緻。	整地層
125	土師器	底端部は肥厚する。(厚さ9㎜)	調整は不明。 外器面：鮮明な稜線が巡る。	〔色調〕白褐色 〔焼成〕やや、甘い。	
126	土師器	底部(厚さ9㎜)及び外底端は肥厚する(厚さ 1.2㎝)。 外底端と体部の境は、8㎜幅で大きく窪む。	ロクロ回転によるナデ。 外器面：稜線と幅4㎜の沈線が巡る 外底面：糸切り離し後、ナデ。	〔色調〕鈍い淡褐色	整地層
127	土師器	内底面の中央部は、指押えにより凹む 外底面はやや歪。 復元底径　8.6㎝	ロクロ回転によるナデ。 内底面：稜線状を呈する渦巻き痕。	〔色調〕白褐色 〔焼成〕緻密	帯曲輪 整地層
128	土師器	内底面と体部の境は凹む。 外底端は、やや丸味を帯びる。 器形は多少、歪。	ロクロ回転によるナデ。	外器面に指頭痕が残る。 〔色調〕淡褐色 〔焼成〕やや、甘い。	南斜面 整地層
129	土師器	底部端は極端に肥厚する。(厚さ 1.2㎝)	ロクロ回転によるナデ。	〔色調〕明褐色	帯曲輪 整地層
130	土師器	外底端は肥厚する。(厚さ 1.4㎝) 外底端は丸味を帯るが、体部との境は5㎜幅でやや窪む。	ロクロ回転によるナデ。	〔色調〕鈍い橙色	
131	土師器	体部はかなり鋭角に、丸味を持って立ち上がる。 体部は肥厚する。(厚さ 0.7～1.0㎝) 外底端と体部の境は、7㎜幅で窪む。	ロクロ回転による横ナデ。 内器面：丁寧な横ナデ。 外器面：稜線と幅2～3㎜の沈線が巡る。 外底面：糸切り離し。	〔色調〕鈍い褐色	南斜面 整地層
132	土師器	外底端は、やや丸味を帯びる。	ロクロ回転によるナデ。 外器面：横ナデにより太い稜線(1.5㎜)と、幅5㎜の沈線が生じている。 内底面：丁寧な横ナデ。 外底面：ナデが認められる。糸切り離しか、ヘラ切りかは不明。	〔色調〕淡褐色 外底面：黒色(加熱により変色か？)	
133	土師器 (坏)	体部は内弯するが、口縁部若干の外弯となる。	ロクロ回転によるナデ。 内器面：丁寧な横ナデ。 外器面：強い横ナデで生じた稜線と幅3㎜の沈線が巡る。 外底面：糸切り離し後、ナデ。	〔色調〕鈍い淡褐色 〔焼成〕やや、堅緻。	

第91表　遺物観察表⑬(東側下帯曲輪)

NO	器種	形態の特徴	手法・調整・文様	備考	出土箇所
134	土師器 (坏)	外底は上げ底で歪。 外底は薄壁（厚さ4㎜）で、外底端は肥厚する。（厚さ 1.0㎝） 体部は（厚さ6～9㎜）中途より括れる。（厚さ 0.2㎝）	ロクロ回転によるナデ。 外底面：糸切り離し。	〔焼成〕やや、堅緻。	
135	土師器	外底端は肥厚する。（厚さ 1.2㎝） 外底端は角張り、体部との境は、5㎜幅で沈線状に窪む。	ロクロ回転によるナデ。 外底面：糸切り離し後、強いナデが加えられている。	〔色調〕淡橙色	
136	土師器	外底端は角張り、体部との境は沈線状に窪む。 外底は上げ底。 底部（厚さ9㎜）は、外底端で肥厚する。（厚さ 1.3㎝）	ロクロ回転によるナデ。 外底面：糸切り離しで、粗い調整。	〔色調〕淡褐色 〔焼成〕やや、堅緻。	
137	土師器	底部の厚さ（7～8㎜）。	ロクロ回転によるナデ。 内底面の中央部は、渦巻き痕が強いナデが押し潰され、平面的になっている。 外底面：糸切り離し後、ナデが加えられている。	〔色調〕淡褐色	
138	土師器 (坏)	体部は丸味を持って、直線気味に立ち上がる。	ロクロ回転によるナデ。 外器面：横ナデにより生じた稜線と幅3㎜の沈線が巡る。	〔色調〕鈍い淡褐色	
139	土師器	口唇部はヘラ削りで扁平。	ロクロ回転によるナデ。 外器面：鮮明な稜線と幅3～5㎜の沈線が巡る。	〔色調〕 内器面：淡褐色 外器面：鈍い褐色	
140	土師器 (皿)	体部は、やや丸味をもって、直線的に立ち上がる。 推定器高　1.6㎝	ロクロ回転によるナデ。 内器面：丁寧なナデ。 外器面：鮮明な稜線と幅2～5㎜の沈線が巡る。	〔色調〕 内器面：薄茶色 外器面：淡茶褐色	
141	土師器 (皿)	外底は若干、上げ底。 外底端は角張る。 復元底径　6.2㎝	調整はローリングにより不明。	〔色調〕鈍い橙色	Ⅰ層土
142	土師器 (皿)	底部は薄壁（厚さ4㎜）。 推定器高　1.1㎝	ロクロ回転によるナデ。	〔色調〕鈍い橙色	帯曲輪 整地層

第92表　遺物観察表⑭(東側下帯曲輪)

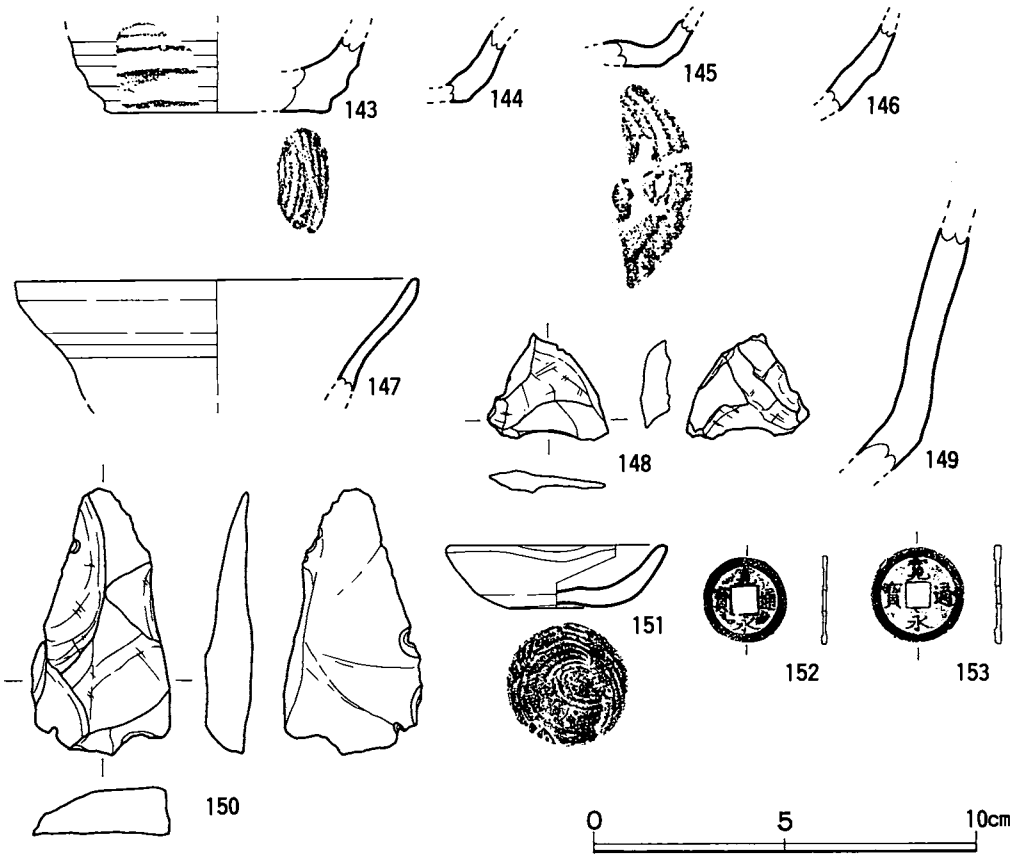
〔6〕主軸尾根の南側斜面一帯

143～147は土師器である。143・147は坏で、143は外底端が角張り、体部との境は大きく窪む。外器面に鮮明な稜線と5㎜幅の沈線が巡る。147は体部が中途で大きく外弯し、復元口径10.6㎝を測る。

148・150は石器である。148は三角形の形状を呈し、最大長さ2.6㎝、最大幅3.2㎝、最大厚さ0.8㎝、重さ5.67ｇを測る。150は鋭利な刃部を有し、器面には小さな使用痕が見られる。最大長さ6.9㎝、最大幅3.6㎝、最大厚さ1.3㎝、重さ25.0ｇを測る。

151は近世の土師器で、焼成は非常に堅緻である。外器面の一部にススが付着する。外底面は糸切り離しによる。

152・153は寛永通宝で、直径は152が2.3㎝、153が2.6㎝を測る。



第90図　遺物実測図⑩（南側斜面一帯）

NO	器　種	形　態　の　特　徴	手法・調整・文様	備　　考	出土箇所
143	土師器 (坏)	外底端は角張り、体部との境は大きく窪む。 復元底径　5.9cm	ロクロ回転による横ナデ。 外器面：鮮明な稜線と5㎜幅の沈線が巡る。 外底面：糸切り離し。	外底面に薄い板目圧痕が付く。 〔色調〕明茶褐色	南斜面 整地層
144	土師器	体部は丸味を持って、立ち上がる。	ロクロ回転によるナデ。	〔色調〕鈍い橙色 〔焼成〕やや、堅緻。	Ⅰ層土
145	土師器	内器面の体部との境は、一旦、窪む。	ロクロ回転によるナデ。 内底面と体部の境は、強いナデにより渦巻き痕が残る。 外底面：糸切り離し。	〔色調〕淡褐色	——
146	土師器	体部は薄壁（厚さ5～6㎜）。	ロクロ回転によるナデ。 内器面：丁寧な横ナデ。 外器面：横ナデにより生じた、浅い沈線（幅3㎜）が巡る。	〔色調〕淡橙色	——
147	土師器 (坏)	体部は中途で大きく外弯する。 復元口径　10.6cm	ロクロ回転によるナデ。 内器面：極めて丁寧な横ナデ。 外器面：中途は横ナデにより、稜線と4㎜幅の沈線が巡る。 残存体部の上位と下位は、極く浅い沈線が巡る。	〔色調〕鈍い橙色	——
148	石　器	最大長さ 2.6cm 最大幅　3.2cm 最大厚さ 0.8cm 重さ　5.67 g	——	——	——

第93表　遺物観察表⑮（南側斜面一帯）

NO	器種	形態の特徴	手法・調整・文様	備考	出土箇所
149	縄文土器	粗製土器（胴部～頸部）。	――――	胎土は粗い。1～3㎜大の砂粒を多く混入する。雲母などの鉱物を含む。 〔色調〕 内器面：鈍い淡褐色 外器面：鈍い淡褐色～黒褐色	Ⅰ層土
150	石器	最大長さ 6.9cm 最大幅 3.6cm 最大厚さ 1.3cm 重さ 25.0g	刃部は鋭利で、小さな使用痕が見られる。	――――	――
151	土師器（皿）	体部は直線的に伸びる。 片口を有する。 外底端は、やや丸味を帯びる。 器高 1.65cm 口径 5.90cm 底径 2.70cm	内外器面：ロクロ回転による横ナデ 口唇部：外側へ斜め方向のヘラ削り 内底面：中央部に指頭圧痕。 外底面：糸切り離し。	外器面の一部にスス付着。 近世の土師器皿。 〔色調〕橙色 〔焼成〕非常に堅緻。	Ⅰ層土
152	寛永通宝	直径 2.3cm	――――	〔色調〕茶緑色に変色。	――
153	寛永通宝	直径 2.6cm	――――	――――	――

第94表　遺物観察表⑯（南側斜面一帯）

〔7〕東北尾根

154～156は青磁である。154は内器面に1㎜幅の沈線で抽象的な文様が描かれている。156は内器面に文様らしきものが描かれているが、内容は不明である。155は無文で、復元口径12.8cmを測る。釉色は154がオリーブ灰色、155が緑灰色、156が灰緑色である。

157・158は白磁である。157は口縁部が外弯し、158は復元底径5.2cmを測る。158については、外底面及び高台の畳付き部分にまで施釉がみられる。

159は青白磁の底部で、肥厚し、復元底径6.2cmを測る。施釉は高台の外縁に留まる。

160～162は天目碗である。160は底部が肥厚し、復元底径4.2cmを測る。かなり使い込まれた碗で、釉の剝離が目立つ。161は非常に上質な天目で、内器面の施釉は厚く、復元底径4.2cmを測る。162も同様に上質な天目であるが底部を欠き、体部のみの残存である。復元口径11.2cmを測る。

163は古銭で、直径2.4cmを測る。銭名はかなりのくずし字で腐食も加わり、読めない。

164・167～170は須恵器である。167は体部が直線的に立ち上がり、167～170には外器面に格子目の叩きがある。165・166は須恵系の甕である。165はやや軽量土器であるのに対し、166は質量感がある。165は内外器面に横ナデと刷け目調整が施されている。166の外器面は全面に指押の痕が残っているが、頸部の直下部分に限り縦方向の刷け目となる。

171～173は瓦質擂鉢である。171は硬質瓦器で、条線の一単位は9本である。172はかなり使い込まれており、内底面に5本と6本を一単位とした条線が直交状態に掻かれている。底部は厚さ5㎜で、擂鉢としては極めて薄壁である。

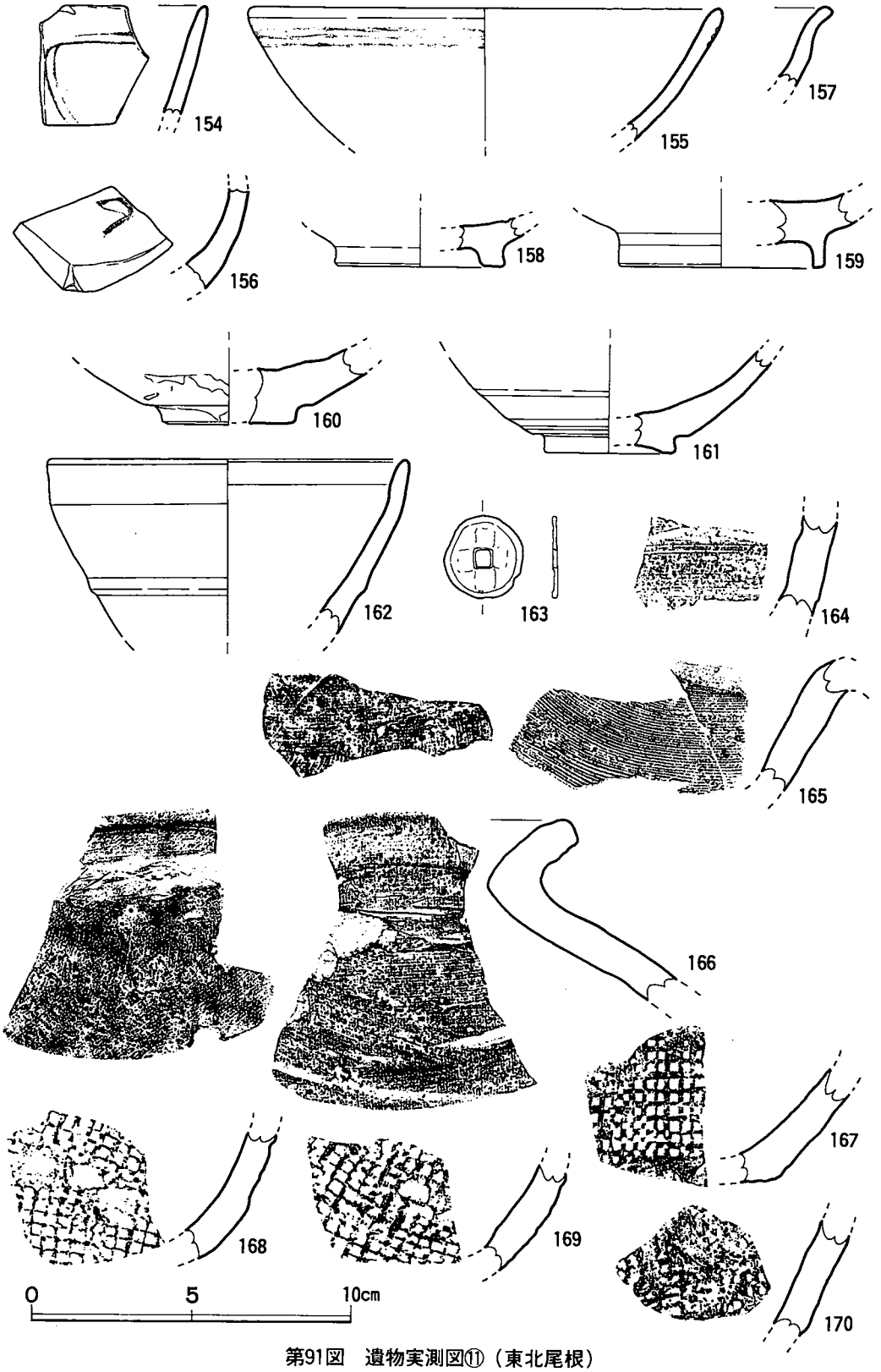
173は条線が８本まで認められる。体部は漸次、肥厚しながら直線的に伸びて口縁部で僅かに内弯する。

174～179は土師器である。この内、174・175・177は坏で、178は小皿と思われる。坏の復元底径は174が8.8cm、175が7.6cm、177が7.3cmを測る。外底面はいずれも糸切り離し後、ナデが加えられている。174については底部が肥厚し、外底端が角張る。175は上げ底で、外底端はやや丸味を帯びている。177は175と同様に上げ底であるが、外底端は174と比べてやや角張る程度に留まる。

180は鉄片で、重さ24.9ｇを測る。

NO	器種	形態の特徴	手法・調整・文様	備考	出土箇所
154	青磁	体部の上位は、ほぼ均一の厚さで直線的に伸びる。（厚さ４～５㎜）	ロクロ回転によるナデ。 内器面：幅１㎜程の沈線で文様（抽象的）が描かれている。 外器面：口縁部に稜線が巡る。	〔色調〕 胎土：灰色 釉色：オリーブ灰色	東側斜面
155	青磁碗	体部は、やや内弯し、口縁部で僅かに肥厚する。（厚さは体部の下位で４㎜口縁部で５㎜） 口縁部は丸味を帯びる。 復元口径　12.8cm	ロクロ回転によるナデ。 外器面：口縁近くにおいて、３条の沈線が巡る。	内外器面に貫入が走る。外器面の貫入は密で濃い。 〔色調〕 胎土：茶灰色 釉色：緑灰色	――
156	青磁碗	――――	ロクロ回転によるナデ。 内器面：立ち上がり部分に２条の界線が巡る。文様らしきものが描かれているが、内容不明。 外器面：界線状の白線が巡る。	内外器面に貫入が走る。内器面は密で外器面は疎。 〔色調〕 胎土：灰白黄色 釉色：灰緑色	中央部
157	白磁	口縁部は外弯する。	外器面：薄い稜線が巡る。	内器面に、斜線状の気泡痕がある。 外器面に、斜線状の貫入が走る。 〔色調〕 胎土：白色 釉色：白灰色	――
158	白磁	高台の畳付きはやや幅広。（幅７㎜） 高台の端部はヘラ削り。 復元底径　5.2cm	内底面：体部の境に界線状の沈線が巡る。	外底面及び高台の畳付きまで施釉。 全体的に雑な造りの碗。 〔色調〕 胎土：灰色 釉色：灰白色	――
159	青白磁	底部は肥厚する。（厚さ 1.3cm） 復元底径　6.2cm 高台高　　8㎜	高台の畳付きは、ヘラ削りで扁平。	高台の外縁まで施釉。 〔色調〕 胎土：灰色（高台周辺の一部は焼成時の影響で淡橙色）。 釉色：青緑白色。	一段目
160	天目碗	底部は肥厚する。（厚さ 1.7cm） 復元底径　4.2cm	ロクロ回転によるナデ。	外底面にも施釉の痕が伺われる。 残存の内底面は露胎。 〔色調〕 胎土：淡橙色 釉色：黒色及びライトブルー剥離が目立つ）	Ⅳ区

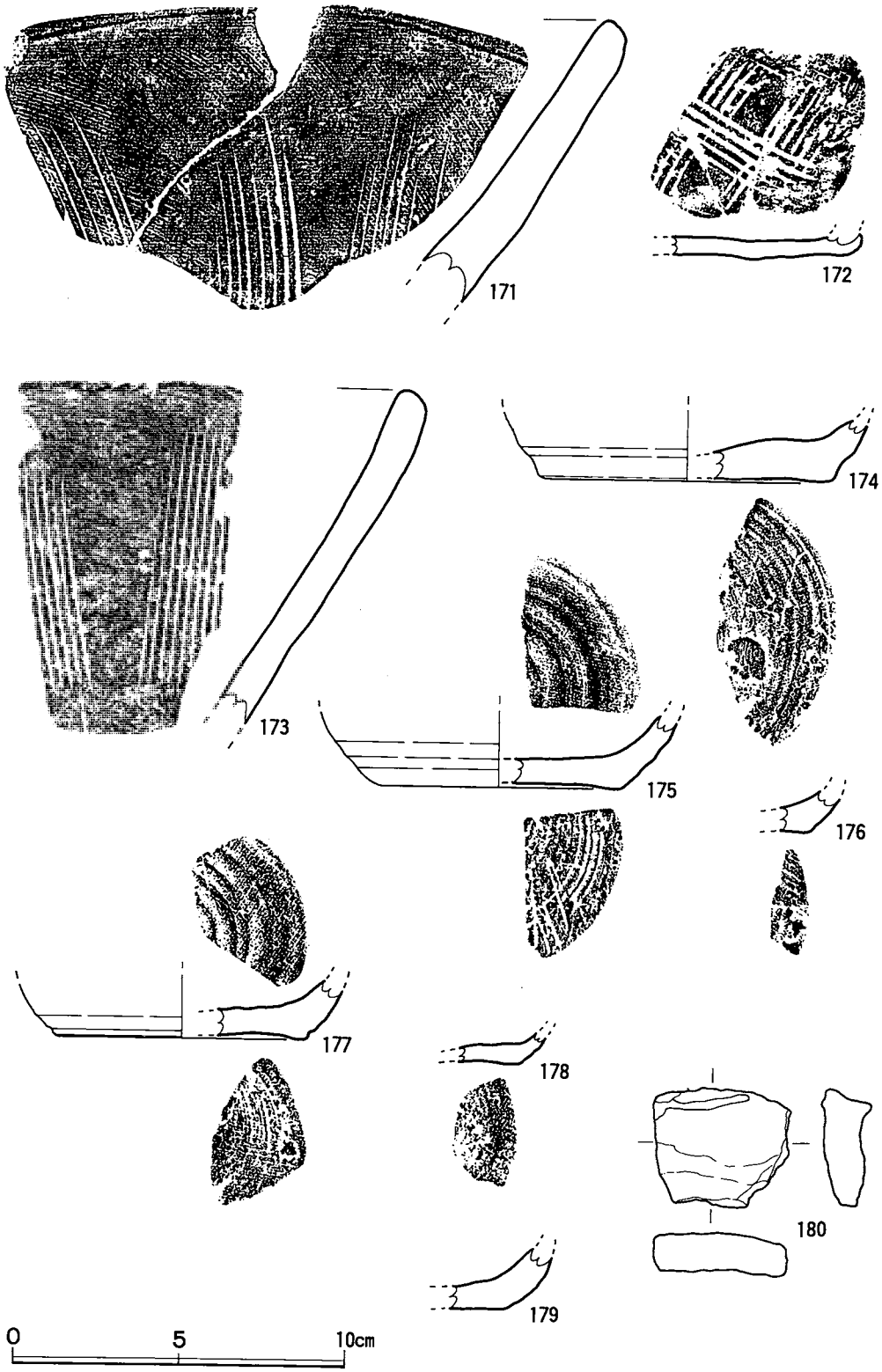
第95表　遺物観察表⑰（東北尾根）



第91図　遺物実測図⑪（東北尾根）

NO	器種	形態の特徴	手法・調整・文様	備考	出土箇所
161	天目碗	高台は上げ底。 復元底径　4.2cm	外器面の露胎部分は、ロクロ回転によるヘラ削りの痕。 高台端はヘラ削り。	非常に上質な天目碗。内器面の施釉は厚い。 〔色調〕胎土：灰色 釉色：内器面は黒色。外器面は茶～黒色。	尾根筋
162	天目碗	体部は内弯気味に伸びて、口縁部で、やや直立する。 復元口径　11.2cm	――――	上質の天目。 内外器面とも施釉されているが、外器面の下位に限り無釉。施釉は厚い。 露胎部分は白黄色。 〔色調〕胎土：灰色 釉色：茶～黒色	尾根筋
163	古銭	直径　2.4cm	――――	判読不能	――
164	須恵器	体部は肥厚する。（厚さ 1.1～1.4cm）	内器面：横ナデ。 外器面：不定ナデに指押えが加わる	〔色調〕灰色	――
165	須恵器 （甕）	――――	ロクロ回転による横ナデ。 内器面：横ナデと鮮明な刷け目調整 外器面：横ナデと縦目の刷け目。	やや、軽量土器。	尾根筋
166	須恵器 （甕）	顕部は「く」の字に外反する。	ロクロ回転による横ナデ。 内器面：顕部より下位は、斜め方向のナデ。 外器面：顕部の直下部分は、縦方向の刷け目。全体に指押え痕。	質量感あり。	中央部
167	須恵器	体部は直線的に立ち上がる。 体部は肥厚する。（厚さ 1.0～1.2cm）	内器面：ロクロ回転による横ナデ。 外器面：格子目の叩き。一部にナデが加えられている。	〔色調〕淡灰色 〔焼成〕良好	――
168	須恵器	体部はやや内弯気味に伸びる。 体部は肥厚する。（厚さ 0.8～1.0cm）	内器面：ロクロ回転によるナデ。 外器面：格子目の叩き。	外器面の一部に、指頭痕が残る。	――
169	須恵器	体部は肥厚する。（厚さ 1.0cm）	内器面：ロクロ回転によるナデ。 外器面：格子目の叩き。	〔色調〕内器面：灰茶色 外器面：灰色	――
170	須恵器	体部は肥厚する。（厚さ 0.8～1.0cm）	内器面：ロクロ回転によるナデ。 外器面：格子目の叩き。一部にナデ	〔色調〕淡灰色 〔焼成〕良好	――
171	硬質瓦器 擂鉢	体部は肥厚し、僅かに内弯する。 （厚さ 1.2～1.6 cm）	ロクロ回転によるナデ。 内器面：口縁部周辺はヘラ削り（幅 2.5mm）。上位は横ナデ。他は、斜め方向の刷け目調整。 条線の一単位は9本で、下から上へ掻き上げられている 外器面：ナデと指押え。 口唇部：横ナデで、やや扁平。	〔色調〕淡橙色	東側斜面
172	瓦質擂鉢	底部は擂鉢として、極めて薄壁である（厚さ5mm）。	内底面：5本と6本を一単位とした条線が、直交状態に掻かれている。 外底面：ナデと指押えによる、粗い調整。	かなり使い込まれた擂鉢。 〔色調〕淡灰褐色	北側斜面
173	瓦質擂鉢	体部は直線的に伸びて、口縁部で僅かに内弯する。 体部は、下位より上位にかけ漸次、僅かに肥厚する。（厚さは下位で 1.0cm 上位で1.1cm）。	内器面：上位は強い横ナデ（器面は僅かに凹む）。中位は、やや粗い横ナデ。下位は、ナデと指押え。 条線は8本まで認められる 外器面：ナデに指押えが加えられている（やや、粗い器面）。 口唇部：ナデにより、やや扁平。	条線は、やや磨耗している 〔色調〕淡灰褐色。 〔焼成〕やや、甘い。	一段目

第96表　遺物観察表⑱（東北尾根）



第92図　遺物実測図⑫（東北尾根）

NO	器種	形態の特徴	手法・調整・文様	備考	出土箇所
174	土師器 (坏)	底部は肥厚（厚さ 1.2cm）。 内底面の中央部は、指押えにより凹む 外底端は角張り、体部との境は 1.0cm 幅で窪む。 外底は平底。 復元底径　8.8cm	ロクロ回転によるナデ。 外底面：糸切り離し後、ナデが加えられている。	〔色調〕明褐色	一段目
175	土師器 (坏)	外底端は、やや丸味を帯びる。 外底端と体部の境は、沈線状に僅かに窪む。 外底は、やや上げ底。 復元底径　7.6cm	ロクロ回転によるナデ。 内器面：比較的丁寧なナデ。 外器面：稜線と幅5mmの稜線が巡る 内底面：稜線状を呈する、薄い渦巻き痕。 外底面：糸切り離し後、ナデが加えられている。	外底面に、薄い板目圧痕が付く。 〔色調〕淡橙色	北側中央斜面部
176	土師器	体部の立ち上がりは、やや内弯気味である。 外底端と体部の境は、僅かに窪み沈線状を呈する。	ロクロ回転によるナデ。 外底面：糸切り離し。	〔色調〕鈍い橙色	北側斜面
177	土師器 (坏)	底部（厚さ7mm）と比較して体部は肥厚する。（厚さ 0.7～1.0cm)。 外底は上げ底で端部は、やや角張る。 復元底径　7.3cm	内底面：稜線状を呈する、薄い渦巻き痕。 外底面：糸切り離し後、ナデが加えられている。	〔色調〕鈍い褐色	――
178	土師器 (皿)	底部は薄壁である。（厚さ4～6mm） 外底端と体部の境は、僅かに窪み沈線状を呈する。	調整はローリングにより不明。	軽量土器。 〔色調〕淡褐色	北側斜面
179	土師器	体部は、やや内弯気味に立ち上がる。 体部は肥厚する。（厚さ1.0cm) 外底は平底（？）。 外底端はやや角張り、体部との境は、3mm幅でやや窪む。	ロクロ回転によるナデ。 外底面：糸切り離し。	〔色調〕赤褐色	北側斜面
180	鉄器	残存の長さ　3.9cm 幅・厚さ　3.5 × 1.1cm 重さ　24.9g	――――	――――	――

第97表　遺物観察表⑲（東北尾根）

〔8〕 陣の山

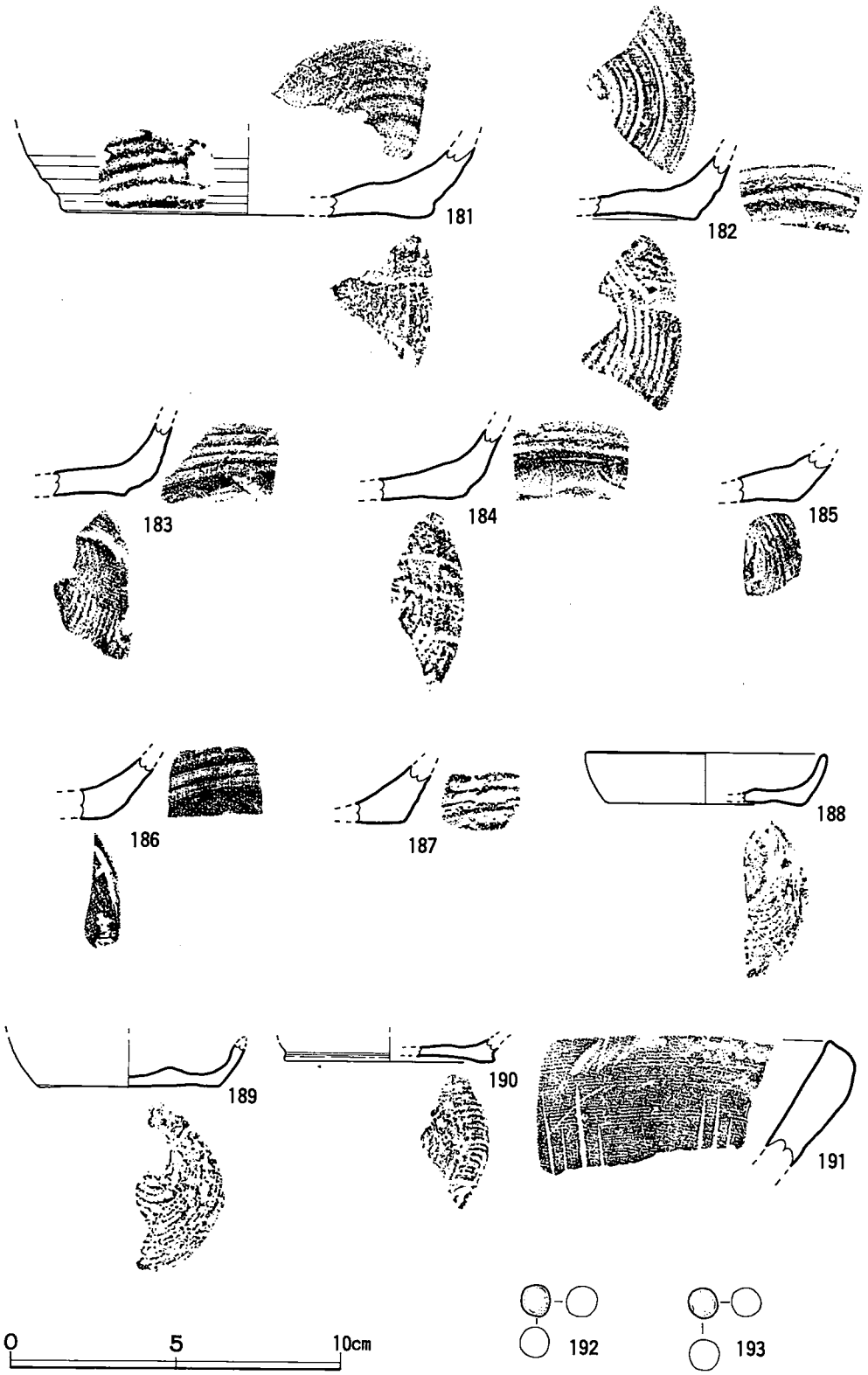
181～190は土師器である。181は大型の坏で、188～190は小皿である。181は復元底径11.2cmを測り、外器面に鮮明な稜線と3mm幅の沈線が巡る。内底面には稜線状を呈する渦巻き痕がある。

小皿については、188が復元口径7.2cm、復元底径5.8cm、器高1.5cmを測る。体部はやや内弯し、直立気味に伸びている。189は復元底径5.6cmで軽量土器である。190は底部が厚さ2～3mmと薄壁であるのに対し、外底端は厚さ7mmに肥厚する。復元底径6.2cmを測る。

182・184・187～190の外底面は糸切り離し後、ナデが加えられている。

191は瓦質擂鉢である。丁寧な横ナデ後、条線が掻かれており、4本まで認められる。

192・193は鉄砲玉である。192は玉面に剝離痕は認められない。灰色の被膜の下は白色を呈する。直径9～9.5mm、重さ5.77gを測る。193は均整のとれた鉄砲玉で、球形に近い。玉面に剝離痕は認められず、被膜は褐色を呈する。直径9～9.5mm、重さ3.98gを測る。



第93図　遺物実測図⑬（陣の山）

NO	器種	形態の特徴	手法・調整・文様	備考	出土箇所
181	土師器 (坏)	高台と体部の境は窪み、沈線が巡る。 外底端は肥厚する。(厚さ 1.4cm)。 残存底部の中央部寄りは、やや薄壁。 (厚さ 6 mm) 復元底径　11.2cm	ロクロ回転によるナデ。 内器面：横ナデ。 外器面：鮮明な稜線と、幅 3 mmの沈線が巡る。 内底面：稜線状を呈する渦巻き痕。 外底面：糸切り離し。	〔色調〕淡橙色 〔焼成〕やや、甘い。	——
182	土師器	外底端は肥厚する。(厚さ 1.1cm) 外底端と体部の境は、僅かに窪む。 外底は上げ底。 外器面に 2.5mm幅の沈線状の窪み。	ロクロ回転によるナデ。 内器面：丁寧なナデ。稜線状を呈する薄い渦巻き痕。 外器面：やや粗いナデ。 外底面：糸切り離し後、ナデ（一部に、やや粗い糸切り離し）。	〔色調〕明褐色	——
183	土師器	体部は丸味を持って、立ち上がる。 歪な器形。	ロクロ回転によるナデ。 外器面：鮮明な稜線と、幅 3 ～ 4 mmの沈線が巡る。 外底面：糸切り離し。	外器面の一部に、指頭痕が残る。 〔色調〕橙色 〔焼成〕非常に堅緻。	——
184	土師器	外底端は肥厚する。(厚さ 1.1cm) 外底端と体部の境は、僅かに窪む。	ロクロ回転によるナデ。 外器面：比較的丁寧なナデ。 内底面：やや、粗いナデ。 外底面：糸切り離し後、ナデ。	外底面に薄い板目圧痕。 〔色調〕淡褐色	——
185	土師器	体部は斜め直に立ち上がる。 外底端は肥厚する。(厚さ 1.1cm)	ロクロ回転によるナデ。 外底面：糸切り離し。	〔色調〕鈍い橙色	——
186	土師器	外底端は、やや丸味を帯びる。	ロクロ回転によるナデ。 外器面：稜線と幅 6 mmの沈線が巡る	胎土は極めて精良。 〔色調〕鈍い橙色	——
187	土師器	外底端は肥厚（厚さ1.2cm）し、やや角張る。 外底は平底。	ロクロ回転によるナデ。 外器面：ナデ後、板状のもので整形されている。 外底面：糸切り離し後、強いナデ。	〔色調〕淡褐色	——
188	土師器 (皿)	体部はやや内弯し、直立気味に伸びる 外底は、やや上げ底。 復元口径　7.2cm 復元底径　5.8cm 器高　1.5cm	ロクロ回転によるナデ。 内器面：丁寧なナデ。 外器面：粗いナデ。 外底面：糸切り離し後、ナデが加えられている。	〔色調〕淡橙色 〔焼成〕やや、堅緻。	——
189	土師器 (皿)	体部と底部は薄壁。(厚さ 4 mm前後) 内底面の中央は、強い指押えで大きく窪む。 復元底径　5.6cm	ロクロ回転によるナデ。 内器面・内底面：粗いナデ。 外器面：丁寧なナデ。 外底面：糸切り離し後、ナデが加わる。	軽量土器。 〔色調〕白橙色	——
190	土師器 (皿)	外底は薄壁（厚さ 2 ～3mm)で、外底端は肥厚する。(厚さ 7 mm) 外底端と体部の境は窪み、沈線状を呈する。 外底は上げ底。 復元底径　6.2cm	調整は不明。 内器面：ザラザラの器面。 外底面：糸切り離し後、ナデが加えられている。	〔色調〕淡褐色	——
191	瓦質擂鉢	体部は口縁部より、やや下位の部分で肥厚する。(厚さ 1.3cm)	内器面：丁寧な横ナデ後、条線が掻かれている。条線は 4 本まで認められる。 外器面：横ナデ後、指押え。	————	——
192	鉄砲玉	玉面に剝離痕は認められない。 直径　9 ～9.5 mm 重さ　5.77 g	————	〔色調〕灰色の被膜の下は白色。	——
193	鉄砲玉	玉面に剝離痕は認められない。 直径　9 ～9.5 mm 重さ　3.98 g	————	〔色調〕被膜は褐色。	——

第98表　遺物観察表⑳(陣の山)

〔9〕迫　　地

194は中世雑器の小壺である。復元口径7.8cmを測り、外器面に緑茶色と黄灰色の釉がかかる。195～198・200は土師器である。195・197は坏で198は小皿である。坏については、いずれも底部が肥厚し、復元底径は195が8.4cm、197が8.0cmを測る。195の外底面は糸切り離し後、ナデが加えられている。小皿の198については、外底端が角張り、体部との境は大きく窪む。

199は灰色の釉がかかる中世雑器で、外底面はナデにより平底となる。

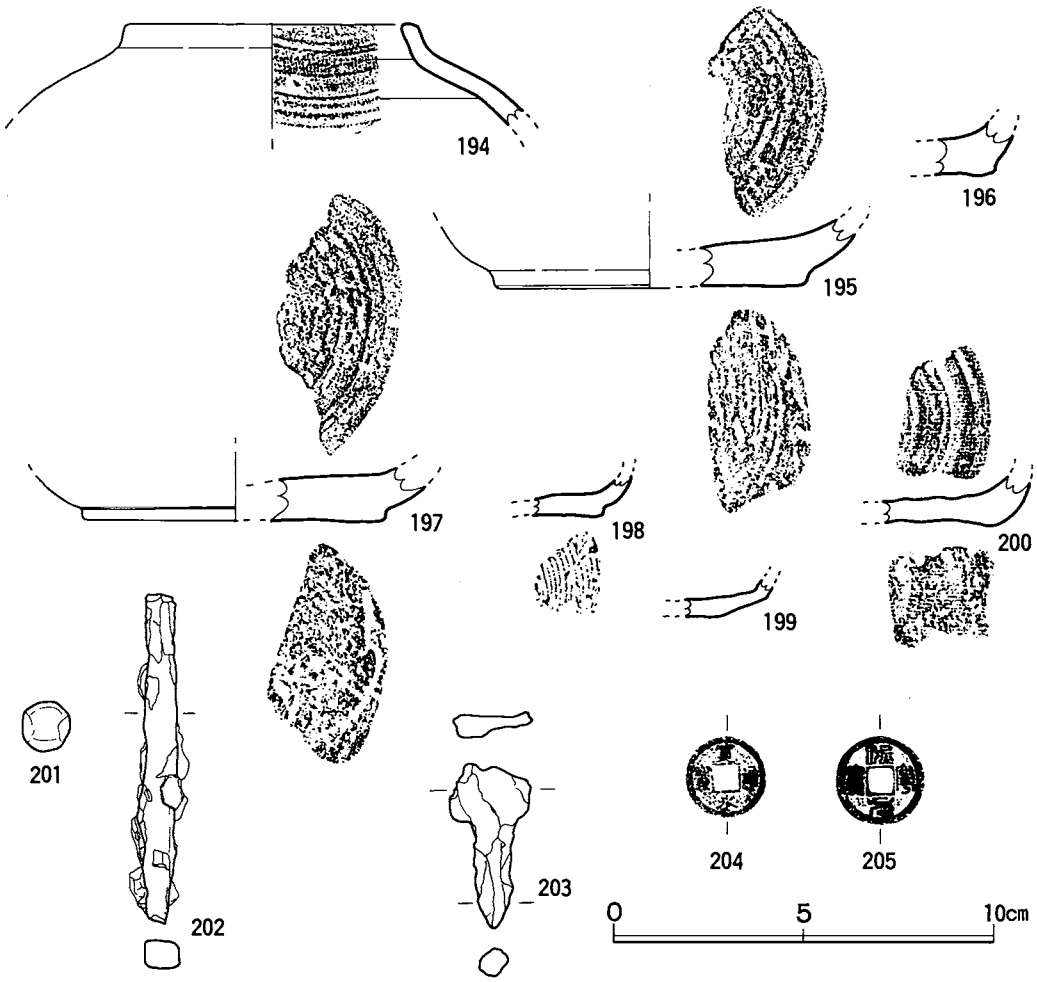
201は鉄砲玉で、直径1.2×1.3cmで、重さ7.04gを測る。

202は鉄釘で、残存の長さ8.7cmで、幅・厚さは0.9×0.75cmを測る。203は鉄器の一部で、残存状況から上部は平たく、下端は尖っていたと考えられる。

204・205は古銭である。204は寛永通宝で、直径2.1cmを測る。205は熙寧元宝（長崎貿易銭）のくずし字で、直径2.3cmを測る。

NO	器種	形態の特徴	手法・調整・文様	備考	出土箇所
194	中世雑器（小壺）	頸部は「く」の字に外弯。 体部は薄壁（厚さ4～5mm）。 復元口径　7.8cm	ロクロ回転によるナデ。	外器面にごく細かい貫入が無数に入る。 〔色調〕 胎土：灰色 釉色：外器面は緑茶色、口縁部は黄灰色。 内器面は露胎で小豆色。口縁部は灰色	――
195	土師器（坏）	底部は肥厚（厚さ 1.1～1.3cm）し、体部との境は大きく窪む。 復元底径　8.4cm	ロクロ回転によるナデ。 外底面：糸切り離し後、ナデが加えられている。	質量感のある土器。 〔色調〕淡褐色 〔焼成〕やや、堅緻	迫地 三段目
196	土師器	外底端は肥厚する。（厚さ 1.2cm） 外底端と体部の境は、やや窪んで、浅い細沈線を呈する。	調整はローリングにより不明。	〔色調〕淡褐色	迫地 三段目 段落部分
197	土師器（坏）	外底は肥厚する。（厚さ 1.2cm） 外底と体部の境は窪み、細沈線を呈する。 復元底径　8.0cm	調整はローリングにより不明。	〔色調〕 内器面：汚れた感じの淡褐色。 外器面：淡橙色 〔焼成〕やや、堅緻。	――
198	土師器（皿）	外底は上げ底。 外底端は角張り、体部との境は大きく窪む。	ロクロ回転によるナデ。 外底面：糸切り離し。		――
199	中世雑器	残存底部は扁平。 残存体部に腰折れする箇所がある。	体部の下位に強いナデ（幅1.4cm）。 外底面：ナデ。	外器面の施釉は薄い。 外器面の下位から外底にかけて露胎。 内底面と体部の境に、界線状の釉溜まり。 〔色調〕胎土：灰色 釉色：灰色	迫地
200	土師器	外底は上げ底。 外底端は肥厚する。（厚さ 9mm）	ロクロ回転によるナデ。 内底面：稜線状を呈する、薄い渦巻き痕。 外底面：ローリングにより不明。	〔色調〕鈍い橙色	迫地 三段目 段落部分

第99表　遺物観察表㉑（迫地）



第94図　遺物実測図⑭（迫地）

NO	器種	形態の特徴	手法・調整・文様	備考	出土箇所
201	鉄砲玉	直径　1.2×1.3 cm 重さ　7.04 g	――	――	――
202	鉄釘	残存の長さ　8.7cm 幅・厚さ　0.9×0.75cm 重さ　14.77 g	――	角釘	――
203	鉄器	上部は平たく、下端は尖っていたと考えられる。 残存の長さ　4.2cm 上部幅　2.1cm 下部幅・厚さ　0.6×0.7 cm 重さ　7.04 g	――	――	――
204	寛永通宝	直径　2.1cm	――	――	――
205	熙寧元宝	直径　2.3cm	くずし字	長崎貿易銭	――

第100表　遺物観察表㉒（迫地）

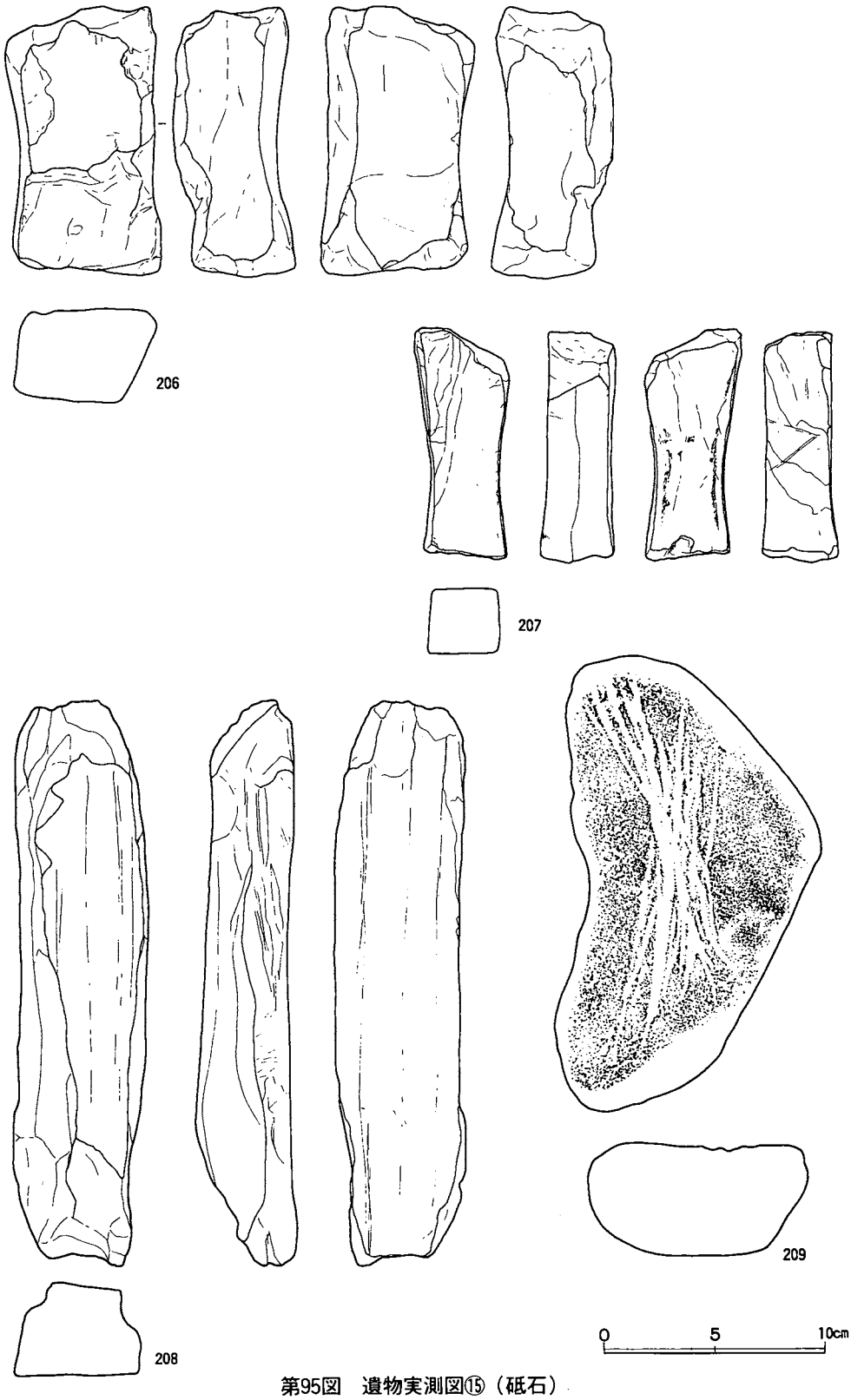
〔10〕砥　　石

206～209は砥石である。この内、206・207が天草砥石で、208は黒色頁岩、209は砂岩が利用されている。いずれも迫地からの出土である。

206は片方からの使用で、小型の刀子類を研いだものと思われる。207は中央部に斜め方向の刃止まりが見られる。208は刃幅の広いものを研いだものと思われる。209は自然石の形状を利用したもので、正面のみの使用である。

NO	器種	形態の特徴・使用法	備考	出土箇所
206	砥石	最大の長さ 11.9cm 幅 6.8cm 厚さ 4.8cm 重さ 622.9g 〔正　面〕上部を手元に置いて使用したものである。右角に高まりが見られる。 〔右側面〕下部を手元に置いて使用したものである。右上部に高まりが見られる。 〔裏　面〕上部を手元に置いて使用したもので、右角に高まりが見られる。片方からの使用で、小型の刀子類を研いだものと思われる。	天草砥石	――
207	砥石	最大の長さ 10.1cm 幅 4.0cm 厚さ 3.9cm 重さ 233.8g 〔正　面〕左下に刃止まり的な高まりが見られる。これは上部をを手元に置き、右角を刃止めとし、左角は刃を砥石外に流したものである。 〔右側面〕上部を手元に置き、正面と同じ使用が見られる。 〔裏　面〕両方向から使用されており、いずれも右角に高まりがある。中央部には斜め方向のねじれが見られる。 〔左側面〕下部を手元に置いて使用したものである。中央部に斜め方向の刃止まりが見られるが、これは砥石の固い目にあたり、自然に作られたものである。右上肩部の使用も見られる。	天草砥石	――
208	砥石	最大の長さ 25.1cm 幅 5.8cm 厚さ 4.3cm 重さ 978.6g 〔正　面〕下部を手元に置いて使用したもので、右角に高まりが見られる。 〔右側面〕彫刻刀を研いだ様な凹みが見られる。刃潜しや刃の先端部を研いだ痕であろう。 〔裏　面〕横断面は水平で、長軸部は弓形に凹む。刃幅の広いものを研いだのであろう。ねじれは無い。	黒色頁岩 仕上げ砥石	――
209	砥石	最大の長さ 20.6cm 幅 11.0cm 厚さ 5.0cm 重さ 1556.5 g 平面形は隅丸状の三角形を呈する。自然石の形状を利用した砥石で、正面のみの使用である。 〔正　面〕刃潜しに使用されている。中央部に、やや深い凹みが見られる。	砂岩	――

第101表　遺物観察表㉓(砥石)



第95図　遺物実測図⑮（砥石）

第Ⅴ章　路線外城域について

山田城跡Ⅱの路線外城域については、発掘調査終了後の平成元年度（報告書作成期間）に測量調査を実施した。測量対象地は城山の西域主軸尾根部分で（東域は調査区）、城域の西限となる堀切までの約100ｍの範囲である。この測量調査で７箇所の城跡関連遺構が確認された。

〔１〕Ⅰ　郭

発掘調査を行った東域主軸尾根筋と「陣の山」派生尾根筋の分岐点に残る削平地である。標高212～210ｍラインの尾根筋が削平されており、三角形の平面形状を呈する。Ｎ35°Ｅに主軸方向があり、規模は主軸方位の縦位で長さ24ｍ、これに直交する底辺域のＮ56°Ｅの方位で長さ25ｍを測る。Ⅰ郭の周辺斜面部ついては南北両側に高さ３ｍに近い「削り落とし」の痕跡が見られる。一方、東西両側は人工の手が不必要な急斜面である。

〔２〕土塁　①

Ⅰ郭の西側上段面に平面形が長円形状の築山がある。標高218～217ｍラインに存在するもので、丘頂の標高は218.780ｍを測る。Ｎ18°Ｗに主軸方向があり、規模は主軸方位の縦位で長さ11ｍ、これに直交する横位のＮ70°Ｅ方位で最大の長さ６ｍを測る。丘頂に平坦部らしきものは無い。築山は尾根筋を利用した土塁の一部と思われるが、土壇のようにも思われ、形状は異質である。

〔３〕Ⅱ　郭

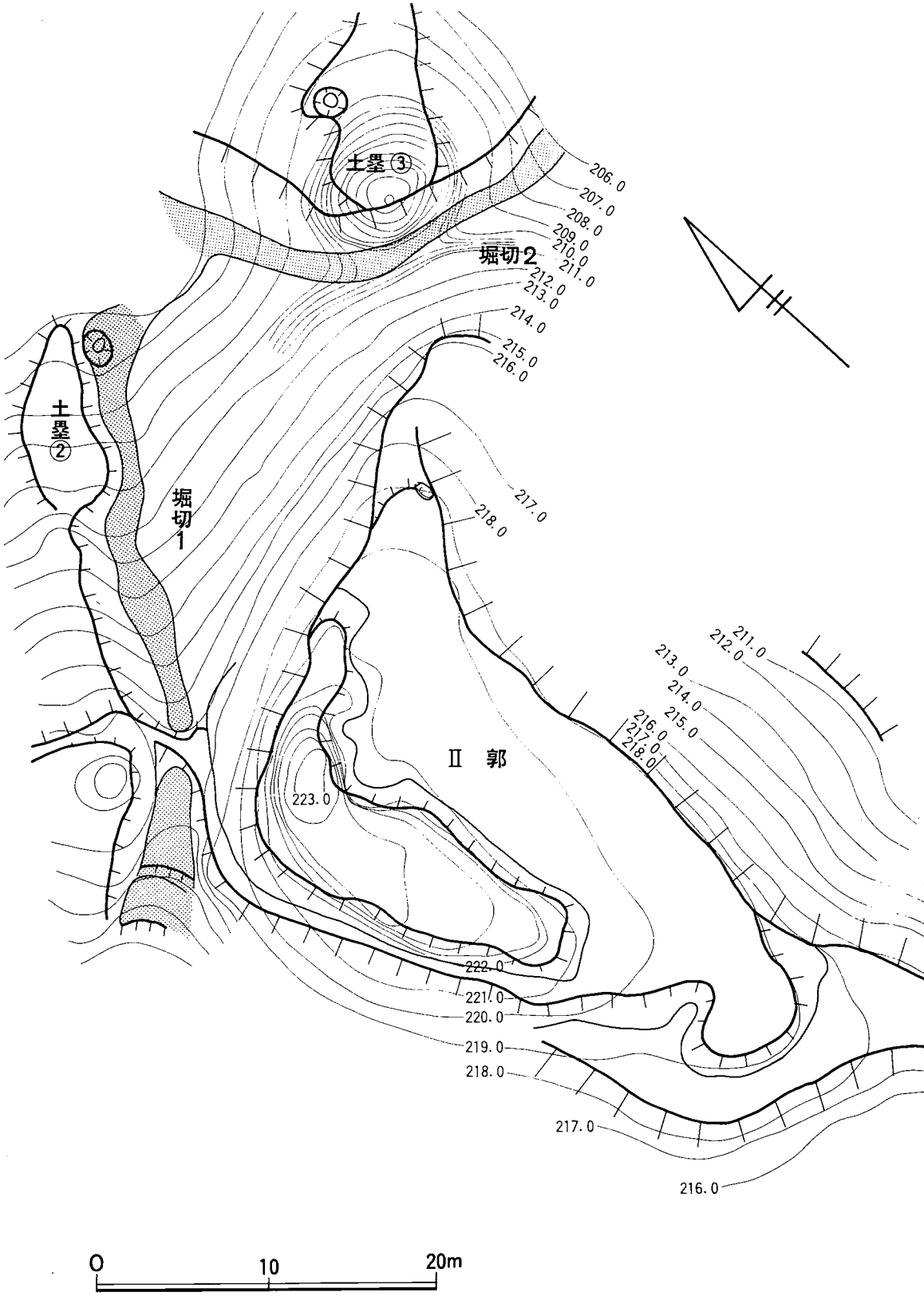
城域の西端寄りに残る削平地であるが、西側部分は土塁状に一段高くなっている。全体的には標高223～219ｍラインの尾根筋が削平されたもので、平面形状は隅丸の三角形を呈する。Ｎ８°Ｅに主軸方位があり、規模は主軸方位の底辺域で長さ38ｍ、これに直交する縦位のＮ84°Ｗ方位で長さ17.5ｍを測る。

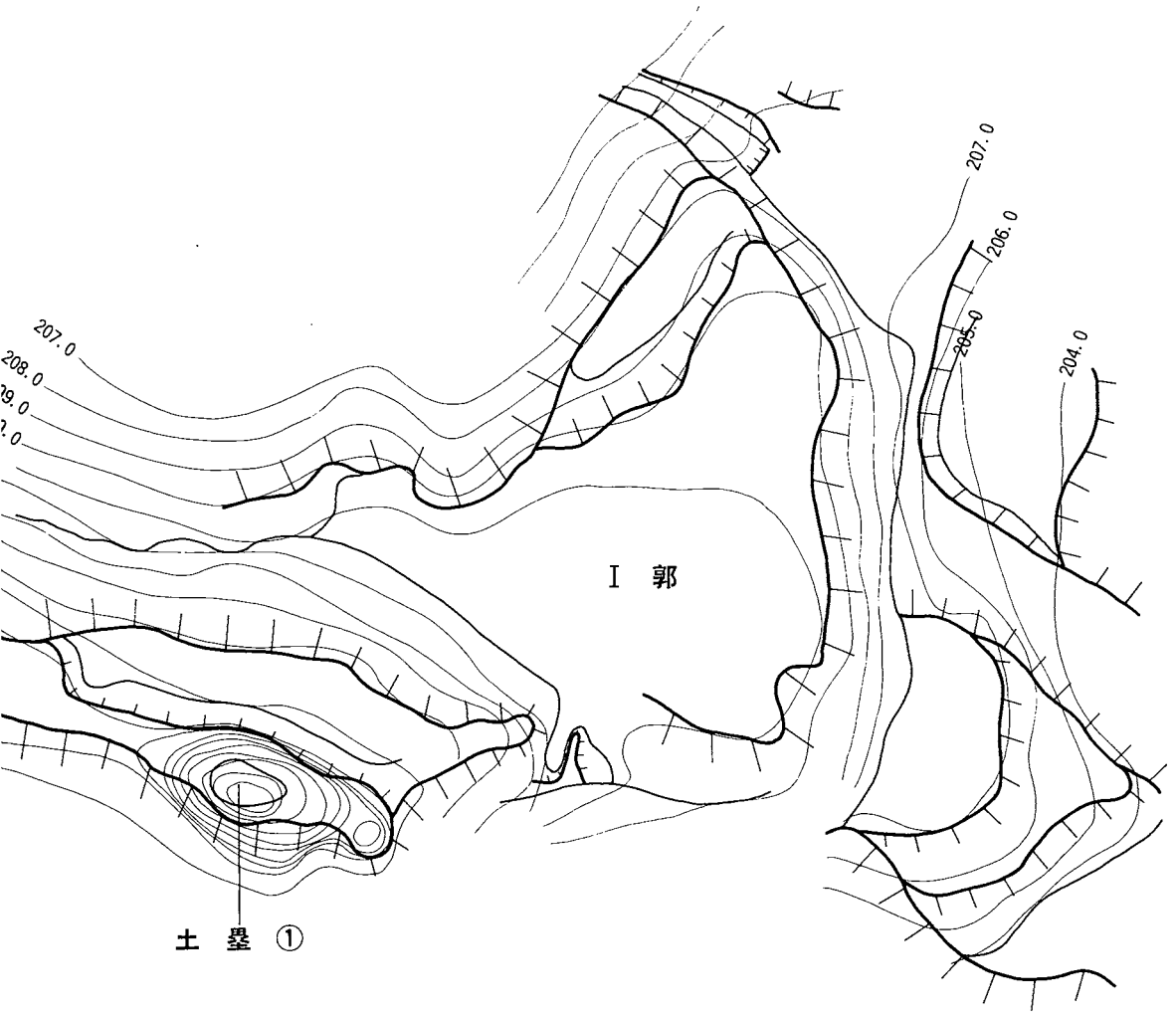
（西側部分の高台）　標高223～221ｍラインにある土塁状の高台である。一段低くなった東側平坦地との比高差は２ｍ強で、最高所の標高は223.106ｍを測る。規模は長さ22.5ｍ、最大の幅9.5ｍで、上面は北端部分に最高所があり、これより南側へ漸次下る緩傾斜地となっている。これ又、その形状から土塁１と同様に築山の感がある。土塁とも土壇状の高台とも判断のつきかねる遺構である。

（東側部分の平坦地）　標高220ｍラインにある削平地で、長さ38ｍ、幅９ｍを測る。見た目に地表面の削平度合は強く、人為的な色彩の極めて濃い平場である。周辺の斜面部については尾根続きの南側を除いて、東西両側は急斜面となっている。

〔４〕堀切　１

城山の西限となる堀切で、標高218ｍラインの尾根筋を断ち切っている。堀底は尾根筋の上


土墨③
土墨②
堀切1
堀切2
Ⅱ郭
206.0
207.0
208.0
209.0
210.0
211.0
212.0
213.0
214.0
215.0
216.0
217.0
218.0
223.0
222.0
221.0
220.0
219.0
218.0
217.0
216.0
211.0
212.0
213.0
214.0
215.0
216.0
217.0
218.0
0
10
20m



第96図　路線外城域実測図

面において土橋状に２ｍ幅の平坦地となっており、これより東西両側へ竪堀状に山腹が掘り窪められているが、遺構の残存度合は東側に顕著で、標高206ｍラインまで竪堀を観察できる。一方、西側については段掘りとなっており、端部は末広がりの様相を呈する。堀底の幅は東側で1.5～2.5ｍ、西側で最大の幅４ｍを測る。

〔5〕土塁　②

堀切１の西側に残る築山状の小山である。尾根筋の上面より少しはずれた西側部分に積まれており、お椀を伏せたような形状を呈する。高さ1.3ｍ強、直径3.5ｍを測る。堀切１に関連した土塁の一部と思われる。

〔6〕堀切　2

Ⅱ郭の東側裾部に端を発する小規模な派生尾根を断ち切る堀切で、標高212ｍラインを切っている。堀切の主軸方位はW14°Ｎであるが、北側部分においては弧状に大きくカーブを描いて（方位はＮ24W）竪堀に変化している。堀底の中央部の長さ（平坦部分の長さ）は６ｍで、幅は１～1.5ｍを測る。

〔7〕土塁　③

堀切２の東側に積まれた土塁で、高さ２ｍ、直径８～９ｍを測る。遺構の残存度合は良好で一見すると円墳の様である。

〔8〕城域外の尾根筋

堀切１より西側の尾根筋は地形が一変し、あたかも馬の背の様な岩場が西側方向へ約150ｍ程も続き、最終的に本体尾根筋の北端部に接する事になる。この本体尾根筋は南北方向に主軸を有するもので、尾根筋の合流点から南側へ約350ｍの所に山田城跡Ⅰ（大王谷箇所）の北限鞍部がある。すなわち、広域的に見れば城山と山田城跡Ⅰは一連的な尾根筋に築かれた山城という事になる。但し、城山の西限堀切から山田城跡Ⅰの北限鞍部までの長さ約450ｍの尾根筋は全くの自然地形である。これら２っの山城を同一形態の城跡と見なすか否かについては、今後の研究課題である。

第Ⅵ章　ま　と　め

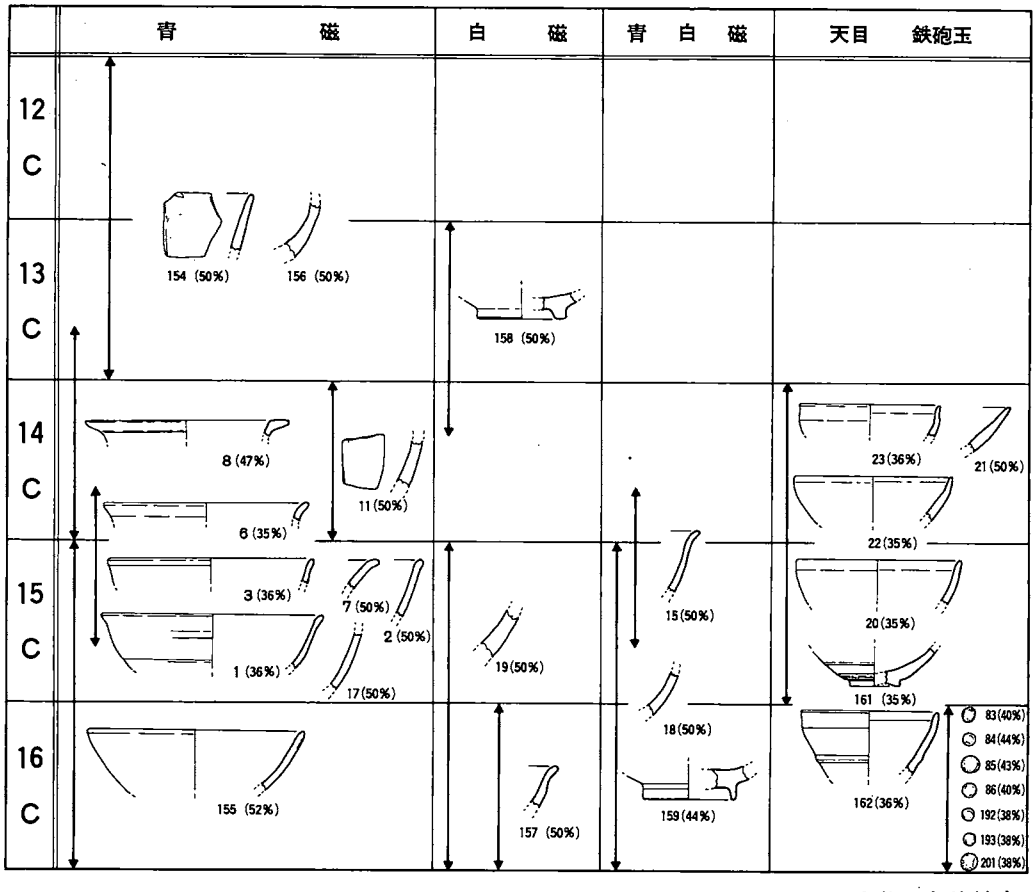
〔1〕出土遺物

【154・156】　いずれも青磁で、内器面に抽象的な文様が描かれている。釉色は154がオリーブ灰色で、156が灰緑色である。時期的には12世紀から13世紀頃と推察される。

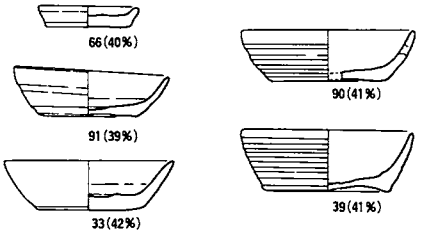
【158】　白磁で、外底面と高台の畳付き部分にまで施釉がみられる。時期的には13世紀から14世紀前半頃と推察される。

【8】　深皿の青磁で緑白色の釉がかかる。時期的には13世紀末から14世紀頃と推察される。

【11】　青磁で、外器面に削り出しによる蓮弁文様を有する。釉色は緑青白色で、時期的には



※実物の(%)縮小



＊左図の土師器皿と坏は、上図の出土遺物により、14世紀末から15世紀中葉頃と推察される。

第102表　出土遺物年代別一覧表

14世紀頃と推察される。

【20・23・161・162】　いずれも天目で、時期的には14世紀から15世紀頃と推察される。

【1・3・6・7・15・17】　15のみが青白磁で、他は青磁である。15は体部が薄壁で、口縁部に限り外弯する。青磁はすべて無文である。釉色は1が淡灰緑色、2・3　17がオリーブ灰色、6・7が緑灰色である。時期的には14世紀末から15世紀中葉頃と推察される。

【18・19・155・159】　18・159は青白磁、19は白磁、155は青磁である。159の施釉は高台の外縁部に留まり、畳付きから外底面にかけて無釉となる。19は厚手の白磁で、内器面に界線状の沈線が巡る。155は無文で、緑灰色の釉色を呈する。時期的には15世紀から16世紀頃と推察される。

【10】　青磁で、外器面に簡略化された蓮弁文様を有する。釉色は緑灰色で、時期的には16世紀前半から16世紀中葉頃と推察される。

【157】　白磁で、口縁部は外弯する。時期的には16世紀と推察される。

【83～86・192・193・201】　いずれも鉄砲玉である。『南藤蔓綿録』によれば、球磨郡への鉄砲伝来は永禄4年(1561)の事とされる。

【その他：9・12～14・16】　半磁器で、体部はいずれも薄壁である。9・13の口唇部はヘラ削りにより扁平である。時期的には19世紀頃と推察される。

【小　結】　磁器類を中心とした出土遺物は14世紀から15世紀頃のものが多く、さらに時期的な幅を限定すれば、14世紀末から15世紀中葉頃に集中する。しかし、一方で、鉄砲玉が7個も出土しており、こちらの方は明らかに16世紀中葉以降の遺物である。鉄砲玉と同時期の遺物に白磁(157)があるものの、総じて鉄砲玉と磁器類を中心とした出土遺物は時期的には合致しない。

〔2〕建　築　址

①　山田城跡Ⅱの調査区から、計29棟（内、1棟は部分的な検出に止まり、完全な形のものは28棟）の掘立柱建築址を検出したが、基本的な構造は隣接地の山田城跡Ⅰ（大王谷）や高城跡で検出されたものと極めて似通っていた。

すなわち、建物自体は復元において、一応、長方形状の線引きが出来るものの（やや、歪な形状のＳＢ２５・２６を除く)、梁行妻や桁行における柱穴の配列は大方のものが正対の状態になく、千鳥の並びに加えて、片方で中央柱や補助柱を欠いた。

規模については、桁行でＳＢ０７・１０・１１が最大5.0m、ＳＢ０８が最小2.6m、梁行妻でＳＢ２６が最大3.5m、ＳＢ０７が最小1.9mを測り、1棟分の建方面積はＳＢ２５で最大17.01m²、ＳＢ２９で最小7.2m²であった。

②　28棟の建物は第103表で示した様に、桁行と梁行妻の柱間から8タイプに分類される。

間数	建築址代表例	その他
2間×1間	SB-08	SB-05 SB-07 SB-15
2間×2間	SB-20・17	
2間×3間	SB-16	
3間×1間	SB-03・22 (A) (B)	(A) SB-06 SB-11 (B) SB-12
3間×2間	SB-23・04 (A) (B)	(A) SB-14 SB-19 SB-21 SB-24
4間×1間	SB-01	
4間×2間	SB-02・13 (A) (B)	(A) SB-09
4間×3間	SB-10	

第103表　建築址平面プラン一覧表(Ⅱ)

間数	建築址代表例	その他
1間×1間		2棟
2間×1間	(A) (B)	(A) 24棟 (B) 2棟
2間×2間	(A) (B) (C)	(A) 4棟 (B) 9棟 (C) 4棟
3間×1間		1棟
3間×2間	(A) (B) (C)	(B) 1棟
3間×3間		

第104表　建築址平面プラン一覧表(Ⅰ)

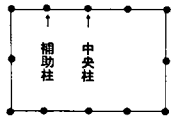
間数	建築址代表例	その他
1間×2間		1棟
2間×1間	(A) (B)	(A) 11棟
2間×2間	(A) (B) (C) (D)	(A) 10棟 (B) 1棟 (C) 1棟
3間×2間		

第105表　建築址平面プラン一覧表(高)

桁行	梁行妻	棟数		
		山田城跡Ⅱ(城山)	山田城跡Ⅰ(大王谷)	高城跡
1	1	0	3	0
1	2	0	1	1
2	1	4	29	13
2	2	5	18	16
2	3	1	0	0
3	1	6	2	1
3	2	7	4	4
3	3	0	1	0
4	1	1	0	0
4	2	3	0	0
4	3	1	0	0
計		28	58	35

第106表　3城跡　建築址の規格一覧表

(注) 建築址の中央柱と補助柱を図示すると右図のようになる



【桁行２間・梁行妻１間】　このタイプのものは、例外的に梁行妻や桁行における柱穴の配列が正対に近い状態にある。主軸尾根から３棟（ＳＢ０５・０７・０８）、主軸尾根北側斜面から１棟（ＳＢ１５）が検出されている。

【桁行２間・梁行妻２間】　中柱が無く、一方の梁行妻で中央柱を欠くもの（ＳＢ２０・２６・２８・２９）と、総柱タイプの類のもの（ＳＢ１７）とがある。但し、ＳＢ１７については中柱はあるものの、一方の桁行で中央柱を欠いており完全な総柱とはならない。主軸尾根の東下帯曲輪から１棟（ＳＢ１７）、北側張り出し尾根から１棟（ＳＢ２０）、迫地から２棟（ＳＢ２８・２９）、陣の山から１棟（ＳＢ２６）が検出されている。

【桁行２間・梁行妻３間】　主軸尾根南側斜面から１棟のみ（ＳＢ１６）が検出されている。中柱が無く、一方の桁行で中央柱を欠くほか、梁行妻では双方が中央柱１本と補助柱２本とに分かれる。

【桁行３間・梁行妻１間】

一方の桁行で補助柱を欠くもの(ＳＢ０３・０６・１１)と、梁行妻や桁行における柱穴の配列が、千鳥の並びではあるものの、正対に近いもの（ＳＢ１２・２２）とがある。主軸尾根から４棟（ＳＢ０３・０６・１１・１２)、北側張り出し尾根から１棟（ＳＢ２２)、迫地から１棟（ＳＢ２７）が検出されている。

【桁行３間・梁行妻２間】

一方の梁行妻で中央柱を欠くもの（ＳＢ２３）と、梁行妻と桁行における柱穴の配列が千鳥の並びではあるものの、正対に近いもの（ＳＢ１４・１９・２１・２４・２５）とがある。主軸尾根から２棟（ＳＢ０４・１４)、北側張出し尾根から４棟（ＳＢ１９

建築址No	規格（間）		長さ（m）		面積（m²）	桁行方位	検出箇所
	桁行	梁行妻	桁行	梁行妻			
ＳＢ０１	4	1	4.8	1.8	8.64	N64° E	主軸尾根平坦部
ＳＢ０２	4	2	4.5	2.4	10.80	N56° E	〃
ＳＢ０３	3	1	4.5	1.8	8.10	東西方位	〃
ＳＢ０４	3	2	5.0	2.2	11.00	N22° E	〃
ＳＢ０５	2	1	4.5	2.4	10.80	N12° E	〃
ＳＢ０６	3	1	4.2	2.4	10.08	N72° W	〃
ＳＢ０７	2	1	5.0	1.9	9.50	N83° W	〃
ＳＢ０８	2	1	4.5	2.5	11.25	N76° W	〃
ＳＢ０９	4	2	4.7	2.5	11.75	N53° W	〃
ＳＢ１０	4	3	5.0	1.8	9.00	N62° W	〃
ＳＢ１１	3	1	5.0	2.3	11.50	N66° W	〃
ＳＢ１２	3	1	4.8	2.2	10.56	N73° W	〃
ＳＢ１３	4	2	4.5	2.5	11.25	N22° E	〃
ＳＢ１４	3	2	4.5	2.4	10.80	N22° W	〃
ＳＢ１５	2	1	3.5	2.4	8.40	N33° W	主軸尾根北側斜面
ＳＢ１６	2	3	3.8	2.8	10.64	N65° W	主軸尾根南側斜面
ＳＢ１７	2	2	2.6	2.4	6.24	N64° E	〃
ＳＢ１８	——	——	——	2.8	——	N25° W	〃
ＳＢ１９	3	2	3.3	2.2	7.26	N24° E	北側張り出し尾根
ＳＢ２０	2	2	3.6	2.1	7.56	N29° E	〃
ＳＢ２１	3	2	4.3	2.4	10.32	N19° E	〃
ＳＢ２２	3	1	3.8	2.0	7.60	N 3° E	〃
ＳＢ２３	3	2	4.2	2.3	9.66	N56° W	〃
ＳＢ２４	3	2	3.6	2.4	8.64	N53° W	〃
ＳＢ２５	3	2	5.4	3.3 3.0	17.01	N30° E	陣の山
ＳＢ２６	2	2	3.5	3.5	12.42	N22° W	〃
ＳＢ２７	3	1	4.7	2.4	11.28	N32° W	迫地
ＳＢ２８	2	2	4.1	2.0	8.20	N32° W	〃
ＳＢ２９	2	2	3.0	2.4	7.20	N68° W	〃

第107表　山田城跡Ⅱより検出の建築址一覧表

・２１・　２３・２４)、陣の山から１棟（ＳＢ２５）が検出されている。

【桁行４間・梁行妻１間】　主軸尾根から１棟のみ（ＳＢ０１）が検出されている。一方の桁行で補助柱を欠く。

【桁行４間・梁行妻２間】　一方の桁行で補助柱を欠き、さらに、梁行妻で中央柱を欠くもの（ＳＢ０２・０９）と、梁行妻や桁行における柱穴の配列がほぼ正対するもの（ＳＢ１３）とがある。

【桁行４間・梁行妻３間】　主軸尾根から１棟のみ（ＳＢ１０）が検出されている。一方の梁行妻で２本の補助柱を欠く。

③　建築址の建て替えの問題については、主軸尾根でＳＢ０１～０４とＳＢ０５～０８がそれぞれ４棟ずつ重なり合っている他、北側張り出し尾根でＳＢ１９・２０、ＳＢ２１・２２、ＳＢ２３・２４が２棟ずつ重複し、迫地ではＳＢ２７～２９の３棟が重なり合う。これらの事から、城跡では少なくとも２回、最大３回の建て替えがあった事が推察される。

〔3〕杭　　列

①　山田城跡Ⅲ（下城子）同様に、明らかに杭列と思われる小ピットの並びが検出されたので、調査現場において可能な限り、杭列の復元に努めた。その結果、最終的に72列を確認した。

②　以下、杭列をいくらかのグループに分けて、その特徴をまとめてみたい。

【杭列１～５】　城山の主軸尾根縁を断片的に取り巻く杭列である。杭列１は北縁の西側を、杭列４は北縁の東側、杭列５は東縁、杭列２は南縁の中央部から西側にかけて、それぞれ杭列が走る。この中で、確たるものは杭列５で、地形に沿った小ピットの整然とした配列を見ることができる。

【杭列６～９】　主軸尾根と東北尾根を仕切る堀切１に関連した杭列である。堀切１の南壁を形成する主軸尾根の北東側斜面を走行しており、特に堀切１の西側部分に接する、杭列７～９は三重の杭列となっている。一方、杭列６は主軸尾根の小山腹が、やや緩斜面をなす所にありこの箇所に建てられたＳＢ１５と、明らかに対をなす杭列である。

【杭列10・11】　主軸尾根の南東下帯曲輪から検出された二重の杭列である。いずれも、確たる並びの杭列であるが、帯曲輪の規模に対して杭列の長さが中途半端の状態にあり、杭列の役割に疑問を感じる。

【杭列12～17】　主軸尾根の南西下帯曲輪から検出された杭列である。これらの杭列に付いては、主軸尾根の南下を西から東へ下る迫地と関係があるものと思われる。迫地から主軸尾根への進入に対し、それを防止する手立てのものであろう。杭列の検出状況からして、元来、杭列12と14、及び杭列13と15、さらに杭列16と17は同列の杭列であることが確実である。

【杭列18・19】　杭列18は主軸尾根と北側張り出し尾根を仕切るもので、堀切の役目を持った

杭列と思われる。杭列18－Ｐ２とＰ３との間には、他と比べて若干の距離がある所から、通路のための戸口が設けられていた可能性が高い。杭列19は堀切２に付随する土塁（調査時には検出できなかった。後世、崩壊したと思われる。）の土留め杭であろう。

【杭列20～28】　主軸尾根東下側を巡る帯曲輪の縁下から検出された杭列で、総じて四重の杭列となっているが、全体的には連ならず、中途で一旦、切れた状態にある。一方で、かつては帯曲輪の東縁に土塁が積まれていた可能性もあり、この土塁に関連した土留め杭とも考えられる。

【杭群①～⑤】　堀切１の北岸にあたる東北尾根筋から検出されたもので、扇型をした東西11ｍ、南北７ｍの範囲に44個の杭跡が存在する。検出状況から堀切１に付随した掻き上げ土塁の土留め杭と思われる。

【杭列29～36】　東北尾根筋(1)から検出された杭列である。杭列29・30は確たる並びの杭列で、尾根筋の等高線沿いに凸の状態で並び、あたかも尾根筋を包み込む様な様相を呈する。杭列31～36は馬の背の様な尾根筋を横断する杭列で、確たる並びの杭列31を除いた他は、調査者の主観が強く働く杭列の復元である事をお断りしたい。

【杭列37・38】　尾根筋の東縁下を、尾根筋の主軸方位に沿って南北方向へ連なる二重の確たる並びの杭列である。

【杭列39～44】　東北尾根の突端部から検出された確たる並びの杭列であるが、やや断片的な並びで、防禦的な意味合いに欠ける。

【杭列45～61】　陣の山から検出された杭列である。この中で、杭列46・47は陣の山の東下縁を、尾根筋の主軸方位に沿って南北方向に連なる二重の杭列である。対して、杭列49～51は陣の山の西下縁を、杭列46・47と同様に南北方向に連なる三重の杭列である。これらは確たる並びの杭列であるが、その他については調査者の主観が強く働く杭列の復元である。

【杭列62～72】　迫地から検出された杭列で、迫地を横断する格好となっている。この中で杭列62～65は迫地の上段部にあり、やや断片的ではあるが、四重の杭列となっている。一方、杭列66～69は迫地の中段部にあり、これも又、上段部と同様に四重の杭列で、これらは迫地防禦の杭列である事に疑いはない。杭列70は杭列の並びがやや馬蹄形をなす。杭列71は迫地の下段部を巡る杭列で、ＳＢ２７～２９に関連した杭列であろう。杭列72は迫地の東縁から検出された登城道に整然と並ぶ杭列である。古道の西縁に沿ってガードレールの様に並んでおり、非常に特異な遺構である。

〔４〕城跡の縄張について

①　城跡は、かつて洪積世に川床であったと考えられる所で、その後の陥没によって形成されたと考えられる比高200ｍの山に築城されている。

東西方向に延びる本体尾根筋は、馬蹄形状に二股に分かれた北側尾根の部分で、「城山」と言う呼称を残している（山全体が城山という字名の地域であるが、地元では極めて狭義的にこの本体尾根筋のみを城山と呼んでいる）。一方、南側部分は「陣の山」と呼ばれており、「戦の際に、陣の山から城山へ鉄砲が打ち込まれた場所」と言う伝承を残す所である。

城跡はこの二股尾根を中心に、本体尾根筋から派生した北側張り出し尾根や東北尾根と、二股尾根の基底部にあたる西側鞍部の尾根筋全体を縄張りに組入れたものである。山全体は本体尾根筋を除き、全体が馬の背の様な地形を呈する所で、一見して、生活区域を確保するのに困難な所である事がわかる。

② 堀切は西側鞍部（北側張り出し尾根）、東北尾根の基底部、陣の山の東側寄りの計３箇所に設けてあり、空堀も西側鞍部斜面に１条を見る事が出来る。但し、堀切や空堀の造りは、山田城跡Ⅰと比較するまでもなく、工事の程度にやや甘い感があるのを否めない。これは山自体が洪積世の礫層で、土木工事が容易でなかったのかも知れないが、遺構の残存度合からして、山田城跡Ⅰの様な大規模工事の跡が到底伺えない状態にあるのは真実である。

③ 迫地についても山田城跡Ⅰと異なり、出土遺物の量もわずかで、３軒の建築址と１条の杭列を検出したに止まった。同じ迫地でも地形的な相異があり（山田城跡Ⅰは山腹中の迫地で、山田城跡Ⅱは迫地がそのままの状態で山裾に開口する）、一般に比較は出来ないが、山田城跡Ⅱの迫地利用の程度は低いと言えよう。

一方、本体の尾根筋については14軒の建築址（内、２軒は土塁で囲まれた区域からの検出）と５条の杭列を確認することが出来、中世山城の中心部のあり方を垣間見る事が出来た。さらに、堀切で仕切られた、いわゆる、捨て曲輪的な東北尾根からは１軒の建築址も検出できず、検出遺構はすべて杭列であったという事も、城跡内の区画利用の点で大きな相異がある事がわかり、興味深い資料となった。

④ 出土遺物の量や、馬の背の様な山全体の地形からして、城跡内における生活は余り考えられない。山田城跡Ⅱは自然地形を十二分に利用した、短期間の立て籠もりのための山城であった可能性が高い。

〔5〕 結　　語

① 城の実年代

出土遺物により、最初に城が使用されたのが14世紀から15世紀中葉頃であり、その後、１世紀程の廃城期間を経て（その間の遺物が出土しない事が、推論の根拠としてあげられる）、16世紀中葉以降、鉄砲が使用された戦（いくさ）において、戦場として利用されている事が明らかである（鉄砲玉が出土している）。但し、戦場利用を考える時、隣接地の高城跡と山田城跡Ⅰの表土からも１個ずつ鉄砲玉が出土している所から（但し、山田城跡Ⅰの鉄砲玉は、出土直

後にカラスが持ち去っており、報告書に末記載である)、3城跡を含めた一帯で、野戦を含めた要塞戦が行われたと考えるべきで、たまたま、山田城跡Ⅱでは鉄砲の使用機会が多かったのであろう。従って、山田城跡Ⅱの実年代は、戦国末期の戦場期間を考慮にいれる事なく、14世紀末から15世紀中葉頃に絞って考えてよいものと思われる。

② 隣接の中世城跡との関連性について

山田城跡Ⅱから見た場合、南西方向の約250m先に山田城跡Ⅲ（下城子）と、さらに同方位で約600m先に山田城跡Ⅰ（大王谷）が隣接し、一方で、南南東方向の約2.2km先に高城跡を遠望する事が出来る。

城跡の地形的利用からすれば、高城跡が丘城で、山田城跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲはいずれも山城である。さらに、山田城跡の場合、城域の面からⅠとⅡが大規模山城で、Ⅲが小規模山城に細分される。

第108表は発掘調査の所見から見た各城跡の特色であるが、これによれば、4城跡の実年代は山田城跡Ⅲが14世紀初頭で最も古く（ここでは一応、球磨地方におけるヘラ切りの土師器坏を年代判定の基準とした)、以下、順に山田城跡Ⅰ（14世紀)、山田城跡Ⅱ（14世紀末から15世紀中頃)、高城跡（15世紀末から16世紀前半）となり、一応、連続的な繋がりを有するものである事が判る。

③ 文献史学との関連について

戦国大名としての相良氏が、系譜において、多良木相良氏や人吉相良氏の嫡流で無く、文安五年(1448)の内訌によって下相良氏から権力を簒奪した永富（留）相良氏である事は良く知られた事実である。しかし、永留氏が権力の座につくまでの文献史料は極めて乏しく、その原像に迫るのは甚だ困難とされる。この点に関し、柳田快明氏が本報告書の付論の中で（本書、付論〔1〕「永留（富）相良氏をめぐって」：P.215)、いくつかの問題を論じておられるので、発掘調査の内容に関係ある部分を中心に要約して見たい。

(1) 永留氏を史書や論文で取り上げる時、確かな文書史料に苗字として永富もしくは永留と表記されたものは一点も存在しない。

(2) 正平23年(1369) 8月5日の契状（相良家文書1－170)に「なかとミとの」というかなを見るのが文安5年(1448)の内訌以前において、苗字と見える唯一の確かな史料である。

(3) 服部英雄氏（山田城跡専門調査員：文化庁天然記念物課調査官）の考えは次の様になる。

ア）この時期の「なかとミとの」が既に惣領家をも脅かす有力庶家であった。

イ）大王神社の社殿裏手にある正平23年の石塔が「永富どんの墓」という伝承を持つ事を考え合わせると、山田の地では、この頃、相良氏の勢力が及び、永富氏が山田城の城番であったと思われる。

ウ）大王神社地の変遷や石塔の「一結諸衆」の銘文解釈から、永富氏と反惣領的性格を持つ庶氏連合（一揆）の代表的存在である。

城　跡　名	出土遺物から見た実年代	縄　張　り	出土遺物	遺　　構	文献との関連
山田城跡Ⅲ 下城子箇所	14世紀前半 （参考年代）	山頂部分を主郭と見る以外には、尾根筋に削平による平坦地を有しない 大規模造りの二重堀切（但し、山田城跡Ⅰの縄張りの一部という見方も残る。）	極端に少ない。 ・磁器片 ・中世雑器 ・土師器（ヘラ切り、糸切り離し） ・スラッグ	・小規模建築址１棟（社） ・杭列　15列 ・のろし穴 ・投げ石	開発領主の平河氏の城趾？（平河氏の活年代の下限は13世紀頃と考えられ、時期的に多少、矛盾する。）
山田城跡Ⅰ 大王谷箇所	14世紀(3枚の文化層有り)	尾根筋にⅠ郭～Ⅳ郭の平坦地があり、これに城跡南域の東西尾根と両門に挟まれた迫地、さらに南東側張り出し尾根が加わる。 大規模堀切（３本） 小規模堀切（１本）	迫地から多量に出土。 ・青磁・白磁 ・天目・瀬戸 ・備前・常滑 ・土師器坏、皿 糸切り、ヘラ切り離し） ・須恵器 ・石製品 （石鍋、砥石） ・鉄器（角釘、雁股、小刀）	凝灰岩の岩場尾根筋を利用している。 ・建築址59棟（１～３期分の合計） ・集石 ・野鍛冶跡 ・井戸（湧水地）	『相良家文書』 (1) 山田城の初見は建武３年(1336)で、北朝方の下相良氏の守る城であった。 (2) 興国元年（南朝方：1340）８月に城で合戦が行われた。 (3) 暦応３年（北朝方：1340）12月10日、太宰小弐頼尚が山田城などの警固を下相良氏一族に命じる。
山田城跡Ⅱ 城山箇所	14世紀末から 15世紀中葉	城山と陣の山という二股尾根を中心に、２本の派生尾根と西側鞍部へ至る尾根筋がある。尾根筋はいずれも削平されている。 堀切　（２本） 小規模堀切（２本） 空堀（１本） 尾根筋の突端にやや角張った馬蹄形の土塁。	城域の広さに比べて少量。 ・青磁・白磁 ・天目・青白磁 ・土師器坏、皿 ・懸け仏(銅製) ・鉄砲玉 ・砥石	・建築址29棟 ・杭列　72列	文安５年(1448)の内訌によって、下相良氏から権力簒奪した永富(留)相良氏の拠点となった城跡？
高城跡	15世紀末から 16世紀前半	丘陵地内の高台にⅠ～Ⅷ郭の平坦地がある。 各郭の裾部に堀切と空堀が巡る。	堀切と空堀から多量に出土。 ・青磁・白磁 ・取瓶 ・土製茶釜 ・土師器坏、皿 ・土錘 ・瓦器（火舎） ・備前・石鍋 ・須恵系土器 ・土師系土器 ・砥石・石臼 ・鉄器（小刀、角釘）	・建築址38棟 ・タコ壺状の土坑12基	文献未記載の大規模丘城。 『沙弥洞然長状』の意図的と思える錯誤史料操作によって、一部に消さ歴史のある事が明らかである。 高城が文献に登場しないのはこの為か？

第108表　発掘調査の所見から見た４城跡の特色について

以上の文献からの探究に対し、今回の発掘調査で山田城跡Ⅱの実年代が14世紀末から15世紀中葉頃と判明した事は、文安5年以前の永富氏を考える上で、貴重な史料を提供したものに外ならないと思われる。即ち、前述の(2)・(3)記述内容と発掘調査の内容とが時期的に、ほぼ合致するからである。この事により、山田城跡Ⅱを永富氏の文安5年の内訌以前の拠点とする見方も出てこよう。

〔6〕山田城跡Ⅱ調査の問題点

① 山田城跡Ⅱの場合、字名に城山という確たる城跡関連地名を残し、土塁・堀切などの見た目にわかる遺構を残しながらも、地元に昔の城跡としての意識が薄いのに対して、山田城跡Ⅰ（大王谷箇所）は『相良家文書』にいう山田城の跡地として何故、広く地元に知られていたのであろうか。これについては下記のことが理由としてあげられる。

ア）山田城跡Ⅰの場合、南側麓に著名な高寺院があり、昔から人々の生活圏の中に城跡地があった。さらに、城跡地は以前からの村有林で、よく管理された杉の植林地となっており、山仕事などで、人の出入りが多かった事が考えられる。対して、山田城跡Ⅱは、個人所有の雑木山で、調査前はかなりの荒地であった。

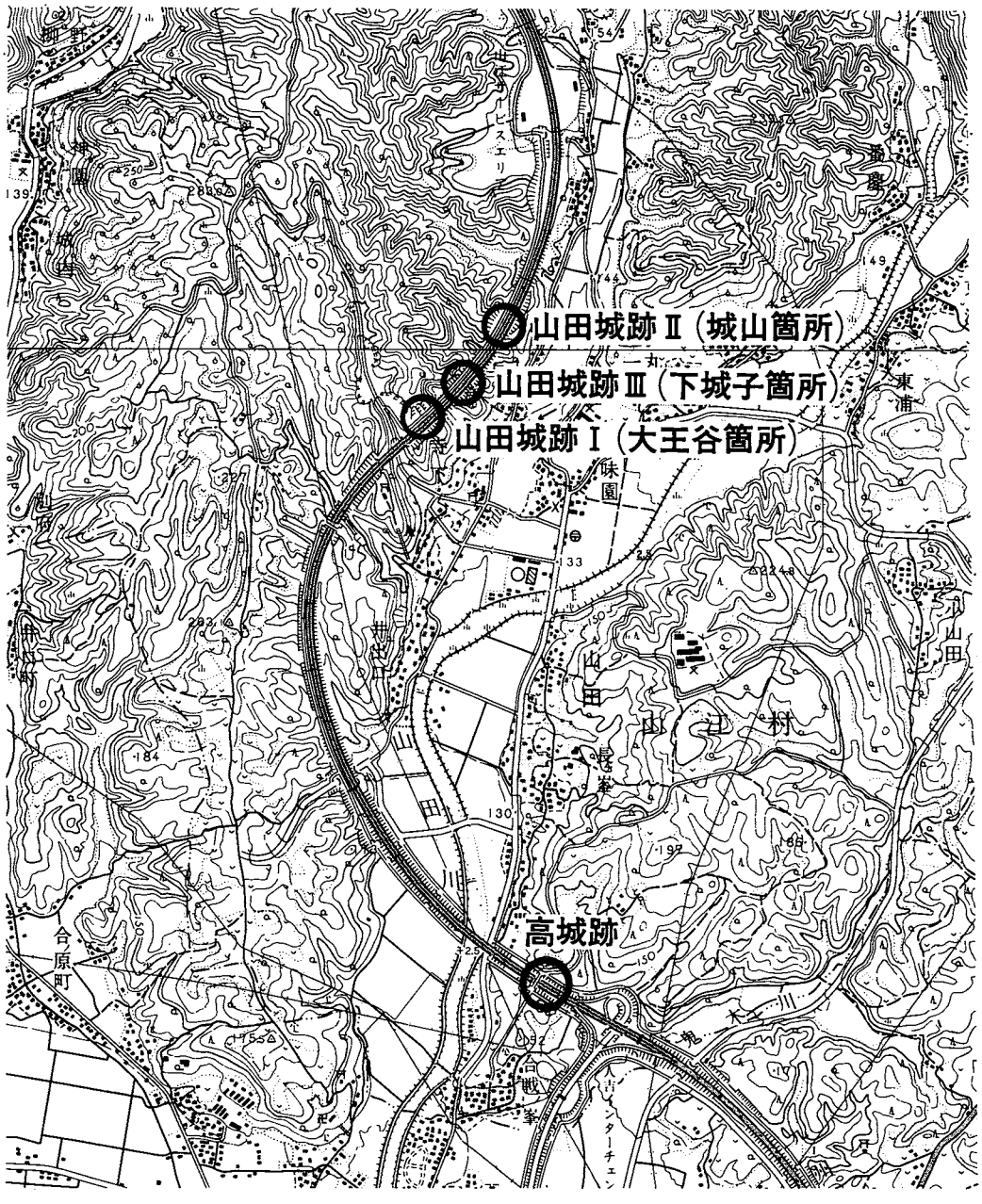
イ）山田城跡Ⅲと比べて、城の造りがすべてにおいて大規模である。特に、堀切の遺構は誰がみても人工地形とわかる代物で、地元民にも城跡地としての認識が容易に出来た。

ウ）昭和16年に発刊された『球磨郡誌』に当時としては極めて、詳細な城跡の踏査記録が残っている。同書は、山田城跡Ⅱを疑いもなく『相良家文書』にいう山田城跡地と断定している。

② 山田城跡Ⅰ・Ⅲや高城跡と同様に山田城跡Ⅱから染付けが一片たりとも出土しなかった事をどうみるのか。この事により、4城跡が所在する山江村山田一帯では、少なくとも16世紀前半（高城跡の下限年代）までは染付け文化圏に属していない事が判る。一方で、近世・人吉城跡の前身と見られる原城跡（中世城跡：山田城跡Ⅱより南南東方向へ約5.3kmの距離に位置する）から16世紀代の染付け皿が出土している事をここで記しておきたい。さらに、大橋康二氏（佐賀県立九州陶磁文化館・学芸課資料係長）の調査者に述べられた「染付けの出土しない中世城跡の下限は戦国時代をさ程下らない古いタイプの城ではなかろうか」と言う私論も、今後の研究課題であろう。

③ 山田所在の4城跡を見る限り、中世城跡の数百年間にわたる長期間使用は考えられない。当該城跡の使用期間はおしなべて半世紀以内に止まっているという真実を冷静に受け止める必要があろう。戦国時代における有力豪族の本城はともかくとして、ローカル的な豪族の持ち城などは必要に応じて、急造的に築城され、ある一定期間の平時を迎えると、案外、簡単に廃城状態に陥り、その後、半世紀ぐらいの間は必要に応じて適時、手が加えられ、再使用されたの

ではあるまいか（一般論からして、平時の際に城は不必要と思われる）。この考えは今日、人吉・球磨地方だけでも実に70数ケ所の城館跡が存在するという数の多さの解明の糸口にもなろう。しかし、一方で、16世紀中葉以降に少なくとも当時すでに廃城となっている城跡が、戦場地化している事は、まったく別の意味での中世城跡のあり方を考える上で、極めて興味深いデータである。(明治時代の西南戦争の際、県内では多くの中世城跡が薩摩軍と官軍の陣地となっている事を合わせ記したい)。



第97図　4城跡位置図

山　田　城　跡　Ⅲ

第Ⅰ章　調査の概要

第1節　調査の組織

昭和60年度〔発掘調査〕

調査責任者　森　一則（文化課長）　佐々木正則（文化課長補佐）　隈　昭志（文化財調査係長・課長補佐）

調査担当者　大田幸博（文化課文化財保護主事）　黒田裕司（文化課嘱託）
菖蒲和弘・松舟博満・永田　満（文化課臨時）

専門調査員　賀川光夫（別府大学教授）　白木原和美（熊本大学教授）　石井　進（東京大学教授）　工藤敬一（熊本大学教授）　橘　昌信（別府大学教授）
大三輪龍彦（鶴見女子大学教授）　甲元眞之（熊本大学教授）　三島　格（肥後考古学会長）　田辺哲夫（日本考古学協会員）　服部英雄（文化庁天然記念物課調査官）　阿蘇品保夫（熊本県立美術館主幹）

協　力　者　山江村役場：田村俊明（山江村長）
山江村教育委員会：前原源治（教育長）　内山賢治（社会教育主事）

調査事務局　柴田和馬（文化課主幹経理係長）　森　貴史（文化課参事）
谷　喜美子（文化課主任主事）

日本道路公団人吉工事事務所
山田益三（所長）　松本茂久・小原　明（副所長）　辻　正徳（工務課長）
古賀文雄・岩永一男（庶務課長）　藤田重幸（工務課）

＊発掘作業員・整理作業員・平成元年度の報告書作成時の組織については、山田城跡Ⅱと同じ。

第2節　調査に至る経緯

南北方向に主軸を持つ山田城跡Ⅰの本体尾根筋山腹中から東方向へ派生する末端尾根がある。

この山を南側から眺望した場合、ラクダのコブの様な形状をなしており、山頂部分の標高は207.23mを測る。山田城跡Ⅰの主軸尾根とは約28.2mの比高差があり、現在、この派生尾根より主軸尾根への山道が通じているが、途中は山腹の崖面を幅0.2m程に削平した急造の現代もので、到底、城跡関連の旧道ではない。地形的に見て主軸尾根と派生尾根とに連続性は無く、この山を中世城に比定した場合、山田城跡Ⅰとは別のものという感じがした。

ところで、日本道路公団の受託事業による一連の発掘調査の中で、高城跡に取り組んでいた時、山田城跡Ⅰの東側に延びる派生尾根の雑木が伐採され、西側鞍部に明確な二重の堀切が誰の目にも遠望できるようになった。聞けば九州縦貫自動車道の路線内という事で、早速、日本

道路公団福岡建設局人吉工事事務所と連絡をとり、同事務所の工務課と現地立ち合いをした。その結果、山自体は東方向に主軸を持ち、さらに北側へ派生尾根を有する二股の帯状の山である事がわかった。ラクダのコブの様な山頂に立って、西側鞍部を仕切る本格造りの二重堀を眺めると、まさに独立した一つの中世山城であった。踏査に同行した地元の人の話しによれば、「下城子」の字（あざ）域はこの山を拠点としており、山はその形状から「坊主山」とも称されている事がわかった。さらに二股の尾根筋裾部には古社の「お諏訪神社」が祭られており、地形的にも下城子地区の要の位置に存在する山である事もわかった。但し、山そのものに「昔の城跡」と言う伝承はなかった。

道路公団と協議の上、同年度中に試掘調査を実施した所、山頂から柱穴らしきものとのろし穴の一部と見られる遺構が検出され、土師器の細片も出土したので、この山を中世城跡と判断し、昭和60年度の受託事業に組み入れた。発掘調査は、高城跡と山田城跡Ⅰ調査の入れ替え時期を利用し、昭和60年５月から61年２月まで行った。

発掘調査には、大田幸博（文化課文化財保護主事）と黒田裕司（文化課嘱託）、菖蒲和弘・松舟博満・永田　満（文化課臨時）があたった。

第３節　調査区域について

山田城跡Ⅰの山城を広域的に見れば、当然、下城子の東側尾根は山田城跡の縄張りへ組み入れられる事になる。しかし「調査に至る経緯」でも述べた様に、山田城と調査区とは実に28.2ｍの比高差があり、尾根筋からの眺望は、まさに山腹急傾地からの派生尾根である事が、一目瞭然である。すなわち、山田城本体と調査区は地形的に連続しておらず、この派生尾根の基定部に本格造りの二重堀を設ける必要性は無いと考えた。

見方によっては、他の小規模な山城がそうである様に本体の山そのものは城域外で、鞍部を堀切で仕切った末端尾根筋の区域のみが城域を形造る中世山城の部類に属するものと推察された。従って、ここでは狭義的な城域を考え、一応、山田城跡の本体と切り離した小規模な中世山城として取り扱った。

第４節　調査の方法と経過

（１）調査の手順

北側の山頂部分を要（かなめ）の位置として、東側と南側へ延びる二股の尾根筋は、全体が馬の背の様な地形をしている所から、調査はあたかも山の斜面に張りつく様な格好となり、作業は困難を極めた。

調査日誌でも触れる様に、雑木を伐採し、樹根を撤去した後に、主に山グワで表土を剝ぎ、地山を露呈させて遺構の検出に努めた。

調査は山頂部分から着手したが、山頂及びその周辺斜面部から数多くのピットを初めとして、焼土箇所や集石を検出した。内、山頂部分で１棟分の小規模な建築址が復元できた。

次に北側鞍部の二重堀では、堀切部分の埋土を排土し、堀底を検出したが、堀底から集石が見つかった。二重堀に挟まれた土塁は、地山を側面から削り落として切り立てた基定部のみの残存であることが判明し、上部の積み土部分は検出できなかった。

さらに、東側と南側へ延びる二股の尾根を調査した所、山頂部分と同様に地山を切り込む多数のピットが検出されたが、この内、15列の杭列と１棟分の建築址が復元できた。

遺構の実測については、山頂より二股尾根と堀切へ主軸線を延ばし、これより各主軸線ごとに90度の角度で、尾根の斜面へ派生杭を降ろし、平板によって図面を作成した。その際、遺構図面には地形に応じて25～50cmの間隔でコンタを廻らした。

（２）発掘調査日誌抄

昭和60年７月下旬

高城跡調査も調査の最終工程に入り、先発隊が下城子調査に入る。調査区は、試掘の時、雑木はすべて伐採したが、半年間ですっかり元の雑木山に戻っており、一同、ア然となる。再び、伐採作業となる。下草を刈り取った後、樹根をチェーンブロックとチルホールで、一本一本、撤去していく。

昭和60年８月上旬

山頂部分より調査に入り、その後、西側鞍部の堀切を調査する。調査者にとっても、はじめての本格的な山城の調査で、毎日が試行錯誤の繰り返しである。

昭和60年９月中旬　二股尾根の調査に入る。東側尾根から北側尾根へと調査を進めた。

昭和61年１月上旬

北側尾根を調査中に大雪となる。おりしも、東側麓のグランドでは村の消防出初式があっており、盛んに放水が行われている。おそらく団員はびしょ濡れであろう。「消防団も御苦労さん。さぞ、寒かろう。」と皆で笑い、かつ同情した。これには後日談がある。同日、下のグランドでは消防団員と見物人が「文化課さんも大変ばい。山の斜面から、ころげ落ちらっさんとよかが。」と皆で笑い、かつ同情したという。

昭和61年１月中旬

高城跡調査班の後発部隊が、南側の谷一つ隔てた山田城跡Ⅰの調査に入る。二股尾根筋からは多数の柱穴が検出された。その中で幾つかは杭列として捉えられる。

昭和61年２月上旬

実測調査に入り、トランシットと関数電卓が必需品となる。矢遣方測量は馬の背の様な地形からして無理と判断した。

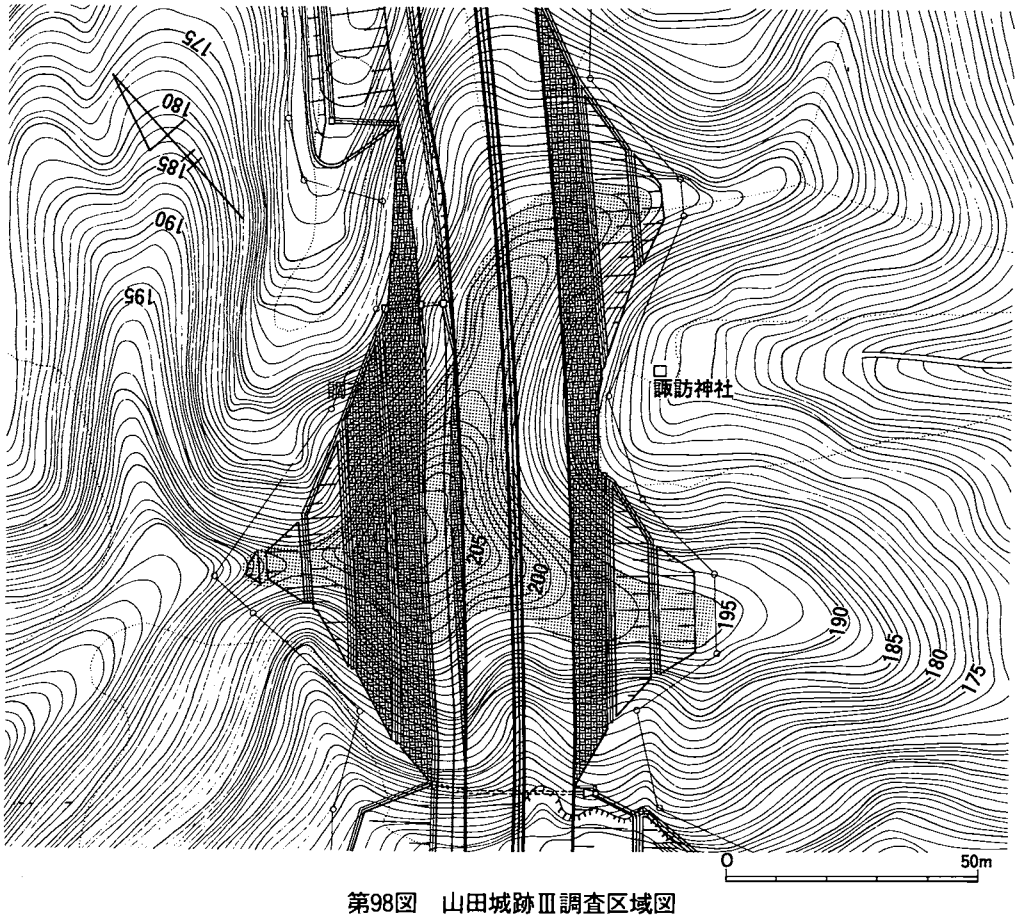
昭和61年３月下旬　調査を終了し、午後から山田城跡Ⅰ調査班と合流する。

第Ⅱ章　調査の成果

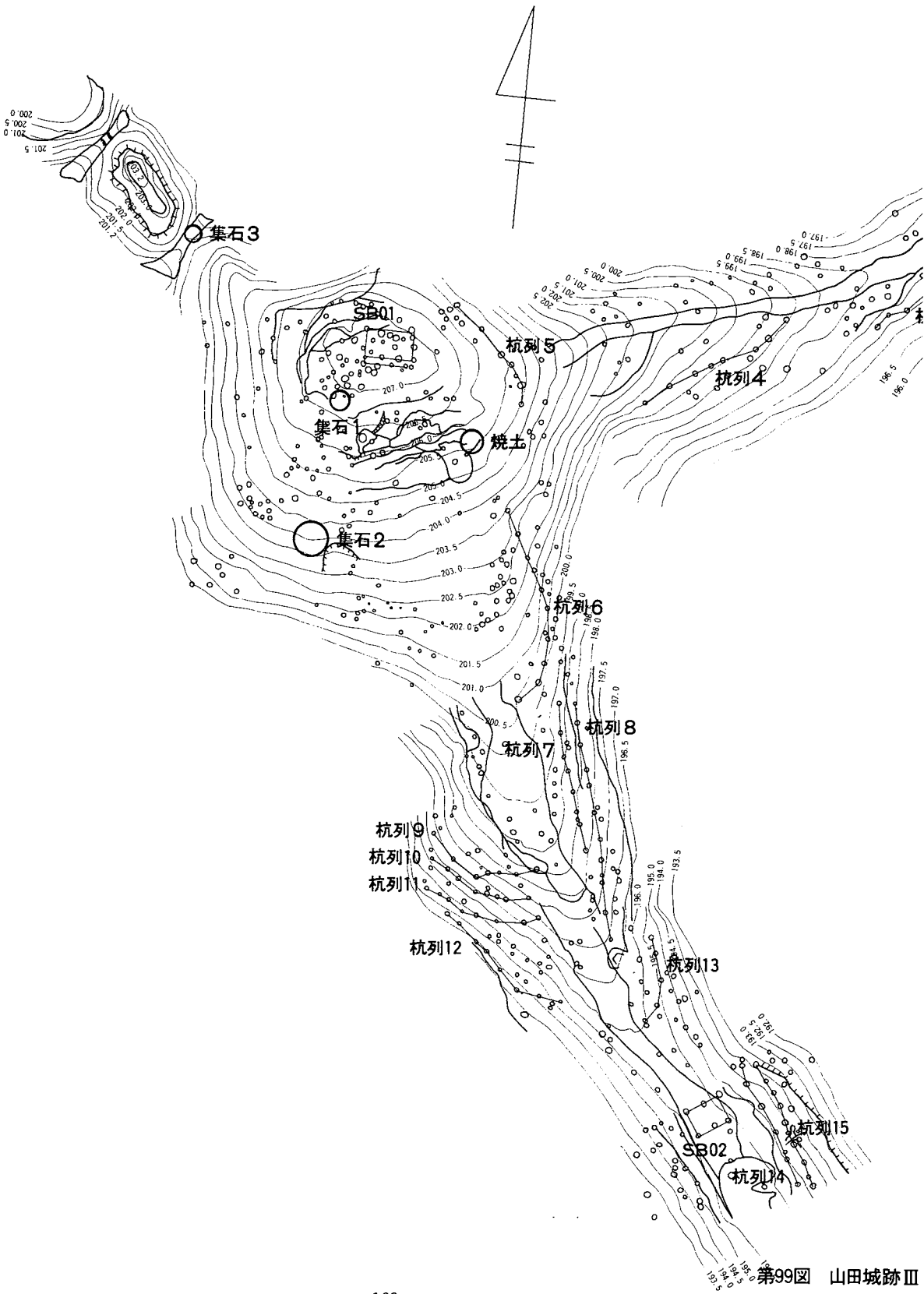
第1節　遺構の概要

城跡の縄張りは、派生尾根の基定部に二重堀があり、その東側隣りに標高207.2mの山頂部分がある。山頂はラクダのコブの様な形状で、人工的な削平地はなく、全体的に極めてゆるやかな傾斜地となるが、周辺一帯から数多くの柱穴が検出され、うち、一棟分の小規模な建築址が復元された。さらに、山頂の南側斜面（標高205.6mライン）に焼土の箇所があり、集石も山頂南西端（標高206.8mライン）と南西側斜面（標高204.0mライン）から検出された。その他、二股に分かれた馬の背の様な尾根筋から15条の杭列と1棟の建築址が検出されている。

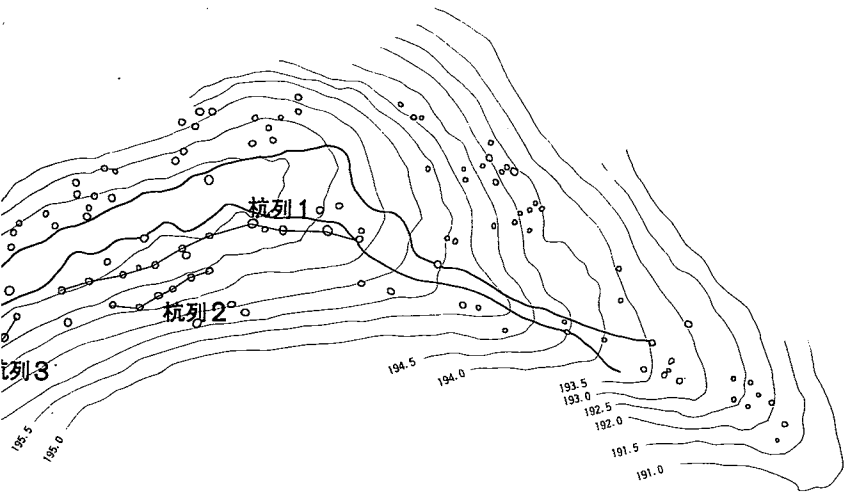
出土遺物は土師器や磁器で、ごく少量であったが、これは尾根筋の形状により遺物がほとんど流出した事が考えられる一方で、山城の性格そのものが、たとえ臨時的であったにせよ、遺物を持ち込む状態になかった可能性もきわめて高い。この事については考察の中で取り上げたいと思う。



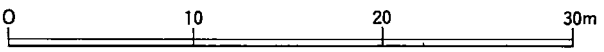
第98図　山田城跡Ⅲ調査区域図

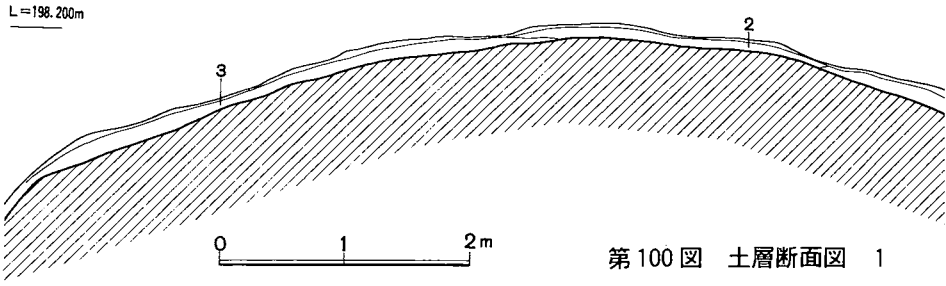

集石3
SB01
集石1
焼土
集石2
杭列5
杭列4
杭列6
杭列8
杭列7
杭列9
杭列10
杭列11
杭列12
杭列13
杭列15
SB02
杭列14

第99図　山田城跡Ⅲ

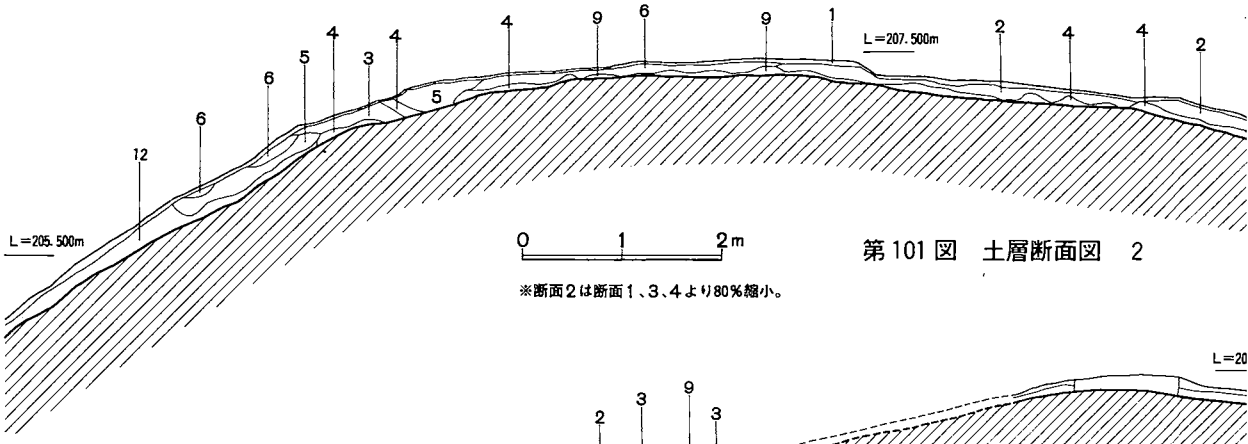

杭列1
杭列2
列3
195.5
195.0
194.5
194.0
193.5
193.0
192.5
192.0
191.5
191.0

遺構全体図


0
10
20
30m

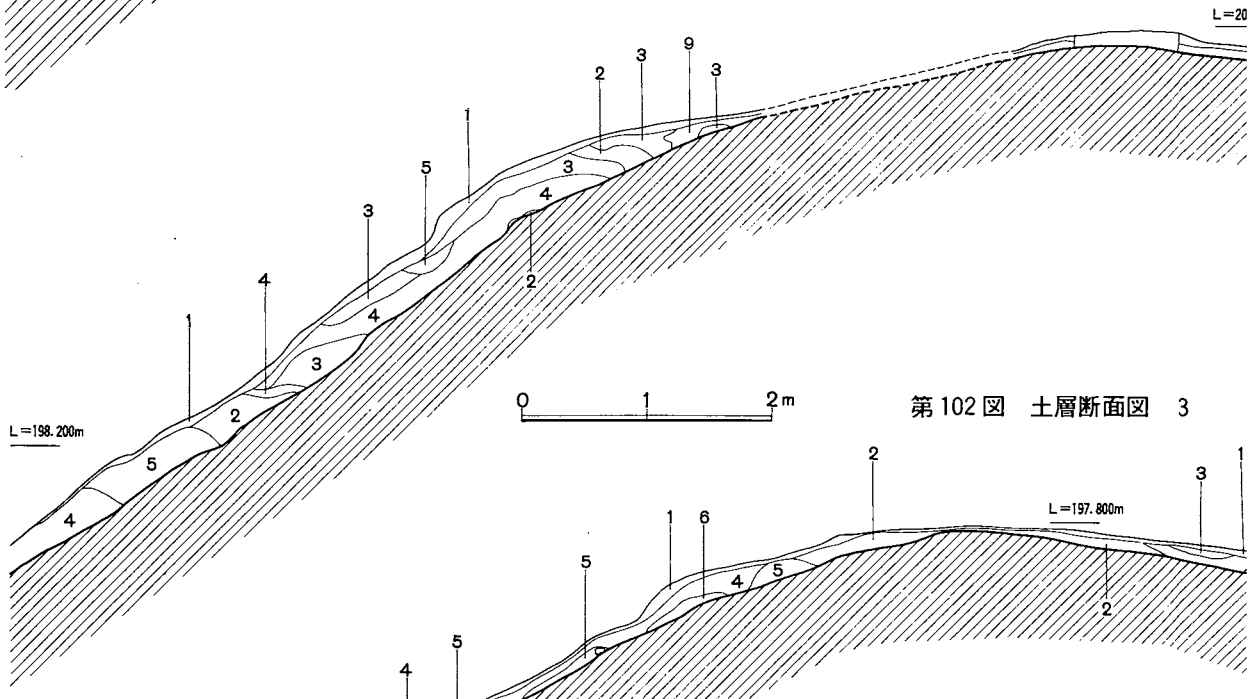


第100図　土層断面図　1

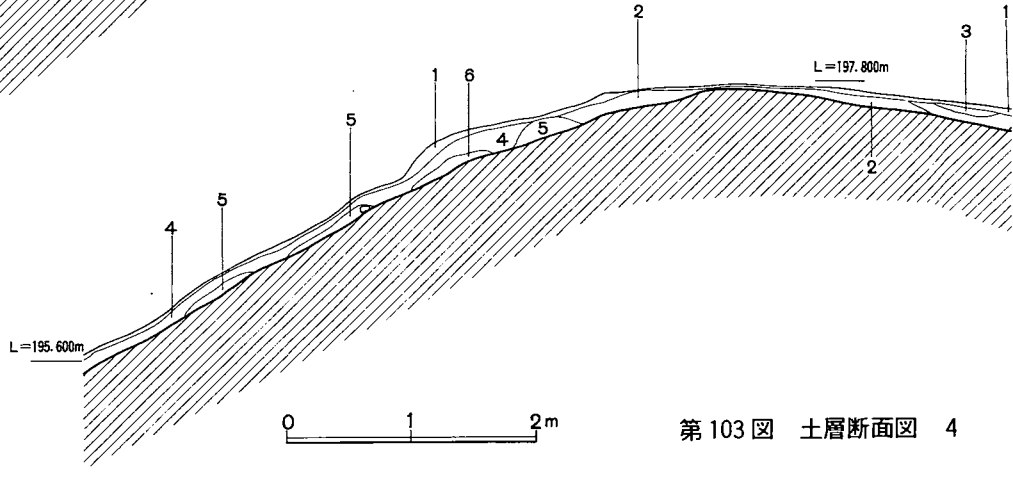


第101図　土層断面図　2

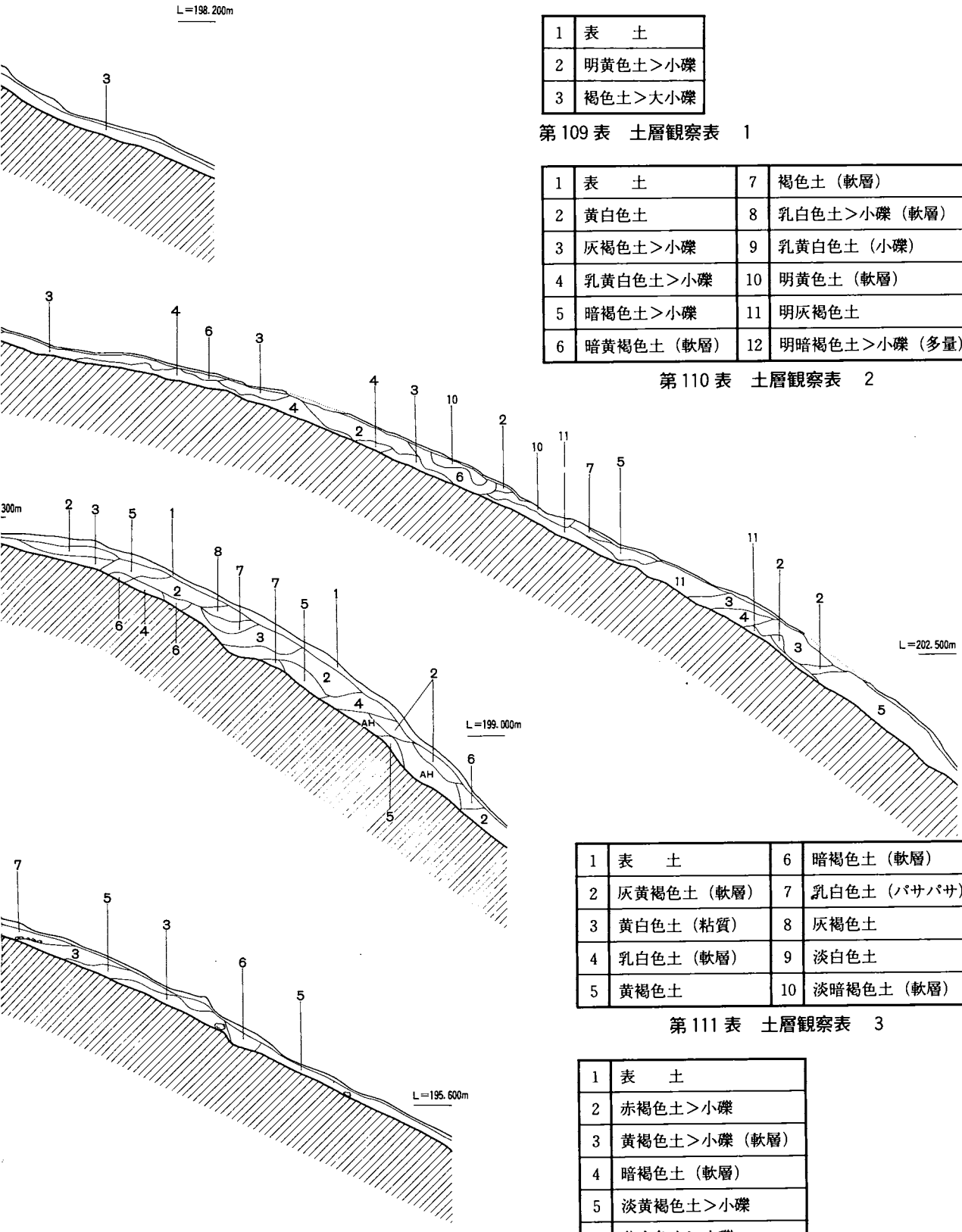
※断面2は断面1、3、4より80%縮小。



第102図　土層断面図　3



第103図　土層断面図　4



1	表　　土
2	明黄色土＞小礫
3	褐色土＞大小礫

第 109 表　土層観察表　1

1	表　　土	7	褐色土（軟層）
2	黄白色土	8	乳白色土＞小礫（軟層）
3	灰褐色土＞小礫	9	乳黄白色土（小礫）
4	乳黄白色土＞小礫	10	明黄色土（軟層）
5	暗褐色土＞小礫	11	明灰褐色土
6	暗黄褐色土（軟層）	12	明暗褐色土＞小礫（多量）

第 110 表　土層観察表　2

1	表　　土	6	暗褐色土（軟層）
2	灰黄褐色土（軟層）	7	乳白色土（パサパサ）
3	黄白色土（粘質）	8	灰褐色土
4	乳白色土（軟層）	9	淡白色土
5	黄褐色土	10	淡暗褐色土（軟層）

第 111 表　土層観察表　3

1	表　　土
2	赤褐色土＞小礫
3	黄褐色土＞小礫（軟層）
4	暗褐色土（軟層）
5	淡黄褐色土＞小礫
6	黄白色土＞小礫
7	暗褐色土

第 112 表　土層観察表　4

第2節　東側尾根筋

いずれも尾根筋の主軸方向に沿う形で、尾根の南側斜面から杭列1～4が検出された。

〔杭列　1〕　標高198.0～197.2mラインから検出されたもので、10個の杭跡から構成されている。全長16.35mを測り、杭列の西端は直線距離にして山頂中央部より約39.5mの位置にある。

杭間の距離は1.50～2.29mで、杭列の並びは「く」の字を反転した形状となる。

Pit No	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm) 最深	深さ(cm) 最浅	Pit間(cm)
1－1	34	27.5	28	22.5	
2	45	33	29.4	26.2	168
3	43	31	34.8	23.8	229
4	45.5	37	28	23	170
5	33	27	16	11.6	232
6	34.5	28	33	22.7	162
7	38.5	34	41	33.5	150
8	36.5	34.5	44.8	30.3	187
9	36	34	37.3	18.2	180
10	40.5	35	24.8	18	157
				全長	16.35 m

第113表　杭列1計測表

〔杭列　2〕

杭列1の南側に並列するもので、標高197.4～197.2mラインから検出された。全長5.53mを測り、6個の杭跡から構成されている。杭列の西端は杭列1のP6近くにあり、杭間の距離は0.77～1.44m測る。

杭列の並びはP1～P5がほぼ直線状にあり、西端のP6のみが大きく北側にそれる。

Pit No	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm) 最深	深さ(cm) 最浅	Pit間(cm)
2－1	31.5	26	41	23	
2	34	29	25.5	12.3	97
3	33.5	27.5	33.5	27	113
4	35	31	24.8	14.2	77
5	33	28	41.5	22	122
6	33	30.5	55.5	36.3	144
				全長	5.53 m

第114表　杭列2計測表

〔杭列　3〕

杭列1の西端より東側へ約3m離れた所にあり、標高197.8～197.6mラインから検出された。全長5.51mで5個の杭跡から構成されており、杭間の距離は1.13～1.95mを測る。杭列の並びは「く」の字をくずした様な形状となる。

元来は杭列1に繋がるものと思われるが、杭間に3mの距離があるため、ここでは一応、切り離して考えた。

Pit No	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm) 最深	深さ(cm) 最浅	Pit間(cm)
3－1	36.5	34	43.7	28.5	
2	41	36.5	33.5	13.2	118
3	32	28	30.8	11.0	195
4	28	25.5	35.3	19.7	125
5	34.5	26	30.7	13.5	113
				全長	5.51 m

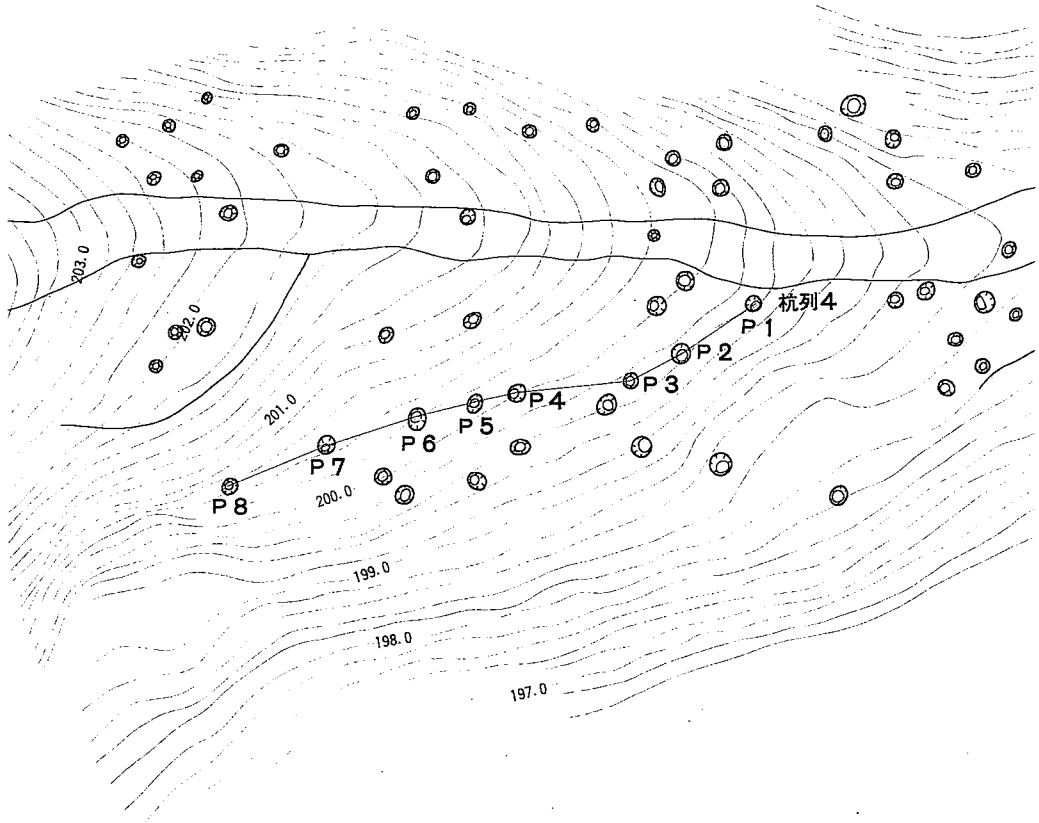
第115表　杭列3計測表

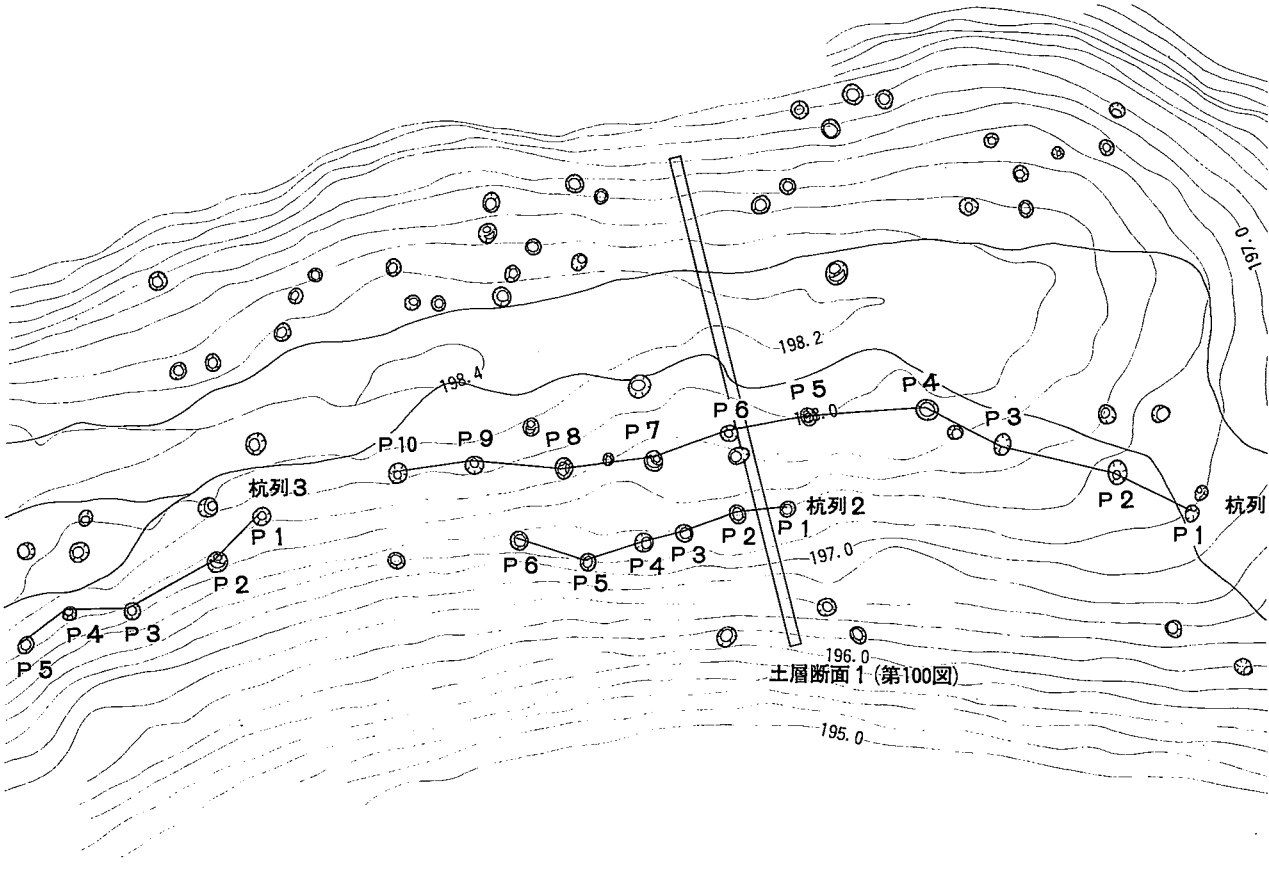
〔杭列　4〕

標高200.6～199.6mラインから検出されたもので、8個の杭跡から構成されている。全長11.2mを測り、杭列の西端は山頂中央部より、直線距離にして約18mの位置にある。杭間の距離は0.85～2.34mで、杭列の並びはP4～P8が直線状を呈し、P1～P4が「く」の字型の弧状となる。

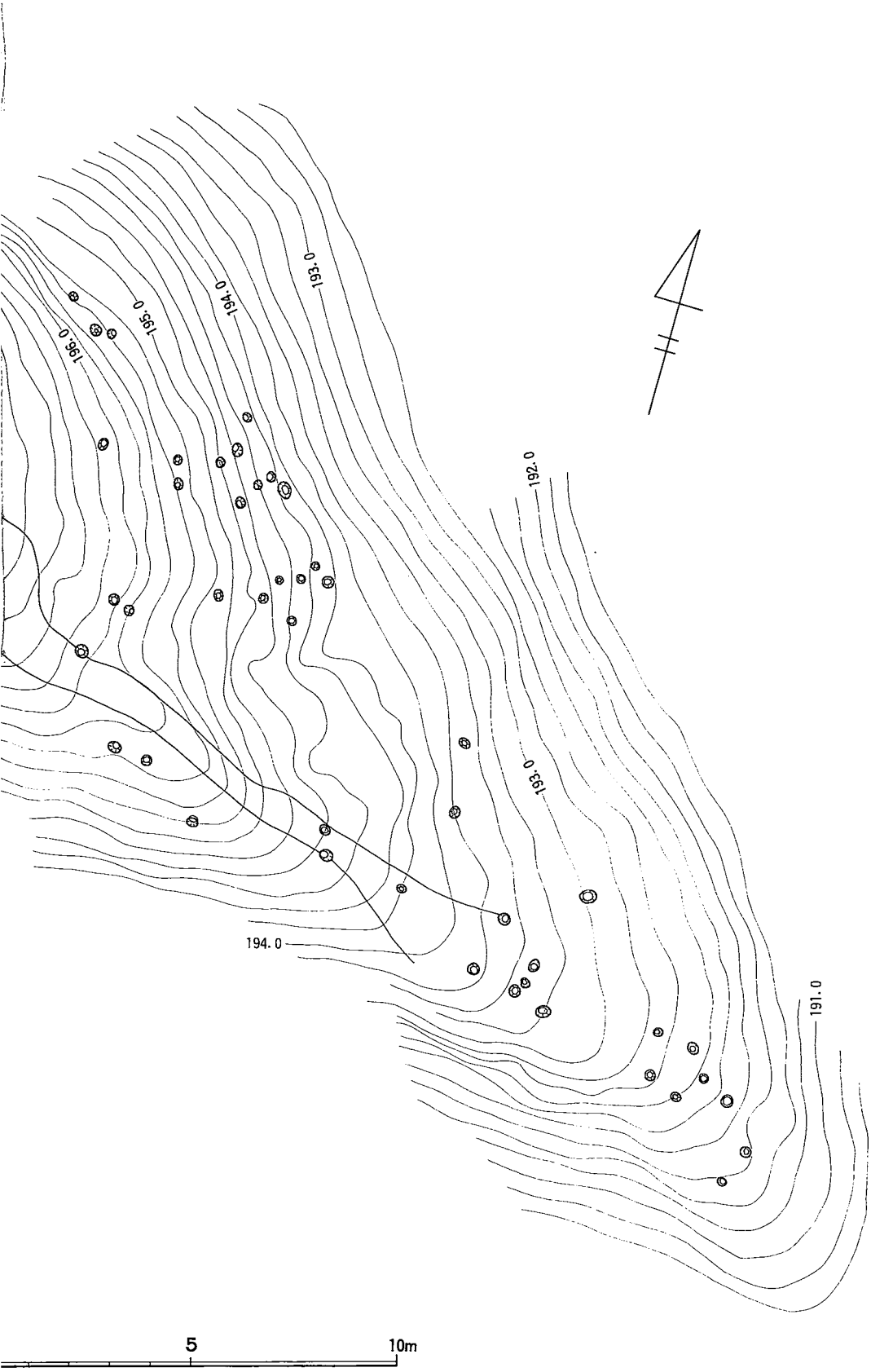
Pit No	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm) 最深	深さ(cm) 最浅	Pit間(cm)
4－1	31	28.5	35.5	20.3	
2	38	33	34.6	15.9	178
3	30	28.5	29.9	18.7	114
4	33.5	32	34.5	14.4	234
5	33	25	31.8	20.9	85
6	36.5	28.5	55.2	37.7	119
7	37	30			187
8	32	29			207
				全長	11.24 m

第116表　杭列4計測表


203.0
202.0
201.0
200.0
199.0
198.0
197.0
杭列4
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8



第104図　東側尾根遺構実測図


193.0
194.0
195.0
196.0
192.0
193.0
194.0
191.0
5
10m

第３節　山頂部および北西鞍部

〔杭列　５〕

標高205.4～204.8ｍラインから検出されたもので、６個の杭跡は等高線に沿う形で、山頂東下を南北方向に走行する。

全長8.26ｍで、杭間の距離は0.85～2.34ｍを測り、杭列は山頂東下と東側尾根筋の間を仕切る格好となる。

Pit No	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm) 最深	深さ (cm) 最浅	Pit間 (cm)
5－1	42	32	49.2	19.6	
2	32	28	25.4	12.2	234
3	41	36	28.5	17.3	221
4	37	32	21.4	11.8	85
5	54	39	29.2	10.2	148
6	32	22	34.1	13.0	138
				全長	8.26 m

第117表　杭列５計測表

〔集石　１〕

山頂部分の標高207.0～206.8ｍラインから集石１が検出された。山頂の南西側にあたり、建築址ＳＢ０１から約２ｍの近距離である。

集石に伴う掘り方はなかったが、集石は総数150個前後で、長さ1.4ｍ、幅0.9ｍの範囲にあり、中央部が疎の状態である他は、全体的に密な状態であった。集石の密度の度合は集石２よりも遙かに大である。

石質は砂岩が主で、中にはチャートのものが混じっていた。礫は小礫のものが多く、最大で長さ・幅13cm、厚さ８cmに過ぎず、長さ10cm前後、幅・厚さ５cmぐらいのものが殆どであった。

〔集石　２〕

山頂の中央部より直線距離にして10.5ｍ離れた標高205.2～203.6ｍラインから集石２が検出された。検出箇所は山頂直下のほぼ真南にあたる所で、総数160個近い砂岩質の礫（自山産）が長さ4.5ｍ、幅2.5ｍの範囲から検出された。集石に伴う掘り方はなく、地山に礫が散布する状態であったが、集石の中央部に限り、長さ１ｍ、幅0.4ｍの範囲で礫の密集が目立った。

礫は大方のものが長さ10cm、幅・厚さ５～８cmぐらいの小礫であったが、中には長さ30cm、幅20cm、厚さ12cmの大型のものもあった。

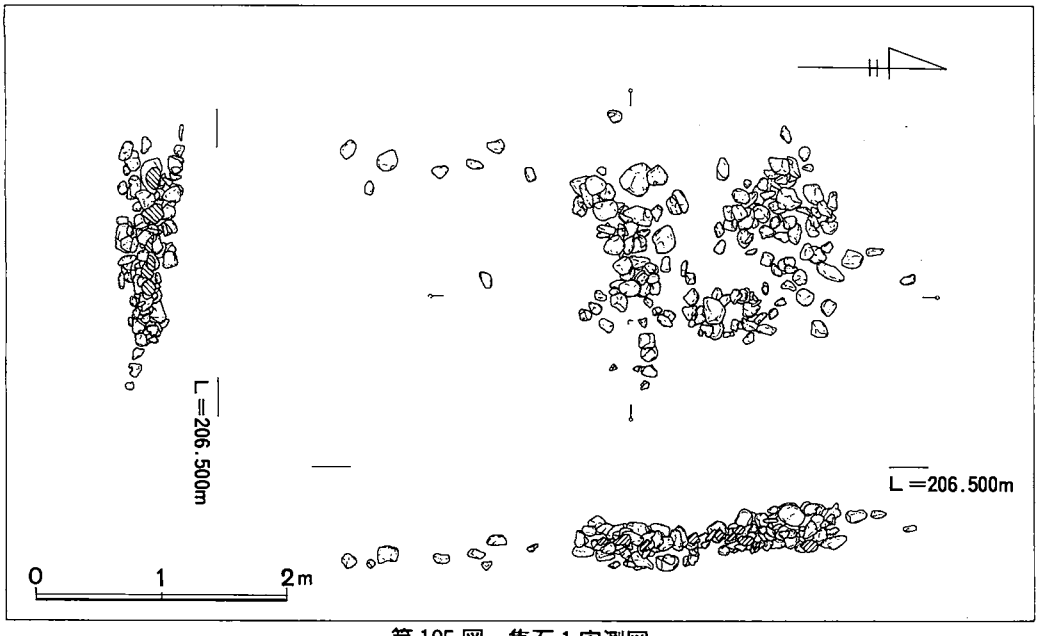
集石の性格としては集石１と同様に、文書にいう「投げ石」の類であろう。集石がやや疎の分布状況にある事については、後世に自然環境の作用で散逸したことが考えられる。

〔焼土箇所〕

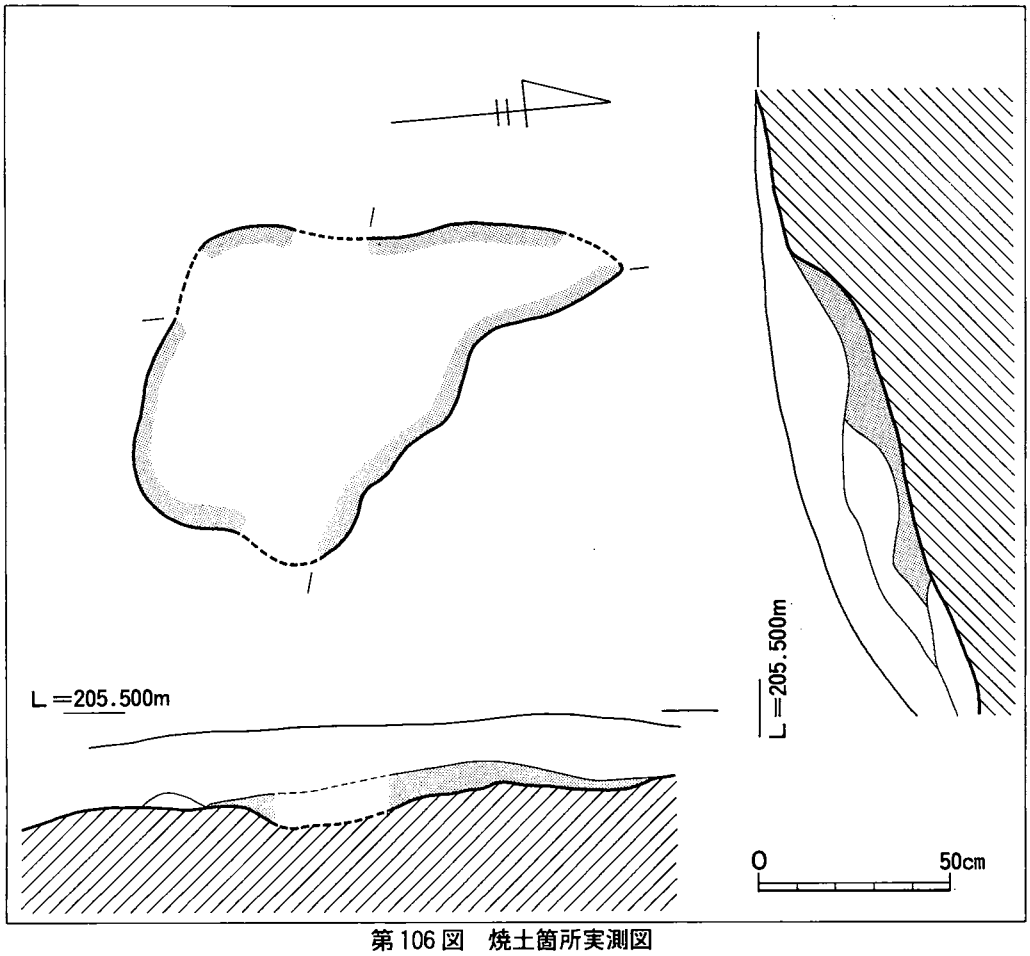
山頂の中央部より直線距離にして約７ｍ離れた標高205.6～205.3ｍラインから焼土が検出された。検出箇所は山頂直下の南東側にあたる所で、焼土の平面プランは大方、隅丸方形の様な形状を呈し、長径0.85ｍ、短径0.65ｍを測ったが、北東側は鋭角三角形状に外側へ細長く突き出す格好（長さ0.5ｍ）となっており、全体的なプランは歪である。

焼土の厚さは最大13cm、最小３cmで、焼土中には多くの炭化物が混じっていたが、炭化物の中には拳半分の大きさのものもあった。

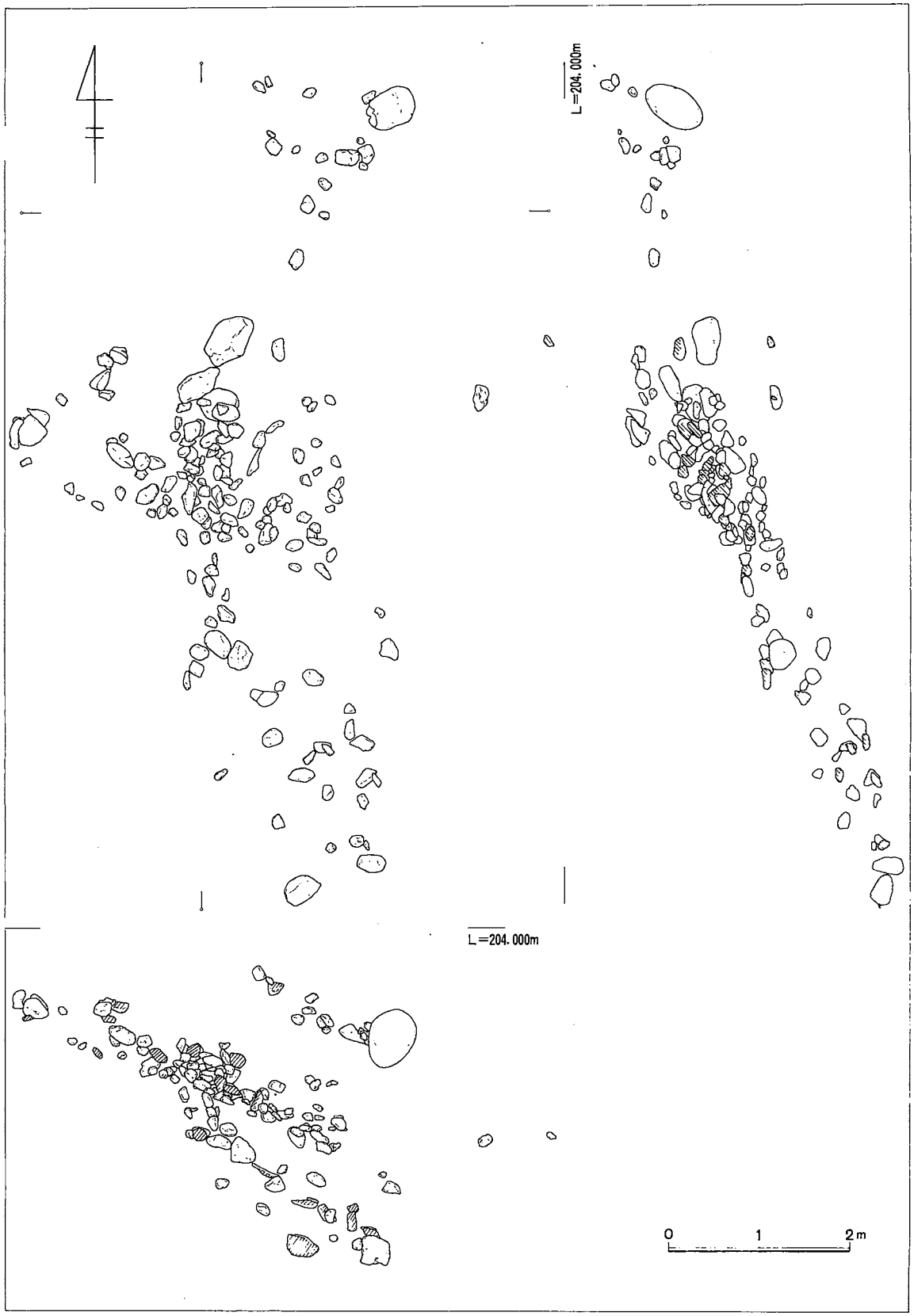
焼土箇所の掘り方は明確にとらえられたが、全体的に皿状を呈し、深さは13cm程に過ぎなかった。遺構の性格としては、検出箇所からして「のろし穴」の類が考えられる。



第105図　集石1実測図



第106図　焼土箇所実測図



第107図　集石2実測図

〔ＳＢ０１〕

桁行3.4ｍ（11.3尺）、梁行妻1.9ｍ（6.3尺）の３間×２間の建物である。桁行方位はＳ88°Ｗで、ほぼ東西方向にある。やや平坦面を有する山頂部分の標高207.2ｍから検出された。

柱間寸法は南側桁行Ｐｃ～Ｐｄ～Ｐｆ～Ｐｉで1.0ｍ（3.3尺）＋1.1ｍ（3.7尺）＋1.3ｍ（4.3尺）であるが、北側桁行Ｐａ～Ｐｅ～Ｐｇは補助柱が不明で2.1ｍ（７尺）＋1.3ｍ（4.3尺）を測る。梁行妻は西側Ｐａ～Ｐｂ～Ｐｃで1.0ｍ（3.3尺）＋0.9ｍ（3尺）を測り、西側Ｐｇ～Ｐｈ～Ｐｉでは1.3ｍ（4.3尺）＋0.6ｍ（2尺）となる。

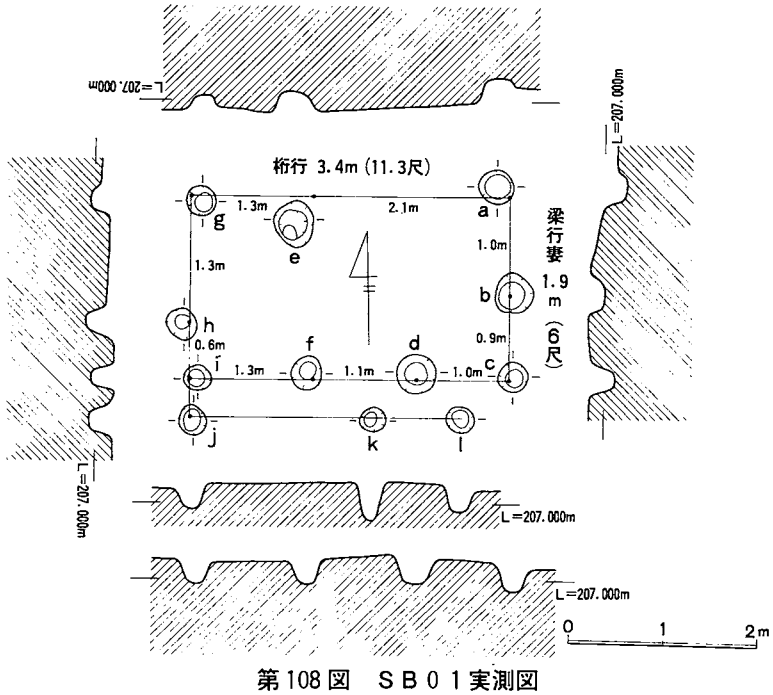
柱穴の大きさはＰｅが最大（47×42cm）、Ｐｉが最小（31×26cm）で平均値は35.1×31.8cmとなる。深さはＰｋが最深（40.2cm）、Ｐｂが最浅（17.7cm）で平均値は26.5cmである。

柱列は南側桁行Ｐａ～Ｐｄ～Ｐｆ～Ｐｇを除いて、千鳥の並びとなる。

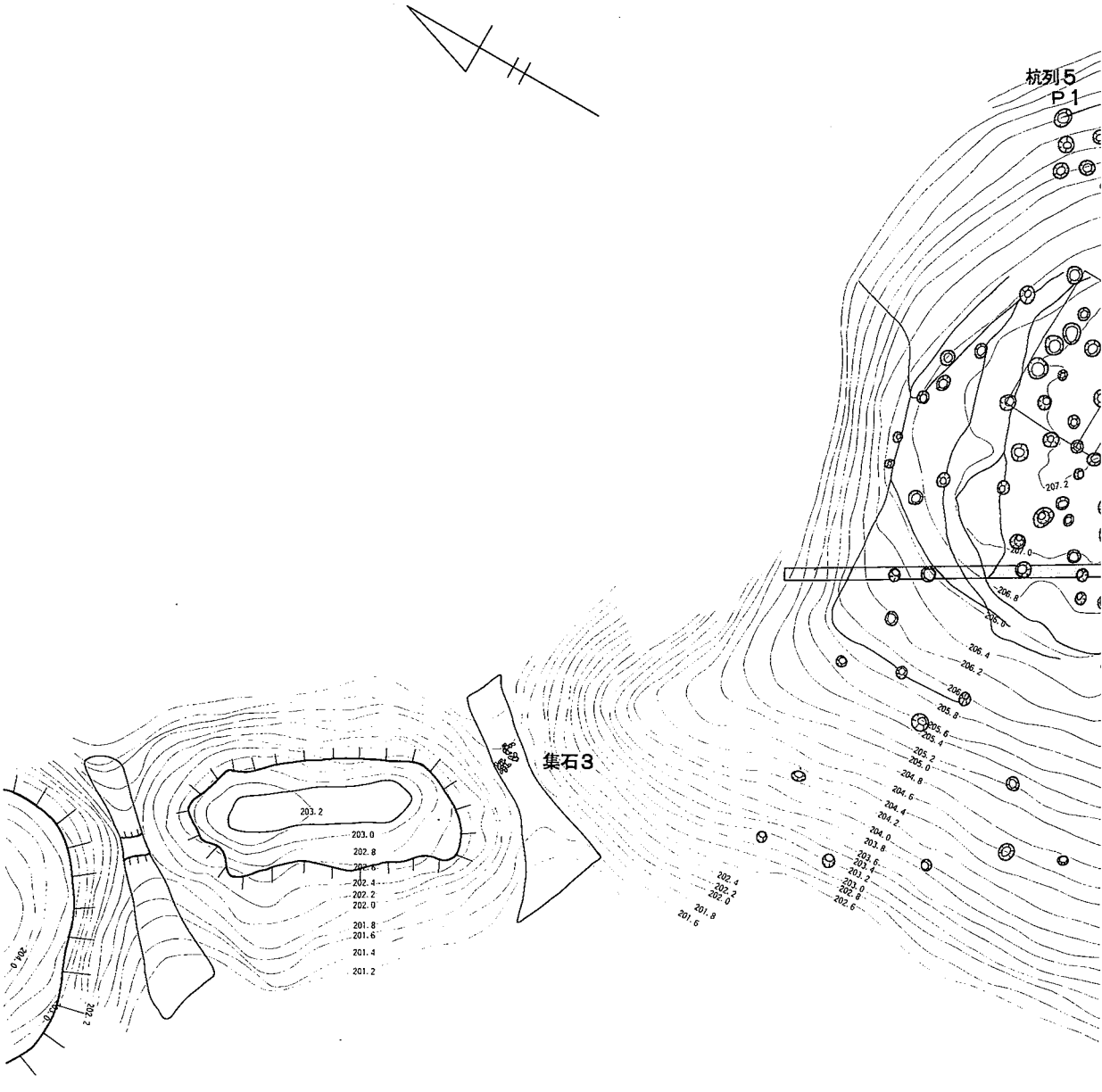
なお、この建物の南側から桁行に並列する形で、庇の様なＰｊ～Ｐｋ～Ｐｌが検出された。

Pit No	桁行柱間 (m)	桁行間(m)	Pit No	梁間柱間 (m)	梁間間(m)	Pit No	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
a～e	2.1	3.4	a～b	1.0	1.9	a	37	34	25.0
e～g	1.3		b～c	0.9		b	42	40	17.7
c　d	1.0	3.4	g～h	1.3	1.9	c	32	30	29.6
d～f	1.1		h～i	0.6		d	42	42	29.6
f～i	1.3					e	47	42	25.6
						f	37	32	25.9
						g	30	32	18.4
						h	33	28	29.7
						i	31	26	23.8
						j	33	27	25.1
						k	27	22	40.2
						l	31	27	27.8

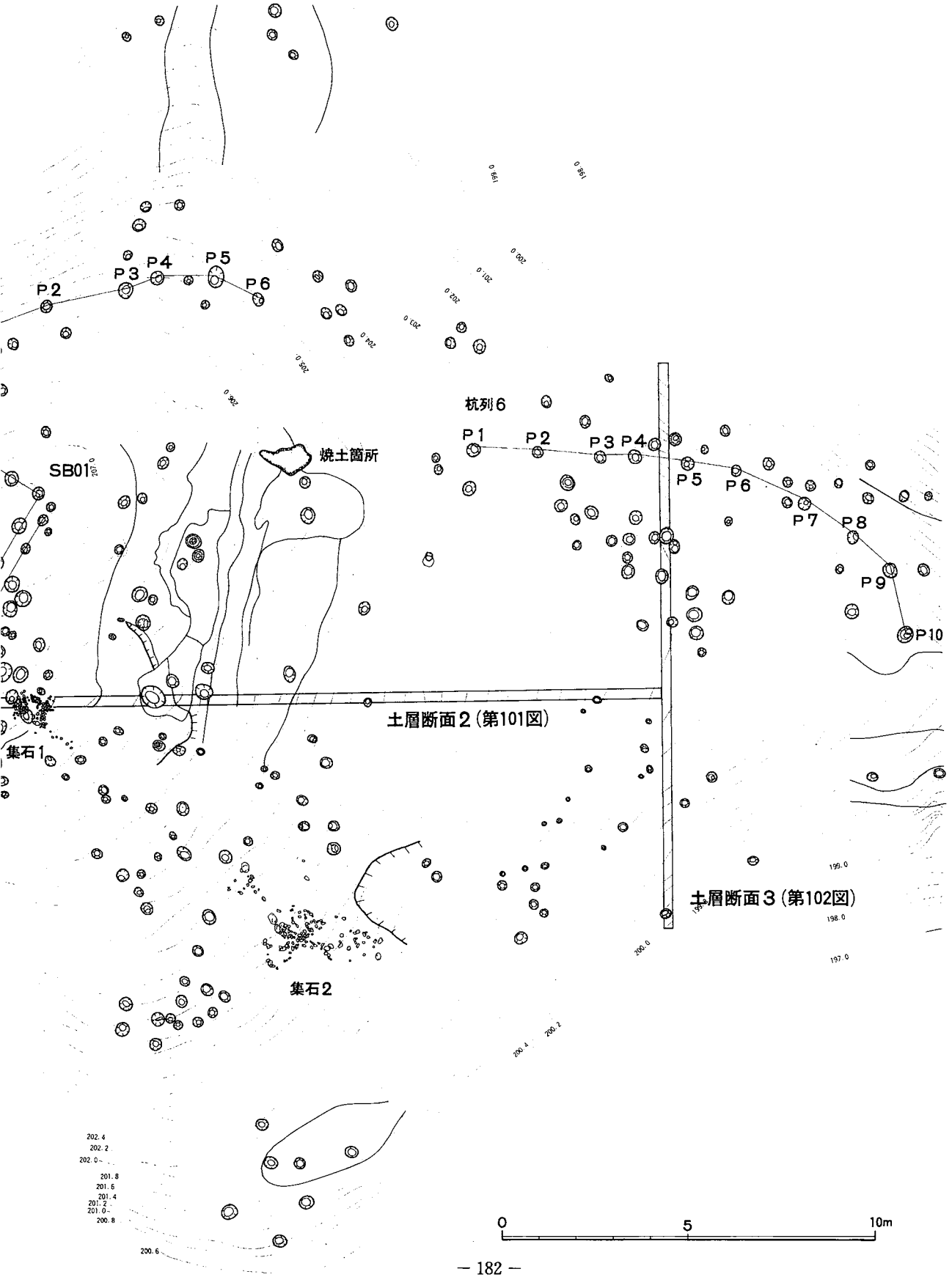
第118表　ＳＢ０１計測表



第108図　ＳＢ０１実測図



第109図　山頂部・北西鞍部遺構実測図


P2
P3
P4
P5
P6
杭列6
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
SB01
焼土箇所
土層断面2（第101図）
集石1
集石2
土層断面3（第102図）
0
5
10m

〔堀　切〕

城跡の北西鞍部を断ち切る二重の堀切である。馬の背の様な派生尾根の基定部を刻んでおり、遺構の残存状況は良好であった。遠目にも遺構の存在がはっきりと確かめられた。埋土については、いづれも層厚が0.3m程で、上位層の表土が層厚5cm、下位層は層厚25cmで、地山剝離土の黄褐色土（硬化土）が堆積していた。遺物の出土はなかったが、南東側堀切から集石が検出された。

1．北西側堀切

標高205.6mラインの本体尾根筋を切り込んだもので、堀底は標高202.2m、幅0.5～0.9m、中央部における水平箇所の長さは1.5mを測る。堀底の東西両端については、いずれも急傾斜の竪堀に変化し、尾根筋の山腹を下る。西側竪堀の傾斜角度は図面上で、直線距離2.7mに対し、2mの比高差となる。

2．二重堀の土塁

尾根筋を二重の堀切で切り離し、馬の背の様な地山を急峻に削り落とした地形利用の土塁である。上場は標高203.2mでやや平坦面を有し、長さ4.2m、幅0.8～1.0mを測る。上場に土塁としての積み土の残存はなかった。下場は長さ8mで、斜面部に削り落としの痕跡が認められるのは幅6.5mの範囲である。

3．南東側堀切

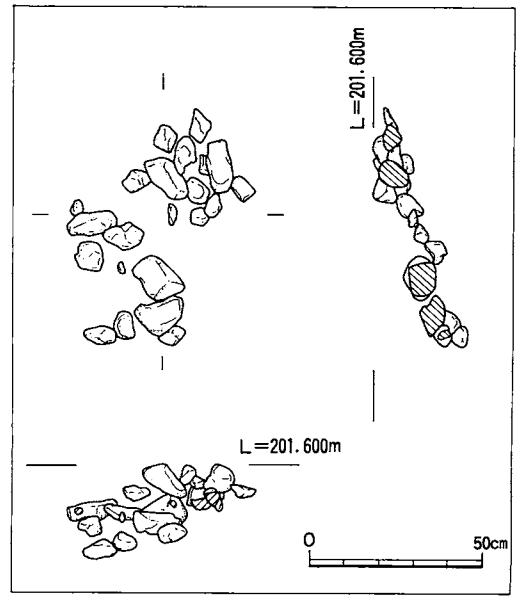
堀底は標高201.3m、幅0.7～1.5m、中央部における水平箇所の長さは1.8mを測る。堀底の東西両端は北西側堀切と同様に竪堀となるが、傾斜角度は比較して、やや緩やかである。西側竪堀の傾斜角度は、図面上で直線距離1mに対し0.2mの比高差となる。

なお、堀底の中央部分から集石3が検出されている。

〔集石　3〕　堀底の中央部から底面に密着した状態の集石が検出された。

大小22個の石が長さ0.7m、幅0.35～0.5mの範囲にまとまってあり、石は大きいもので長さ15cm、幅7cm、厚さ8cm、小さいものは長さ4cm、幅・厚さ2～3cm程の小石であった。

石質は自山（城跡地）産の砂岩で、意図的に据え置かれたものか、偶発的に投げ入れられたものかは不明である。



第110図　集石3実測図

第4節　南側尾根筋

南側尾根筋から10条の杭列が検出された。その内訳は、尾根筋の東側斜面から尾根筋の主軸方位に沿う形で6列（杭列6～8・13～15）、西側斜面から4列（杭列9～12）であった。

西側斜面については、杭列12のみが尾根筋の主軸方位に沿い、他の杭列9～11は東西方向の走行となって尾根筋と直行する。

また、南側尾根筋の端部寄りから小規模な建築址が復元された。

〔杭列　6〕

南側尾根筋の基定部から検出されたもので、10個の杭跡から構成されている。標高203.4m～200.2mラインにあり、全長13.85mを測る。杭列の北端は山頂部中央より直線距離にして約13.5mの位置にある。杭間の距離は0.97～2.05mで、杭列の並びは弓状形を呈し、全体的に東側へ張り出す格好となる。

〔杭列　7〕

標高199.2～198.2mラインから検出されたもので、8個の杭跡から構成されており、全長10.09mを測る。杭間の距離は0.86～1.96mで、杭列の並びは、ほぼ直線状を呈する。

杭列6のP8から南へ約3m離れた所に、杭列7の北端部がある。

〔杭列　8〕

杭列7に並列し、東下を走行する杭列で、両杭列間の距離は1.2mを測る。標高198.6～196.7mラインから検出された。全長15.99mで、杭間の距離は1.04～2.03mであるが、杭列の北端は杭列7のP1とほぼ同一位置にある。

〔杭列　9〕

標高198.6～196.8mラインから検出されたもので、全長8.34を測り、7個の杭跡から構成されている。杭間の距離は0.94～2.10mである。

杭列7の南端P8より西側へ3.5mの所に杭列9の東端（P7）がある。杭列の並びは弓状形を呈し、全体的に大きく南側へ張り出している。

なお杭列9～11は、走行状態からセット関係にある事が明らかである。

Pit No	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm) 最深	深さ(cm) 最浅	Pit間(cm)
6－1	35.5	31.5	39.4	7.7	173
2	28.5	25.5	23.4	7.2	171
3	32.5	26.0	39.5	16.0	97
4	39	33	30.3	9.1	145
5	35	26	35.7	17.8	130
6	27.5	25.5	36.8	12.8	205
7	33	27	65.5	28.5	158
8	36	31	53.7	37.5	129
9	42	34	59.8	42.5	177
10	36	28.5	47.3	36.6	
				全長	13.85 m
7－1	28	23.5	46	23.5	196
2	29.5	28	37.5	19.5	167
3	30	25.5	47.5	29.3	103
4	32	26	38.7	25.5	143
5	32.5	26.5	21.1	12.9	137
6	33	24	32.2	11	86
7	32	28.5	39.4	22.7	177
8	35	28	33.7	13.7	
				全長	10.09 m
8－1	20.5	18	45.4	30.2	126
2	36	32	29	14.8	156
3	33	26.5	43.2	25.2	176
4	34	27	57.6	39.7	104
5	28	25	56.5	38.3	187
6	26	23.5	40.5	32.7	182
7	30.5	26.5	37.8	24.2	137
8	33	30.5	26.7	13.4	146
9	24	21	31	19	203
10	30	25	11.5	2.5	182
11	25.5	21	21.7	13.6	
				全長	15.99 m
9－1	25	24	38.5	22.6	210
2	32	28	46.5	27	202
3	29.5	26	71.3	50.8	94
4	31	28.5	56.2	31.7	73
5	25	21	50.0	34.1	122
6	20	17	42	22.7	133
7	31	28.5	20.7	13	
				全長	8.34 m

第119表　杭列6～9計測表

〔杭列　10〕

杭列９の南下にあり、標高197.6～196.2ｍから検出されたもので、８個の杭跡から構成されている。杭間の距離は0.65～1.47ｍである。杭列９との間隔は、最小0.7ｍ、最大1.8ｍを測る。杭列の並びは、やや弓状形となる。

〔杭列　11〕

杭列10の南側にあり、標高199.0～197.2ｍラインから検出されたもので、８個の杭跡から構成されている。杭間の距離は0.74～1.87ｍである。杭列10との間隔はほぼ均一で1.7ｍを測る。杭列の並びは杭列10と同一である。

〔杭列　12〕

標高195.2～194.2ｍラインから検出された杭列で、８個の杭跡から構成されている。全長9.91ｍで、杭列の並びは北端部のＰ１から南側へかけてＰ６までが、ほぼ直線状を呈し、南端部のＰ７とＰ８は主軸方向に対し、約35度の振れがある。杭間の距離は0.89～1.72ｍで、杭列の走行は尾根筋の地形に沿ったものになっている。

〔杭列　13〕

標高196.0～195.0ｍラインから検出された杭列で、５個の杭跡から構成されている。全長5.78ｍで、杭列は尾根筋の上面から北側の山腹へ、ややカーブを描きながら、漸次、下り落ちる格好となる。杭間の距離は0.98～1.83ｍである。

〔杭列　14〕

標高195.2～194.2ｍラインから検出された杭列で、６個の杭跡から構成されている。全長8.83ｍで杭列は尾根筋の主軸方向に沿って、ほぼ直線状に並ぶ。杭間の距離は1.27～2.01ｍで、杭列15とは並列関係にある。杭列の北端部よりにＳＢ０２があり、この遺構に関連した杭列であろうか。

〔杭列　15〕

杭列14の東下から検出されたもので、標高194.8～193.8ｍラインを走行する杭列である。全長9.15ｍで、両杭列間の距離は0.71～1.44ｍを測る。杭列の走行は、基本的には直線であるが杭列14に比べると、ややジクザグの感じがある。

Pit No	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm) 最深	深さ (cm) 最浅	Pit間 (cm)
10－1	29	25	38.1	15.5	
					131
2	34	30	38	13.7	
					97
3	31	28.5	67.9	51.4	
					147
4	27	25	40.3	20.0	
					83
5	33	26	37	20.5	
					74
6	37	31	62.6	43.5	
					65
7	36.5	33	63.2	52.0	
					140
8	32	27	44.0	31.8	
				全長	7.37 m
11－1	31	29.5	45	31.5	
					98
2	23	20	54.9	40.4	
					74
3	29	25	32.5	14.3	
					123
4	30	22	47	17.0	
					104
5	25	19	59	42.2	
					143
6	26	20	65.5	42.5	
					187
7	31	29	68.5	38.0	
					92
8	32	29	74.7	53.3	
				全長	8.21 m
12－1	34	27	50.3	32.5	
					110
2	26	24	56.6	33.8	
					167
3	29	23	62.1	43.2	
					89
4	31	25	86.7	67.9	
					155
5	26.5	24	72.5	56.7	
					172
6	30	26	63.0	47.6	
					149
7	26	21.5	44.6	30	
					149
8	21	18	38.9	22.4	
				全長	9.91 m

第120表　杭列10～12計測表

Pit No	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm) 最深	深さ (cm) 最浅	Pit間 (cm)
13－1	32.5	30	53.5	34.2	
					98
2	30	28	59.2	33	
					183
3	32.5	27.5	19	16.3	
					166
4	34	22.5	25.1	12.3	
					131
5	35.5	27	34.4	17.7	
				全長	5.78 m
14－1	36	33	61	42	
					127
2	40	36	32.7	13.9	
					181
3	37.5	32.5	73.9	35.3	
					194
4	30	25.5	28	12.2	
					201
5	37	28.5	42.1	25.6	
					180
6	33	30	33	14	
				全長	8.83 m
15－1	34	27	29.2	10.3	
					132
2	32	26	35	19.4	
					89
3	28.5	26	25.8	11.5	
					101
4	36	29.5	27.8	6.8	
					119
5	36.5	32.5	28.7	10.2	
					75
6	31	26.5	30.5	9.1	
					87
7	38.5	35	34.5	7.1	
					144
8	38	28	30.6	11.3	
					97
9	34.5	30.5	26.1	8.5	
					71
10	38.5	35	33.5	10.8	
				全長	9.15 m

第121表　杭列13～15計測表

〔ＳＢ０２〕

桁行2.4ｍ（８尺）、梁行妻1.8ｍ（６尺）の２間×１間の建物である。桁行方位はＳ28°Ｗで、標高195.6ｍラインの南側尾根筋の端部寄りから検出されたもので、尾根筋の上面に建てられている。

柱間寸法は北側桁行Ｐａ～Ｐｃ～Ｐｅで1.2ｍ（4尺）＋1.2ｍ（4尺）で、南側桁行Ｐｂ～Ｐｄ～Ｐｆが1.2ｍ（4尺）＋1.2ｍ（4尺）を測る。梁行妻は東側Ｐａ～Ｐｂで1.8ｍ（6尺）、西側Ｐｅ～Ｐｆでは1.8ｍ（6尺）を測る。

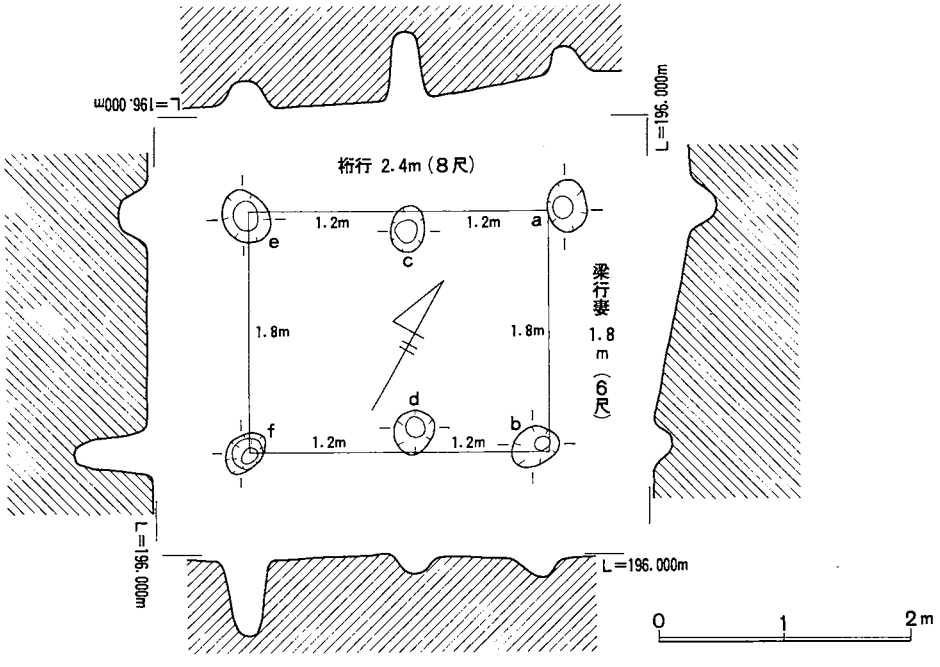
柱穴の大きさは、Ｐｅが最大（43×35cm）、Ｐｃが最小（35×29cm）で、平均値は38.2×31.0cmとなる。深さはＰｆが最深（64cm）、Ｐｄが最浅（13.8cm）で、平均値は31.0cmである。

柱列は西側梁行妻Ｐｅ～Ｐｆを除いて、千鳥の並びとなる。

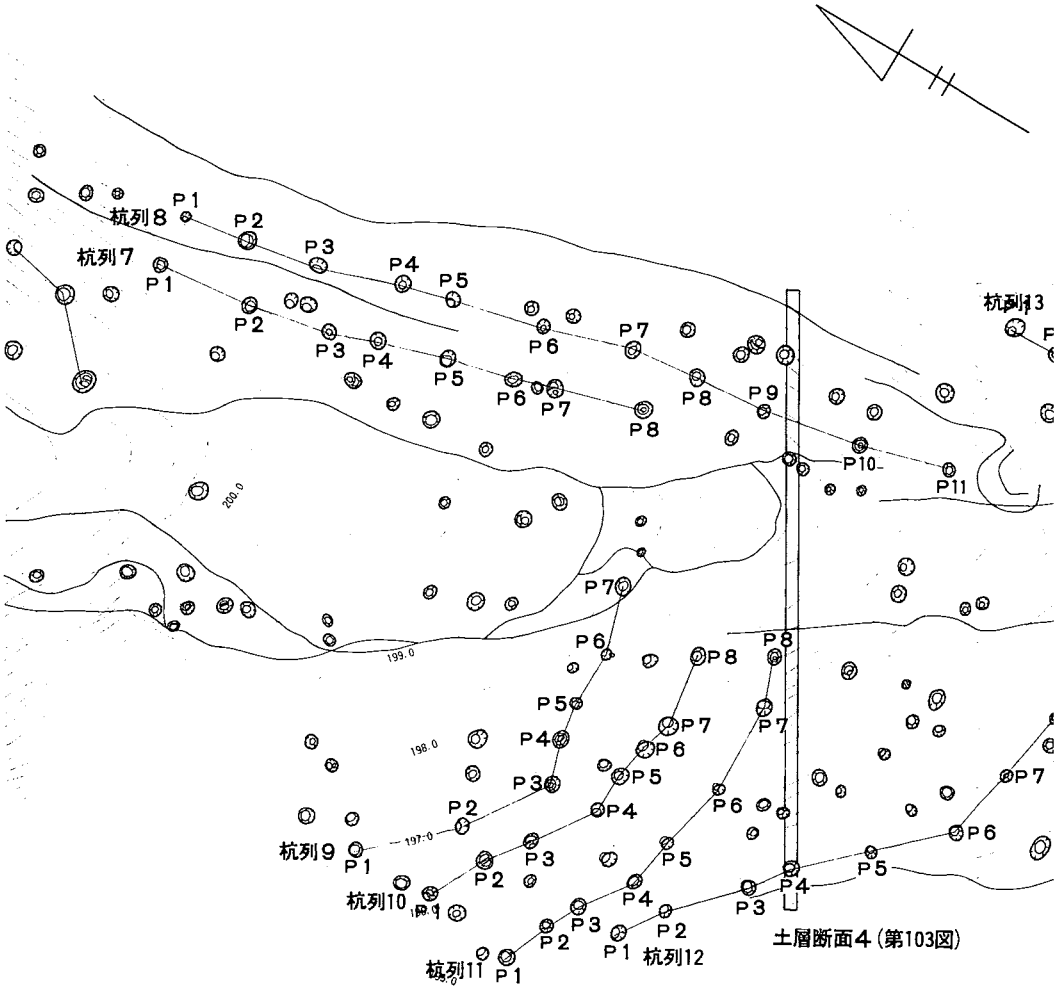
梁行妻の東側と西側の高さを比べた場合、柱穴の検出面は南側Ｐｂ～Ｐｄ～Ｐｆがほぼ水平で、北側Ｐａ～Ｐｃ～Ｐｅについては26cm程、西側の方が高い。一方、桁行の北側と南側を比べた場合、西側Ｐｅ～Ｐｆがほぼ水平で、東側Ｐａ～Ｐｂでは36cm程、南側の方が高い。

Pit No	桁行柱間 (m)	桁行間(m)	Pit No	梁間柱間 (m)	梁間間(m)	Pit No	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
a～c	1.2	2.4	a～b	1.8	1.8	a	39	33	22.2
c～e	1.2					b	38	30	14.4
						c	35	29	53.6
b～d	1.2	2.4	e～f	1.8	1.8	d	36	32	13.8
d～f	1.2					e	43	35	17.9
						f	38	27	64.0

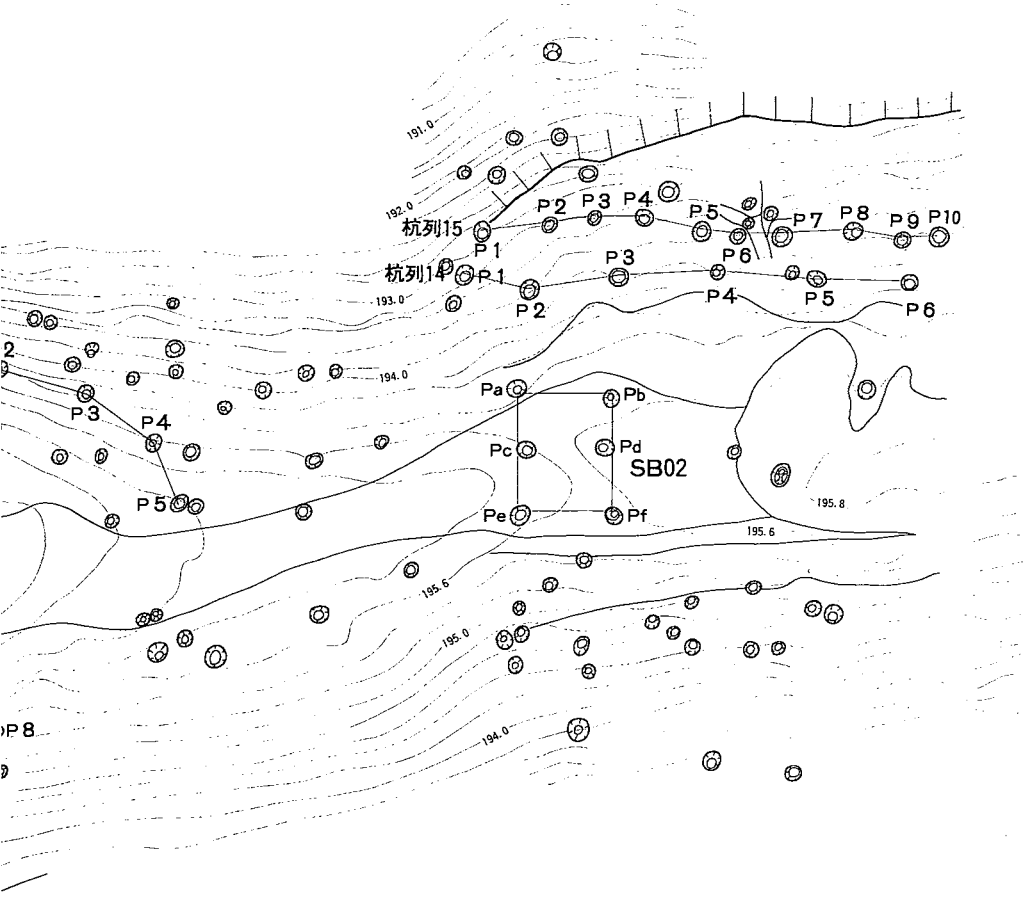
第122表　ＳＢ０２計測表



第111図　ＳＢ０２実測図



第112図　南側尾根遺構


191.0
192.0
193.0
194.0
195.0
195.6
195.8
杭列15
杭列14
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
Pa
Pb
Pc
Pd
Pe
Pf
SB02

実測図

0 5 10 m

第Ⅲ章　出土遺物

1は南側尾根筋の中央部から出土した磁器片（碗の口縁部）で、復元口径23.0cmを測る。体部はやや内弯し、下位よりほぼ均一の厚さ（4～4.5mm）で上位に至る。内器面は丁寧なナデにより滑らかな器面になっているが、外器面の釉下には薄いロクロ回転痕が残る。一方、内器面から外器面にかけては、ややくすんだ感じの青緑灰色の釉が施されているが、外器面は上位のみの施釉に留まり（口唇部より下位へ4～5mm幅）、内器面には粉を吹いた様な褐灰色の不純物が付着する。外器面の施釉部分を除き、光沢のある灰黒色の釉が掛かる。焼成はやや不良で、胎土は褐白色を呈する。

2は南側尾根筋の南端部寄りから出土した磁器（胎土は黄白色）で、体部の下位部分が残存する。器壁はやや肉太で、器厚は下位で6mm、上位で4.5mmを測る。内器面の釉下に薄いロクロ痕が残る。外器面は丁寧なナデが施されている。釉については、内器面に青緑色の釉薬が厚く施されており、外器面には上位に限り白褐色釉（幅6～9mm）が薄く施釉されている。

3は山頂部分から出土した中世雑器の皿である。非常に堅緻な焼成で、胎土は小豆色を呈する。底部は平底と思われ、ロクロ回転による強いナデにより、外器面と体部との境が明白である。内器面には沈線状を呈する太めのロクロ痕（幅5～6mm）が巡っており、器面が波状を呈する。外器面については、非常に細かなロクロ痕が器面を覆う。外底面は残存部分が少ないが、糸切り離しと思われる。外器面の体部には褐灰黒色の釉が掛かる。

4は山頂部分より出土した土師器の口縁部である。残存体部はやや外弯し、器厚は下位より上位にかけて肥厚気味となる（器厚は下位で4.5mm、上位で5mm）。調整は、内器面がナデで、外器面が横ナデである。胎土はやや軟質で、色調は外器面が淡褐色で、内器面が淡橙色を呈する。

5は東側尾根筋の中央部から出土した土師器で、底部と体部の一部が残存し、復元底径7.2cmを測る。体部は50度の角度で直線状に立ち上がり、器厚は底部で7.5mm、底部端で10.1mm、体部で5.5mmを測る。器面はローリングが激しく、調整は不明であるが、外底面には微かに糸切り離し痕が認められる。胎土はやや軟質で、鉱物や砂粒の微細粒が混入する。焼成はやや甘く、色調は淡橙色を呈する。

6は東側尾根の杭跡（杭列4－P8）から出土した土師器で、復元底径6.0cmを測る。体部は立ち上がり部分で、一旦窪んだ後は30度の角度で直線的に立ち上がる。器厚は底部の中央部で7mmを測るが、底部は中途で一旦5.5mmに括れ、その後、漸次、肥厚しながら外底端に至る（外底端の器厚は9.5mm）。体部の器厚は6mm程である。内外器面はナデで、特に外器面は丁寧なナデにより滑らかな器面となっている。さらに、外底面には丁寧なナデ消しの加わった糸切り痕が認められる。胎土は緻密で、微細な鉱物や砂粒が混入する。色調は淡褐色を呈する。

7は山頂部分の建築址（ＳＢ０１）周囲から出土した土師器で、底部と体部の一部が残存する。形態の特徴として、底部は肥厚（器厚１㎝）し、外底端は丸味を帯びる。体部については立ち上がり部分で、一旦窪んだ後は40度の角度で立ち上がり、器厚5.5㎜を測る。調整は内器面がナデで、外器面は横ナデである。外底面はヘラ切りされている。胎土は軟質で、鉱物や砂粒が混入している。焼成はやや甘く、色調は淡橙色を呈する。

8は東側尾根筋の西側寄りから出土した土師器で、底部と体部の一部が残存する。底部の器厚は中央部寄りで７㎜、外底端で1.0㎝を測るが、体部は5.5㎜に留まり、底部と比較してやや薄壁となる。調整については、外器面が丁寧なナデで、内器面がナデである。外底面はヘラ切り離しであるが、器面全体に交差し合う直線状の板目圧痕が数多く残る。胎土は１㎜以下の砂粒を多く含み、密である。焼成は良好で、色調は淡褐色を呈する。

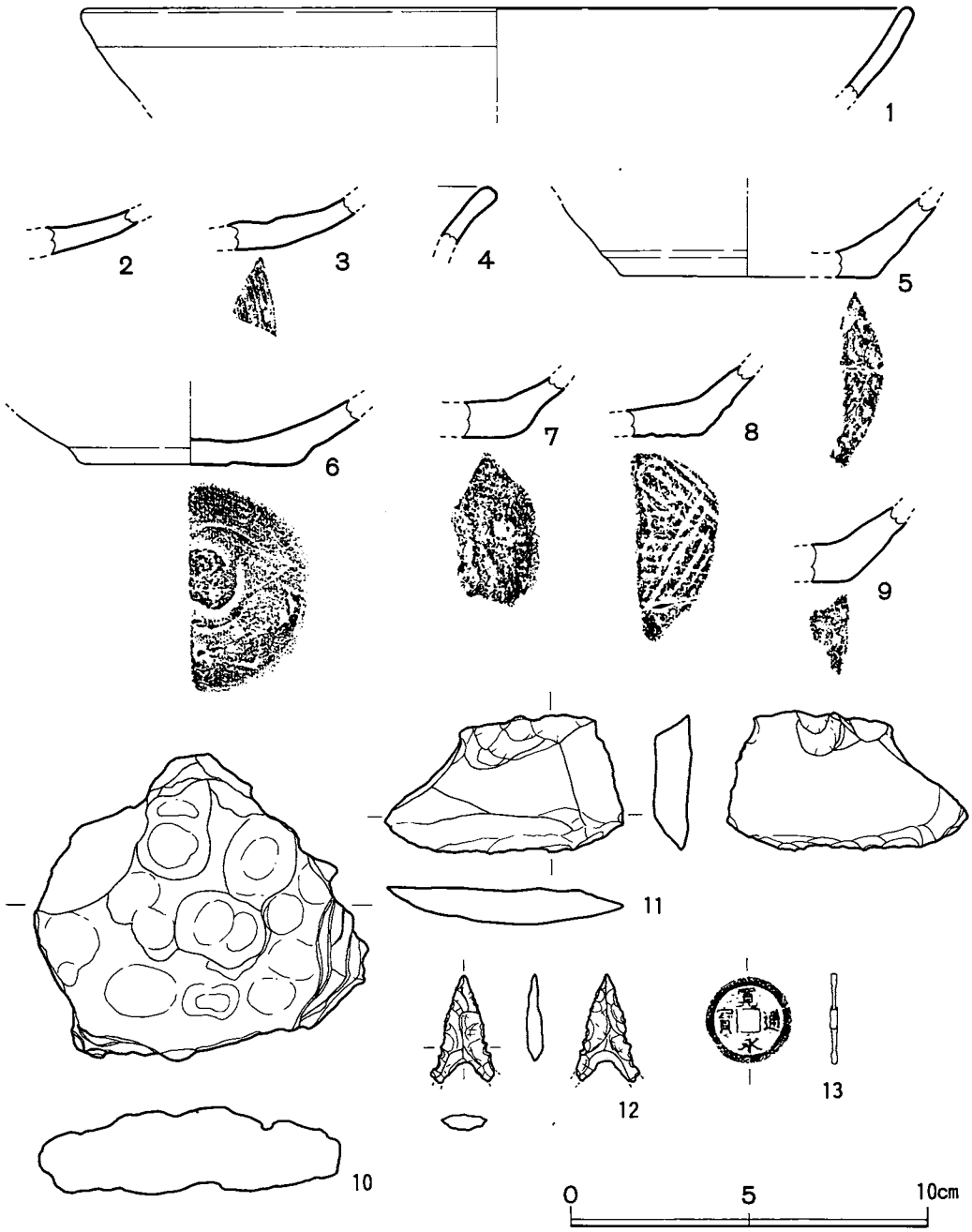
9は東側尾根筋の西側基底部寄りから出土した土師器で、体部と底部の一部が残存する。底部は肉太で、器厚1.05㎝を測り、体部（器厚6.5㎜）は40度の角度で直線的に立ち上がっている。調整はローリングを受けて不明であるが、外底面についてはヘラ切り離しの可能性がある。胎土は軟質で密であり、砂粒が多く混入する。焼成はやや甘く、色調は淡褐色を呈する。

10は山頂部分の建築址（ＳＢ０１）周囲から出土したスラッグである。形状はやや扁平で、最大の長さ9.4㎝、幅8.4㎝、厚さ2.3㎝、重さ178.8ｇを測る。表面は茶褐色で、滑らかなコブ状の隆起が多数見受けられるが、裏面は灰茶色でザラザラした状態を呈する。

11は安山岩製のスクレーパーである。最大の長さ3.8㎝、幅6.7㎝、厚さ1.0㎝、重さ28.83ｇを測る。横長の剥片を素材とし、裏面は細かな剥離を行い、正面はやや太めの剥離調整を行っている。側面は裏面にのみ剥離調整が見られる。

12は硬質安山岩製の石鏃である。最大の長さ3.0㎝、幅1.8㎝、厚さ4.5㎜、重さ1.07ｇを測る。石器の両側面は、脚部のやや上位で絞り込まれ、膨らみを持った先端部が作られている。側面については、剥離面を裏面からも合わせて鋸歯状に作り出している。

13は南側尾根筋の中途より出土した寛永通宝である。直径2.4㎝で、孔の大きさは6.5×6.5㎜、厚さ0.8㎜、重さ2.94ｇを測る。描かれた字体は細字で、裏面は無文である。



第113図　出土遺物実測図

No	器種	形態の特徴	手法・調整・文様	備考	出土箇所
1	磁器	碗の口縁部。 体部はやや内弯し、下位よりほぼ均一の厚さ(4～4.5 ㎜) で上位に至る。 復元口径 23.0㎝	内器面：丁寧なナデ。 外器面：釉下に薄いロクロ回転痕。	やや焼成不良。 内器面に褐灰色の不純物が付着。 〔色調〕 胎土：褐白色 釉色：くすんだ青緑灰色。外器面は口縁部を除き、光沢ある灰黒色。	南側尾根筋 中央部
2	磁器	器壁はやや肉太（下位で6㎜、上位で 4.5㎜）。	内器面：釉下に薄いロクロ痕。 外器面：丁寧なナデ。	〔色調〕 胎土：黄白色 釉色：内器面は青緑色。外器面は上位に白褐色釉が薄く施釉。	南側尾根筋 南端部寄り
3	中世雑器	皿。 底部は平底と思われ、体部との境が明確。	内器面：沈線状を呈する太めのロクロ痕（幅5～6㎜）。 外器面：非常に細かなロクロ痕。 外底面：糸切り離しと思われる。	非常に堅緻な焼成。 内器面に褐灰黒色の釉が点々とする。 〔色調〕 胎土：小豆色	山頂部
4	土師器	体部はやや外弯し、下位より上位にかけて肥厚気味となる。 （器厚は下位で 4.5㎜、上位で5㎜。）	内器面：ナデ。 外器面：横ナデ。	胎土はやや軟質。 〔色調〕 内器面：淡橙色 外器面：淡褐色	山頂部
5	土師器	体部は直線状に立ち上がる。 （器厚は底部で 7.5㎜、底端部 1.1㎝、体部で 5.5㎜。） 復元底径 7.2㎝。	ローリングが激しく調整不明。 外底面：かすかに糸切り離し痕が認められる。	胎土はやや軟質。鉱物や砂粒の微細粒が混入。 〔焼成〕やや甘い。 〔色調〕淡橙色	東側尾根筋 中央部
6	土師器	体部は立ち上がり部分で一旦窪んだ後、直線的に立ち上がる。 底部は中途で一旦 5.5㎜に窪んだ後、肥厚（外底端で 9.5㎜） 復元底径 6.0㎝。	内器面：ナデ。 外器面：丁寧なナデ。 外底面：丁寧なナデ消しの加わった糸切り痕。	胎土は緻密。微細な鉱物や砂粒が混入。 〔色調〕淡褐色	東側尾根筋 杭列4（P 8）
7	土師器	底部は肥厚(1.0㎝）。外底端は丸味を帯びる。 体部は立ち上がり部分で一旦窪んだ後、立ち上がる。	内器面：ナデ。 外器面：横ナデ。 外底面：ヘラ切り。	胎土は軟質。鉱物や砂粒が混入。 〔焼成〕やや甘い 〔色調〕淡橙色	山頂部 (SB01)周囲
8	土師器	底部は端部で肥厚（中央部で7㎜、端部で 1.0㎝）。 体部は底部と比較して薄壁（器厚 5.5㎜）。	内器面：ナデ。 外器面：丁寧な横ナデ。 外底面：ヘラ切り離しで、数多くの板目圧痕が残る。	胎土は密。1㎜以下の砂粒を多く含む。 〔焼成〕良好 〔色調〕淡褐色	東側尾根筋 西側寄り
9	土師器	底部は肉太（1.05㎝）。 体部は直線的に立ち上がる（器厚 6.5㎜）。	ローリングにより調整不明。 外底面：ヘラ切り離しの可能性がある。	胎土は密で、軟質。砂粒を多く含む。 〔焼成〕やや甘い 〔色調〕淡褐色	東側尾根筋 西側基底部
10	スラッグ	長さ 9.4㎝ 幅 8.4㎝ 厚さ 2.3㎝ 重さ 178.8ｇ	――――	表面：茶褐色。コブ状の隆起が多数見受けられる。 裏面：灰茶色。ザラザラしている。	山頂部 (SB01)周囲
11	スクレーパー	長さ 3.8㎝ 幅 6.7㎝ 厚さ 1.0㎝ 重さ 28.83ｇ	正面：やや太めの剥離調整。 裏面：細かな剥離調整。	〔石質〕硬質安山岩	南側尾根筋
12	石鏃	長さ 3.0㎝ 幅 1.8㎝ 厚さ 4.5㎜ 重さ 1.07ｇ	側面は剥離面を裏面からも合わせて鋸歯状に作り出している。	〔石質〕硬質安山岩	東側尾根筋
13	寛永通宝	直径 2.4㎝ 重さ 2.94ｇ 厚さ 0.8㎜ 孔の大きさ 6.5×6.5 ㎜	裏面：無文。	字体は細字。	南側尾根筋

第123表　遺物観察表

第Ⅳ章　ま　と　め

〔1〕検出遺構について

【建築址】　山頂と南側尾根筋の端部寄りから、いずれも小型の建築址が1棟ずつ検出された。山頂のＳＢ０１は、桁行3.4ｍ、梁行妻1.8ｍを測り、３間×２間の建築址である。南縁側に庇の様な柱穴の並びがある。南側尾根筋のＳＢ０２は、さらに小型の建築址で、２間×１間、桁行2.4ｍ、梁行妻1.8ｍに止まる。

建築址については、調査面積に比べて棟数が極めて少ない事と、造りが小型な事があげられる。建築址の性格に付いては、到底、他の城跡で推測される様な倉庫・武器庫・兵舎の類とは考えられず、必然的に別の見方が必要となってくる。

この点に関しては、山頂部分のみに狭い平坦地を有する岩野嶽道祖城跡（鹿本郡植木町）の様な、逆お碗形の山城が参考事例となろう。この形式の山城の場合、同城を昭和47年に訪れた故奥田直栄氏（中世城跡研究家）の言を借りれば、「中世城の建築物には普遍的な倉庫などに加えて、戦（いくさ）の出陣に際し、武将が能を舞った舞台や戦神を祀った社（やしろ）を考える必要がある。城の中には地形的な節約から、むしろ舞台や社の方に重きをおいたケースも考えられる。この城がそうで、城内の平場面積の少なさから、社が山頂に祀られたのではないか」と言う指摘事項が今も調査者の手元に残っている。

山田城跡Ⅲの場合も、山頂部分の建築址は岩野嶽道祖城跡と同様に、社だった可能性もある。

【杭　列】　山頂と二股に分かれた馬の背の様な尾根筋から、地山を切り込む数多くの杭跡が検出された。杭跡はしっかりしたもので、検出は容易であった。現場で15列分を復元した。

杭列の走行については、杭列５が山頂東下と東側尾根筋の間を仕切り、杭列９～11は尾根筋と直交した。しかし、その他の杭列はいずれも尾根筋の主軸方位に沿うものであった。

杭列の性格として、調査時には逆茂木（さかもぎ）を考えたが、杭跡がほぼ直の状態で地山に食い込んでいる事もあり、この点に関しては、今後、検討の余地があろう。さらに建築址が極端に少なく、馬の背の様な地形に何故多くの杭列が必要なのか、その理由も今一つ不確かである。これらの点については今後の研究課題とし、ここでは真実報告に止めたい。

【集　石】　山頂部分（集石１）と山頂直下（集石２：標高205.6～205.3ｍライン）から総数150～160個の集石が検出された。さらに、二重堀の堀切からも底面に密着する形で集石３が検出された。集石１・２に伴う掘り方はなかったが、特に、集石１は長さ1.4ｍ、幅0.9ｍの範囲で密の状態にあり、何らかの意図により小礫が寄せ集められた事が明白であった。集石２の場合は長さ4.5ｍ、幅2.5ｍの範囲にあり、やや疎の分布状況にあったが、これは後世の自然環境の作用で散逸した事が考えられる。集石３は堀底に意図的に据え置かれたものか、偶発的に投げ入れられたものかは不明である。但し、昭和63年度の調査の「高城跡Ⅶ郭」の堀切に

類似例がある。集石の性格としては、文書に言う「投げ石」の類以外に該当するものがない。

【焼土箇所】　山頂の中央部より約７ｍ離れた、標高205.6～205.3ｍラインから層厚３～13cmの焼土が検出された。平面プランは隅丸方形に近く、長径85cm、短径65cmで、掘り方の深さは13cmを測った。全体的に皿状の様な様相を呈したが、これは地山面からの掘り込み数値であり、当時はもっと深かったことが予想される。傾斜地に掘り込まれているため、低い方の東縁には土盛りがなされていた可能性が大きい。焼土には炭化物が混入していたが、分層はできなかった。遺構の検出地点からして「のろし穴」の類と思われる。

〔２〕出土遺物

出土遺物は極端に少なく、かろうじて13点が実測に値した。遺物の内訳は、磁器片２点、中世雑器皿片１点、土師器６点、スラッグ１点で、他にスクレーパー１点、石鏃１点、江戸時代の寛永通宝が１点であった。

城跡の年代を明確に推定できる様な遺物は出土しなかったが、それでも出土した土師器のうち、６の糸切り離しを除いて、７と８は明らかに外底面がヘラ切り離しであり、９についてもその可能性が高い事は、山田城跡Ⅲの年代を考える上で、一応の参考資料となろう。

すなわち、昭和60年度～61年度調査の「山田城跡Ⅰ」は、出土遺物から南北朝時代の城として位置ずけられるものであるが、この城跡より出土した多量の土師器の中に、糸切り離しに混じって、ヘラ切りのものが数点出土している点を注目すべきである。とくにヘラ切りの土師器は３期に分かれる同城跡の文化層の中でも、最下層から出土しており、南北朝時代前半のものと考えられる。一側面からは球磨地方における土師器のヘラ切りから糸切り離しへの過渡期とも考えられ、この事を山田城跡Ⅲ出土の土師器に当てはめる事も可能である。

もちろん、山田城跡Ⅲの場合、出土数が余りにも少なすぎるきらいはあるが、他に年代を推定できる遺物が出土していないだけに、重要視すべき事柄である。

〔３〕城の縄張りについて

(1) 山田城跡Ⅲの特色は、山全体が馬の背の様な地形をなしており、平地部分が極端に狭い事にある。かのような地形からすれば、到底、逃げ込みの城とは考えにくく、別の性格を持った城跡を考えなければならない。この事は前述の岩野嶽道祖城跡タイプの山城解明に繋がるもので、今後、杭列遺構と伴に大きな研究課題である。ここでは、道祖城跡の広域的縄張りを取り上げる事によって、山田城跡Ⅲの解明の糸口にしたい。即ち、道祖城跡は前にも述べた様にお碗を伏せた様な、比高　ｍの小山で、城跡の特色として山頂部分に狭い平坦地がある外は、山頂直下に山頂を核にした同心円状の曲輪が巡る程度の単郭造りの山城である。遺構は山頂周辺に集中し、堀切と竪堀を見るだけである。城跡としての特徴はむしろ南側麓の岩野集落にあり、次郎丸屋敷という小名を残す館比定地が今も現存し、昭和30年代までは集落全体を土塁や濠が巡っていたと言う。遺構の規模は山城箇所を凌ぐものであったとされる。この点からすれば、

村全体が総構えの城で、道祖城は城の一部に過ぎない事になる。この事は前述の建築址の項で取り上げた故奥田氏の「道祖城タイプの山頂には社が建てられていたのではないか」と言う示唆内容に全致する面があり、興味深い。道祖城跡の山頂は未掘であるだけに、山田城跡Ⅲの発掘事例は貴重である。但し、山田城跡Ⅲの場合、東側麓の下城子集落に中世遺構の残存はない。

(2) やはり、現時点でも山田城跡Ⅲは山田城跡Ⅰの一部ではないかと言う考え方残る。それは本文の冒頭でも述べた様に、本体尾根筋とその派生尾根筋に築かれた両城の地形的な関係を無視出来ないからである。しかしながら、3ケ月に及ぶ調査の経験からすれば、西側鞍部に刻まれた二重の堀切は、山田城跡Ⅲを本体尾根筋から切り離すものであるとの認識の方が強い。山田城跡Ⅲの麓直下には「諏訪神社」が建立されており、下城子集落は、城跡と集落を要（かなめ）として展開するからである。さらに、調査区から建築址をはじめとして、のろし穴と考えられる遺構や、集石、杭列が検出された事象も、調査区を独立した山城と見なし得る有力なデータである。しかし、ここでは一方を否とする様な早急な判断を避けて、後世の課題としたい。

〔4〕文献史学との関連について

発掘地点の山田村が歴史に登場するのは鎌倉時代からで、『平河文書』や『相良家文書』によると、球磨郡永吉庄に含まれ、開発領主の平河氏が地頭職にあった事が判る。この頃の地頭館「辻岡」辺りが有力とされるが、これに係る城跡地が不明である。

南北朝時代になると、北朝方の山田城（山田城跡Ⅰ：大王谷箇所）は太宰小弐氏から数次に渡って攻められている。暦応3年(1340)には太宰小弐頼尚の命で、相良孫二郎定長が山田の所領地を警護している。この文献にいう山田城は、昭和60年度から61年度にかけて発掘調査を行った山田城跡Ⅰの事で、考古学所見と文献記載内容が一致する。

戦国時代になると、戦国大名としての相良氏が系譜において多良木相良氏や人吉相良氏の嫡流でなく、文安5年(1448)の内訌によって、下相良氏から権力を簒奪した永富（留）相良氏である事はよく知られた事実である。この永富相良氏の拠点となった15世紀半ば頃の城跡地が山田城跡Ⅱであろうと思われる。そして、戦国時代末期になると山田の地には高城跡が存在した事が考古学的所見から明らかで（高城跡は15世紀末～16世紀前半である）、これまた、永富相良氏との関連性が伺われる。

〔5〕結　語

山田城跡Ⅲは、一応の目安として南北朝時代の前半頃に位置ずけられる山城であるが、城の性格については、独立した山城と見る向きと、山田城跡Ⅰの一部に含める見方が生じて結論に至っていない。但し、発掘調査による所見を含めた総合的な判断では、前者の可能性が高い。なお、この場合、時期的には多少矛盾するものの、平河氏の持ち城の可能性もでてこよう。

付記〔1〕 郡村誌と郡村図・球磨古城絵図

郡村誌と郡村図

明治初年の国家的な大編纂事業の一つに地誌の編集がある。明治5年4月陸軍省が各府県に対し郡村誌と郡村図の作成提出を令じ、次いで同年9月太政官が同様なことを下命して、陸軍省の計画は中止され、明治7年、太政官の地誌編集が内務省へ移され、16年までの間に全国的に地誌編集の事業が進められ、作製されたものは内務省へ送付され、いま県立図書館にこの稿本または中清書本が残されている。記事は郡誌は一郡の総轄であるから古城の記事はない。村誌は一村毎に彊城・幅員・里程・社寺など30数項目に亘って記述し、その古蹟の項中に古城址が含まれている。古城の記事は多くは国誌か古城考によっているが、それに現況を附記し、また実地踏査によって城址の境界、大きさ高さなどを実測したものもあり、古城址文献として重要である。各郡村誌は、玉名郡村誌が全文活字化されているほか、熊本区、飽田、球磨、山鹿、宇土の各郡村誌が抄本として活字化されているが、抄は古城など省かれている。また求麻郡は全文印刷されているが、これにはもともと古城址は記されていない。

参考文献：熊本県文化財調査報告第30集『熊本県の中世城跡』熊本県教育委員会1978年

球磨古城図

（1）人吉城絵図と渡利城以下郡内各地の古城図29葉（県立図書館所蔵）である。人吉城絵図は77×88cmの広幅の用紙に描かれ、熊本城絵図同様平面図式の城絵図である。渡城以下は28×41cmの用紙に、鳥瞰図風に、あるいは写生画風に描いた真景図で、古城址の当時の景観を見ることができる。絵図を納めた袋に「球磨郡村図附属図」と記されているので、古城図の作成は郡村誌同様、明治8年から15年の間である。

参考文献：熊本県文化財調査報告第30集『熊本県の中世城跡』熊本県教育委員会1978年

（2）人吉城絵図を除く渡城以下、29葉の古城図は、鳥瞰図風に描いたものが8葉（岩城・深田古城・深田平城・須恵古城・多良木里城・鍋城・内城・湯前城）で、残り21葉が写生画風に描かれているが、城北地方などの各村誌に含まれる古城図に比べると、城跡の境界や大きさ、高さなどの書き込みがなく、全般的に城図としての資料的価値は低い。

しかしながら球磨郡古城図は29葉全部に山城や丘城を描くために周辺域の河川、道路、及び麓集落、水田地帯などをやや誇張して一連のセット関係として捕らえている点で評価できる。これらのものは中世城跡を考える時に不可欠な要素である。この事により作者は城跡を漫然と描いたのではなく、ある程度、中世城跡のことを理解して作図したものと思われる。

（3）以下、29葉の古城図の中で、特筆すべきものを列記する。

〔渡　城〕城跡東側の麓集落と、南側の球磨川の位置関係が良く描かれている。

〔**原田城**〕応永24年(1417)に創立された石水寺（曹洞宗）が丁寧に描かれている。寺は館の可能性がある。

〔**大畑城**〕球磨郡から日向（宮崎県)、薩摩（鹿児島）に入る交通路の拠点に築かれた城である。相良藩は、ここに多くの武士を駐在させ、農民を郷士として留めている。古城図には麓集落が丁寧に描かれ、山越道の記入もある。

〔**岩　城**〕『高野山文書』から平安時代の末期に実在した最古の城として知られる。城跡は球磨川沿岸にあって、二股に分かれたU字形状の丘に築かれている。城跡の中央部は迫地で、袋小路的な地形となっており、城主、及びその一族の居住域とみなされる。さらに、城跡の周辺域には馬場と言う地名の麓集落がある。古城図には、これらの事が鳥瞰図として見事に描かれている。

〔**上村城**〕この城は麓集落に特色があり、城跡麓の「大手」からの道沿いに今も整然とした屋敷の地割りが残っている点で、近年、非常に注目されている遺跡である。古城図はこの事をずばり表現しており、29葉の古城図の中では最高の出来になっている。

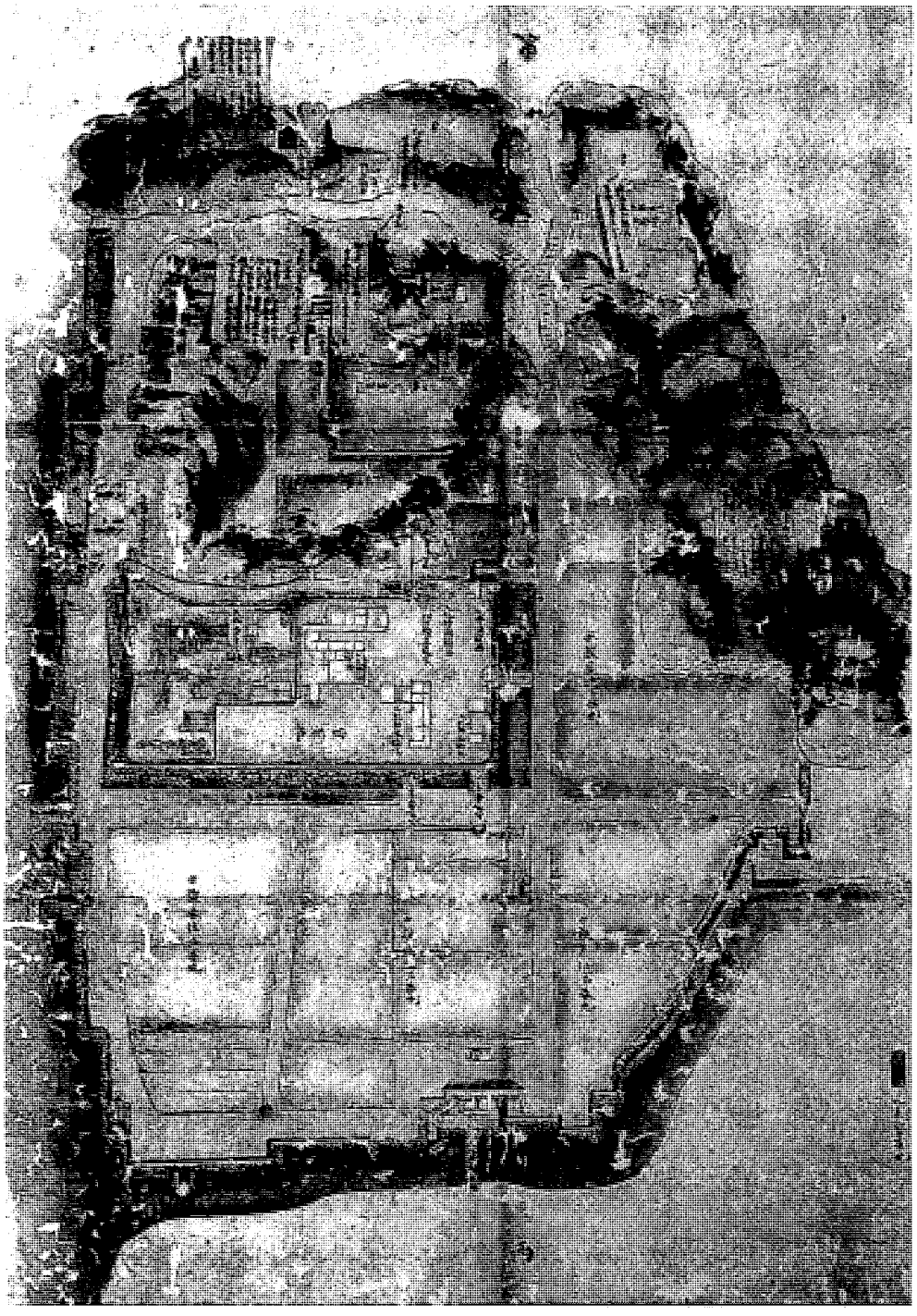
〔**鍋城・内城**〕上多良木氏の本城（鍋城）と支城（内城）の古城図である。8葉の鳥瞰図の中では、例外的に縄張り図が描かれている点で注目される。特に、鍋城図には城図に本丸や二の丸などの書き込みもあり、さらには現存しない石垣線も描かれており、貴重な資料となっている。この2葉の古城図には、作図にあたって作者の特別な思い入れがあった様である。

〔**湯前城**〕「加古井」と称される麓集落が極めて　細に描かれており、非常に広い範囲を極めて高い位置から鳥瞰している点で注目される。

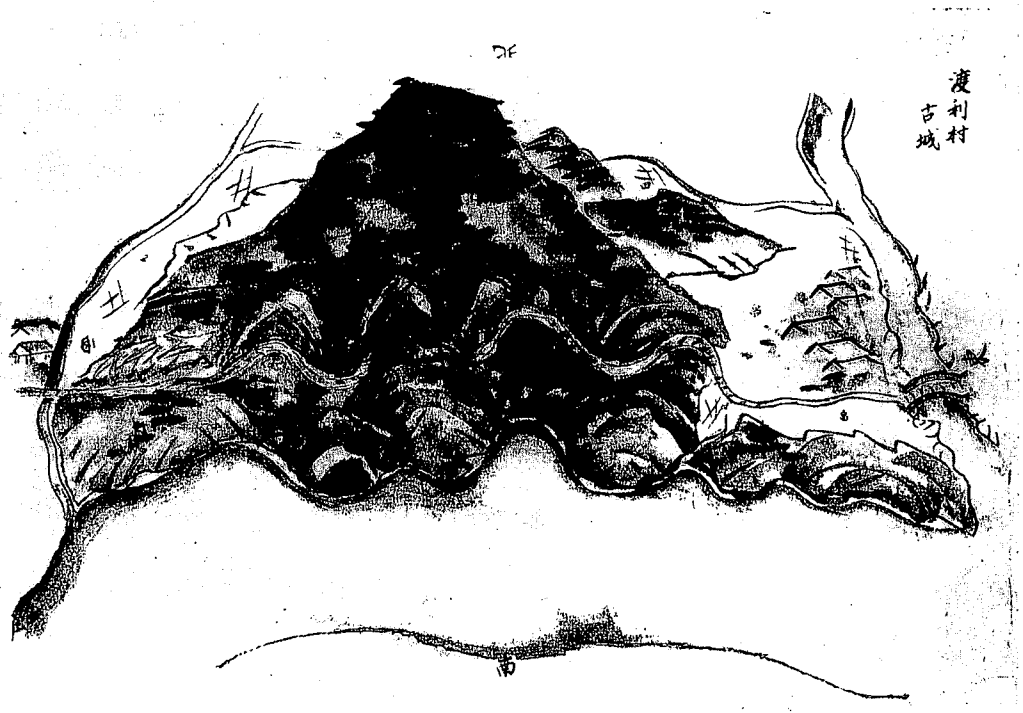
〔**小多田城**〕城跡と南側麓集落の位置関係をよく描いている。

絵　　図	付録図面 No	絵　　図	付録図面 No
第 114図　人吉城下絵図	18	第 129図　深田村平城址図	43
第 115図　渡利村古城址図	2	第 130図　深田村高山城址図	45
第 116図　原田村古城址図	5	第 131図　免田村平城址図	47
第 117図　大村平家城址図	14	第 132図　上村古城址図	49
第 118図　七地村赤池城址図	19	第 133図　須恵村古城址図	53
第 119図　大畑村古城址図	20	第 134図　岡本村古城址図	54
第 120図　柳瀬村古城址図	28	第 135図　宮原村古城址図	55
第 121図　四浦村平家城址図	33	第 136図　多良木村里城址図	59
第 122図　四浦村古城址図	34	第 137図　黒肥地村鍋城址図	60
第 123図　西村古城址図	36	第 138図　黒肥地村内城址図	61
第 124図　西村古城址図	38	第 139図　奥野村古城址図	65
第 125図　一武村小槇城址図	39	第 140図　久米村古城址図	67
第 126図　木上村平家城址図	40	第 141図　湯前村古城址図	71
第 127図　木上村岩城址図	41	第 142図　岩野村小多田城址図	76
第 128図　深田村古城址図	42	第 143図　湯山村古城址図	77

第124表　球磨古城絵図一覧表



第114図　人吉城下絵図

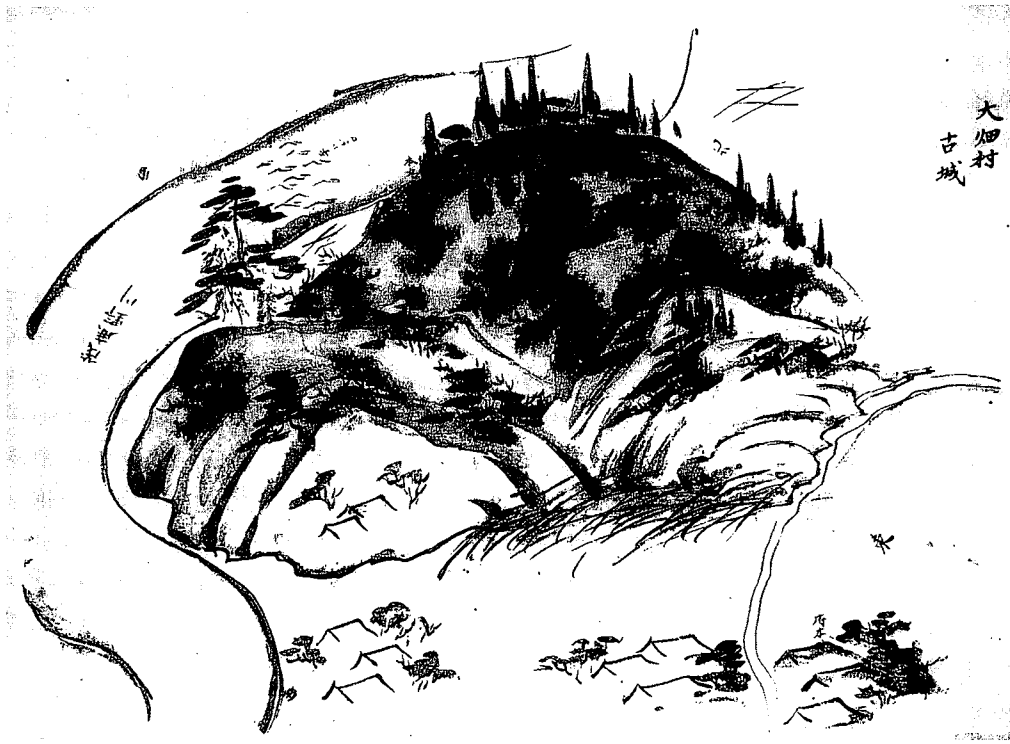


第115図　渡利村古城址図

第116図　原田村古城址図

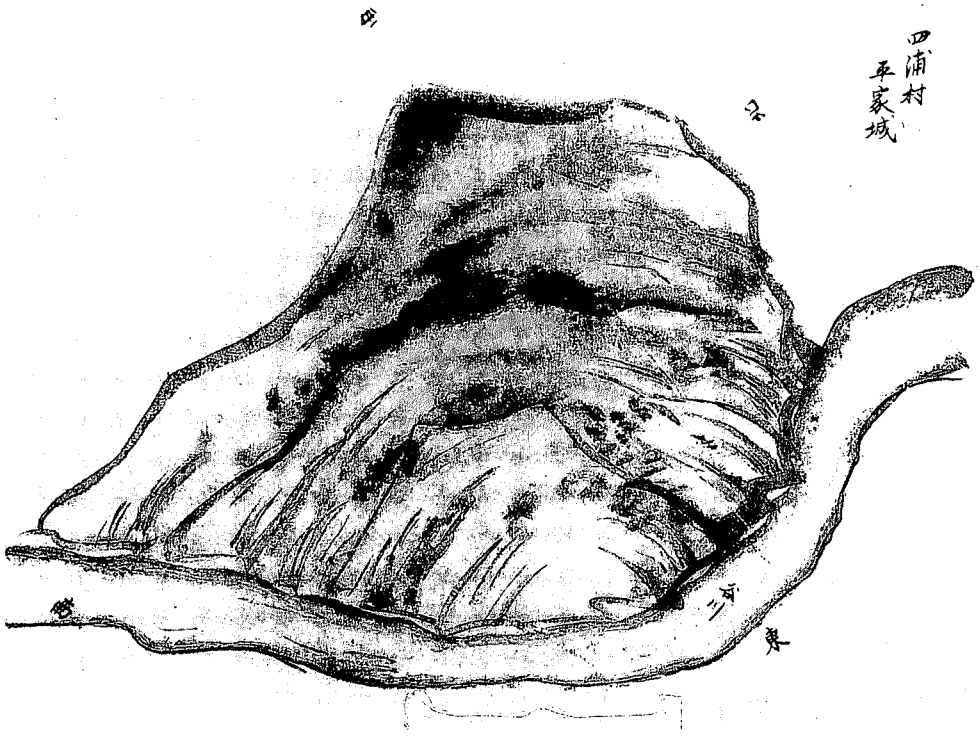
第117図　大村平家城址図

第118図　七地村赤池城址図

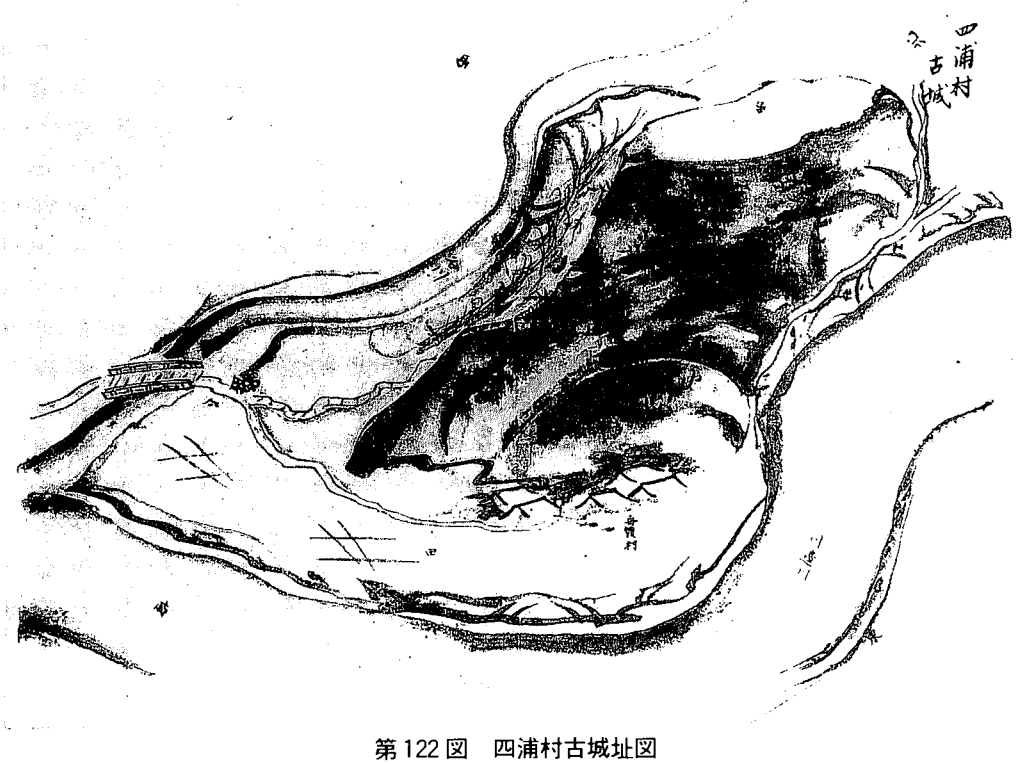


第119図　大畑村古城址図

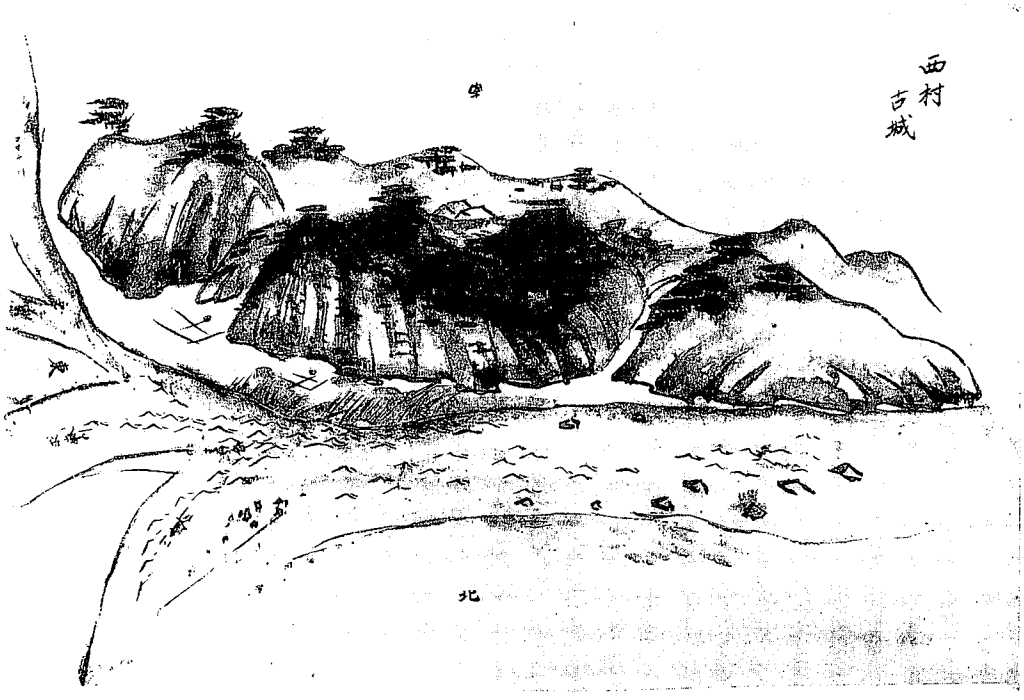
第120図　柳瀬村古城址図



第121図　四浦村平家城址図



第122図　四浦村古城址図

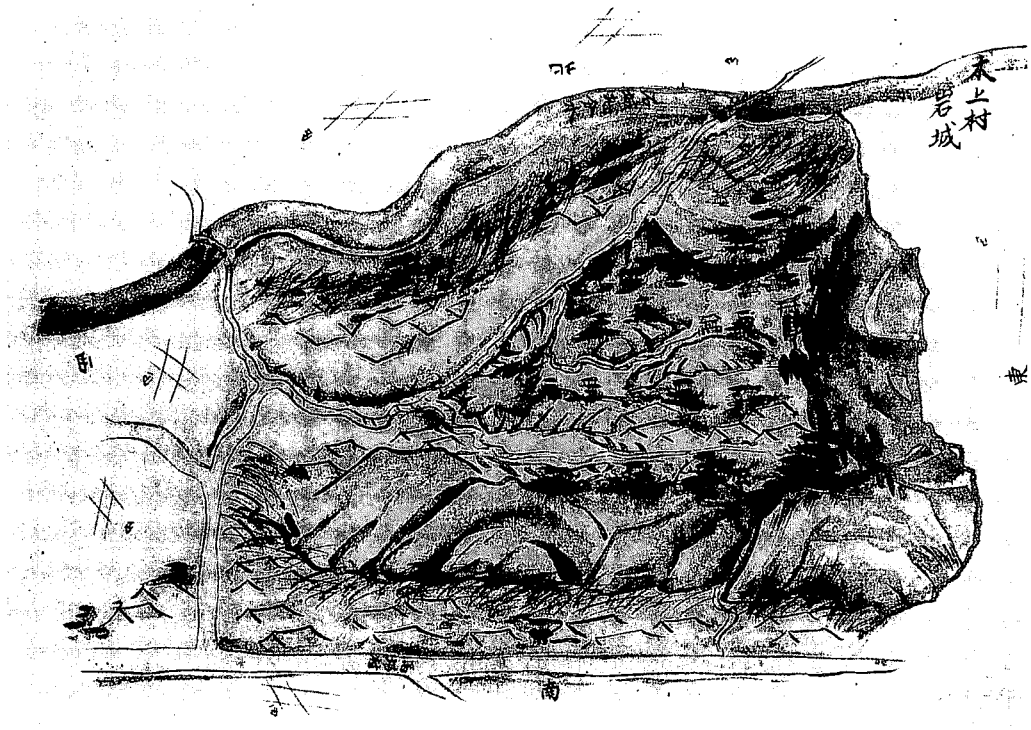


第 123 図　西村古城址図（高城）

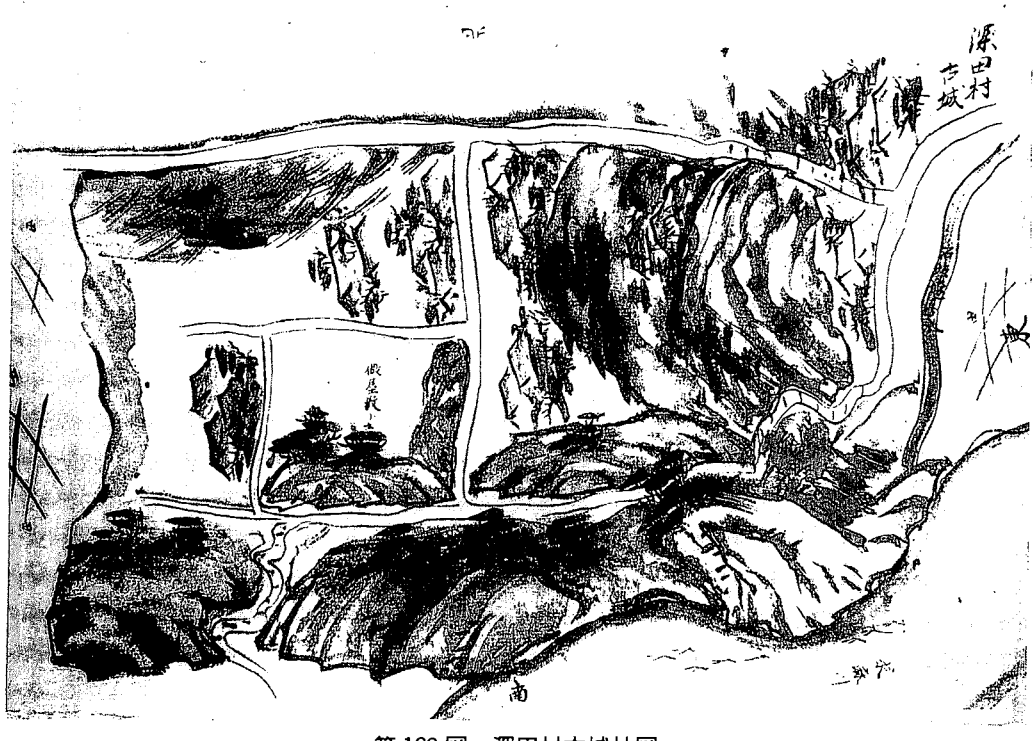
第 124 図　西村古城址図（東方城）

第125図　一武村小槙城址図

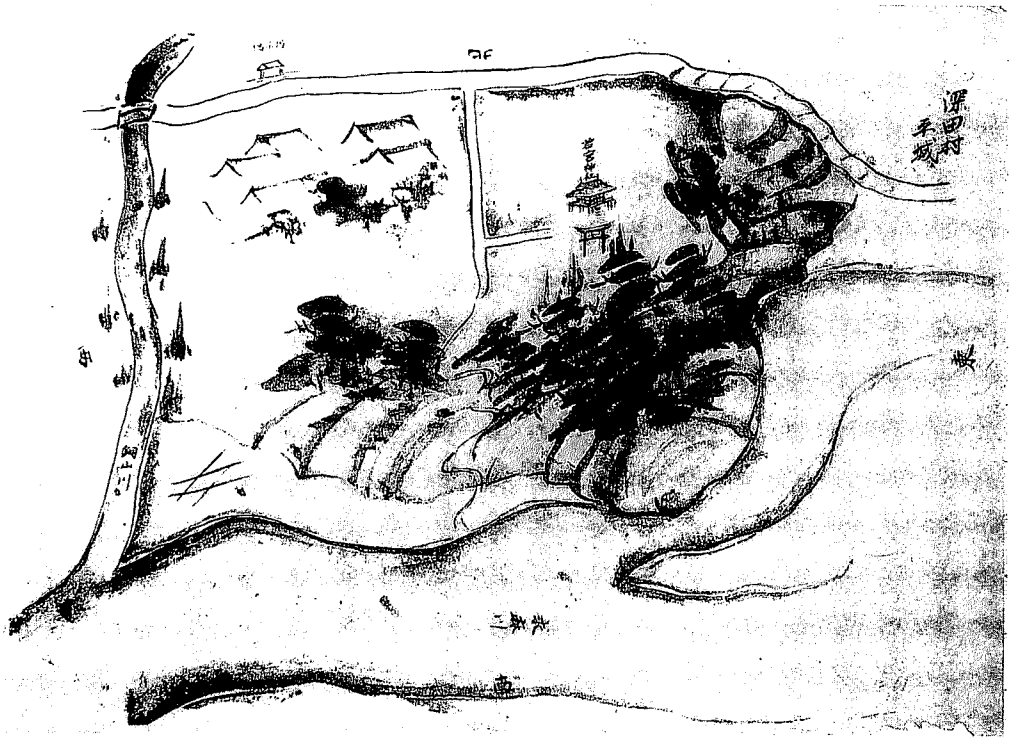
第126図　木上村平家城址図



第127図　木上村岩城址図



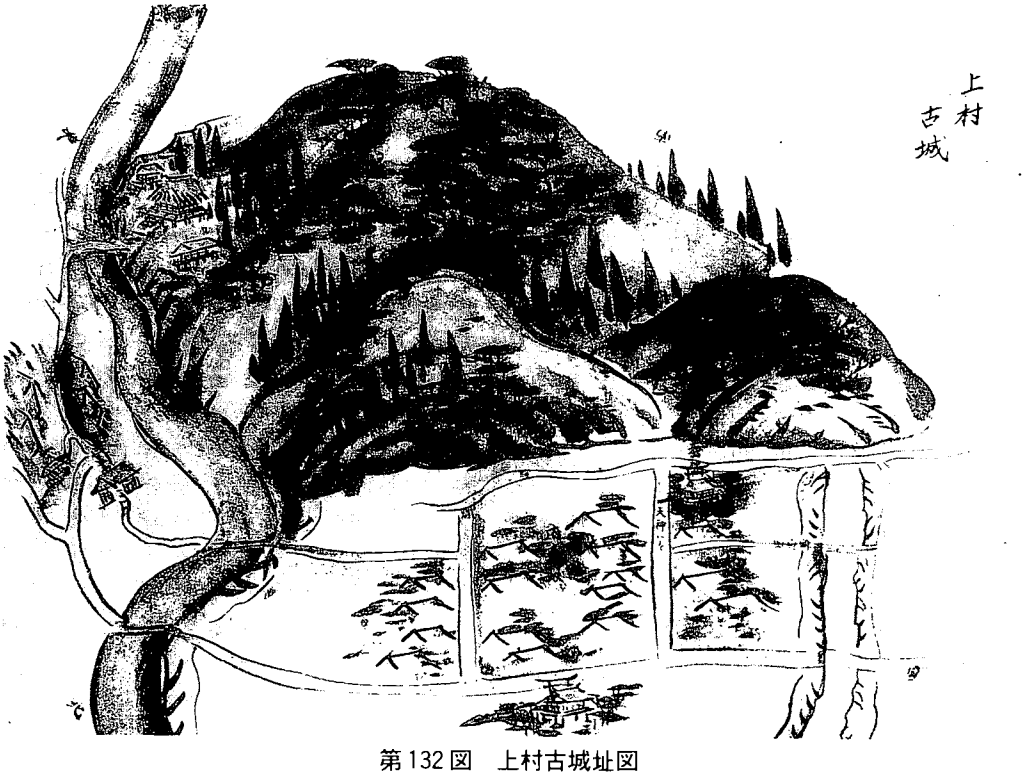
第128図　深田村古城址図



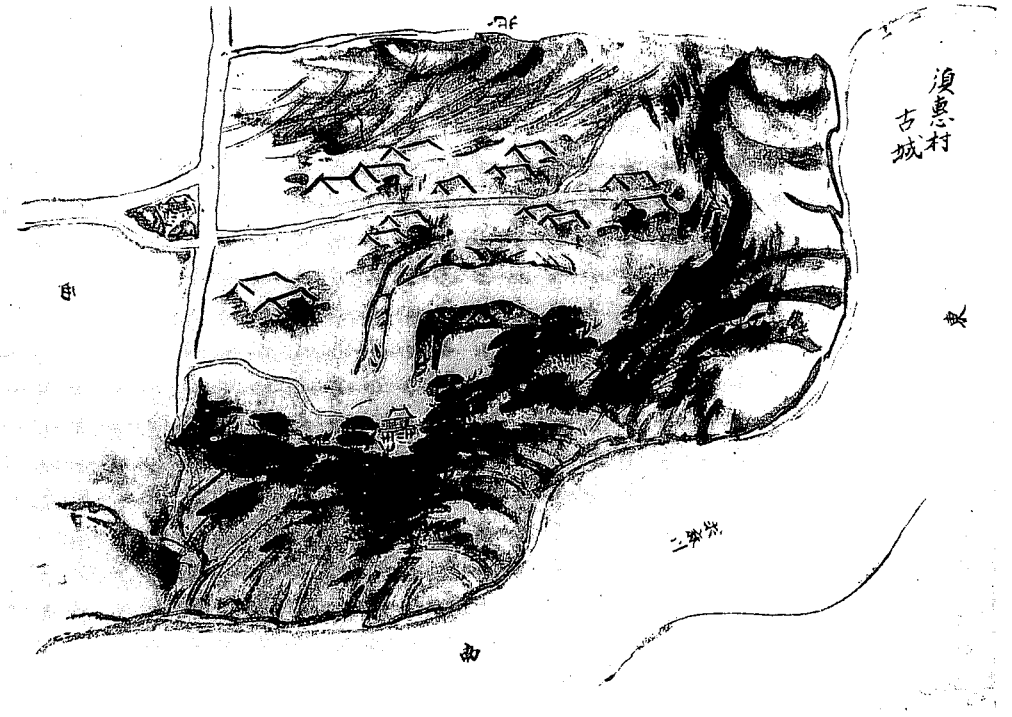
第129図　深田村平城址図

第130図　深田村高山城址図

第131図　免田村平城址図

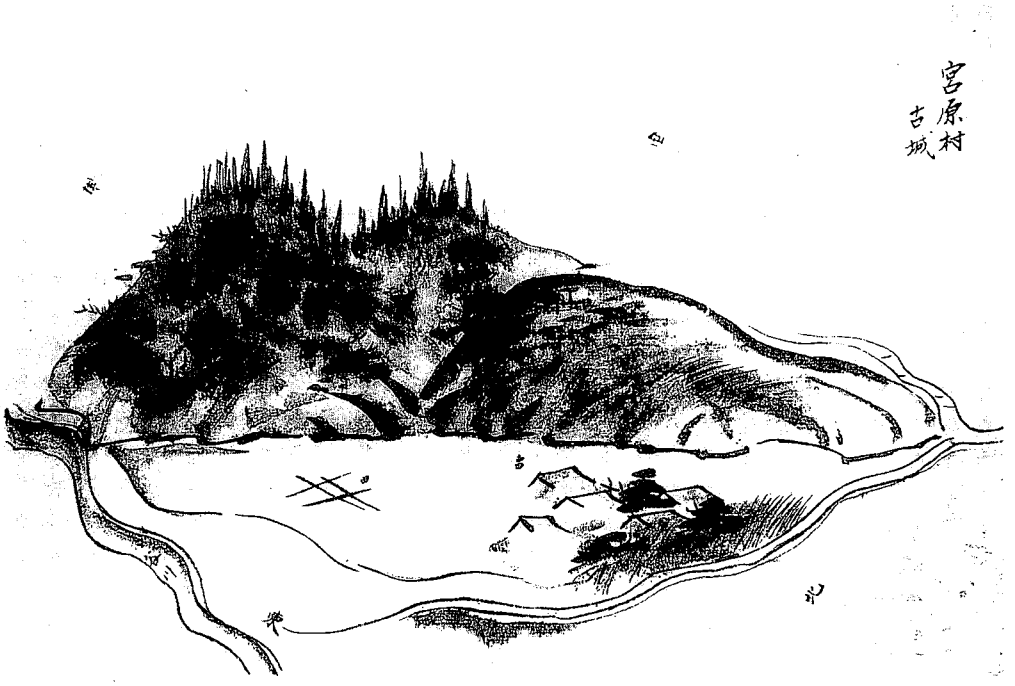


第132図　上村古城址図

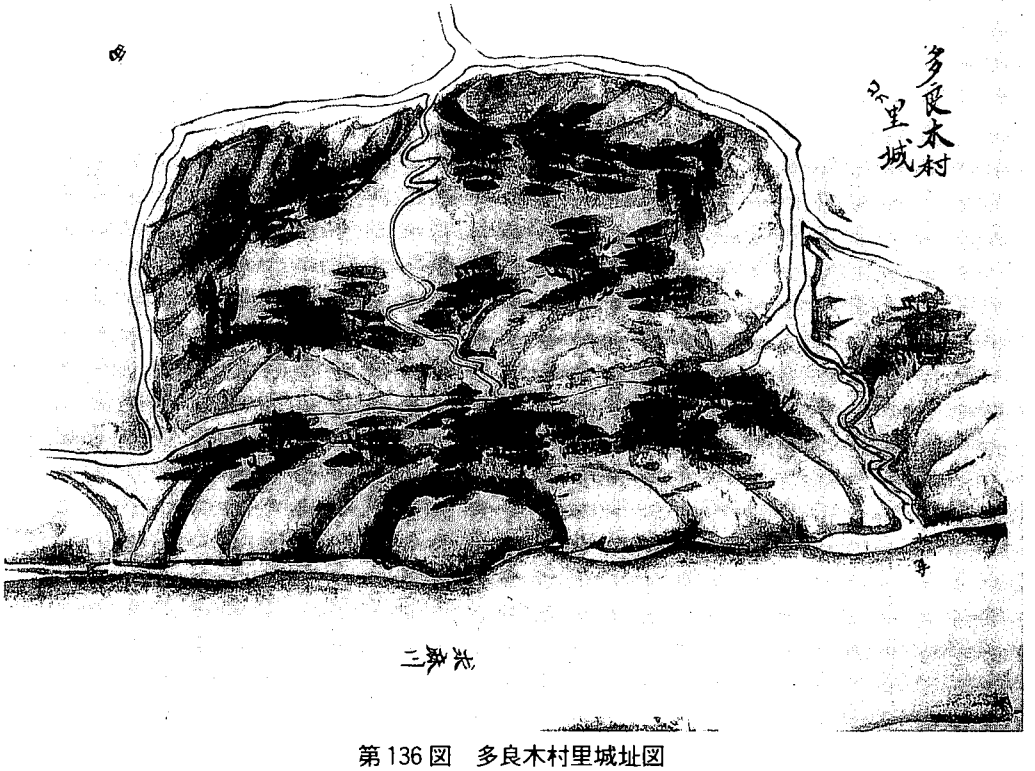


第133図　須恵村古城址図

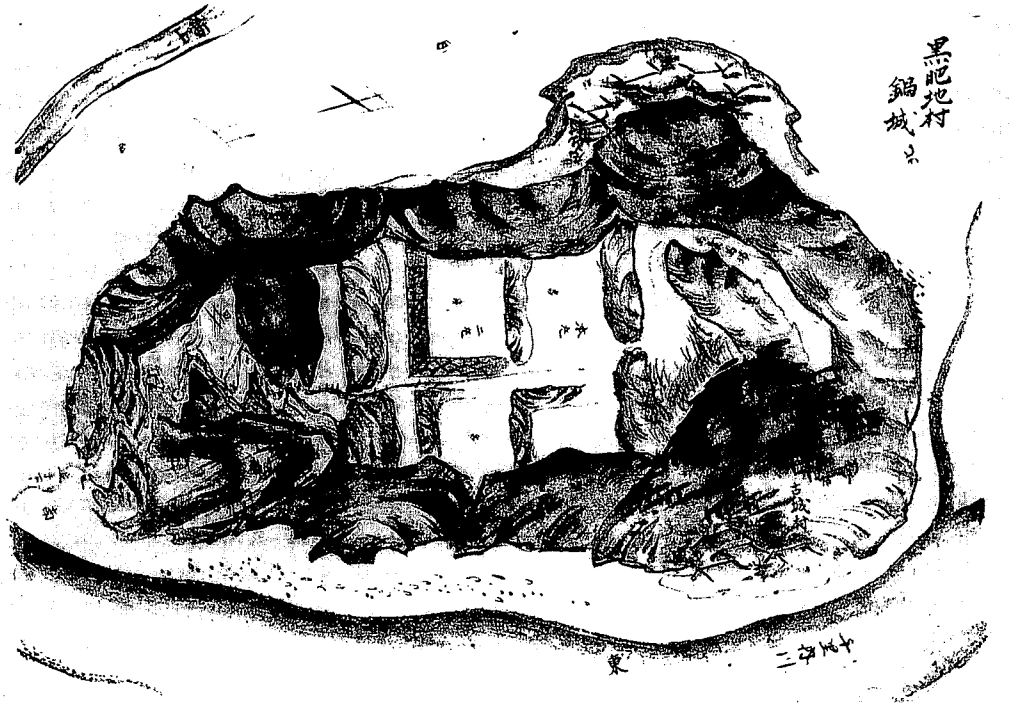
第134図　岡本村古城址図



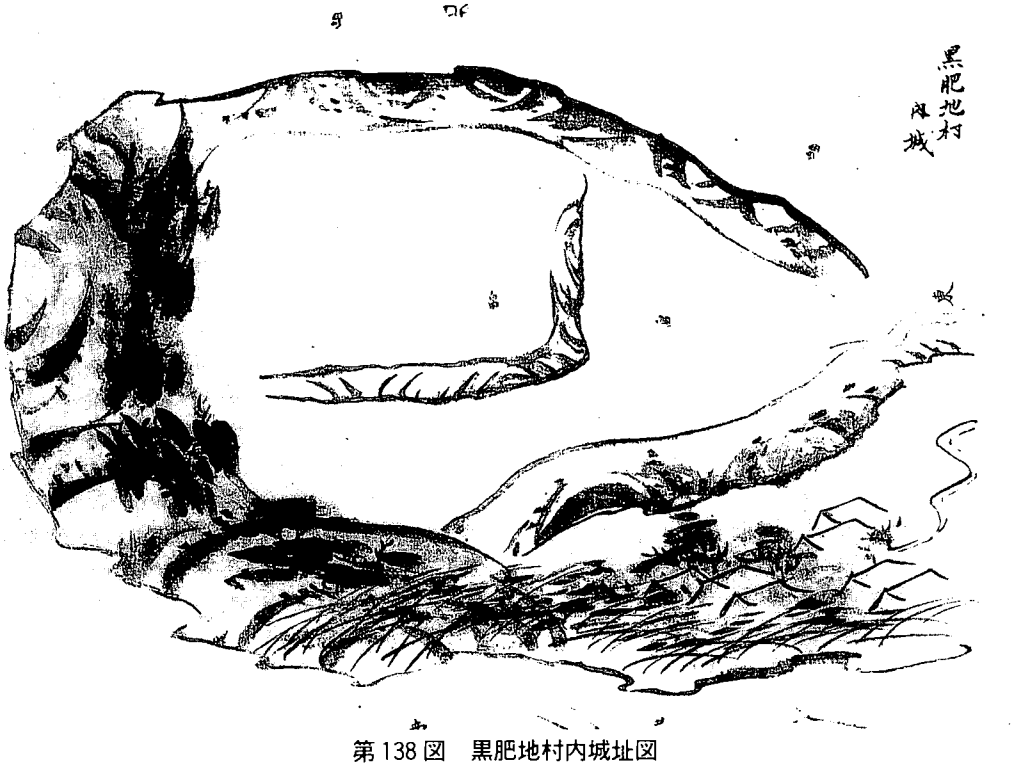
第135図　宮原村古城址図



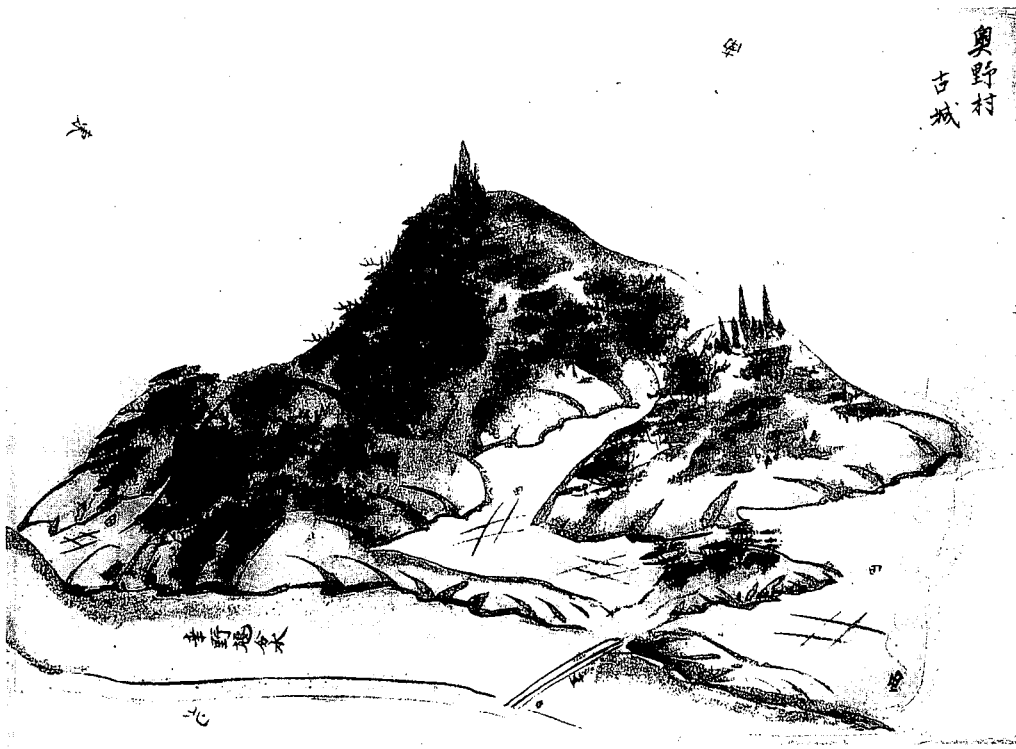
第136図　多良木村里城址図



第137図　黒肥地村鍋城址図

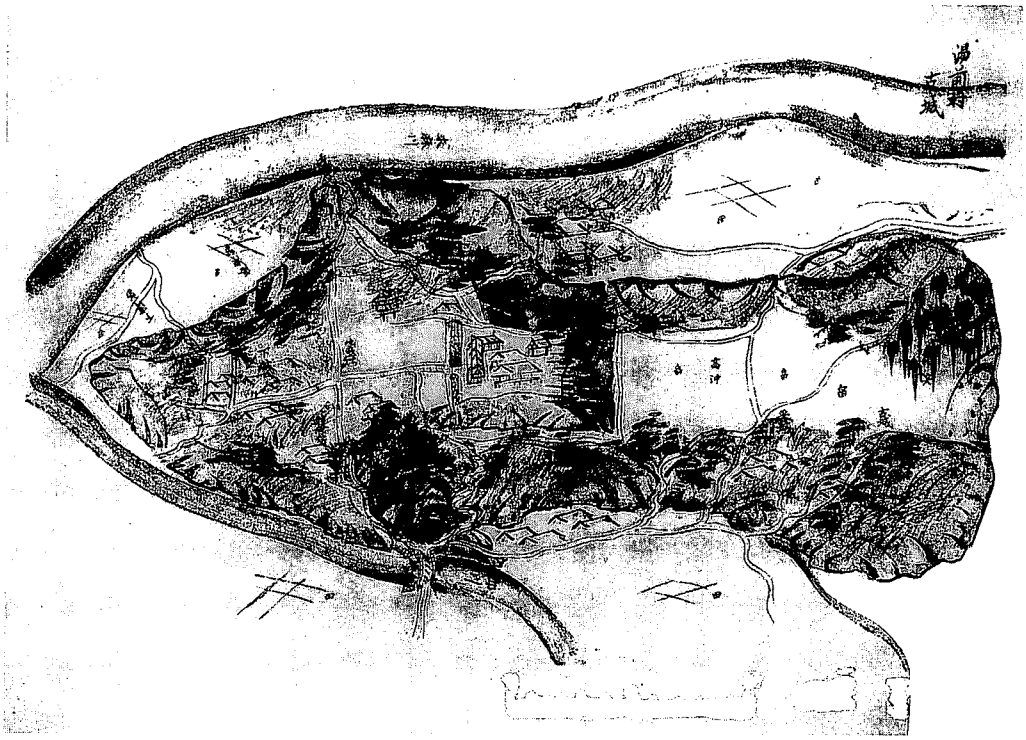


第138図　黒肥地村内城址図

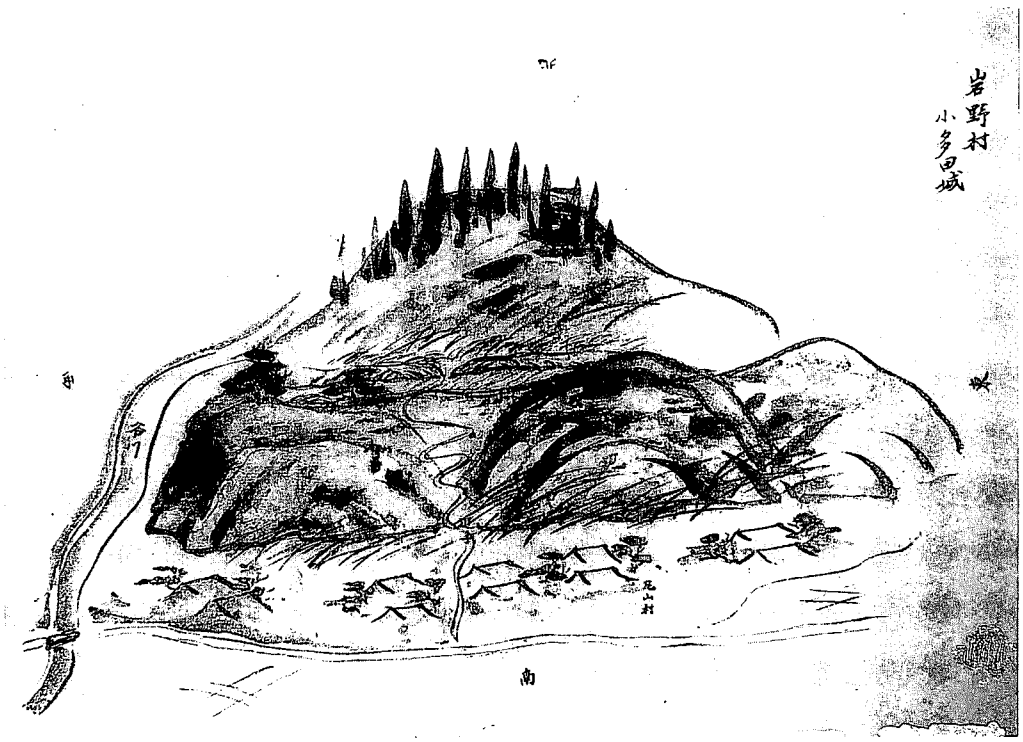


第139図　奥野村古城址図

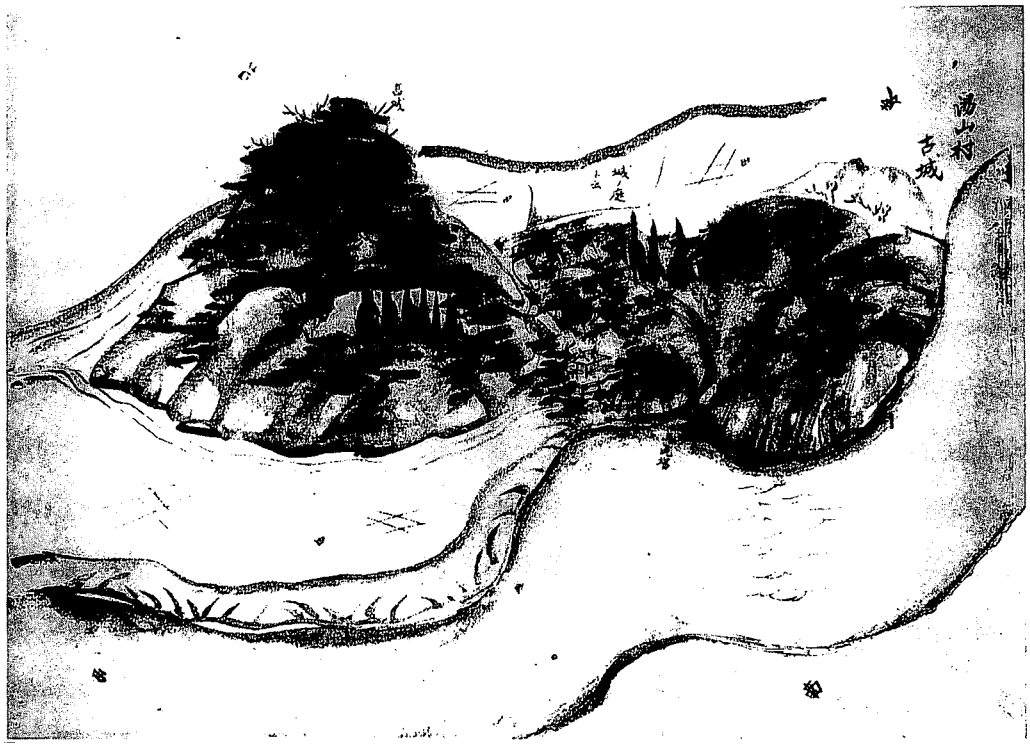
第140図　久米村古城址図



第141図　湯前村古城址図



第142図　岩野村小多田城址図



第143図　湯山村古城址図

付記〔2〕　山田城跡周辺の社寺堂宇について

注）下記の文章は、熊本県文化財調査報告第102集『山田城跡』（231頁～234頁）「第Ⅴ章・第2節　山田城跡周辺の社寺堂宇について」の再収録である。

1．高寺院毘沙門堂（字・寺山）

高寺院は真言宗に属し、寺下集落にある。毘沙門堂は464段の石段を登りつめた所にあるが、昭和59年に毘沙門天立像は山を降りて、今日、院内の新たな毘沙門堂に安置されている。

『南藤蔓綿録』に、「応永十五戊子山田毘沙門堂御再興、八月九日入仏、伝記ニ曰此本尊ハ平朝臣小松内府重盛卿御菩提也、治承年中草創ノ由山田金剛山高寺院毘沙門天是也」とある。

毘沙門天立像二躰のうち、一躰は江戸時代の初期に原田真福寺から移されたものであるが。二躰とも国の重要文化財で、平安時代後期の作とされている。また同寺所蔵の木造勢至菩薩立像（県指定文化財）は、石原集落の平山ミエ子氏宅に伝えられていたもので、これも江戸時代に他から持ち込まれたものと言われている。胎内に墨書で「奉造立大勢至菩薩御像　承久二年庚辰六月十二日庚午仏師源覚　右為惟宗聿高尊往生極楽也」と記されている。

2．諏訪大明神　山田石原（字下城子）

石原集落の西側、山付きにあり、広義的には山田城跡の西方麓にあたる。

『麻郡神社私考』によれば「文明六年甲午草創、或ハ曰ク再興ト。弘治二年丙辰修復、文禄二年癸巳拝殿造営」とある。

祭りは旧暦の12月10日で、“刀物の神様”として信仰を集めている。

3．天満天神　山田三園神山（字味園）

山江村総合運動公園の東側高台の一隅に神社がある。

『麻郡神社私考』によれば「草創年紀未考・永享中再興」とある。祭りは旧暦の３月４日で、山田地区において年初めの祭りと言う意味で「山田祭り一番」と称されている。

4．山王権現　山田領左右村（字板野）

東浦川流域の板野集落にあったと伝えられているが、今日、所在地については不明である。

『麻郡神社私考』によれば、「鎮座年紀未考、長禄二年戊寅再興、厥初別當有リ長圓寺ト号ス」とある。なお、同書にいう長圓寺跡地の比定地には、五輪塔群が残っている。但し五輪塔に銘文等は見出せない。

5．大王神社　山田領里（字味園）

味園集落内にあり、後方に山田城跡（大王谷）の山がある。

大王神社は永吉庄地頭平河氏を祀る霊社の一つで、『南藤蔓綿録』によれば「(平河右衛門義高）二男山田次郎藤高、今ノ山田大王是也」とあり、『麻郡神社私考』には「平河右衛門三郎義高ノ二男次郎藤高之霊社也、社家傳ニ云ク永富左近将監長滋建立蒼時ハ山田本社今宮ト同檀ニ崇ム、應永十一年甲申始テ別檀ヲ築ク同二月廿三日新殿遷座」と記されている。　この記述は、応永11年（1404）に、大王神社が平河氏館比定地の味園より現在地へ移ったことを伝えている。

さらに「天文十五年丙午相良弾正忠長兄修造、天正八年庚辰藤原義陽公同亀千代君御息裁延命并庄内泰平三郡和合ノ祈願ト藤原長智同長豊再興」という記述がある。

神社の神殿裏には、「正平廿三年諸衆一結衆」と刻んだ南北朝時代の自然石が建っている。今日、この正平23年（1368）銘の石碑と大王神社とは密接な関係にあるとされ、『麻郡神社私考』にいう応永11年の大王神社遷座説はまったく無視された格好となっている。

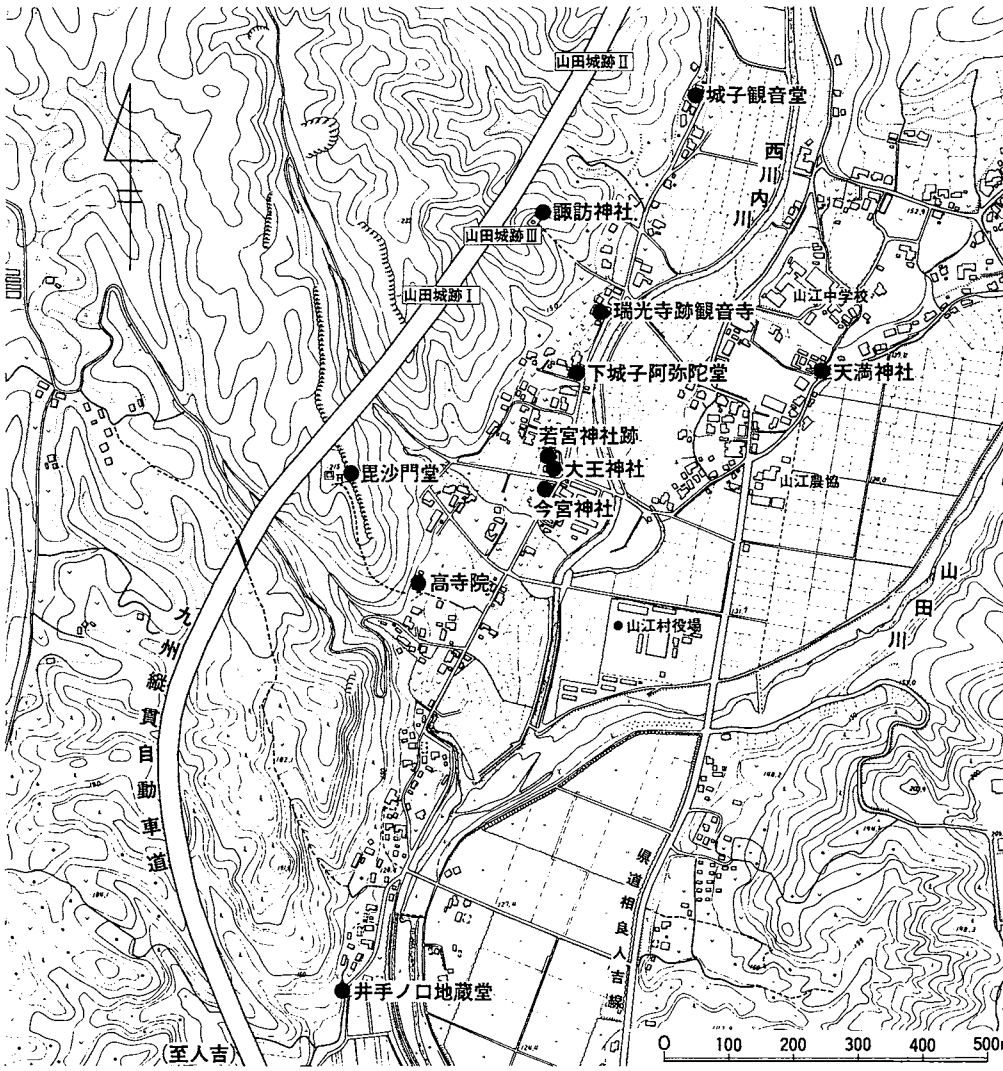
祭りは旧暦10月４日におこなわれ、山田の氏神として崇められている。

6．今宮神社跡　山田里大王東（字味園）

従来は大王神社の東脇にあったが、今日、大王神社に合祀されている。

『麻郡神社私考』によれば「草創年紀未考、延文二年再興、天文中修造古老ノ傳ニ云ク昔日山田地主平河家以前、霊社也」とある。

この記述は、今宮神社が平河家以前の霊社で南北朝時代の延文二年（1357）に再興されてい



第144図　山田城跡周辺の社寺堂宇分布図

る事がわかる。この記述を正しいとするならば、前述の正平22年銘の自然石は神社・再興の11年後に建立された事になり、応年11年に現在地へ移ってきたと伝えられる大王神社とは無関係となる。むしろ今宮神社との関連を考える必要があろう。

7．若宮神社跡　山田里　今宮神社同宮（字味園）

神社は、大王神社の左側（岡田　要氏宅）にあったが、現在は大王神社に合祀されている。

『麻郡神社私考』によれば「社家ノ傳ニ云ク山田地頭之祖也、一二曰ク藤原長續（相良左近将監）公之霊社ニ説本拠不明、厥初ハ大王社南三町許ニ在社壇廃後此所ニ迂座」とある。

この記述から、若宮神社は、古くは南三町の場所にあった事が窺える。この場合、現在の山江村中央公民館辺りが比定地と考えられる。この様に神社の多くが（辻・味園の微高地）地頭館の比定地とその周辺に集中し、「山田地主または地頭」の霊社と伝えられている点は注目すべきである。

8．大王神社　小山田（字下城子）

小山田集落の公民館敷地が神社跡である。『麻郡神社私考』に「里大王社同體、應永年中地頭秋山常陸建立」という記述がある。祭りは旧暦11月中卯日におこなわれている。

9．井手口地蔵堂（字井手口）

西川内川と東浦川が合流して、山田川となる下流右岸に、井手口集落がある。集落の下手山中に小さな地蔵堂があり、『山田村地誌』によれば「井手之口　地蔵堂　堂宇一坪　堂敷六歩」と記されている。境内に数十基の五輪塔が残っているが、銘文は刻まれていない。

１０．下城子阿弥陀堂（字下城子）

大王神社から東へ100ｍ行った所の、下城子集落の村道端に阿弥陀堂がある。『山田村地誌』に「下城子阿弥陀堂　堂宇二坪二合五勺　堂敷九歩」と記されている。

堂内に安置されている阿弥陀如来立像は、室町期の作風を残しており、境内に３基の五輪塔がある。

１１．瑞光寺跡観音堂（字下城子）

石原集落の高台に観音堂があり、堂内には薬師如来立像と住持等の位牌が多数、安置されている。

中世の位牌に、墨書で「圓寂　茂山永昌公上坐覚位、干時天文六年丁酉三月十一日」・「當寺中興石窓元金公庵主尊霊位、天正十一年癸未五月二十一日」・「當寺中興吉州元和尚禅師」・「山田村清源山瑞光禅寺」等と記されており、吉州和尚については、『南藤蔓綿録』に「寛永四年丁卯五月十日柳江院中興吉州和尚寂、是ハ長毎公別シテ入魂の僧也、其前曹洞未葉山田瑞光寺ヨリ出ル、父ハ和泉、母ハ西氏也、入落ノ後済門ニ入、其後駿州清見寺説心老和尚ノ門下ニ有ル事数年、己ニ帰程ニ及ヒ半途ニシテ洛西妙心智勝現住大光普眼大禅師法脈ヲ相続キ吉州ト号ス」と見え、球磨の三禅傑の一人として有名である。

また、堂宇に掛かっている鰐口に、「奉寄進　清源山瑞光寺阿弥陀如来　願主高橋藤島鬼塚　干寺天文十二年癸卯八月十五日敬白」という銘文がある外、境内に２基の、無縫塔と18基の五輪塔が現存している。

１２．城子観音堂（字城子）

石原集落から東へ50ｍ行くと、城子集落があり、道路傍に観音堂がある。

『山田村地誌』によれば「城子□観音堂□堂宇二坪二号五勺堂数九歩」と記されている。

堂宇には十一面観音菩薩立像が安置され、台座背面には墨書で、

「奉造立十一面観音自在菩薩之像、躰厥作□□□者相良能長續□□□有御堂尓依□本□□年戊子六月吉日朔奉□□□白□下方□至聖霊現當之悉也殊者大檀那山田太山酒掃所願成辨子孫繁昌富□英雄□者過去□現在満未来□成佛得道□□□□□也嘗應仁三年己丑八月六日佛師□□□□□」と記されている。境内に数十基の五輪塔の残欠を見る。

付記〔3〕　4城跡より出土の土師器について

発掘調査によって、城跡の実年代が判明した山田城跡Ⅰ（大王谷箇所）・山田城跡Ⅱ（城山箇所）・高城跡・奥野城跡（球磨郡多良木町所在）から、第125表に見るような土師器の坏と皿が出土している。これら4城跡の実年代は、半世紀から最大でも1世紀と、比較的、狭い年代幅である所から、各城跡のものを比較検討すれば、ある程度の土師器の編年が可能ではないかと言う考えに至り、本報告書の付記〔3〕として取り上げることにした。なお、土師器の外底面の調整はa類(526)とc類(3)がヘラ切り離しで、他はすべて糸切り離しである。形態については坏と皿に大別し、器形はc類(3)を代表例とする様なラッパ状型（器高の値が大きく、口径に対する底径の比率が大きいのを特色とする。体部はラッパ状の伸びを示す。文中ではこれをR型と呼称する。）とb類(90)の様な船型（器高の値が小さく、口径に対する底径の比率が低い事を特色とする。文中ではこれをS型と呼称する。）を基準とした。

＊第125表の遺物実測図の右下に記した番号は、各報告書に掲載された遺物実測番号をそのまま用いたものである。

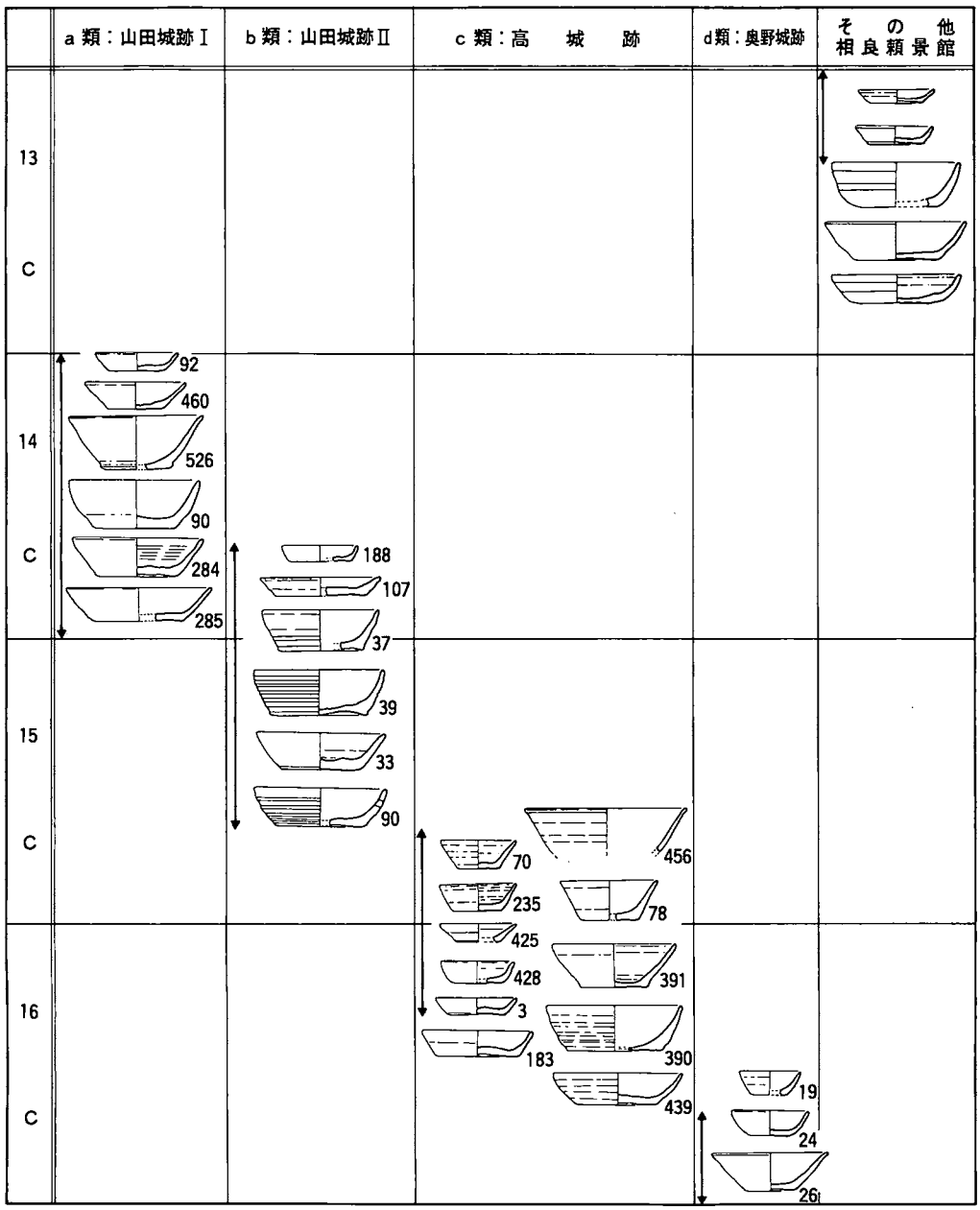
【　a　類　】　山田城跡Ⅰからの出土遺物である。城跡の実年代は14世紀であるが、その中心は14世紀の初頭から中葉の前後にあると考えられる。(92)(460)は皿で、(526)(90)(284)(285)は坏である。器形は(92)(285)がS型で、(526)が典型的なR型である。(90)はR型の色彩の濃いS型（R型＞S型）で、(460)(284)はその逆の状態（S型＞R型）にある。この様に器形については、皿がS型・R型＞S型の2種で、坏はR型・R型＞S型・S型＞R型・S型の4種に細分される。

【　b　類　】　山田城跡Ⅱからの出土遺物である。城跡の実年代は14世紀後半から15世紀中葉と考えられる。(188)(107)は皿で、(37)(33)(39)(90)と坏である。器形は(188)(107)(90)がS型であるが、(107)は皿としてはかなり大型のもので、体部の伸びも(188)よりR型に近いのでS型①とした。(37)はR型＞S型である。(39)はR型とS型の中間（R型＝S型）に位置づけられ、(33)はS型＞R型である。器形については、皿がS型・S型(1)の2種で、坏はR型＞S型・R型＝S型・S型＞R型・S型の4種に細分される。

【　c　類　】　高城跡からの出土遺物である。城跡の実年代は15世紀末から16世紀初頭に位置づけられている。(70)(235)(425)(428)(3)(183)は皿で、(456)(78)(391)(390)(439)と坏である。器形については非常にバラエティーに富んでいるのが特色である。皿に関しては(70)がR型で、(235)はR型＞S型である。(425)はR型＞S型の変形（R型＞S型①）で、S型であるものの体部の伸びはR型そのものである。(428)はこれ又、S型の変形（S型②）で、他のS型のものと比べて器高の値が大きく、体部がやや内弯する事を特色とする。(3)は典型的なS型である。(183)はS型①・②と同じようにS型の変形（S型③）で、他のS型と比較した

場合、器高の値が大きいことに加えて、全体的に大型の造りである。坏は(456)が典型的なR型で、(439)はS型である。(391)はR型＞S型で、(390)はS型＞R型である。器形については、皿がR型・R型＞S型・R型＞S型①・S型②・S型③・S型の6種で、坏はR型・R型＞S型・S型＞R型・S型の4種に細分される。

【 d 類 】 奥野城跡からの出土遺物である。城跡の実年代は16世紀中葉から後期と考えられる。器形を復元できるものが少なく、やや資料に乏しいきらいがあるが、戦国末期の城跡から出土した遺物であるところから、参考資料として取り上げた。(19)(24)は皿で(26)は坏で



第125表　4城跡より出土の土師器一覧表

ある。器形は皿の(19)がＲ型＞Ｓ型で、(24)はＳ型である。坏の(26)はＲ型＞Ｓ型の変形（Ｒ型＞Ｓ型③）で、Ｓ型ではあるもののＲ型の色彩が極めて強いものになっている。

【　その他　】　球磨地区において、城跡ではないが発掘調査によって実年代が判明している（13世紀前半）相良頼景館（多良木町黒肥地・蓮花寺）があるので、同館跡から出土した土師器皿・坏をｅ類として参考までに第125表に掲げた。（なおｅ類に限り、遺物の右下につけられた番号は、本報告書用に新たに設けたものである。）(1)(2)は皿で、(3)(5)は坏である。器形は(1)(2)が船型で、(3)はＲ型とＳ型の中間に位置付けられる。(4)はＳ型＞Ｒ型で、(5)は典型的な船型である。外底面の調整は、いずれも糸切り離しである。

【　小　結　】

〔1〕14世紀を実年代とするａ類の(526)はともかくとして、15世紀後半から16世紀前半の高城跡より出土したｃ類の(456)にヘラ切り離しの工法が見られるのは驚きである。共伴の出土遺物からしても城跡の実年代に見合うもので、この事により、球磨郡山江村山田の地域に関しては16世紀前半まで、大勢を占める糸切り離し工法の中で、数は極めて少ないものの、依然としてヘラ切り離し工法が残存していた事がわかる。但し、全体的な数からすれば、ヘラ切り離し工法を残す土師器坏は、14世紀前半に位置付けられる山田城跡Ⅰの第３遺物包含層に数多く見られるので、直接的な残存年代は14世紀前半頃になるものと思われる。この事は土師器のヘラ切り離し工法から糸切り離し工法への転換期を示唆していることにもなり、興味深い。その時期は福岡県の大宰府遺跡より約２世紀の遅れとなる。

〔2〕器形についてはｃ類の(28)に見られる様な、他の地域に数多い体部の内弯した船型のものが少なく、基本的には船型であるものの、ラッパ状型の色彩を残すものが多かった。これらを山江村山田を中心とした地域的な特色としてとらえられるか否かについては交互の研究課題である。

付記〔４〕　中世城跡の見方について

１．城張り

山城の場合、極めて広義的な城域は一つの山全体を示すものであろうが、熊本県内の中世城跡に限っては山頂部分の尾根を主軸線として、第１に削平による平坦地を造成し、第２に山頂直下の山腹を急峻に削り落とし、第３に堀切で幾つかの区画に仕切る事を絶対の前提条件としている事が明らかである。さらに必要に応じて山腹に竪堀が掘られているが、県内最大級の山城として知られる筒ケ嶽城跡（荒尾市府本所在：標高501ｍ）を例にとっても、長さ500ｍの尾根筋に山城としての遺構が顕著に残る外は全くの自然地形である事を知る必要がある。山全体は２市１町を跨ぐ広大なもので、到底、一つの山が中世山城ではない代物である。城域を考え

る時、ある程度、狭義的に考える必要があるものと思われる。山中の削平地を総て山城の遺構に見立てた縄張り図を見掛ける事があるが、これらのものは後世の造林や畑地確保のための造成作業を全く無視したものと思われる。先ずもって、急を要する築城の際、山全体を加工する時間的余裕はないはずであるし、加工を加えずとも、山という自然地形が、先ず第１の防禦施設になり得るからである。中世山城がいかに臨時的に造築されているかという事は、山田城跡Ⅰ～Ⅲや高城跡の発掘調査結果からも明白である。

２．残存遺構からの城跡年代決定や類型分類について

城跡を踏査して城の縄張りを描き、そこから城跡の年代や遺構の類型を分類する事は、一応の評価はすべきものの、甚だ危険なやり方であると言わざるを得ない。やはり、最終的には発掘調査によって城跡の実年代を決定すべきであって、この中世城跡の場合、他の考古学分野とは異なり、かような主観的なやり方で城跡の編年がなされていく傾向にある事は否めない。さらに、中世文書に城歴を求めるのでなく、江戸時代の後世編纂物が、論の根拠となり得る事も注意を払う必要がある。

中世城跡の研究を今後、より一層深めるためには、考古学事証に基づいた確たる史料を得て、中世史学との連携作業が是非とも必要であると考える。

さらには、城跡研究に宿命的な軍事学的な範疇を逸脱するためにも、確たる考古学的な視野からの展望を有する必要があると思われる。

付論〔1〕

永富（留）相良氏をめぐって

柳　田　快　明

〔1〕

戦国大名相良氏が、その系譜において、鎌倉期に球磨郡東方に勢力をほこった多良木相良氏（惣領家、いわゆる上相良氏）でもなければ、また西方人吉庄を拠とする人吉相良氏（いわゆる下相良氏）の嫡流でもなく、文安五年(1448)の内訌によって、下相良氏から権力を簒奪した永富（留）相良氏であることはよく知られた事実である。

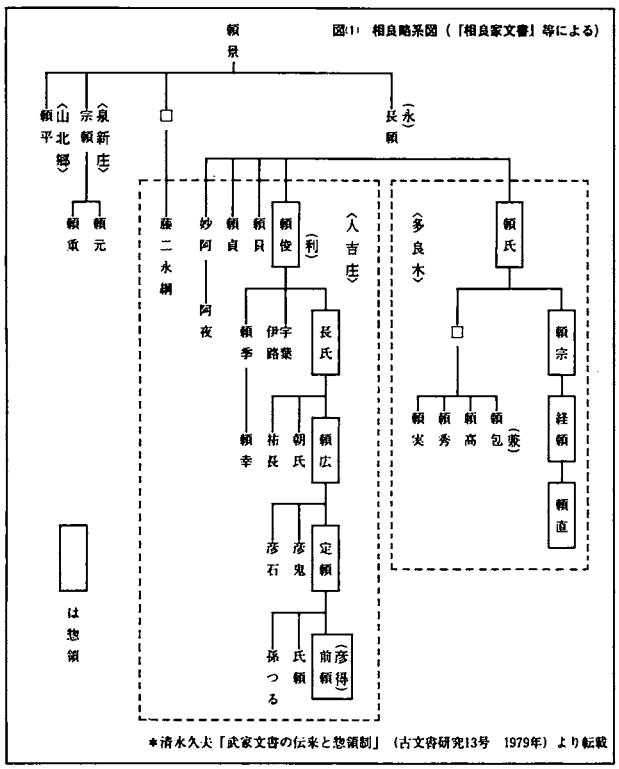
この文安五年の内訌について、近世に編纂された相良正史の代表である『求麻外史』は、次のように描写している。

多良木城主左衛門尉頼觀、弟攝津守頼仙と反す。蓋し外越の地頭桑原隠岐守其の端を啓くなり。（中略）頼觀、頼仙兵七百を率いて來る、隠岐之を導き、夜人吉城を襲ひ、火を放ちて、郭を焚く。事不意に出づ、城中爲す所を知らず。公（晃頼）、菱刈大隅に遜る、（中略）頼觀遂に城に入る、頼仙兵を収めて歸る。西村・上村・木枝・深田の義兵往々遮りて之を擊ち殺傷頗る多し。山田城主左近將監長續、變を聞き、即ち兵を擧げて馳せ至り、頼觀を人吉城に討って之に克つ。頼觀逃げ歸る。賊平ぐ。是に於て、長續、使を遣して公を菱刈に迎ふ。公、辭して曰く（中略）今賊を平げしは卿の力なり。請ふ卿立って之が主たれと。長續固く請ふ。公、歸る。三月二十八日、途にして暴かに薨ず。（下略）[1]

すなわち、下相良氏嫡流尭頼の父である前続が死去した嘉吉三年(1443)より五年後の文安五年、多良木頼観・頼仙らが桑原氏と結託し人吉城を攻略、幼君尭頼を追放した。これを聞いた山田城主永富長続が救援に赴き多良木勢を駆逐して、大隅国菱刈の地に避難をしていた尭頼を招こうとした。けれども尭頼はこれを固辞し、その直後に急死したため長続が推されて人吉城主となり、下相良氏惣領家を継承したというものである。長続は、この文安五年八月の久米雀ケ森合戦において多良木氏を滅ぼし、はじめて球磨郡内を統一的に支配し、更には八代・芦北郡へと進出していった。

これが文安五年の内訌の概略だが、同じ近世相良正史の中でも秘書とされ、近世相良氏の成立について批判的見地から叙述[2]された『歴代参考』の記述を少し長くなるが、念のために掲げると次の通りである。

一、文安五　ノ春多良木左衛門尉頼觀并舎弟摂津守頼仙兄弟謀叛人吉城を責、尭頼公を追出し在城し尭頼公幼弱にて敵對　成隅州菱州江御退去被成候し、此時山田領主左近将監長續右之趣被聞召、嫡子之尭頼を多良木兄弟以逆意押出候事無念至極候とて山田勢を御催し人吉



図(1) 相良略系図（『相良家文書』等による）

＊清水久夫「武家文書の伝来と惣領制」（古文書研究13号 1979年）より転載

江押寄多良木兄弟を追出し候故多良木兄弟ハ多良木江御引退し其時長續尭頼之御在所を御尋候へハ隅州菱刈子之御代ニ御座候よし相聞、則以使者被迎遣候ハ長續人吉江押寄多良木兄弟を追退候、早々御在城可被成由ニ候、尭頼御返事ニ長續御粉骨にて多良木兄弟被追退候上ハ長續在城尤ニ候と也、然共長續　再度以御使御帰城此節之条、御辞退不可然一刻も早く御越候へと被迎遣候御使往還之間に尭頼御幼少之御戯に牛の子に乗御遊ひの処ニ此牛ふりかへり申とて尭頼御股に角を突立申候、急所故か則時御率去候、[3]

『歴代参考』においても記述内容に大きな差はみられず、[4]すでに指摘されているように近世相良正史の記述を安易に信じることはできない。

服部英雄氏は、「文安の内訌は相良家正史の伝えるような多良木侵攻による下相良惣領家の没落に本質があるのではなく、隣国で対立する島津諸家の各々と結びついた下相良二家の対立・抗争として位置づける必要がある」[5]と述べられている。相良氏や人吉庄について新しい研究分野を開かれた氏ならではの鋭い問題提起である。

小稿は、この文安の内訌で権力を奪ったとされる永富（留）相良氏について、服部氏のお仕事をはじめとする先学の研究[6]に導かれながら、一応のまとめをしてみたい。格別に新史料が発見されたわけでもなく、また筆者独自の知見をもっているわけでもないが、永富氏に関してこれ迄明らかになっていることを整理することで当面の責をふせぎたい。

〔2〕

永富相良氏について、従来の研究で明らかにされていることを箇条的にまとめてみると、次のようになるであろうか。

(1) 永富氏は永留氏とも表記し、相良一族とりわけ下相良氏の一支族、それも有力な庶子家であったこと。

(2) その本拠地は、仮名ではあるが、苗字からして下相良氏の基盤である人吉庄内永富名に

あり、その地頭職を有していたと考えられること。

(3) しかし、永富氏の系譜ははっきりせず、明白なのは、文安五年の内訌で登場してくる長続であり、当時、彼は人吉庄の北方永吉庄内山田城の城主であったらしいこと。

(4) 永富氏が下相良氏の家督を襲い権力奪取にあたり、隣国島津氏から何らかの援助があったらしいこと。

(5) 下相良氏惣領の地位を獲得後、久米雀ケ森の戦いで上相良氏をも圧倒して、球磨郡全体の支配を実現したこと。そして、その後一族内での曲折はあったものの戦国大名として成長していったこと。

これらのうち(4)や(5)については比較的確かな史料が残されており、その足跡をたどることができる。しかし、(1)〜(3)の永富氏が権力の座につくまでの史料はきわめて乏しく、未だその原像に迫るのは甚だ困難であるが、ともかくこれらの点を中心に論を進めたい。さて、永富氏をとりあげる場合、たいていの史書や論文が必ず永富（留）または永留（富）と表記しているように、永富なのか永留なのか、このことにまずふれておきたい。今、刊本で見られる範囲で文献に登場する永富（留）一族と思われる人物を一覧にしたのが表Ⅰである。

これらの人物の実在はともかくとして、『求麻外史』『南藤蔓綿録』といった近世相良正史は「永留」と表記している。これは相良家文書の天文五年(1536)十一月二十二日沙弥洞然長状写に因むものであろう。[7] これに対し、歴代参考では「永富」をあてている。いずれが妥当な表記なのか、またどちらでもよいのか明確でない。しかしながら、すでに明らかなように、確かな文書史料には苗字として「永富」、もしくは「永留」と表記されたものは一点も存在しないことである。表Ⅰ⑬の出典年欠三月十六日相良長続書状は、宝徳年間(1449〜1452)から長禄年間(1457〜1460)の間の文書と推定されているものである。[8] 同じく⑭の出典相良氏山門知行以下由緒書は文明十六年(1484)三月七日と考えられているものである。[9] ⑬の長連と⑭の大膳大夫長連とは

番号	人名	時期	出典	備考
①	なかとミとの	正平23年8月5日	相良家文書1－170	
②	永留藤五郎長重	応永18年	南藤蔓綿録	長続の童名
③	永留治部少輔実重	応永27年7月12日	南藤蔓綿録	この日死去、系図註に定頼の妹を妻にしたとみゆ。
④	永富治部少輔実重		歴代参考	③と同一人物
⑤	永留（富）頼常		相良家文書1－319	鎌倉で戦死
⑥	永留弥三郎頼常		南藤蔓綿録・求麻外史	同上、山田城主
⑦	永留荘司次郎頼明		求麻外史	
⑧	永留式部太夫頼福	文明8年	南藤蔓綿録	牛山在番
⑨	永留式部太夫頼富	文明8年	求麻外史	
⑩	永留四郎三郎頼元	文安4年1月	南藤蔓綿録	為続のこと
⑪	永留隠岐守藤原頼澄	寛正元年？	南藤蔓綿録	佐牟田丁法院草創 頼連三男、山田家七代
⑫	永留式部少輔		南藤蔓綿録	御奉行の一人
⑬	長連		相良家文書1－194	
⑭	大膳太夫長連	文明16年	相良家文書1－231	
⑮	永留大膳太夫長連		求麻外史	
⑯	式部大輔頼並[7]		相良家文書1－231	

表Ⅰ 史書・文書にみえる永富（留）氏一族

同一人物と思われ、信憑性に乏しい永富相良氏諸系図にもみえる人物である。これらは富・留の表記を探る上で数少ない史料だが、残念ながら苗字は書かれていない。したがって漢字で正しく表記された史料すら存在しないのが永富（留）氏という存在なのである。富は留と同一という説もあるが、寧ろ意識的に永富などの表記を残すことを避けているようにも思われる。そんな中で①の「なかとミとの」は文安五年以前において苗字としてみえる唯一確かな史料である。よく知られた契状[10]だが、全文を掲げておきたい。

契　状

右、おやにて候ものゝ時も、一そくたちにむけてまつり候て、そきを存せられす候し程ニ、めん(定頼)〳〵御しょそんもとうへんに候き、前頼又そのむねを存へく候あいた、けい状まてもあるましく候へとも、いまの世上のてい、昨日にけふハかはるさほうに候、庄内においても、ふりよのたくミをなす仁もあるへく候あいた、如此かたく申さため候なり、しょせん一そくのわつらひになり候いんするともからにおいては、親子兄弟をいハす、なかをたかふへく候、

一、一そくのなかに、ふりよのくおうせついてきたり候時ハ、しんしゃくの儀なく、あひたかひに申ひらくへく候、

一、庄内において、所務以下のさうろんにおよふ事候時ハ、一そくおの〳〵申たんし候て、りうんにまかせてさいそく申へく候、かやうにてう〳〵(様々)申さため候うへハ、きやうこういよ〳〵一味同心のおもひをなすへく候、もしこのてう〳〵偽申候ハゝ、

八まん大ほさつの御はつをまかりかうふるへく候、仍契状如件

藤原氏(相良)頼（花押）

正平廿三年八月五日

なかとミとの　　近江守前(相良)頼（花押）

年号からわかるように、相良前頼は南朝方である。もともと下相良氏は一貫して北朝方にあり、南朝方であった上相良氏と対抗関係にあった。それがはじめて南朝年号を使用した。つまりこれまでの北朝方から南朝方へと変化した時の文書である。文中にあるように、定頼が死んで、前頼が惣領の地位を継承した頃であろう。この契状について、服部英雄氏は次のことを指摘されている[11]。

(1)　一族一揆契状の体裁をとってはいるが、惣領から一族に出された点に最大の特色がある。

(2)　「なかとミとの」は永富氏であり、氏は庶子の独立を代表する存在である。

(3)　惣領が庶子である永富氏に対し契状をだすこと自体が、中世の身分秩序の中では異様な現象である。

以上の如く、この時期の永富氏が既に惣領家をも脅かす有力庶家であったことを主張されている。そして、山江村山田の大王神社々殿裏手にある正平二十三年の石塔をあげ、これが「永富どんの墓」の伝承をもつこと、山田にはこの頃相良氏の勢力がおよび永富氏が山田城の城番

であったと考えられること、大王神社々地の変遷や石塔に刻まれている「一結講衆」の銘文解釈から永富氏が反惣領的性格をもつ庶子連合（一揆）の代表的存在であったと推定されている。(12)

この服部氏の見解に対して菖蒲和弘氏は、契状からは反惣領一族の存在も窺えることから、同一契状が他の一族に出された可能性がないではなく、庶子の代表とまでは言えず、むしろ独立した庶子の一人として現れたことの方がより重要と主張されている。(13)

永富氏を庶子を代表とする存在とみるか、庶子の一人としてみるか、いずれにしろこの内乱期において飛躍的に勢力を伸張してきた認識では一致すると思われる。相良祐長に示されるように惣領家一族内からの離反すらみられる状況からして、一庶子家である永富氏が独立した基盤を築き、惣領の制肘をも越える存在になりつつあったことは十分に想定できることである。この契状においては、一族合議や庄内所務の合議が強調されていることからして、永富氏も人吉庄内にかなりの勢力を有していたと考えられる。そこで、次に永富氏の本貫とされる永富名についてみておきたい。

〔3〕

かの寛元二年(1244)五月十五日人吉庄起請田以下中分注進状(14)には次のようにみえる。

一、永富名捌町捌反貳丈内

起請田七丁九反四丈

出田八反三丈

この中分注進状は、地頭が収取に関与するものを載せているが(15)、永富名は中規模程度の名の一つである。これが、文永八年(1271)六月願成寺檜皮用途日記(16)では、「なかとミ　十七丁三、(反)」とあり、田別銭六文宛の檜皮用途銭を課せられている。ここでは田積の増加がみられるが、刀岡名のように田積に変化がないものもあり、名の再編成などが想定されるが確かなことはわからない。

ところで、嘉暦二年(1327)九月二十五日観覚書状(17)によれば、「なりとミ名のてつき状三通内（中略）そちん三問三答状幷ついしんの状二通うけとり候ぬ〳〵」とあり、観覚が永富名の手継状を入手したことが見えている。永富名は当時争論の対象になっているようだが、この観覚なる人物は、大日本古文書の編者が指摘しているように平河宮内左衛門入道観覚であろう。すなわち、平河一族の者が永富名に対して何らかの権利を主張しているのである。服部英雄氏は、

この時期に下相良氏頼俊流の嫡子頼広が、惣領家上相良氏とは独自に庶子分を含めた地頭職安堵申請を鎮西探題へ行ったことを指摘し、この観覚書状についても一連の安堵申請の中で把握すべきことを主張されている。(18) 同文書の手継状は「一通　正応六年三月廿三日よりすえ状」他二通とあり、これによれば永富名に関する権利を下相良氏嫡流頼俊の子頼秀が有し、これが藤原氏から平河観覚へと伝えられたことになる。そして、これが前述の服部氏の指摘の如く下

相良惣領頼広による安堵申請に絡まるものならば、この平河氏が問題となろう。服部氏は、姻戚関係によって下相良一族に包摂された平河一族とみている[19]。が、それにしても、永富氏の成長基盤であったはずの永富名に対するこのような状況をどのように理解すればよいのであろうか。永富氏＝永富名本貫地説は果たして正しいのだろうか。その後、永富名のことは、建武元年(1334)二月十五日左衛門尉源知行充行状[20]に「肥後國人吉庄南方内永富大王丸刀岡國貞以上四ケ名、當年戊甲一作所被宛行沙弥修善也、可存其旨之状如件」とみえている。

〔4〕

次に、山田城の問題に移りたい。まずは山田城の位置する永吉庄と平河氏との関係について簡単にみておきたい。

永吉庄に関する村上豊喜氏の研究[21]によれば、①永吉庄は、元来治承・寿永の内乱で没宮領とされた「球磨庄」にあり、建久三年(1192)鎌倉殿御領設置の際に、本来在地領主として勢力を誇っていた平河氏の力を能うる限り縮小させながら成立した庄園であること。②田数は、図田帳目録にあるように300町だが、その中心は木上・深田・免田といった中球磨地方にあること。そして、球磨川・川辺川・万江川・山田川の流域にも田地が散在しており、この散在性こそが鎌倉殿御領としての永吉庄の特色であること。③以前から平河氏の所領の核である中球磨地域を除くと、本庄は日向・肥後他郡へのルートを抑える位置、また人吉庄を三方からとり囲む形で成立していること、等々が明らかにされている。

この村上氏の所論を考えると、下相良氏にとって永吉庄の存在は重大であり、ここを本拠とする平河氏との関係はより重要であった。

年紀的にも内容的にも疑問を呈せられている史料だが、良峯師高所領譲状案[22]には、平川三郎師高重代田数注文として、

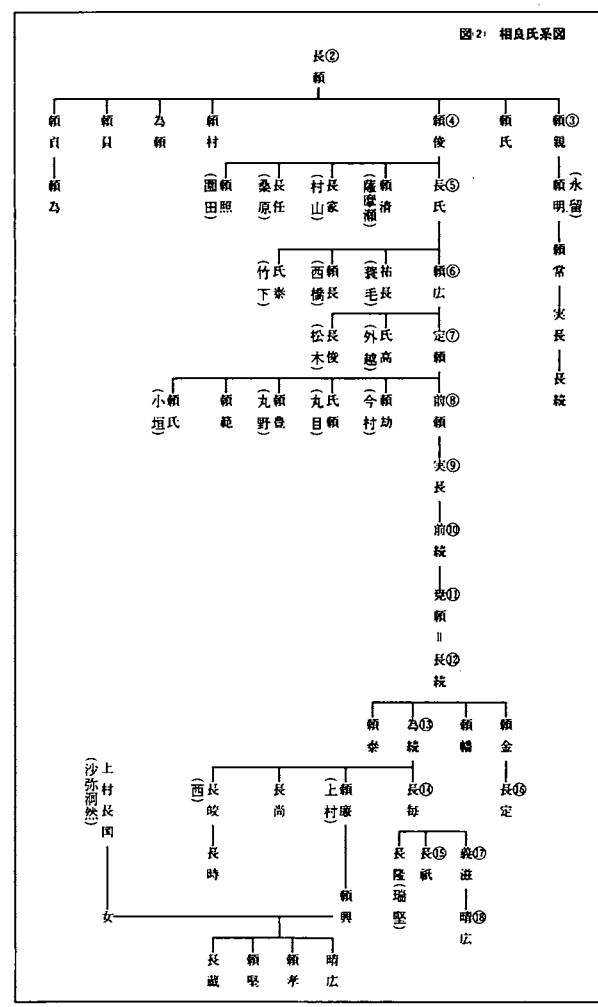
一所　同郡同庄之内山田之村田地四十町一反

百十石五十貫

とある。中球磨地方に平河氏惣領が居住したとすれば、山田をはじめとする河川流域の地域には一族庶子が居住したと思われる。年欠で問題はあるが、良峯姓先祖書[23]には「山田次郎東高」なる者がみえ、山田平河氏の存在が知られる。この先祖書には他に、深田・横瀬といった平河氏の本拠地を姓とする一族がみえ、おそらく平河氏の中でも後々有力な一族として成長していったと思われる。山田の地は、平河氏の本拠からはやや離れてはいるが、人吉庄などと対峙しつつ、球磨川を下って八代方面、あるいは万江川・川辺川を遡及して五木越といった、球磨盆地と肥後中央部とを結ぶ要衝の地にあった。永吉庄の中でもとりわけ重要な地域に位置していたのであり、平河氏にとっても不可欠の地域であった。応永十一年(1404)に現在地に遷座した[24]とされる山田大王社についても、当初より山田の地にあったと考えることもできるのではない

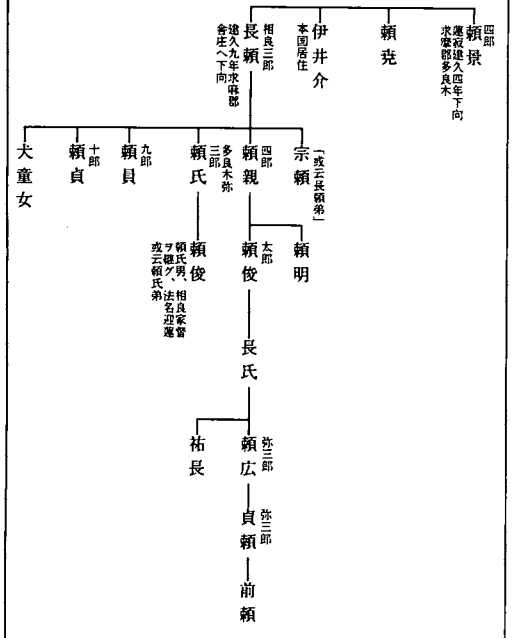
か。このような枢要地域に構築された山田城や山田の地、あるいは永吉庄や平河氏の動向は、南北朝内乱期になると益々その存在をクローズアップさせてきたにちがいない。同時にこの時期は永富相良氏が頭角をあらわしはじめてきたとされる時でもある。そこで、やや脇にそれるが、永富相良氏山田城主説および永富系図について関説しておきたい。

永富氏が山田城主であったことは、「山田城主永富弥三郎頼常」とか「山田城主左近将監長続」（求麻外史）とあるように諸書が記し、流布するところである。がはたしてこれは事実なのか。またそうだとしたら何時頃からそうなのか。山田城が文献にみえ始める建武五年(1338)段階から、どのように関わっていたのか明らかではない。はたまた、文安五年の内訌に際し、尭頼を追放した多良木頼仙らを駆逐した永富長続が山田城主であったことを証明する確実な史料もないのである。「即ち山田城主永留氏説は後世の相良家編纂物によるもので史料的根拠は何もない」[25]のである。図②～④は、各々差異はあるが永富氏歴代を載せる系図である。信憑性はさておき、『南藤蔓綿録』所収系図だけが山田永留氏系図と記し、山田あるいは山田城との関りを強調している。また、解釈次第では山田を根拠とした永富氏以外の一族の存在を想定することもできるし、そのように思わせているふしもある。『南藤蔓綿録』の中世の記述には、永留系図以外に4系図がみえるが、苗字の上に地名を冠したものはない。



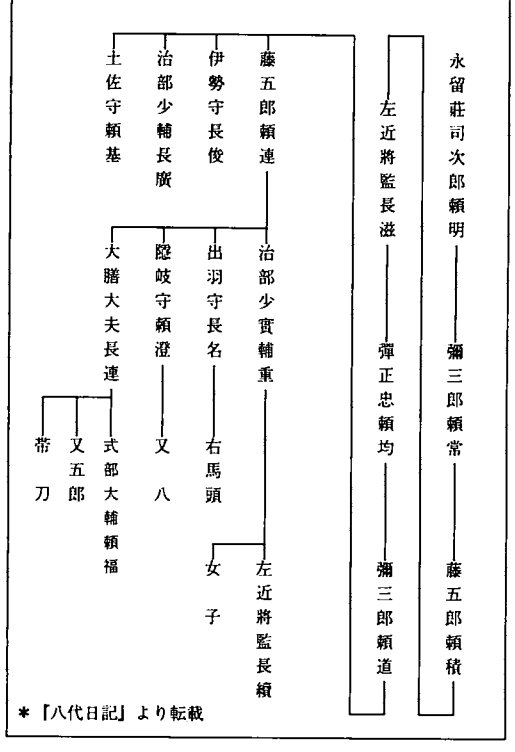
ところで、これらの系図が到底信じがたいものであることは前述の通りである。永富氏の直接の祖である頼親について、沙弥洞然長[26]状は「従常郡在鎌倉之時時之御將軍若宮八幡へ御参詣、之砌、御前打候、於馬上播希代之面目、被蒙諸侍之羨ヲ候、被遂御奉公ヲ」とし頼親から弟頼俊への惣領譲位について「御子孫末年稚」と述べている。そして「直子者小名字被号

図③ 「続群書類従」収録 相良系図



＊松本寿三郎「相良氏の球磨下向と多良木支配」（別掲）より転載。

図(4) 山田永留氏系図「南藤蔓綿録」



＊「八代日記」より転載

永留与候、成功遂名身退、是天道也」と、頼親の行為を讃えている。隠居した頼親は観仙と号し、「観仙公山居御在所之事、先八代境神瀬山ニ御座候、其後又求麻山ニ被移御庵室候」と記している。しかし、この頼親は文書ではまったく確認できないので、創作された人物とされている。頼親の人徳だけでなく、隠居後の在所など後々の相良氏の領土的野心を正当化するような意図さえ窺われる。同じく、沙弥洞然長状にて「永留二代目」とある頼常は、『南藤蔓綿録』では「平高時に新田義貞合戦之節、御一家山田地頭永富弥三郎頼常當家御名代として出陣の処鎌倉に於いて戦死致サレ」とある。これはすでに洞然長状にも「為當家名代、以在鎌倉、討死候」とあり、16世紀前期にはこの所説はつくられていた。事実として相良氏一族が新田義貞の鎌倉攻撃に加担していたか否かは不明だが、ここでのポイントは「當家名代」ということであろう。相良惣領家との深い信頼関係を強調しつつ、さらには永富氏が庶子の中でも鎌倉末期にはすでに有力な存在であったことを示唆する意図があったと思われる。

それにしても、頼常が鎌倉時代末期とするなら十五世紀半ばの長続まで、僅か120年余の間に七代もの人物が存在するといった、明らかに不審な系図を作成する意図はどこにあったのか、逆に不思議でならない。おそらくは、長続に到る迄の惣領家歴代の数に、永富氏当主の数を何らかの形で近づける必要があったのであろう。それは永富氏が相良家の一支族にすぎないとしても連綿として継続した家柄であることを主張することが重視されたのであろう。ただ、この

山田永留家系図などの記載が長続以外のすべてが創作とは言えまい。長続の父実重の兄弟については表Ⅰの如く、文書的に確認できる者もいる。実重が下相良家頼広の女を内室にしたとする記載も事実かもしれない。また左近将監は、応安六年(1373)閏十月八日の今川了俊感状[27]の宛名にみえる相良左近將監に比定できる候補の一人である。

再び南北朝期に戻ると、永吉庄の預所職は周知の如く当初は大江広元が有していたが、その後、少弐景資が保持した。しかし、岩門合戦によって闕所化され得宗領となった。鎌倉幕府滅亡後は少弐頼尚に返還され、永吉庄は内乱初期において、球磨郡内はもとより肥後国内における少弐氏の重要な拠点であった。[28]そして、その軍事的拠点が山田城である。山田城をめぐる攻防につては菖蒲氏の研究に詳しいので略するが、当城の重要性については、康永四年（1345）十一月税所宗円申状案[29]に次のようにみえる。

宗円一族相共楯籠山田城、致防戰之忠畢、是併爲奉上、幷爲令全宰府御領也、軍忠爭可順(准)余人哉、凡至當郡者、爲無雙城郭之間凶徒等令打取之者、輙依難被退治、如此捨身命、抽毎度軍忠者也、（傍点引用者）

すなわち、山田城は球磨郡内において「無雙城郭」であった。ここで重要なことは、少弐氏と在地勢力である平河氏の関係である。松本寿三郎氏は、平河氏は「球磨川の水路をおさえて発展した在地土豪層」であり、「山野の産物を収納」し、「これらを交易することの可能な、水上交通に巧みな勢力だった」と指摘されている。[30]この平河氏がこの頃も永吉庄を支配したことは、次の相良定頼幷一族等所領注文[31]により明白である。すなわち、

一所　肥後國球磨郡永吉庄半分百七十五町五百石三百貫

□(平)河在近允
頼尚跡

とあって、永吉庄175町が闕所化され、下相良氏惣領である定頼の所領となっている。この文書は端裏書に「一色殿御下文目録」とあり、年欠だが観応の擾乱後の史料であることは確かである。足利直冬下向後、九州探題一色氏に対抗して直冬に味方した少弐頼尚は永吉庄を没収された。そして、その代官が平河左近允であった。これを機に少弐氏はもちろん、在地勢力である平河氏、それも相良一族と縁戚関係をもたない平河氏は急速に勢力を失っていったと思われる。ただ山田城関係史料からは、南北朝期において山田城と平河氏との関わりは窺えない。むしろ「定頼僅雖爲小勢、相分干二手、籠置親類若黨等山田城、致散々防戰」（建武五年八月相良定頼申状案、傍点引用者）[32]とあるように、内乱当初から山田城は下相良氏の掌握下にあり、激しい争奪戦が展開したと考えられる。とすれば、服部氏が指摘されているように、内乱の段階においてすでに永富氏が山田城の城番であったと考えることもできよう。[33]

〔5〕

以上、「永富（留）相良氏をめぐって」と題し、歴史の表舞台に登場するまでの永富相良氏

について若干のまとめをしてきた。正直いって、何一つ明らかにできない上に皮相な叙述に終始し、また冒頭の服部氏の指摘をはじめ、先学の研究さえも充分に生かしきれておらず、はなはだ忸怩たる思いである。[34] 永富相良氏の原像は依然として闇の中だが、平河氏と永吉庄により深くアプローチすることが一つの方法のようにも思われる。相良氏との姻戚関係をもった平河氏の存在や永富名に対する何らかの権利を考えると、永富相良氏の台頭には平河氏との深い関係があるのではないか。であるが故にあのように不可解な系図をも作成したのではないかなどと、馬鹿げた妄想にかられている。さらには、永富相良氏とは一体如何なる存在なのか、疑問はますばかりだが、今はその時日もないので、これからの課題としておきたい。

〔註〕

(1)『肥後国誌』所収。ここでは青潮社刊本に拠った。引用は56～57頁。

(2) 森山恒雄「『歴代参考』について――書誌的検討――」（熊本中世史研究会編『八代日記』所収　1980年）

(3) 未刊。引用は『歴代参考（下書）』に拠った。

(4) 長統の下相良氏惣領継承について、『求麻外史』が「群臣公を推して主と爲す」と記すのに対し、『歴代参考』では「尭頼公於菱刈御率去之由相聞候間、如此ノ上ハ誰にか辞退をも可被成と御座候て文安五年戊辰五月十三日人吉御在城」とある。

(5) 服部英雄「戦国相良氏の誕生」（『日本歴史』388号、1980年）8頁。

(6) 先行研究については、池田公一編著『中世九州相良氏関係文書集』（1984年）参照。

(7) 相良家文書之1ノ319号。以下、相1－319と略記。
この史料の性格については、すでに多くの研究がふれるところである。なお、「群書類従本」でも永富とする。

(8) 相1－194。服部前掲論文参照。

(9) 相1－231。

(10) 相1－170。

(11) 服部英雄「軍忠状の彼方に」（『史学雑誌』89－7、1980年）34～35頁。

(12) (11) に同じ。36～37頁。

(13)「鎌倉・南北朝期の山田村」（熊本県文化財調査報告第102集『山田城跡』所収、1989年）

(14) 相1－6。

(15) 工藤敬一「鎌倉時代の肥後国人吉庄」（熊本大学文学部論叢一、1980年）参照。

(16) 願成寺文書7（熊本県史料中世篇3）。なお、県史料では、「なるとミ」と記すが、この文書についてはすでに服部氏前掲論文によって「なかとミ」と読めることが指摘されている。熊本中世史研究会が、1984年8月同文書を調査した際にも「なかとミ」と読めることを確認している。

(17) 相1－50。「なかとミ」の読みについても服部氏前掲論文で指摘されている。

(18)(19) 前掲「軍忠状の彼方に」23頁。

(20) 相1－65。

(21) 村上豊喜「古代・中世球磨地方の展開と五木村」（『五木村学術調査人文編（歴史）』所収、1988年）。なお工藤敬一「肥後球磨郡の荘園公領制」（田村圓澄博士古稀記念　『東アジアと日本』歴史編所収　1986年）参照。

(22) 平河文書1（熊本県史料中世篇3）

(23) 平河文書12。

(24) 前掲『山田城跡』参照。

(25) 前掲『山田城跡』10頁。

(26) (7) に同じ。

(27) 相1－171。

(28) 川添昭二「鎌倉・南北朝時代における少弐氏の所領」および「南北朝時代における少弐氏の守護代について」（『九州中世史の研究』所収、1983年）参照。

(29) 相1－120。類似の文言はすでに建武五年八月相良定頼申状案（相1－82）に載せられている。

(30)「相良氏の球磨下向と多良木支配」（熊本県文化財調査報告書『蓮華寺跡・相良頼景館跡』所収、1977年）119頁。

(31) 相1－161。

(32) 相1－82。

(33) 前掲「軍忠状の彼方に」。

(34) 種元勝弘氏は『人吉市史』第一巻（1981年）において、永富相良氏の本拠について黒田清光氏の古塔研究を援用しながら、初代より大口方面に移住して土着した相良一族ではないかと主張されている。そして、山田の地名は大口方面の菱刈地方にあり、文安内訌の際に尭頼が菱刈で死亡したこととの関連も強調されている。拝聴すべき一つの提言であり、相良氏と薩隅との関係はきわめて重要な課題だが、まずは、永富氏系図への史料批判の要があろう。

付論〔2〕

山江村大字山田字下城子地区調査結果

國　本　信　夫

昭和61年、発掘調査の行われている山田城跡Ⅲの麓の集落・山江村大字山田字下城子において、山田地区の氏神である山田大王神社の秋祭りが行われる11月４日から３日間、祭の見学及び聞き取り調査を行った。

調査はごく短期間であったので、発掘調査の行われている山田城跡Ⅲに関する伝承の聞き取りを中心に行った。しかし、新たな伝承は残念ながら聞くことができなかった。その中で山田城跡Ⅲとの関係をもつ可能性のある諏訪神社について簡単に報告することにする。

この地区の氏神様は前述のとおり山田大王神社であるが、ここに山田大王神社の由緒札と共に諏訪神社の由緒札が納められている。どちらの由緒札も寛延４年(1751)に神主緒方主水によって書かれたもので、この時期には両神社の神主が同一の人間で両者の密接な関係がうかがえる。この由緒札によると諏訪神社がこの地に鎮座した時期については平家が盛んであった頃としている。また「球磨郡神社帳」には旧藩記に信州諏訪神社を文明６年(1474)に勧請したと記載されているという。両者の間には時代的隔たりも大きく詳細な記載も無いため、現在のところ、この神社がいつどのような経緯で祭られるようになったか明らかではない。

現在、諏訪神社は下城子の中でも石原地区12軒の家だけが祭りに関与するようになっている。宮総代は宮入口の１軒が勤めている。この家はもともと諏訪神社の神官だったという。その他にキモイリが宮の世話を行う。キモイリは宮総代を除く11軒が、番帳とよばれる記録用の帳面に記載された順番に従って１年交代で２人がこの役に付く。

祭りは旧暦の７月27日で、この日の午前中に石原地区の人々は男女を問わず宮総代の家に集まる。この時、キモイリは供物と稲藁を、それ以外の家の人（テヤクとよぶ）は各自の家で作った料理を持参する。キモイリが用意する供物は、白米１升３合、トイモ（水芋）、黒豆、茄子、トサカ（海藻）、マンピキ（しいら）、梨と決まっている。午後３時頃、深田町から神官が来る。石原地区の人々は供物、御弊、注連縄を持って神社に登る。そこで、神官がお祓いを行い祝詞を奏上する。そのあと各家の戸主が玉串を奉奠し、祭りを終わる。

祭りに参加したものは宮総代の家に戻り、宴会が開かれる。各家で用意した料理を食べ、焼酎を飲む。マンピキはトイモと混ぜて食べる。供物の米は神官に御礼として持って帰ってもらう。現在、この祭は豊作祈願のためのお祭と地元では考えられている。

調査では宮総代さんの御好意により、この神社の御神体を見せていただくことができた。御神体は鏡と鎌と矛で、７～８年前に人吉市の鍛冶屋町で作ってもらった物だそうである。前の御神体も、今の物と同じものであったそうである。さて、この御神体であるが、鎌と矛は人吉

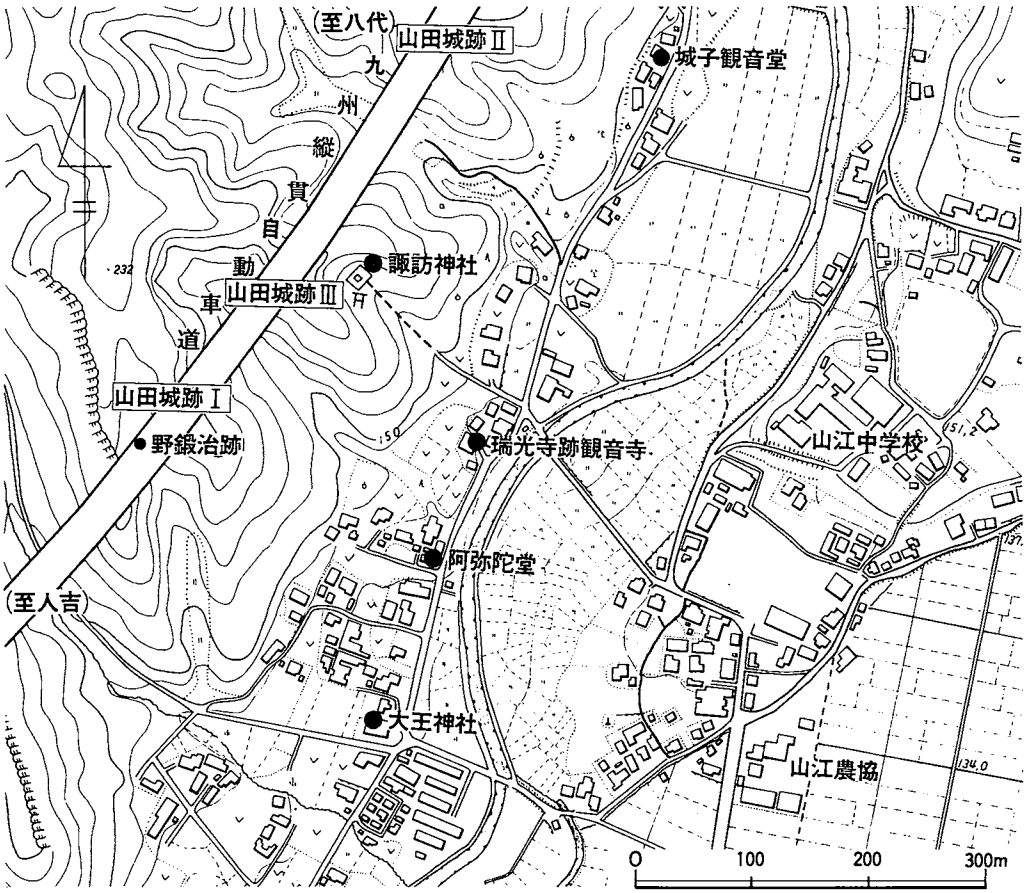
地方の鍛冶屋が正月の初仕事で儀礼的に製作し、1年間仕事場に飾るものと同じものである。いつ頃からなぜこれを御神体として祀るようになったかはの記憶されていない。戦前までは旧暦の盆から八朔の間に豊作祈願として鎌を供える人もあったと言う。また、以前は料理人が腕前上達のため包丁を奉納したという伝承もある。

この諏訪神社がなぜこのように鍛冶屋や刃物と結びつきを持つのは地元では伝承されていないし、また、御神体を作った鍛冶屋でも先代がなくなっており分からない。

さて、注目されるのは一連の発掘調査で諏訪神社の真上の山田城跡Ⅲからスラッグが見つかった事や、山田城跡Ⅰからは野鍛冶跡が検出された事である。そしてその奥の谷に地元の人々がホクソ谷（ホクソとは鞴の下の部分の意味と地元では言われている）と言う地名を付けていることである。

今のところ、鍛冶屋と諏訪神社を直接結びつけるものはないが、今後調査を継続することで新たな展開が期待されるところである。

最後になったが、調査に御協力いただいた下城子の皆様方、調査を手伝っていただいた熊本大学文学部地域科学科の藤本典昭、中園成生、中村佳江の三氏に厚く御礼申し上げます。



図①　山江村大字山田字下城子周辺地形図

写　真　図　版

図版１　発掘調査現場の空中写真（1）　（南東方向より）
〔左〕山田城跡Ⅰ（大王谷）　〔中〕山田城跡Ⅲ（下城子）　〔右〕山田城跡Ⅱ（城山）

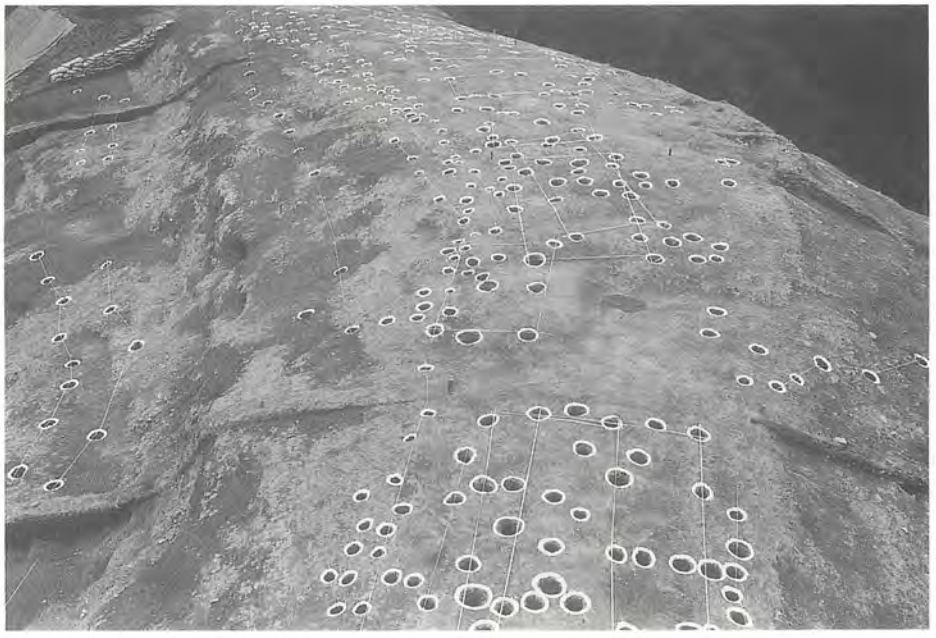
図版２　発掘調査現場の空中写真（2）　（西方向より）
〔左〕山田城跡Ⅲ（下城子）　〔右〕山田城跡Ⅰ（大王谷）

図版３　発掘調査現場の空中写真（3）　（西方向より）
山田城跡Ⅱ（城山）

図版４　発掘調査現場の空中写真（4）　（南方向より）
山田城跡Ⅱ（城山）

図版５　山田城跡Ⅱの遠景　（南東下の集落より）

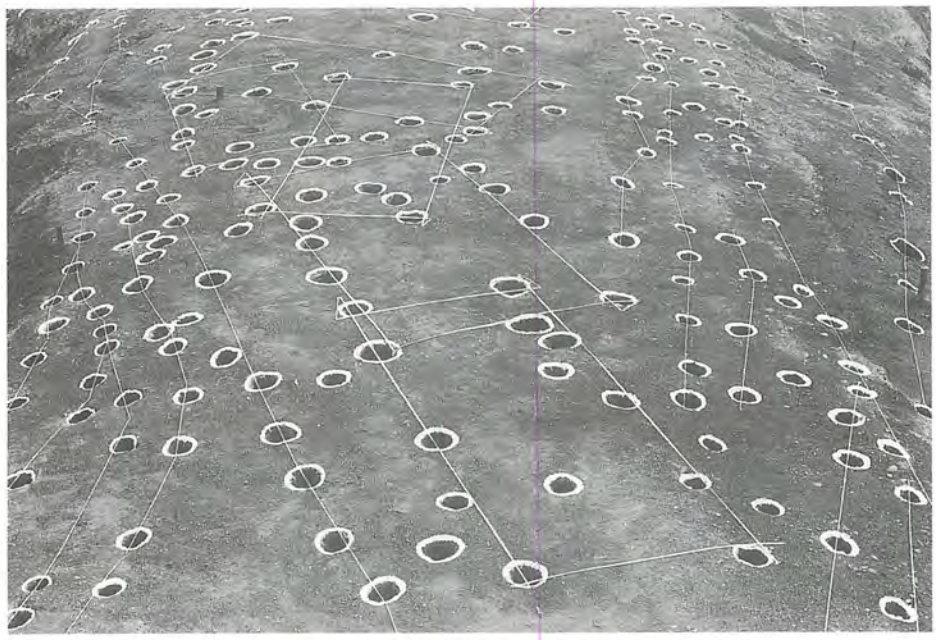
図版６　山田城跡Ⅱでの説明会（山江村立城内小学校の遠足）



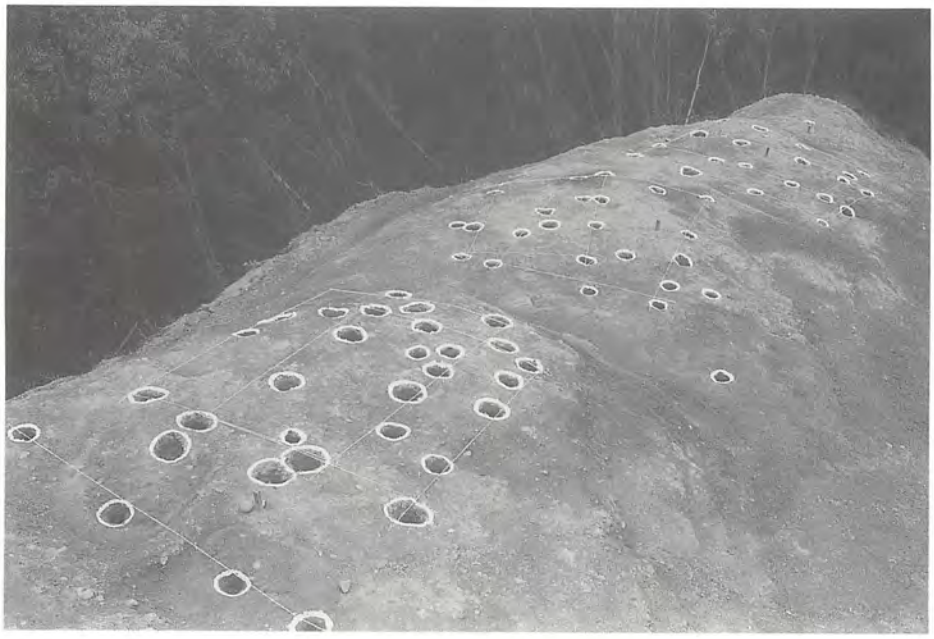
図版７　山田城跡Ⅱ　遺構検出写真（1）
（主軸尾根と南西下帯曲輪を東方向より望む）

図版８　山田城跡Ⅱ　遺構検出写真（2）
（主軸尾根の中心部を西方向より望む）

図版９　山田城跡Ⅱ　遺構検出写真（3）
（主軸尾根の東端部を西方向より望む）



図版10　山田城跡Ⅱ　遺構検出写真（4）
（主軸尾根より検出の建築址と杭列を東方向より望む）



図版11　山田城跡Ⅱ　遺構検出写真（5）
（北側張り出し尾根を南東方向より望む）

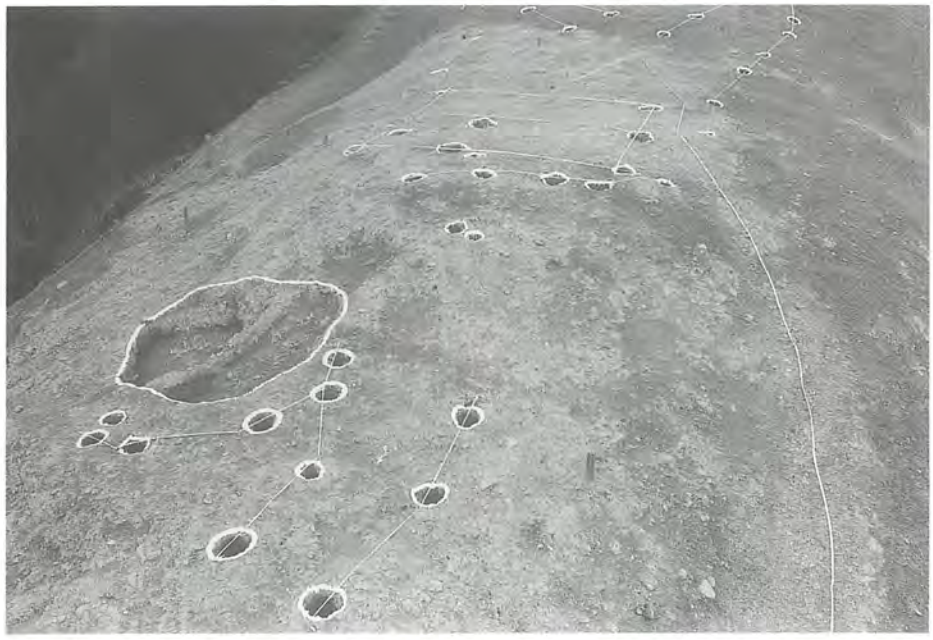
図版12　山田城跡Ⅱ　遺構検出写真（6）
（主軸尾根東下帯曲輪を主軸尾根平坦部より望む）

図版13　山田城跡Ⅱ　遺構検出写真（7）
（堀切１の検出状況を主軸尾根側から望む）

図版14　山田城跡Ⅱ　遺構検出写真（8）
（堀切１の埋土断面を東側堀底より望む）

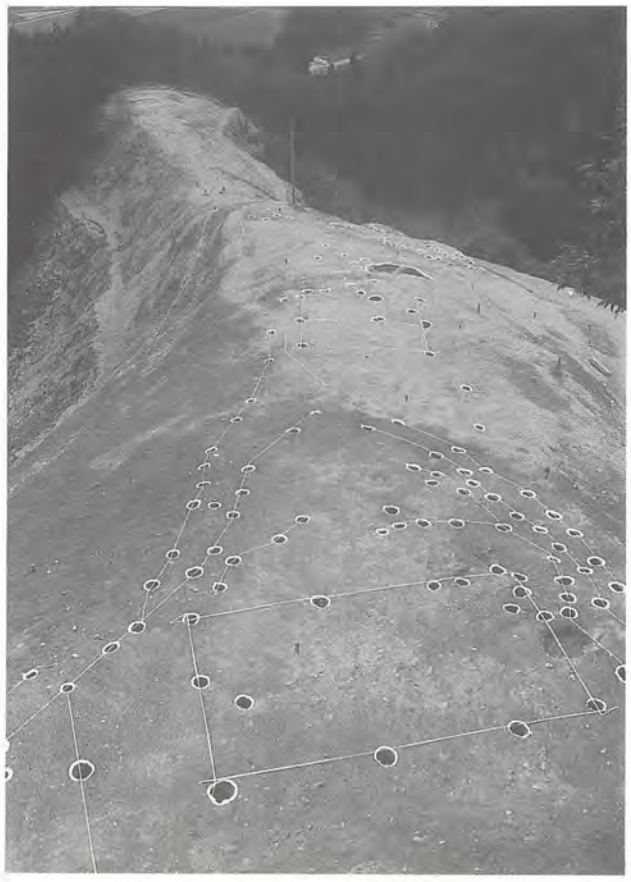
図版15　山田城跡Ⅱ　遺構検出写真（9）
（東北尾根を南側から望む）

図版16　山田城跡Ⅱ　遺構検出写真（10）
（東北尾根と帯曲輪①を北側から望む）

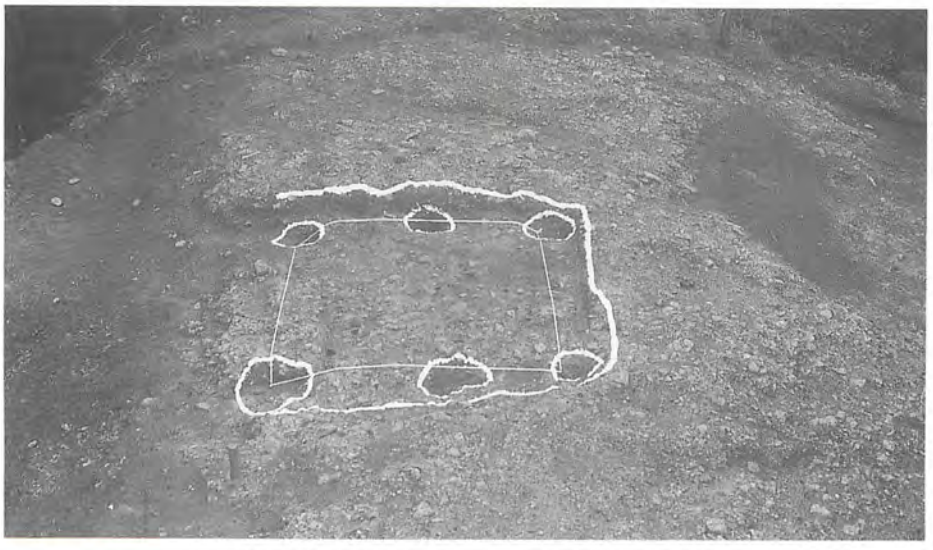


図版17　山田城跡Ⅱ　遺構検出写真（11）
（東北尾根の北端部を南側から望む）

図版18　山田城跡Ⅱ　遺構検出写真（12）
（東北尾根の北端部下を巡る帯曲輪）



図版19　山田城跡Ⅱ　遺構検出写真（13）
（陣の山の全体を西側から望む）

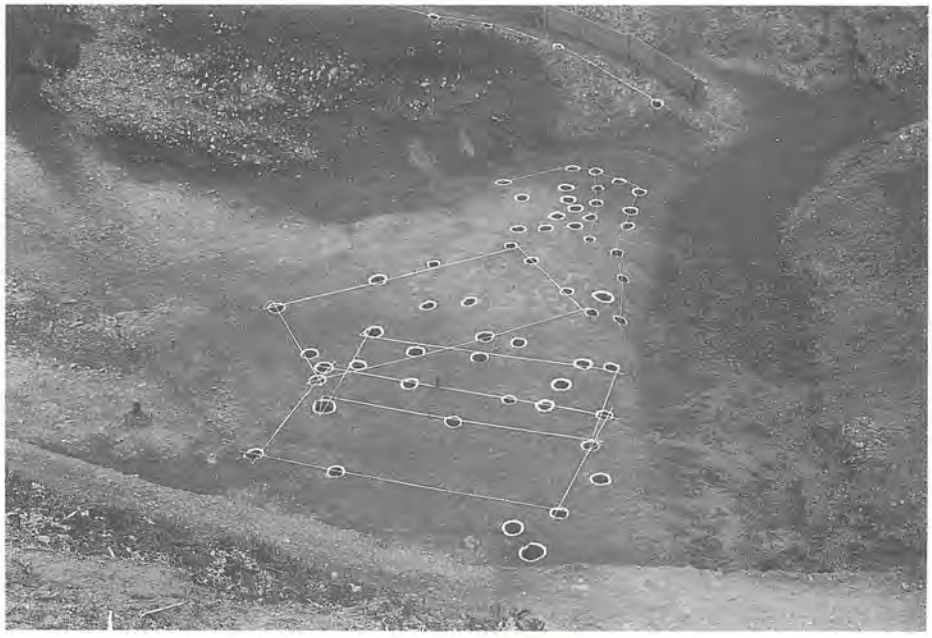


図版20　山田城跡Ⅱ　遺構検出写真（14）
（陣の山の東端部から検出された不明遺構）

図版21　山田城跡Ⅱ　遺構検出写真（15）
（陣の山と迫地と登城道を主軸尾根の西側から望む）

図版22　山田城跡Ⅱ　遺構検出写真（16）
（迫地全体を北西方向より望む）

図版23　山田城跡Ⅱ　遺構検出写真（17）
（迫地の西側上段部分を北側より望む）



図版24　山田城跡Ⅱ　遺構検出写真（18）
（迫地の東側最下段を東側より望む）

図版25　山田城跡Ⅱ　出土遺物写真（1）
（南西下帯曲輪①の整地層より出土の埋納土師器坏）

図版26　山田城跡Ⅱ　出土遺物写真（2）
（主軸尾根平坦部より出土の懸け仏）

図版27　山田城跡Ⅲ　遺構検出写真（1）
〔左〕二重の堀切　　〔右〕東側尾根

図版28　山田城跡Ⅲ　遺構検出写真（2）
（二重堀切を東側尾根の山頂より望む）

図版29　山田城跡Ⅲ　遺構検出写真（3）
（堀切の作業風景）

図版30　山田城跡Ⅲ　遺構検出写真（4）
（主軸尾根における樹根撤去作業）

図版31　山田城跡Ⅲ　遺構検出写真（5）
（東側尾根より検出の杭列１を北西方向より望む）

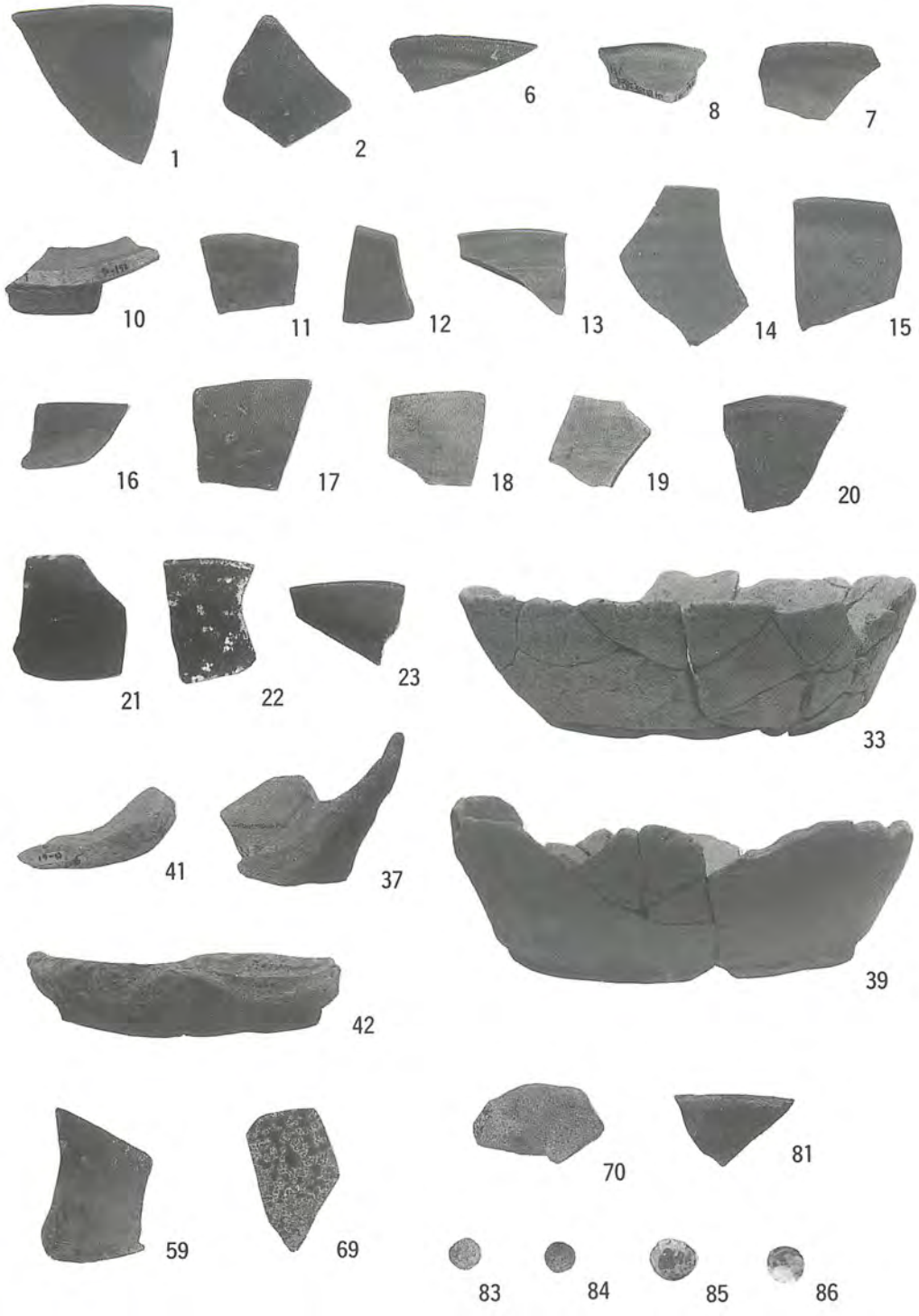
図版32　山田城跡Ⅲ　遺構検出写真（6）
（東側尾根より検出の杭列２を西方向より望む）

図版33　山田城跡Ⅲ　遺構検出写真（7）
（山頂より検出ののろし穴と柱穴）

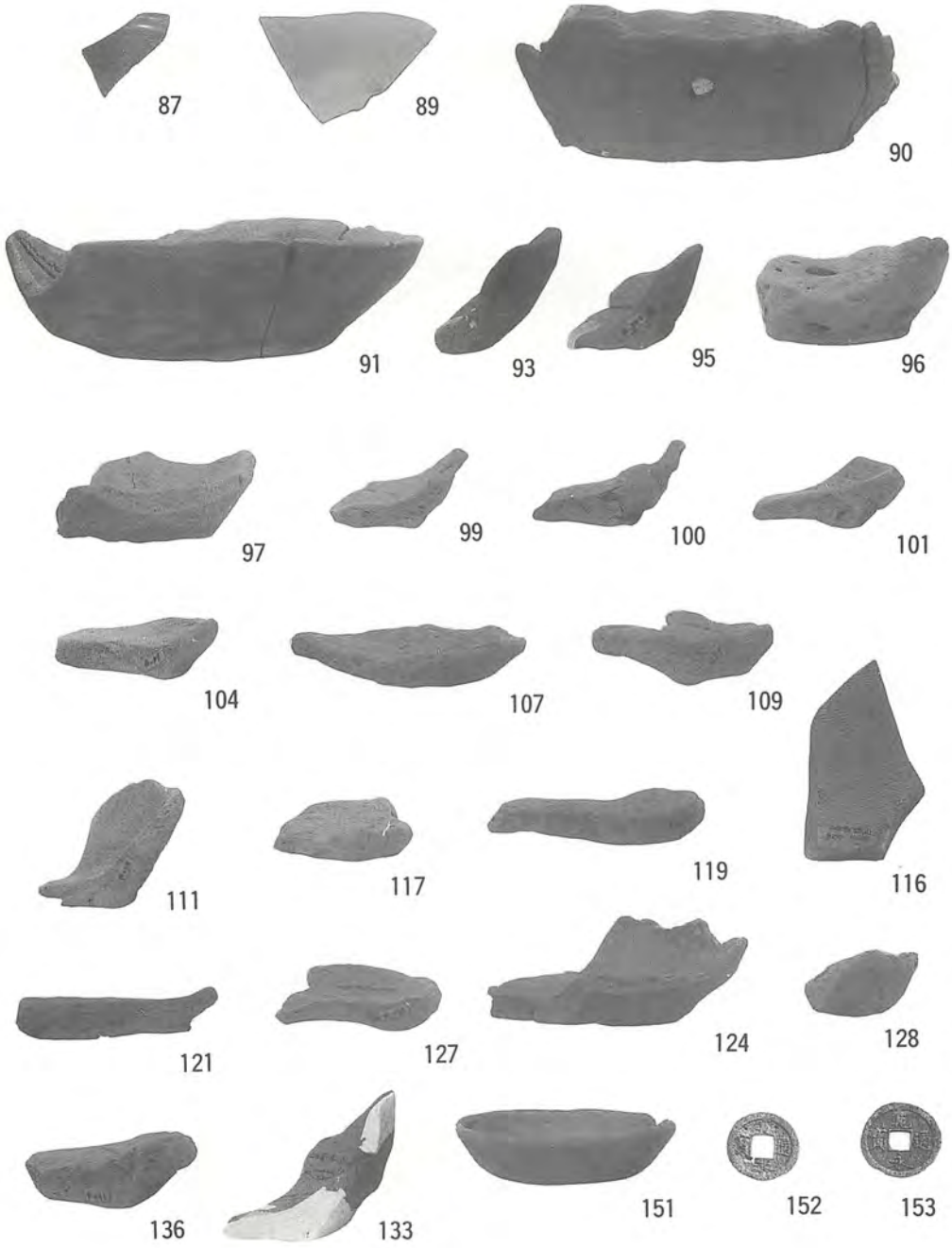
図版34　山田城跡Ⅲ　遺構検出写真（8）
（山頂より検出の建築址）

図版35　山田城跡Ⅲ　遺構検出写真（9）
（のろし穴と集石１）

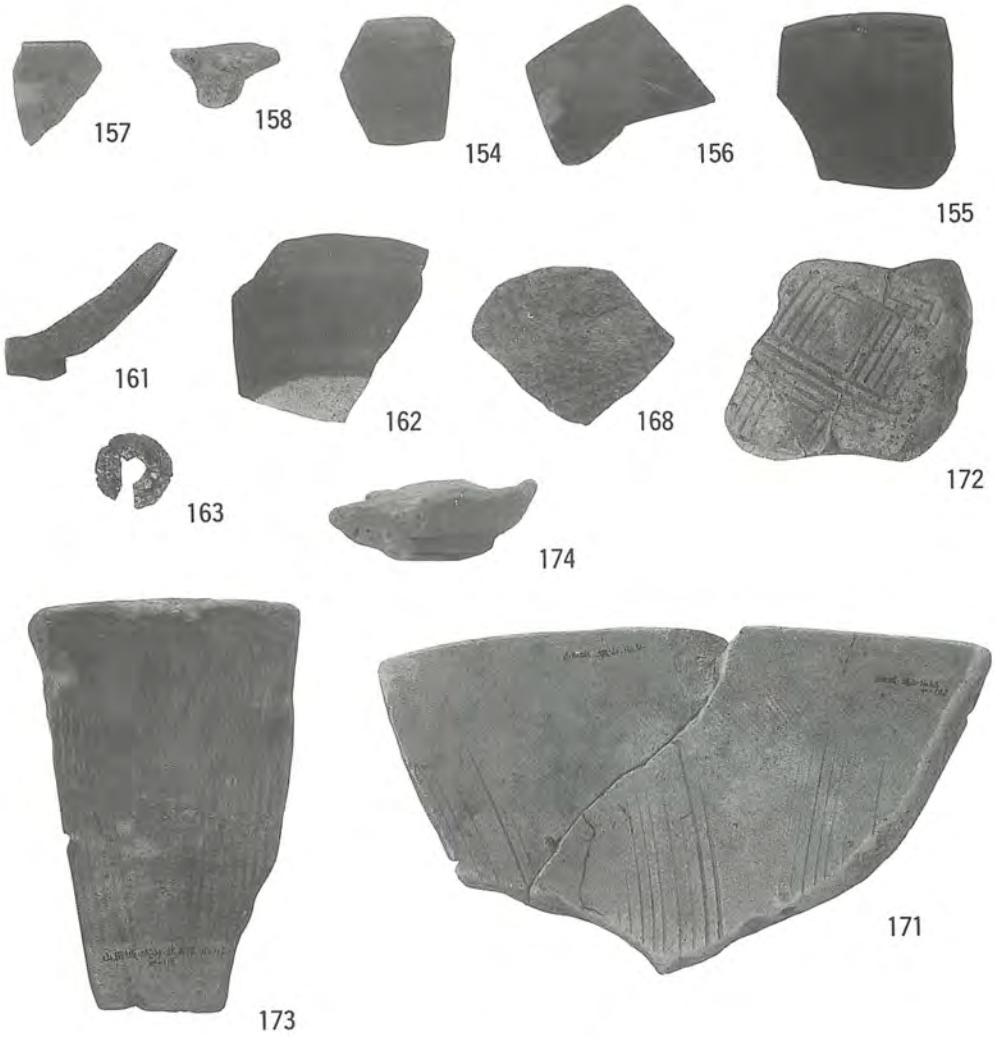
図版36　山田城跡Ⅲ　遺構検出写真（10）
（集石２）



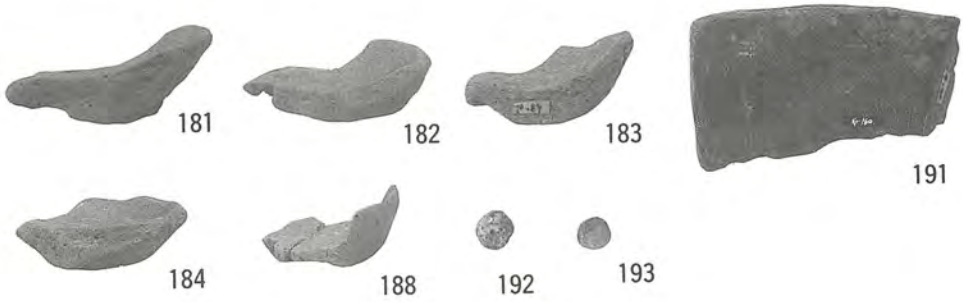
図版37　山田城跡Ⅱ　出土遺物①
（主軸尾根平坦部）



図版38　山田城跡Ⅱ　出土遺物②
（主軸尾根南側斜面）

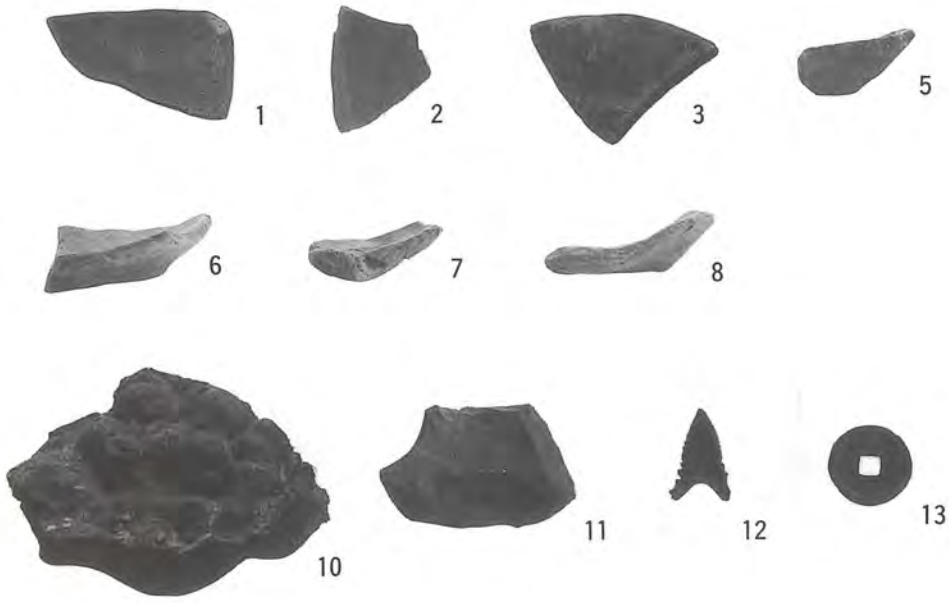


図版39　山田城跡Ⅱ　出土遺物③
（東北尾根）



図版40　山田城跡Ⅱ　出土遺物④
（陣の山）

図版41　山田城跡Ⅱ　出土遺物⑤
（迫　地）



図版42　山田城跡Ⅲ　出土遺物

No	城館名	所在地
1	一升地かこひ屋敷（一勝地城）	球磨村大字一勝地字城平
2	一王岩城（一尾之城）	球磨村大字渡字城山
3	原田城	球磨村大字渡字城
4	原田地頭館	人吉市下原田町字堀
5	原田平城	人吉市上原田町字平の上
6	中神城	人吉市中神町字城本
7	井野木田古城	人吉市上林町字倉谷
8	村山城	人吉市城本町字城本
9	三日ケ原城	人吉市下戸越町字三日ケ原
10	矢黒城（城戸尾城）	人吉市矢黒町字西園
11	戸越古城	人吉市上戸越町字古城
12	永野古城	人吉市永野町字永古城
13	相良近江守館（佐牟田堀内）	人吉市北願成寺町字前田・門田
14	大村平家城	人吉市北願成寺町字上ノ寺
15	人吉城1（下原城）	人吉市上原町字下原
16	人吉城2（上原城）	人吉市上原町字上原
17	人吉城3（中原城）	人吉市上原町字中原
18	人吉城4（高御城）	人吉市麓町字麓
19	赤池城	人吉市赤池原町字城山
20	大畑城	人吉市大畑麓町字城山
21	万江城	山江村大字万江字宮鶴
22	万江氏居館	山江村大字万江字城内
23	山田城1	山江村大字山田字大王谷
24	山田城2	山江村大字山田字下城子
25	山田城3	山江村大字山田字城山
26	高城	山江村大字山田字城・本城
27	水面城（平家城）	相良村大字柳瀬字永谷
28	柳瀬の蔵城	相良村大字柳瀬字蔵城
29	柳瀬の城ケ峰	相良村大字柳瀬字城ケ峰
30	要木城	相良村大字四浦字要木
31	川辺城	相良村大字川辺字城ノ平
32	目郎城	相良村大字木上字目郎
33	四浦平家城	相良村大字四浦字舟渡
34	四浦城	相良村大字四浦
35	由留木城	錦町大字木上字由留木
36	西村古城（高城）	錦町大字西村字京ケ峰
37	尼が土手	錦町大字西村
38	西村古城（東方城）	錦町大字西村字東方
39	一武城（土屋城）	錦町大字一武字覚井
40	木上蔵城	錦町大字木上字蔵城
41	木枝岩城	錦町大字木上字岩城
42	深田城	深田村大字西字城
43	深田平家城	深田村大字西字平家城
44	深田平城	深田村大字東字里
45	高山城	深田村大字東字高山
46	永池城（はまとの屋敷）	免田町字浜殿
47	黒田平城	免田町字平城
48	永里城	上村大字上字永里
49	上村城	上村大字上字麓
50	白髪野城	上村大字皆越字白髪野
51	今村城（須恵城）	須恵村字今村
52	須恵の城ケ尾	須恵村字城ケ尾
53	須恵古城	須恵村大字須恵字小城
54	岡本城	岡原村大字岡本字麓
55	宮原城（城山）	岡原村大字宮原字城山
56	宮原城（中島）	岡原村大字宮原字中島
57	古多良木城	多良木町大字多良木字古多良木
58	九鹿城	多良木町大字多良木字九鹿
59	里の城	多良木町大字多良木字里城
60	鍋城（鍋倉城）	多良木町大字黒肥地字鍋城
61	内城	多良木町大字黒肥地字土屋
62	羽根田城	多良木町大字黒肥地字羽根田
63	相良頼景館	多良木町大字黒肥地字蓮花寺
64	奥野平城（薬師出）	多良木町大字奥野字薬師出
65	奥野城（城山）	多良木町大字奥野字城山
66	奥野平城（不易）	多良木町大字奥野字不易
67	久米古城	多良木町大字久米字古城
68	久米城	多良木町大字久米字今山
69	槻木城	多良木町大字槻木
70	東方城	湯前町字長谷場
71	湯前城1	湯前町字下城
72	湯前城2	湯前町字古城
73	湯前城3	湯前町字上城
74	猪鹿倉城	湯前町字猪鹿倉
75	角井城	水上村大字岩野字覚井
76	小多田城	水上村大字岩野字丸山
77	湯山城	水上村大字湯山字高城
78	江代城	水上村大字江代字城

付録3　球磨郡中世城跡一覧表

熊本県文化財調査報告　第112集

山田城跡 Ⅱ・Ⅲ

1990年3月31日

編集発行：熊本県教育委員会
〒860 熊本市水前寺6丁目18－1
☎ (096) 383－1111　内線 6715
(文化課文化財調査第2係)

印　刷：中央印刷紙工株式会社
〒860 熊本市田崎2丁目5－38
☎ (096) 354－4191
FAX(096) 354－4165

01 教委 教文
② 006

（表紙絵は大田哲義氏による）

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 112 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：山田城跡 2･3
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話：　096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2016 年 3 月 31 日

なお、熊本県文化財保護協会が底本を頒布している場合があります。詳しくは熊本県文化財保護協会にお問い合わせください。

熊本県文化財保護協会
URL：http://www.kumamoto-bunho.jp/